埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第118集

川本町

白草（しらくさ）遺跡 II

川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—II—

(財)埼玉県
埋蔵文化財調査事業団
92.8.18
No. 13340
図書室

1992

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

白草遺跡出土吉ヶ谷式土器

序

川本町は鎌倉時代の武士畠山重忠の本拠地としてつとに有名なところであります。またこの地域は、かつて盛んであった荒川の河川交通、鎌倉街道など、古くから交通の要衝として発展してきたところで、舟山遺跡、鹿島古墳群など著名な遺跡も数多く分布しており、歴史及び自然環境の豊富な土地であります。

このたび、この地域の工業化と調和のとれた開発をめざして、川本工業団地の造成が実施されることになりました。事業地約50万㎡に所在する埋蔵文化財に関する取り扱いについては、埼玉県企業局と埼玉県教育委員会との間で慎重に協議が重ねられた結果、7ヶ所の遺跡について当事業団が埼玉県企業局の委託を受けて発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

平成元年度に調査が行なわれた白草遺跡からは、旧石器時代・縄文時代はもとより弥生時代から平安時代にわたる多数の竪穴住居跡、土壙群、溝などが発見され、さらに土器・石器類を中心とした多くの遺物が出土しました。本書はそのうち弥生時代以後に関する調査報告書であります。

本書が埋蔵文化財の保護、文化財保護思想の普及・啓蒙、学術研究の基礎資料として、さらに教育機関等の参考資料として広くご活用いただければ幸いであります。

報告書刊行にあたり、終始ご指導を賜わりました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査からこの記録の完成にいたるまで、種々のご協力をいただきました埼玉県企業局土地開発第二課・同北部土地開発事務所、さらに川本町教育委員会・江南町教育委員会・嵐山町教育委員会・花園町教育委員会ならびに地元関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　荒　井　修　二

例　言

1　本書は、埼玉県大里郡川本町大字本田字白草2904番地他に所在する白草遺跡の発掘調査報告書である。

文化庁指示通知は、平成元年10月3日付委保5-1063号である。

遺跡名の略号は、SRKSである。

2　本書は、白草遺跡のうち平成3年度整理事業である弥生時代、古墳時代、平安時代以後についての報告書で、旧石器時代、縄文時代に関しては来年度刊行予定である。

3　発掘調査は、川本工業団地建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局文化財保護課が調整し、埼玉県企業局土地開発第二課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　発掘調査は、磯崎　一、黒坂禎二が担当し、平成元年7月1日から同2年3月31日まで実施した。整理作業は磯崎が担当し、平成3年4月1日から同4年3月31日まで実施した。

なお、発掘調査・整理作業の組織は2ページに示した。

5　本書の執筆はⅠ-1を埼玉県教育局指導部文化財保護課、Ⅲ－3－g第14号土壙出土遺物については今井宏、その他を磯崎が行なった。

6　図版作成、写真撮影は下記のものが行なった。

図版作成　　磯崎
発掘調査撮影　　黒坂　磯崎
遺物撮影　　今井

7　本書の編集は、資料部資料整理第1課の磯崎が行なった。

8　本書にかかる資料は、平成4年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9　本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜わった。記して謝意を表したい。

松村　篤　新井　端　植木　弘　森下昌市郎　高木　義和　柿沼　幹夫　高橋　一夫
市川　修　笹森　健一　鈴木　徳雄　高橋　良子　小久保花子　小林せつ子　小林サク子
下田千代子　藤野　富子　藤野　治子　本田よし子　寺山　正子　荒木　克一　森田　茂次
山口　藤雄　井上喜代子　原口　政義　富田　元子　相原　いね　植木　智子　小島　明美
佐藤きみ江　関口　澄子　高橋喜代乃　田口あい子　贄田　薫　翠　弘子　石崎まさ子

凡　例

1　本書の図版の縮尺は、遺構が住居跡1/60、その他の遺構1/80を原則とし、遺物実測図は拓影図1/3、実測図1/4を原則としたが、これに該当しないものもある。

2　本書で用いた遺構の記号は以下のとおりである。

SJ　住居跡　　SB　掘立柱建物跡　　SK　土壙　　SD　溝　　P　ピット

3　本書の遺構の記述は、原則として確認、埋没、生活、構造段階の順で記した。

土層註については原則としてその性状、含有物、その粒度の順で記し、含有物については略号を使用している。

R：Roam　B：Blok　C：炭ないし炭化物　焼：焼土　粒：粒子　微：微量　少：少量　多：多量等である。

4　本書の土壙の記述は主に観察表によるが、平面及び断面形態については以下の基準による。

平面形　A:円形　B:楕円形　C:長方形　D:方形　E:不整形

断面形　Ⅰ:Overhang　Ⅱ:直に立ち上がる　Ⅲ:すり鉢状

5　整理段階で遺構の種類、或いは遺構番号の変更があったが、注記の変更は原則として行なわなかった。詳細は本文中にその旨記載した。

6　本書の土器の記載は観察表による。法量については口径、底径、器高の順に記す。胎土、色調については以下の基準（市川　1980）による。

胎土は含有物の粒度と特徴によって分類し、各々の組み合わせによって示す。

ア）粒度は、細　1.0mm以下　　粗　1.0～2.0mm　　礫　2.0mm以上　の3段階である。

イ）含有物の特徴は以下の通りである。

a　白色不透明（粒状）　b　白色透明（板状）　c　白色～灰色不透明（粒状）

d　茶色～赤色（粒状）　e　金色～銀色（板状）　f　黒色（板状、光沢）

g　黒色（粒状）　h　白色不透明（針状）

a～h以外のものについてはその都度記す。

色調は、外面（器肉）内面の順に記す。内外面相半ばする場合は外面/内面と記す。

残存率は主に口縁部の残存比で表わすが、該当しないものもある。

目　次

序
例言
凡例
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1　調査に至るまでの経過……1
　2　発掘調査・整理報告書刊行事業の組織……2
　3　発掘調査の方法と調査の経過……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……5
Ⅲ　遺構と出土遺物……9
　1　弥生時代の遺構と出土遺物……9
　　a　概要……9
　　b　弥生時代　第1群……11
　　c　弥生時代　第2群……24
　　d　弥生時代　第3群……44
　　e　弥生時代　第4群……59
　　f　その他の遺構と出土遺物……73
　2　古墳時代の遺構と出土遺物……77
　　a　概要……77
　　b　古墳時代　第1群……78
　　c　古墳時代　第2群……89
　　d　古墳時代　第3群……108
　3　平安時代以降の遺構と出土遺物……119
　　a　概要……119
　　b　平安時代　第1群……121
　　c　平安時代　第2群……140
　　d　平安時代　第3群……170
　　e　平安時代　第4群……214
　　f　平安時代　第5群……237
　　g　その他の遺構と出土遺物……264
Ⅳ　結語……272
　参考文献……276

挿 図 目 次

第１図　白草遺跡全測図折り込み
第２図　白草遺跡周辺の遺跡分布図……6
第３図　川本工業団地事業地と各遺跡位置図……7
第４図　弥生時代遺構分布図……9
第５図　弥生時代住居跡群位置図……10
第６図　第６号住居跡平面図……12
第７図　第６号住居跡出土遺物……13
第８図　第７号住居跡平面図……14
第９図　第2,139,141,号土壙断面図……15
第10図　第７号住居跡出土遺物……15
第11図　第141号土壙出土遺物……16
第12図　第10号竪穴状遺構平面図……17
第13図　第14号住居跡、第５号土壙平面図…19
第14図　第５号土壙出土遺物……18
第15図　第15号住居跡、第17号竪穴状遺構、第6,10号土壙平面図……20
第16図　第17号竪穴状遺構断面図……21
第17図　第15号住居跡出土遺物……21
第18図　第17号竪穴状遺構出土遺物……22
第19図　第15号住居跡、第17号竪穴状遺構及び第10号土壙出土遺物……23
第20図　第57号住居跡断面図……24
第21図　第57号住居跡、第58号竪穴状遺構、第84,85号土壙平面図……25
第22図　第57号住居跡出土遺物……26
第23図　第58号竪穴状遺構出土遺物……27
第24図　第59号住居跡、第55,58号竪穴状遺構平面図……28
第25図　第59号住居跡出土遺物……30
第26図　第55号竪穴状遺構出土遺物……31
第27図　第61号住居跡、第62号竪穴状遺構、第87号土壙平面図……32
第28図　第61号住居跡出土遺物……33
第29図　第63号住居跡平面図……35
第30図　第63号住居跡、第91号土壙平面図…36
第31図　第63号住居跡出土遺物(1)……37
第32図　第63号住居跡出土遺物(2)……38
第33図　第64号住居跡、第91,94号土壙平面図……41
第34図　第64号住居跡出土遺物……42
第35図　第86号土壙平面図……42
第36図　第86,94号土壙出土遺物……43
第37図　第65号住居跡、第96号土壙平面図…43
第38図　第65号住居跡出土遺物……44
第39図　第1,2号住居跡第104,105号土壙平面図……45
第40図　第2号住居跡、第104号土壙出土遺物……46
第41図　第73号住居跡、第72号竪穴状遺構、第102,103号土壙平面図……48
第42図　第73号住居跡出土遺物……49
第43図　第75号住居跡、第104,105号土壙平面図……50
第44図　第75号住居跡出土遺物……51
第45図　第76号住居跡、第106,107号土壙平面図……52
第46図　第76号住居跡、第107号土壙出土遺物……53
第47図　第77号住居跡、第110号土壙平面図……54
第48図　第77号住居跡、第110号土壙出土遺物……55
第49図　第78号住居跡、第108,109号土壙平面図……56
第50図　第78号住居跡出土遺物……57
第51図　第78号住居跡、第108,109号土壙出土遺物……58
第52図　第80号住居跡平面図……60
第53図　第80号住居跡出土遺物……61

第54図　第82号住居跡、第111号土壙平面図……63
第55図　第82号住居跡出土遺物……64
第56図　第111号土壙出土遺物……66
第57図　第83号住居跡、第112号土壙平面図……67
第58図　第83号住居跡、第112号土壙出土遺物……69
第59図　第84号住居跡平面図……70
第60図　第84号住居跡出土遺物……71
第61図　第88号住居跡平面図……72
第62図　第88号住居跡出土遺物……73
第63図　弥生時代遺物分布図……74
第64図　その他の遺構、grid、表採遺物……75
第65図　古墳時代遺構配置図(1)……77
第66図　古墳時代住居跡群配置図(2)……78
第67図　第3号住居跡平面図(1)……79
第68図　第3号住居跡平面図(2)……80
第69図　第3号住居跡出土遺物……81
第70図　第26号住居跡出土遺物……83
第71図　第26号住居跡平面図……84
第72図　第6号住居跡上層出土遺物……85
第73図　第14号住居跡出土遺物……87
第74図　第15号住居跡出土遺物……89
第75図　第9号住居跡平面図(1)……90
第76図　第9号住居跡平面図(2)……91
第77図　第9号住居跡出土遺物……93
第78図　第12号住居跡平面図(1)……94
第79図　第12号住居跡平面図(2)……95
第80図　第12号住居跡出土遺物(1)……97
第81図　第12号住居跡出土遺物(2)……99
第82図　第16号住居跡平面図(1)……102
第83図　第16号住居跡平面図(2)……103
第84図　第16号住居跡出土遺物(1)……105
第85図　第16号住居跡出土遺物(2)……107
第86図　第92号住居跡平面図……108
第87図　第92号住居跡断面図……109
第88図　第92号住居跡出土遺物(1)……110
第89図　第93号住居跡平面図……111
第90図　第93号住居跡出土遺物(1)……112
第91図　第93号住居跡出土遺物(2)……113
第92図　第93号住居跡出土遺物(3)……115
第93図　第94号住居跡平面図……117
第94図　第96号住居跡平面図……118
第95図　平安時代住居跡群配置図……121
第96図　第1a住居跡群配置図……123
第97図　第1号住居跡平面図……124
第98図　第1号住居跡出土遺物……124
第99図　第5号住居跡平面図……125
第100図　第5号住居跡出土遺物……125
第101図　第74ａ、ｂ号住居跡平面図……127
第102図　第74ａ、ｂ号住居跡出土遺物……129
第103図　第74ａ、ｂ号住居跡出土遺物……131
第104図　第79号住居跡、第109号土壙出土遺物……131
第105図　第79号住居跡、第109号土壙平面図……132
第106図　第81号住居跡平面図……133
第106図　第81号住居跡出土遺物……134
第107図　第85号住居跡、第113号土壙平面図……134
第108図　第85号住居跡出土遺物……134
第109図　第86号住居跡平面図……135
第102図　第86号住居跡出土遺物……136
第112図　第87号住居跡平面図……136
第113図　第87号住居跡出土遺物……137
第114図　第89号住居跡平面図……137
第115図　第89号住居跡出土遺物……138
第116図　第98号住居跡平面図……138
第117図　第98号住居跡出土遺物……139
第118図　第2ａ住居跡群配置図……141
第118図　第11号住居跡平面図……142

第119図　第11号住居跡出土遺物……143
第120図　第13号住居跡平面図(1)……144
第13号住居跡平面図(2)……144
第122図　第13号住居跡出土遺物……145
第123図　第18号住居跡平面図……146
第123図　第18号住居跡出土遺物……147
第124図　第19号住居跡平面図……148
第125図　第19号住居跡出土遺物……149
第126図　第2ｂ住居跡群配置図 ……150
第127図　第20号住居跡平面図……151
第128図　第20号住居跡出土遺物……152
第129図　第21号住居跡、第8,9,11号土壙平面図……153
第130図　第21号住居跡、第8,9,11号土壙出土遺物……154
第131図　第22号住居跡平面図……155
第132図　第22号住居跡出土遺物……156
第133図　第23号住居跡平面図……156
第134図　第23号住居跡出土遺物(1)……157
第135図　第23号住居跡出土遺物(2)……159
第136図　第24号住居跡平面図……160
第137図　第24号住居跡出土遺物……160
第138図　第25号住居跡平面図……161
第139図　第25号住居跡出土遺物……162
第140図　第2ｃ住居跡群配置図 ……163
第141図　第27号住居跡平面図……164
第142図　第27号住居跡出土遺物……165
第143図　第28号住居跡平面図……166
第144図　第28号住居跡出土遺物……167
第145図　第29号住居跡平面図……168
第146図　第29号住居跡出土遺物……169
第147図　第3ａ住居跡群配置図 ……171
第148図　第49号住居跡平面図……172
第149図　第49号住居跡出土遺物……173
第150図　第50号住居跡平面図……174
第151図　第50号住居跡出土遺物……175
第152図　第51号住居跡平面図……176
第153図　第51号住居跡出土遺物……178
第154図　第52号住居跡平面図……179
第155図　第54号住居跡出土遺物……185
第156図　第52号住居跡出土遺物……181
第157図　第54号住居跡、第55号竪穴状遺構平面図……183
第158図　第56、57号住居跡平面図……186
第159図　第56号住居跡出土遺物……187
第160図　第60号住居跡平面図……188
第161図　第60号住居跡出土遺物……189
第162図　第3ｂ住居跡群配置図 ……190
第163図　第66、67号住居跡平面図……191
第164図　第66号住居跡出土遺物……193
第165図　第67号住居跡出土遺物……195
第166図　第66～68号住居跡・第101号土壙平面図……196
第167図　第68号住居跡・第101号土壙平面図……197
第168図　第68号住居跡・第101号土壙出土遺物……198
第169図　第69号住居跡平面図……199
第170図　第69号住居跡出土遺物……200
第171図　第70号住居跡平面図……201
第172図　第70号住居跡出土遺物……202
第173図　第71号住居跡平面図……203
第174図　第71号住居跡出土遺物(1)……205
第175図　第71号住居跡出土遺物(2)……206
第176図　第90号住居跡平面図……207
第177図　第90号住居跡出土遺物……207
第178図　第3群掘立柱建物跡配置図 ……208
第179図　第1号掘立柱建物跡平面図 ……210
第180図　第2号掘立柱建物跡平面図 ……211
第181図　第3号掘立柱建物跡平面図……212
第182図　第3号掘立柱建物跡,第88,90,92号土壙出土遺物……213

第185図　第4ａ住居跡群配置図 ……215
第186図　第39号住居跡平面図……216
第187図　第39号住居跡出土遺物……217
第188図　第40号住居跡平面図……219
第189図　第40号住居跡出土遺物……219
第190図　第41号住居跡平面図……221
第191図　第41号住居跡出土遺物……222
第192図　第42号住居跡平面図……222
第193図　第42号住居跡出土遺物……224
第194図　第43号住居跡平面図……226
第195図　第43号住居跡出土遺物……227
第196図　第44号住居跡平面図……228
第197図　第44号住居跡出土遺物……229
第198図　第45号住居跡平面図……229
第199図　第45号住居跡出土遺物……229
第200図　第4ｂ住居跡群配置図 ……230
第201図　第48号住居跡平面図……231
第202図　第48号住居跡出土遺物……232
第203図　第91号住居跡平面図……233
第204図　第95号住居跡平面図……234
第205図　第95号住居跡出土遺物……236
第206図　第5ａ住居跡群配置図 ……238
第207図　第30号住居跡平面図……240
第208図　第30号住居跡出土遺物……241
第209図　第31号住居跡平面図……242
第210図　第31号住居跡出土遺物……242
第211図　第32号住居跡平面図……244
第212図　第32号住居跡出土遺物……244
第213図　第33号住居跡平面図……247
第214図　第34号住居跡平面図……248
第215図　第34号住居跡出土遺物……248
第216図　第35号住居跡平面図……249
第217図　第35号住居跡出土遺物……250
第218図　第36号住居跡平面図……251
第219図　第36号住居跡出土遺物……251
第220図　第37ａ，ｂ号住居跡平面図 ……253
第221図　第37ａ，ｂ号住居跡出土遺物 ……254
第222図　第38号住居跡平面図……256
第223図　第38号住居跡出土遺物……256
第224図　第46号住居跡平面図……257
第225図　第46号住居跡出土遺物……257
第226図　第5ｂ住居跡群配置図 ……258
第227図　第47号住居跡平面図……260
第228図　第47号住居跡出土遺物(1)……262
第229図　第47号住居跡出土遺物(2)……263
第230図　第4～120号土壙平面図……265
第231図　第122～140号土壙平面図……266
第232図　第13，14，121号土壙出土遺物 ……266
第233図　第14号土壙出土遺物……267
第234図　第1号溝平面図 ……268
第235図　第1号溝出土遺物 ……269
第236図　その他の遺構、grid、表採遺物…269

表　目　次

第１表　弥生時代住居跡及び竪穴状遺構一覧表 ……10
第２表　弥生時代土壙一覧表……11
第３表　古墳時代住居跡一覧表 ……117
第４表　平安時代第１住居跡群一覧表 ……119
第５表　平安時代第２住居跡群一覧表 ……120
第６表　平安時代第３住居跡群一覧表 ……120
第７表　平安時代第４住居跡群一覧表 ……120
第８表　平安時代第５住居跡群一覧表 ……120
第９表　平安時代以降土壙一覧表 ……264

図 版 目 次

図版 1　白草遺跡全景

図版 2　米極東空軍空中写真　白草遺跡全景（東北から）

図版 3　白草遺跡全景（北から）　白草遺跡全景（南西から）

図版 4　弥生時代第1,2住居跡群　第6,7,14,15,57号住居跡、第10,17,97号竪穴状遺構全景

図版 5　弥生時代第2,3住居跡群　第59,61,63～65号住居跡、第62,2,72号竪穴状遺構全景

図版 6　弥生時代第3,4住居跡群　第73,75,77,78,80,82～84号住居跡全景

図版 7　弥生時代第4,古墳時代第1～3住居跡群　第86,88,3,26,9,12,16,92号住居跡全景

図版 8　古墳時代第3,平安時代第1住居跡群　第93,94,1,5,74,79,81,85,86,87,89,号住居跡全景

図版 9　平安時代第2住居跡群　第11,13,18,19,20,21,22,23号住居跡全景

図版10　平安時代第2、3住居跡群　第24,25,27,28,29,49,50,51号住居跡全景

図版11　平安時代第3住居跡群　第52,54,56,60,66,67,68,69号住居跡全景

図版12　平安時代第3、4住居跡群　第70,71,90,40～43号住居跡全景

図版13　平安時代第4、5住居跡群　第48,91,95,30,31,32,33,34,35,36,37号住居跡全景

図版14　平安時代第5住居跡群　第46,47号住居跡全景及び第6,15,59号住居跡、第141号土壙土器出土状態

図版15　第75,14,12,16号住居跡土器出土状態

図版16　第93,20,21,23,25,54,70,71号住居跡土器出土状態

図版17　第39,40,91,95,30,32,37,47号住居跡土器出土状態

図版18　第4,6～10,15,84号土壙全景

図版19　第85～87,88～90,94,96,98号土壙全景

図版20　第102～108,112号土壙全景

図版21　第120,128号土壙、第1～3号掘立柱建物跡全景　弥生時代第2群遠景

図版22　第6,15,59号住居跡、第141号土壙出土遺物

図版23　第78,82,83,63,77,号住居跡、第17号竪穴状遺構出土遺物

図版24　第15,57,59号住居跡、第17号竪穴状遺構、第141号土壙出土遺物

図版25　第59,63,64,2号住居跡出土遺物

図版26　第73,75,77,82,83号住居跡出土遺物

図版27　第84,88,3号住居跡、第111号土壙出土遺物

図版28　第3,6,14号住居跡出土遺物

図版29　第14,15,9号住居跡出土遺物

図版30　第12号住居跡出土遺物

図版31　第12,16号住居跡出土遺物

図版32　第16号住居跡出土遺物

図版33　第16,93号住居跡出土遺物

図版34　第93,1,74号住居跡出土遺物

図版35　第89,98,18,20,22,23号住居跡出土遺物

図版36　第23,25,28,50,51,54,67号住居跡出土遺物

図版37　第69,71,90,39号住居跡出土遺物

図版38　第40,42,44,48,95号住居跡出土遺物

図版39　第30,31,32,35号住居跡出土遺物

図版40　第35,47号住居跡、第1号溝、表採、GRID出土遺物

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至るまでの経過

埼玉県では生活環境の整備と県土に合った土地利用計画を進めるため、各種の施策を実施している。その一環として県企業局では工場誘致と適切な工場配置を行うため、大里郡川本町に川本工業団地の造成を計画した。県教育局文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏の無いよう調整を進めてきた。

同工業団地の造成計画にあたり、昭和61年12月15日付け企局造第1257号で県企業局宅地造成課長から教育局文化財保護課長あて「川本工業団地内における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会があった。しかし、この時点では環境アセスメントが終了していなかったので所在確認調査は実施できなかったが、川本町教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、3カ所の遺物散布地が確認された。

この結果をふまえ、県企業局と文化財保護課の間でその保存について協議を重ねたが、事業計画を変更することは不可能との結論に達した。しかし、周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲確認及び所在確認調査は不可避であり、環境アセスメント終了後実施することを相互確認した。また、上記の照会に対する回答は確認調査を実施して後行うこととした。

この結果をふまえ、昭和62年3月30日付け教文第1257号をもって文化財保護課長から埼玉県企業局公営企業管理者あて次のように通知した。

1　川本工業団地造成予定地内に所在する円阿弥遺跡ほか2遺跡の埋蔵文化財包蔵地の調査は、昭和62年度の後半に（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施する。

2　発掘調査の実施にあたっては、事前に文化財保護法第57条の3第1項の規定により、文化庁宛て埋蔵文化財発掘調査に関する届け出をすること。

昭和62年7月に10日間にわたる所在及び確認調査を実施した。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にわたる埋蔵文化財包蔵地5ヶ所を確認した。

文化財保護課では、現地踏査、所在及び確認調査の結果を検討し、県企業局宅地造成課長あて、次のように回答した。

1　工業団地造成予定地内には、円阿弥遺跡、竹之花遺跡、白草遺跡、下大塚、四反歩（北・東・南地区）遺跡が所在する。

2　上記の埋蔵文化財包蔵地にかかる造成計画の変更が不可能な場合には、記録保存のための発掘調査を実施すること。

3　発掘調査の実施にあたっては文化財保護課と協議すること。

その後発掘調査の実施について協議した結果、昭和62年9月16日付けで県企業局と埼玉県埋蔵文化財調査事業団との間に発掘調査に関する委託契約書が締結された。発掘調査は昭和62年9月、竹之花遺跡の調査から開始され、昭和63年度、平成元年度へと引き継がれた。また、平成元年10月3日付け委保第5－1063号をもって文化庁から埋蔵文化財発掘調査の届に対する通知があった。

2　発掘調査・整理報告書刊行事業の組織

1　発掘調査（平成元年度）

理事長	荒井修二
副理事長	百瀬陽二
常務理事兼	
管理部長	古市芳之
理事兼	
調査研究部長	吉川國男
管理部	
管理課長	関野栄一
主事	江田和美
主事	岡野美智子
主事	本庄朗人
主事	斉藤勝秀
調査研究部	
副部長	塩野　博
第一課長	坂野和信
主任調査員	礒崎　一
調査員	黒坂禎二

2　整理報告書刊行（平成３年度）

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼	
管理部長	倉持悦夫
庶務経理	
庶務課長	高田弘義
主査	松本　晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
主事	菊池　久
整理	
資料部長	中島利治
資料部副部長兼	
資料整理第一課長	増田逸朗
主任調査員	礒崎　一

3　発掘調査の方法と調査の経過

川本工業団地事業地内に所在する８遺跡、すなわち白草、竹之花、円阿弥、四反歩北、四反歩東四反歩南、北篠場北遺跡についての発掘調査の方法は、第一次調査の開始にあたって設定されたグリッドにもとづき、それぞれ実施されている。したがって先年度報告において詳細に記述された発掘調査の方法は、白草遺跡についてもそのまま妥当するものである。以下では簡単に概略を示しておく。

グリッドは国家座標第Ⅸ系に合わせた方眼によっており、８遺跡の遺跡原点はA00－I00で座標値はX＝+13,810.0m、Y＝－47,320.0mである。

グリッド呼称の詳細は先年度報告に詳しく再録すると、遺跡原点から「150mごとに、南北方向は北からA、B、C、……、H、東西方向は東からI、J、K、……、Oというアルファベット大文字で示し、30mグリッドの表示のためにこの後に二桁の数字を付して、最小の3m小グリッドの呼称を十進法で数えていく形式とした。」というものである。

白草遺跡の範囲は南北方向A44～C42、東西方向J33～L07にほぼ収まる。

白草遺跡の本調査は、遺跡の範囲を重機により表土除去し、その後大小のグリッド設定杭を打ち、それにしたがって遺構確認、遺構発掘精査後の遺物出土位置の計測・遺構の平面実測を行なった。 遺物出土位置の計測・遺構の平面実測については遺構確認面に1m方眼の水糸を張る簡易やり方によった。

白草遺跡の第一次調査については先年度報告に詳細に記述してある。したがって本報告においては省略に従う。

白草遺跡第二次調査の経過

平成元年７月からの第二次調査開始に先行して、６月から重機による表土除去を開始した。従って調査開始時点で既に調査区の1/4程の表土除去が終了していた。以下では毎月毎に調査経過の概略を述べる。

７月　重機による表土除去と併行して遺構確認。重機による表土掘削は調査の都合により調査区の約1/2で一時的に中止した。

7月24日　遺構確認作業は本日でほぼ終了した。

7月25日　本日より遺構精査を開始する。調査の進行上、一時的な調査区最北端に位置する住居跡から調査を開始した。

８月　調査区西側、台地裾部分のほぼ平坦面に位置する住居跡を中心に遺構精査続行。住居跡の時期は縄紋時代から平安時代に及んでいる。概して遺構深度は浅く調査が捗り、第1～16号住居跡まで調査が及んだ。調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測を開始する。

９月　調査区西側から順次南西部に向かって遺構精査を続行する。第17～29、35～39号住居跡まで調査が進行し、調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなっ

た。台地頂部付近に存在する縄文時代早期の土壙群の調査も実施された。適宜遺構確認を実施している。

10月　一時中断していた重機による表土掘削を開始する。

調査区は現道によって南北に分断されているが、現道南側の調査区を開始する。平安時代第５群と呼称した、第30～34号住居跡の精査である。さらに調査は捗り月末までに、第40～47号住居跡まで精査を実施した。全体的に調査は北側へ向かって進行している。引き続き調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなった。

縄文時代早期の土壙群の調査も併行して行なわれた。

11月　台地頂部付近に位置する縄紋時代の第53号住居跡、炉穴群、弥生時代第２群及び平安時代第３群と呼称した、第49～71号住居跡の精査を実施した。第66、67号住居跡は重複著しく調査はやや長引く。調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなった。

12月　台地頂部から北西斜面の弥生時代の遺構が密集する地点に調査が及ぶ。弥生時代第３（第73、75～78号住居跡）、４群（第80、82～84、88号住居跡）、平安時代第１群（74、79、81、85～87、89、90号住居跡）とした住居跡群である。後半には台地頂部の古墳時代の住居跡群（第92～94、96号住居跡）及び調査区東側に点在する平安時代の住居跡に調査が及んだ。

縄文時代早期の土壙および近現代の土壙についても調査が及んだ。調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなった。

12月19日　本日をもって重機による表土掘削から掘削土の土山整形まで一連の作業が全て終了する。12月26日　本日をもって平成元年の発掘調査を終了する。

１月25日の航空写真測量に備えて調査区全体の遺構清掃を行なう。

併行して取り残した写真、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなった。

２月引き続き取り残した写真、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなったが、悪天候続きで作業は思うに任せなかった。

３月９日より調査区西側を界する農道部分の調査が実施された。現道として利用されていたため遺構の残存状態は良くない。

第26、98号住居跡、第97号竪穴状遺構、第139、140号土壙が検出された。また農道部分から斜面にかけて旧石器時代の遺物を検出した。調査順に写真撮影、遺物出土位置の計測、遺構の平面実測をおこなった。

3月30日　本日をもって白草遺跡の発掘調査を全て終了する。

II　遺跡の立地と環境

白草遺跡の立地と環境については、先年度報告の「竹の花・下大塚・円阿弥遺跡」に詳細に論じられている竹之花以下３遺跡のそれとあい覆うものであり、以下概略的に述べることにする。

白草遺跡をのせる台地（以下白草台と呼称する）は北に荒川を望むいわゆる江南台地の北縁部にあたり、荒川の支流である吉野川に面し現水田面とは2m前後の比高差を持つ。川本工業団地事業地の北西部に位置し、遺跡の範囲は東西約210m、南北約300m、面積約3,400m²を測り北東から南西に細長く延びる。標高は61.10～66.47mを測る。竹之花遺跡とは40m程で隣接しており、円阿弥遺跡とは約200m程離れている。

以下では今回報告に関連する弥生時代以後の周辺遺跡の概観を述べ、弥生時代以前については既報告及び来年度報告に譲ることにする。

弥生時代の遺跡は後期吉ケ谷式期になると認められるようになる。

白草台に所在する白草、円阿弥、四反歩東、四反歩南遺跡の４遺跡以外では焼谷遺跡の他、上ノ山・荷鞍ケ谷戸・上本田前・万願寺遺跡で吉ケ谷式土器が出土している。隣接する江南町では姥ケ沢遺跡、塩前遺跡等がある。

吉野川を望む白草台裾部に北から白草、円阿弥が存在し、さらに南西部に焼谷遺跡がある。吉野川を挟んだ左岸台地上には、北側の支流に面する上本田遺跡以外現在のところ南側には該期の遺跡は未検出である。

白草台東側の解析谷に面して四反歩東、四反歩南遺跡が存在する。谷を挟んだほぼ対岸には万願寺遺跡があり、その北方にやや離れて荷鞍ケ谷戸遺跡が存在する。荷鞍ケ谷戸遺跡の東方には櫛描文土器を出土した姥ケ沢遺跡がある。

これらの遺跡はいずれも弥生時代後期吉ケ谷式の遺構・遺物を検出乃至採集している。

吉ケ谷式は概して変化に乏しくいわゆる安定型式で、土器群の変化はⅢ期以外は漸進的である。白草遺跡出土遺物はおおむね柿沼編年Ⅱｂ期に対応すると考えられるが、若干の段階差があり出土遺物の検討によると２～３段階の細分が考えられる。

円阿弥遺跡例は少量であるが、いずれも白草３段階に対応すると考えられる。

焼谷遺跡例は白草１段階乃至それよりもよりもやや古く位置付けられる。

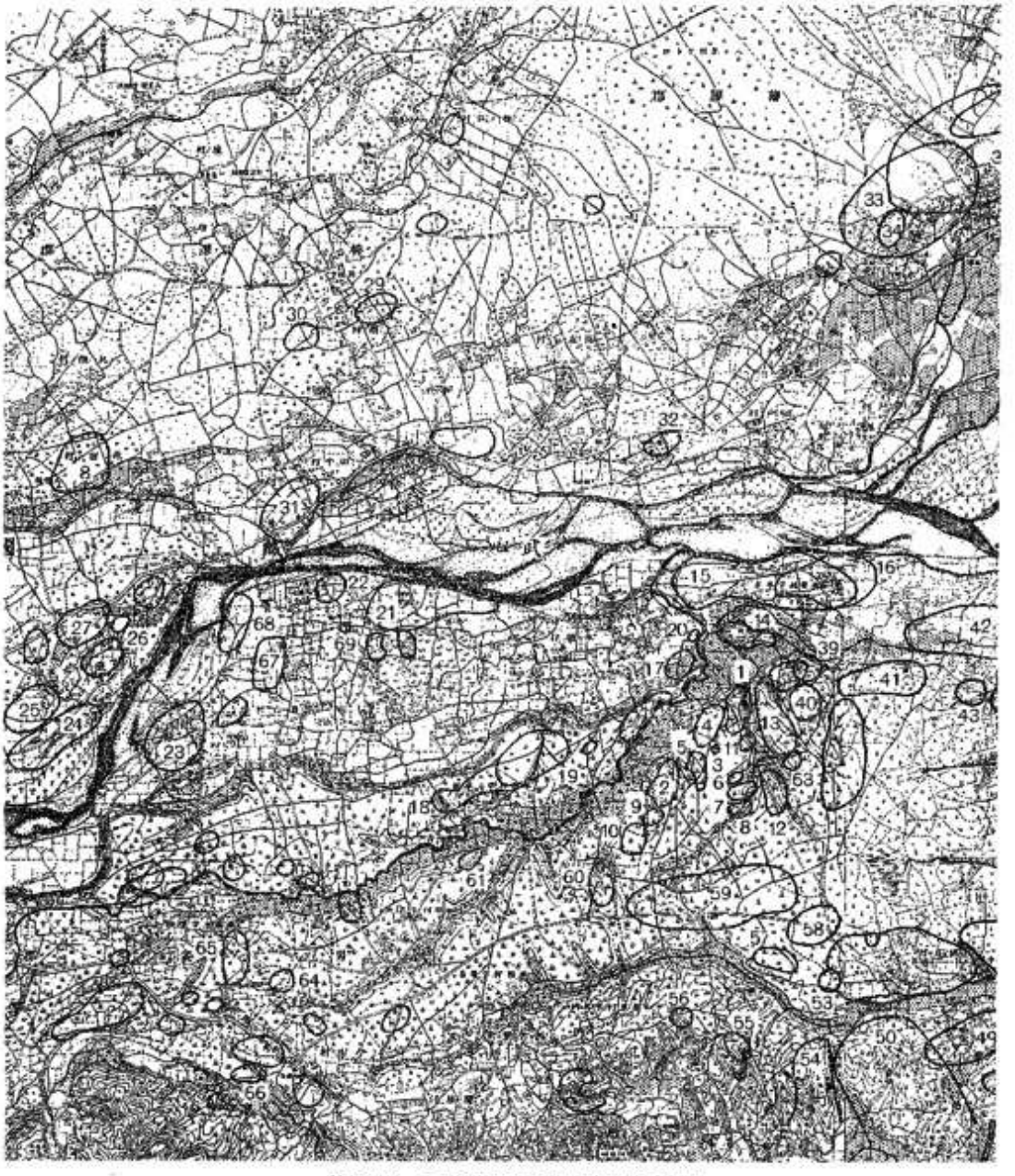
四反歩東遺跡、四反歩南遺跡については来年度報告であり不明であるが、住居跡の形態からみると焼谷遺跡例に類似している。

万願寺遺跡出土遺物は白草遺跡とほぼ同時期である。

これらの小支谷沿いに点在する諸遺跡は、細かい段階差を捨象すればほぼ吉ケ谷Ⅱ式期における遺跡群の展開として把握できるものと考えられる。

白草遺跡において検出された吉ケ谷式期の遺構は後述するように住居跡、竪穴状遺構、土壙であるが、同一台地上に存在する円阿弥遺跡、四反歩東遺跡、四反歩南遺跡でも該期の住居跡が検出されている。

白草遺跡の弥生時代遺構の最も特徴的な点は住居跡が土壙ないし竪穴状遺構を伴う点である。この点は円阿弥遺跡、四反歩南遺跡にも認められ焼谷遺跡でも認められている。この辺りの特徴で



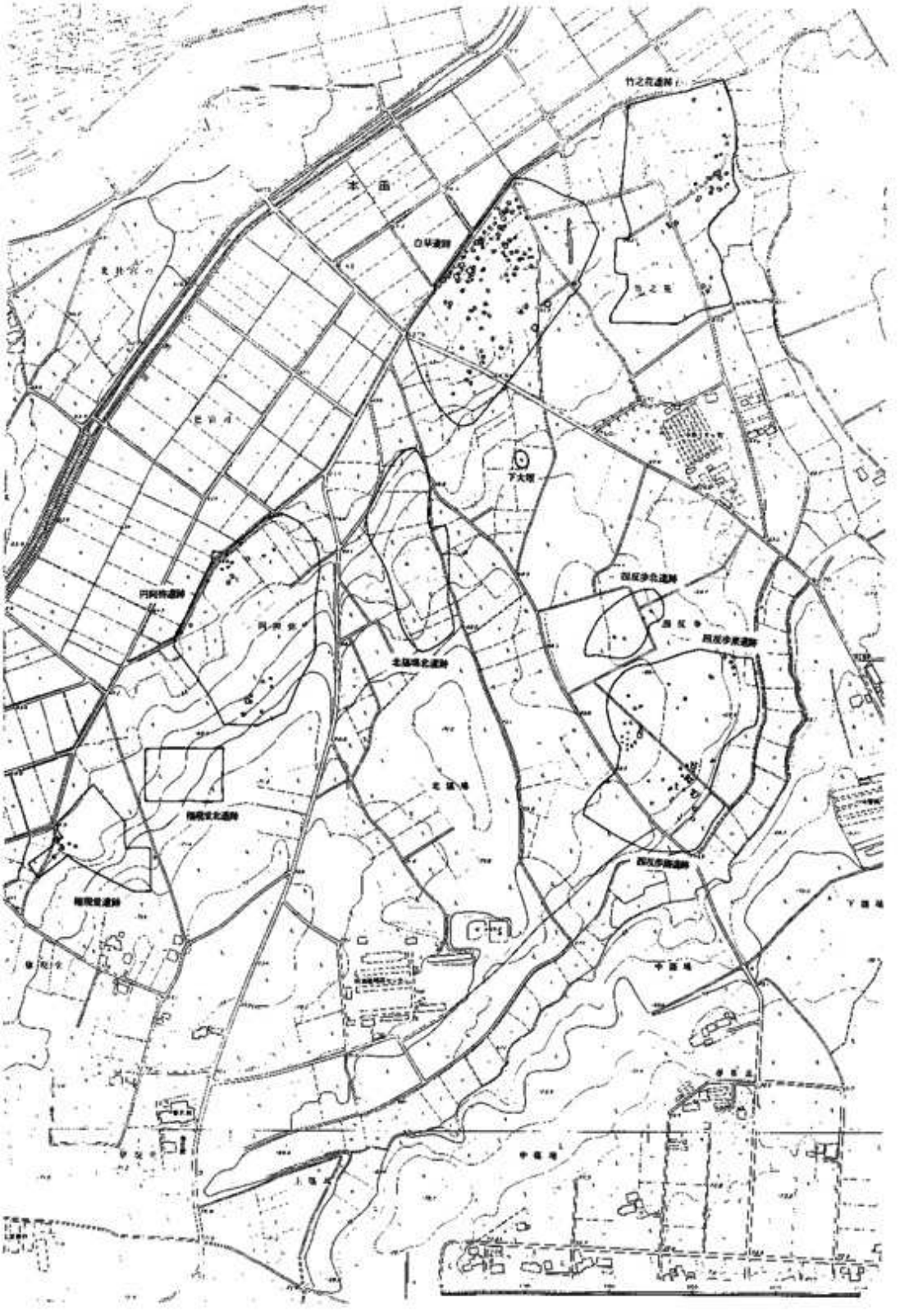
第２図　白草遺跡周辺の遺跡分布図

あろうか。遺跡によって伴う土壙等の数は異なっており、供伴しないものもあり、住居跡の規模も様々である。

住居跡そのものの構造は白草遺跡、円阿弥遺跡では柱穴が不明瞭であるが四反歩遺跡、焼谷遺跡では概して４本主柱穴で平面形は比較的よく整っている。

白草遺跡の住居跡数は２１軒で３～４群に分割される。したがって５～６軒で一群が構成されていることになる。

円阿弥遺跡は２群、焼谷遺跡は２～３群、四反歩東遺跡は単独で１軒、四反歩南遺跡は１群が認



第３図　川本工業団地事業地と各遺跡位置図

められ、四反歩東遺跡を除いて３軒前後の住居跡によって構成されている。したがって白草遺跡が最も大きい集落ということになり、群を構成する住居跡数も他遺跡の倍近い。

局所場的遺跡間の交通諸関係については後考にまつところが大きいが、同じ谷筋に存在する白草遺跡と円阿弥遺跡との関係及び焼谷遺跡との関係がより強いことが予想される。それぞれの遺跡は自然的境界乃至一定の距離をおいて存在しており、その意味では完結的閉鎖系を形成しており、日常的個別的経営の単位として機能していたことが窺われる。これが中村哲のいう個別的な小経営生産様式であるかどうか即断できないが、直接的には各単位が占有する日常的生産の場に規定された存在形態を示すものであろう。

各遺跡内部の或いは各遺跡を結ぶ社会的関係を示すような遺物の出土はないが、主要な生産用具からはずれた石器の存在がこれらの遺跡に特徴的である。このような関係は新たに形成されたものではなく既に与えられた前提として存在していたはずである。一次的関係性を前提とした網目状の結節点として各遺跡は理解されなければならない。その場合異系統土器の存在が示すように地方間の交通諸関係が及ぼす作用をみておくべきで、両者の相互作用として存在するものである。

古墳時代の遺跡は前期では少ない。五領式期では白草遺跡で住居跡２軒が検出されている他、円阿弥遺跡で住居跡７軒、土壙３基が調査されている。周辺でも芳沼、畠山字上中谷の他、塩前遺跡、塩西遺跡、台耕地遺跡等がある。和泉式期になると白草遺跡で住居跡７軒が調査されている。

白草、円阿弥両遺跡の五領式期出土遺物は五領式でも新段階に属するもので、白草遺跡がやや古く円阿弥遺跡第１号住居跡例にほぼ併行する。

白草遺跡では少なくとも２群の住居跡群が認識されるが、これに併行する円阿弥遺跡の住居跡は単独で１軒存在するにすぎない。その他６軒の住居跡はほぼ同一段階で２～３群にわかれ、土壙を伴うものもある。白草遺跡の和泉式期住居跡群に近い時期である。いずれも一群を構成する住居跡数は少ない。

白草台の奈良・平安時代の遺跡は竹之花遺跡で住居跡８軒、四反歩北遺跡で住居跡４軒、四反歩東遺跡で住居跡５軒があり、白草遺跡の平安時代の遺構とほぼ併行するものは、円阿弥遺跡で住居跡３軒、土壙２基、権現堂北遺跡で土壙１基が調査されている。周辺地域ではこの時期の集落遺跡の調査例は少なく台耕地遺跡、上辻・下辻遺跡等がある。

白草遺跡では少なくとも５群の住居跡群が認識され、さらに小群に細別される。小群を構成する住居跡数は３～４軒である。出土遺物には少量であるが墨書土器、鉄滓等があり、小鍛冶跡も検出されている。このような遺構と遺物の在り方は、白草台の他の遺跡の在り方と大分異なるもので、併行する権現堂北遺跡では土壙１基、円阿弥遺跡では白草遺跡の小群に相当する住居跡数の住居跡３軒、土壙２基が検出されているのみである。時期的な問題等実態は不明確であるが、隣接する諦光寺廃寺、荷鞍ケ谷戸瓦窯跡の存在を考慮すると、単純な自然集落を想定することを躊躇させるものがある。

該期の集落遺跡の範疇分けについては今後の課題である。

Ⅲ　遺構と出土遺物

Ⅰ　弥生時代の遺構と出土遺物

a　概要

弥生時代の遺構は調査区の北西部に集中し、丘陵上～斜面裾 に及んでいる。迅速図、米極東空軍の空中写真によると旧地形は現水田面に及び、遺構が分布していたことが窺われる。

調査区内において墓域を検出できなかったが、他地点でも同様である。現水田下に存在した可能性を考慮しておくべきであろう。

該期の遺構は全て弥生時代後期の吉ケ谷式期に属し柿沼編年のⅡ期に対応する。若干の段階差を内包するものであるが、遺構毎の重複関係がみられない点と同一の歴史的環境乃至社会的関係を持つ一塊のものという点を考慮し、以下ではこれらの住居跡群を一括して取り扱う。

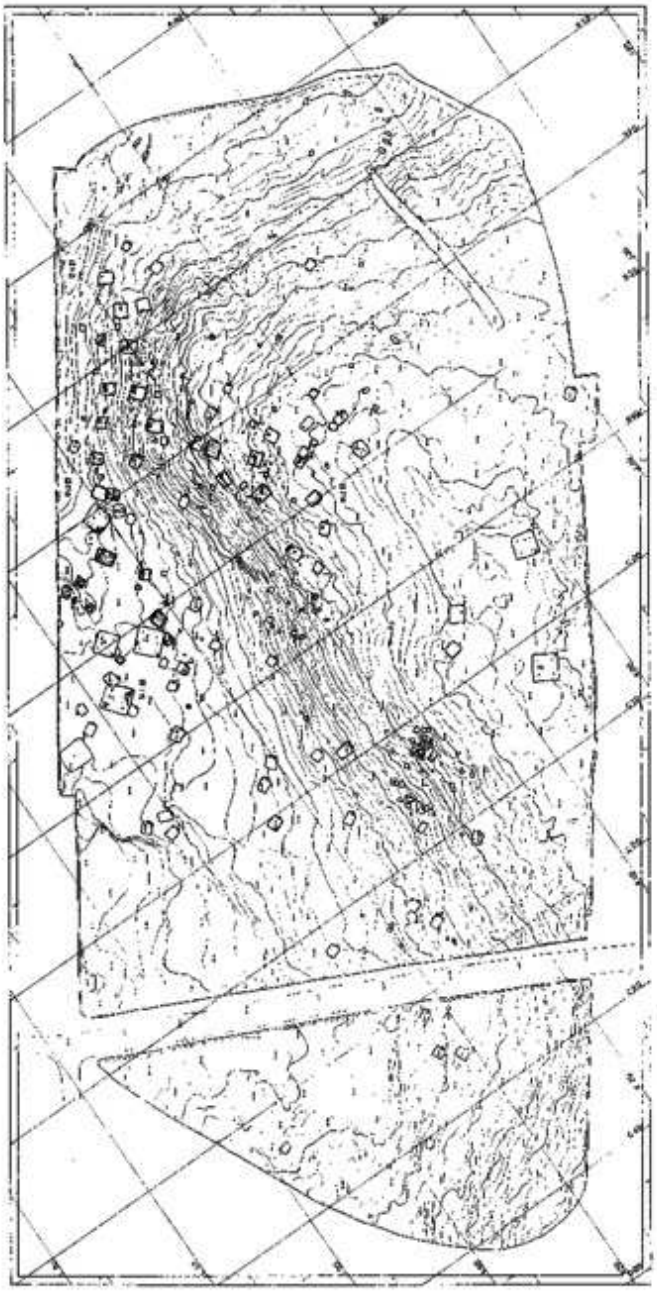
住居跡、竪穴状遺構及び土壙の相互の位置関係、集中度と調査時における所見により、４群に分割する。

第１群は第6、7、14、15号住居跡、第10、17、97号竪穴状遺構、第5、10、139、141号土壙

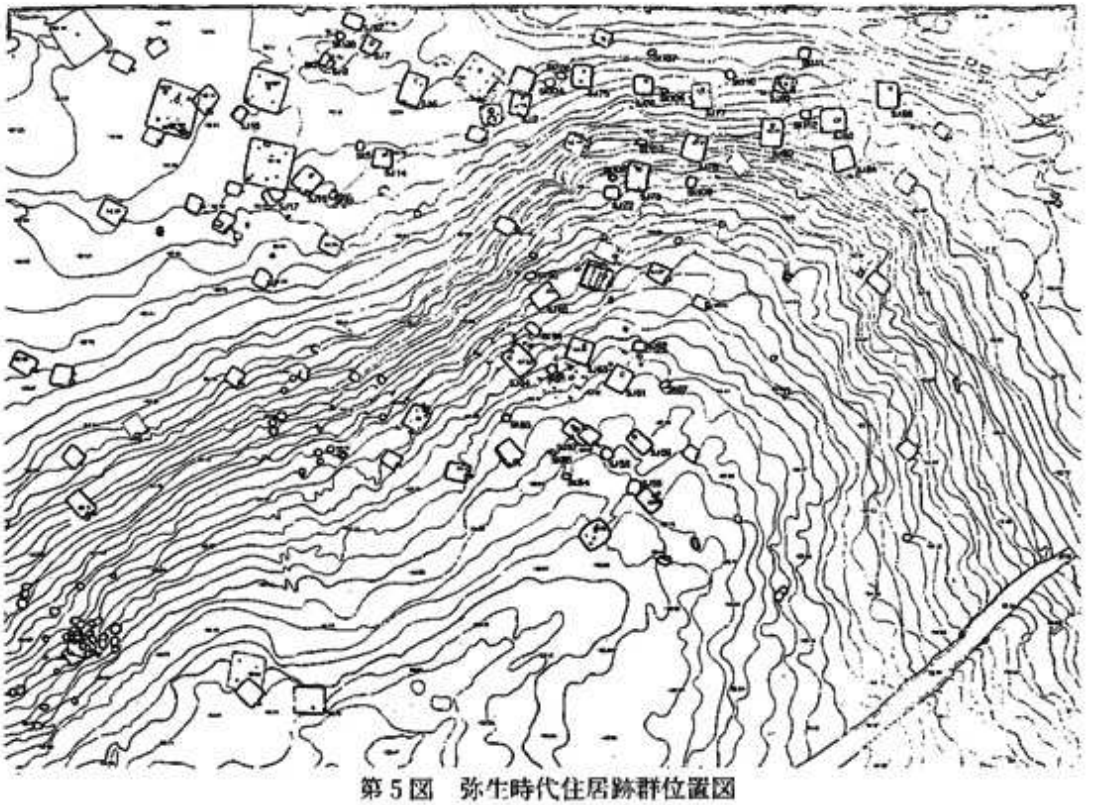
第２群は第57、59、61、63、64、65号住居跡、第55、58、62号竪穴状遺構、第84～86、91、94、96号土壙

第３群は第2、73、75、76、77号住居跡、第72号竪穴状遺構、第102～108、110号土壙

第４群は第80、82、83、84、88号住居跡、第111、112号土壙によって構成される。



第４図　弥生時代遺構分布図



第５図　弥生時代住居跡群位置図

それぞれの詳細は下表の通りである。

第１表　弥生時代住居跡及び竪穴状遺構一覧表

No.	平面形	規　　模	主軸方向	炉	柱　　穴	貯蔵穴	備　　考
2	方形	3.66×2.92×0.3	N－41°－W	北西壁寄り中央	南東壁下入口ピット	南隅　円	台形状の平面形か
6	隅円長方形	4.91×3.48×0.36	N－34.5°－W	北西壁	1、入口ピット	南東壁　楕円	
7	台形	2.74×2.53×0.39	N－26°－W	中央北西壁寄り		南東壁　円	
10	不整方形	2.4×1.92×0.39	N－15.2°－W				
14	方形	3.11×2.96×0.24	N－50.4°－W	中央北西壁寄り	1 南東壁中央	南東壁　楕円	
15	隅円長方形	3.95×3.33×0.21	N－5.2°－W	北壁より中央	入口ピット	南東隅　円	貯蔵穴は周堤帯をもつ
17	隅円方形	3.02×2.77×0.19	N－S				2段構造
55	隅円長方形	2.30×2.01×0.26	N－38.9°－W				第59号住居跡に伴う。
57	隅円長方形	4.31×2.08×0.12	N－71.9°－E	東、西壁寄り	入口ピット	南壁　楕円	第56号住居跡に切られる。
58	円形	1.87×1.82×0.19	N－89.8°－E				第57号住居跡に伴う。
59	隅円長方形	3.88×2.40×0.14	N－75.6°－E	北壁寄り中央	入口ピット	南壁北寄り	
61	長方形	3.63×3.10×0.22	N－26.8°－W	北西壁寄り中央			
62	長方形	2.09×1.69×0.09	N－41.8°－E				第61号住居跡に伴う。
63	方形	3.7×3.48×0.42	N－38°－W	北西壁寄り中央	2、入口ピット		柱穴は北西、南東壁下中央
64	長方形	4.42×3.53×0.29	N－83.2°－E	西壁下中央	1		柱穴新しい可能性
65	長方形	3.82×3.07×0.17	N－S	北壁寄り中央	1		柱穴新しい可能性
72	不整長方形	2.39×1.96×0.14	N－42.3°－E				第73号住居跡に伴う。
73	隅円長方形	4.59×3.43×0.24	N－44.6°－W	3 北西壁寄り中央	1　南東壁寄り	南西壁下　楕円	炉北側3回掘直し
75	隅円長方形	3.67×3.04×0.16	N－51.3°－W	北西壁寄り中央	2ヶ所小ピット		

No.	平面形	規模	主軸方向	炉	柱穴	貯蔵穴	備考
76	不整方形	3.04×2.95×0.26	N−58.2° −W	北西壁寄り	入口ピット		
77	長方形	4.15×3.2×0.02	N−57.1° −W	北西壁寄り中央	入口ピット		
78	隅円長方形	4.13×3.68×0.34	N−43.1° −W	北西壁寄り中央	入口ピットか		平面形はやや不整形
80	隅円長方形	4.31×3.35×0.21	N−52.3° −W	北西壁寄り中央	入口ピット		
82	不整方形	2.78×2.45×0.11	N−47° −E	2 中央寄り			炉は西、東の順
83	隅円方形	3.9×3.68×0.35	N−31.4° −E	中央北東壁寄り	入口ピットか		
84	不整方形	3.53×3.39×0.09	N−70° −W	東壁寄り中央	入口ピット		
88	不整長方形	4.14×3.2×0.42	N−57.8° −W	北西壁寄り	南隅小ピット		
97	隅円長方形	3.07×2.3×0.04	N−56.5° −E				

第2表　弥生時代土壙一覧表

遺構番号	平面形	断面形	規模	主軸方向	備考
2	C	II	2.06×1.42×0.37	N-26.8° −W	第141号土壙と重複？
5	C	II	1.54×1.24×0.23	N-46.2° −W	第14号住居跡に伴う。
10	C	II	1.48×1.1×0.19	N-22.2° −W	第15号住居跡に伴う。
84	C	II	1.35×0.93×0.16	N-40.1° −E	第57号住居跡に伴う
85	B	II	1.15×0.88×0.1	N-59.3° −E	第57号住居跡に伴う
86	D	II	1.20×1.16×0.51	N-56.5° −E	第61号住居跡に伴う
87	B	II	1.66×1.13×0.25	N-S	第61号住居跡に伴う。
91	B	II	1.59×1.54×0.14	N-4.5° −W	
94	C	II	2.38×1.55×0.19	N-73.8° −E	第64号住居跡に伴う。
96	C	II	1.62×1.21×0.2	N-11.1° −E	第65号住居跡に伴う
102	B	II	1.27×1.09×0.24	N-42.4° −E	第73号住居跡に伴う
103	C	II	1.64×1.01×0.13	N-36.8° −E	第73号住居跡に伴う
104	B	II	1.62×1.5×0.2	N-69.2° −W	第2号住居跡に伴う
105	C	II	1.25×0.98×0.17	N-48.5° −E	第75号住居跡に伴う
106	B	II	1.1×0.84×0.05	N-48.6° −E	第76号住居跡に伴う
107	B	II	1.39×0.92×0.1	N-9.3° −E	第76号住居跡に伴う
108	C	II	1.79×1.58×0.22	N-42.1° −W	第78号住居跡に伴う
110	A	II	1.62×1.42×0.21	N-56.5° −W	第77号住居跡に伴う
111	D	II	1.85×1.75×0.21	N-47.5° −E	第82号住居跡に伴う
112	D	II	1.74×1.64×0.24	N-30.5° −E	第83号住居跡に伴う
139	A	II	1.36×1.29×0.15	N-24.8° −w	第7号住居跡に伴う。
141	E	III	1.53×0.81×0.12	N-63.2° −E	第2号土壙と重複？

丘陵上の第2群と裾部分南北の第1、3群を分けることについては、その間にやや幅広の空間が存在しているので概ね妥当であろう。

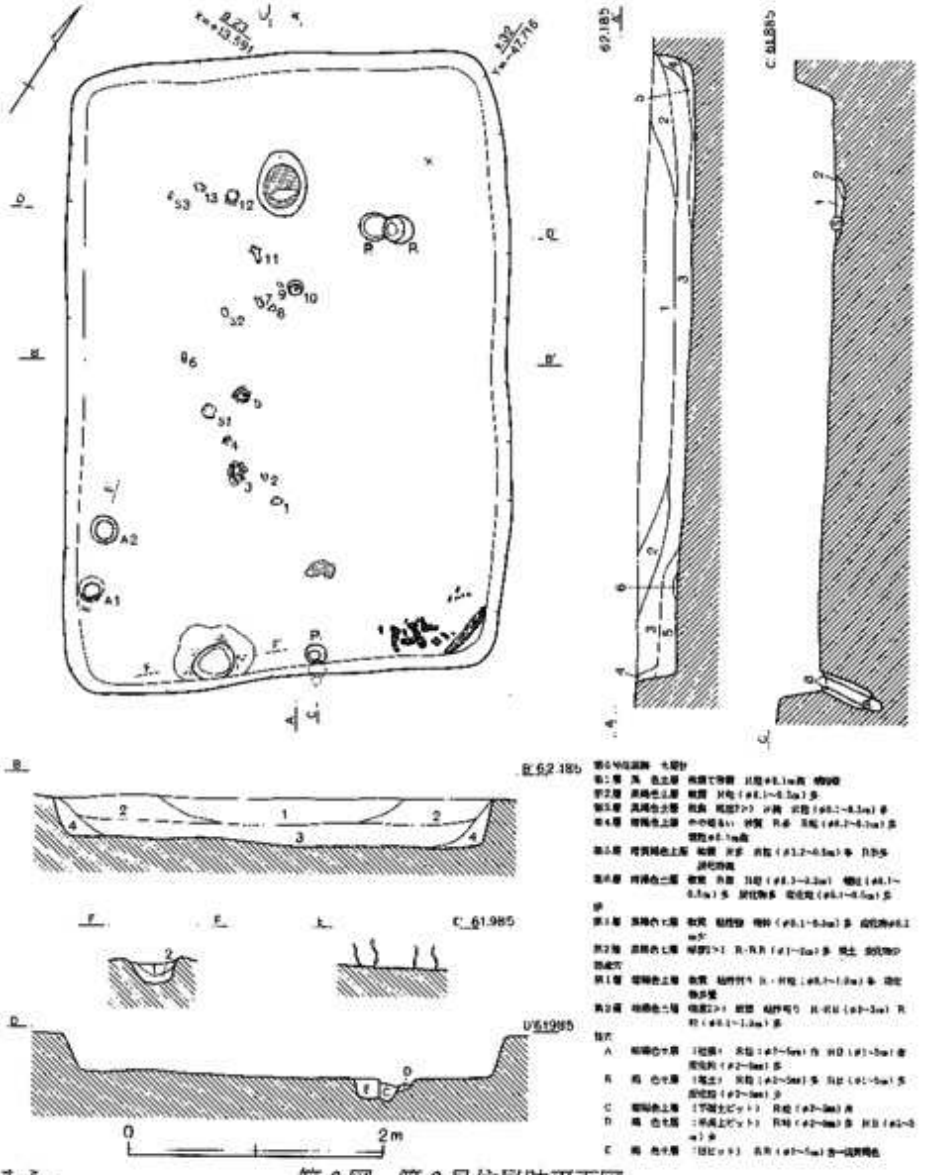
最北部の第4群については、第3群との間が狭くやや恣意的である。或いは削平された現水田面に広がりを持っていたかも知れない。

b　弥生時代　第1群

本群は弥生時代住居跡群の西南端、丘陵裾のほぼ平坦面に位置し、南北約30m×東西約23mの範囲に収まる。第6、7、14、15号住居跡、第10、17、97号竪穴状遺構、第5、10、139号土壙によって構成され、第2群とは約28m、第3群とは約13mの距離を置きやや広い空間を持つ。

第6号住居跡は相対的に大形であるが付属施設を持たなず単独で存在する。他に中形の第15号住居跡、小形の第7、14号住居跡、都合4軒によって構成される。主軸方向は第15号住居跡を除いて

ほぼ一致している。各住居跡とその付属すると考えられる遺構の領域範囲は互いに重複していない。各々の住居跡は径18m程のほぼ環状に配置され西乃至南側に開口している。第10号竪穴状遺構は埋土の類似性から該期に組み込んだがこれに伴う住居跡が存在しない。或いは和泉期の第9号住居跡によって破壊されている可能性も考慮しておくべきであろう。



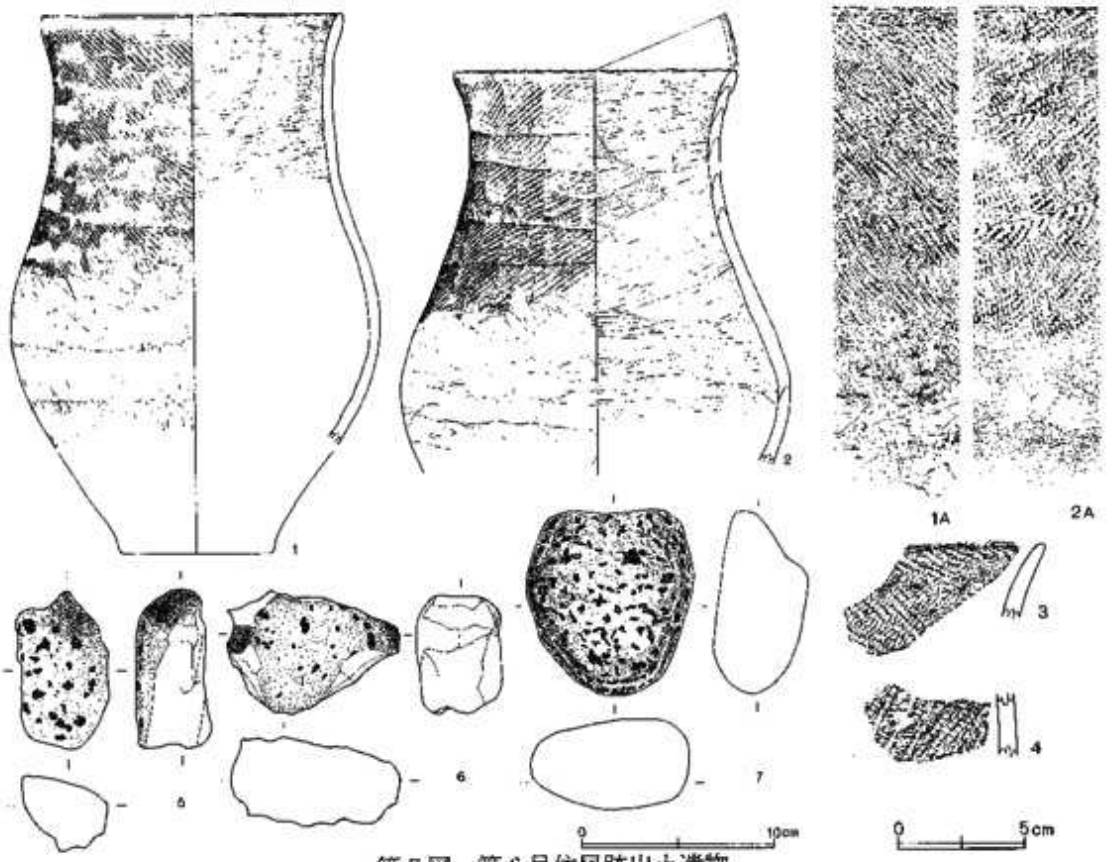
第6図　第6号住居跡平面図

各住居跡の想定される入口部分は炉の反対側と考えられ、必ずしも広場空間に規制された配置を示すものではない。むしろ住居跡の配置によって空間が形成された如き観を呈する。このような在り方は他群が明確な広場空間を持たないことと関連があると見られる。

第6号住居跡（第6図）

軟質黒色土の落ち込みとして確認された。壁外施設は認められなかった。中央部上面に和泉式土器が露出していたが、住居跡として確実に認められたわけではない。

埋土は主に暗褐色土と黒色土の自然推積で、中央部平面楕円形の黒色土中に五領～和泉式土器片を含む。当初この黒色土を該期住居跡の切り込み（吉ケ谷期住居跡との重複）と把握したが、それほど明確であった訳ではなく整理時点で埋没過程に於ける混入乃至投棄によるものと判断した。下層暗褐色土中から少量の吉ヶ谷式が出土する。南東隅部では炭化物、炭化材が床直上迄分布していた。



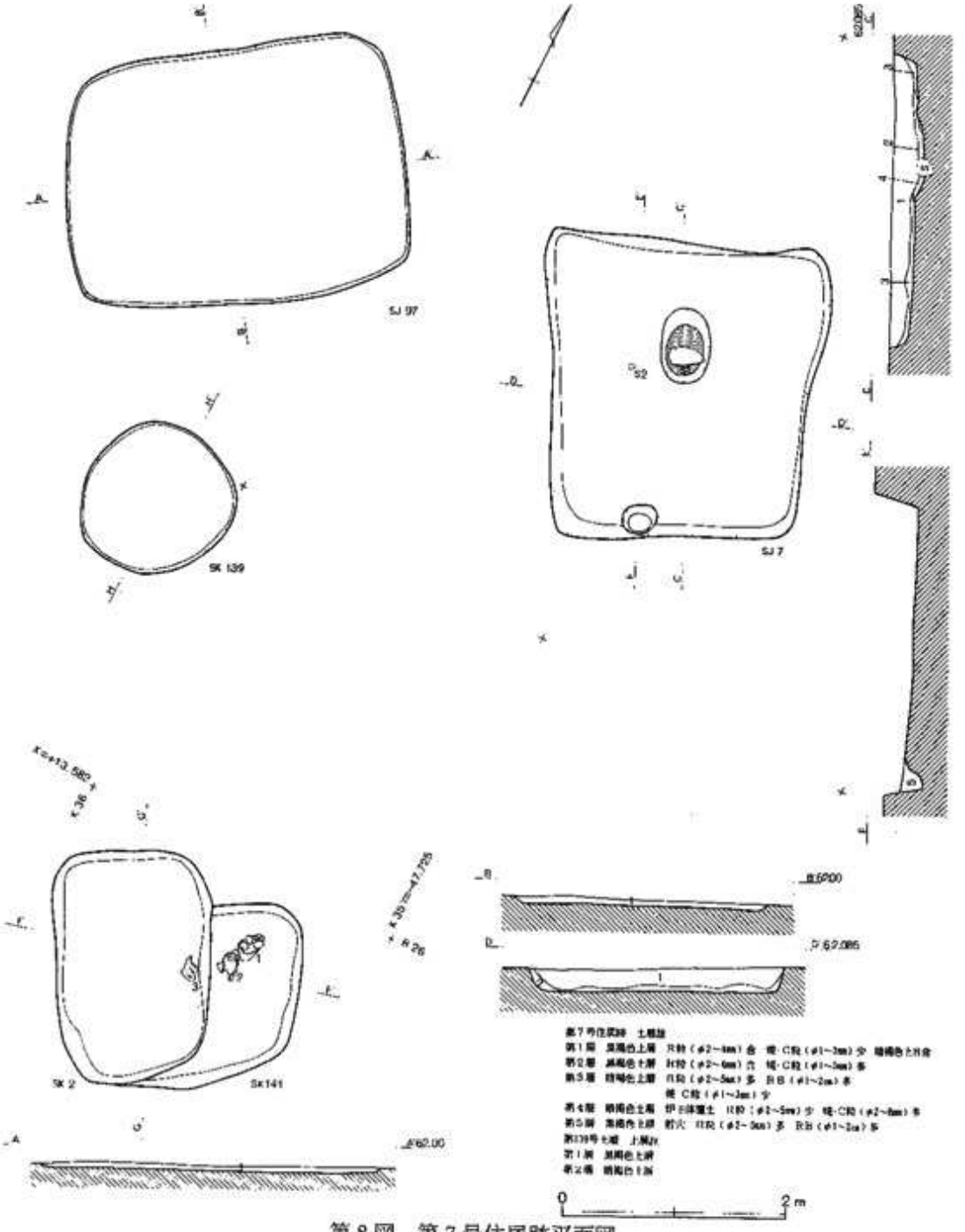
第７図　第６号住居跡出土遺物

平面形は南壁がやや歪むが略長方形、掘り込みは深く壁ほぼ直立する。床はほぼ平坦で炉～中央部は硬質周辺部は柔らかい。炉は北壁より中央で楕円形状。炉石を配し、よく焼けている。南壁下Ｐ３は内側に傾斜し入り口施設か？　Ｐ１は比較的浅く、西壁下の対応する位置の床面は若干高まり硬い。不明瞭な周堤帯をもつ貯蔵穴がある。生活段階に伴う遺物は少量で、南西隅の据え置かれたような状態で正立する甕が２ヶである。

ローム直上が床面で、柱穴は堀方のややずれた１本が検出されたのみで、周辺土壙の存在も認められなかった。

第６号住居跡出土遺物観察表(1)

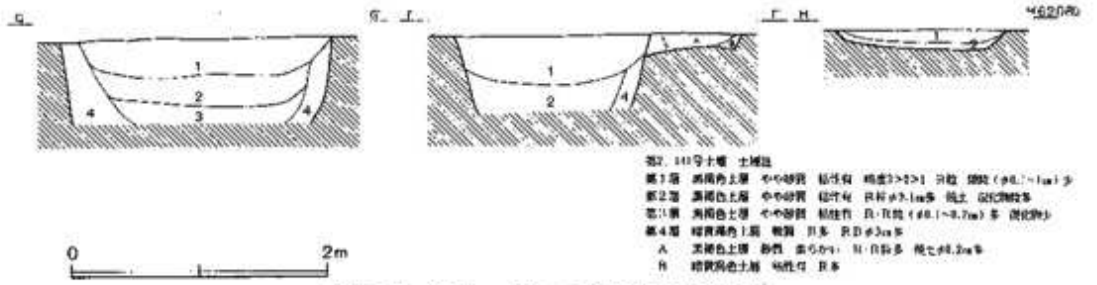
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	15.8 22	胴部は張りをもち，最大径を中位～上位にもつ。頸部は内傾して立ち上がり上位で緩く外反する。外面輪積み痕不明瞭。口縁部下外面直立気味で先端部は平坦面をなす。	下胴部斜めハケ（11本／1cm）、11巻部下木口状工具（巾0.8cm）によるナデ（←・）以下RL縄紋横位施文（→→：、0段3条）で４段に亘たる以下縦置ミガキ。内面口巻下リコナデ後全面横置ミガキ、脱部磨滅により不明瞭。	80%甕１暗褐色／淡褐色No.１頸部外面炭化物付着。
甕	2	14.8 — 20.5	胴部は大きく張りをもち，最大径を中位～上位にもつ。頸部は直立気味に立ち上がり上位で緩く外反する。外面輪積み痕不明瞭。口縁下外面直立気味先端部尖り気味で縄紋施文される。口縁下内面緩い稜をなす。	下胴部斜・横ハケ（←↑6本，0.5cm）、11巻下木口状工具（巾？）によるナデ（←・）以下LR縄紋横位施文（←←：、0段3条）で６段に亘たる以下横置ミガキ。内面胴部横置ミガキ後以上全面斜・横置ミガキ（←←↑？）。	80%甕２赤褐色No.１外面頸部炭化物付着



第8図　第7号住居跡平面図

第6号住居跡出土遺物観察表(2)

番号	胎土	色調	備考
3 4 5	雲1 雲2白粒少量	暗褐色／淡褐色 黒褐色(灰褐色)赤褐色	甕、口唇部は尖り気味、RL縄紋横位施文（・・↓0段多条？）。 甕、LR縄紋横位施文（0段多条）、内面ミガキ。 磨石　160g



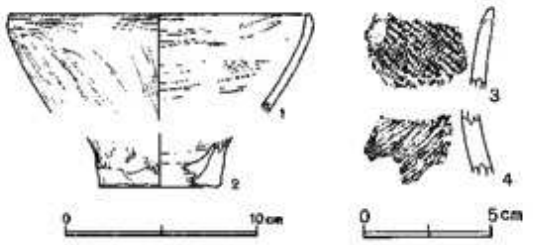
第9図　第2、139、141号土壙断面図

註1　本住居跡出土甕形土器の胎土は以下のとおりである。

甕1：a～f少量、e極微量

甕2：a～d，f少量、e多量目立つ

註2　図示したもの以外に甕形土器破片1点（RL0段多条？、甕1）。



第10図　第6号住居跡出土遺物

第7号住居跡（第8図）

黒色土の小形の住居跡として確認された。調査区際の土層により壁外施設の存在を精査したが、耕作が及んでおり認めることはできなかった（平面も同様である）。

埋土は暗褐色土＋黒色土の典型的堆積である。出土遺物はごく少量。

平面形はやや歪んだ台形状で、南壁が直線である他は整っていない。掘り込みはやや深い。床面は全体に皿状を呈し概して柔らかく、硬質部分は炉の周辺南側のみである。炉は中央やや北壁寄りに位置し、大きめの炉辺石が手前側に設けられる。炉辺石北側はよく焼けている。床面精査にもかかわらず、柱穴等は検出されなかった。2ヶ所のピットは上層から堀り込まれ新しい。南壁下東よりに小ピットが存在し貯蔵穴とみられる。出土遺物はない。生活段階に伴う遺物はない。

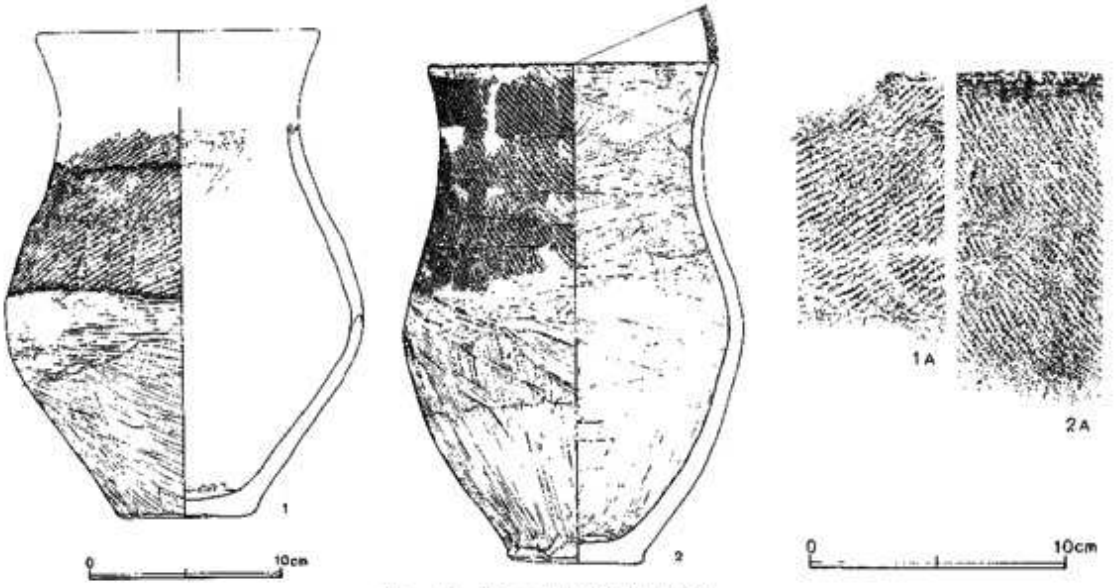
掘り方は存在せずローム直上が床面となる。西側1～3m程離れて第97号竪穴状遺構、第139号土壙が、南西側 4、2m程に第141号住居跡が位置する。これら関連するとみられる遺構は6.9×9.5mの範囲内に収まる。

第7号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	高坏	15.5 － 5.0	坏部は比較的深く内湾気味に開く。口縁部直立し先端部尖る。	外面横位ミガキか？内面横・斜位ミガキ	1/4、甕2　白粒少量、赤褐色、内外面とも摩滅顕著。
2	甕底部	6.2 2.6	底面僅かに上げ底で、厚い。	底面一定方向の擦ケズり、外面横ナデ（一）後縦位ミガキ。内面指頭ナデ。	1/5、甕1、暗褐色／赤褐色

第7号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
3	甕1	暗褐色／淡褐色斑	甕口縁部。口縁部を欠失する。RL横位施文、内面横位ミガキ。
4	甕2	赤褐色	胴部。無節L横位施文



第11図　第141号土壙出土遺物

註1　図示したもの以外に甕片1点　RL　0段多条？甕1、壺片1点が出土している。
　　弥彩土器の胎土はa、c多量に含み他は不明確なもので、甕1とする。
　　その他土師器、須恵器の混入が目立つ。

第97号竪穴状遺構（第8図）

現状は農道であったため非常に遺存状態が悪い。辛うじて平面形を把握できたが殆ど床面乃至それ以下と考えられる。したがって出土遺物はなく、埋土の類似性からから吉ヶ谷期と判断した。

第2,141号土壙（第8図）

第141号土壙は調査時に第8号住居跡としたもので整理段階で土壙に改めた。尚注記はＳＪ８のままである。

遺構確認段階では両者を含めて正確な平面形は把めなかった。周辺部に風倒木が存在し、その一部であるとも考えられた。南側は溝（近、現代）によって切られる。

両土壙とも埋土は黒色土を主体とするが、断面図に示される第141号→第2号土壙の新旧関係はそれほど明瞭ではなく、あるいは同時存在の可能性もある。出土遺物は第141号土壙ほぼ中央部に浮いた状態で甕が、第2号土壙に落ち込んだ状態で甕が出土している。

平面形は両土壙の関係如何によっては2通り考えられる。①第141号土壙の単独で、略方形の小形のもの。（第141号土壙→第2号土壙の順）②第2号土壙を含めたカギ状のもの。この場合第2号土壙の底面はもう少し浅く黒色土の範囲と思われる。生活段階に伴う遺物は正確に言うとないが埋土中のものは伴うものとした。

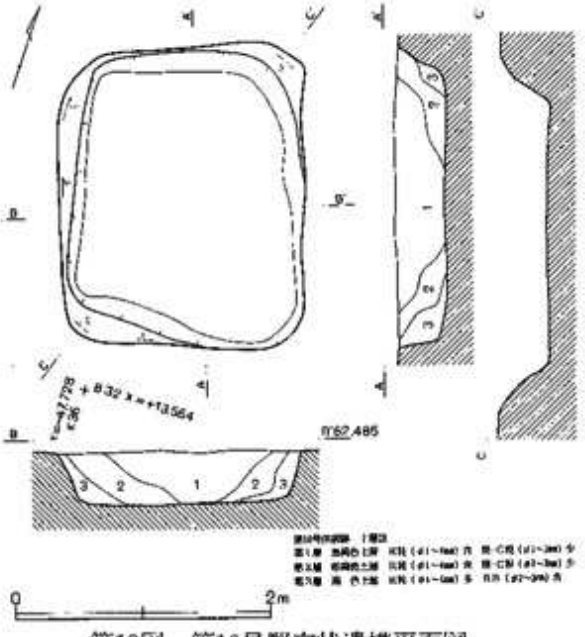
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	－ 7.2 20	底部は大形でほぼ平底、胴部は外傾して立ち上がり中位で最大径をもつ鼓腹状をなす。	下胴部斜ハケ？後LR縄紋末端結束横位施文（・・ ．、0段3条）で3段に耳たる。以下横→斜・縦筆ミガキ。底面未調整部分の残るナデ。内面上位斜・横筆ミガキ？以下磨滅剥離により不詳。	80%甕2淡褐色No.1。
甕	2	15 6.7 25.9	底部はほぼ平底、外周筆痕残る。胴部は長胴気味で最大径をほぼ中位にもち、頸部は直立して立ち上がり上位で緩く外反する。外面輪積み痕はない。口縁下外面直立し先端部は平坦で縄紋（外面と同一？）施文。	底面未調整で圧痕残る。下胴部斜ハケ（5本/0.5cm）、口縁部下ヨコナデ以下RL縄紋末端未処理横位施文（・・ 1、0段3条 やや雑）で4段に耳たる以下斜→縦筆ミガキ。内面口縁下ヨコナデ（以下若干のハケ加わるか?）後下胴部は不明確であるが以上～頸部斜・横筆ミガキ、口縁下縦筆ミガキ。	90%甕3赤褐色No.3。外面一部スス付着、黒斑あり。

第139号土壙（第8図）

第97号土壙の南側約1mで黒褐色土の落ち込みとして明瞭に検出された。

掘り込みは浅く出土遺物もない。第97号竪穴状遺構と同様埋土の類似性からから吉ヶ谷期と判断した。

第10号竪穴状遺構（第12図）



第12図　第10号竪穴状遺構平面図

調査時には住居跡としたが整理段階で竪穴状遺構に改めた。

風倒木と重なっていたが、他の吉ヶ谷期の住居跡と同じ黒色土の小形の範囲として認められた。 埋土は黒色土と暗褐色土で、掘り込みは他のものに比して深く、よく残っていたが、出土遺物はほとんどない。

平面形はほぼ長方形であるが、上部の段を崩落とすると若干南壁が歪む台形状となる。床面は全体に柔らかく、踏み締めたような硬質面はない。炉、柱穴等は検出されなかった。周辺部に住居跡は存在しない。

第14号住居跡（第13図）

出土土器は和泉式であったが、住居構造及び土壙の存在から吉ヶ谷式期とした。

確認時には風倒木の重複によるためか北東、南東壁が飛び出す不整形であった。壁外施設は不明。北隅の土器群はすでに露出した状態であった。

埋土は暗褐色＋黒褐色で該期の典型的推積で、平面的には北隅～中央にかけて黒褐色土が分布する。出土遺物は上層から（黒褐色土中）和泉式が出土し、下層からは該期の遺物は全く出土していない。北隅では下層から焼土が出土している。

平面形は略方形で、北東壁が直線状である他は湾曲気味である。掘り込みは比較的深く、壁は大

体直立するが南西側がやや傾斜する。床面はほぼ平坦で、炉の周辺～中央に硬質面をもつ他は全体に柔らかい。炉は中央やや北東壁寄りに位置しほぼ円形。炉辺石は存在しなかったが、北側やや離れてそれらしき石が出土した。明確な柱穴は検出されなかったが小ピットが主軸上、南東壁下南寄りに検出された。貯蔵穴と考えられるピットは南東壁下南寄りに略楕円形状の浅いものがある。北隅の浅い貯蔵穴状の土壙は、伴うかどうか疑わしく和泉期の可能性もある（住居上層からの掘込みは確認できなかった）。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は存在せずローム直上が床面となる。確認段階の壁の凹凸は、上層の和泉式土器の存在を考えると該期住居跡或は土器の一括投棄に伴うものかもしれない。住居跡西側約 1.6m程離れて第5号土壙が存在し本住居跡に伴うと考えられる。

第5号土壙（第13図）

吉ケ谷式期に典型的な黒褐色土の落ち込みとして確認された。第14号住居跡との間に明確な遺構の存在を認めなかったが、確認段階の住居跡平面形が凹凸のある不整形であった点は何らかの痕跡を見落とした可能性もある。

やや不整な長方形状で掘り込みはやや深い。主軸は第14号住居跡と一致している。出土遺物は他の土壙に比べ比較的多い。

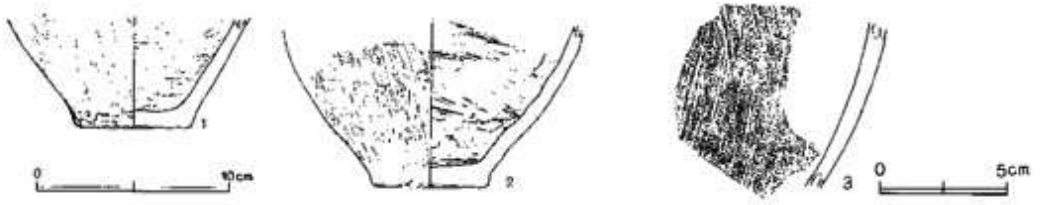
第5号土壙出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺底部	1	－ 6 5.7	底部は平底でやや凸出気味。胴部は外傾して立ち上がる。	底面未調整、外周篦圧痕（巾0.4cm）残る。胴部外面縦篦ミガキ。内面斜篦ミガキで底面まで及ぶ。	80%、要1、暗褐色／淡褐色、No.3
壺底部	2	－ 6 8.4	底部は平底で凸出する。胴部は内湾気味に立ち上がる。	底面指頭ナデ、胴部外面縦篦ミガキ後底部外周指頭ナデ。内面底部指頭ナデ後胴部斜ハケ（←←↓　11本／1cm）。	70%、要1、暗褐色、赤褐色、No.1～6。

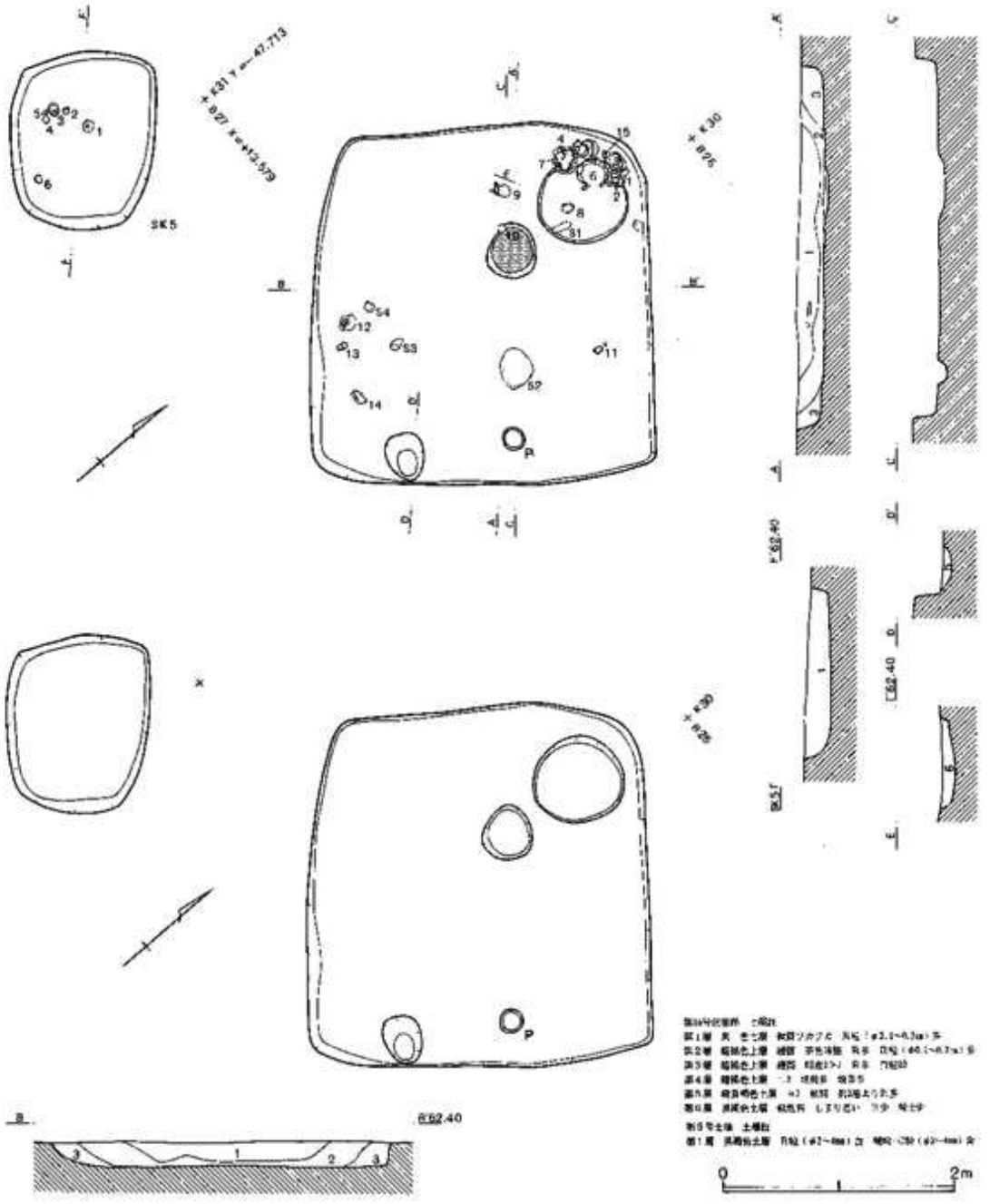
第5号土壙出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
3	要1	黒褐色／暗褐色	胴部。RL縄文横位施文（6段多条？）後縦ハケ？内面横篦ミガキ。No.4

註1　図示したもの以外に破片2点。
胴部（No.5）要1。胴部（No.2）無節L　要2の2点である。



第13図　第5号土壙出土遺物



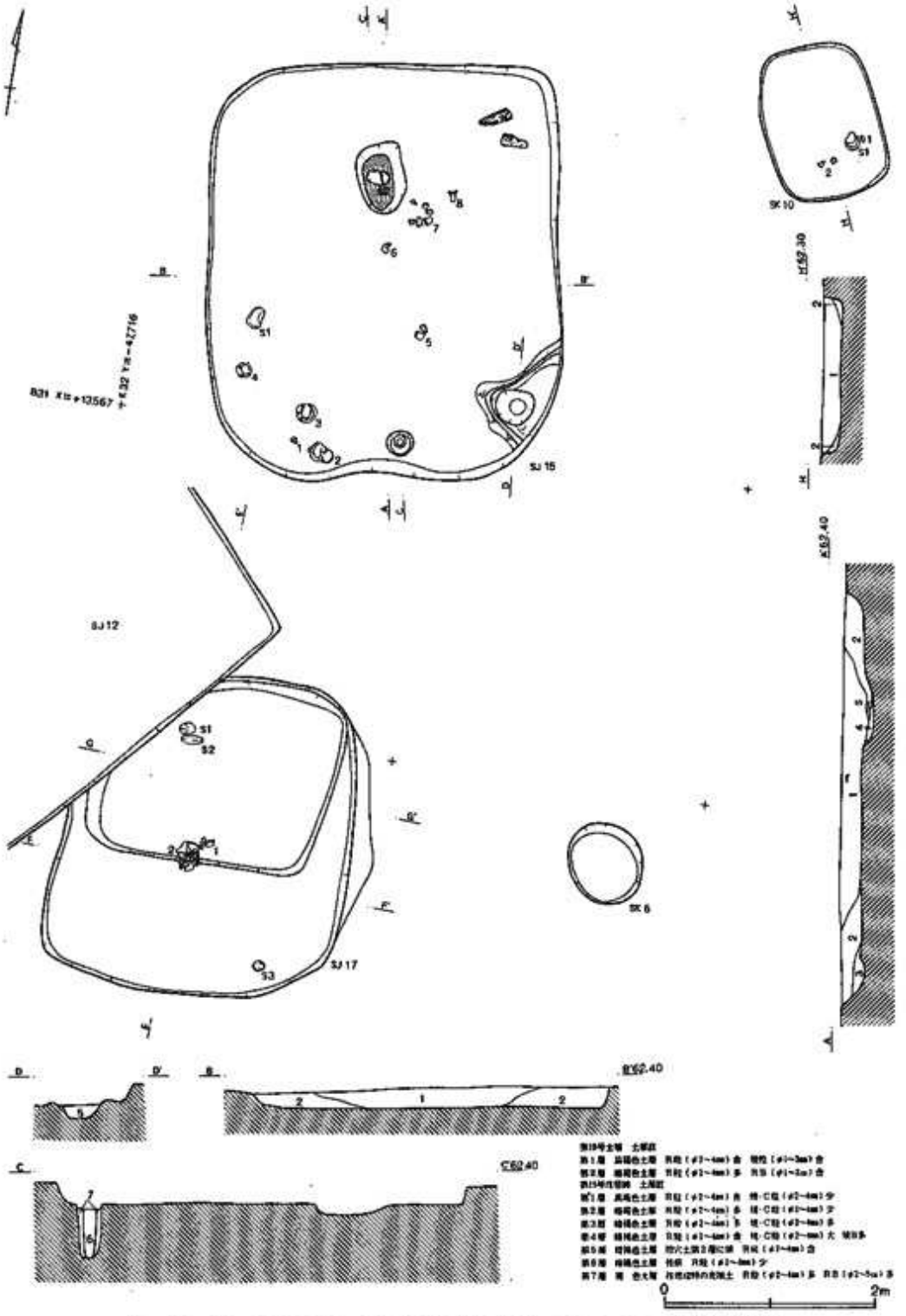
第14図　第14号住居跡、第５号土壙平面図

第15号住居跡（第15図）

吉ヶ谷式に典型的な黒色土の落ち込みとして確認したが、中央部表面に和泉式高坏形土器が露出していた。壁外施設は確認していない。

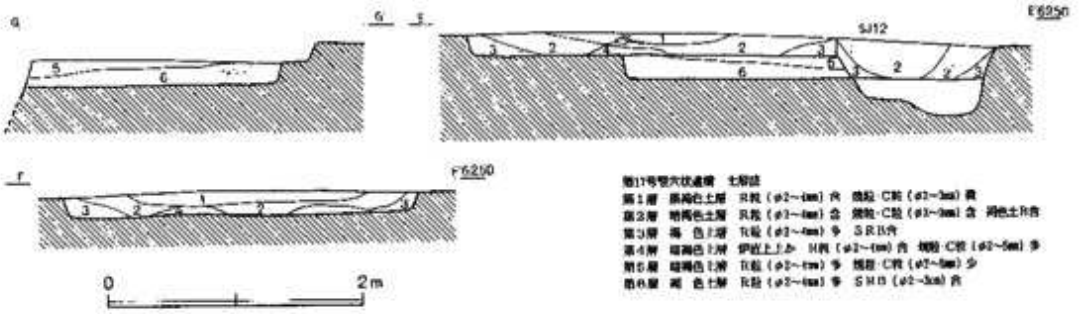
埋土は典型的暗褐色＋黒褐色の推積で北東隅を中心に炭化物、炭化材が分布する。出土遺物は上層から和泉（炉のあたりに集中）、下層から吉ヶ谷式が出土した。

平面形は北東隅が直角気味で、他は大きく湾曲する隅丸長方形。南壁は中央部が凹状となり入口



第15図　第15号住居跡、第17号竪穴状遺構、第６、10号土壙平面図

に伴うものか？ 床面はほぼ平坦で、炉～中心部に硬質面が広がり他は柔らかい。炉は中央やや北壁寄りに位置し、略楕円形で中央に炉石が配置される（やや浮いた状態）。柱穴は検出できなかっ



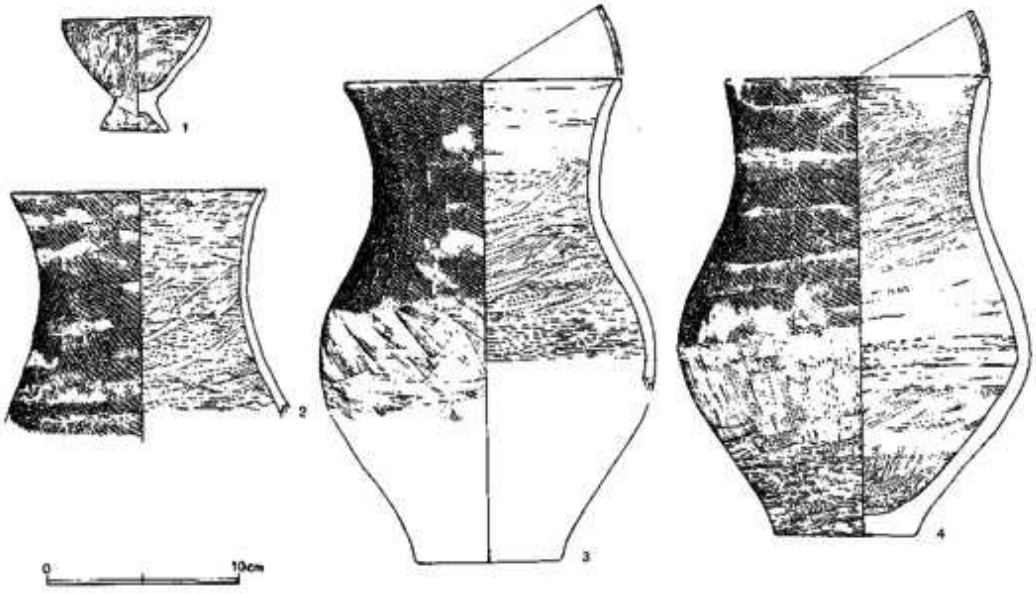
第16図　第17号竪穴状遺構断面図

たが、南壁下に直立する小ピットが存在する。貯蔵穴は南東隅に位置し不整形の周堤帯（内側はやや平坦面を造出している）を伴う浅いものである。出土遺物は、南西隅から完形に近い甕が２ヶ、ミニチュア高坏が出土している。他は浮いた状態であった。

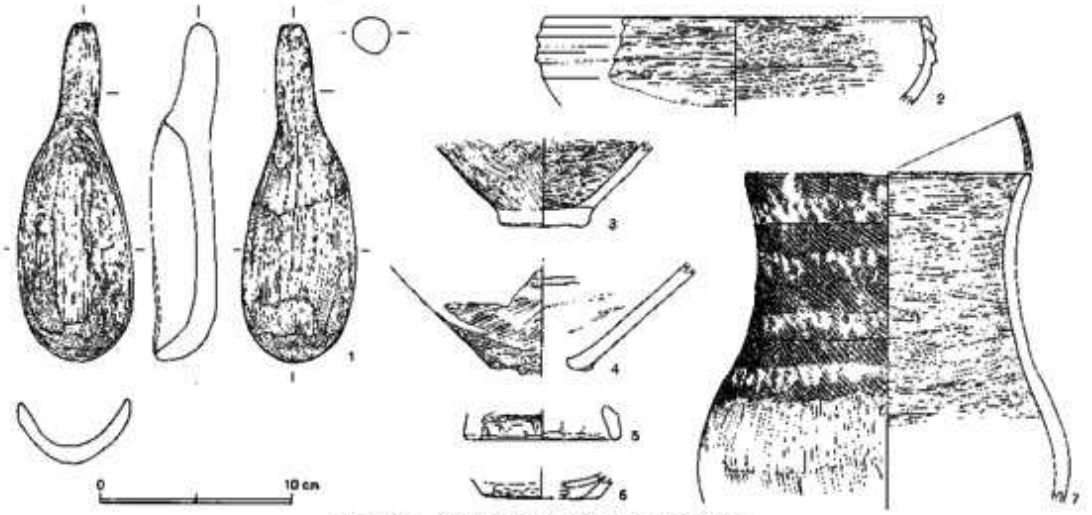
掘り方は存在せず床はローム直上につくられる。東側約 1.9m離れて第10号土壙が存在し、南側約 1.9mおいて第17号竪穴状遺構が配置される。何れも本住居跡に伴うものと考えられる。

第15号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏ミニチュア	1	7.6 5.8 3.4	脚部は小形でほぼ直線的に開き端部は平坦。坏部は下端で緩い段をなし（内面緩い段をなし浅い）直線的に立ち上がり、上位で緩く内湾し口唇部直立気味で先端尖る。	脚部内外面指頭ナデ、接合部押圧加わる。後坏部外面縦・斜ハケ？後口縁下ヨコナデ←、後縦・斜ミガキ↑←。内面下部指頭ナデ、以上横・斜ハケ←←↑で口唇下横ナデ後縦・斜ミガキ。	完存 焼１角閃白粒やや多 淡褐色№１。黒斑あり



第17図　第15号住居跡出土遺物



第18図　第17号竪穴状遺構出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	2	13.3 － 11.8	胴部以下を欠失する。胴部は張りをもち緩く頸部に移行し、ほぼ直立して立上り上位で緩く外反して開く。口唇部直立気味で尖り気味。頸部外面微かに輪積み痕残る（内面剥離）。	外面横・斜ハケ？後単節縄紋RL（0段3条、2～3指）横位施文（→→。やや雑）。内面やや粗い横方向のミガキ（→→）。	80%甕1黒褐色、赤褐色№4。内外面黒斑、外面頸部一部スス付着。SK10－№2、一括出土片と接合。
甕	3	14.5 － 16.2	胴部は球形状で最大径を中位にもち以下欠失する。頸部は直立し上位で緩く外反して開く。口唇部尖り気味、内外面とも輪積み痕残さない。	外面斜ハケ（9本/1.2cm←←↑）口唇部ヨコナデ（外面木口状工具か？）後以下単節縄紋RL（0段3条、2指、末端未処理？）4段に亘る。以下縦方向のミガキ。内面口唇下ヨコナデ以下頸部横・斜ハケ（外面同一？）後斜め方向のミガキ乃至丁寧なナデ。胴部横・斜方向のミガキ（→↓←↑）一部輪積み痕残る。	90%甕1黄褐色／暗褐色№3。外面頸部以上一部スス付着。内面剥離顕著。
甕	4	13.8 7.2 23.7	底部は平底で凸出気味、胴部は最大径をほぼ中位にもち珠算玉状を呈す。頸部ほぼ直立し（輪積み痕なし）上部で僅かに外反して開く。口唇部直立気味で縄紋施文。内面緩い段をなす。一ヶ所片口状に打ち欠かれている。	底面丁寧なナデ。外面胴部横・斜ハケ（頸部？）口唇下ヨコナデ、口唇部（左回り）から単節縄紋RL（0段3条、2指？）横位施文（→→。）5段に亘り以下縦→横方向のミガキ。内面胴部横・斜ハケ、口唇下ヨコナデ後全面横・斜ミガキ（頸部は丁寧なナデか？）。	90%甕1赤褐色、暗褐色№2。外面最大径付近帯状に炭化物、スス付着。剥離軽減顕著。

第10号土壙（第15図）

吉ケ谷式期の典型的な落ち込みとして確認された。第15号住居跡との間は精査にもかかわらず明確な遺構は検出されなかった。

掘り込みは比較的深く、長方形状を呈する。主軸は住居跡とほぼ一致する。出土遺物は全て埋土中から。

第10号土壙出土遺物(1)

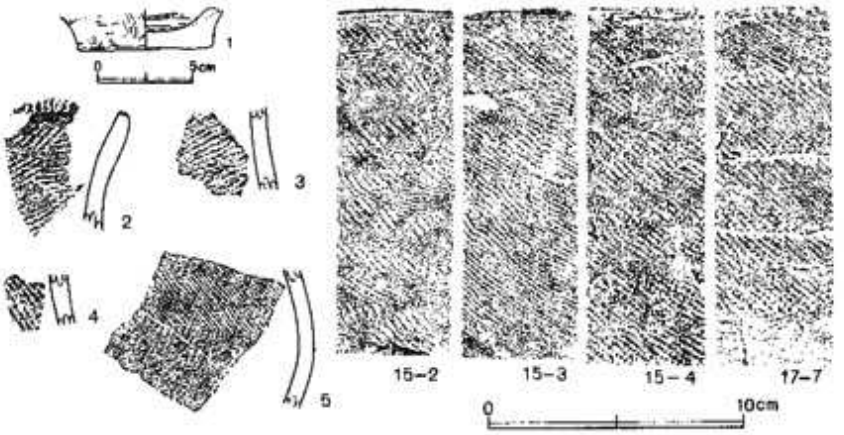
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	1	－ 7.2 2	底部は平底で圧痕残り未調整、外周ハケ、ヘラ痕残る。器肉厚い。	外面縦・斜めハケ（巾1.2cm）後ミガキ、外周は若干のナデ加わる。内面ミガキ（筋痕残る）。磨滅、亀裂顕著。	90%、甕2白やや少量赤やや目立つ、赤褐色

第10号土壙出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
2	褒1細レキ微白粒極微量	暗褐色	褒口縁部。外面口唇下巾狭ヨコナデ以下口唇部（左回り）から単節縄紋LR（0段3条）横位施文（→→1雑）。内面口唇部下幅広ヨコナデ以下ミガキ。
3	褒2細粗	暗褐色	褒胴部。外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文（やや雑）。内面やや粗い横方向のミガキ（→→）。
4	褒2細粗レキ白粒やや少量	暗褐色	褒胴部。外面単節縄紋RL（0段3条）横位施文。内面ミガキ。
5	褒1細粗微黒白粒極微量	赤褐色	褒胴部。外面無節縄紋R（0段4条？）横位施文以下縦方向のミガキ。内面横ハケ？後丁寧な荒ナデ？。

註1　図示したもの以外に同一個体と思われる褒胴部片7点（そのうち縄紋のあるもの10点でL3、RL2、LR5点）出土している。
褒1　13点、褒1'3点、褒1"1点である。

第17号竪穴状遺構（第15図）



第19図　第15号住居跡、第17号竪穴状遺構及び第10号土壙出土遺物

調査時点では2軒の重複する住居跡としていたが、整理段階で炉が存在しないため竪穴状遺構に改め、土層断面に示される重複関係の不明瞭さから段を持つ1軒のものとした。

東壁部分は巨大な木根があり、完全に破壊されている。壁外施設はない。

埋土は吉ヶ谷式に典型的な自然推積。上段床面段階で北側に暗褐色土の略方形の落ち込みを認めた。中央部落ち際から集中的に遺物が出土している。

平面形は略隅丸方形で、北東隅は第16号住居跡によって切られる。床面は上面、下面ともはっきりせず全体に柔らかい。炉、柱穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は存在せずローム直上が床面。

第17号竪穴状遺構

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
匙形土製品	1	17.5 5.8 3.2	舟部は楕円形状で把手に向かって次第にすぼまり断面略三角形状で口唇部尖り気味。把手部長5cm程で舟部軸からややずれる。	内外面とも軸に沿って荒ミガキされ平滑。	90% 褒2細粗白粒微黒褐色／淡褐色№3
高坏	2	19.9 — 5.2	口縁部は接合しないが同一個体とみられ、接合部以下を欠失する。坏部は直線的に立ち上がり、上部で内湾し直立気味に立ち上がる。口縁部外面輪積み痕利用の半円形で低い凸帯2条もつ。口唇部ほぼ平坦で内ソギ状尾す。	口縁部ヨコナデ（凸帯部上面工具ナデ？）以下横→斜・横方向のミガキ。内面口縁部横方向のミガキ以下磨滅により不明確。赤彩痕残る。	1/3褒3細粗れき片雲微石英多赤褐色／灰黒色

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	3	－ － 4.5	接合部は円盤状につくられる。脚部は完全に剥離する。坏部は直線的に開く。	外面縦・斜め方向のミガキ↑、内面横・斜め方向のミガキ↑で平滑。	1/2甕2細粗レキ各微無白粒少量赤褐色№5
高坏	4	－ － 5.8	坏部接合部で坏部は深く外傾して立ち上がる。	外面比較的丁寧なヘラミガキ、内面磨滅顕著で詳細不明。	1/4甕2細粗レキ赤褐色
高坏？	5	8 1.3 －	脚部？ほぼ平坦で器肉厚い。	外面縦方向のミガキで赤彩。内面横ナデ後指頭ナデ。	1/20甕1粗れき暗褐色／赤褐色№5
甕底部	6	－ 6 1.3	平底で外周は粘土貼付けか？	底面未調整、内面荒ナデ？	1/5甕1細粗微量黒色／黒褐色
甕	7	14.8 － 17.1	胴部は張りをもち球状で最大径を中位にもつ。頸部ほぼ直立し上位で僅かに外反して開く。口唇部平坦で縄紋施文。	外面横ハケ（口巻～頸部ヨコナデ？）後単節縄紋RL（0段3条、2指、端部圧痕水平明瞭に残る）横位施文（→→↓）4段に亘り以下縦方向のミガキ↑。内面ハケ後胴部くびれ部以下やや粗い横・斜、頸部～口唇部密に横方向のミガキで極平滑。	90%甕1細粗レキ微白粒極微量赤褐色№4

註1　図示したもの以外に甕胴部片7点　壺片2点が出土。甕I　3点、甕I'1点、甕I"2点（1点はLR、0段多条）
壺1　1点（口縁部）、壺2　1点（胴部、第55号竪穴状）

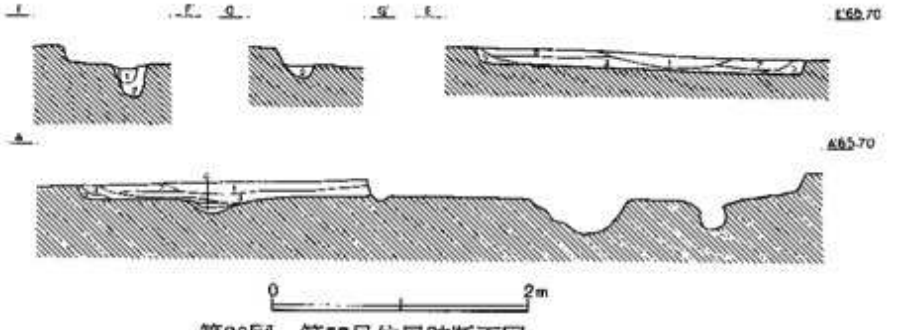
c　弥生時代　第2群

本群はほぼ丘陵頂部に位置し、東西約34m×南北約24mの範囲に収まる。第1群とは28m、第3群とは15mとかなり離れており他とは明確に区別される住居跡群である。第57、59、61、63、64、65号住居跡、第55、58、62号竪穴状遺構及び第84、85、86、87、91、94、96号土壙によって構成される。

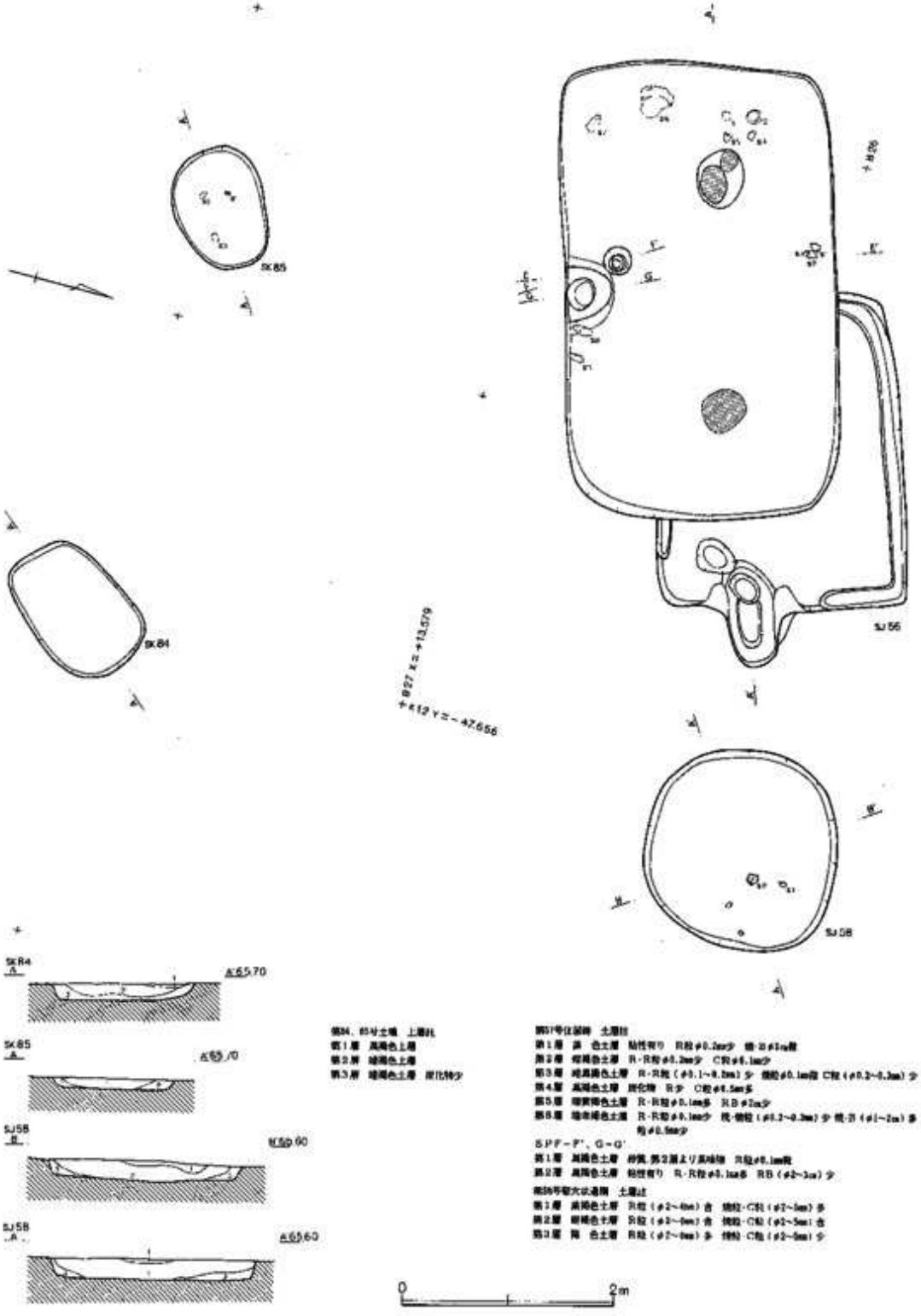
これはさらに南側に配置された東西方向に主軸をもつ第57、59、64号住居跡と北側に配置されほぼ南北方向に主軸を持つ第61、63、65号住居跡の2小群に細分される。いずれもほぼ直線状の配置で、前者は約25m、後者は約20mの距離を持つ。住居跡の規模は特に大形なものはなくほぼ平準化されている。各々は竪穴状遺構、土壙を伴うがこれらの付属施設は概して住居跡群の南側に配置されている。第86号土壙については距離的に離れて単独で存在しその帰属は不明である。

住居跡に付随する竪穴状遺構及び土壙の見かけ上の存在形態は、単独で1軒の住居跡に属する場合と、複数の住居跡に付随する場合との2種類ある。

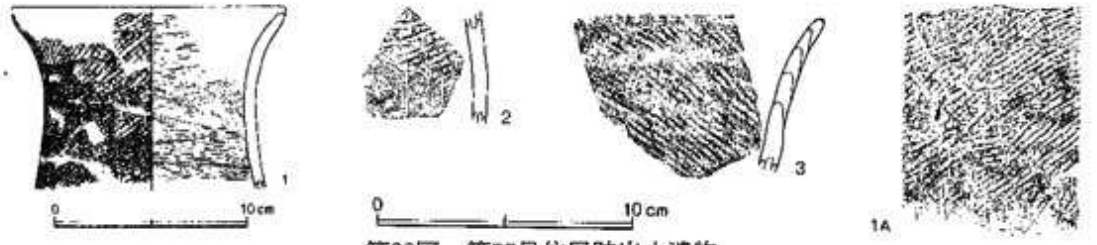
それぞれの住居跡の占有領域の限界が仮に土壙乃至竪穴状遺構によって囲まれる範囲内とすれば、本群ではそれらが重なりあうものが多い。第57、59号住居跡は第58号竪穴状遺構、第63～65号住居跡は第91、94号竪穴状遺構を共有している？ため、住居跡占有領域が重なりあう。



第20図　第57号住居跡断面図



第21図　第57号住居跡、第58号竪穴状遺構、第84、85号土壙平面図



第22図　第57号住居跡出土遺物

第57号住居跡（第21図）

第56号住居跡によって切られている。耕作による攪乱が及ぶ。壁外施設はない。

埋土は暗褐色＋黒褐色の吉ヶ谷式の典型的堆積である。出土遺物の大半は埋土中から出土する。

平面形は、略長方形ないし平行四辺形状で、東、西壁がやや歪む。床はほぼ平坦で、中心部に硬質面が有り、周辺部は柔らかい。第５６号住居跡とほぼ同一レベルの床面である。炉は中央東、西よりに２ヶ所検出され、東側は第５６号住居跡に貼り床される。やや小形でよく焼けている。西側は略楕円形で、東よりも焼けていない。いずれも炉石は伴わない。柱穴は検出されなかったが、南壁下貯蔵穴に接して小ピットが検出された。入口に伴うものと考えられる。貯蔵穴は南壁下ほぼ中央に位置し、ロームを掘り残したごく低い周堤帯を伴う。

掘り方は存在しない。

第５８号竪穴状遺構、第８４号～第８５号土壙が吉ヶ谷式期であり伴うと見られる。第５８号竪穴状遺構は東側約 2.2m、第８４号土壙は南側約 4.3m、第８５号土壙は同じく約2.8m程離れている。土壙長軸は東西方向であり、住居跡とほぼ対応する。

第57号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	14.3 － 9.0	口唇部及び頸部以下を欠失する。頸部ほぼ直立し上部で外反して開く。内面不明瞭な輪積み痕残る。	外面ハケ不明瞭、無節縄紋L（太細の撚り？、２撚？）横位施文（→→↓やや雑）４段に亘る。内面斜ハケ（10本/1.0cm←←^）後やや粗い横・斜方向のミガキ。	70%壺１細粗雲母角多白少黒褐色№２

第57号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
2	壺	壺１角閃石多白粒少量	黒褐色（褐色）黒褐色 頸部。外面縦ハケ後無節縄紋L（太細、末端結束）横位施文後縦方向のミガキ。内部横・斜ハケ後粗い横方向のミガキ。
3	壺２細粗多レキ	赤褐色／黄褐色	口縁部。外面輪積み痕残る（３～４段）外面口唇部から単節縄紋RL（0段3条）横位施文。内面横方向のミガキ。№１。風化により摩滅顕著。

註１　図示したもの以外に壺３個体分（壺１ｅ極微量１点、壺１細粗レキ３点、壺１３点）出土している。

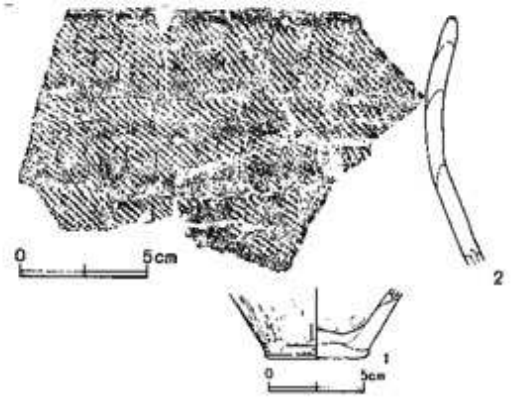
第58号竪穴状遺構

略円形の吉ケ谷式期に典型的な黒褐色土の落ち込みとして確認された。僅かに第57号住居跡に近い。第57、59号住居跡との間に特に遺構の存在は認められなかった。

掘り込みはやや深く出土遺物はいずれも埋土中の出土である。

第58号竪穴状遺構出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	－ 5.5 3.6	接合しないが同一個体と見られる。底部は平底でやや凸出気味で厚い。胴部は張りをもち最大径は中位か？頸部ほぼ直立し僅かに外反して開き口唇部尖り気味、縄紋施文（同一個体、右回転）。外面輪積み痕は不明瞭。	底面ナデ。外面下胴部斜ハケ後横→縦方向のミガキ底部外周若干のナデ加わる。口唇下ヨコナデ以下単節縄紋RL（0段3条、3指、末端結束）横位施文（→→。）で現3段に亘たる。内面口唇下ヨコナデ以下斜ハケ後頸部横方向、以下横・斜方向のミガキ。	1/3甕2黄褐色／赤褐色、赤褐色№1＋2



註1　図示したもの以外に甕胴部片7点、壺片2点が出土。
甕1　3点、甕1'1点、甕1"　2点（1点はLR、0段多条）
壺1　1点（口縁部）、壺2　1点（胴部、第55号竪穴状遺構出土片と接合）
註2　胎土は以下のとおりである。
甕1'甕1に近似しc多量、甕1"　甕1に近似しc大量
壺1　甕1'に近似し細粗（少量）、壺2　甕3に近似しf多量細粗礫（多量）

第23図　第58号竪穴状遺構出土遺物

第84号土壙（第21図）

不整長方形乃至楕円形の落ち込みとして確認された。埋土中から条痕文土器を出土したが、埋土の状態から吉ケ谷式期と判断した。第57号住居跡とは約4.3mと距離がある。主軸方向は第85号土壙とほぼ等しい。

第85号土壙（第21図）

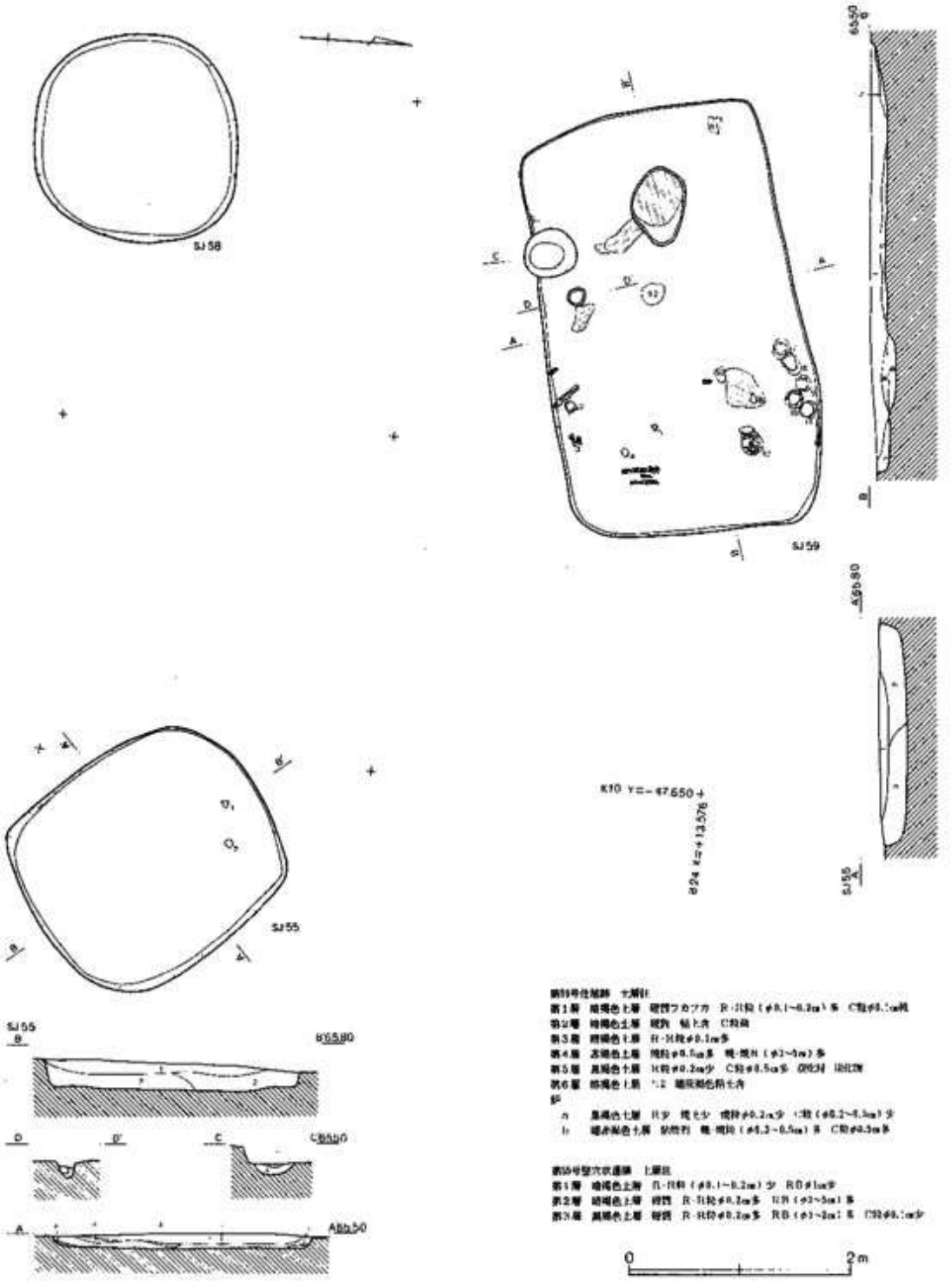
楕円形の吉ケ谷式期に特徴的な黒褐色土の落ち込みとして確認された。掘り込みは浅く出土遺物は全て埋土中である。第85号土壙とは約2.9mの距離をおく。

第59号住居跡（第24図）

試掘トレンチによって西壁が切られていたため西壁部分は不明瞭であった。南壁西よりのピット状の凸出は伴うものである。他に壁外施設は認められなかった。

埋土はそれ程残っていないが典型的な吉ヶ谷式期の推積である。東半部から炭化材、焼土が多量に出土する（埋土中が大半で床直は少ない）。出土遺物は東半部からやや多量に出土（特に北東隅）する。

平面形は東壁が歪む長方形あるいは台形。壁は東壁がはっきりしないが、他はほぼ直立する。床面はほぼ平坦で全体に堅緻。（特に炉～中央部）東壁下はやや傾斜する。炉は西壁よりほぼ中央で略楕円形。（中心部円形で、手前に凸出するという構造？）凸出部にあるいは炉石を配置したか？（あまり焼けていない。）中央よりにやや浮いていて河原石が出土している。炉の北側に黒色土が分布するが？掘り方はないようである。貯蔵穴は南壁西寄りのピットこ考えられる。周堤帯はなく掘り込みは浅い。柱穴、壁溝等は検出されなかったが、南壁、貯蔵穴よりに小ピットが存在する。掘り方はなく浅い。入口施設と思われ、主軸に直交する。生活段階に伴う遺物は北壁下東隅の床面



第24図　第59号住居跡、第55、58号竪穴状遺物平面図

にほぼ接して出土した５個体の甕？はやや浮いているが伴うか？

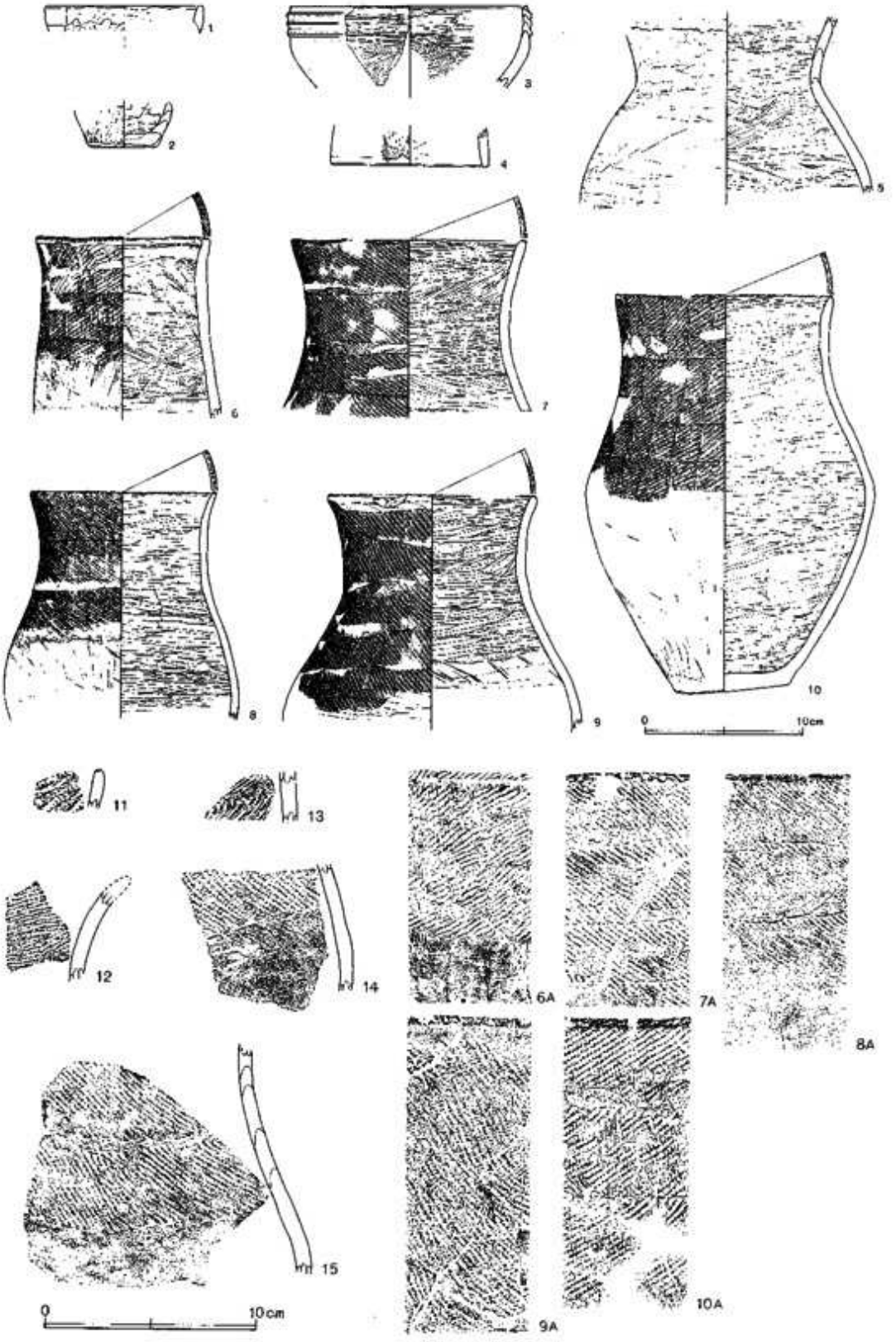
掘り方はないと考える。ロームブロックまじりの黒色土の分布もない。

第５５号、５８号竪穴状遺構が南側のやや離れた位置に存在するが、住居跡に伴う施設かどうか判

断し難い。壁外土壙の距離は約　m程であり、住居範囲内とすると、第５５号、５６号竪穴状遺構はかなり離れている。

第59号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形鉢	1	9.8 － 1.7	口縁部のみ残存。やや内頸気味で口唇部はほぼ平坦。	口縁部内外面横ナデ。	1/5褐２白粒少量黒褐色／黄褐色
小形鉢	2	－ 4.3 2.7	底部は僅かに上げ底で周縁部凸状。体部は外傾して立ち上がり、内面輪積み痕残る。	底面ナデ？外周未調整体部外面縦ハケ（4本/0.5cm）後粗いミガキ乃至ナデ。内面横ハケ後指頭ナデ。	1/2褐２白粒少量赤褐色№１
高坏	3	15.0 － 5.2	体部は内湾して立ち上がり上部でほぼ直立する。外面輪積み痕利用の低凸帯３条有す。口唇部平坦で僅かに内ソギ状。器内口縁部に向かって次第に薄くなる。	外面凸帯上下横方向のミガキ、以下縦斜方向のミガキ。凸体上部工具ナデ後ヨコナデで下面密着しない。内面ハケ乃至筆ナデ後横・斜方向のミガキ。凸帯部分以外は赤彩される。	10%高坏１極精緻赤褐色（褐色）赤褐色
高坏脚部？	4	－ 9.8 2.5	ほぼ直線的に開き端部は平坦面をなす。	外面縦方向のミガキ、内面筆ナデ（→）？	1/20褐２白粒少量赤褐色
壺	5	－ － 11.2	胴部は張りをもち内面緩い稜をなしそのまま頸部に移行、緩く外反して開く。頸部外面一部輪積み痕残る。	外面胴部斜ハケ？後粗い横方向のミガキ、頸部粗い縦・斜方向の指頭ナデで一部強い。一部櫛描文の痕跡？内面筆ナデ？後粗い横方向のミガキ、頸部はやや丁寧。	90%高坏１細多量黄褐色／淡褐色、暗褐色№10。外面炭化物付着、黒斑あり。
小形甕	6	10.9 － 11.4	胴部以下を欠失する。張りのない胴部から頸部は直立し上位で僅かに外傾して開き、口唇部やや外ソギ状で縄紋施文、内面段をなす。輪積み痕ほとんど残らない。	外面斜ハケ（4本/0.5cm←←）口縁下巾狭ヨコナデ後口唇部（右回り）から無節縄紋L（２指？）横位施文（→→↓）４～５段に亘り以下縦方向のミガキ。内面木口状工具で段を造出し以下やや粗い横・斜ハケ（←←同一工具）後粗いミガキ（頸部以下横、以上縦・横方向）。	90%甕１細粗雲母白粒微赤褐色／黄褐色№６・９
甕	7	14.5 － 11.1	胴部以下を欠失する。胴部はそれほど張らず最大径を中位にもち緩やかに頸部に移行しほぼ直立する。上位で緩く外反し口唇部ほぼ平坦で内面下やや内ソギ状、縄紋施文。	外面胴部ハケ後口唇部（右回り）から単節縄紋RL（0段3条、２～３指末端結束）横位施文（→→↓端部圧痕明瞭に残り開始点からずれて終点となる）４段？に亘り以下筆ミガキ。内面斜ハケ（→←）後丁寧な横方向のミガキで平滑。	80%甕１細粗雲母微白粒少量赤褐色№１０＋１１。外面炭化物、スス付着。
甕	8	11.5 － 14.3	胴部以下を欠失する。最大径を中位にもち球形状呈す。頸部は直立し上位で緩く僅かに外反して開く。口唇部平坦で縄紋施文。	外面斜めハケ後口唇部（右回り）から単節縄紋RL（0段3条、太細の撚り？付加条気味、２指、末端結束）横位施文（→→↓端部圧痕残る）３段に亘り以下筆ミガキ。内面ハケ後横方向のミガキ（→←）で平滑。	90%甕１粗雲母やや多白粒少赤褐色／黄褐色№５＋７。外面頸部以上スス付着。加熱により脆弱、摩滅顕著。
甕	9	12.8 － 14.8	胴部は張りをもち最大径は中位～上位？。頸部は直立し上位で緩く外反して開く。外面輪積み痕不明瞭、内面下胴部一部残る。口唇下外面直立気味で先端部は平坦で縄紋施文（同一原体、左回転？）。	下胴部斜ハケ？、口唇下ヨコナデ→以下頸部は単節縄紋RL（0段3条、2指、末端未処理）横位施文（→→↓）で５段に亘たる以下ミガキ。内面口唇下ヨコナデ以下斜ハケ後全面横・斜方向ミガキ。	80%甕２白粒微量赤褐色／黄褐色、赤褐色№８。外面頸部炭化物付着。加熱される。
甕	10	13.0 7.2 24.7	底部は平底で圧痕残る。胴部は長胴形呈し、最大径をほぼ中位にもつ。頸部は直立し上位で緩く外反して開く。外面輪積み痕不明瞭。口唇下外面直立気味で先端部は平坦縄紋施文（同一原体左回転）内面下緩い稜をなす。	底面若干のナデ？外面下胴部斜ハケ、口唇下ヨコナデ以下単節縄紋LR（0.2～0.25/0.3～0.35、３指、末端結束）横位施文（→→↓）で３段に亘たる以下最大径付近横以下縦方向ミガキ。内面口唇下ヨコナデ胴部斜ハケ後斜・横方向、頸部横方向（→←）の粗いミガキで平滑。	80%甕２赤褐色№１２。外面頸部炭化物付着。摩滅顕著



第25図　第59号住居跡出土遺物

第26図　第55号竪穴状遺構出土遺物

第59号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
11	甕1	褐色／暗褐色	甕口縁部。外面単節縄紋LR（0段多条？太細の撚り？）横位施文、11 底部同一個体。内面ミガキ。№3
12	甕1白粒少量赤粒多	暗褐色	甕口縁部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文、内面横斜めハケ後ミガキ。
13	甕1赤粒多量	暗赤褐色／茶褐色	甕胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文、内面斜ハケ後粗いミガキ
14	甕1"	赤褐色	甕胴部。単節縄紋RL（0段3条、末端結束）横位施文（→）以下ミガキ。内面ハケ後ミガキ
15	甕2	赤褐色／黄褐色	甕胴部。外面単節縄紋RL（0段3条、3指、末端結束）横位施文（←←↓）以下横方向のミガキ。内面ハケ後横方向のミガキ。№2

註1　図示した以外に甕胴部片32点そのうち縄紋あるもの10点（RL6、LR4）、壺片1点が出土している。
　　甕1　13（RL2）、甕1'5、甕1" 9、甕2　5（RL1）、甕3　（RL3LR4）
　　壺1　1（細粗、c多量）
註2　胎土は以下のとおりである。
　　甕3　a～e少量、f多量で目立つ、細 高坏1　甕1とほぼ同じ、細

第55号竪穴状遺構（第24図）

隅円長方形の吉ケ谷式に典型的な黒褐色土の落ち込みとして確認された。第54号住居跡によって切られている。掘り込みは深く埋土の保存状態は良好であるが出土遺物は少量。いづれも下層から出土している。床面付近まで第54号住居跡による撹乱が及ぶ。

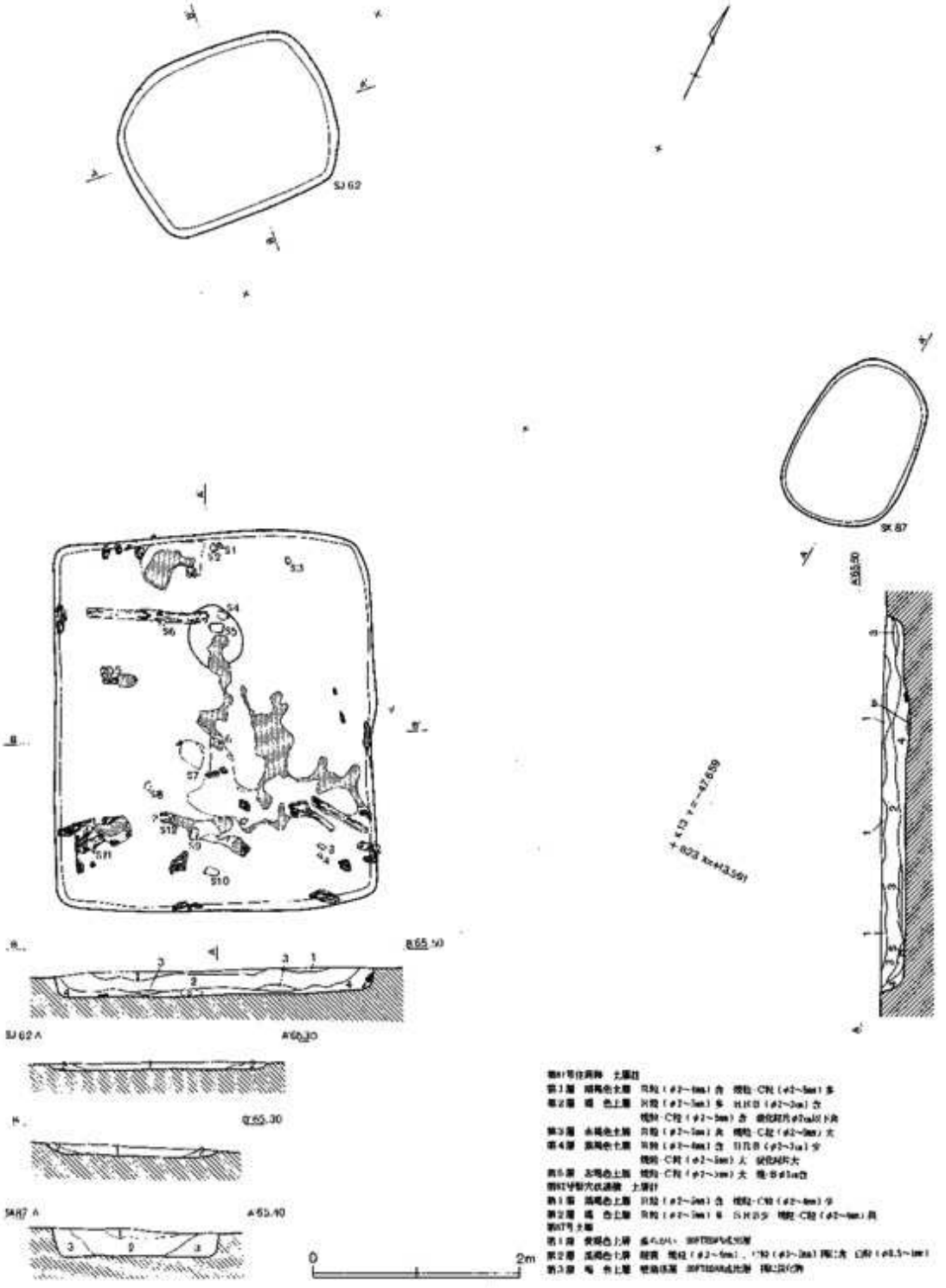
第59号住居跡とは主軸方向がほぼ直角に交わり、約3.7mとやや離れている。第58号竪穴状遺構とは約4.3m離れている。

第55号竪穴状遺構出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形甕	1	·· 4 1.4	底部は小形で器肉厚い。焼成前下面から穿孔する（径1.0cm）。	底面未調整。外面ミガキ後外周指頭ナデ。内面指頭ナデ後粗いミガキ。	1/2甕1白粒少量黒色／淡褐色、淡褐色外面黒斑あり
甕底部	2	· 7.2 1.2	平底で器肉厚い。	底面ナデか？内外面磨滅顕著で詳細不明。	1/3甕2粗多量暗褐色、暗黄褐色
鉢	3	11.7 6.0 6.1	底面ほぼ平坦で器肉厚くやや凸出気味。体部は内湾して立ち上がる。口縁部丸く収まる。	底面指頭ナデ。口縁部下ヨコナデ後体部外面縦方向のナデで縦→横方向の粗いミガキ加わる。内面粗いミガキ。	1/3甕2白粒赤粒少量赤褐色／淡褐色、赤褐色№1

第55号竪穴状遺構出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
4	甕1	黒色（褐色）暗褐色	甕胴部。外面横ハケ後縄紋LR（0段多条太細の撚り？）横位施文。内面ミガキ。
5	甕1	黒褐色(暗褐色)暗褐色	甕胴部。外面無節？縄紋L横位施文。内面ハケ後ミガキ。
6	甕1	暗赤褐色（淡褐色）暗褐色	甕胴部。外面横ハケ後単節縄紋LR（0段多条）横位施文。内面斜ハケ後ミガキ。
7	甕1"	黒色（黒色）黄褐色	甕胴部。外面単節縄紋LR（0段3条？）横位施文雑。内面ミガキ。



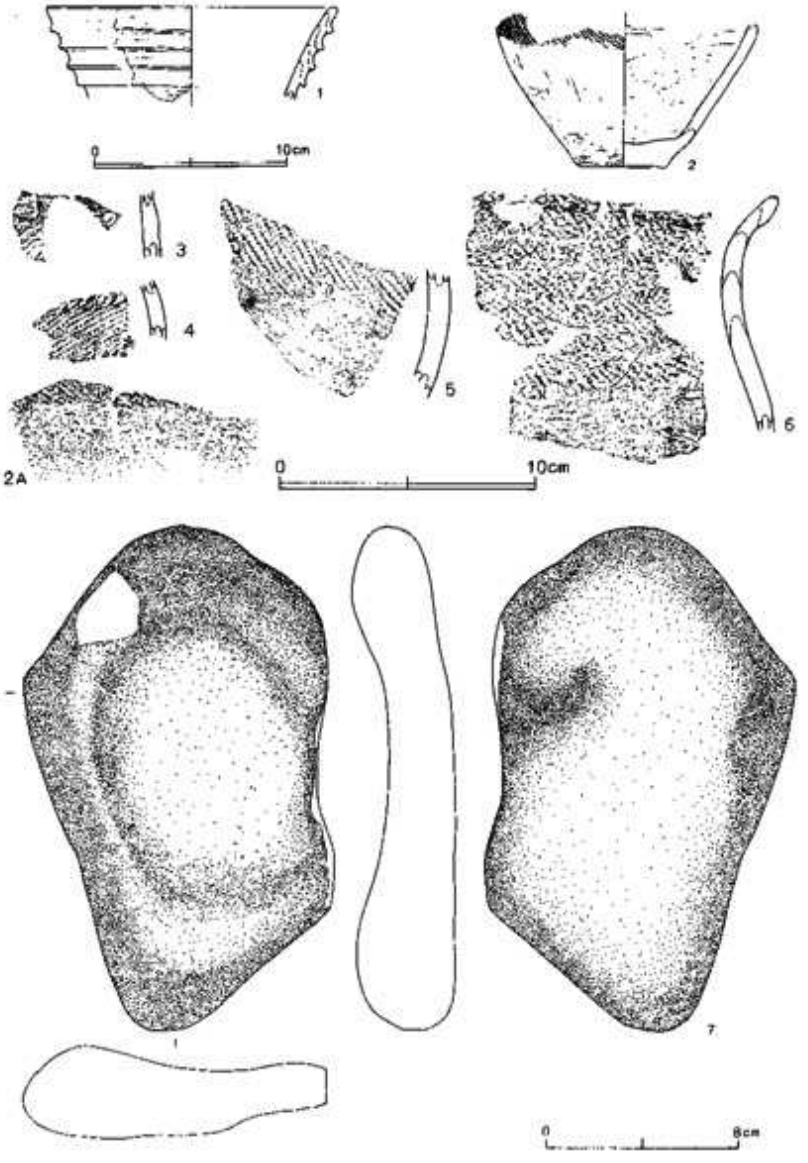
第27図　第61号住居跡、第62号竪穴状遺構、第87号土壙平面図

註1　図示した以外に甕胴部片10点（そのうち縄紋あるもの6（RL2、LR4）、壺胴部片1点が出土している。
　　甕1　7（RL2、LR2）、甕1"（LR2）、甕2　1、甕3　1
　　壺1'1（第58号竪穴状遺構出土片と接合）
註2　壺1'は甕1'にほぼ同じ、細粗、各多量含む。

第61号住居跡（第27図）

確認段階ですでに多量の焼土を検出したが住居跡外に焼土あるいは炭化材、炭化物は検出されなかった。

埋土中の炭化材が4層中に集中し比較的残りが良い。材は北東方向に向かって崩れたかの印象を受ける。3層は4層材の熱によって赤化した土と思われるが、周縁部に多いことと埋め戻し土（2層）とは、明確な線が引けることより、或いは屋根上にのっていた土かも知れない。5層の焼土は生活段階に伴う燃焼部炭と思われる。出土遺物は比較的少なく、大部分が埋土中出土。



第28図　第61号住居跡出土遺物

平面形は長方形で長短の差は少なくよく整っている。壁はわずかに傾斜をもつが、東壁北半部はやや傾きが大きい。床面はほぼ平坦で全体に堅緻である。西半部、南、北壁下に若干のロームブロックまじりの黒色土が分布する。炉は北壁よりほぼ中央で、楕円形を呈する。よく焼けており、炉石はない。（北側に石を検出したがこれが炉石であった可能性がある。）柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。（中央に磨石？がやや浮いた状態で出土している。）

炭化材が東西壁下から多量に検出され、中央部を中心に焼土が検出された。床はそれ程焼けていない。炭化材の配置からすると、

上屋は寄せ棟２段構造か？　掘り方は存在せずローム直上が床面である。柱穴とするだけの根拠は見出せないが、生活段階で３ヶ所浅いピットが検出された。第62号竪穴状遺構が北側にやや離れて存在するが、伴うかどうか不明。

第61号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺口縁部	1	15 ‥ 4.8	外面輪積み痕利用した４段の凸帯、断面三角形状。口唇部僅かに内ソギ状	外面凸帯上面工具ナデ？内面ミガキ。内外陶とも赤彩される。	1/10。壺２。赤褐色（黄褐色）赤褐色。内面剥離顕著。
小形甕	2	ー 4.4 7.4	底部は平底やや凸出気味で胴部は僅かに内湾して立ち上がり、最大径は中位？	底面ケズリ後若干のナデで切り離し痕残る。外周水調整部分の残るナデ。胴部縦・斜方向のハケ後上部単節縄紋RL（0段多条太細の撚りで付加条気味）横位施文、以下縦方向のミガキ。内面比較的丁寧な横・斜方向のミガキ。	90%甕３赤褐色、暗黄褐色／黒色 №５外面底部周縁炭化物付着加熱により一部剥離内面黒斑

第61号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
3	甕１白粒少量	黒色／浅褐色	甕胴部。外面櫛描文は擬状文（→→）の後波状文（5本/巾1.0cm）。内面横方向のミガキ。
4	甕１	黒褐色（褐色）茶褐色	甕胴部。外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文（←←↓）。内面粗いミガキ。
5	甕２	灰黒色(黄褐色)黄褐色	甕胴部。外面斜ハケ後単節縄紋LR（0段多条、末端結束？）横位施文（→→↓）以下ミガキ。内面木口状工具によるナデ（←←↑）№２
6	甕１	黒褐色、黒色／暗褐色	甕胴部は強く張り、最大径を中位～上位にもつと見られる。頸部はやや内傾して立ち上がり上部で緩く外反して開く。口唇部は丸く収まり縄紋施文（同一原体左回転）。外面口唇下輪積み痕残る。外面胴部斜ハケ、口唇下ヨコナデ後頸部単節縄紋RL（0段3条、２指）横位施文（←←↓やや雑）以下やや粗いミガキ。内面口唇下ヨコナデ後横方向のミガキ。№１。
7			石皿、5.4Kg

註１　図示したもの以外に甕胴部片２点、壺胴部６点が出土。
　　甕１　２
　　壺２　４（２個体分）、壺３　２(1個体分)
註２　壺３は甕３に近似するが粒度は小さい。

第62号竪穴状遺構（第27図）

略長方形で吉ケ谷式期に典型的な黒褐色土の落ち込みとして確認された。第61号住居跡の北側約2.8mに位置するが、その間に何らかの遺構の痕跡は認められなかった。掘り込みは浅く、出土遺物はない。主軸方向は住居跡のそれと直交気味である。

第87号土壙（第27図）

楕円形で第61号住居跡とは約4.1mと距離がある。掘り込みは深く、埋土は縄紋の土壙のそれに類似する。

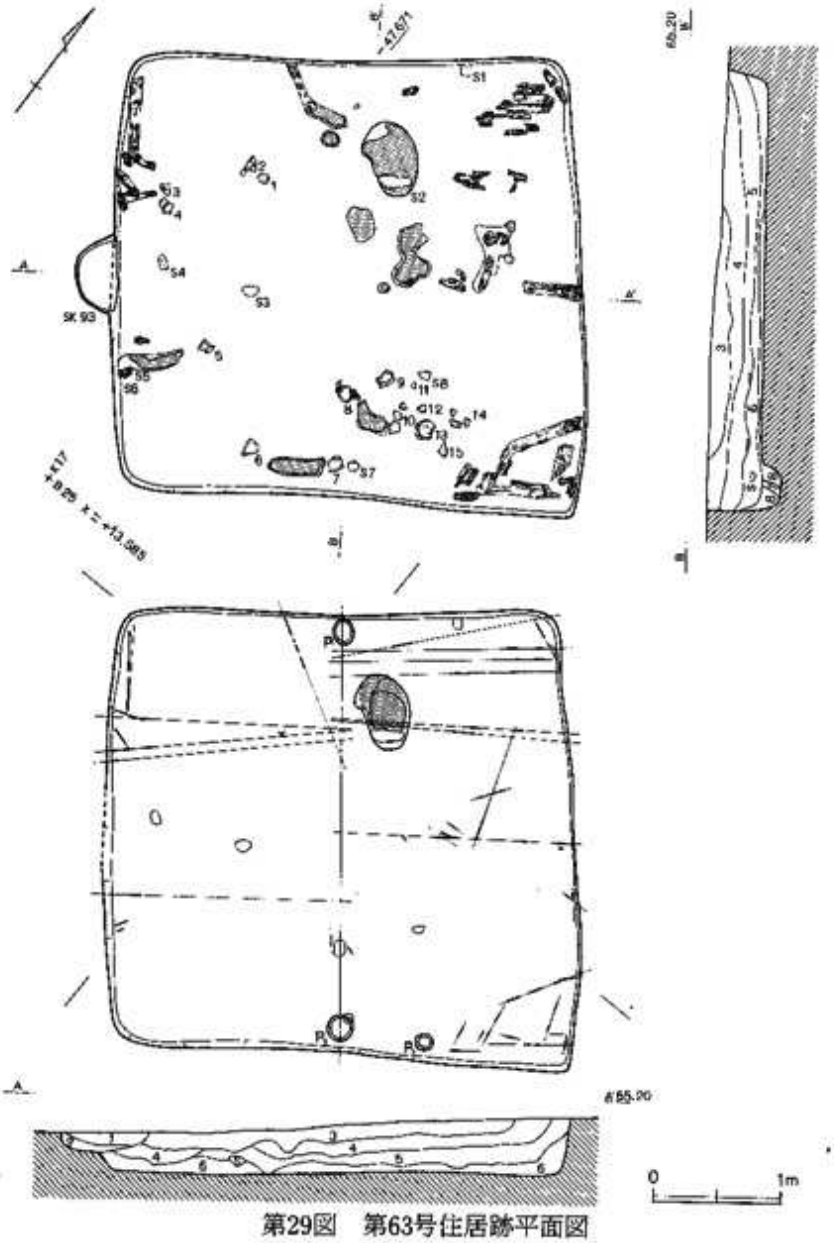
第63号住居跡（第28、29図）

第92号、93号土壙によって切られるが確認段階では把握できなかった。壁外のわずかな範囲に炭化物の分布が認められた。

埋土はよく残っており第61号住居跡と近似する。

出土遺物は比較的多いが、大部分が埋土中からの出土である。

焼土層は炉の南側に集中するが、周辺部でも薄く推積している。炭化材は東半部に多いが、西壁下



第29図　第63号住居跡平面図

では比較的しっかりしたものが残る。南東隅は特に厚く、集中している。

平面形は東壁が斜行する略方形状であるが、詳細にみると（第３０図下）主軸を中心として南北壁がわずかに斜行する、いわゆる線対象の平面形である。東西壁は僅かに湾曲する。壁はほぼ直立し、掘り込みは深い。

床はほぼ平坦で全体に堅緻である。床周縁部にロームブロック混じりの黒色土が分布する。

炉は北壁寄りほぼ中央（Ｐ１Ｐ３を結ぶ中軸線から東側にややずれる）に位置し、手前に炉石が主軸に直交するように据え置かれており内側はよく焼けている。長径0.55m、短径0.37mの楕円形。

壁溝、貯蔵穴は検出できなかった。

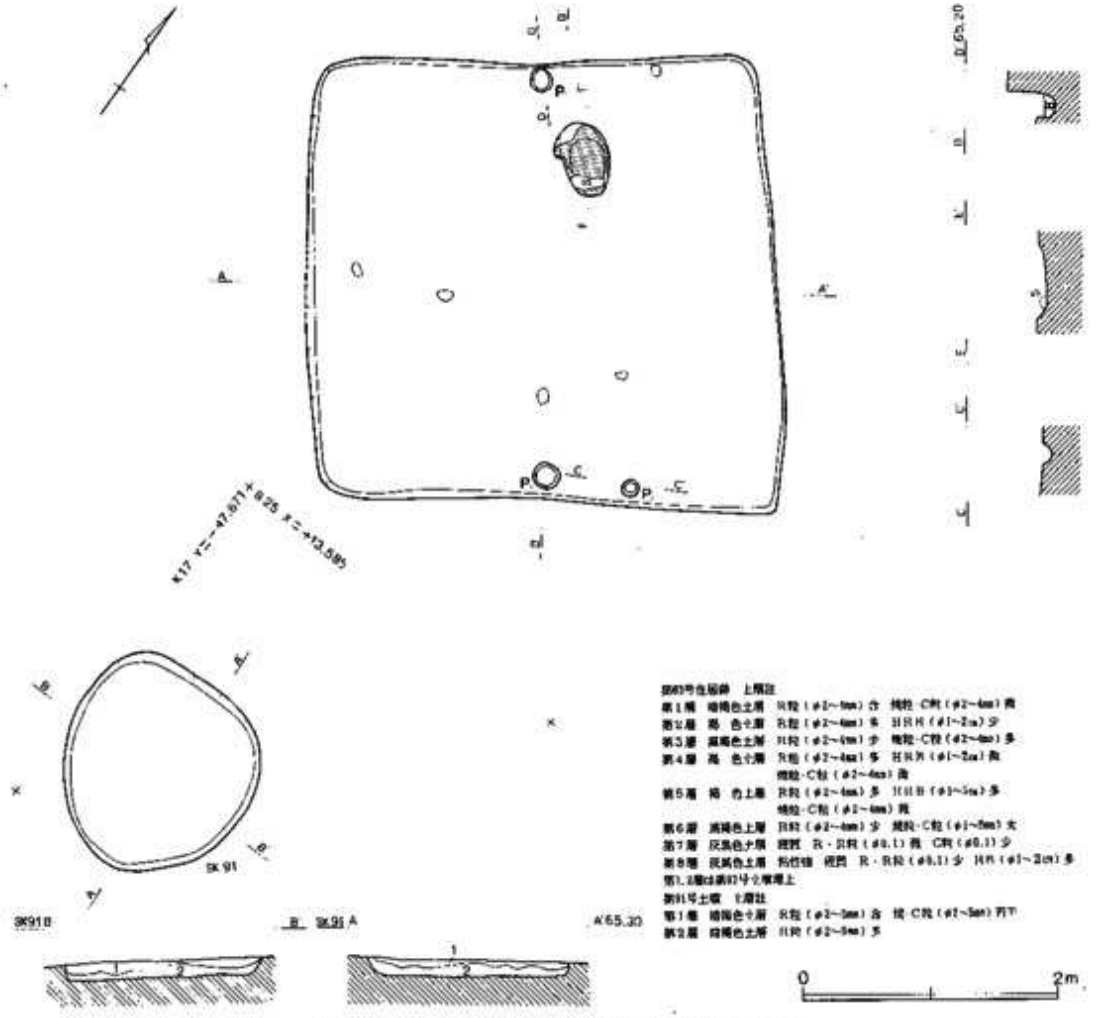
３ヶ所に浅いピットが認められた。Ｐ３は中央部に細い柱痕？が認められたが、伴うかどうか確証がない 。Ｐ１Ｐ３＝3.10m、Ｐ３Ｐ２＝0.66mを測り、それぞれの直径はＰ１＝0.1m、Ｐ２＝0.15m、Ｐ３＝0.21mである。

生活段階に伴う遺物はほとんどない。

掘り方は存在せず、床はローム直上である。

床直上の黒色土は断ち割ると凹凸面となり単なる生活時の痕跡とみられる。

３ヶ所の小ピットは一様にごく浅いもので、Ｐ３については入り口施設に伴うものか、あるいは



第30図　第63号住居跡、第91号土壙平面図

Ｐ１との対応関係を考慮すると棟柱痕とも考えられる。

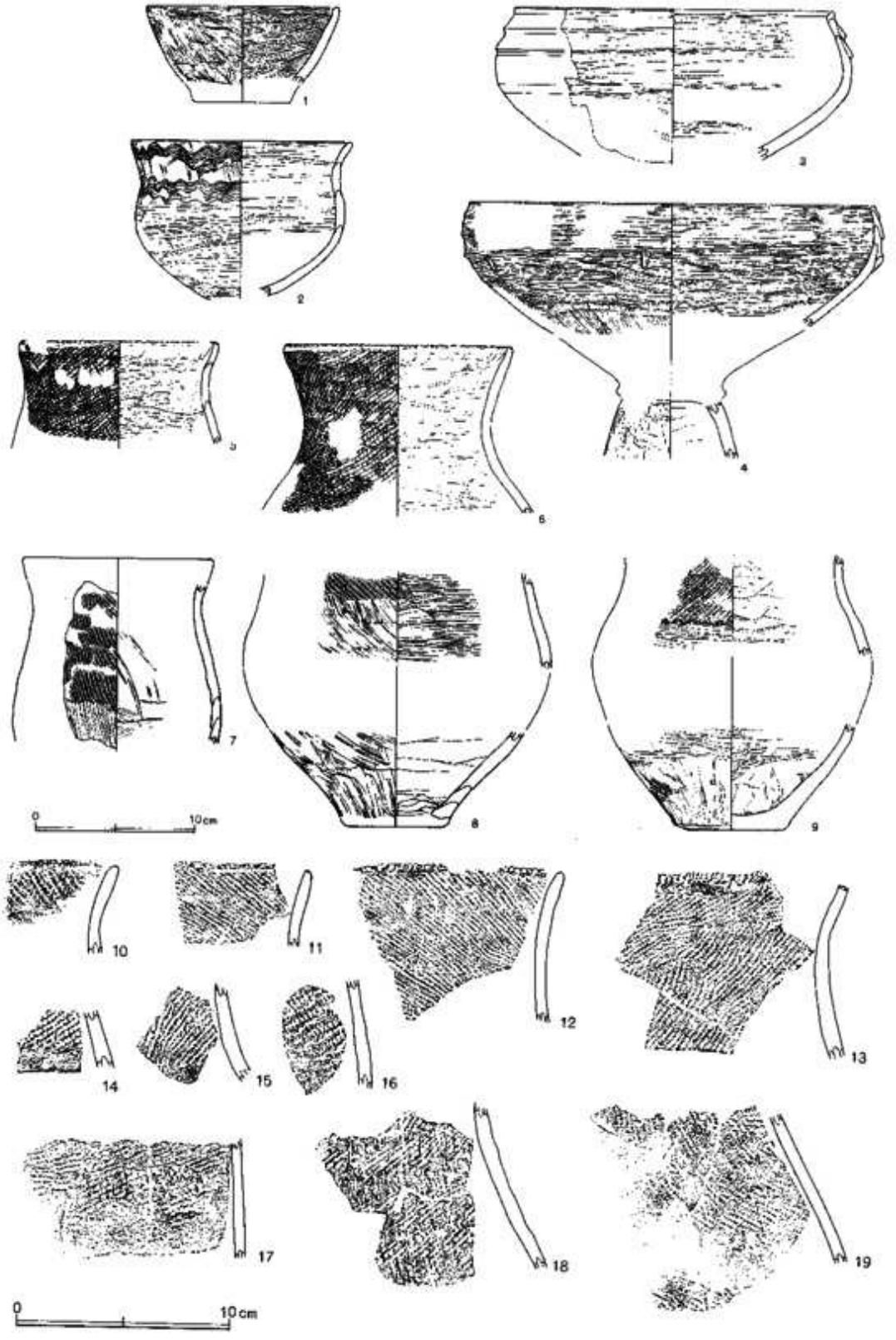
後者についてはピットに接する壁がこの部分で「く」字状に折れることをみると更に妥当性をもつものである。むしろ中軸線からややずれた位置に存在するＰ２が入り口施設に関係する可能性が高い。

第３０図下の平面図上にはピットと共に主な石の出土位置を示した。これをみるとＳ１は北西壁下の比較的床面近くで出土しており、さらにＰ２とほぼ対応する位置にある。その他の石についてはピットとの位置関係は不明瞭で、相互の位置関係についても同様に不明瞭である。

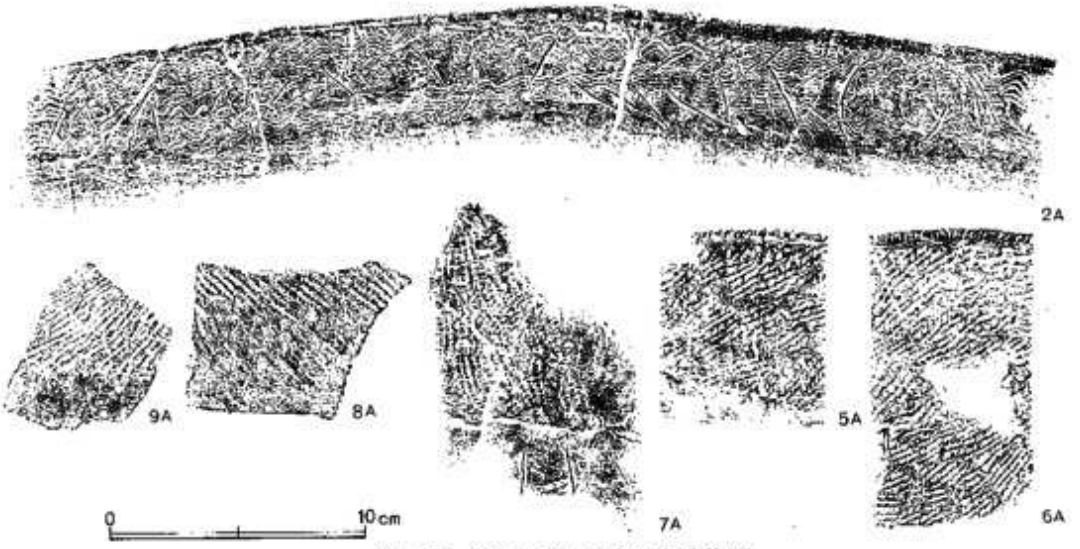
同図の実線部分は炭化材の方向を示したもので、同一方向のものを直線で結んだものである。Ｐ１Ｐ３を結ぶ住居跡のほぼ中軸線に直行するように、主に壁際に炭化材が存在している。住居跡中心部の分布は比較的薄く、炉の周辺には焼土が分布している。

中軸線に直交するものばかりでなく平行するものもあり、北西壁下と南東壁東隅に顕著である。

上屋構造について俄かに判断し難いが、炭化材の残存状況からすると切り妻か？



第31図　第63号住居跡出土遺物(1)



第32図　第63号住居跡出土遺物(2)

炭化材の分布は住居跡の外側では全く認められず、上述のように僅かな炭化物、炭化粒子が外側の極く狭い範囲で認められたにすぎない。

壁材の存在については精査にもかかわらず、土層断面等で確認できなかった。

第91号土壙が本住居跡対角線上、南隅から南側へ約1.7m、第64号住居跡とのほぼ中間に存在する。

第63号、64号住居跡のどちらに伴うか判断が難しい。すなわち第64号住居跡の対角線上にも位置しており同住居跡北東隅から約1.7mとほぼ同距離である。

このような土壙と住居跡との位置関係は、第４群の第112号土壙と第80、82、83号住居跡との関係に類似している。

第63号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	12.0 － 4.8	体部は内湾して立ち上がり口唇部は丸く収まる。内面口唇下僅かに凹む。	内外面とも横・斜ハケ後丁寧なミガキで、外面縦方向、内面横・斜方向平滑。	1/4 塁 2 赤褐色 №3
高坏	2	13.8 － 9.9	体部は最大径を上部にもち口径とほぼ等しい。最大径下で緩い稜をなす。屈曲して口縁部に移行しほぼ直立するが、上半部で僅かに開く。口唇部は丸く収まる。脚部を欠失する。	体部下半斜上半横ハケ後丁寧なミガキ、口縁部上部ヨコナデ以下縦ハケ？後２段（*）の櫛描波状文（7本/1cm、波長短く振幅大きい、左回り）内面横方向のハケ？後比較的丁寧なミガキ（磨滅顕著）。内外面の一部赤彩痕跡あり。	90%塁 2 暗褐色／橙褐色、赤褐色 №6＋7＋9＋1 1内外面一部炭化物付着加熱受ける
高坏	3	19.8 － 9.2	体部は内湾して立ち上がり上部で緩い稜をなす。口縁部強く内湾し外面輪積み痕利用の低い２状の凸帯をもつ。口唇部小さく直立し僅かに内ソギ状で内面稜をなす。	体部斜ハケ後稜以下斜・縦以上横方向の丁寧なミガキ、凸帯ヨコナデ後粗いミガキ。内面極丁寧な横方向のミガキ。凸帯付近除き赤彩の痕跡あり。	1/5 塁 3 暗褐色（黄褐色）暗褐色 №1 内外面とも摩滅顕著
高坏	4	25.4 －－	体部は内湾気味に大きく開き湾曲して口縁部に移行する。外面３条の低い	外面体部は斜・横ハケ後、上部横下部縦方向の丁寧なミガキ、口縁部木口状工具ナ	1/3 塁 2 近似　細多量赤褐色（淡褐

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
		15.9	凸帯をもち最下段は粘土貼付けで他は輪積み痕利用。最下段凸帯下に縦長のコブ貼付け（2ヶ所）。口唇部外面僅かに凸出し内ソギ状で内面稜をなす。細い脚部は接合しないが同一個体とみられる。	デ？後横方向のミガキ。内面口縁部ヨコナデ（ハケ不明）後丁寧な横方向のミガキ。脚部外面丁寧なミガキ、内面ナデ？坏部内外面脚部外面赤彩痕残る。	色）黒褐色№5＋6＋床下出土、SJ61出土片接合しないが同一個体
甕	5	12.2 － 6.4	口縁部と胴部は接合しないが同一個体とみられる。胴部はあまり張りをもたず中位に最大径をもつか？頸部上部で内湾気味に開く。口唇部直立し端部箆刻み（右回り）施す。内面口唇部下緩い段をなす。輪積み痕残る。	外面口唇部下ヨコナデ（←）以下無節縄紋L（太細の撚り、2指）横位施文（→→↓）で4段？に亘たり以下横方向のミガキ。内面口唇下ヨコナデ以下斜ハケ後粗い横・斜ミガキ。	1/3甕1黒褐色／暗褐色内外面黒斑あり
甕	6	14 － 10.4	胴部は大きく張るとみられ、頸部は内傾し中位で大きく外反して開く。口唇部直立気味で内面凹み緩い段をなし端部は平坦で平行工具による刻みを施す。	口唇下ヨコナデ以下無節縄紋L（太細の撚り、3指）横位施文（→→↓粗い）で現3段に亘たる。	80%甕1黒褐色（褐色）黒褐色№10、SJ64出土№1、2と接合
甕	7	11.8 － 10	口縁部は接合しない。胴部は張りをもち最大径を中位～上位にもつ。頸部は内傾して立ち上がり上部で緩く外反し口唇部丸く収まる。内面輪積み痕部分的に残る。	外面胴部斜ハケ、口唇下ヨコナデ後以下単節縄紋RL（0段多条、2～3指）横位施文（→→。粗雑）で2～3段に亘たり以下粗い縦方向のミガキ。内面口唇下ヨコナデ以下縦・斜ハケ後粗いミガキ。	1/2甕1白粒角閃少減褐色№10＋12＋14外面黒斑あり
甕	8	－ 6.6 －	底面を欠失する。剥離面によると粘土紐輪積み。頸部は接合しないが同一個体とみられる。	外面下胴部縦・斜ハケ（4本/0.5cm）後粗いミガキ。頸部単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→）。内面底部周縁筒乃至指頭ナデ以上やや粗い横方向のミガキ。	1/4甕2暗黄褐色／赤褐色№4。内外面とも摩滅顕著
甕	9	－ 6.9 －	底部は平底でやや大形、胴部は張りをもち頸部は接合しないが同一個体とみられる。	底面未調整部分の残るナデ。外面胴部縦→斜ハケ（9本/1cm）後底部外周粗いミガキ以上比較的丁寧なミガキ。頸部単節縄紋LR（太細の撚り合わせ？付加条気味、2指、末端結束）横位施文（←←。）後横方向のミガキ。内面底部付近ハケ後若干の指頭ナデ、以上横方向のミガキ頸部は指頭ナデ加わる。	1/3甕2暗黄褐色、赤褐色№8

第63号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
10	甕1	暗黄褐色	甕口縁部。単節縄紋RL（0段多条、太細の撚り）内面ミガキ。
11	甕1細粒微	暗褐色	甕口縁部。単節縄紋RL（0段多条）、口唇部同一原体？内面横筒ミガキ。
12	甕1	黒褐色、暗褐色	甕口縁部。外面口唇下ヨコナデ、口唇部（右回り）から単節縄紋RL（0段多条、2指）横位施文（→→↓）。内面やや粗い横方向のミガキ（→→）。外面炭化物付着。
13	甕2	暗黄褐色、赤褐色	甕頸部上部は内湾気味に開く。外面口唇下ヨコナデ（←）、口唇部（同一原体左回り）から単節縄紋LR（0段多条、1～2指）横位施文（→→↓やや粗）4段に亘る。内面口唇下ヨコナデ以下横・斜ハケ後粗い横・斜方向のミガキ。№10。
14	甕1白粒少量	暗褐色、赤褐色	甕胴部。外面横方向のハケ後単節縄紋LR（0段多条、末端結束）横位施文（→→）以下ミガキ？。内面横方向のミガキ。
15	甕2	暗褐色	甕頸部。単節縄紋LR（0段多条、付加条気味で5に近似）横位施文以下ミガキ。内面ミガキ。
16	甕1	淡褐色	甕胴部。外面縦方向のハケ後単節縄紋RL？（0段多条）横位施文（→→

番号	胎土	色調	備考
			↓)。内面ミガキ。
17	甕1	暗赤褐色／黒褐色	後胴部。無節縄紋L（太細の撚り？）以下ミガキ。内面ハケ後ミガキ。
18	甕1白粒少量	黒褐色、暗黄褐色	甕頸部。外面縦ハケ（9本／1cm→↑）後無節縄紋L（太細の撚り、2指、末端未処理）粗く横位施文（→→↓）で環5段に直たり以下ミガキ？。内面上部ヨコナデ以下斜ハケ後粗い横方向のミガキ。床下出土片接合。
19	甕1白粒少量	赤褐色	小形壺。頸部は強く内傾して立ち上がり、最大径は中位か？。3段の帯縄紋帯をもち最上段は幅広い。外面斜ハケ？後単節縄紋RL（0段3条、2指、末端結束）横位施文（←←↓粗雑）。無文帯横方向のミガキ。内面比較的丁寧なナデ。1/5No.11＋床下出土。

註1　図示したもの以外に甕胴部片17点（そのうち縄紋あるもの10点でL3、RL2、LR5点）出土している。
甕1　13点、甕1'3点、甕1"　1点である。

第91号土壙（第33図）

第2号掘立柱建物跡に切られる不整楕円形の土壙。第63号住居跡南隅に面する壁は直線状をなし、約1.8m離れている。第64号住居跡とは約1.7mの距離をおく。掘り込みはやや深い。出土遺物はないが埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。

直線状の部分をみると第63号住居跡を避けて構築されたようにも見える。

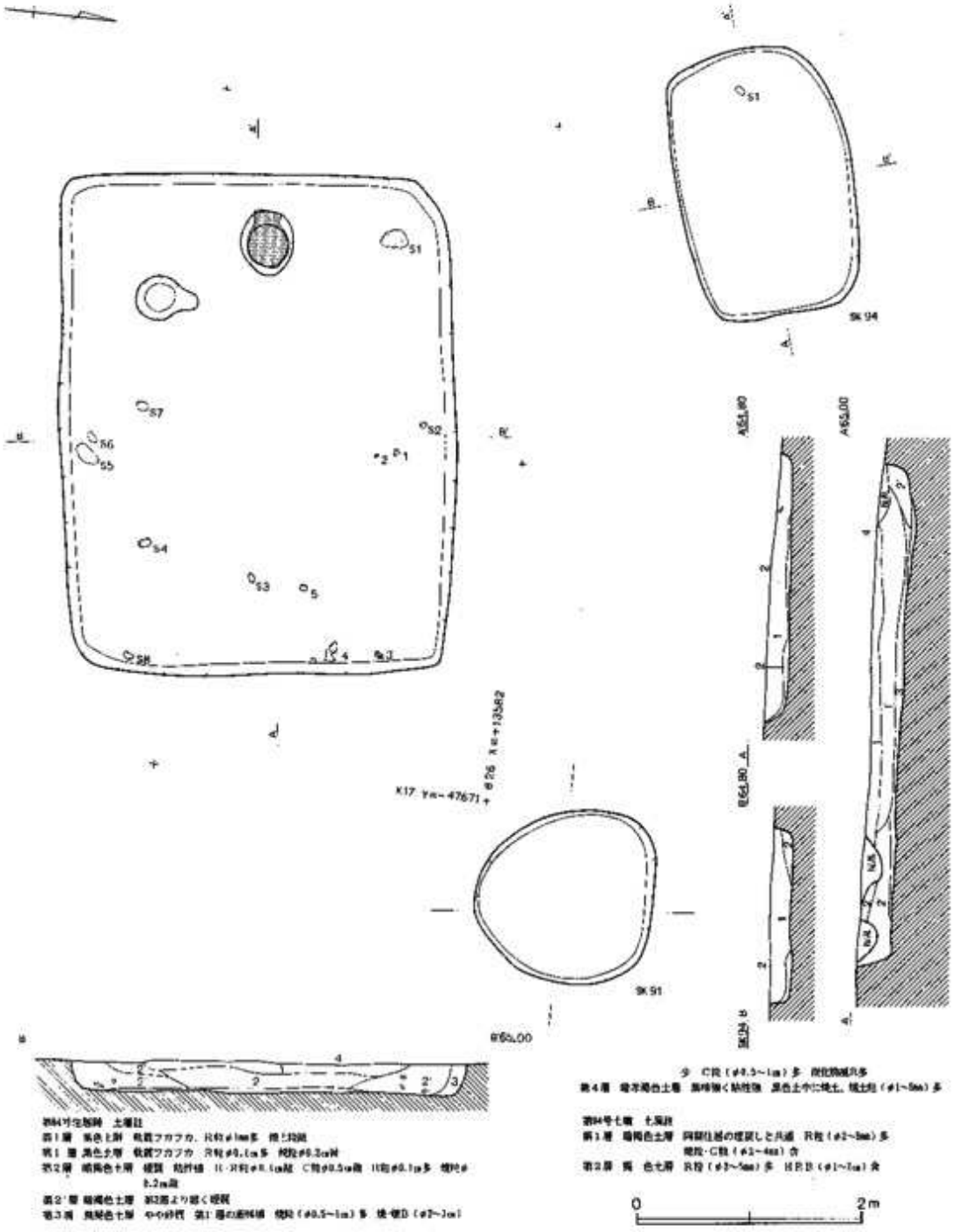
第64号住居跡（第33図）

東壁上層は土壙状の攪乱を受ける。全体に上層は耕作等の攪乱顕著。壁外施設は認められなかった。

掘り込みは深く埋土がよく残り黒褐色＋暗褐色の典型的吉ケ谷式期の推積である。第3号掘立柱建物跡が上層で重複する。出土遺物の大部分が埋土中出土。

平面形は長方形で、北東、南西隅が湾曲する。壁は南、西壁が若干の傾斜をもつが、他はほぼ直立する。床面は斜面上に構築されたためか、西側へ向かって若干傾斜する。中央にロームブロックを含む黒色土が分布し、やや凹凸が目立つ。炉は西壁寄り中央に位置し楕円形呈す。よく焼けており炉石はない。掘り方はないようである。柱穴、壁溝等検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

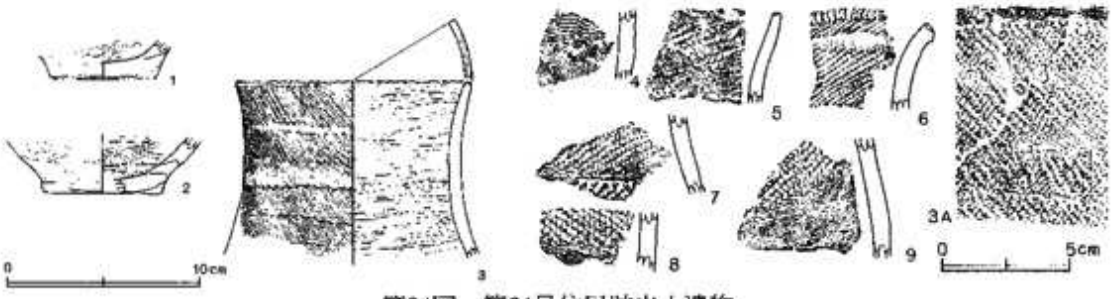
掘り方は存在しない。第91号、第94号土壙が至近距離に存在し、やや離れて第86号土壙がある。第94号土壙は第65号住居跡とのほぼ中間に位置し長軸もほぼ同一であり伴うかもしれない。第91号土壙も第63号住居跡とのほぼ中間に位置するが、軸は第63号、第64号住居跡のどちらとも一致しており判断は難しい。



第33図　第64号住居跡、第91、94号土壙平面図

第64号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	1	― 5 2	底面指頭ナデにより僅かに上げ底状をなす。側縁部粘土貼付けか？圧痕残る。	外面外周指頭ナデ。内面棒状工具ナデ後一定方向の指頭ナデ。	90%要1白粒少量角閃石多黒色／黄褐色、黄褐色No.5、黒斑あり



第34図　第64号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	2	－ 6.0 3.0	底面僅かに上げ底で外周粘土貼付け。	底面若干のナデか。胴部外面ハケ？ミガキ後外周指頭ナデ。内面ミガキ。	1/2甕1白粒少量淡褐色、黄褐色No.3
甕	3	12 － 9	頸部以下を欠失する。頸部はほぼ直立し上位で緩く外反する。口唇部先端ほぼ丸く収まり縄紋施文（同一原体右回転）輪積み痕なし。焼成後口唇部一ヶ所打ち欠き片口状にする。	口縁下内外面ヨコナデ以下外面単節縄紋RL（0段3条、2撚、末端結束）横位施文（←←↓やや雑）で4段に亘り、圧痕比較的明瞭。内面横・斜ハケ後横方向のやや粗いミガキ。	70%甕1暗赤褐色、茶褐色No.4。外面一部炭化物付着

第64号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
4	甕1角閃石やや多量	暗褐色（褐色）黒褐色	甕胴部。外面櫛描文（5本/0.8cm、←←）は波長やや長く振幅は短い。内面横方向のミガキ。
5	甕1	淡褐色	甕口縁部。外面口唇部から同一原体で単節縄紋LR？横位施文。内面横方向のミガキ
6	甕1"	赤褐色	甕。巾狭の貼付け口縁？口唇部から外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文、口縁部下無文部残す内面横方向のハケ後ミガキ。
7	甕1	赤褐色	甕頸部。単節縄紋LR（0段3条？末端結束）、内面横位ミガキ。
8	甕1"	暗褐色／黄褐色	甕胴部。外面ハケ？後縄紋RL（0段多条、末端結束）横位施文（←）以下横方向のミガキ。内面ハケ後ミガキ。
9	甕1白粒少量	赤褐色	甕胴部。外面斜ハケ後縄紋LR（末端結束）横位施文（←←↓）以下横方向のミガキ。内面横方向のミガキ。

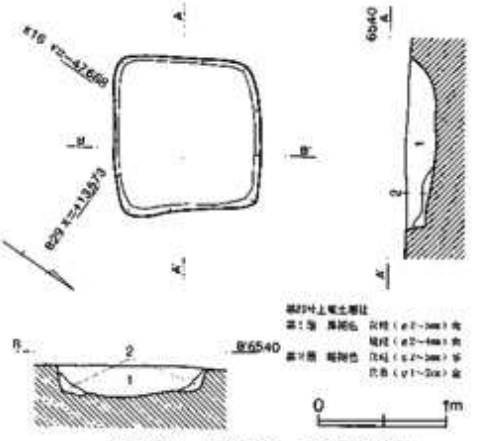
註1　図示したもの以外に甕胴部片4点が出土している。
　　甕1　3点、甕3　1点である（縄紋を有するものはない）

第94号土壙（第33図）

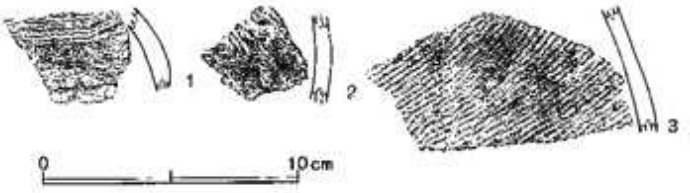
第64号住居跡の北側約2mで検出された長方形の土壙。掘り込みはやや深い。出土遺物は全て埋土中出土。主軸方向は住居跡とほぼ一致する。

第86号土壙（第34図）

第2住居跡群で最も南側に位置し、単独で存在する方形の土壙。掘り込みは深く埋土は良く残っている。出土遺物は全て埋土中の出土である。



第35図　第86号土壙平面図



第36図　第86、94号土壙出土遺物

第86,94号土壙出土遺物

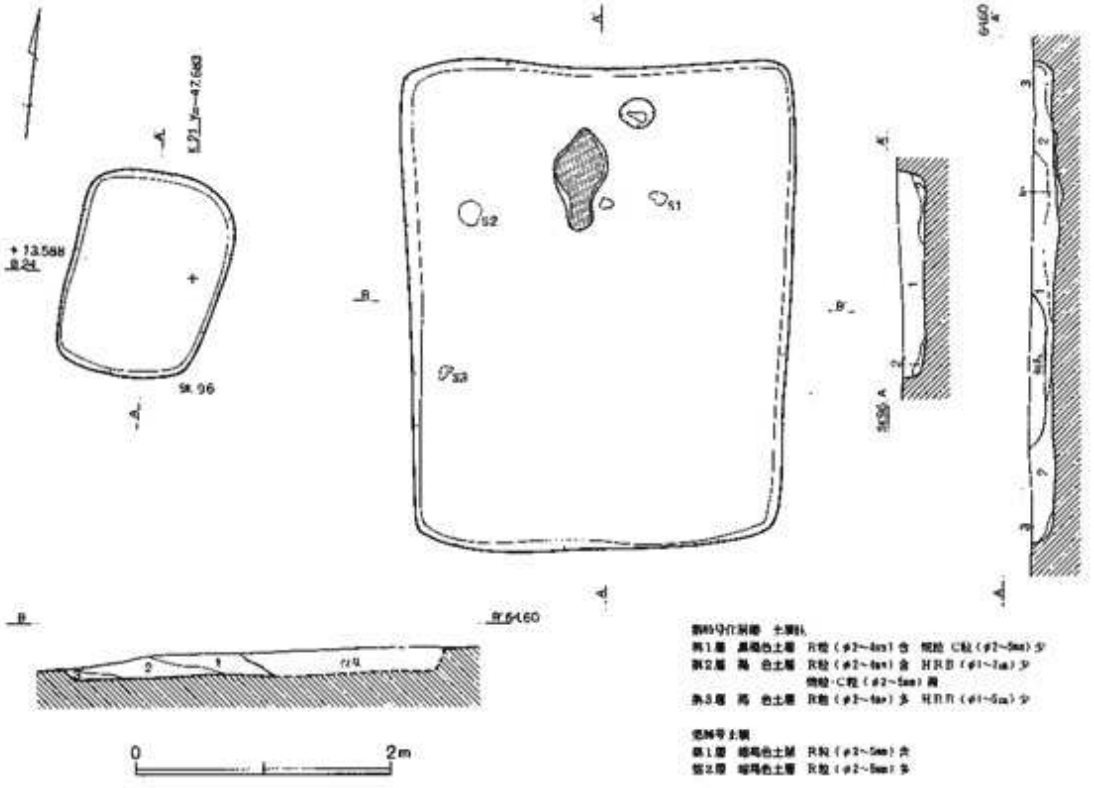
番号	胎土	色調	備考
1	褻1"	赤褐色／褐色	第86号土壙出土壺頸部。横方向のハケ？後粗いミガキ。櫛描文（←・6本／1cm）は波長、振幅が短い。内面横方向のミガキ。
2	褻1	淡赤褐色、黄褐色／黒色	第96号土壙出土甕胴部。外面斜めハケ後単節縄紋RL（0段多矢、末端結束）横位施文以下ミガキ。内面斜方向のミガキ。
3	褻2白粒粒度小	暗褐色／赤褐色	第96号土壙出土甕胴部。外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文（・・・）。内面やや粗い横方向のミガキ。

註1　第86号土壙は図示したもの以外に甕胴部片5点出土。
　　胎土は全て褻1"（細粗レキdやや少量）である。
註2　第94号土壙は図示したもの以外に甕胴部片1点が出土している。胎土は褻1細粗微c微である。

第65号住居跡（第37図）

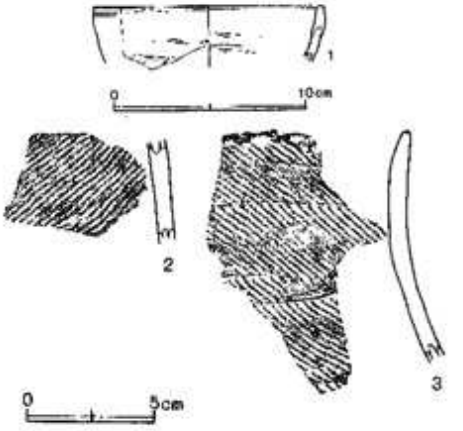
土壙状の攪乱（現代？）及び耕作が住居跡中央部に存在する。壁外施設は認められなかった。

埋土は攪乱顕著で床面下迄及んでいる。（特に南半部は著しい）出土遺物は少量で全て埋土中出土である。



第37図　第65号住居跡、第96号土壙平面図

平面形はほぼ長方形ないし若干歪んだ台形状。壁はほぼ直立する。床はほぼ平坦であるが斜面に立地するためか西壁下はやや傾く。全体に硬質で中央部が著しい。炉の北側及び南側の小ピットは上層から掘り込まれている撹乱。炉は北壁寄りほぼ中央に位置し楕円形呈す。比較的よく焼けている。柱穴、壁溝等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。掘り方は存在しない。
第９６号土壙が西側約1.3mの位置にあり、長軸がほぼ一致しており伴うものと考えられる。



第38図　第65号住居跡出土遺物

第65号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	11.9 － 3.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部直立気味で端部ほぼ平坦。	外面荒ケズリ後ミガキ、内面横ハケ後ミガキ。磨滅顕著。	1/10砂１ｅ多量細粗雑 暗黄褐色

第65号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
2	柴1"	暗黄褐色／赤褐色	壺胴部。外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文（→）。内面粗い横方向のミガキ。
3	雲1白砂少量	暗褐色／黄褐色	壺頸部は内傾して立上り口縁部は尖り気味で縄紋施文（同一原体）。外面単節縄紋RL（0段3条太細付加条巻か？２指）横位施文（←・↓）。内面口縁下ヨコナデ以下斜ハケ後横方向のミガキ。丁寧平滑。No１。

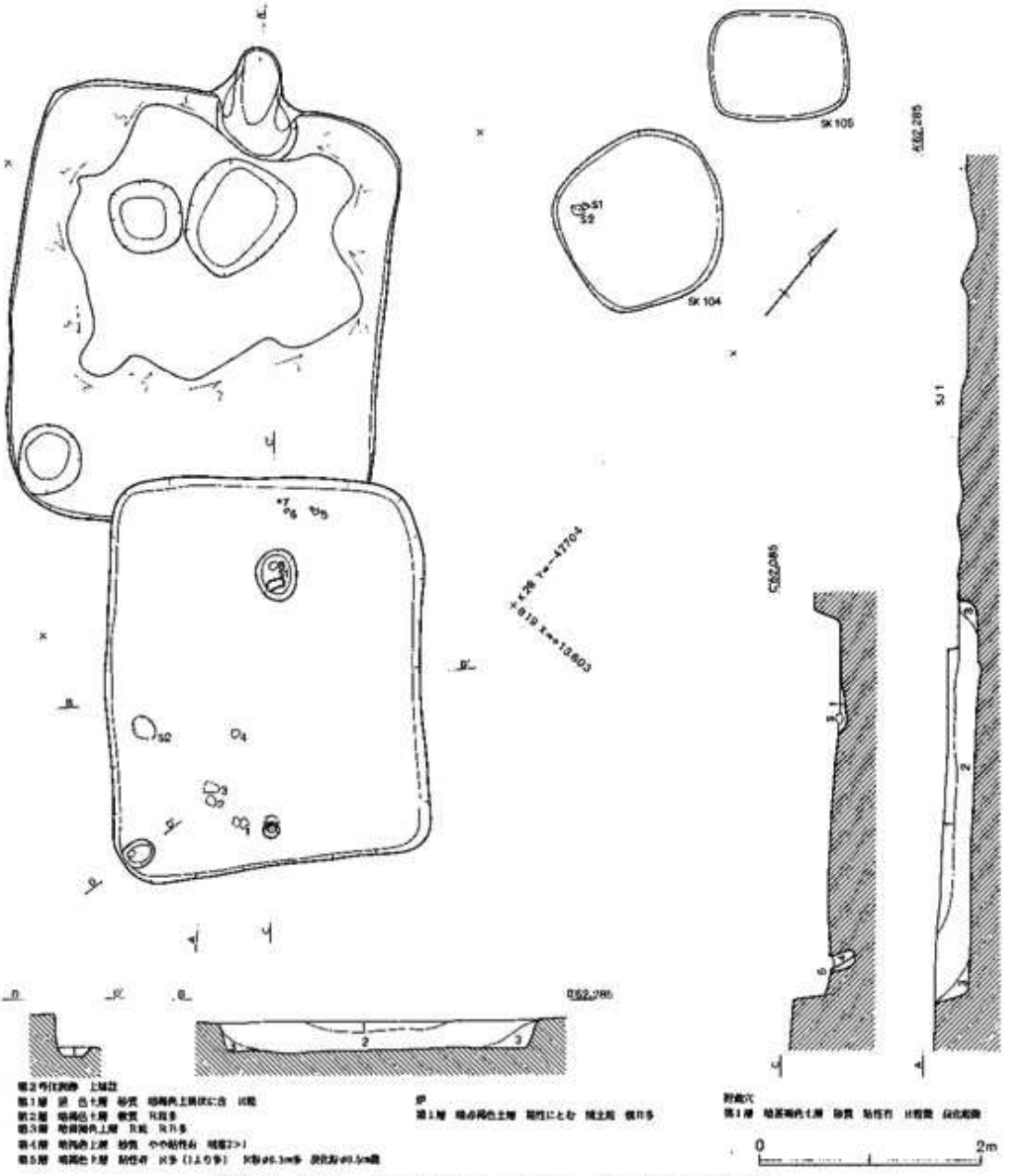
第96号土壙（第37図）

略長方形を呈する。第65号住居跡との間に遺構の痕跡は検出されなかった。掘り込みは深い。
出土遺物は検出されなかったが、埋土の様相から吉ケ谷式期のものと判断した。

d　弥生時代　第３群

本群は台地裾の緩斜面上、第１群と第４群に挟まれた位置に存在する。第４群とは極接近しており最短距離で約４ｍ程である。東西約22m×南北約33mの範囲に収まり、中央部に約6m×23mの細長い空間を造出している。これは広場或いは作業空間とするには傾斜がきつくやや狭い。この空間によって、上段の２軒（第73、78号住居跡）と下段の４軒（第2、75～77号住居跡）に分けられる。各々の主軸方向は北西方向でほぼ一致し、直線状に配置される。特に下段は顕著である。
各住居跡に敷設される小ピットを入口関連施設とすると、南東壁、南壁に設置されており同方向からの出入りが想定される。この場合第77、78号住居跡間は約３ｍの幅しかなく、第77号住居跡の入口ピットが南壁中央に付く点をみると、この部分で群が終了することが推定される。

本群はいずれの住居跡も土壙乃至竪穴状遺構を伴う。付属施設の住居跡に対する位置関係は、概ね住居跡短径以内に収まることが多く、約1～2mの範囲である。最大で約３ｍを測る。住居跡から付属施設までの占有領域をみると第2、75号住居跡を除いて重複しない。むしろやや間隔をおいて



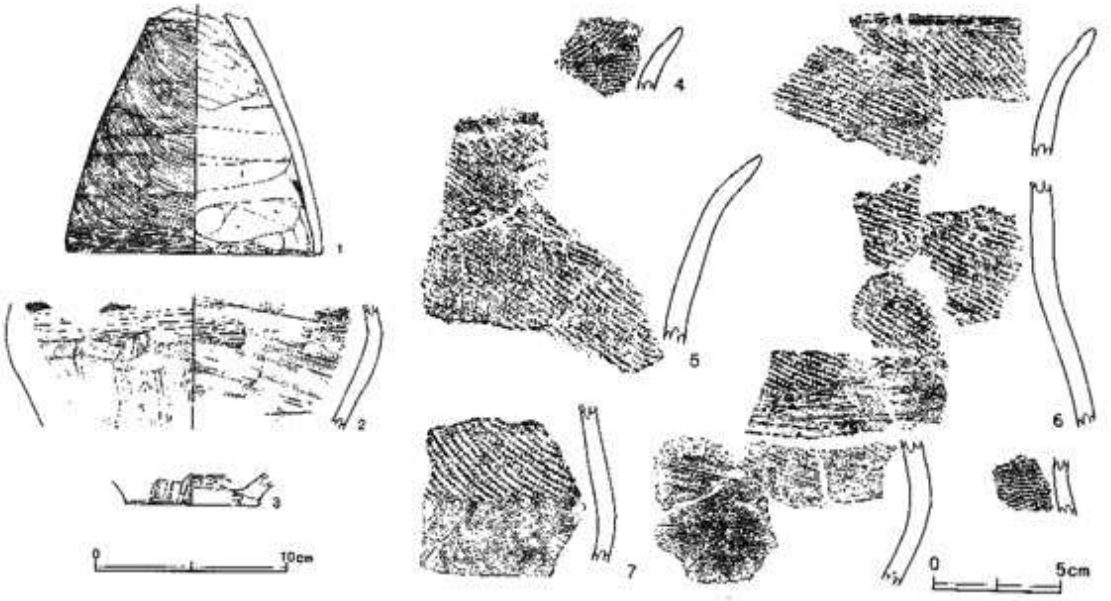
第39図　第１、２号住居跡、第104、105号土壙平面図

いる。住居跡の規模と数量は相関関係を見いだせない。平面形は不整形のものが多く全体に整っていない。規模の大小は顕著でなく、第76号住居跡を除いて大差はない。

第２号住居跡（第39図）

第１号住居跡とともに確認。周辺部にピット等の遺構の存在は認められなかった。第104、105号土壙については確認段階では気づかなかった。

埋土は３層に分割されるが１、２層はさらに上、下に分けられる可能性がある。２層は床面近くで炭化物を含む黒色土が推積する。出土遺物は２層から比較的出土し、西壁及び東壁付近に集中す



第40図　第２号住居跡、第104号土壙出土遺物

る。

平面形は隅丸長方形で北西隅がやや歪むが、比較的整っている。掘り込みは深く壁は直立する。床は炉周辺部～中心部はよく固められているが、周辺部は柔らかい。炉は西壁寄り中央部に存在し楕円形。甕小片、炉石が若干浮いた状態で出土する。柱穴は精査にもかかわらず１ヶ所しか検出できなかった。柱痕跡が認められ壁に向って斜めに穿たれ、埋土は２層に分割される。あるいは入口施設か？貯蔵穴は南東隅部に小形で浅い略円形のものが存在する。埋土は暗茶褐色、砂質で粘性有し土器片出土。生活段階に伴う遺物はほとんどなくやや浮いた状態で、西壁近くのものが比較的床面に近い。

断割りはあえて行なわなかったが掘り方は存在せずローム直上が床面である。

第2号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏脚部	1	－ 13.3 12.3	底面ほぼ平坦で内側凸状をなし、内湾して立ち上がる。接合部径は小さい。外面輪積みによる凹凸若干残る。	外面横彩ハケ後接合部付近横、中位横・斜、下部横方向の極丁寧なミガキ。内面ハケ後丁寧な指頭ナデ。底面未調整。外面全面赤彩。	90% 要３レキ微量 赤褐色（黄褐色）褐色No.1～4。
甕底部	3	－ 7.0 1.7	やや凸出気味。	底面未調整。外面縦筋ミガキ、内面横筋ミガキ。	10%甕１暗赤褐色

第2号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
4	要１	黒色、暗赤褐色	地LI縁部。外面LI縁部（右回り）から単節縄文LR（0段多条）横・斜位施文（→→。）口縁下ヨコナデ。内面横方向のミガキ。
5	要１円粒少量	黒褐色、暗灰褐色	地LI縁部。単節縄文RL（0段3条）横位施文→1、内面ハケ後丁寧ミガキ。No.5 1 6 1 炉周辺出土。

番号	胎土	色調	備考
6	甕2白粒粒度小、大量	黒褐色、黒色	甕1：縁部。 外面ハケ後単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→。）下半部横ハケ（5本／0.5cm）。内面斜ハケ後やや粗い横方向のミガキ。№8。
7	甕1白粒少量れきやや多	黄褐色	甕胴部。 外面斜ハケ後単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→。）以下斜ミガキ。内面横方向のミガキ。№9。外面スス付着。

第104号土壙（第39、43図）

略方形で北側がやや凸出する。掘り込みはやや深く、遺物は全て埋土中出土。第2号住居跡の北側約2.6mに位置し、第105号土壙とは0.4mで隣接する。

第104号土壙出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	2	―	胴部。	外面斜ハケ？後単節縄紋LR横位施文、以下横→縦方向のミガキ。内面やや粗い斜方向のハケ（11本/1cm―＊）。	1/10甕1黒褐色、暗黄褐色

第104号土壙出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
8	甕1	黒褐色、黒色	甕頸部。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文。内面ミガキ。

註1　図示したもの以外に甕胴部片2点（甕1と1"）が出土している。

第73号住居跡（第41図）

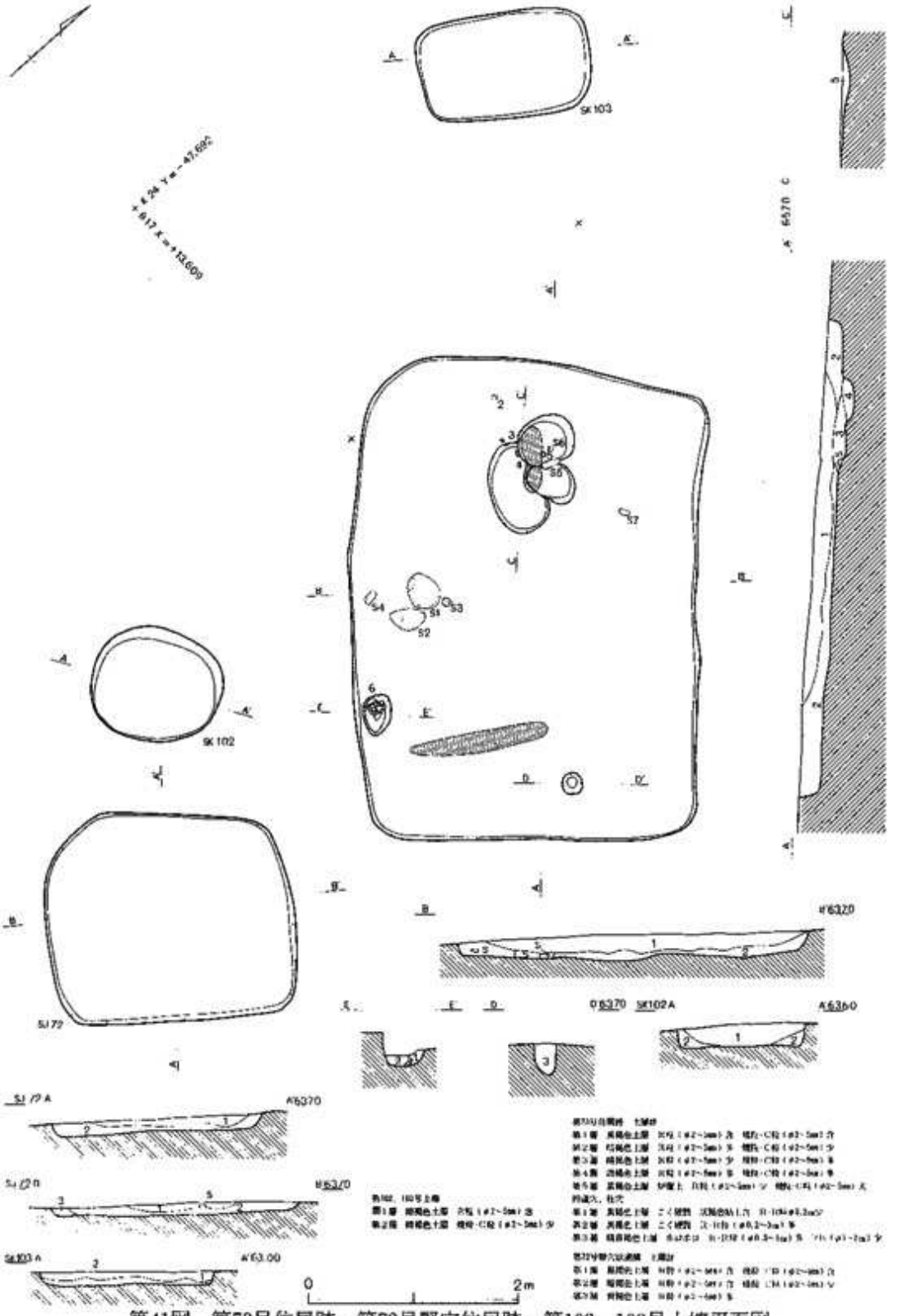
西隅は鋭角的に確認されている。壁外施設は認められなかった。住居跡の西～北側に土壙及び竪穴状遺構が配置される。

埋土は黒褐色＋暗褐色土で吉ヶ谷式期の典型的堆積。焼土が南西壁下にわずかに存在する。出土遺物は少量で大部分が埋土中出土である。

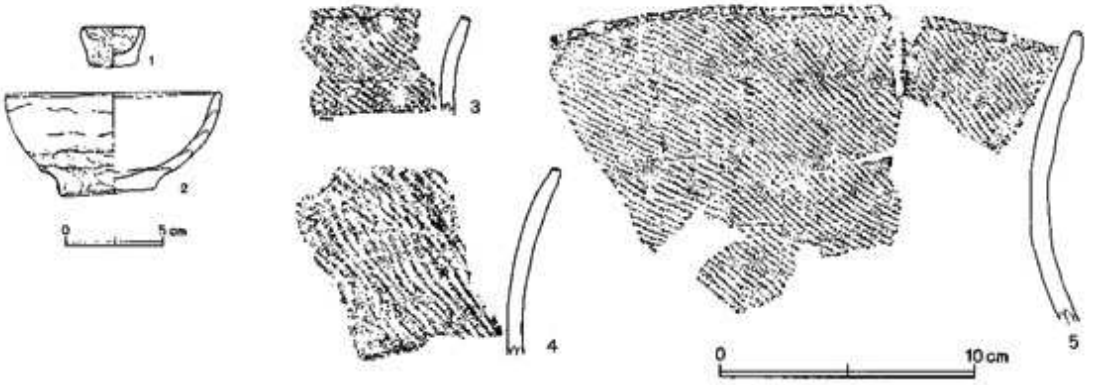
平面形は北西壁が斜行するが、略長方形と把えられ、確認時の平面形とやや異なって西隅は湾曲する。壁はほぼ直立し掘り込みは浅い。床は斜面に立地するためかやや傾斜する。既して東半部が硬く、西半部はやや柔らかい。炉の南側を中心として黒褐色土が分布する。炉は北西壁より中央に位置し、重複している（左→右の順と認識したが断面は不明瞭であった）新炉は、小形の炉石を中央に配置し炉石部分はやや凸状呈する。旧炉はやや浅くそれ程焼けていない。柱穴、壁溝は検出されなかったが、南東壁下に小ピットが認められた。貯蔵穴が南西壁下東よりに認められたが、楕円形で浅い。生活段階に伴う遺物は南西壁下の磨り石と貯蔵穴出土土器である。

掘り方は存在せず、ローム直上が床面である。

第72号竪穴状遺構、第102号土壙が南側約1mの位置に、第103号土壙がやや離れて約2.2mの位置にある。3ヶ所とも位置的に本住居跡に付随すると考えられる。



第41図　第73号住居跡、第72号竪穴住居跡、第102、103号土壙平面図



第42図　第73号住居跡出土遺物

第73号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
ミニチュア鉢	1	3 2.1 2.1	底部は平底で下部粘土付け足しにより厚く凸出気味。体部は僅かに内湾して開く。口唇部尖り気味で刻みを施す。	底面及び内面指頭ナデ、体部外面縦方向のミガキ。	1/2。褐1。淡褐色
鉢	2	11.0 5.2 4.8	底部は平底で凸出し体部は内湾して立ち上がる。口唇部丸く収まる。底部は巾1cmほどの粘土紐を同心円状に巻き、体部は輪積み成形。	体上部はヨコナデ、ミガキ不明。底部周縁指頭押圧、ナデ。底面ナデ。内面ミガキか？内外面磨滅、剥離顕著で詳細不明。	90%褐1白粒少量赤褐色／黄褐色、黄褐色No.6。

第73号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
3	褐1白粒少量	淡褐色	口縁部。外面口唇部（左回り）から単節縄紋RL（0段多条、2指）横位施文（→→↓）2段に亘る。内面横方向のミガキ。No.1。
4	褐1白粒少量赤粒粒度大少	赤褐色	口唇部丸く収まる。単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→↓粗雑）内面口唇下ヨコナデ以下やや粗いミガキ。No.1。
5	褐1	黄褐色／淡褐色	頸部中位で緩く外反して開く。口唇部ほぼ平坦で縄紋施文（同一原体左回り）。外面口唇下ヨコナデ？以下単節縄紋RL（0段（細太）3条、2指）横位施文（→→↓）で施文巾は狭く4段に亘る。内面やや粗い横方向のミガキ、下部は比較的丁寧。1/4

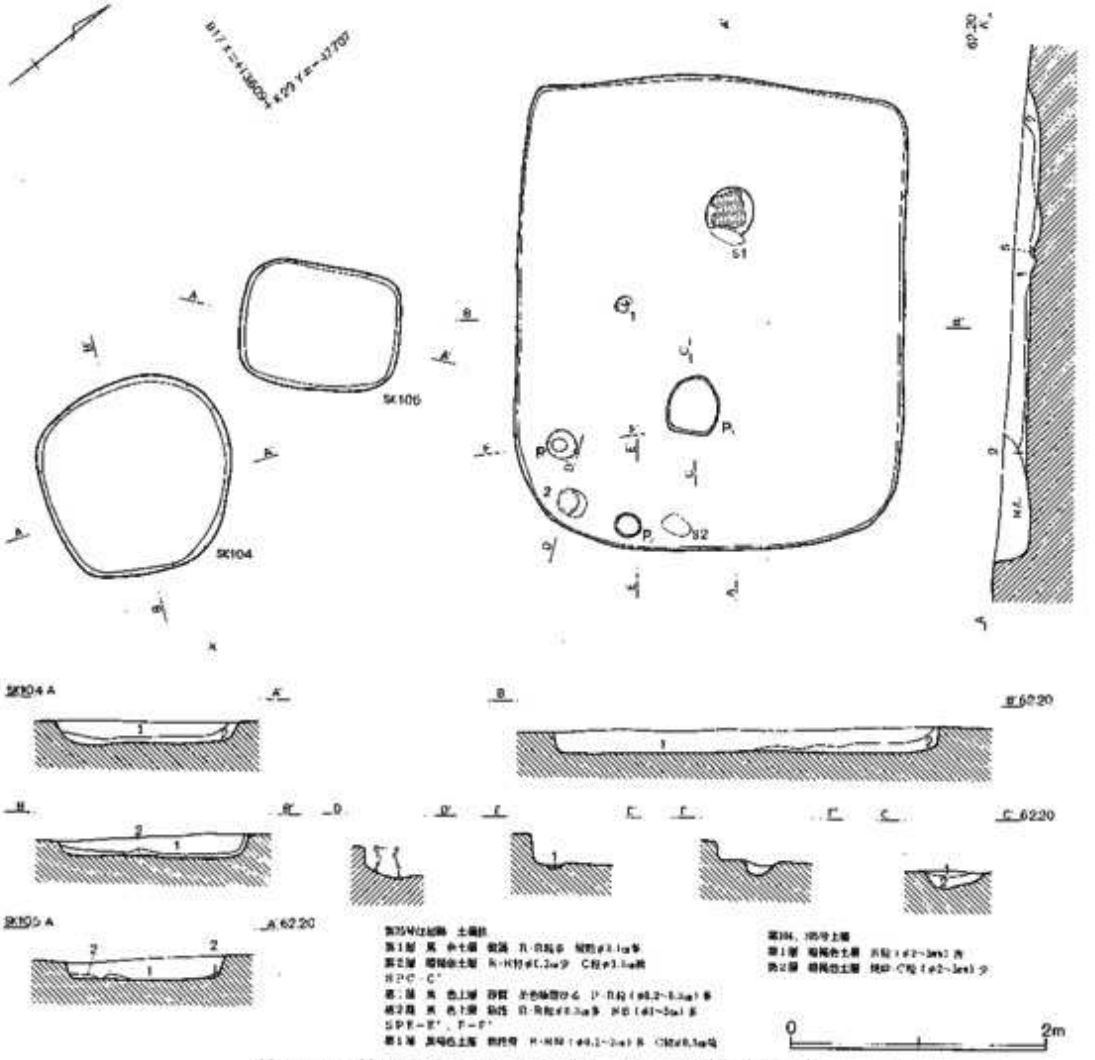
註1　図示したもの以外に甕胴部片4点（甕1）壺胴部片1点（壺1'）が出土している。壺1'

第72号竪穴状遺構（第41図）

西隅が直線状をなす長方形。掘り込みは浅く、出土遺物はない。埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。第73号住居跡とは0.9mの至近距離にあり、長軸方向はほぼ直交する。

第102号土壙（第41図）

楕円形で掘り込みはやや深い。出土遺物はないが埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。第73号



第43図　第75号住居跡、第104、105号土壙平面図

住居跡とは約1.2m離れ、第72号竪穴状遺構とは約0.7mで隣接する。長軸方向は第73号住居跡と直交気味である。

第103号土壙（第41図）

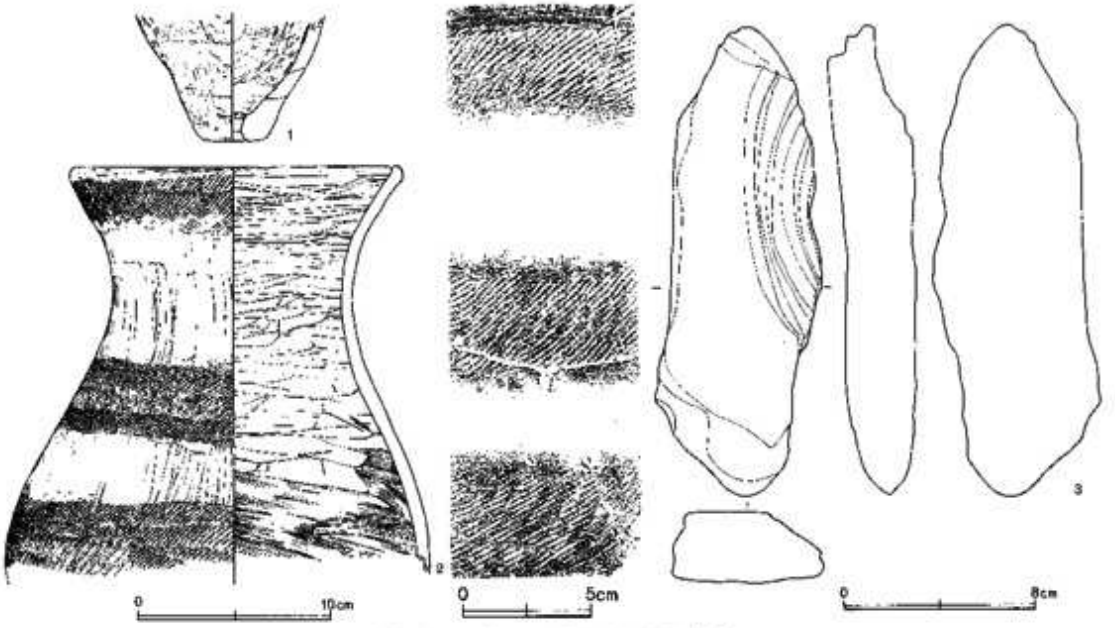
長方形で掘り込みは浅く、出土遺物はない。第102号土壙と同様埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。第73号住居跡とは北西方向に約2.2m離れ、長軸方向は住居跡と直交気味である。

第75号住居跡（第43図）

東壁下に風倒木痕が存在する。壁外施設は認められなかったが西側に第104、105号土壙が確認された。

風倒木の影響は微弱で埋土はほぼ吉ヶ谷式期の例に対応する。出土遺物は少量である。

平面形は東壁両隅が湾曲する略長方形。掘り込みは深かったようだが、西壁はやや浅い。壁はほぼ直立する。床面ほぼ平坦で中央部を中心によく踏み締まっている。周辺部はやや柔らかい。炉は西壁寄りほぼ中央に位置し、略円形で手前に炉石が配置され中央部を中心によく焼けている。柱穴は検出されなかったが、南隅貯蔵穴の両側に小ピットが２ヶ検出された。東壁下の河原石とともに



第44図　第75号住居跡出土遺物

入り口に関連するとみられる。炉の南にある大形のピットは断面で確認していないが上層から掘り込まれたものか伴わないものと考える。貯蔵穴は南隅に位置し、壺形土器が正位で据え置かれたような状態で出土している。壁溝は検出されなかった。生活段階に伴う遺物は、貯蔵穴出土の壺と中央部出土の高坏形土器だけである。

掘り方は存在しないと考えられる。

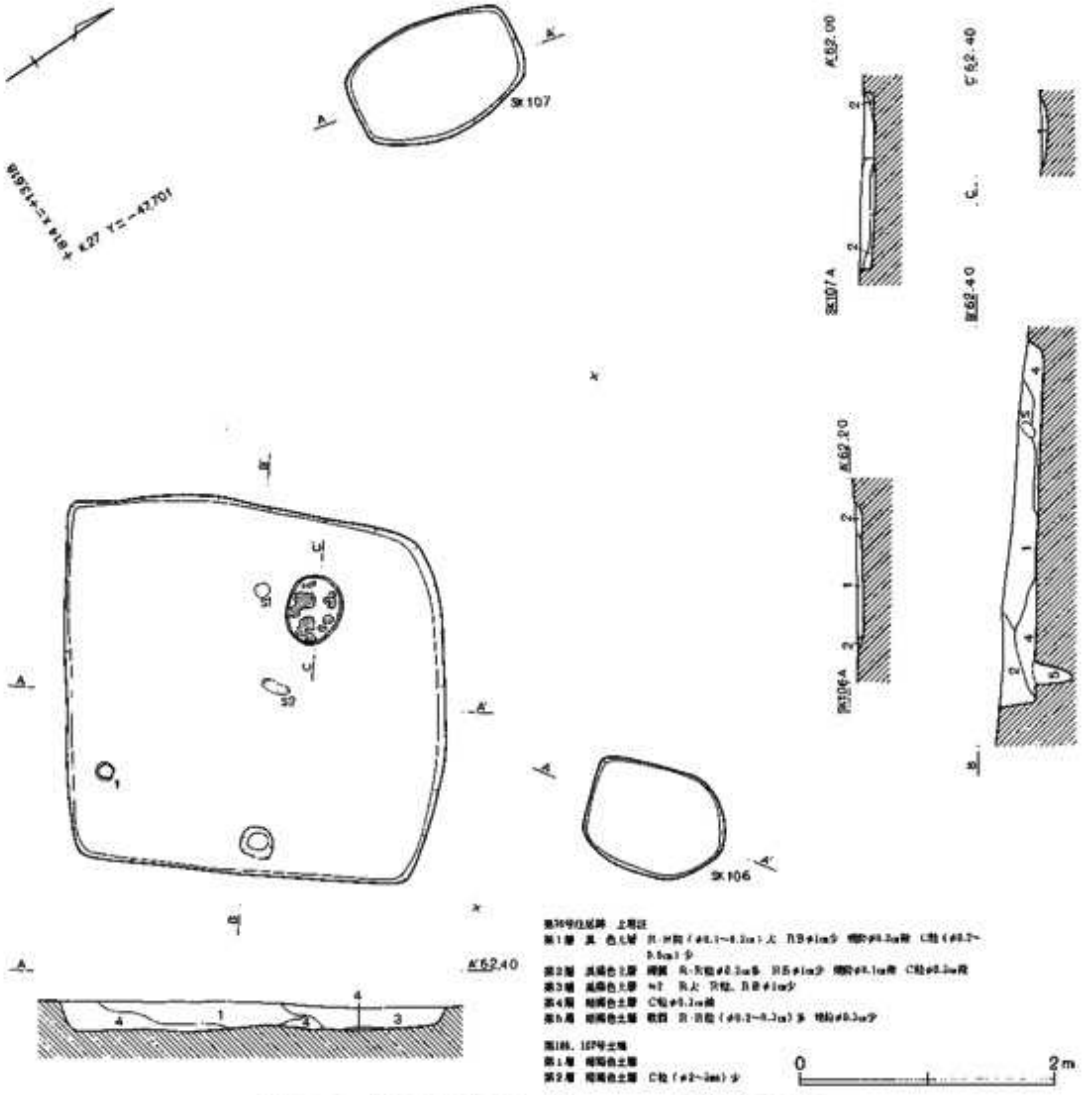
周辺部には暗褐色土が分布する。第104、105号土壙が南側に位置し（第２号住居跡との中間）、第105号土壙は確実に付随する。

第75号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	・・ 3.1 6.5	底部は小形でほぼ平底器肉厚く、穿孔は下→上の順で径1.1cm程。体部はしりすぼみで縦長。	底面未調整部分の残る指頭ナデで底部周縁に及ぶ、体部外面斜めハケ後縦方向のやや粗いミガキ。内面縦・斜位ケズリ底部周辺指頭ナデ後あらいミガキ。	70%含1白粒少量暗褐色、赤褐色№1。外面煤跡あり。
壺	2	17 － 21	胴部は最大径を中位にもち張りをもたず太い胴部に移行する。上部で緩く外反して開き口縁部は直立し端部丸く収まる。内面緩い稜をなす。	外面口縁部横以下縦・斜めハケ後口縁部、頸部、胴部にそれぞれ縄紋帯施し無文部は縦方向の（若干の横を含む）ミガキ、口縁部横ナデ（←←）。単節縄紋LR？（0段多条、２指）横位施文（→→。比較的小刻み）で口縁部１段他は２段に亙たり下胴部横方向のミガキ。内面横・斜ハケ（11本/1.0cm ←←^）後縦部以上は粗い横方向のミガキ、口縁部やや丁寧。	90%含2白粒やや少量赤褐色／黄褐色№2。内外面一部黒斑あり。内面胴部剥離顕著。
石皿	3				S１、2.5Kg

第105号土壙（第39、42図）

長方形で掘り込みはやや深い。出土遺物はないが埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。第75号住居跡とは0.8mの距離しかない。長軸方向は住居跡とほぼ直交する。



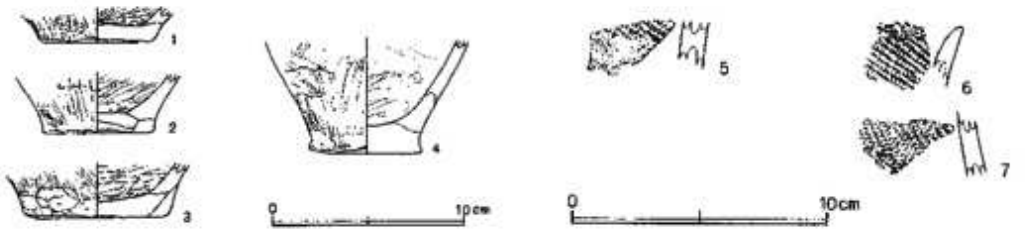
第45図　第76号住居跡、第106、107号土壙平面図

第76号住居跡（第45図）

北壁～南壁にかけて風倒木及び溝による攪乱が認められた。壁外施設は判らないが北～東側に第。106、107号土壙が認められた。

埋土は攪乱が著しいがほぼ吉ヶ谷式期の典型例に対応するものである。出土遺物は少量でほとんど埋土中出土。

平面形はやや歪むがほぼ方形。掘り込みは深かったと見られるが、西壁は流失のためか浅い。壁は部分的に傾斜するが、ほぼ直立する。床面は斜面に沿って西へわずかに傾き比較的全面に亘って硬質。東隅は風倒木による攪乱が及ぶ。炉は西壁寄りで、中央からやや北にずれている。楕円形でよく焼けている。炉石はないが、やや離れた位置に扁平な河原石が出土しておりこれが炉辺石かもしれない。柱穴、壁溝等は検出されなかった。東壁下の大形のピットは溝（現代？）に伴うものである可能性が高い。生活段階に伴う遺物は南壁下東隅の正立して据え置かれたような状態の甕のみ



第46図　第76号住居跡、第107号土壙出土遺物

である。

掘り方はないと考えられる。甕の周囲に掘り方、貯蔵穴は存在しなかった。東壁下のピットは貯蔵穴にしては深く入口に伴うものかもしれない。

第106号土壙が北側約1.2m、第107号土壙西側約3m離れて存在する。第106号土壙については確実に伴うと考えられる。

第76号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺底部	1	－ 5.5 14	底部はほぼ平底。	底面一定方向の指頭ナデ、胴部外面縦→横方向のミガキ内面全面ミガキ。底面以外は赤彩される。	1/4甕1赤粒粒度大多赤褐色（褐色）赤褐色
甕底部	2	－ 5.8 2.9	底部は平底でやや凸出気味、器肉やや厚い。	底面未調整部分の残る若干のナデ。外面縦→横方向のミガキ、内面全面粗いミガキ。	1/4甕1赤粒粒度大暗赤褐色、暗褐色
甕	3	－ 7.5 2.6	底部はやや大形で平底、器肉やや薄い。外周粘土貼付けか？	底面未調整部分の残るナデ、外面縦方向のミガキ後外周若干のナデ。内面比較的丁寧なナデ。	1/2甕1淡褐色

第76号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
5	甕1白粒少量	黒褐色	胴部。外面単節縄紋RL横位施文以下横方向のミガキ。内面横方向のミガキ。

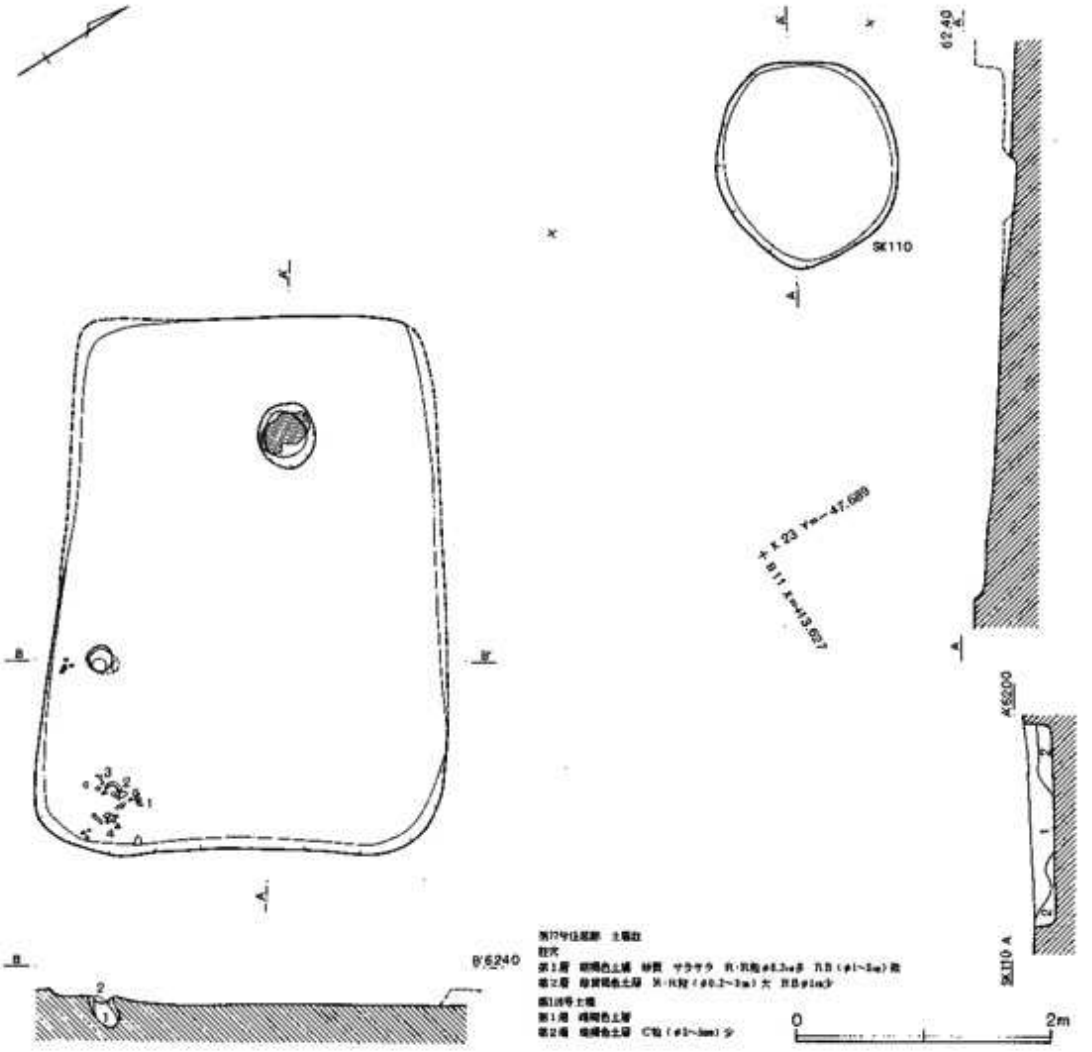
註1　図示したもの以外に甕胴部片5点（甕1　1，甕1'2，甕1"　1，甕2　1点）が出土している。

第106号土壙（第45図）

不整形あるいは楕円形で掘り込みは浅い。出土遺物はないが埋土の様相から吉ケ谷式期と判断した。

第107号土壙（第44図）

長辺が張りを持つ楕円形乃至長方形。掘り込みは浅く、出土遺物は埋土中出土。



第47図　第77号住居跡、第110号土壙平面図

第107号土壙出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	4	－ 5.9 5.8	底部厚く外面やや凸状をなす。胴部は外傾して立ち上がる。	底面ケズリ後若干のナデ、外面周縁未調整で胴部外面縦・斜方向のミガキ後若干のナデ加わる。内面ミガキ、磨滅顕著で詳細不明。	70%甕1'黒褐色／暗赤褐色、黒褐色内外面一部炭化物付着。

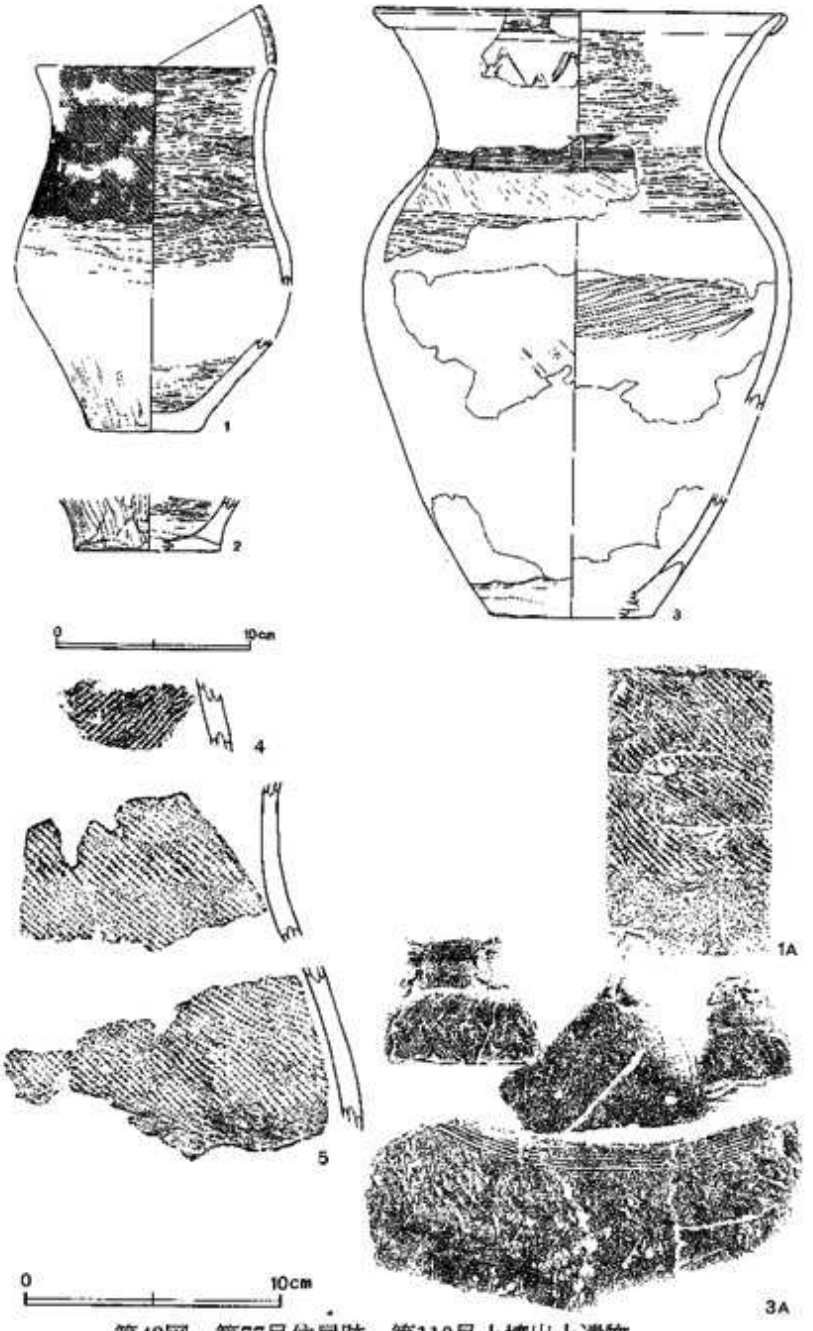
第107号土壙出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
6	甕1赤粒少Feか？	黒色、黒褐色	口縁部。外面口縁下ヨコナデ、口縁部（右回り）から単節縄紋RL（0段3条）横位施文。内面横方向のミガキ。
7	甕1	黒色、淡褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）。内面横方向のミガキ。

註1　図示したもの以外に甕胴部片2個体分4点（甕1）が出土している。

第77号住居跡（第48図）

確認段階で既に壁がほとんどとばされており、西壁は全く判らなかった。



第48図　第77号住居跡、第110号土壙出土遺物

西半部はほぼ床ないしそれ以下とみられる。壁外施設、掘り方は認められなかった。

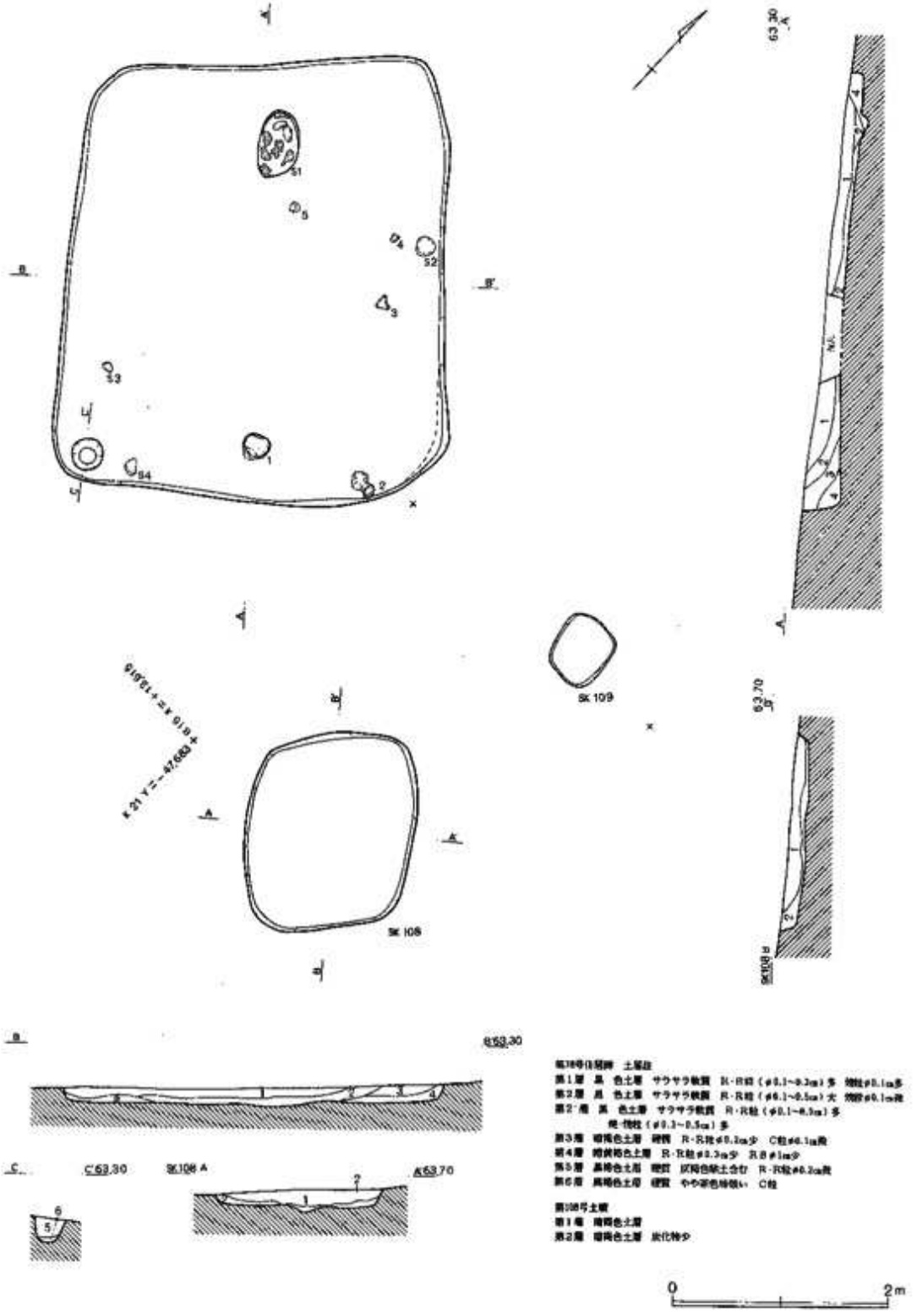
埋土は東半部でわずかに残るが吉ヶ谷式期のものに対応する。埋土中の出土遺物はほとんどない。

平面形は長方形を呈すると考えられる（西半部は復元）。壁残存部はほぼ直立する。床面は不明瞭であるがほぼ平坦？で全体に柔らかい。炉は上部が全くとんでおり下面の焼けた範囲が残存したとみなされ西壁寄りほぼ中央に位置し略円形。明確な柱穴は検出できなかったが南壁下に小ピットが検出され、柱痕跡が残りやや浅いものである。出土遺物は南隅に集中し上層から出土している。

掘り方は存在しない。

第77号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	12.4 5.7 19	底部と胴部は接合しないが同一個体。底部は平底で胴部はそれほど張らずに頸部に移行する。頸部直立し緩く外反して開く。外面僅かに輪積み痕残る。	底面ナデ乃至ケズリ、胴部外面ハケ後ミガキ。頸部外面単節縄紋RL（0段多条、3指）横位施文（→→↓）2段に亘り終点は一致しない。内側横・斜ハケ後横方向のミ	70%。甕2。橙褐色／灰黒色、灰黒色。№2＋3。内外面とも摩滅顕著。



第49図　第78号住居跡、第108、109号土壙平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
			口唇部丸く収まり縄紋施文（同一原体？）。	ガキ。	
甕底部	2	－ 7.5 3	底面平底で凸出気味。	底面粗いミガキ、外面ナデ後粗い縦筋ミガキ。内面丁寧な指頭ナデ。	1/2甕1黄褐色
壺	3	21.6 8.7 31.5	底部、胴部、口縁部は接合しないが同一個体。底部は比較的大形で器肉厚い。胴部は張りをもち最大径は中位か？頭部は直立気味で緩く外反して開く。口縁部は折り返し口縁で端部丸く収まる。	底面ナデ外面胴部ハケ後横方向のミガキ？頭部横ハケ後ミガキ？下端部描羅状文（2連止め、右回り、11本/1.7cm）以下比較的乾いた段階で縄紋施文か？折り返し部櫛描波状文（波長、振幅短い）。内面ハケ後比較的丁寧な横方向のナデ、口縁部は極丁寧。	1/4甕2石英長石多量赤褐色／暗褐色、暗黄褐色南西隅部一括出土。

第77号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
5	甕1	黄褐色	頸部。ハケ後単節縄紋RL（0段3条、縦節状の繊維圧痕あり、末端未処理）横位施文→↓以下丁寧な横筋ミガキ。内面ハケ（7本/0.5）後下半粗い、上半丁寧な横筋ミガキ。2と同一個体とみられる。

註1　図示したもの以外に甕胴部片5点、内4点が縄紋施文されいずれもRL（甕1）である。

第110号土壙（第47図）

楕円形で掘り込みはやや深く、出土遺物は埋土中出土。第77号住居跡の北側約2.6mに位置し長軸方向は住居跡とほぼ一致する。

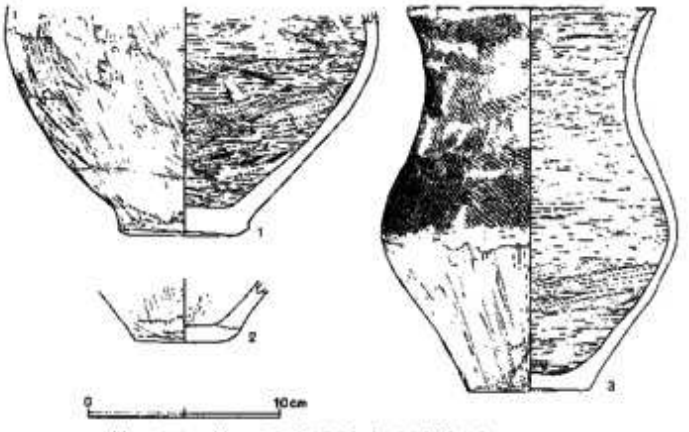
第110号土壙出土遺物

番号	胎土	色調	備考
4	甕1白粒少量	暗赤褐色、赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文（→→）。内面やや粗い斜方向のミガキ

第78号住居跡（第49図）

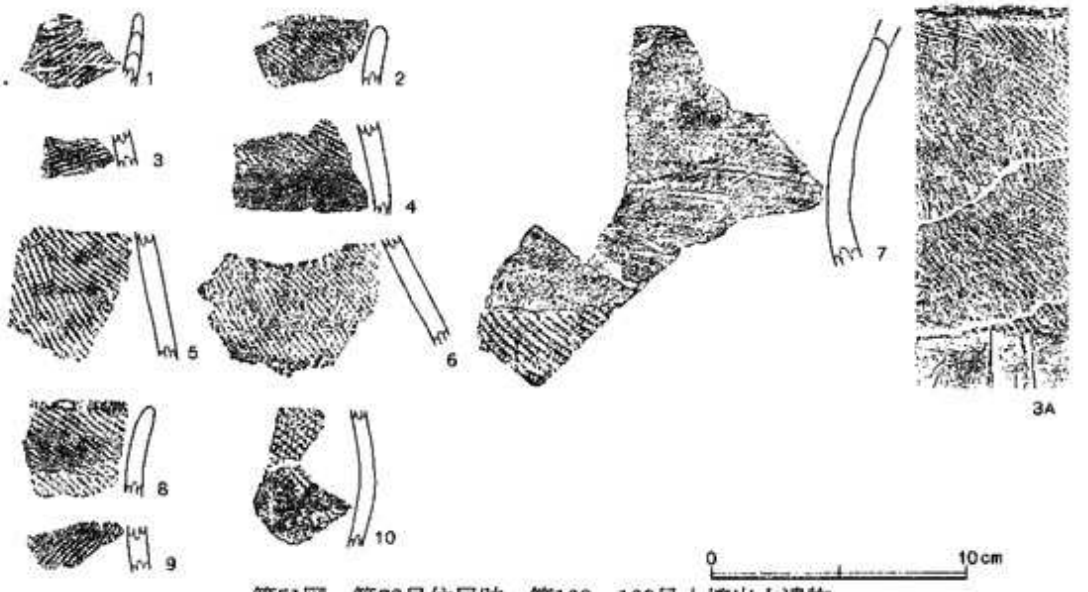
南壁北半部は大形の風倒木に切られる。北、西壁は耕作による撹乱。壁外施設は認められなかった。

埋土は撹乱にもかかわらずよく残っており吉ヶ谷式期の典型的推積である。出土遺物は少量で大部分が埋土中出土。



第50図　第78号住居跡出土遺物(1)

平面形はやや歪みがあるが略隅丸長方形。壁はやや傾斜をもち掘り込みは深い。北壁は流出したかほとんど残っていない。床はほぼ平坦であったとみられるが、東半部については風倒木の影響で湾曲している。全体に柔らかい。炉は北壁寄り中央に位置し、楕円形で炉石が北側にある（旧状を保っていない）。中心部はよく焼けてい



第51図　第78号住居跡、第108、109号土壙出土遺物

る。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は小形のものが南隅に存在する。生活段階に伴う遺物は南壁下の甕及び底部で、出土地点は倒木痕により多少の上下がある。

掘り方は存在せずローム直上が床面である。

第108号土壙が南東約2.1mの位置にあり、長軸はほぼ一致しており付随すると考えられる。第109号土壙埋土中から吉ケ谷式土器片が出土している。

第78号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	1	－ 4.8 3.1	底部凸出気味で底面僅かに湾曲する。	胴部外面縦方向のミガキ、内面ミガキ。	2/3甕 2 石英長石多量暗褐色／黒色、暗黄褐色、№5。
壺	2	－ 5.6 11.8	底部は凸出し底面中央僅かに凹む、外周凸状量す。胴部は内湾して立ち上がり、最大径は中位か？	底面及び外周未調整部分を残す若干のナデで外周は工具痕あり。胴部外面斜めハケ（11本/1cm）後やや粗い縦・斜方向のミガキ。内面斜ハケ（同一工具←←↑）後底部付近指頭ナデ以上粗い横・斜ミガキ。	80%甕 1 白粒少量暗褐色／黄褐色、暗赤褐色№1。外面一部炭化物付着。
甕	3	12.8 6.4 19.9	底部は平底で胴部は中位で強く張る。緩やかに頸部に移行し上部で緩く外反する。口唇部尖り気味で先端縄紋施文（同一原体左回り）。	外面斜・縦ハケ後口縁下ヨコナデ（←）以下単節縄紋RL（0段4条？、1～2指）横・斜位施文（→→↓粗い）で4～5段に亘たる。以下横・斜→疎らな縦方向の丁寧なミガキ。内面ハケ後比較的丁寧なミガキで、胴部横・斜以上は横方向。	90%甕 3 雲母片岩細少量赤褐色№2。外面一部スス付着。

第78号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
4	甕 1 粗少細レキ微金微	赤褐色、黄褐色	外面微かに輪積み痕残る。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文、内面横位ミガキ。
5	甕 1	暗褐色	口縁部。口唇部は丸く収まる。外面口縁ドヨコナデ後単節縄紋R？横位施文。内面横方向のミガキ。

器種	番号 法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	甕1	暗褐色、淡褐色		胴部。外面無節縄紋L？内面ミガキ。
7	甕1 赤粒粒度大	暗褐色、黄褐色		胴部。外面胴部横ハケ後単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→）以下横→縦方向のミガキ。内面粗いミガキ。
8	甕1	黄褐色		頸部。外面単節縄紋RL（0（細太）段多条、2指）横位施文（→→↓）。内面やや粗い横方向のミガキ。
9	甕1 白粒少量	暗赤褐色		頸部。外面単節縄紋RL（0段3条、1～2指）横位施文（→→↓）。内面ハケ後斜方向のミガキ。
10	大形壺	甕1		赤褐色。口縁部を欠失する。素口縁をなすと見られ、頸部無文帯を挟んで縄紋帯を施す。外面横・斜ハケ後粗いナデで単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→。）。内面横・斜ハケ（10本/1cm）後粗いナデ。№3－4。

註1　図示したもの以外に甕胴部片9点、内4点が縄紋施文されいずれもRL（甕1）である。

第108号土壙（第50図）

やや大形の長方形乃至平行四辺形で掘り込みはやや深い。出土遺物は埋土中出土。第78号住居跡の南東方向約2.1mに位置し主軸方向は住居跡とほぼ一致する。

第108,109号土壙出土遺物

番号	胎土	色調	備考
11	甕1	暗赤褐色	口縁部。口唇部（同一原体右回り？）から外面単節縄紋RL？（0段（細太）3条、2指）横位施文（→→↓）。内面横方向のミガキ。外面スス付着。
12	甕1	赤褐色	胴部。外面無節縄紋L横位施文。内面横方向のミガキ。
13	甕1	黒色、暗赤褐色	胴部。外面胴部横・斜ハケ後単節縄紋RL横位施文以下横→縦方向のミガキ。内面比較的丁寧なミガキ。

e　弥生時代　第4群

本群は現状では弥生時代住居跡群の最北端に位置し、第3群同様台地裾の斜面から平坦面への移行部分に存在する。東西20m×南北23mの比較的狭い範囲に収まり、他群に比して集合状態或いは塊状を呈している。しかしながら明瞭な広場空間を持つ訳ではない。

外見上土壙乃至竪穴状遺構を伴わないものが多い。すなわち帰属関係が明確なものは第111号土壙のみで、第112号土壙ははっきりしない。前者は一見明確なようであるが調査区外を考慮すると住居跡との間隔が広すぎる点が問題になる。むしろ第82号住居跡は第112号土壙との関連を考えたほうが妥当性がある。段階差の問題もあり単純ではないが、このようにみると第112号土壙を中心にして3軒の住居跡が配置されていることがわかる。この場合それぞれの住居跡から土壙までの間の占有領域は互いに重複する。言い換えれば土壙を共有する住居跡群ということになる。

住居跡規模の差は第82号住居跡を除いて殆どない。平面形は不整形のものが目立つ。

住居跡の主軸方向はまとまりがなく3種類に分けられる。すなわち第80、88号住居跡と第82、83号住居跡と第84号住居跡の3類である。主軸が直交する住居跡群の在り方は台地頂部に位置する第

2群に類似している。第2群の場合にも外観上土壙を共有する住居跡が存在する。

入口ピットの位置をみると全般的傾向としては台地斜面すなわち南側に入口が開口していると想定される。

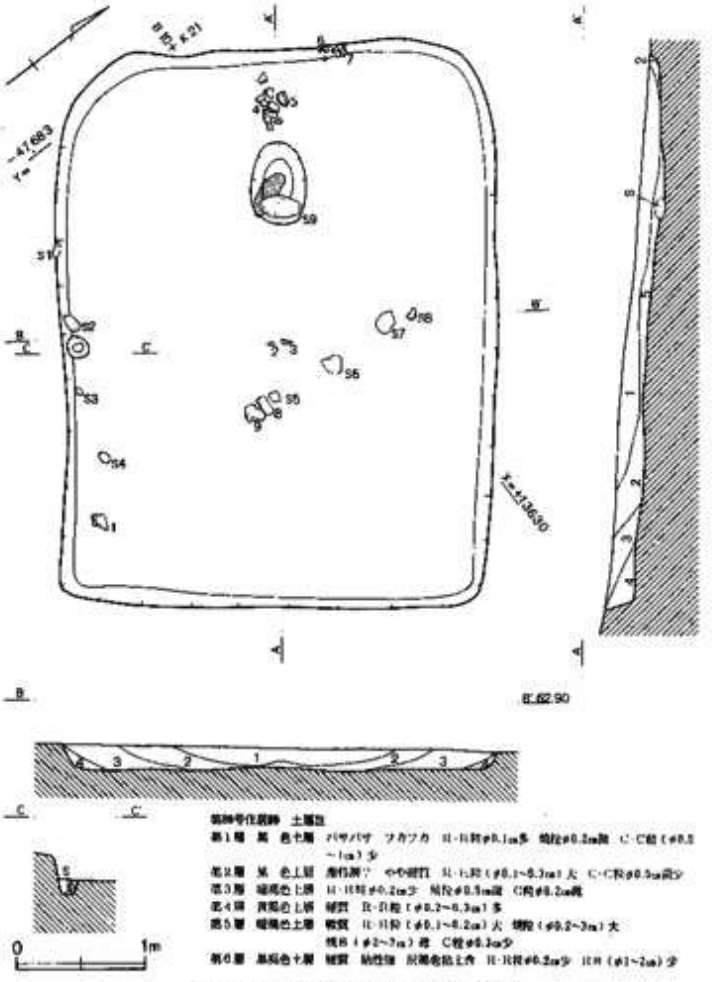
第80号住居跡（第52図）

南壁下に耕作による撹乱が見られたが影響は少ない。壁外施設は認められなかった。

埋土は吉ヶ谷式期の典型的推積で焼土、炭化物の含有は少ない。出土遺物はほとんどなく、大部分が埋土中出土。

平面形は北壁両隅が湾曲し東壁両隅がほぼ直角となる長方形。掘り込みはやや深く壁は傾斜する。

床は全体に柔らかく検出しにくく斜面に沿って西側へ傾く。炉は北西壁寄り中央に位置し楕円形で炉石が手前に据え置かれている。あまり焼けていない。



第52図　第80号住居跡平面図

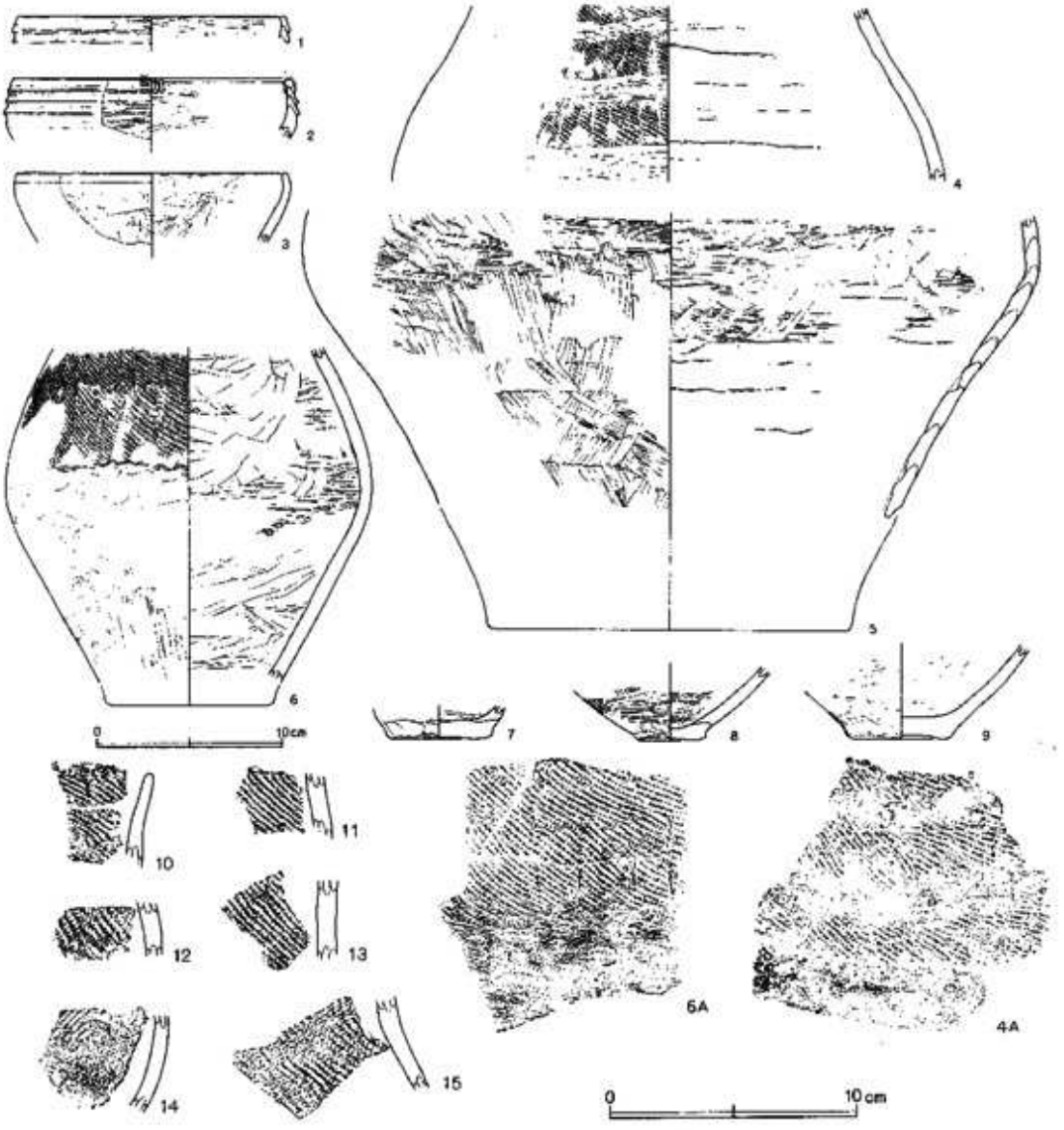
柱穴は検出されなかったが、南西壁下ほぼ中央に小ピットが1ヶ認められた。入口施設に伴うものと考えられる。

壁溝、貯蔵穴等は検出されていない。

生活段階に伴う遺物は炉の北側に出土したもののみで他は浮いている。

掘り方は存在せずローム直上が床となる。中央部に黒色土の分布が見られる。

第112号土壙はわずかに第83号住居跡寄りにあり約1.3mの距離にある。どちらに伴うか難しいが、調査時には、第83号住居跡に伴うものと判断した。したがって同住居跡と共に記述しているが、第112号土壙を中心として本住居跡、第82、83号住居跡が配置されているとみたほうがより妥当性をもつものである。



第53図　第80号住居跡出土遺物

第80号住居跡出土遺物(1)

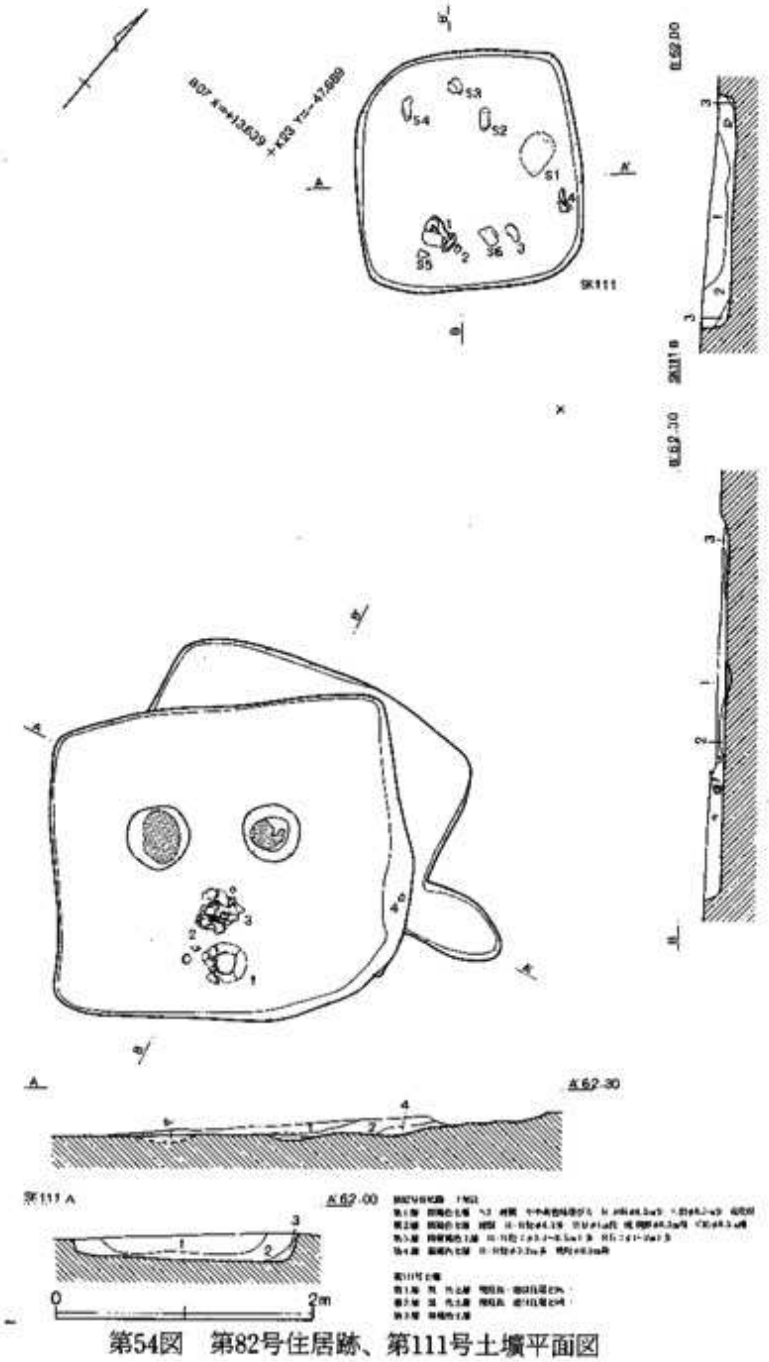
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	1	14.5 － 1.5	口縁部はやや内湾し口唇部はほぼ平坦で、内面僅かに凸状をなす。外面低い2状の凸帯（輪積み痕利用で下方にナデつけ）をもつ。	内外面ヨコナデ後内面横方向のミガキ。内面～口唇部外面赤彩される。	1/4高坏1細混入物極微量赤褐色（淡褐色）赤褐色
高坏	2	15.0 3.3	口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部は内ソギ状で平坦。細い粘土を折り曲げて口唇部貼付け。外面3条の低い凸帯（輪積み痕利用で下方ナデつけ）もつ。	口縁部ヨコナデ後内面横、外面体部斜方向のミガキ。凸帯上は或は工具ナデ？	1/10高坏1量1近似黒色、黒褐色

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	3	14.4 — 3.8	体部は外傾して立ち上がり、口縁部は内湾直立し口唇部尖り気味。	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面縦・斜方向のミガキ、内面ケズリ後粗いミガキ。内面一部赤彩痕残る。	1/3甕1白粒やや多暗赤褐色／黄褐色、赤褐色
甕	4	— — 9.4	頸部は次第に収縮し胴部及び口縁部を欠失する。3段の縄紋帯を施す。	外面横・斜ハケ後単節縄紋RL（0段多条、2指、末端未処理）横位施文（→→）、無文部及び下胴部横方向のミガキ。内面横方向のハケ後ミガキ？	1/4甕2近似赤粒粒度大多量白粒多暗黄褐色、淡褐色№1＋5。外面一部スス付着。内面剥離顕著。
鉢	5	— 16.1	胴部最大径付近から下胴部にかけて残存する。下胴部は直線的に立ち上がり内面剥離顕著。粘土帯巾は3cmほど。	外面下胴部斜め、最大径以上は横方向のハケ（9本/1.0cm）後最大径以下丁寧なミガキ、以上はやや粗いナデ加わる。内面最大径付近は横ハケで若干のナデ加わる。輪積み痕残る。	1/10甕2赤粒粒度大多量赤褐色№4。或は4と同一個体か？
甕	6	— 9.0 18.0	頸部上半及び底部を欠失する。胴部の張りは強く最大径はほぼ中位か？頸部は大きく外反するとみられる。	外面斜ハケ（5本/0.5cm）後単節縄紋RL（0段3条、3指、末端結束）横位施文（→→↓）以下横（粗）→縦（丁寧）方向のミガキ。内面縦・斜ハケ後やや粗い横方向のミガキ。	1/3甕1黄褐色№9。外面スス付着。内外面黒斑あり。
甕底部	7	— 5.2 1.6	底面平底で器肉やや薄い。	底面ケズリ後若干のナデ、外周ナデ後指頭押圧、木調整部分残る。内面比較的丁寧なナデ。	1/4甕1レキ少淡褐色
甕底部	8	— 3.2 3.5	底部は小形でほぼ平底、胴部は外傾して大きく開く。	底面ミガキ外周木調整部分残る。胴部内外面斜方向のミガキ。内外面磨滅顕著で詳細不明。	80%甕2近似白粒細赤粒れき少黄褐色、淡褐色内外面黒斑あ
壺底部	9	— 5.4 4.8	底面やや上げ底で、外周粘土貼付けか？	底面ケズリ外周ナデ加わり木調整部分残る。外面ケズリ後やや粗いミガキ、内面横・斜ケズリ後粗いミガキ乃至ナデ。	70%甕1赤粒粗れき少暗黄褐色、赤褐色№3。

第80号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
10	甕1白粒少茶	赤褐色	口縁部。口唇部丸く収まる。器肉薄い。外面単節縄紋RL（0段多条、2指）横位施文（→→↓）。内面ミガキ？
11	甕1	暗褐色、黒褐色	頸部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→↓）。内面横方向のミガキ。
12	甕1	暗赤褐色、淡褐色	頸部。外面単節縄紋RL横位施文（→→↓）。内面横方向のミガキ。
13	甕1	黒褐色、褐色	頸部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文。内面やや粗いミガキ。
14	甕1	暗赤褐色	胴部。横ハケ後単節縄紋RL（0段多条）以下縦丁寧ミガキ。内面ミガキ。
15	甕1	暗赤褐色／褐色	頸部。単節縄紋RL（0段3条）横位施文。内面荒ミガキ。

註1　図示したもの以外に甕胴部片5点（甕1　4、甕1　1）が出土し、内1点が縄紋RL（甕1）施文される。他に壺胴部片2個体分3点（甕1近似）が出土している。



第54図　第82号住居跡、第111号土壙平面図

模はそれ程違わないがやや小形である。付随するものと把握した。

第82号住居跡（第53図）

第８１号住居跡の精査により検出されたもので当初確認できなかった。ほとんど床面が露出したような状態であったが、第８１号住居跡の貼り床などは検出できなかった。

埋土はわずかに存在するのみであるが出土遺物は比較的多い。

平面形は東隅が湾曲するが略長方形で壁はほとんど残っていない。床面ほぼ平坦で、中央部は部分的に硬質面が残るが全体に柔らかい。炉は２ヶ所に検出され、西壁寄りが新しく、東壁寄りが古い。東壁寄りのものは埋め戻しによるか焼土を確認できなかった。炉石はない。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物は南壁下出土の土器群で壺形土器が正位で据え置かれたような状態で、他は崩れた状態で検出された。

掘り方は存在せずローム直上が床面である。

第111号土壙が北側約3.2mの位置にある。本住居跡と規

第111号土壙

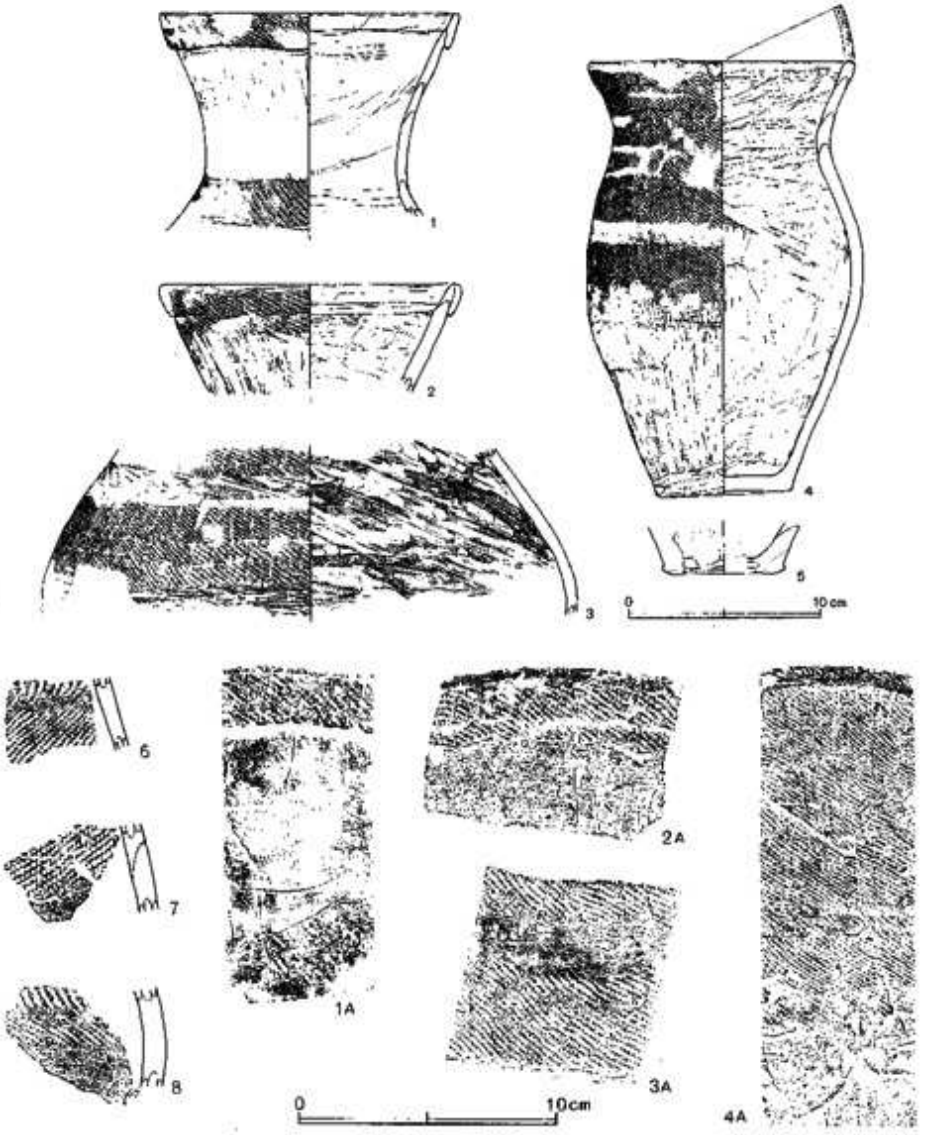
（第53図）

吉ケ谷式期に典型的な黒色土の落ち込みとして確認された。

大形の隅円方形で深い。

出土遺物は比較的多量で、大部分が床面乃至床直出土。

第82号住居跡の北側約3.2mに位置し主軸方向はほぼ一致する。



第55図　第82号住居跡出土遺物

第82号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	15.6 － 10.5	胴部から緩やかに頸部に移行し外反して開く。口縁部は折り返し口縁で口唇部は平坦、内面稜をなす。	外面頸部単節縄文RL（0段多条、2指）横位施文（→→。）、折り返し口縁部も同様。頸部縦・斜（下端横）方向のミガキ。内面口唇下ヨコナデ以下斜ハケ？後横・斜方向のミガキ。	90%礫2近似白粒少量細粗れきやや多赤褐色№1＋2。内外面とも摩滅顕著。
壺	2	15.8 － 5.6	口縁部は複合口縁で粘土紐貼付け。端部丸く内面稜をなす。	外面頸部縦・斜ハケ（14本/1.0cm←）後粗いナデ乃至ミガキ。口縁部外面指頭押圧後単節縄文RL（0段3条、2指）横位施文（←→粗い）。内面横ハケ後やや粗い横方向のミガキ（←→）。	1/5礫1白粒やや多量暗黄褐色、赤褐色№2と同一か？
壺	3	－ － 8.7	胴部中位のみ残存。粘土帯は3～4cm程。下胴部頃2帯の縄紋帯を施す。	下胴部斜、最大径付近横方向のハケ（16本/1.0cm、内外面同一工具）後単節縄文RL（0段3条、2指）横位施文（→→↑）後無文帯かるいヨコナデ加わる。内面粗い斜ハケ（←←↑）後粗い若干のナデ。	90%礫1近似白粒少量粒褐色、赤褐色№1。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	4	14.0 7.2 22.5	底部は平底でやや大形、胴部はあまり張らず長楕形で最大径を中位にもつ。頸部は緩くくびれ外反して開き口縁部は平坦で縄紋施文（同一原体右回り）。頸部内面輪積み痕あり。	底面ナデ外周若干のナデ、胴部下半斜ハケ後粗いナデ？口唇ドヨコナデ以下単節縄紋RL（0段4条、2～3指、末端結束）横位施文（→→↓やや粗く小刻み）で4段に亘たる。以下間隔飲いた縦方向（下端一部横）ミガキ。内面下半粗い斜、上半横ハケ後下半は丁寧、上半はやや粗い横方向のミガキ（→→）。底面丁寧なナデ。	80%甕1赤褐色№2 4 3。外面頸部一部スス付着。
甕	5	— 5.5 2.5	底部は平底で器肉薄い。	底面ミガキ外周未調整。外面縦方向のミガキ、内面比較的丁寧なナデ。	1/10甕2近似白粒少量淡赤褐色、赤褐色

第82号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
6	甕1	黒色、赤褐色	頸部。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文（→↓）。内面斜ハケ後ミガキ。№3。
7	甕1白粒少量	暗赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR横位施文。内面横方向のミガキ。
8	甕1	黒褐色（褐色）暗褐色	胴部。外面横方向のハケ後単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→↓）以下横方向のミガキ。内面ミガキ。

註1　図示したもの以外に甕胴部片2個体分3点（甕1）が出土している。

第111号土壙出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	12.4 — 13.3	底部は接合しないが同一個体とみられる。胴部は張りをもち内傾して頸部に移行し、上部で小さく外反する。口唇部尖り気味、縄紋施文（同一原体右回り）。	底面ナデ、外周ミガキ（未調整部分残る）。外面胴部縦・斜ハケ（9本/1.0cm）口唇ドヨコナデ無節縄紋L（1段3条太細、3指、末端結束）横位施文（→→↓）3段に亘り、以下粗いミガキ乃至ナデ。内面斜ハケ（←←）後横・斜方向のミガキ。	2/3甕1白粒少量赤褐色／黒色、暗赤褐色№4。外面一部スス炭化物付着。
甕	2	11.9 — 13.2	下胴部は直接接合しないが同一個体とみられる。胴部は張りをもち最大径は中位で球形に近い。頸部は緩くくびれ上位で外反して開き口縁状呈す。口唇部尖り気味で縄紋施文（同一原体、右回り）。	外面ハケ不明口唇ドヨコナデ以下無節縄紋R（1段細太、2～3指）横位施文（→→↓）3段に亘る。内面斜ハケ後粗い横方向のミガキ（→→）口縁部は比較的丁寧。	70%甕1黄褐色／赤褐色、暗褐色№1。内外面一部スス、炭化物付着。

第111号土壙出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
3	甕1	黒褐色／褐色	胴部。無節L？以下ミガキ
4	甕1	暗赤褐色、暗褐色	胴部。外面単節縄紋RL横位施文以下横→斜ミガキ。内面横方向のミガキ。
5	赤	甕3細粗片岩 黄褐色／赤褐色、褐色	頸部。縄紋帯の上下は赤彩される。外面単節縄紋RL（2指）横位施文（→→）後上下部横方向のミガキ。内面やや粗い横方向のミガキ（→→）。
6			石皿。S1、9.45Kg

註1　図示したもの以外に甕胴部片4点（甕1）が出土し、内1点が縄紋RL施文される。

第83号住居跡（第57図）

埋土は吉ヶ谷式期の典型的推積である。

遺物は少量で大部分が埋土中で主に東壁下から出土し南隅部では上層から集中出土している。

平面形は略方形で西壁両端は湾曲するが比較的整っている。

掘り込みは深く壁はわずかに傾斜する。

床は全体に柔らかいが、中心部はやや硬い面が広がり全体に北壁方向へ緩く傾斜する。

炉は北壁寄り中央に位置し、縦長の楕円形で底面はよく焼けている。

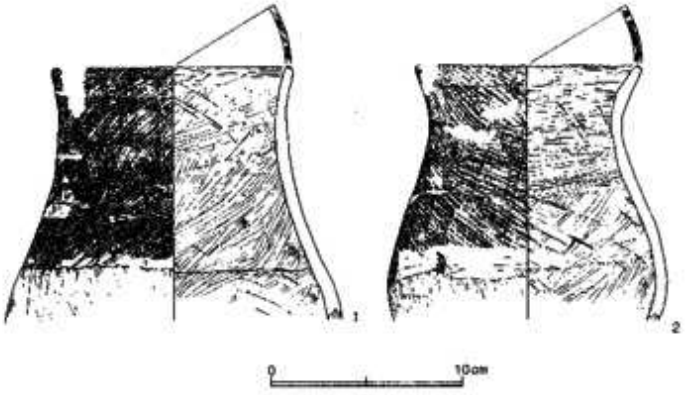
炉石が存在するが散在的で、旧状をとどめていないと考えられる。

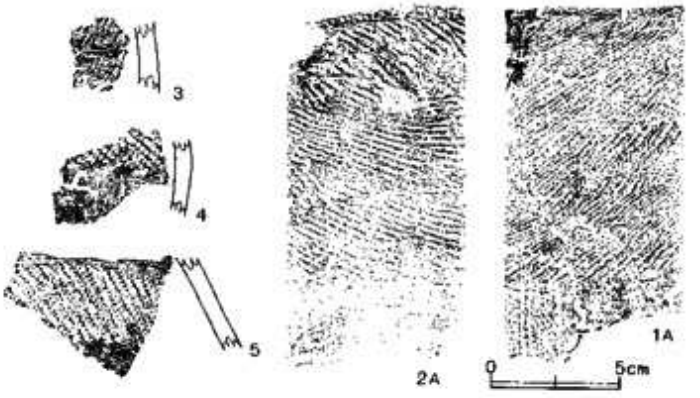
柱穴は存在しないが、東壁下北寄りに小ピットが存在する。あるいは位置的に貯蔵穴か。

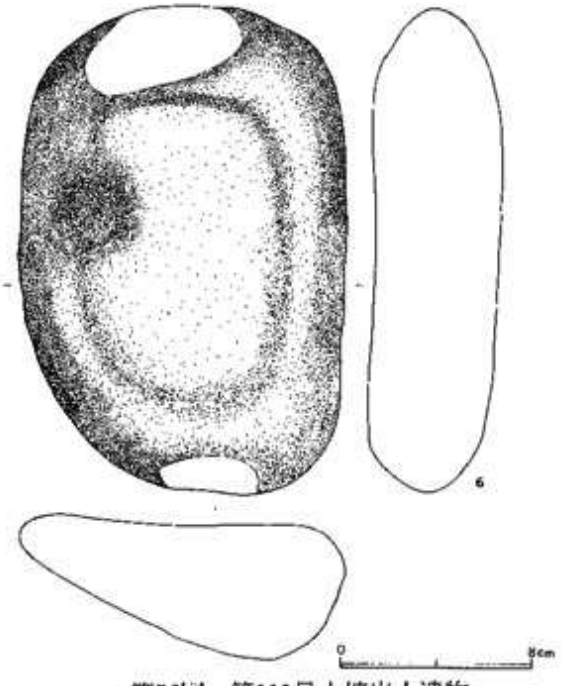
壁溝は検出されなかった。

掘り方は存在せずローム直上が床面で、炉周辺及び東半部に暗褐色土が分布している。

第112号土壙が南西約1.3mの位置にあり、第８０号住居跡よりもわずかに近く本住居跡に付随すると考えられる。







第56図　第111号土壙出土遺物

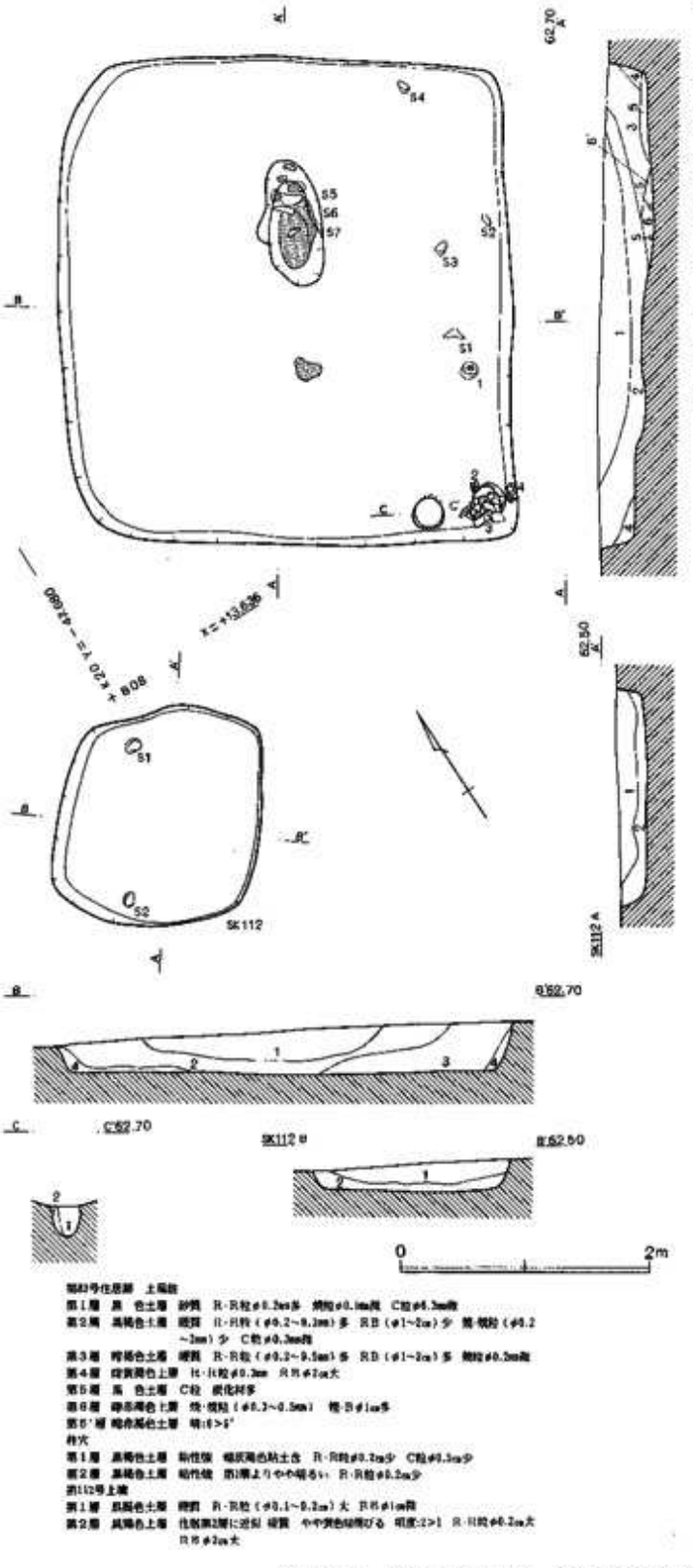
第112号土壙（第57図）

吉ケ谷式期に典型的な黒褐色土の落ち込みとして容易に確認された。

南北壁が張りを持つ隅円長方形で掘り込みは深い。

出土遺物は石器２点で埋土中の出土である。

主軸方向は第83号住居跡とほぼ一致する。



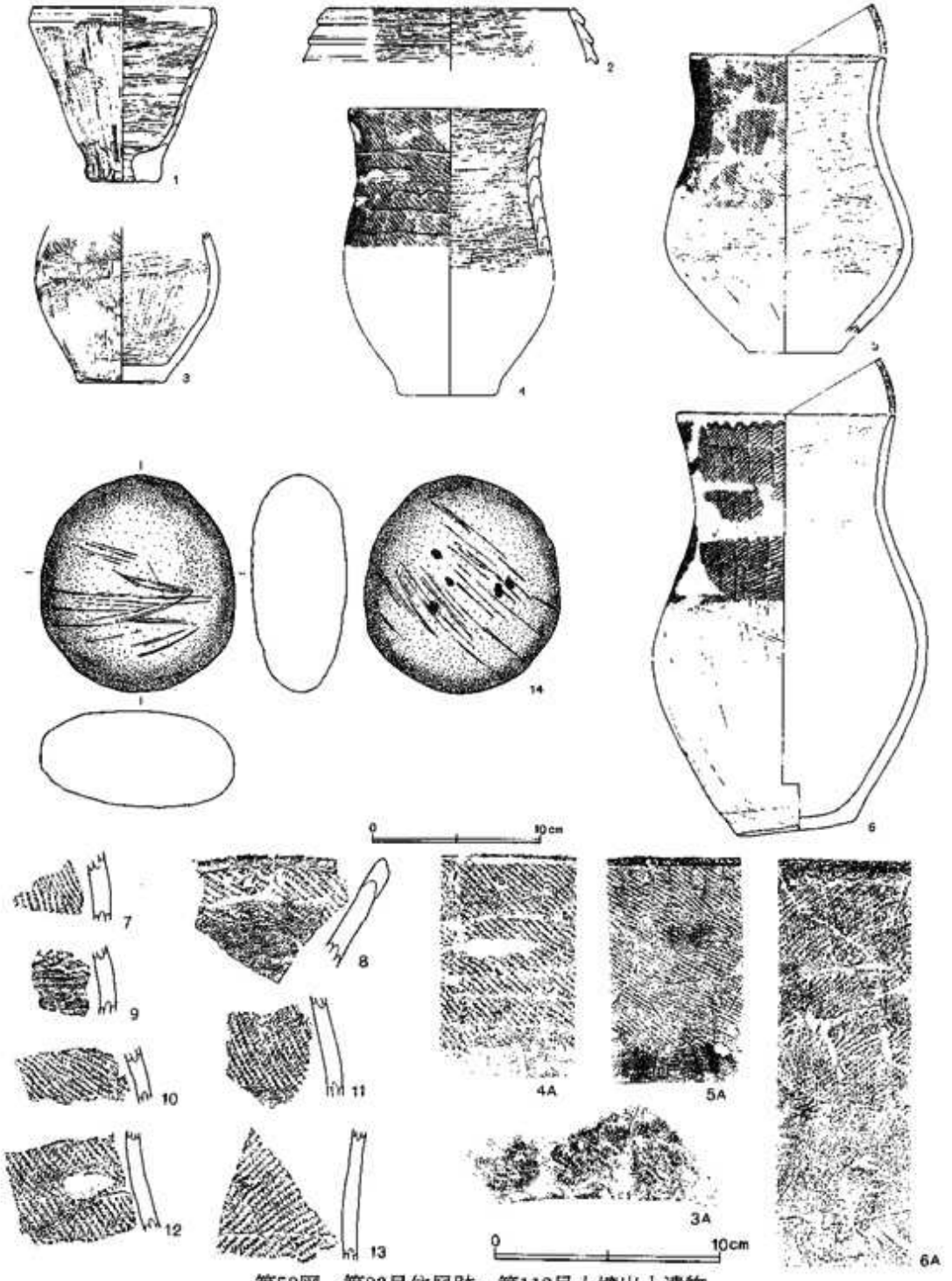
第57図　第83号住居跡、第112号土壙平面図

第83号土壙出土遺物(2)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
瓶	1	10.8 4 10.3	底部は凸出し平底で極厚く中央部上から穿孔（径1.5cm）。体部は器肉薄く縦長で内湾気味に立ち上がりそれほど開かない。内面輪積み痕残る。口縁下緩い稜をなし内傾し、端部尖り気味。	底面～外周ナデ、口縁部ヨコナデ、体部外面縦ハケ後縦方向のミガキ内面横ハケ後やや丁寧なナデ。	1/4甕2白粒細赤褐色、黄褐色外面口縁部、底部一部スス付着。
高坏	2	14.8 － 3.4	口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部ほぼ平坦でやや内ソギ状を呈し外面僅かに凸状をなす。輪積み痕利用の3段の凸帯をもつ	内外面ヨコナデ？後横方向の丁寧なミガキ。凸帯下端は強く施し強調するか？	1/5甕2細白粒少量赤褐色（褐色）赤褐色SJ84№2と接合。
小形壺	3	－ 5.0 8.9	底部はやや大形で平底、胴部は内湾して立ち上がり、頸部以上を欠失する。最大径はほぼ中位か？	底面磨滅顕著。下胴部縦方向のミガキ、最大径やや上から単節縄紋RL横位施文（→→）。内面底面ナデ以上横方向のミガキで若干のナデ加わる。	80%甕1暗赤褐色（黒褐色）赤褐色№2。外面黒斑あり。
甕	4	11.8 － 8.8	下胴部を欠失する。頸部中位で緩くくびれ小さく外反して開く。口唇部丸く収まる。外面巾2cmほどで7段の輪積み痕残る。	外面口唇下ヨコナデ以下単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→。）現4～5段に亘る。内面ハケ？後横方向のミガキ。	90%甕1白粒少量淡褐色／赤褐色、暗褐色№1。外面一部スス付着。黒斑あり。
甕	5	11.8 － 16.4	底部付近を欠失する。胴部は最大径でやや強く張り頸部中位でくびれ小さく外反して開く。口唇部ほぼ平坦、内面直下緩い稜をなす。口唇端部縄紋施文（同一原体左回り）。	外面口唇下ヨコナデ以下単節縄紋RL（0段3条、2指）横位施文（→→↓）3段に亘り、以下横→縦方向の丁寧なミガキ。内面ハケ？後横方向のミガキ（→→）。	80%甕1白粒少量赤褐色№4。外面一部スス炭化物付着。内外面黒斑あり。
甕	6	13.1 5.3 25.2	底部はほぼ平底で胴部は最大径で強くはり、頸部は緩くくびれ上位で小さく開く。口唇部は丸く収まり縄紋施文（同一原体左回り？）。	底面未調整部分の残るナデ、口唇下ヨコナデ以下単節縄紋LR（0段3条、2～3指、末端結束）横位施文（→→↓、最上段逆位）3段に亘り以下ミガキ。内面ミガキ。内外面とも磨滅顕著で詳細不明。	90%甕1白粒少量赤褐色№3。外面黒斑あり。

第83号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
7	甕1	暗褐色、褐色	頸部。外面単節縄紋RL（0段（細太）多条）横位施文。内面ミガキ。
8	甕1白粒少量	赤褐色（茶褐色）黒褐色	口縁部は粘土貼付けによる複合口縁で口唇部尖る。器肉厚い。内外面ヨコナデ、単節縄紋RL（0段多条、2指）横位施文（→→）。内面比較的丁寧なナデ。
9	甕1	赤褐色（淡褐色）赤褐色	胴部。外面ハケ？（10本/1.0cm）後単節縄紋LR横位施文、横方向のミガキ。内面ミガキ。
10	甕1″赤粒粗	暗褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→）。内面横方向のミガキ。
11	甕2	暗赤褐色、黄褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段（細太）3条、2指？）横位施文（→→↓）。内面横方向のミガキ（→→）。
12	壺1	黄褐色、暗黄褐色	頸部。外面単節縄紋LR（0段5条？複節状の繊維圧痕、2指）横位施文（→→↓）現3段に亘る。内面横方向のミガキ。



第58図　第83号住居跡、第112号土壙出土遺物

第84号住居跡（第59図）

北東隅に土壙（現代）による撹乱があるが影響は少ない。

壁外施設は認められなかった。

埋土の残りは悪いが吉ヶ谷式期の典型的推積と判断され、焼土、炭化物をあまり含まない。

埋土中の出土遺物はほとんどない。

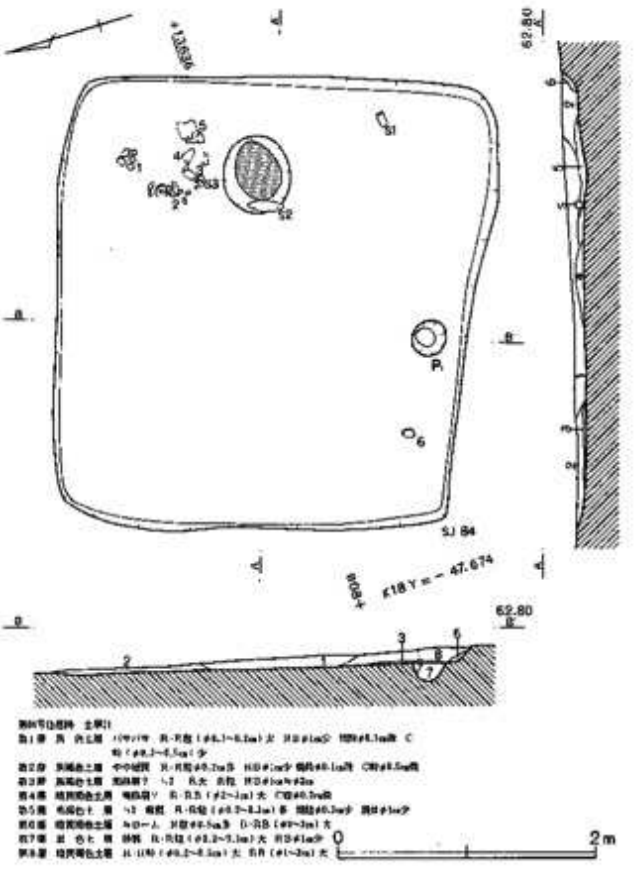
平面形はやや歪むが略方形で東南隅が鋭角的である。南、東壁は比較的残るが北壁はほとんど残っていない状態である。

残存部からみると壁はやや傾斜する。

床面は全体に柔らかくほぼ平坦。

炉は東壁寄り中央に位置し炉石が手前に据え置かれ、ほとんど焼けていない。

柱穴は検出されなかったが南壁下ほぼ中央にやや不明瞭な小ピットが存在する。斜めに穿たれておりあるいは入口に伴うものか。壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。出土遺物は炉の左側に集中する。南壁下のものも含めてやや浮いている。

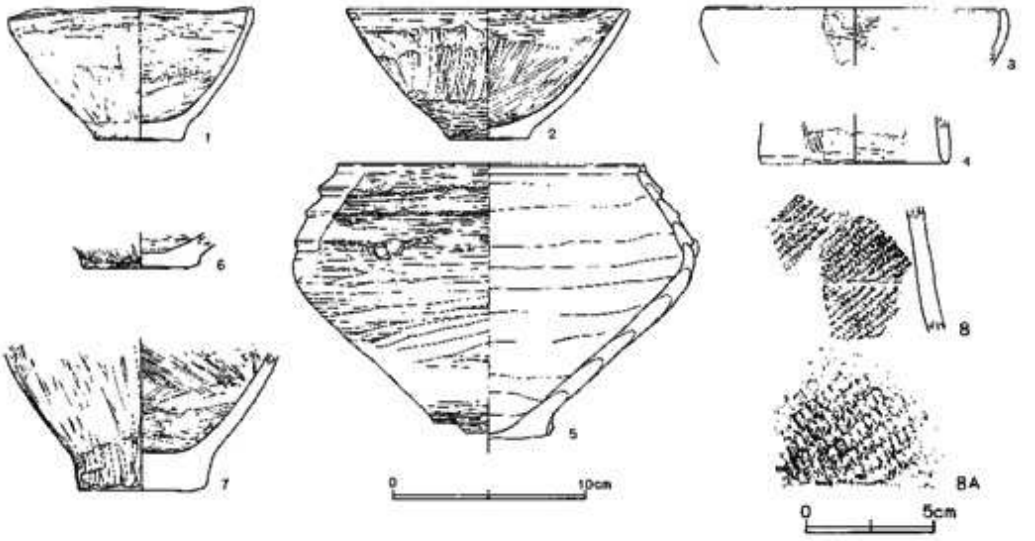


第59図　第84号住居跡平面図

掘り方は存在しない。第８３号住居跡が西側約2.2mに位置し極接近している。

第84号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	12.7 4.4 6.8	底部は平底で器肉厚く、体部は僅かに内湾気味に立ち上がり口縁部短く直立する。口唇部丸く収まる。	底面は丁寧なナデ。口唇下ヨコナデ体部外面縦方向のミガキ、内面磨滅顕著で不明瞭であるが縦・斜ミガキで底部に及ぶ。内面黒色処理か？	80%礫２細粗赤粒粗少量黄褐色、黒色No.1＋2。
鉢	2	14.6 4.0 6.8	底部は平底で体部は僅かに内湾してそのまま開く。口唇部やや外ソギ状。口縁平面形は楕円乃至船形状を呈する。	底面磨滅するがミガキか？口縁部内外面ヨコナデ（ib広右回り）後体部外面縦・斜、内面横・斜方向のミガキで底部に及ぶ。	80%礫１細角閃石黄褐色No.6。内外面黒斑あり。
鉢	3	15.5 — 3.0	体部は内湾して立ち上がり口縁部は直立気味で口唇部は尖る。	口唇下ヨコナデ後体部外面縦・斜ミガキ、内面ヨコナデ。	1/10礫１赤褐色、黄褐色No.5。
高坏脚部？	4	— 9.7 2.4	脚部は直線的に開き器肉やや厚い。端部ほぼ平坦。	外面縦方向のミガキ、内面ヨコナデ。	1/10礫１近似石英レキ少赤褐色No.6。



第60図　第84号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	5	15.8 － 14.0	接合部は細く（径6.5cm）微かに刻みの残る低い凸体が1状巡る。体部は深く直線的に開き強く内湾して口縁部に移行する。外面縦積み横利用の3段の凸帯をもち、端部縄紋施文？最下段凸帯下2個一対の円形貼付文（径0.9cm）が現3ヶ所認められる。口縁部内ソギ状で細い粘土紐貼付け？。	内外面とも磨滅剥離顕著で詳細不明であるが、口縁部ヨコナデ後体部内外面ともミガキ？赤彩の痕跡あり。	70%壁2細白粒少量橙褐色、黄褐色№2～5。外面一部黒斑あり。
甕底部	6	－ 5.3 1.3	平底で器肉やや薄い。内面剥離顕著。	底面ナデ。外周未調整部分の残るナデ、外面ミガキの工具痕残る。	80%壁2細粗多白粒粗淡褐色、淡褐色№6。
壺	7	－ 6.6 7.0	底部は平底で凸出し器肉極厚い。胴部はやや内湾して立ち上がる。	底面未調整部分の残るナデ外周若干のナデで圧痕（巾0.4cm）残る。胴部外面縦ハケ後縦方向のやや粗いミガキ、内面斜ハケ（5本/0.5cm）後横・斜ミガキ、底面丁寧な指頭ナデ。	80%壁1細白粒少量淡褐色、赤褐色№2。外面黒斑、内面一部スス・炭化物付着。

第84号住居跡出土遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
8	壁1	黒褐色、褐色	頸部。外面複節縄紋LRL？(0段5条の単節か？2指) 横位施文（→→→）現3段に亘る。内面やや粗い横方向のミガキ（→→）。

註1　図示したもの以外に甕胴部片2点（壁1）が出土している。

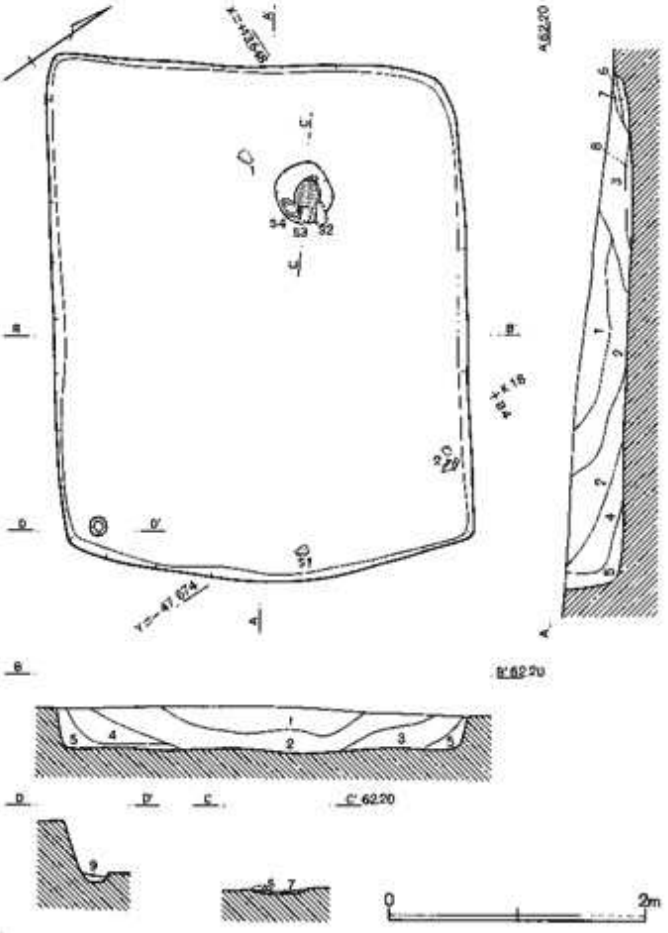
第88号住居跡（第61図）

住居群の北端で検出されたが集落の区画溝等は周辺に見出せなかった。
壁外施設は検出されなかった。

埋土はよく残っており吉ヶ谷式期の典型的堆積であるが斜面上方からの土砂の流入が認められる。5層が壁際でほぼ直立しており何らかの住居施設の痕跡と考えられる。
出土遺物はほとんどないが、全て埋土中出土である。

平面形は東隅がやや凸出するが略長方形で南東壁は外側に湾曲する。壁は斜面上部は深くよく残っておりわずかに傾斜する。南西壁はわずかに残存するのみである。床はほぼ平坦で、全体に硬く、特に中央部は踏み締まっていた。南西壁下ほぼ中央に暗褐色土が分布する。炉は北西壁寄り中央からやや北側にずれた位置にあり略円形で中心部がよく焼けている。炉石は小形のもの3個が弧状に配置されていた。柱穴は検出されなかった。南隅に小ピットが存在したがごく浅く木根状で、構築物かどうか不明確である。壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。

掘り方は存在せずローム直上が床面である。
周辺部に付随するような土壙も存在しない。

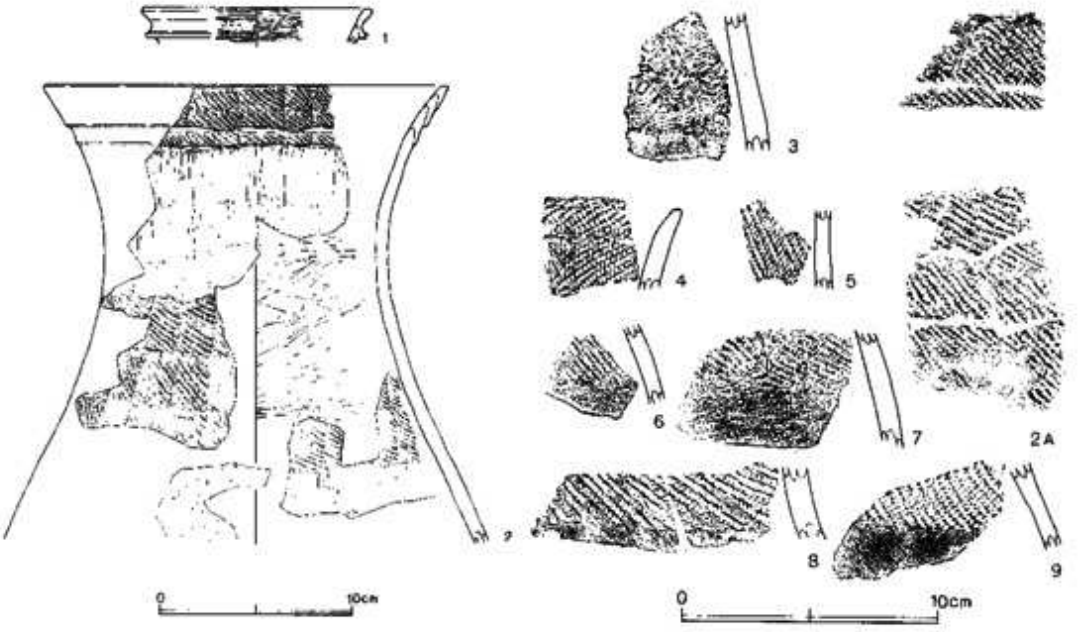


第88号住居跡　土層註
第1層　黒　色土層　フカフカ砂質　R・R粒φ0.1cm少
第2層　黒　色土層　第1～3層の堆積度Y　軟質　R・R粒φ0.2cm多　C粒φ0.5cm微
第2'層　黒　色土層　h2　堆積度:Y>2　R・R粒（φ0.1～2cm）大　RBφ2cm微
C粒φ0.2cm少
第3層　黒褐色土層　堆積:3>4　硬質　R・R粒（φ0.2～0.5cm）多
RB（φ1～2cm）少　C粒φ0.5cm微
第4層　黒褐色土層　h2　R・R粒φ0.5cm多　RBφ2cm多　C粒φ0.5cm少
第5層　暗褐色土層　粘性有　R・R粒（φ0.2～0.3cm）多　RBφ2cm少
第6層　暗赤褐色土層　R・R粒φ0.2cm少　焼・焼粒（φ0.3～0.5cm）大
第7層　暗褐色土層　R・R粒φ0.2cm少　焼粒φ0.5cm微
第8層　暗黄褐色土層　R・R粒（φ0.2～0.3cm）多　RBφ1cm少
第9層　暗褐色土層　粘性強　暗灰褐色粘土含　R・R粒（φ0.3～5cm）多

第61図　第88号住居跡出土遺物

第88号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	1	11.8 — 1.9	口縁部は外傾して開き、口唇部平坦で内面稜をなす。外面粘土貼付けによる細い凸帯1条巡り先端刻み施す。器内溝い。	外面工具ナデ？後凸帯上下指頭ナデ。竹による刻みは左回り。内面丁寧なミガキで赤彩される。	1/20壺3細混入物少量黄褐色、赤褐色
鉢	2	21.0 — 23.8	頸部から緩く外反して立ち上がり、そのまま外反する口縁部に移行する。外面3段の輪積み痕残る。口唇部平坦。	頸部縄紋帯は広く、単節縄紋RL（0段3条）横位施文←←1。上下は縦篦ミガキ。口縁部同じく縄紋施文。内面比較的丁寧なミガキ。	1/2壺1赤褐色



第62図　第88号住居跡出土遺物

第88号住居跡出土遺物(2)

番号	胎　土	色　調	備　　考
3	雲1細白粒少量	暗褐色／赤色	胴部。外面波状櫛描文（8本/1.4cm左回り、下→上）下部横方向のミガキ。内面横方向のミガキ。櫛描文以外は赤彩。
4	雲1	黒褐色（黄褐色）赤褐色	口縁部。外面口唇部（左回り）から単節縄紋LR（0段多条、2指）横位施文（→→↓）。内面丁寧な横方向のミガキ。
5	雲1	黒褐色（暗褐色）暗褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条太筋）横位施文。内面ミガキ。
6	雲1細白粒少量	褐色／赤色、褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文後横方向のミガキ、赤彩。内面ミガキ。
7	雲1	黄褐色、赤褐色	胴部。外面ハケ後単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→）以下横方向のミガキ。内面丁寧なナデ。外面黒斑。
8	雲1″赤粒レキ多	褐色（暗褐色）茶褐色	胴部。外面ハケ後やや丁寧なナデ後単節縄紋RL横位施文（→→）。内面横・斜ハケ（6本/0.5cm）後やや粗いナデ。
9	雲3細粗片岩雲母細	暗褐色／赤褐色、暗褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文後横方向のミガキ、赤彩。内面やや粗いミガキ。

註1　図示したもの以外に雲胴部片6点（雲1　5，雲1′　1）が出土し、他に壺胴部片2個体分12点（雲3　6、壺1″　6）、高坏片1点（雲1近似　細）が出土している。

f　その他の遺構と出土遺物（第62図）

弥生時代以外の遺構で吉ケ谷式土器を出土するものは、第3、4、5、9、12、16、18、26、35、49、51、52、54、56、60、71、74、98号住居跡、第3号掘立柱建物跡の18軒と1棟である。

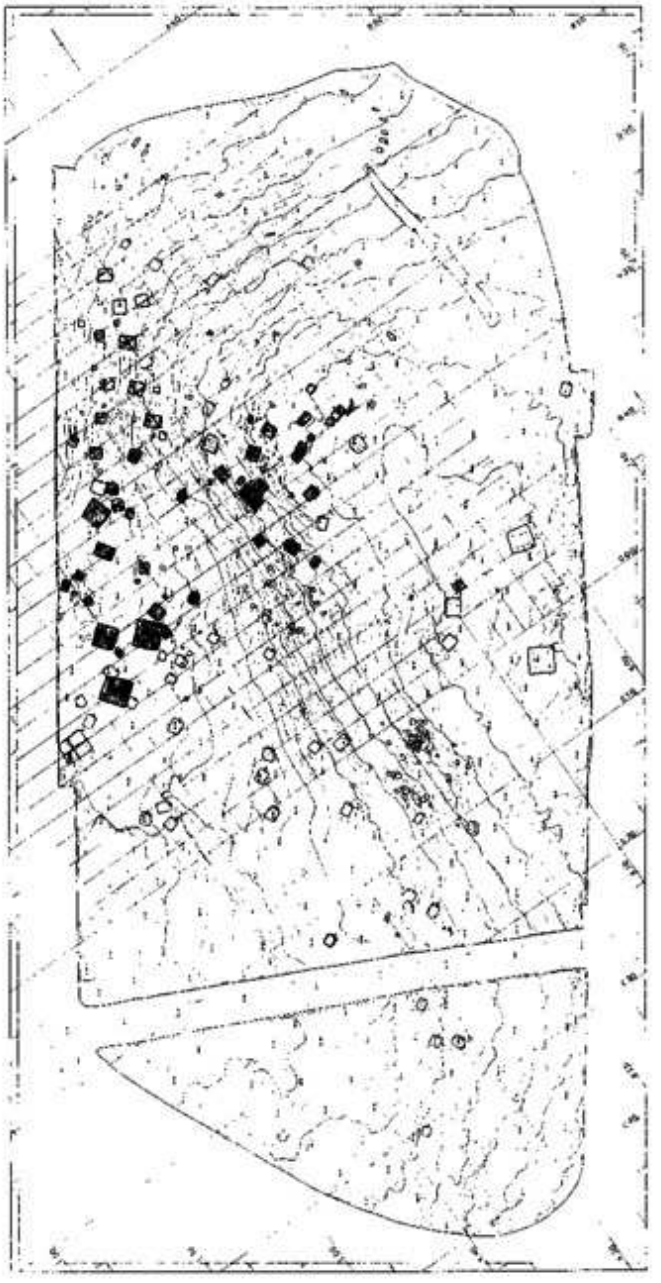
各遺構出土遺物は単独ないし数点と少量で、Grid出土遺物を含めても合計42点である。

第62図は吉ケ谷式期の遺構とその他の遺構及びGrid出土の吉ケ谷式土器の出土位置を重ね合わせて図示したものである。これによると以下のことがわかる。

すなわちその他の遺構及びGrid出土の吉ケ谷式土器の出土位置の分布は、弥生時代の遺構分布の外側主に南、南西方向にややずれていること、住居跡群の北側の出土は少ない、その他の遺構出土のものが多く,Grid出土遺物は少ないこと、台地上の第２群と重なる平安時代第３群の出土が多いのは勿論であるが、古墳時代第１、２住居跡群からの出土も多い。

住居跡群から最も離れた出土位置は第35号住居跡であること等である。

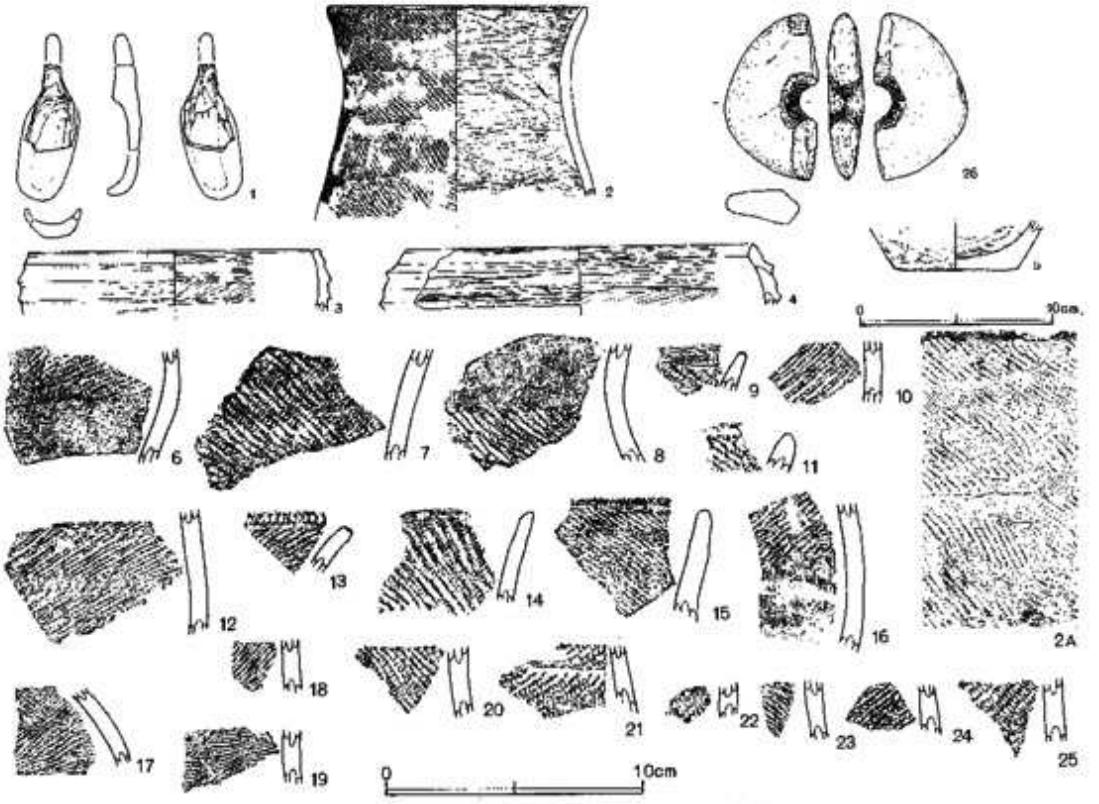
総点数が少ないので推定の域を出ないが、この分布のずれは、仮に遺物出土範囲が吉ケ谷式期の集落範囲と重なるとすれば（この場合自然の営力を無視していることになるが)、該期の集落範囲乃至活動範囲は遺構分布の外側南ないし南西方向に広がること及び第35号住居跡方向への行動の展開が想定される可能性を含んでいる。



第63図　弥生時代遺物分布図

その他の遺構、Grid、表採遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土製品	1	－	把手は舟部に対しやや角度をもつ。	指頭押圧、ナデ。	1/3褐１暗褐色ＳＪ７４
甕	2	13.5 － 9.8	胴部はそれほど張りをもたず頸部に移行する。上部で緩くくびれ小さく外反して開く。口唇部やや尖り気味。外面微かに輪積みの凹凸残る。	外面口唇ヨコナデ、天地逆位で単節縄紋RL（0段3条、２指、末端結束）横・斜位施文（→→↓）部分的に結節文残る。内面斜ハケ（10本/1.0cm←←↑）後口縁下横ハケ後やや粗い横方向のミガキ。	80%褐１白粒細少量黒褐色ＳＪ７１№１。外面一部スス付着。



第64図　その他の遺構、Grid、表採遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	3	15.0 3.3 —	口縁部は内湾して立ち上がり外面3段の凸帯をもつ。口脣部平坦。	外面木口状工具ナデ後丁寧なナデ、内面ミガキ。内外面赤彩。	1/10高坏3黄褐色SJ5
高坏	4	18.2 - 3.5	口縁部内湾して立ち上がり口径部内ソギ状で端部尖る。外面断面三角形状、粘土貼付けによる凸帯2状あり。	外面横ナデ乃至木口状工具によるナデ後若干の指頭押圧。内面横ナデ後横筆ミガキ。外面下段凸帯以下及び内面赤彩。	1/5高坏2細粒微白多褐色、赤褐色表採
壺底部	5	— 6.4 2.5	底部は平底。	底面未調整、外面粗いミガキ。内面ナデ?	1/4壺2暗褐色／褐色SJ52

その他の遺構、Grid、表採遺物(2)

番号	胎土	色調	備考
6	壺1	暗赤褐色	胴部。ハケ後単節縄文LR（0段多条）以下縦筆ミガキ。内面ハケ後横筆ミガキ。SJ3
7	壺2	黄褐色／暗黄褐色	頸部。単節縄文RL（0段3条）、内面ミガキ。SJ9
8	壺	細少粗雲微赤	赤褐色（淡褐色）赤褐色 頸部。外面単節縄文（0段3条）擬似縄文、以下縦筆ミガキ、赤彩。内面横筆ミガキ、一部赤彩。SJ16内面剥離顕著。
9	壺1	黒褐色	口縁部。口脣部から外面単節縄文RL（0段多条）、内面ミガキ。SJ26

番号	胎土	色調	備考
10	壺1	暗褐色（黒色）黒褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）横位施文。内面やや粗い横方向のミガキ。ＳＪ５４
11	甕1	赤褐色、茶褐色	頸部。外面縄紋付加条第１種付加２条LR＋2L？（２撚、末端未処理）横位施文（→→↓）で末端0.8cmほどあけて押圧？。内面ハケ後横方向のミガキ。ＳＪ５６
12	甕1	暗褐色	口縁部。口唇部から外面単節縄紋RL（0段多条）、内面ミガキ。ＳＪ６２
13	甕1'	黄褐色	口縁部。単節縄紋RL（0段3条）、内面ハケ後ミガキ。ＳＪ７４
14	甕2	暗褐色	口縁部。無節L、内面ハケ後ミガキ。ＳＪ７４
15	甕1	赤褐色	口縁部。器肉厚く口唇部尖る。口唇部ヨコナデ？外面単節縄紋RL（0段多条）横位施文（→→）。内面ミガキ。ＳＪ９８
16	甕1	淡褐色、褐色	胴部。外面斜ハケ後単節縄紋LR（0段多条）横位施文（→→）以下横→縦方向のミガキ。内面斜ハケ？（6本/0.5cm）後粗いミガキ。ＳＪ９８
17	甕1	暗赤褐色／暗黄褐色	胴部。単節縄紋LR（0段多条）、内面ミガキ。ＳＢ３のＰ6出土。
18	細微全微	赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）、内面ミガキ。B25K07
19	細粗微全微	赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）斜位施文、内面横位ミガキ。B37K04
20	細粗レキ微白多	淡褐色、黄褐色、黄褐色	胴部。外面単節縄紋？RL（0段多条１段細太）、内面ミガキ。B13K28
21	細粗レキ微白多針微	黒色、赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段3条）横位施文、内面ミガキ。B21K05
22	甕1 細粗微白多	暗赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR、内面ミガキ。表採
23	甕1 細微全微	黒褐色（黄褐色）黄褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）、内面ミガキ。表採
24	甕2 細粗多白赤多	暗赤褐色（赤褐色）暗赤褐色	胴部。外面単節縄紋LR（0段多条）、内面ミガキ。表採
25	甕1 細粗レキ微白多	褐色、赤褐色	胴部。外面単節縄紋RL（0段多条）、ハケ後ミガキ。表採
26			環状石斧、表採、90g

註１　図示したもの以外で縄紋施文されるものは26点で以下のとおりである。

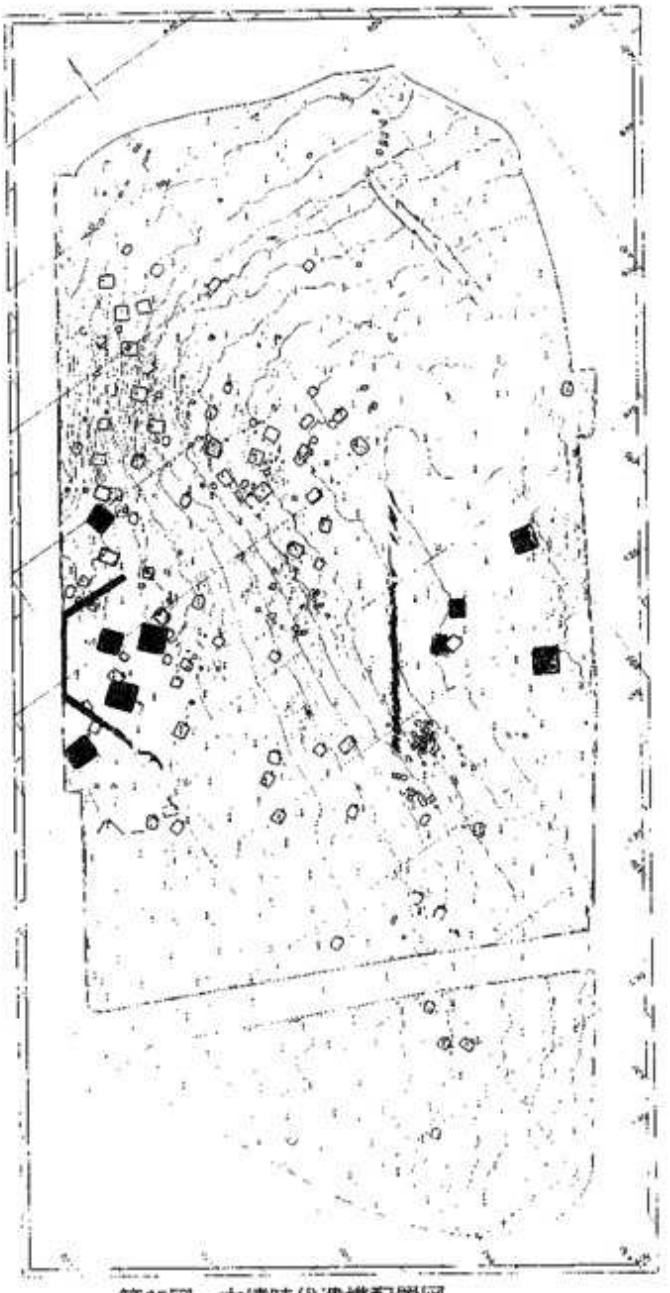
ＳＪ３　１（RL0段3条　甕１細）
ＳＪ４　１（RL0段3条太細撚　甕１細）
ＳＪ９　１（RL0段3条　甕１細）
ＳＪ12　３（底部　甕１、LR0段3条　甕１、RL0段3条太細撚　甕１'）
ＳＪ16　５（壺　壷３、LR0段多条３　甕１、高坏　高坏３）
ＳＪ18　１（LR0段3条　甕１）
ＳＪ26　１（壺１）
ＳＪ35　２（RL0段3条　甕１、LR0段3条　甕１）
ＳＪ49　１（甕１）
ＳＪ51　１（RL0段3条太細撚　甕１）
ＳＪ54　１（L　甕１細）
ＳＪ56　３（LR0段3条　甕１細２、RL0段多条　甕１礫多１）
ＳＪ60　２（甕１、RL0段多条　甕２）
ＳＪ71　１（LR0段多条　甕１細）
ＳＪ74　４（RL0段多条　甕１'３点、L　甕１）
ＳＪ98　１（RL0段多条太細撚　甕２）

2　古墳時代の遺構と出土遺物

a　概要

古墳時代の遺構は住居跡9軒で五領式期2軒、和泉式期7軒である。以下3住居跡群に分けて記述する。

五領式期の2軒は台地裾の僅かな微高地上に位置し、かなり離れて存在する。後述のように異なる住居跡群に属すると考えられるが、記述上同一群として扱い第1群と呼称する。



第65図　古墳時代遺構配置図

五領式期でも新しい段階のもので小形丸底土器、高坏形土器が特徴的である。

その他に吉ケ谷式期の住居跡3軒の埋土上層から投棄されたものと考えられる土器群が出土している。これらは五領式及び五領式から和泉式期に属するもので便宜上本章で扱い第1群に含めることにする。

和泉式期の住居跡は台地頂部の4軒と台地裾の平坦面に存在する3軒で、出土土器に若干の段階差を内包するがそれぞれ住居跡群をなすものとみなし、後者を第2群前者を第3群と呼称する。

第3群の小形の2軒はすでに削平されており出土遺物がなく、時期決定に不明瞭さを残すが、同一時期と把握しておく。

第2群の3軒は規模が大きく、住居跡間隔は狭く集合状態をとっている。

台地上の住居跡群は占有面積が大きくやや散在的で住居規模にばらつきがある。

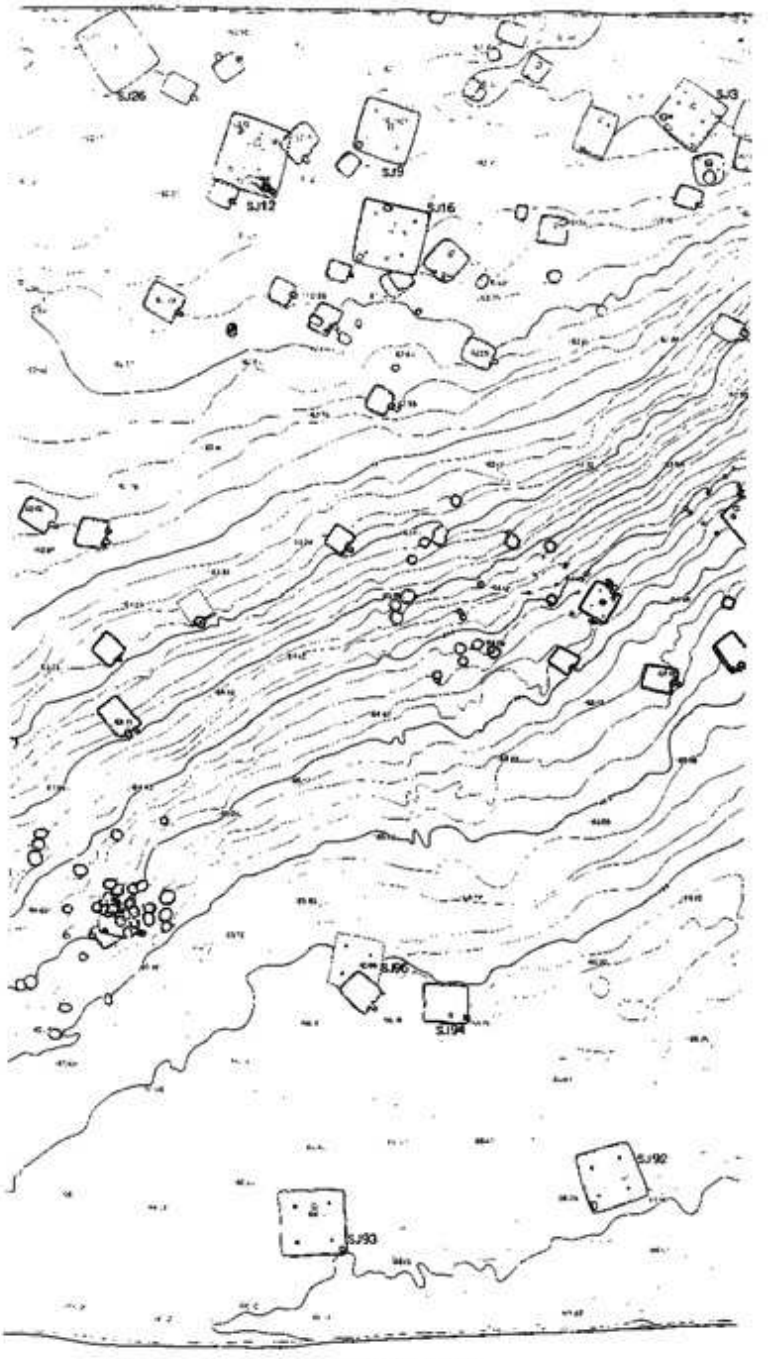
これら7軒の住居跡は和泉式期の古段階に属するもので竹の花遺跡例とほぼ同一段階に属する。

b　古墳時代　第1群

五領式期の住居跡が2軒丘陵裾に存在する。約50m離れており同一群とは考え難く少なくとも2箇所にわたる該期の住居跡群が考えられる。

以下では便宜上同一群として記述する。

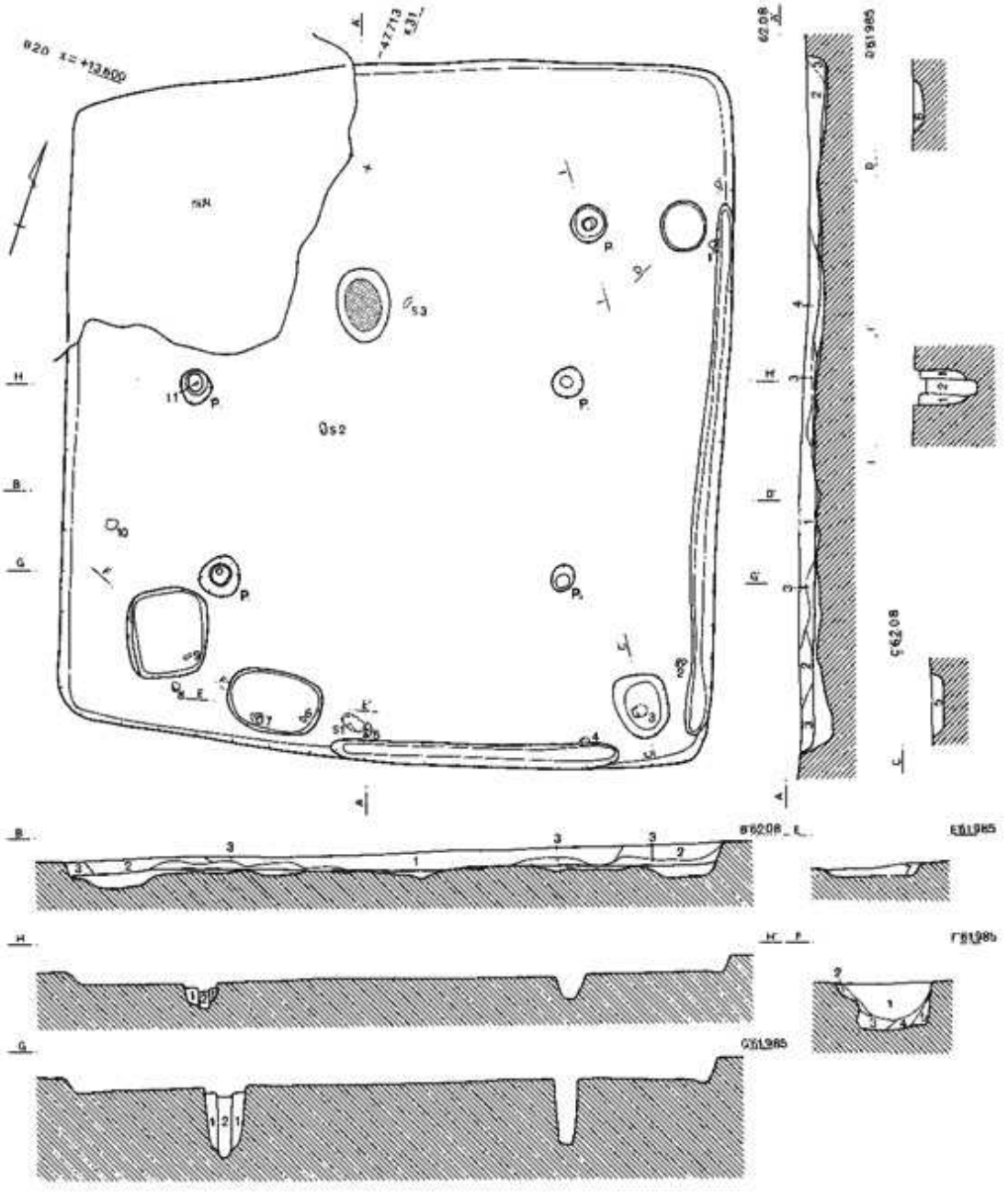
第6、14、15号住居跡は吉ケ谷式期のものであるが、上層から出土した土器群についてはいずれも五領式ないし和泉式に属するものであり本章で一括して扱う。吉ケ谷式期住居跡の埋没過程での利用を考慮すべきであろう。



第66図　古墳時代住居跡群配置図

第3号住居跡（第67、68図）

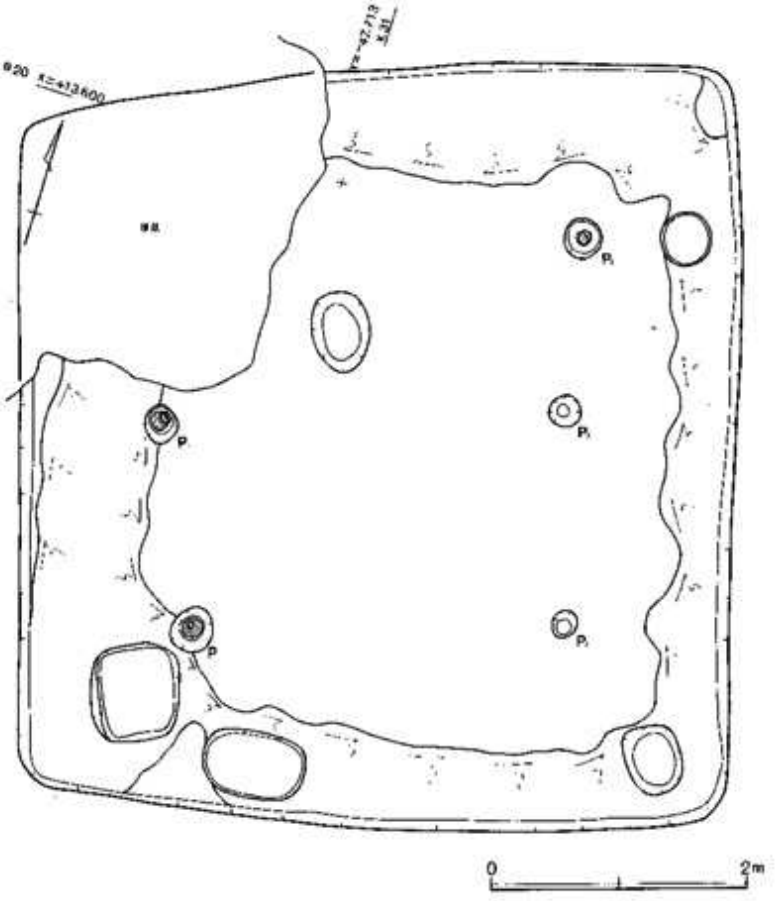
確認段階で北壁は溝、攪乱等により不明確で、やや内側になると判断された。北西隅部は顕著な攪乱により完全に破壊されている。周辺に壁外施設は認められなかった。



第67図　第３号住居跡平面図(1)

埋土は５層に分割されるが深さ0.2m前後と浅く埋土中からの遺物出土量は少ない。
南壁及び東西隅部から主に遺物が出土している。

平面形は南北方向にやや長い略長方形と考えられ、住居跡主軸は短径方向にある。東西壁はほぼ直線的であるが北、南壁はやや湾曲気味で、わずかに斜行する。
したがって見方によっては台形状ともいいうる。
掘り込みは前述のように浅く、壁はやや斜行する。
床は全体に柔らかく、炉の周辺から中央部がわずかに硬い程度である。
炉跡は主柱穴の内側、中央部やや北壁寄りに位置し住居跡中心線上からやや西側にずれる。平面形は楕円形を呈し、長径0.62m、短径0.45m、深さ0.08mを計る。断面皿状であまり焼けていない。東側及び南側にやや離れた位置でＳ３、Ｓ２が出土しており、或いは炉石が存在していたかもしれない。

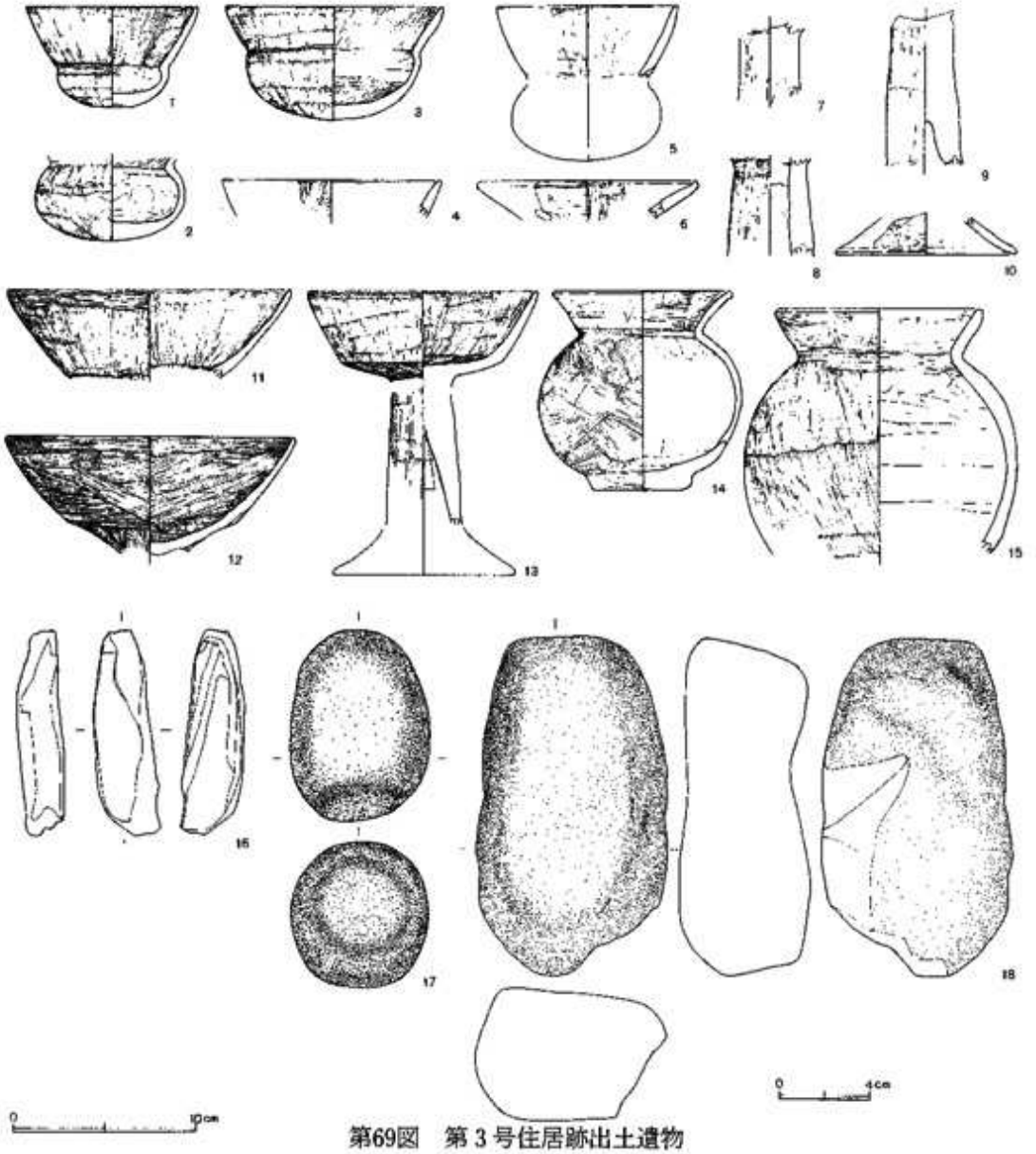


第68図　第３号住居跡平面図(2)

柱穴は撹乱部分に存在した可能性を考えると４本柱穴になるとみられ、中間にやや浅いＰ２、Ｐ３が副柱的に配置される。Ｐ１、Ｐ５は中心部に柱痕が検出された。Ｐ３にも存在する。いずれも掘り方よりも深く柱を突き刺して構築したことが想定される。各々の計測値はＰ１が径0.3m深さ0.4m、柱痕が径0.12m深さ0.55mである。
以下同順に記述するとＰ２が0.35×0.54mで柱痕0.15×0.6mである。Ｐ５が0.28×0.18mで柱痕0.10×0.21mである。Ｐ３が0.21×0.55mである。Ｐ４が0.26×0.19mである。全体に深くしっかりとしたものである。

それぞれの柱間隔はＰ１Ｐ２＝1.34m、Ｐ２Ｐ４＝1.67m、Ｐ３Ｐ５＝1.62m、Ｐ２Ｐ３＝2.97m、Ｐ４Ｐ５＝3.12mを計る。
Ｐ１Ｐ４は3.01mであるから、主柱穴によって囲まれる範囲はほぼ正方形をなしている。

貯蔵穴が南西隅部に存在し、略方形で西～北側に平坦面を持ち蓋等の存在が予想される。規模は



第69図　第３号住居跡出土遺物

長径0.75m、短径0.69m、深さ0.39mである。他の３箇所は浅く不明瞭である。それぞれの計測値を同順に記すと、北東隅のものが0.42×0.09m、南東隅のものが0.54×0.44×0.11m、南壁下のものが0.80×0.53×0.39mである。南壁下のものは掘り方の一部である可能性がある。

壁溝は不明瞭で浅いものが南壁東半部と東壁に認められ、南東隅部は切れる。壁材痕等は検出できなかった。

生活段階に伴う遺物は南～東壁下に比較的集中し供献土器が多い。

掘り方は、中央部分を掘り残し四周を掘り窪めるものである。

壁に沿ってやや幅狭く若干掘り窪めるが西、北壁下はやや幅広である。各隅部はやや深く掘られておりピット状をなす。

掘り方と壁溝との構築順序が問題となるが土層断面では確認できなかった。また柱穴との構築順序についても同様に確認できなかった。

上屋構造については、棟方向がＰ２、Ｐ３の存在から長軸方向であるとすると、住居跡主軸方向と直交することになる。

入り口は炉の対壁、南壁と想定される。

第３号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	1	9.4 5.5 2.2	底部厚く上げ底、体部は偏平で湾曲して立ち上がり上端で屈折し、口縁部に移行内湾気味に大きく開く。口唇部尖り気味で頸部内面稜をなす。	内外面横ハケ？後外面口縁部縦→頸部横→体部縦の順、内面口縁部縦→頸部～体部横→底面一定方向の緻密な筆ミガキで平滑。内外面とも赤彩される。	90%小丸１細全微赤褐色（赤褐色）赤褐色№１。焼成良好・器壁堅緻
小形丸底土器	2	－ － 4.7	底部厚く丸底、体部偏球状で頸部屈曲し内面稜をなす。口縁部は直接接合しないが、内湾気味に大きく開くとみられる。	内外面ハケ？後外面口縁部～体部縦→頸部横の順、内面口縁部斜、底面一定方向（体部は指頭押圧、ナデで圧痕残る）の緻密な筆ミガキ。体部内面を除き赤彩される。	1/2小丸２細白全赤褐色（暗褐色）赤褐色№４。焼成良好・器壁堅緻
小形丸底土器	3	12 6.2 －	底部厚く丸底、体部は偏平で頸部はそれほど屈折しない。内面稜をなす。口縁部器肉厚く短く開き、口唇部直立気味で先端尖る。	内外面横ハケ？後外面口縁部縦→体部上半縦→下半左回り放射状の順で内面口縁部斜→頸部横→体部中心→周縁の順で一定方向のやや粗い筆ミガキ。	1/2小丸１細全微暗褐色№８＋貯蔵穴出土片。外面一部黒斑。焼成良好・器壁堅緻
小形丸底土器	4	12 － 2.2	口縁部は器肉厚く内湾気味に開く。口唇部は内ソギ状で端部尖る。	外面丁寧な縦筆ミガキ、内面ハケ後？ミガキ	1/20全微白細赤色（褐色）赤褐色
小形丸底土器	5	10 － 4	口縁部は内湾して立ち上がり口唇部は尖る。	内外面とも丁寧な縦筆ミガキ、外面頸部横筆ミガキ。	1/10全微白細赤褐色（褐色）赤褐色
高坏？	6	12 － 2.0	高坏乃至器台とみられる。円孔は内側から右回りに穿孔される。口唇部は直立し尖る。	外面やや粗い横筆ミガキ、内面同様な縦筆ミガキ。	1/20全微細多粗赤色（褐色）赤色貯蔵穴出土
高坏脚部	7	－ － 3.3	脚部は中実で円柱状である。接合部僅かに凹む。	外面縦＊方向の比較的丁寧な筆ミガキ。	10%細粗白全赤褐色、褐色貯蔵穴出土
高坏	8	－ － 5.8	脚部は僅かに膨らみをもつ円柱状で中空。	外面接合部横ナデ後やや粗い縦筆ミガキ。内面横筆ケズリ＊。外面赤彩。	1/3全微赤白細粗多赤褐色（褐色）暗褐色№９
高坏脚部	9	－ － 8.3	脚部は円柱状で下部を除き中実。接合部は僅かに凹む。	外面縦ハケ後、やや粗い縦筆ミガキ。内面筆ケズリ。外面赤彩される	90%砂質細疎全微赤褐色、褐色№９。
高坏脚部	10	－ 9.7 2.1	器肉薄く「ハ」字状に開き、先端僅かに屈曲し端部丸く収まる。	外面ハケ後横方向のやや粗い筆ミガキで赤彩される。内面横ナデ。	1/10細粗全微白石赤褐色、白褐色
高坏	11	15.5 － 4.8	坏部下端で緩い稜をなし、外傾して立ち上がる。口唇下僅かに屈折し口唇部尖り気味。	内外？面ハケ後外面口唇下横以下縦方向の緻密な筆ミガキ、内面縦方向のやや粗い筆ミガキ。内外面とも赤彩される。	1/3細粗全微量赤褐色（硝褐色）赤褐色№２＋１１。外面一部黒斑あり
高坏	12	15.8 － 6.4	坏部は下部で粘土貼付けによる稜をなし内湾して立ち上がり、口唇部尖り気味。脚部を欠失するが接合部はホゾ状に僅かに凸出させる。	内外面ハケ後外面稜以上横→斜、以下縦→横、内面横→斜（右回り）後底面一定方向の比較的丁寧な筆ミガキ。	1/3砂質細粗白多赤褐色（褐色）赤褐色№７。焼成良好・器壁堅緻
高坏	13	12.5 － 12.7	坏部底面ほぼ平坦で外面緩い稜をなし直線的に開き口唇部尖り気味。接合部小さいホゾ接合であるが、脚部上部は中実で緩く開く円柱状をなす。	内外面ハケ後外面坏底部→口縁部、脚部の順で縦方向の緻密な筆ミガキ。内面坏部縦方向右回りに同様の筆ミガキ。脚部筆ケズリ（←←↓）。内外面赤彩される。	80%細粗疎全微量赤褐色、暗褐色№５＋６。焼成良好・器壁堅緻

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形壺	14	9.9 4.8 10.9	底部は厚く平底で凸出する。胴部球形状をなし器肉薄い。口縁部やや巾広で内湾気味に開き端部丸く収まる。	外面底部ハケ後筆ケズリ。胴部下半横ハケ（8本/巾1.0cm）後底部周縁横ナデ。口縁部綾ハケ後横ナデ（左回り）。胴部上半横斜ハケ後頸部斜ハケ。内面口縁部横ハケ後軽い横ナデ。胴部丁寧な筆ナデで底面に及び中心部筌ケズリで凹む。外面ハケ調整は全体に粗く未調整部分も残る。	90%細粗多礫全石英黄褐色、黒色／黄褐色№3。外面一部黒斑。
小形壺	15	11.4 — 13.4	胴部はやや縦長の球形状で口縁部は「く」字状に短く開き、口唇下僅かに肥厚し端部丸く収まる。	外面～口縁部内面ハケ後外面胴部横斜、口縁部内面まで横斜方向のやや粗い筆ミガキ胴部内面丁寧なナデ、頸部指頭押圧加わる。	1/3細粗礫全白多赤褐色№10。口縁部内外面一部黒斑。
砥石	16				140g
磨石	17				1.005kg
砥石？	18				4.175kg

註1　図示したもの以外に高坏形土器の口縁部10（このうち5点は同一個体とみられる）、体部20、脚部2点、小型丸底土器の口縁部2、体部4点、甕形土器の胴部20点が出土している。

註2　各器種の胎土は以下の通りである。

高坏形土器1　砂粒（細＋粗）目立ち、含有物（細＋粗）は全て混入するがfやや目立つ。

高坏形土器2　砂質、混入物殆どなく、緻密、c（細　少量）やや目立つ。

高坏形土器3　砂質、混入物殆どなく緻密、c（細＋粗　多量ないし大量）目立つ。

小型丸底土器1　c（細＋粗　多量）目立つ。

小型丸底土器2　d（粗　多量）目立つ。

小型丸底土器3　c（細　極微量）含み精緻

小型器台形土器　小型丸底土器1～3に準ずる。

甕形土器1　c（細　多量）目立つ。

甕形土器2　砂粒（細＋粗＋礫）目立ち、a～f（微量ないし少量）含む、a目立つ

甕形土器3　2に近似するが砂粒（細＋粗）は2より少ない

甕形土器4　砂粒（細　多量ないし大量）a～f含みf（細　大粒）目立つ

註3　各器種と胎土との対応関係は以下のとおりである。

高坏1（口縁部2、体部1、脚部2）　高坏2（口縁部1、体部9）　高坏3（口縁部7、体部10）

甕1（胴部2）　甕2（胴部8）　甕3（胴部9）　甕4（胴部1）

第26号住居跡（第71図）

表土層が極薄く既に表土掘削段階で掘り方下面迄達していると考えられる。したがって平面形はほとんど把握できなかったため平面図は復元想定である。西壁部分は現道下にかかっていたため撹乱顕著であった。

中央部やや西寄りに、焼土の分布がわずかに認められた。

埋土は調査区と現道の境界部分でわずかに残るのみであった。

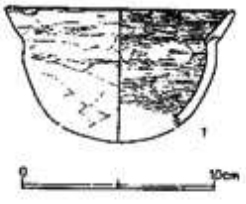
平面形は大形の方形ないし横長の長方形とみられる。壁は全く残っていない。

炉はわずかな焼土の分布から判断するとほぼ中央部分に位置する。

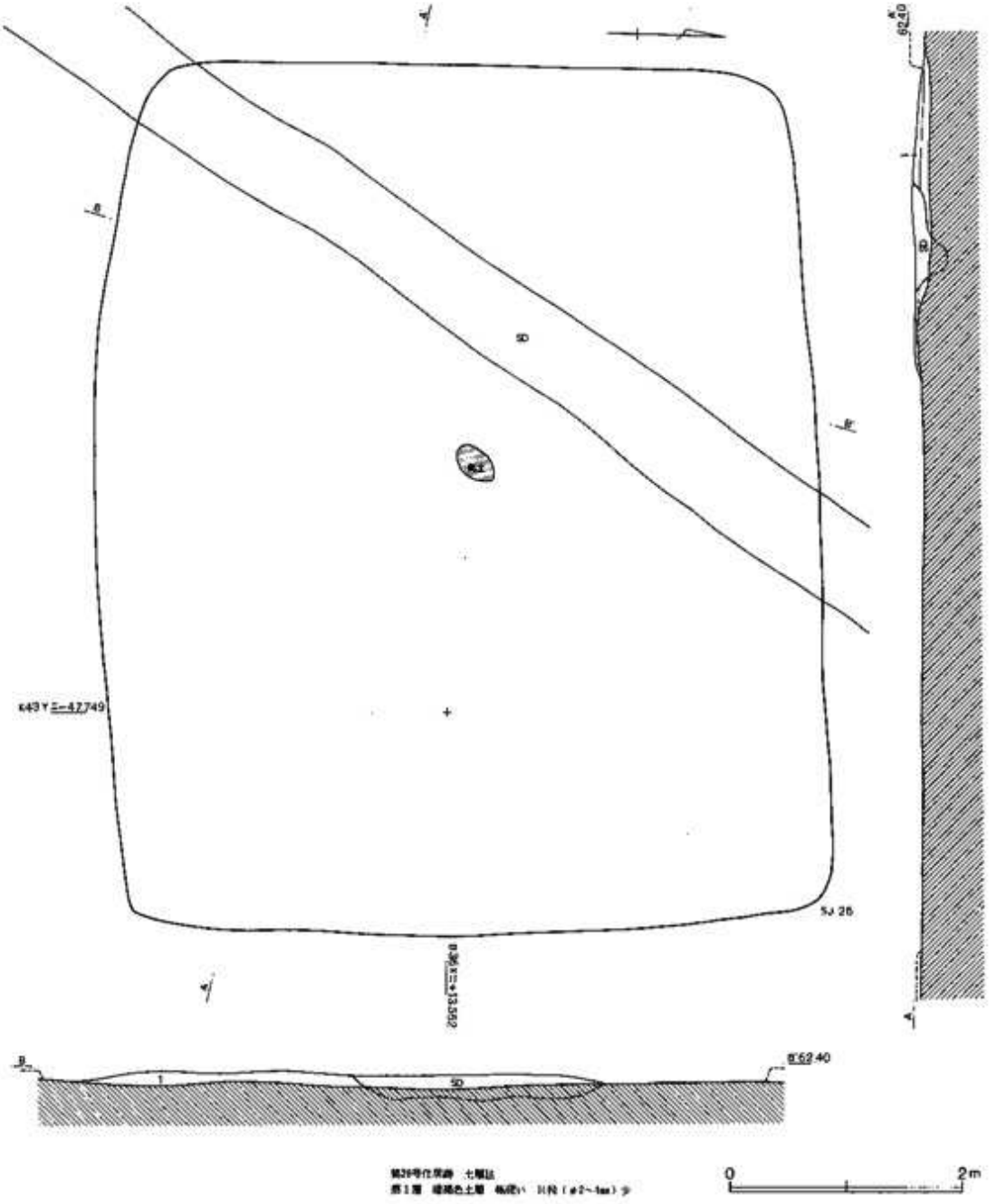
柱穴、壁溝は掘り方下まで掘削が及んでいるにもかかわらず全く検出できなかった。

出土遺物は鉢形土器1点のみである。

掘り方についても全く把握できなかった。



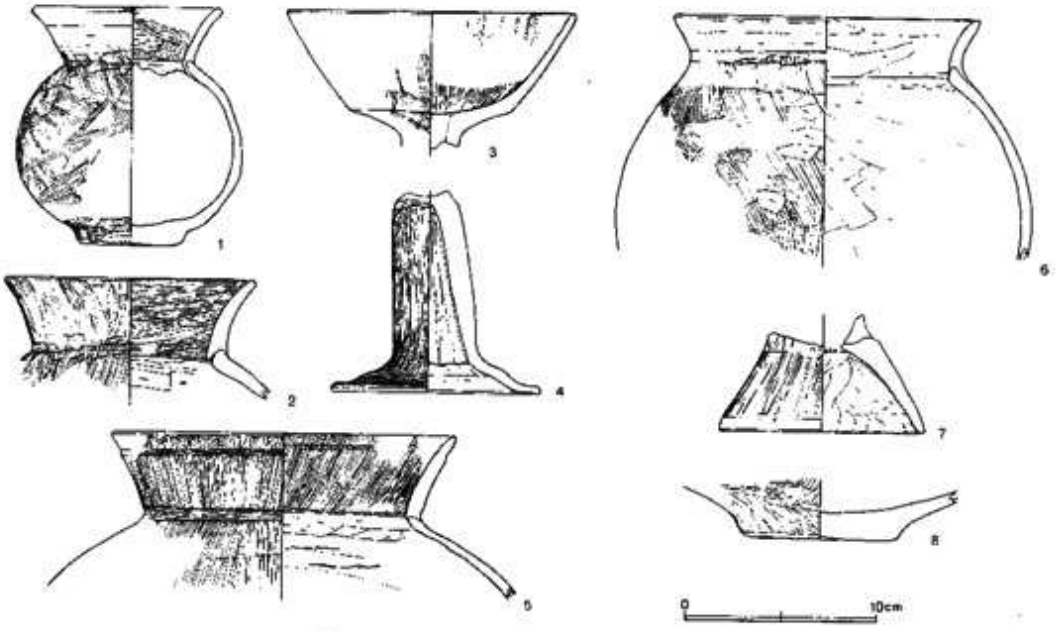
第70図　第26号住居跡出土遺物



第７１図　第２６号住居跡平面図

第26号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	12.0 — 6.0	体部は内湾して立ち上がり、肩がやや張る。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部短く開き端部丸く収まる。	外面体下部筆ケズリ、上部は丁寧なナデ。口縁部左回り横ナデ後やや粗い筆ミガキ。内面体部粗い横筆ミガキ、口縁部横ナデ後横筆ミガキ。内外面赤彩。	1/4細粗多微微白多赤褐色No.Ⅰ。



第７２図　第６号住居跡上層出土遺物

第６号住居跡上層出土遺物

第６号住居跡は吉ケ谷式期の住居跡であるが、埋土上層出土遺物については古墳時代前期の五領式期のものである。したがって遺物のみ本章で以下記述する。（第１４、１５号住居跡についても同様である。）出土状態については第６図の遺物分布図（1A、2A及び炉石以外）に示したように住居跡中央部に縦長に集中分布している。

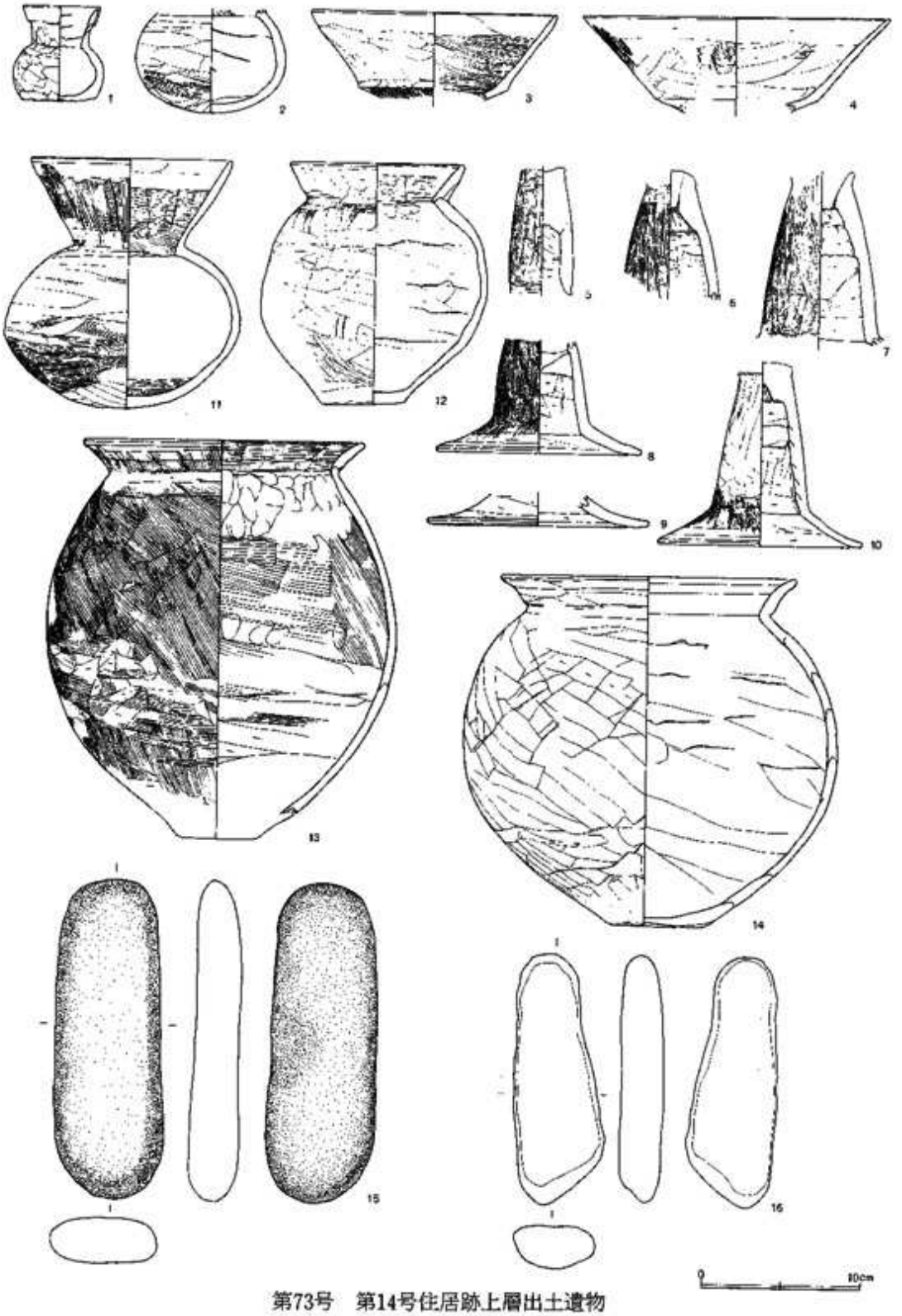
第6号住居跡上層出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形壺	1	10 5.4 12.3	底部凸出し厚く平底。胴部は球形状で最大径を中位にもつ。頸部収縮し口縁部短く外反して開く、口唇部ハケによる刻み。	底部未調整、外周横ナデ。外面胴部斜ハケ（7本/巾1.0cm）上胴部→下胴部→頸部の順。口縁部縦ハケ後粗い右回り横ナデ。内面胴部篦ナデ及び指頭ナデ底面に及ぶ。口縁部粗い横ハケ。	80%細粗多礫微全暗褐色№2＋5。
壺	2	13 — 6	頸部収縮し内面接合痕残る。口縁部それほど開かずに外反して立ち上がり口唇部ほぼ平坦。	外面胴部縦ハケ（11本/1.0cm）後縦篦ミガキ。口縁部縦斜めハケ後上部横ナデ、縦篦ミガキ。内面胴部篦ナデ、頸部指頭押圧ナデ、口縁部横ハケ後横篦ミガキ。	80%細粗少礫微石英多淡褐色№10。上層出土。
高坏	3	15 — 7.1	坏下部で緩い稜をなし体部内湾して立ち上がり口唇部丸く収まる。接合部短いホゾ接合。	外面坏体部ハケ？後丁寧な縦篦ミガキで底部に及ぶ。内面体部縦、底面一定方向の丁寧な篦ミガキ。内外面赤彩。	1/2細微全赤褐色上層出土。
高坏	4	— 10.8 10.7	脚柱部円柱状で下部僅かに膨らむ。接合部短いホゾ接合？内面中空で三角錐状。裾部短く湾曲し下位で屈曲して開き端部丸く収まり下垂する。内面稜をなす。	外面脚柱部縦篦ミガキ後裾部横篦ミガキ。内面脚柱部上端部まで右回り断続的篦ケズリ。裾部左回り横ナデ。	80%細粗少礫微全赤色、淡褐色、黒色№6＋11。内面黒斑？
壺	5	18 — 8.1	胴部は肩部で張りをもち、頸部収縮して内面稜をなす。口縁部それほど開かずに立ち上がる。外面上部接合部利用の段をなし、内面凹み、口唇部丸く収まる。	外面胴部縦篦ミガキ。口縁部斜ハケ後横→縦（やや粗い）の順で篦ミガキ、頸部横篦ミガキ。内面胴部丁寧な篦ナデ、頸部指頭押圧後篦ケズリ、口縁部横→縦斜（やや粗い）の順で篦ミガキ。ミガキはいずれも極丁寧。外面及び口縁部内面赤彩。	1/5細微全？微赤色（暗褐色）赤色№7。上層出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	16 － 12.3	胴部はほぼ球状を呈するとみられる。口縁部は短く外反して立ち上がり口唇部丸く収まる。	外面胴部粗い斜縦ハケ（5本/巾1.4cm）後若干のナデ。口縁部左回り横ナデで内面に及ぶ。内面丁寧な篦ナデ。	70%細多粗礫微全黒褐色、暗赤褐色№3。上層出土。
脚部	7	－ 10.6 6	台付甕脚部。底部は脚部に粘土巻き付けか？下端部直立気味で先端部平坦。	外面縦ハケ（↑3本/0.5cm）後端部横ナデ。内面横ハケ後上部篦ナデ←←、下部左回り横ナデ。	90%細粗少礫微全明黄褐色、赤褐色加熱の痕跡あり。
壺	8	－ 8 2.7	大形の底部で凸出し、ほぼ平底厚い。胴部は大きく開く。	底面中央部篦研き、周縁部未調整。胴部外面縦篦ミガキ。内面ハケ後丁寧な篦ナデ。	70%細粗少礫微暗赤褐色、暗褐色№12。上層出土。

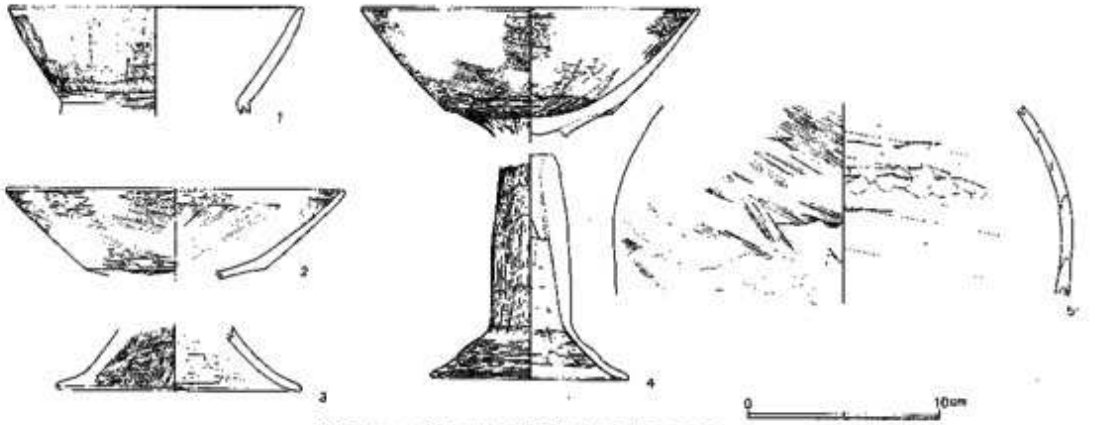
第14号住居跡上層出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
ミニチュア壺	1	4.8 4.6 5.9	底部は平底で大きく胴部は半球状。頸部外面輪積み痕残る。口縁部外反して開き粘土貼付けによる複合口縁。	底面未調整部分残す指頭ナデ。外面胴部丁寧なナデ、口縁部指頭押圧ナデ。内面指頭ナデ。	90%細微黄褐色№18。
小形丸底土器	2	－ － 6.4	体部は楕円形状を呈し最大径を中位にもち、底部は丸底。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部は頸部上面に接合。	外面体部中位以上横ハケ後丁寧なナデ以下底部ハケ（本）後一定方向の篦ナデ。内面体下半部指頭ナデ、頸部指頭押圧後体上部粗い篦ナデ←←。	80%細粗礫微全暗赤褐色
高坏	3	15.4 － 5.5	坏下部で段をなし体部外反して開き口唇下僅かに屈曲し端部丸く収まる。	外面坏体部縦ハケ後上部横ナデ後指頭押圧、やや粗いナデ、底部放射状のハケ（14本/巾1.0cm）。内面坏体部横斜ハケ（5本/1.0cm）後やや粗い横ナデ、底面篦ミガキ？。	1/4細粗少礫微白多針？暗赤褐色№3。
高坏	4	19.2 － 6	坏下部で接合部利用の緩い稜をなし体部直線的に開き口唇部丸く収まる。	外面坏体部上部横ナデ後指頭押圧、やや粗いナデ後、横の間隔おいて縦ハケ（16本/巾1.2cm）稜前後若干のナデ加わる。内面丁寧なナデか？磨滅顕著で詳細不明。	1/3細多粗礫微白多淡褐色№4。
高坏	5	－ － 7.9	脚柱部円柱状で下半部やや膨らむ。内面上部は中実、接合は短いホゾによる。	外面粗い縦篦ミガキ、下端部横篦ミガキ。内面右回り篦ケズリ内面右回り篦ケズリ。外面赤彩。	80%細粗多礫微全赤色、赤褐色№11＋12。
高坏	6	－ － 7.2	脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面上部シボリ痕以下輪積み痕残り、接合はホゾによる。	外面丁寧な縦ハケ（9本/巾1.6cm↑）、内面右回り篦ケズリ。	90%細粗少微白多暗赤褐色、赤褐色№17。外面一部炭化物付着。
高坏	7	－ － 10.2	脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面上部シボリ痕残る。接合は短いホゾによるか。	外面比較的丁寧な縦ハケ（10本/巾0.8cm↑）、内面下半部右回り篦ケズリ。	1/2細粗少礫微白多赤褐色№10。外面一部黒斑
高坏	8	－ 12.7 7	脚柱部裾広がりで下部大きく膨らむ。内面輪積み痕残る。裾部短く外反して開き内面稜をなし端部丸く収まる。	脚柱部丁寧な縦ハケ（11本/巾0.7cm）で裾部上位に及ぶ、裾下部右回り横ナデ。内面脚柱部右回り篦ケズリ。裾部左回り横ナデ。	1/2細多粗礫微白多暗赤褐色、赤褐色№4。
高坏	9	－ 14.8 2	裾部低く外反して開き端部丸く収まる。	外面右回り、内面左回り横ナデ。	1/3細少粗礫微白多淡褐色№4＋6～7。
高坏	10	－ 12.7 11.4	脚柱部裾広がりで次第に膨らむ。上端部僅かにシボリ痕残り以下ケズリにより直線状、接合は短いホゾによる。裾部屈曲し外反して開き、内面稜をなし端部丸く収まる。	外面脚柱部縦ハケ（8本/巾0.7cm）で裾部中位に及び後丁寧な斜篦ナデ（巾0.9cm）？裾部左回り横ナデ。内面脚柱部上部から右回りの断続的篦ケズリ。裾部左回り横ナデ、端部磨滅する。	80%細粗微白多暗褐色№16。外面一部スス炭化物付着。



第73号　第14号住居跡上層出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	11	12.7 — 15.5	体部は楕円形状を呈し胴がやや張り最大径を中位にもち、口径より大きい。底部は若干の平坦面を残すがほぼ丸底。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部は長く直線的に立ち上がり上端直立気味で口唇部丸く収まる。	外面体部中位以下粗い横斜ハケ（←→↓10本/巾1.4cm）底面一定方向のナデ。体上部横ハケ後丁寧なナデ。口縁上部左回り横ナデ後下半部指頭ナデ後やや粗い縦ハケで若干のナデ加わる。内面体部篦ナデ底部に及ぶ。頸部指頭押圧ナデ。口縁部左回りの断続的横ハケ（↑18本/巾2.6cm）後上部横ナデ。	90%細多粗雲微白多黄褐色／時赤褐色、赤褐色№5。外面一部黒斑
小形甕	12	11 5.3 15.1	底部凸出しほぼ平底、胴部下部で緩い稜をなし中位ほぼ直立する。内面輪積み痕残る。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部厚く「く」字状に開き、端部平坦。	底面未調整部分残ナナデ。外面下胴部縦、上位縦斜、中位横ハケ（9本/巾1.3cm）で上下位ナデ加わる。口縁部縦ハケ後左回り横ナデ。内面下胴部横、上胴部斜めハケ後若干の篦ナデ、指頭押圧加わる。口縁部横ハケ←←後左回り横ナデ。	1/2細少粗雲微白多黒褐色（赤褐色）黒褐色№3。外面スス炭化物付着、黒斑あり。
甕	13	17.7 — 23.2	底部欠失する。胴部は長胴で最大径を中位にもち、そのまま頸部に移行し口縁部「く」字状に開き、口唇部肥厚する。内面平行線状の篦？痕残る。	外面下胴部粗い縦ハケ↑後上胴部やや丁寧な斜ハケ（↑↓→12本/巾1.5cm精緻な工具である）中位若干の横篦ナデ・加わる。口縁部縦ハケ後頸部から極丁寧な左回り横ナデ。内面胴部極丁寧な木口状工具による横ナデ。口縁部横ハケ後左回り横ナデ。	1/2細少粗微全微黒褐色／黄褐色、黄褐色№6。外面一部黒斑、スス炭化物付着。
甕	14	18.6 5.5 21.8	底部周縁粘土貼付けにより中央やや凹む。下胴部尻すぼみで最大径はやや上位肩部張りをもつ。口縁部短く「く」字状に開き口唇部丸く収まる。内面輪積み痕残る。	底面未調整で外周横篦ミガキ？外面胴部ハケ後やや粗い斜篦ナデ。口縁部右回り横ナデ。内面胴部木口状工具による斜横ナデ←↑。口縁部横ナデ。	1/3細少粗雲微全暗赤褐色№7。外面一部炭化物付着。
砥石	15				640g
砥石？	16				№19。380g



第74図　第15号住居跡上層出土遺物

第15号住居跡上層出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	1	15.3 － 5.6	やや大形。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部は長く内湾気味にそれほど開かずに立ち上がり、口唇部直立気味で端部丸く収まる。	外面口縁部横ハケ？横筮ミガキ後やや粗い縦筮ミガキ。頸部横筮ミガキ。内面磨滅顕著であるが同様か？内外面赤彩。	1/2細少粗微全赤褐色No.8。
高坏	2	17.6 － 4.2	坏下部で接合部利用の稜をなし、体部内湾して立ち上がり口唇部丸く収まる。	外面坏体部斜ハケ（8本/1.0cm）後極丁寧な横斜筮ミガキで底部に及ぶ。内面坏体部横ハケ後極丁寧な筮ミガキで底面も同様。内外面赤彩。	1/4細少粗微石英多淡赤褐色（淡褐色）淡赤褐色
高坏	3	－ 12.8 3.2	裾部は直線的に開き下部で外反する。端部尖り気味。	外面縦筮ミガキ後若干の斜め筮ミガキ。内面ハケ？上部筮ケズリ←←後、下部横ナデ。外面から内面下半赤彩。	80%白粒多細赤色（褐色）赤褐色
高坏	4	17.7 9.4 19	坏下部で接合部利用の稜をなし体部内湾気味に開き口唇部丸く収まる。脚柱部円柱状で中位僅かに膨らむ。内面上部粘土削りかす残り、接合は脚柱部上端粘土貼付けによる。裾部湾曲して短く開き端部丸く収まる。	外面坏体部斜ハケ後上部横ナデ後筮ミガキで底部に及ぶ。脚柱部ハケ？後縦筮ミガキ、裾部横ナデ後横筮ミガキ。内面坏体部横斜ハケ後筮ミガキ、底面一定方向の筮ミガキ。脚柱部右回り筮ケズリ。裾部横ハケ後下半部横ナデ。外面及び坏内面赤彩。	1/2細粗微赤色、黄褐色No.8、10は裏接接合しないが同一個体。
甕	5	－ 10.1	胴部はほぼ球形状を呈し内面輪積み痕残る。	外面斜ハケ後下半部指頭ナデ？内面斜筮ケズリ後若干の指頭押圧加わる。	1/5甕1暗褐色No.21

c　古墳時代第2群

第2群は台地裾の平坦面に位置し、第9、12、16号住居跡の3軒で構成されいずれも和泉式期に属する。出土土器によると第12号住居跡がやや先行する可能性があるがほぼ同段階としておく。

各住居跡の規模は他の群も含めてやや大形で、第9号住居跡がやや小規模である。

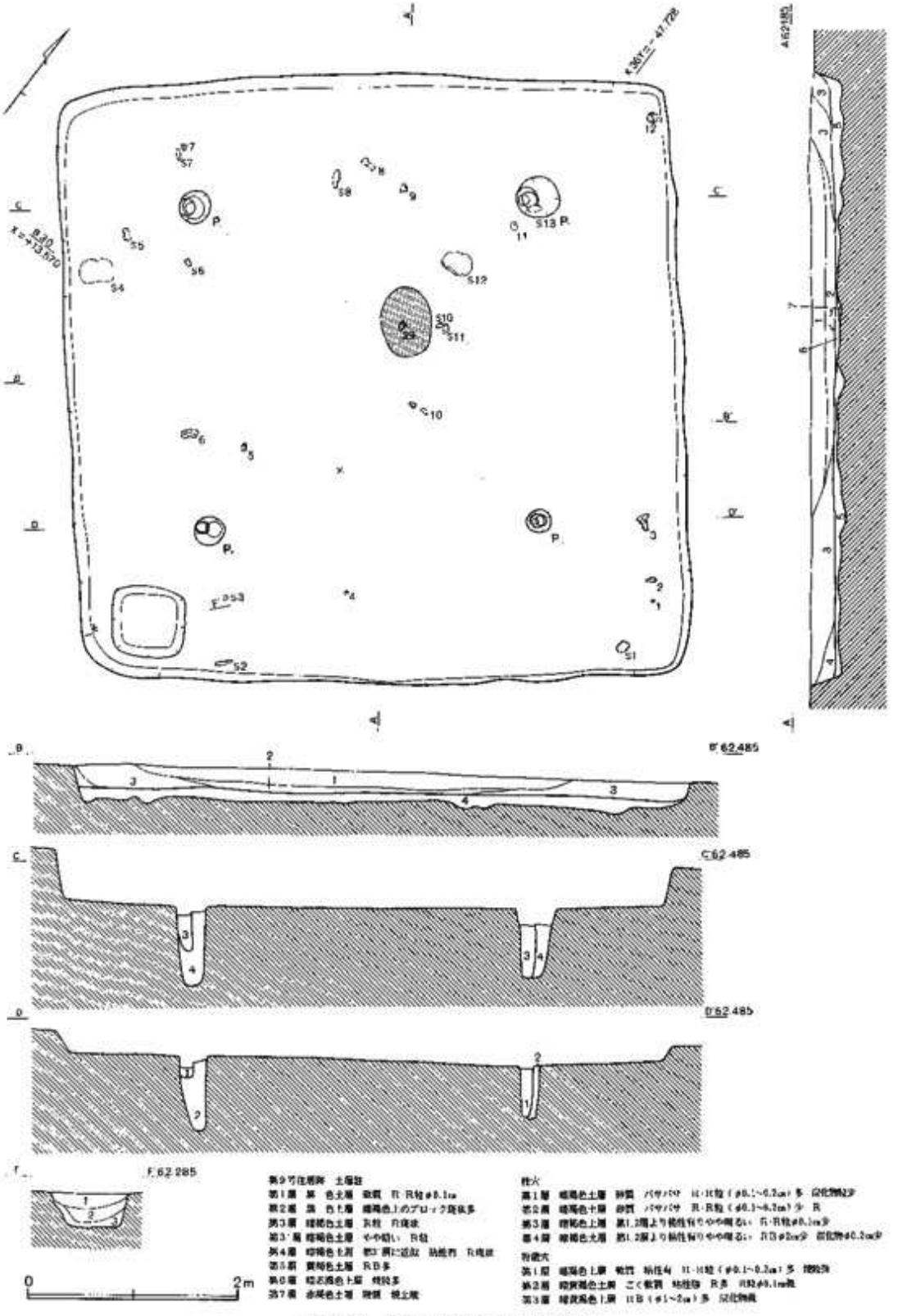
住居跡占有面積は約391m²で第12、16号住居跡の間がやや広いが比較的集合している。

第9号住居跡（第75、76図）

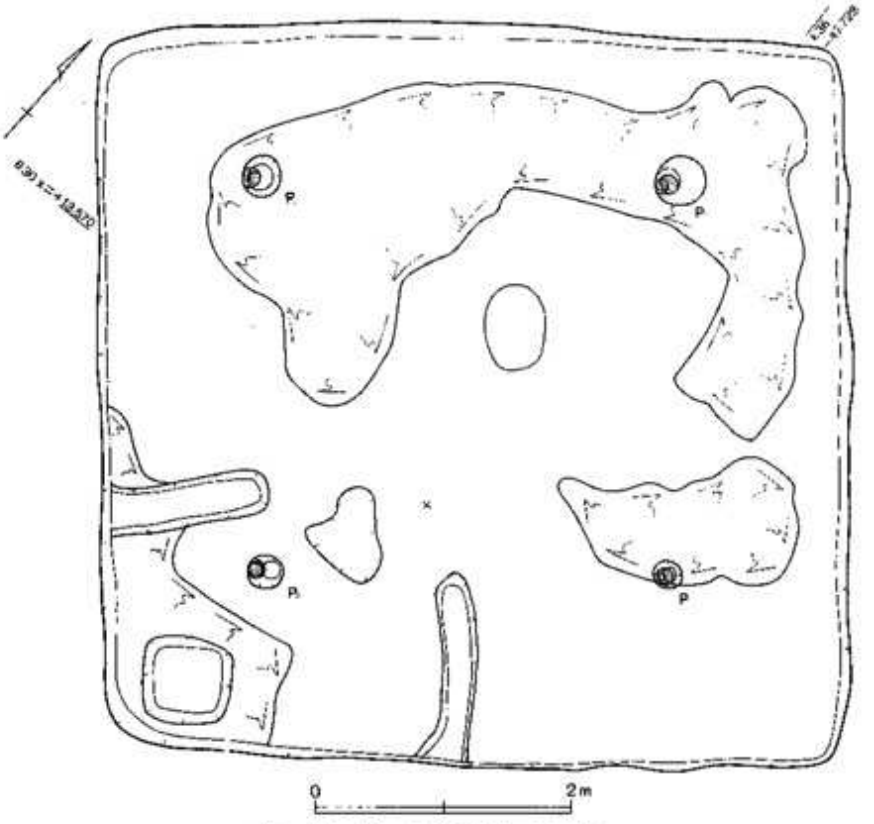
黒褐色土（吉ケ谷式期よりも軟質で黒味が強い）の比較的明確な範囲として確認された。

埋土の残存は良好で自然推積と考えられる。出土遺物は少量で主に北半部の埋土中から出土する。北壁の段状部分は断ち割りの結果土層に変化が認められなかったため同一住居と判断した。

平面形は略方形で僅かに東西方向が長い。掘り込みは深く壁はわずかに傾斜する。床は全体に軟弱で主柱穴内部がやや硬い程度。周辺部ははっきりしなかった。炉は僅かで不明瞭な焼土分布からすると中央部やや北壁寄りに位置する。柱穴は4本主柱穴で、いずれも深くしっかりしたもので、



第75図　第９号住居跡平面図(1)



第76図　第９号住居跡平面図(2)

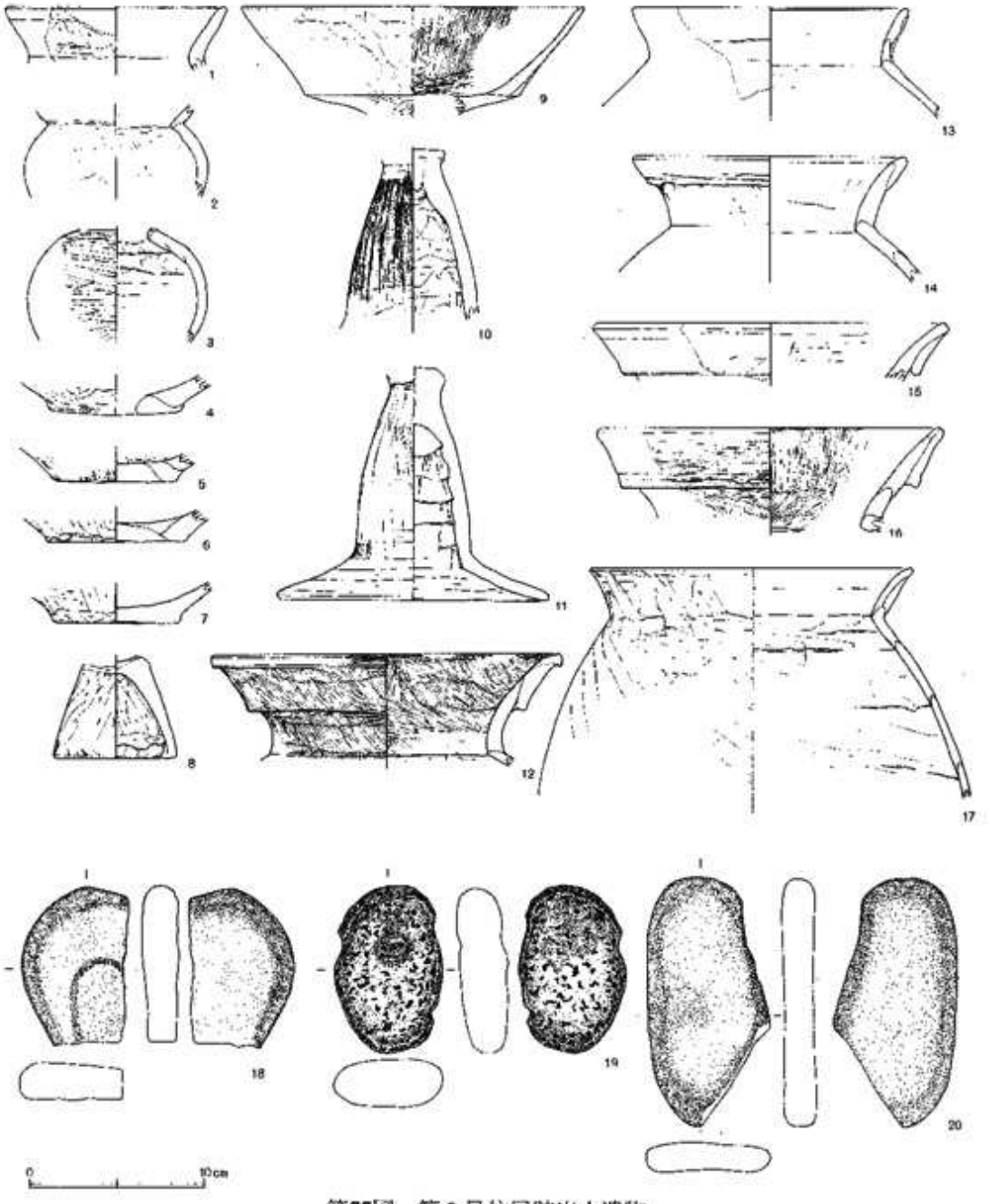
第9号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	1	12.7 — 3.4	口縁部は短く「く」字状に開き端部丸く収まる。頸部内面緩い稜をなす。	口縁部内外面横ナデ（右回り）。	10%，細粗全針赤少赤褐色（暗黄褐色）赤褐色。
小形丸底土器	2	— — 5	体部は偏平。口縁部は屈折して大きく開き、内面稜をなす。	外面丁寧なナデ、内面筆ナデ頸部指頭押圧、ナデ。	1/5，細粗雲微全白細多，黒色（暗褐色）黒色。
小形壺	3	— — 6.5	口縁部は欠失するが小さい。肩部はやや潰れた球形状をなし、内面輪積み痕、頸部シボリ痕残る。	外面丁寧なナデで部分的にミガキ加わる。内面下半部丁寧なナデで上半部未調整部分の残る指頭ナデ。	2/3，砂質細全微白多量，淡褐色。
底部	4	— 7.6 1.8	底部は僅かに凸出しほぼ平底。	底面筆ケズリ後若干のナデ、外周は指頭ナデか？内面丁寧なナデ。	1/3，白大粗粗雲，暗褐色（赤褐色）暗赤褐色色。
底部	5	— 7 1.9	底部は凸出気味でほぼ平底。	外面ハケ？内面ナデ。磨滅顕著で詳細不明。	1/2，白大細粗雲，赤褐色，No11
底部	6	8.0 1.8	底部は凸出気味で底面ほぼ平坦。	底面粗い筆ケズリ（外周→中心）、外周丁寧な筆ケズリ。内面指頭ナデ。	1/4，白石多細粗，暗黄褐色（赤褐色）黒褐色。
底部	7	7.2 2.0	底部は凸出気味で底面ほぼ平坦。	底面筆ケズリ後若干の指頭ナデ、外周ハケ後指頭ナデ。内面全面炭化物付着により詳細不明。	90%，白石多細粗，暗褐色。
台付甕脚部	8	6.7 5.9	直線状に開き先端部は平坦で内面凸状をなす（粘土折り返しか？）。	外面丁寧な筆ナデ後指頭ナデ。内面指頭ナデ。。底面未調整部分の残る若干のナデ。	90%，全少細粗雲微，黄褐色，No7

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	9	19.6 － 6.2	下端部で鋭い稜をなし体部は直線的に開き端部は尖り気味。	外面口縁部下横ナデ後底面から縦筆ミガキ。内面上半部縦→下半部～底面横筆ミガキ。	1/5,細粗雲微白細多,暗黄褐色、赤褐色、内面黒斑。
高坏脚部	10	－ － 9.4	接合部は細くホゾ接合で湾曲して次第に開き、内面裾との境は鋭い稜をなす。内面上半シボリ痕、下半輪積み痕残る。	脚部外側縦筆ミガキ後接合部及び裾との境は軽い横ナデ。内面粗い筆ケズリ←→↓で下部は裾部からの横ナデが及ぶ。	80%,細粗少金白多,暗黄褐色、赤褐色、№8。
高坏脚部	11	－ 15.2 13.2	接合部は細くホゾ接合で内面よく密着する、脚部は湾曲して次第に開き、裾部は大きく開き端部丸く収まる。内面上部シボリ痕以下輪積み痕残り、裾との境は稜をなす。	外側脚部縦ハケ後縦筆ミガキで裾部～下端部横ナデ（右回り）。内面脚下端部筆ケズリ←裾部横ナデ	2/3,細粗雲少金白多,暗黄褐色／赤褐色、赤褐色、№3。外面摩滅。
壺	12	20.2 － 6	大形の有段口縁壺で頸部内面稜をなし外反して開く。外面段部は粘土貼付け。口唇部尖り断面三角形状で外面段をなす。	内外面横ナデ後外面段以下横、以上斜方向のやや丁寧な筆ミガキ。内面斜方向の丁寧な筆ミガキ、頸部筆ケズリ。	1/4,細粗全雲,赤褐色、№6
壺	13	15.8 － 5.8	口縁部はやや長く、「く」字状に開き端部丸く収まる。頸部内面鋭い稜をなす。	内外面横ナデ（右回り）後外面やや粗い筆ミガキで若干のハケ加わる。内面頸部筆ケズリ。	1/4,細全白多赤細粗,赤褐色、SJ1？出土片と接合
壺	14	15.8 － 6.7	口縁部は粘土紐貼付けによる複合口縁で整っていない。短く「く」字状に開く。	外面複合部下半～頸部筆ナデ？内面ハケ後横ナデか？内外面磨滅顕著で詳細不明。	80%,細粗雲少金白石英多,黄褐色,№16・炉上層出土＋SJ16。
壺	15	20.5 － 3.3	粘土貼付けによる複合口縁壺で器肉厚い。口唇部ほぼ平坦面をなし鋭い稜をなす。	外面丁寧な横ナデ、内面横ハケ（5本/1.0cm）後丁寧な横ナデ。	10%,細粗雲微全,暗黄褐色、暗黄褐色／黒色.
壺	16	20 － 6.1	有段口縁壺で器肉厚い。頸部内面鋭い稜をなし外反気味に開き端部丸く収まる。段部は粘土貼付けによる。	内外面横ナデ後外面段以下横斜、以上斜方向の比較的丁寧な筆ミガキ、内面縦斜め方向の筆ミガキ。	10%,細粗多石英,黄褐色、№26
甕	17	18.5 － 13	胴部はやや長胴気味と見られる。頸部内面鋭い稜をなす。口縁部は肥厚し短く「く」字状に外反して開き口唇部丸く収まる。	外面胴部比較的丁寧な筆ナデ斜↑←、口縁部横ナデ（左回り）後頸部やや粗い筆ナデ←。内面胴部筆ナデ←←↑で頸部部分的に筆ケズリ加わる。	1/3,細粗雲少金白多,暗黄褐色（褐色）赤褐色、№1。外面一部炭化物付着。
砥石	18				S3、150g
?	19				S10、255g
砥石	20				275g

中心から西側にずれて柱痕跡が認められる。その他にピットは認められなかった。壁溝はない。貯蔵穴は南隅に位置し、略方形、出土遺物はない。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は全体に明瞭でないが、北半部～東壁下に存在しそれ程深くない。東半部については、掘り方埋土中から吉ケ谷式土器片の出土があり、第10号竪穴状遺構の存在を考慮すると吉ケ谷式期の住居跡を破壊している可能性もある。また北側への拡張も考えられる。南隅部で貯蔵穴からやや離れた位置に壁に直交する溝が検出されたがあるいは間仕切りか。板材等の痕跡は認められなかった。貯蔵穴周辺はやや平坦面を造出しており蓋等の存在が考えられる。貼り床は存在しない。



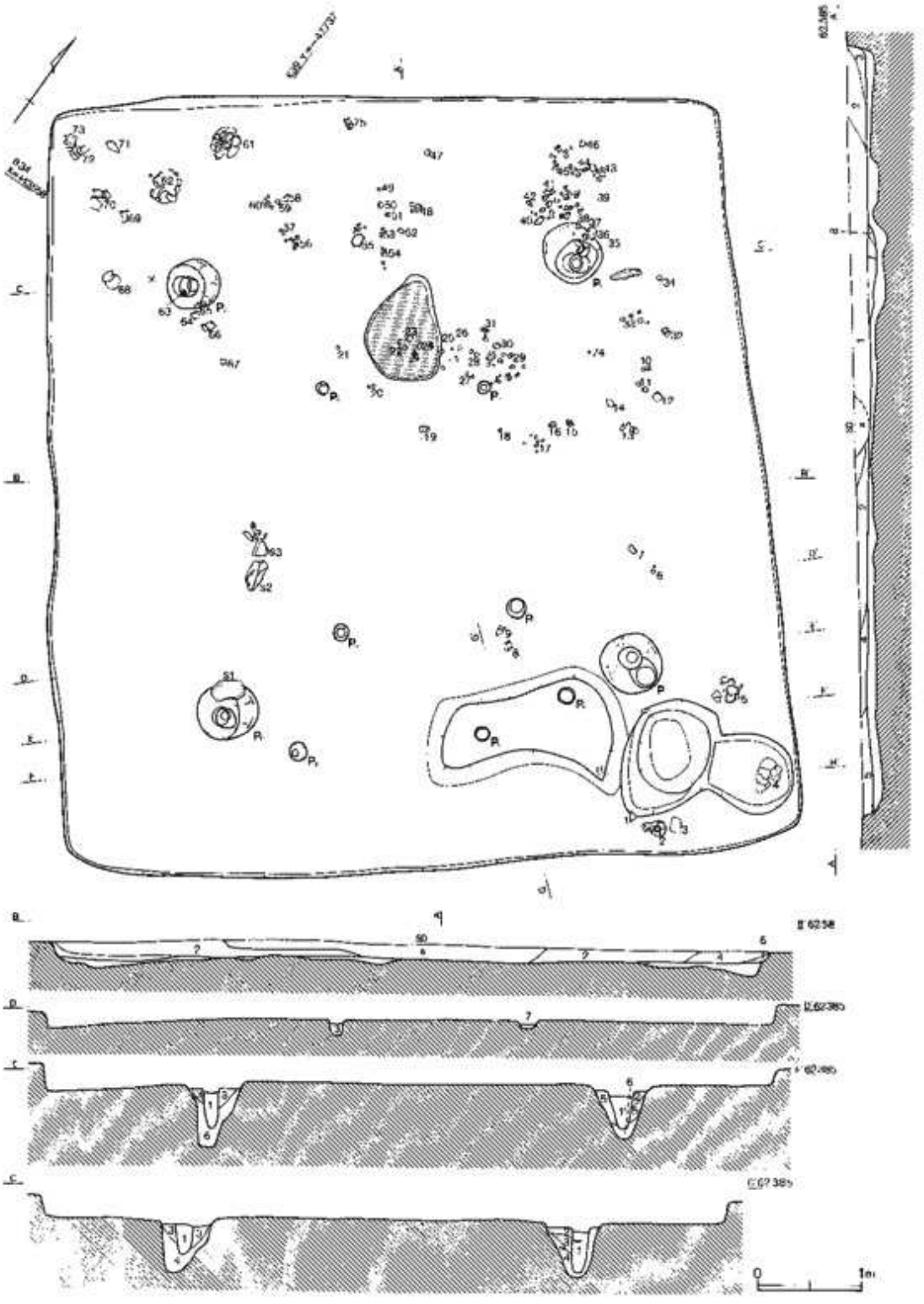
第77図　第９号住居跡出土遺物

第12号住居跡（第77、78図）

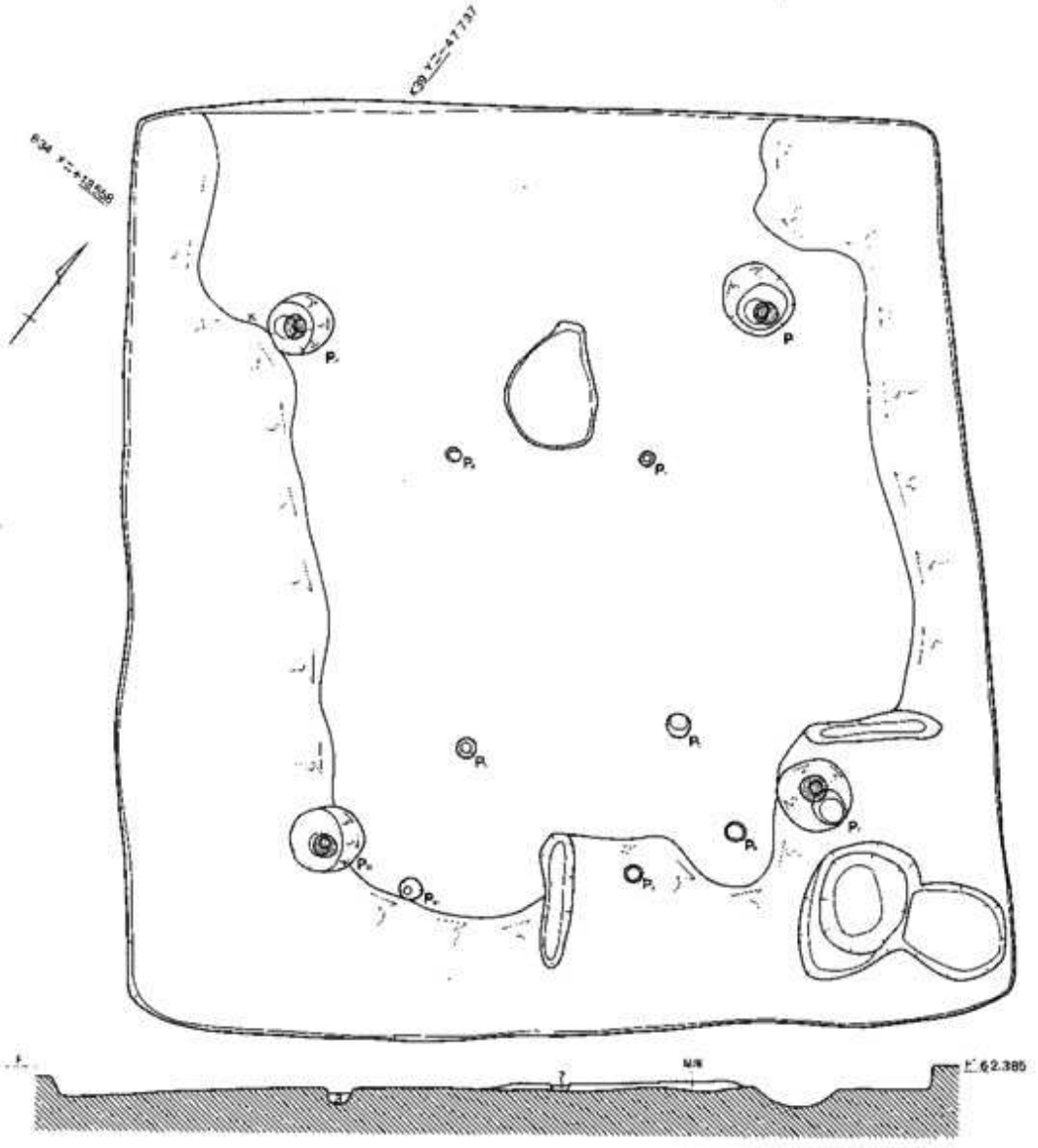
第９号住居跡とほぼ同じ色調、性状の大形で方形の黒色土範囲として確認され、土器片が露出した状態、特に大形の石は上面に飛び出している状態であった。

第11、13号住居跡と重複し、この２軒によって切られていることが確認された。

中央部は東西方向の溝（現代）に切られており床面付近まで掘削が及ぶ。また周辺部に風倒木痕、樹木が存在する。



第78図　第12号住居跡平面図(1)



第12号住居跡　土層説

a　暗褐色土層　粘質土　やや灰色味帯びる　砂質でざらつく　白色粒（φ0.1～0.2cm）少
焼化粒φ0.1cm微

第1層　黒褐色土層　無味：1>5　粘性強　R粒φ0.1cm多　焼粒（φ0.1～0.2cm）少

第2層　暗褐色土層　R・R粒（φ0.2～0.5cm）多　焼化粒微

第3層　暗褐色土層　R・R粒φ0.5cm多　H B（φ2～5cm）少

第4層　暗褐色土層　第2層に近似　R4>2　粘度3<4

第5層　黒褐色土層　R粒　H粒（φ0.1～0.2cm）多　焼化粒微

第6層　暗褐色土層　R・H粒（φ0.1～0.2cm）多　焼化粒微

第7層　黒褐色土層　粘性強　R・R粒多　焼粒（φ0.1～0.2cm）多　焼土少　焼化粒

第8層　黒褐色土層　粘性強　H・R粒（φ0.1～0.3cm）多

貼り床　暗褐色土層　黒色土層＋R Bの混合　H. H多

貯蔵穴

第1層　暗褐色土層　砂質　ハサハサ　粘度：1>2>3　H粒（φ0.1～0.2cm）微

第2層　暗褐色土層　砂質　パサパサ　粘度：1>2>3　H粒（φ0.1～0.2cm）少

第3層　暗褐色土層　砂質　パサパサ　上記に含む　やや黒味強い　R粒（φ0.1～0.2cm）多

第4層　暗黄褐色土層　R粒φ0.2cm多　H B φ3cm多

第5層　暗褐色土層　第2層に近似　やや砂質　H B（φ2～3cm）多

柱穴

第1層　黒褐色土層　砂質パサパサ　R・R粒φ0.3cm　焼粒　焼化粒少

第1'層　黒褐色粘質土　ベル　焼土多

第2層　黒褐色土層　粘性強　砂質　R粒　焼土粒φ0.1cm少

第3層　黒褐色土層　ベル　砂質　R・R粒（φ0.1～0.2cm）　焼粒少

第4層　暗褐色土層　砂質（しまり悪い）　R・R粒（φ0.1～0.2cm）　焼粒　焼化粒多

第5層　暗褐色土層　砂質　やや赤味帯びる　R・R粒φ0.3cm　焼土多

第6層　暗褐色土層　砂質（粘度大）　R・H粒微

第7層　暗褐色土層　砂質（パサパサでしまり悪い）H微

0　2m

第79図　第12号住居跡平面図(2)

壁外施設はまったく検出されなかった。

埋土はそれ程厚くないが、撹乱にもかかわらず比較的よく残っており自然堆積と考えられる。

炉周辺部～北隅にかけて、焼土及び炭化物の分布がみられた。

出土遺物は多量で、北半部に集中しているが大部分は埋土中の出土である。

平面形は第３号住居跡に近似し北東壁と南西壁がやや斜行する、やや歪んだ方形ないし台形状である。北西壁は直線状であるが南西壁は緩く湾曲し、東隅は凸出気味である。

掘り込みは浅く、壁はほぼ直立する。

床面はほぼ平坦で全体に柔らかいが、炉周辺～中央部はよく踏み締まって硬質である。硬質面の厚さは１～２cm程。炉の東及び北側床直上で甕形土器小破片が集中出土した。

炉跡は北西側主柱穴間中央部やや内側に位置し、略楕円形状で比較的よく焼けている。長径0.99m、短径0.74m、深さ0.08mを計る。

柱穴は４本主柱穴で、全て大形の掘り方（内傾に向かって傾斜する）をもち、いずれも柱痕跡が残る深いものである。P1北側は甕形土器を中心とする小破片が床面直上に集中し、掘り方内部中層から甕及び小型丸底土器（完形）が出土している。主柱穴で囲まれた範囲の内部には４ヶ所小ピットが存在する。いずれもごく浅いが、底面は硬くあるいは副柱、置き柱の可能性もある。

その他南壁下には３ヶ所に同様の小ピットが配置される。P8、P9については掘り方内の溝とともに入口施設を構成するものか、またP9、P10については第13号住居跡と関連をもつものか判断が困難である。柱穴の規模は次のとおりである。P１径0.55×深さ0.51m（柱痕0.17×0.47m）、P2は0.55×0.49（柱痕0.17×0.33）、P3は0.14×0.01、P4は0.12×0.16、P5は0.18×0.08、P6は0.15×0.14、P7は0.59×0.5（柱痕0.25×0.41）、P8は0.16×－、P9は0.15×0.05、P10は0.1×0.12、P11は0.56×0.55（柱痕0.15×0.4）。

貯蔵穴は東隅に存在し不整形で、隅の方が浅くテラス状をなし、内側が深く大形である。長径1.66m、短径1.06m、深さ0.38mを計る。

南壁下中央からやや北側にずれて略長方形状の高まりが検出された。構築は地山ないし粘土貼り付けと考えられ、掘り方上に設置される。西側の端は掘り方内の溝に対応している。入り口に伴う施設と考えられる。

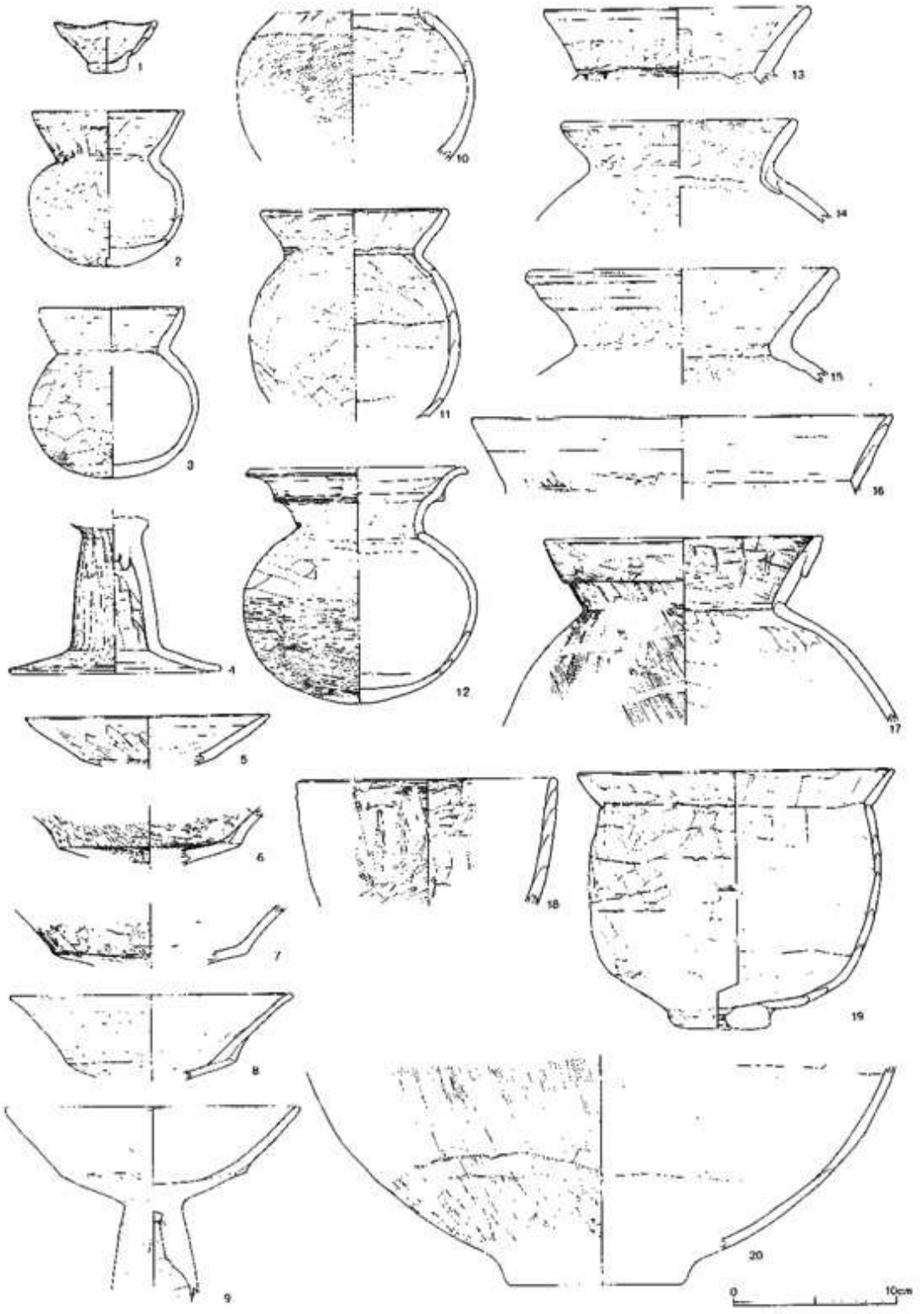
出土遺物は炉跡周辺のものが床直の他は全て若干浮いた状態である。

掘り方は全体に不明確であったが、主柱穴内部の中央部から北壁下を掘り残して、他の三辺を掘り窪めるものとみられ、南半部がやや深い。

南東壁下ほぼ中央、北東壁下P7付近に壁からやや離れて直交する溝が存在する。上述のように南東壁下のものは長方形状の高まりとほぼ対応しており、貯蔵穴も含めて東隅部分を区画する施設の存在が予想される。

貼り床、壁溝は存在しない。

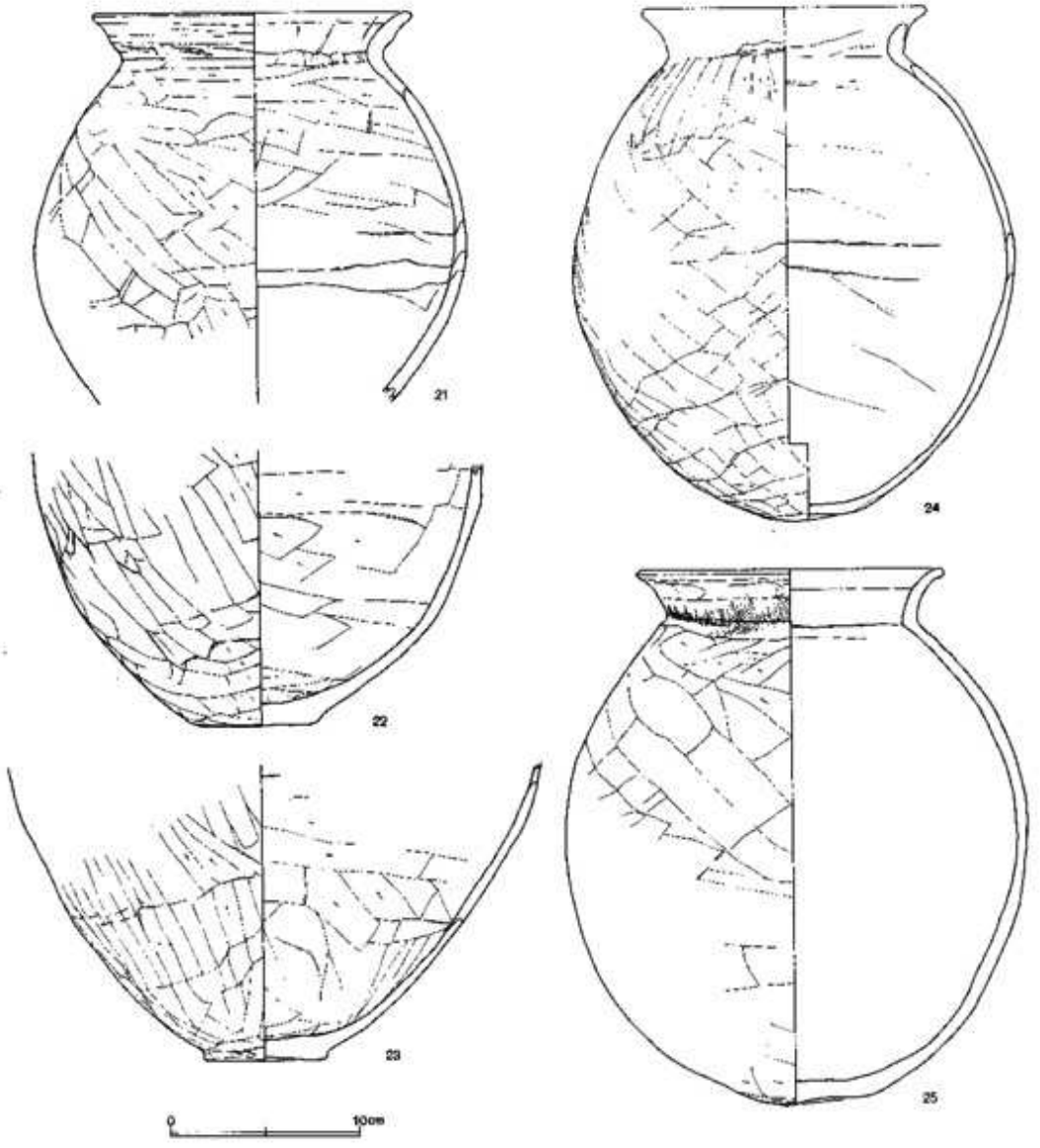
主柱穴及び貯蔵穴と掘り方との構築順序は土層断面で確認できなかった。柱穴の間隔は、P1P2＝3.69m、P1P7＝3.80m、P2P11＝4.11m、P3P4＝1.54m、P5P6＝1.70m、P3P5＝2.11m、P4P6＝2.32m、P8P9＝0.89mである。



第80図　第12号住居跡出土遺物(1)

第12号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
手ずくね土器	1	6.1 2.0 3.1	底部は小形で厚く体部は内湾して大きく開き極薄い。口縁部小波状をなし？口唇部尖り気味。	内外面とも指頭ナデで若干のミガキ加わる。	1/2,白多細粗,黄褐色.
小形丸底土器	2	9.3 － 9.5	底部は楕円形（径1.0cm）に凹み周縁に僅かな平坦面を作り出し、器厚厚い。胴部は楕円形を呈し頸部収縮し内面稜をなす。口縁部器肉薄く内湾して立ち上がり口唇部尖る。	外面胴部～底部丁寧なナデ、若干の筆ミガキ加わる。口縁部横ナデ（左回り）後頸部～中位粗い縦筆ミガキ↑←。内面底部～胴部下半丁寧な筆ナデ、上半指頭押圧ナデ。頸部～口縁下部若干の筆ミガキ加わる。	80%,細粗少礫微白多石英,暗黄褐色,赤褐色,内外面一部黒斑あり。
小形丸底土器	3	8.9 － 10.5	底部丸底器肉厚い。胴部僅かに偏平な球状を呈し最大径付近で微かな稜をもつ。頸部収縮し内面接合痕あり。口縁部短く開き口唇下で直立し外面緩い稜をなす。端部尖り気味。	外面胴部丁寧な横方向の指頭及び筆ナデ後底面（一定方向）に及ぶ。口縁部横ナデ（左回り）後中位指頭押圧ナデ。内面底部指頭ナデ後胴部下半まで筆ナデ、上半指頭押圧ナデで口縁部下部に及ぶ。	90%,細粗礫少全,暗黄褐色／黒色、赤褐色、№1。外面一部黒斑
高坏	4	－ 12.6 9.5	脚部は柱状で次第に径をます、裾部は大きく屈曲し水平気味に開く。内面裾部との境は稜をなす。接合部はホゾ接合。	外面裾部横ナデ後やや粗い放射状→脚部縦↑の順で筆ミガキ。内面比較的丁寧な筆ケズリ後裾部やや粗い横ナデ（左回り）。	90%,細粗礫微全,赤褐色、暗赤褐色,№2。加熱受ける。
高坏	5	17.4 － 5.2	やや小形の坏部で直線的に開く。口唇部丸く収まる。	口縁部上半から内面横ナデ、外面以下筆ナデか？	1/5,裏1,暗褐色.
高坏	6	－ － 3.5	坏部は下部で輪積み利用による稜をなし外反して開く。	外面横ナデ？後粗い縦筆ミガキ、内面横斜筆ミガキ。	1/2,細粗礫微白,暗褐色,ＳＪ１１出土片と接合。内外面一部黒斑。
高坏	7	－ － 3.7	坏部は下部で輪積み利用の稜をなし僅かに外反して立ち上がる。	外面横ナデ？後やや粗い縦筆ミガキ（稜部分は横）。内面底部一定方向、体部横方向の筆ミガキ。	1/3,細粗礫全白細,褐色／黒色、褐色,№54。外面一部黒斑
高坏	8	17.3 － 5.2	坏底部周縁接合部利用のやや緩い稜をなし、体部は外反して大きく開き口唇部丸く収まる。	外面口唇下横ナデ後全面縦筆ナデ↑底部粗い横筆ミガキ加わる（体部は部分的）。内面体部横ナデ（右回り）後下部～底面指頭押圧ナデで底面から粗い筆ミガキ加わる。	80%,細粗礫全微,黄褐色,№28＋41＋48。
高坏	9	18 － 11.8	僅かに膨らむ脚部から、坏部は下端に緩い稜をなし外傾して開く。口唇部丸く収まる。	磨滅顕著で詳細不明であるが外面脚部から坏下部筆ミガキ、上部筆ナデ？脚部内面筆ケズリ。	1/3,裏1,暗赤褐色,№5
小形壺	10	－ － 9.2	胴部は球形状で口縁部と下半部を欠失する。頸部内面緩い稜をなす。	胴部外面下半部横ハケ（4本/0.5cm）後上半部斜ハケ後粗い横斜方向の筆ミガキ。内面下半部筆ナデ上半部指頭押圧、ナデ。	3/4,細粗礫微白多,暗黄褐色（褐色）褐色,Ｐ１上層出土片と接合。
小形壺	11	11.5 － 12.8	胴部は僅かに縦長の球形状で底部を欠失する。頸部収縮し内面緩い稜をなす。口縁部器肉厚く内湾気味に開き、中位僅かに肥厚し口唇部平坦面をなし外面下稜をなす。	外面胴部比較的丁寧な筆ナデ（最大径付近横→上位、下位斜の順）頸部筆痕残る。口縁部未調整部分の残る粗い指頭ナデで口唇部は外面→端部の順で工具ナデ？内面胴部下位指頭ナデ？→中位筆ナデ→上位斜ハケ？（7本/1.0cm）後粗い斜筆ナデ、口縁部工具ナデ（←←）（1.1cm）。	1/2,細粗全白細,暗黄褐色（暗褐色）暗褐色,№27＋32－Ｐ１、４上層出土片。
壺	12	13.2 － 14.5	底部やや凸出気味で中心部は押圧によるか？僅かに凹む。胴部は偏平な球形状で最大径を中位にもち内面上部輪積み痕残る。頸部短くほぼ直立し内面接合。口縁部は二重口縁で外反して大きく開き中位外面粘土貼付けによる鋭い段をもつ。口唇部平坦面をなす。	胴部外面ハケ後下半部～底面比較的丁寧なナデ（中位横→下位一定方向の順）、上部はやや粗い筆ナデで若干のミガキ加わる。頸部縦ハケ後口縁部から横ナデ（左回り上段丁寧）内面胴部下半部丁寧な筆ナデ上部指頭押圧、ナデ。口縁部粗い横ナデで中位さらに指頭ナデされ凹みをつくりだす。	80%,細粗全少,褐色,№68。外面一部黒斑。



第81図　第12号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	13	16.4 － 4.6	口縁部長く器肉厚い。頸部上面接合で内面鋭い稜をなす。口縁部「く」字上に開き中位で僅かに細折し上部内湾気味で端部丸く収まる。	口縁部外面横ナデ（左回り）後下半部粗い斜指頭ナデ→で頸部工具ナデ？内面横ナデ後ハケ？平滑丁寧。頸部指頭押圧、ナデ。	1/2，細全微針微，暗赤褐色、黒色，No24－52＋55。内面全面及び外面一部黒斑。
壺	14	14.6 － 6.1	頸部収縮し内面緩い稜をなす。口縁部「く」字状に開き器肉厚く口唇部ほぼ平坦。内面接合痕残る。	外面胴部横ハケ後ナデ。口縁部縦ハケ後横ナデ（左回り一部工具ナデか？）後下半部粗い指頭ナデ→で頸部さらにナデ加わる。内面胴部指頭押圧、ナデ口縁部横斜ハケ後横ナデ。口縁部内外面赤彩か？	80%，細粗全白，赤褐色，No35＋P 1 上層出土片。内外面一部黒斑。
壺	15	19.3 － 6.5	複合口縁壺で粘土貼付けによる。頸部収縮し内面平坦面をなし接合痕残る。口縁部は長く外傾して開き複合部はっきりしない。口唇部内外面端かに凸出し端部平坦。	口縁部外面→内面の順で横ナデ（左回り）。胴部外面箆ナデか？頸部指頭押圧、ナデ。	1/2，細粗全微，暗黄褐色，P 1 下層出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	16	25.9 － 5	脚部は下部がやや開くもので上部器壁厚い。接合部は短いホゾ接合。坏部は下部で粘土貼付けによる稜をなし大きく外反して開くもので、口唇部丸く収まる。	外面坏部縦ハケ後ミガキか？脚部縦筅ミガキ。内面坏部ミガキ？脚部上部棒状工具によるケズリ、以下筅ケズリ。	70%,細砂全微,赤褐色,№75。
壺	17	17.2 － 11.4	胴部は算で張りをもち頸部収縮し内面接合で緩い稜をなす。口縁部は粘土貼付けによる複合口縁（下端よく密着しない）で内湾気味に立ち上がる。	外面胴部～口縁部下半？縦斜ハケ（11本/1.0cm）後胴部は軽い筅ナデ、口縁部斜ハケ←←↑後軽い横ナデ。内面胴部丁寧な筅ナデ、頸部指頭押圧ナデ。口縁部粗い横ハケ←←、、口唇部横ナデ（左回り）。	80%,細粗礫微全少,赤褐色,№4＋19＋29＋26＋28－41＋48＋炉出土片。
甕	18	16 － 7.7	鉢形を呈するとみられ体部は内湾して立ち上がり口唇下内外面輪積み痕残る。口唇部ほぼ平坦。	外面口唇下横ナデ後体部から粗い筅ケズリ↑で丁寧な筅ナデ↑加わる。内面横ハケ（7本/0.5cm）←←後比較的丁寧な筅ナデ、下部は指頭ナデ加わる。	1/10,細粗少赤粒少,赤褐色（褐色）赤褐色,P1上層出土。
甕	19	19.5 5.8 15.8	底部は小形で凸出し厚くほぼ中央に一孔焼成後下側から穿孔。胴部は外傾して立ち上がり下半でほぼ直立し、器肉薄く輪積み痕による凹凸目立つ。頸部僅かに収縮し内面鋭い稜をなす。口縁部屈折して開き中位肥厚し口唇部ほぼ平坦。	底面若干のナデ、外面胴部強粗い縦筅ナデ後粗い横筅ミガキ、口縁部横ナデ？後縦斜筅ナデ↑で粘土残る。内面口縁部横ナデ（左回り）及び指頭押圧後胴部比較的丁寧な横筅ナデ←←↑下部は指頭ナデ加わる。	90%,細粒多全微,黒褐色,№5。外面頸部～上胴部ススス炭化物付着。
壺	20	－ － 11.4	大形の壺胴部下半で底部を欠失する。	外面筅ナデ？後丁寧な縦筅ミガキ。内面比較的丁寧な横筅ナデ。	1/3,細多粗全少,黒褐色、暗褐色、褐色,№71～73。外面一部黒斑、炭化物付着。
甕	21	16.8 20.5	底部を欠失するが底は台付か？胴部最大径はやや下位にあり、下膨れ状呈する。口縁部「S」字状口縁気味に緩い段をなし外反して開き口唇部丸く収まる。	外面上胴部ハケ？後丁寧な斜筅ナデ↑で一部木口状工具ナデ後下胴部も同様。口縁部右回り横ナデ、頸部筅圧痕（巾2.1cm）残る。内面頸部指頭押圧後以下ハケ後木口状工具による丁寧な横斜ナデ←←↑、若干の指頭ナデ加わる。口縁部横ハケ←←後左回り横ナデ。	80%,細粗レキ微全,暗褐色/黒褐色,P1下層出土。外面一部黒斑、ススス炭化物付着。
甕	22	－ 6 13.7	底部は小さく凸出し平底。胴部は長胴気味で内湾して立ち上がる。	底面未調整部分の残るナデ。胴部外面比較的丁寧な（下部粗い）斜筅ナデ↑↑←。内面底部丁寧な筅ナデ、胴部筅ケズリ後ナデ？	70%,粗、粗礫微白多,黒褐色、暗褐色,№61。外面上部炭化物付着。
壺	23	－ 6 15.4	底部は小さく凸出し周縁部粘土貼付けか？僅かに凸状呈す。胴部は長胴気味で内湾して立ち上がる。	底面周縁部未調整で中心部一定方向の筅ナデ外周未調整で筅痕（巾1.1cm）残る。胴部外面丁寧な縦斜筅ナデ↑←。内面底部断続的に左回りに筅ケズリ後若干の指頭ナデ、底部～下胴部放射状↖左回り斜筅ケズリ、上胴部やや丁寧な斜横筅ナデ←↑	2/3,細、粗礫微全白多,赤褐色,№4。内外面一部黒斑。
壺	24	－ 4.3 25.9	底部極薄く円盤技法？か中央凹む。胴部は長胴形呈し最大径をほぼ中央にもち器肉薄い。頸部収縮し内面緩い稜をなす。口縁部「く」字状に開き器肉厚く頸部内面接合。	底面未調整部分残るナデ。外面胴部ハケ後丁寧な縦斜筅ナデ↑←、胴部～頸部木口状工具ナデ↑←。内面口縁部横ナデ、頸部指頭ナデ以下木口状工具による極丁寧なナデ←←↑、底面指頭ナデ加わる。	70%,細粗少礫微全,黒褐色／暗褐色,№12＋14＋P1下層出土片。外面一部黒斑、ススス炭化物付着。
壺	25	16.3 4.5 28.1	底面僅かに凹み小形で長胴形呈し最大径をほぼ中位にもつ。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部小さく外反し器肉やや厚い。	外面下胴部横筅削り←後中位～上胴部斜筅ケズリ↑←。頸部～口縁部縦ハケ後右回り横ナデ。内面頸部指頭ナデ後胴部極丁寧な筅ナデで底面に及ぶ。口縁部左回り横ナデ。	70%,細少礫少,黒褐色／暗褐色、暗褐色,№62。外面一部黒斑、中位帯状にススス炭化物付着。

第16号住居跡（第81.82図）

南～西側は暗褐色土が分布（凹状に住居を取り囲むように）しており、北壁外に地山が露出していたのと対照をなす。北壁外に小ピットが１ヶ所認められたが明確に壁外施設と認識されるものは他に検出されなかった。

埋土はよく残っており、第9、12号住居跡と同様自然推積と考えられる。出土遺物は少なく埋土中出土のものは少量。

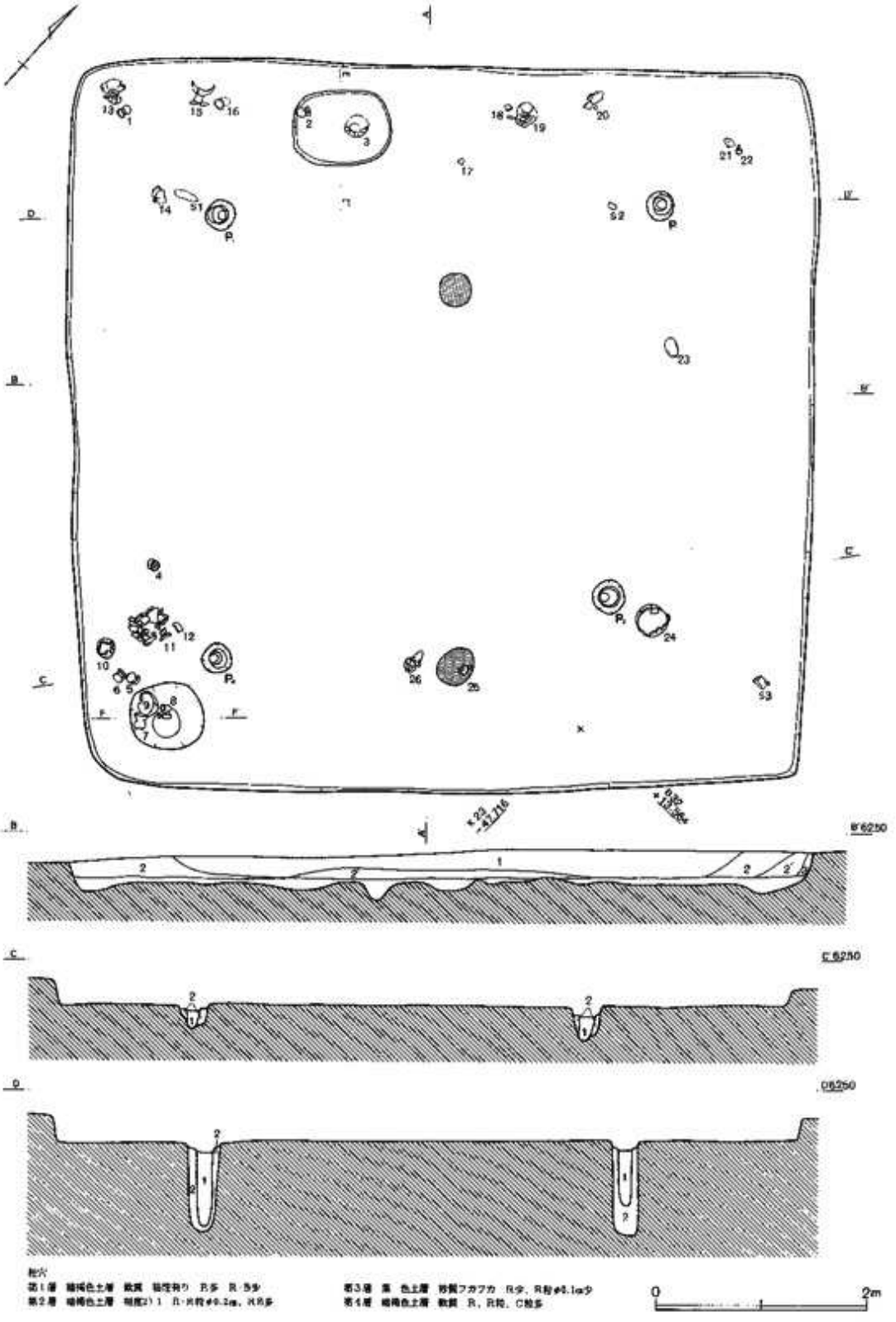
平面形は略方形で北、東隅が鋭角的。掘り込みは比較的深く、壁はほぼ直立する。床面はほぼ平坦で、全体に柔らかく検出は困難であった。中央部を中心に黒色土の分布が認められる。炉は南、北壁下ほぼ中央寄り２ヶ所で検出された。北壁下のものはほとんど焼けておらず焼土の集中である。北壁下ピット内から若干の焼土及び粘土が認められ竈の可能性もあるが、明確な遺構としては把えられなかった。南側のものは焼け締まっており範囲も若干広い。他の該期住居跡に比較してどちらも小形で炉跡とするには躊躇する。柱穴は４本主柱穴で、北側のものは浅く南側が深い。いずれも柱痕跡をもつ。南隅の柱穴はややずれる。南隅は樹木による撹乱が顕著であるが貯蔵穴が、検出され略方形でやや小形である。落下した状態で坩、高坏形土器が出土している。周辺部出土土器もほぼ床直である。北壁下ほぼ中央のピットは略長方形状で高坏形土器が正立状態で出土している。生活段階に伴う遺物は少量で北壁下と南隅貯蔵穴周辺に集中している。

掘り方は全体に明瞭でないが四周を掘り窪めるものとみられ全体に浅い。隅部がやや深く掘り込まれる。北壁下中央は略方形に深く掘り込まれる。主軸については、２ヶ所に焼土が見られ判断が難しい（貯蔵穴配置を考えると北→南であるが焼け具合で見ると南→北。）が南→北方向と判断した。

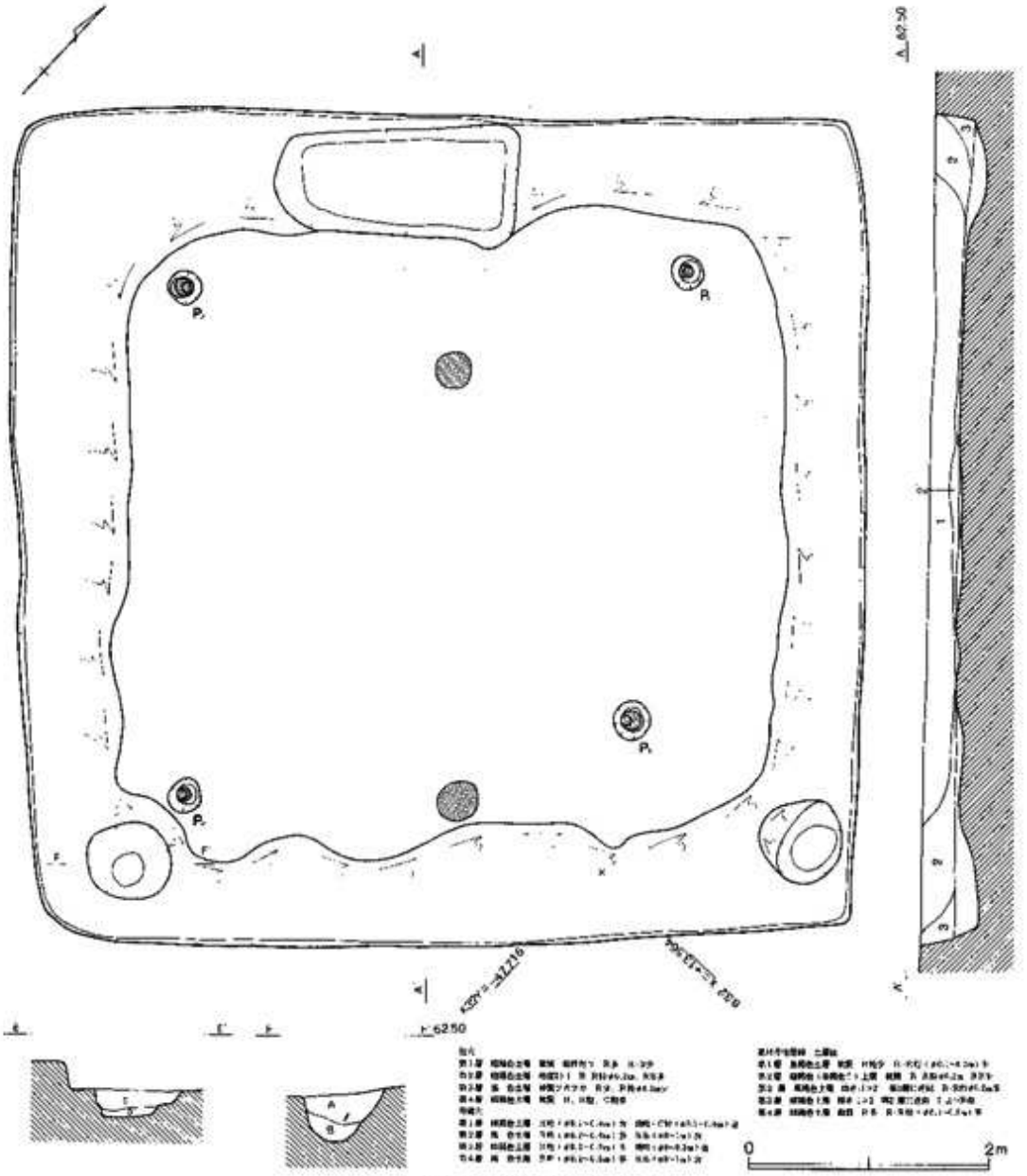
各柱穴間隔は芯心でP1P2=4.14m、P2P4=4.17m、P4P3=3.74m、P3P1=3.75mである。P1、P2に柱痕跡が認められ、径は0.1～0.15mである。

第16号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
ミニチュア鉢	1	8.1 4.5 3.8	底部厚く凸出し平底。体部は外傾して開き口唇部丸く収まる。	外面口縁部横ナデ、底部未調整部分の残るナデで体部下半に及ぶ。内面口唇下横ナデ以下指頭ナデ。	1/2,細全白,暗褐色,№23。内外面一部黒斑。
小形丸底土器	2	－ － 6.5	体部は偏平な丸底で底部厚く凸出気味。頸部収縮し上面接合で内面稜をなす。	外面体部ハケ（5本/0.5cm）後比較的丁寧な横ナデ、底面一定方向で平行する篦痕跡あり。内面下半部横ハケ後篦ナデ後底面一定方向の篦ケズり、上部指頭押圧ナデ。	80%,細粗微少全少,褐色,№25。外面一部黒斑。
小形丸底土器	3	－ － 7.1	体部偏平な楕円形状で底部厚く丸底、内面平坦。頸部収縮し上面接合でよく密着し内面稜をなす。	外面体部ハケ？後比較的丁寧なナデ、底面丁寧な篦ナデ（一部篦ケズり加わる）。内面体部下部～底面やや粗い篦ナデ←後上部指頭ナデ、口縁部ハケ後横ナデ。	80%,細粗少白多,褐色／赤褐色、褐色,外面一部黒斑
小形丸底土器	4	9.2 － 8.8	体部は偏平な丸底（内面平坦）で最大径付近は直立気味、頸部収縮し内面鋭い稜をなす。口縁部は頸部上面接合で直線的に短く開き外面輪積みによる凹凸目立つ。口唇部尖り内面下微かに稜をなす。	底面一定方向の篦ナデで横ナデ加わる。外面体部丁寧な横篦（巾0.5cm）ナデ←←。。口縁部横ナデ（左回り）で内面に及び、下半部指頭ナデ後頸部から間隔置いた丁寧な縦篦ミガキ↑←。内面底部左回りの断続的篦ナデ（尚縁部棒状工具か？）体下部丁寧な篦ナデ、上部指頭ナデ。	90%,細粗少白細多,赤褐色,№4。外面一部黒斑



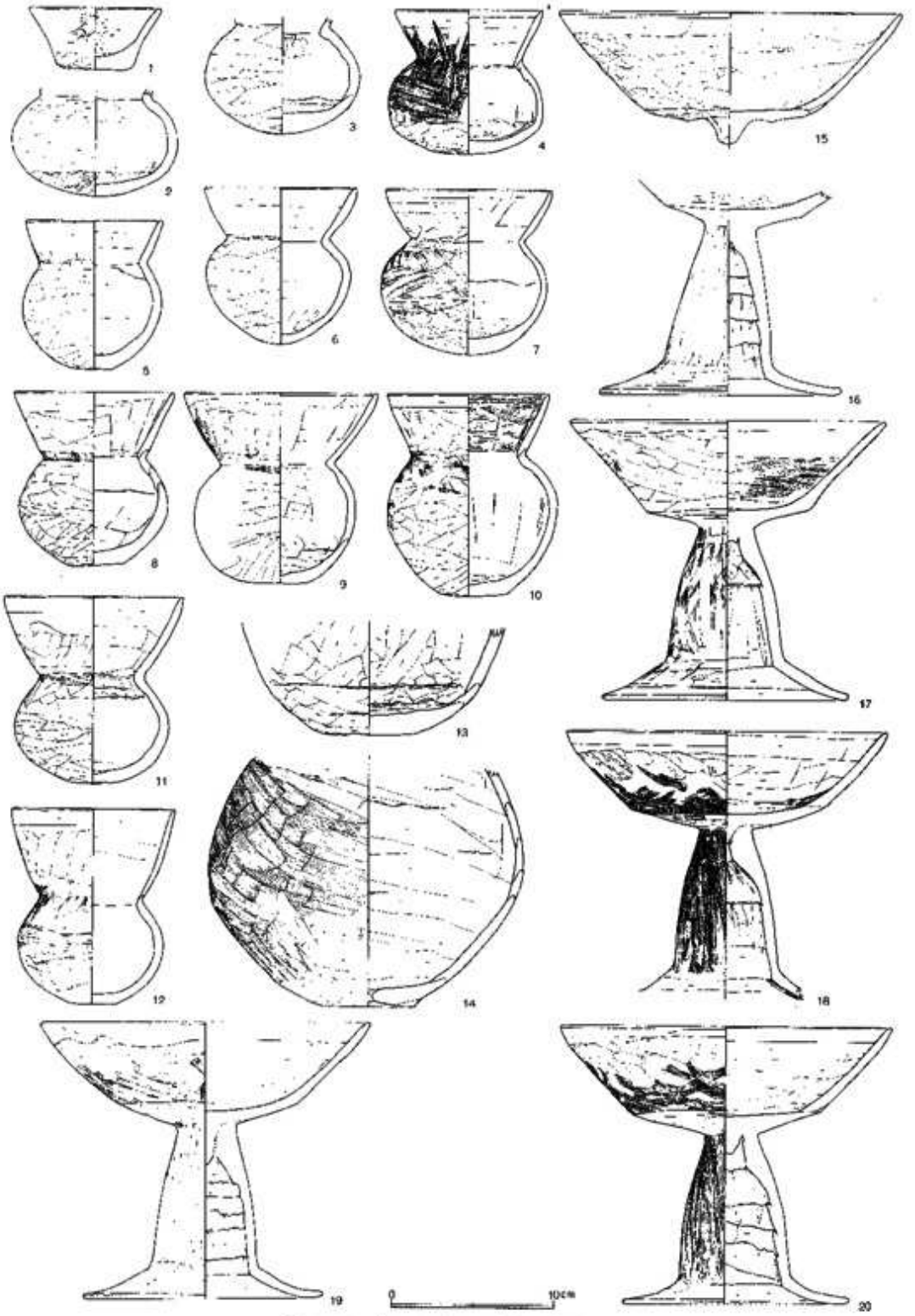
第82図　第16号住居跡平面図(1)



第83図　第16号住居跡平面図(2)

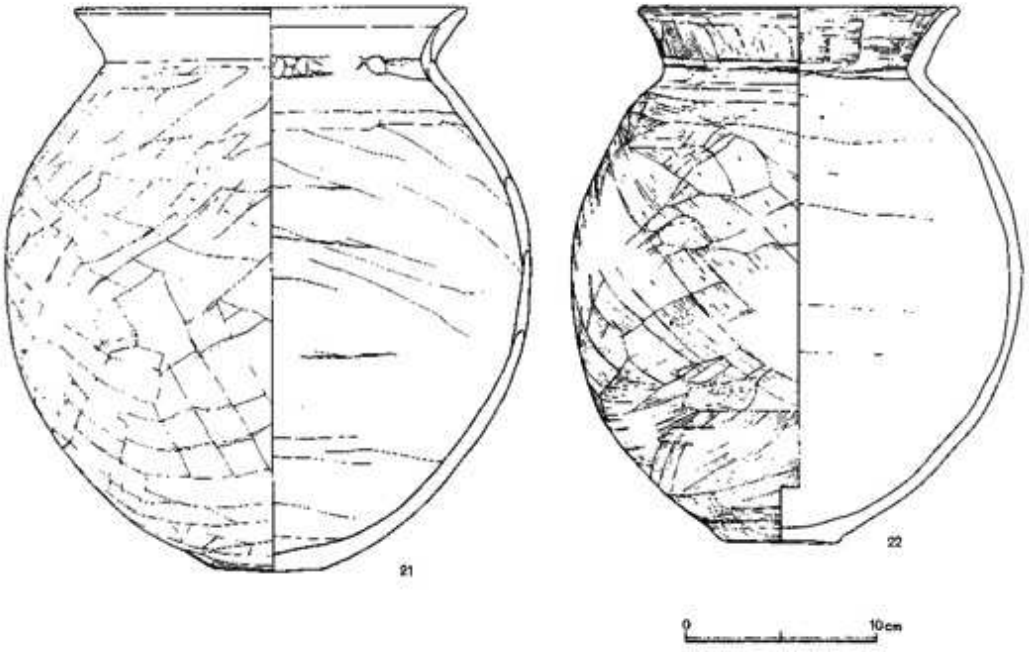
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	5	8.4 2.7 9.1	体部は球形状を呈し最大径をやや上位にもち口径よりやや大きい。底部は平底で凸出気味。頸部収縮し内面緩い稜をなす。口縁部は短く内湾してそれほど開かずに立ち上がる。口唇部丸く収まり一ヶ所片口状に打ち欠かれる。	外面体部粗い横篦ナデ及び指頭ナデで底面に及び周縁部ケズリ？口縁部右回り横ナデで内面に及ぶ。体部内面篦ナデ底部に及び、頸部指頭押圧ナデ。内外面剥離顕著で詳細不明。外面～口縁部内面赤彩。	完存,細粗礫微白多,赤褐色／黄褐色、褐色,No 1。外面底部付近黒斑
小形丸底土器	6	9.4 － 9.6	底部丸底でやや凸出気味。体部半球状で頸部強く収縮する。口縁部内湾して開き口唇部小さく直立し端部丸く収まる。口径、最大径はほぼ等しい。	外面体部ハケ？後体部横→底部一定方向に比較的丁寧なナデ。口縁部横ナデ（左回り）内面対応する。体部内面上部指頭押圧ナデ、下半部横篦ナデ←←↑。	1/2,細少粗礫微白多,暗褐色、褐色,床下出土。外面一部黒斑。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形丸底土器	7	10.3 － 10.1	体部はやや偏平な楕円形状で最大径を上位にもち丸底（内面ほぼ平坦）。頸部収縮し内面鋭い稜をなす。口縁部内湾して立ち上がり口唇下鋭い稜をなし（内面対応）ほぼ直立し、端部丸く収まる。口唇部一ヶ所片口状に焼成後打ち欠く。	外面体上部斜ハケ（7本/1.0cm）後若干の指頭ナデ、頸部から縦篦ナデ←体下部粗い横篦ナデ。底面一定方向の篦ナデ及びケズリ。口縁部左回り横ナデ内面（丁寧）に及び、下半部粗い指頭ナデ。内面底部篦ナデ後指頭ナデ、体部丁寧な横篦ナデ←後頸部指頭押圧ナデ。	90%,細少粗礫微金,褐色,№6。底部内外面黒斑あり。
小形丸底土器	8	9.9 3.4 10.6	体部は球算玉状を呈し最大径中位にもち口径よりやや大きい。底部は隅稜から方形状に削り出されほぼ平坦。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部は頸部上面に接合するものでやや長く直線的に開き、口唇部丸く収まる。	外面体上部横篦ナデ後指頭ナデ、中位比較的丁寧な斜横篦ナデ（木口状工具？）下部粗い斜横篦ナデ。底部周縁部ケズリ？後篦ナデ。口縁部縦ハケ後右回り横ナデで下半部指頭ナデ。口縁部内面木口状工具による断続的ナデ←←、体部内面横篦ナデ底部に及び頸部指頭押圧ナデ。	90%,細粗少白粗粗多,赤褐色,№8。外面一部黒斑。
小形丸底土器	9	11.9 3.6 10	体部はやや偏平な球形状を呈し頸部収縮し内面稜をなす。口唇部内湾して立ち上がり口唇部微かに直立し、口唇部丸く収まる。	外面体部横篦ミガキ、口縁部ハケ？後横ナデ（口唇下工具ナデ？）後指頭ナデ。口縁部内面口唇下工具ナデ後比較的丁寧な横ナデ、体部指頭ナデで接合部粘土はよく密着する。	1/3,細粗礫少白多,赤褐色、黒褐色,№17。内外面一部黒斑。
小形丸底土器	10	10 4.2 12.4	体部は縦長の球形状を呈し最大径上位にもち口径より大きい。底部は略円形状に削り出されほぼ平坦。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部内湾してそれほど開かずに立ち上がり口唇部丸く収まる。	外面体上部斜めハケ（。←6本/0.6cm）後粗いナデ、中位粗い横篦及び指頭ナデ、下部粗い斜篦ナデ（木口状工具？）。底部周縁部ケズリ？後篦ナデ。口縁部縦ハケ↑後左回り横ナデ下半部指頭ナデ。口縁部内面木口状工具（←←↑巾2.0cm）による断続的ナデで体部～底部も同様、頸部指頭押圧ナデ。	完存,細粗多礫微白細砂多,黄褐色／赤褐色,№7。外面一部黒斑。
小形丸底土器	11	11 － 11.5	体部は偏平で肩が張り僅かに凹底、最大径を中位にもち口径にほぼ等しい。頸部収縮し内面鋭い稜をなす。口縁部長く内湾して立ち上がり口唇部丸く収まる。	外面体上部斜篦ナデ後指頭ナデ下部やや粗い横篦ナデ←←底面粗い篦ナデ乃至ケズリ。口縁部左回り横ナデ内面に及び、下半部指頭ナデ。体部内面篦ナデ底部に及ぶ。頸部指頭押圧ナデ。内面剥離顕著で詳細不明。	90%,細少粗礫微白多,赤褐色、黄褐色,№5。
小形丸底土器	12	10 2.7 12	体部は球形状を呈し肩がやや張り最大径を中位にもち、口径よりやや大きい。底部は方形状に削り出され中心部僅かに凹む。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部は長く内湾してそれほど開かずに立ち上がる。口唇部丸く収まる。	外面体部中位以下粗い横篦ナデ（木口状工具？）底面未調整、周縁部ケズリ？体上部粗い縦篦ナデ↓→。口縁部左回り横ナデで内面に及び、下半部指頭ナデ。内面剥離顕著で詳細不明篦ナデか？	90%,細粗少白石英多,黄褐色、暗褐色,№2。外面底部黒斑及び炭化物付着。
甕	13	－ 5.8 6.8	底部は粘土巻き付けで厚く凸出し、底面中央僅かに凹み周縁ほぼ平坦。体部は内湾して立ち上がる。	外面底面中央木葉痕？残り他は未調整で外周篦ケズリ。胴部粗い縦篦ケズリ後縦方向のナデ、下部は横方向。内面底部丁寧な篦ナデ、周辺部指頭押圧胴部刷毛？後やや粗い篦ナデ。	1/3,細粗少白多,暗赤褐色（赤褐色）黒褐色,№14。
甑	14	－ 5.7 15.2	底部厚く僅かに凸出し周縁部粘土貼付けによるか中央凹む。ほぼ中央に一ヶ所円孔（径0.6cm）焼成後内側から穿たれる。胴部やや偏平な球形状で内面上位輪積み痕のこす。	外面底部未調整部分残る篦ケズリで外周未調整。上胴部斜めハケ↑↑←後下部縦ハケ（↑→11本/巾0.9cm）。内面上胴部横ハケ後横篦ケズリ、下部篦ナデ。	80%,細粗礫少白多,暗黄褐色／黒褐色、赤褐色,№1。外面胴下部炭化物スス付着、黒斑あり。
高坏	15	21 － 8.1	坏下部で稜をなし体部直線的に開き口唇部丸く収まる。底面平坦で粗いホゾ接合。坏部は比較的深い。	外面坏体部ハケ？後上部左回り横ナデ後指頭押圧、ナデで底部に及び裾付近粗い篦ナデ加わる。内面坏体部上部左回り横ナデ後やや丁寧な横篦ナデ、底面ハケ？後篦ミガキ。	完存,細粗レキ礫白多,赤褐色,№3。



第84図　第16号住居跡出土遺物(1)

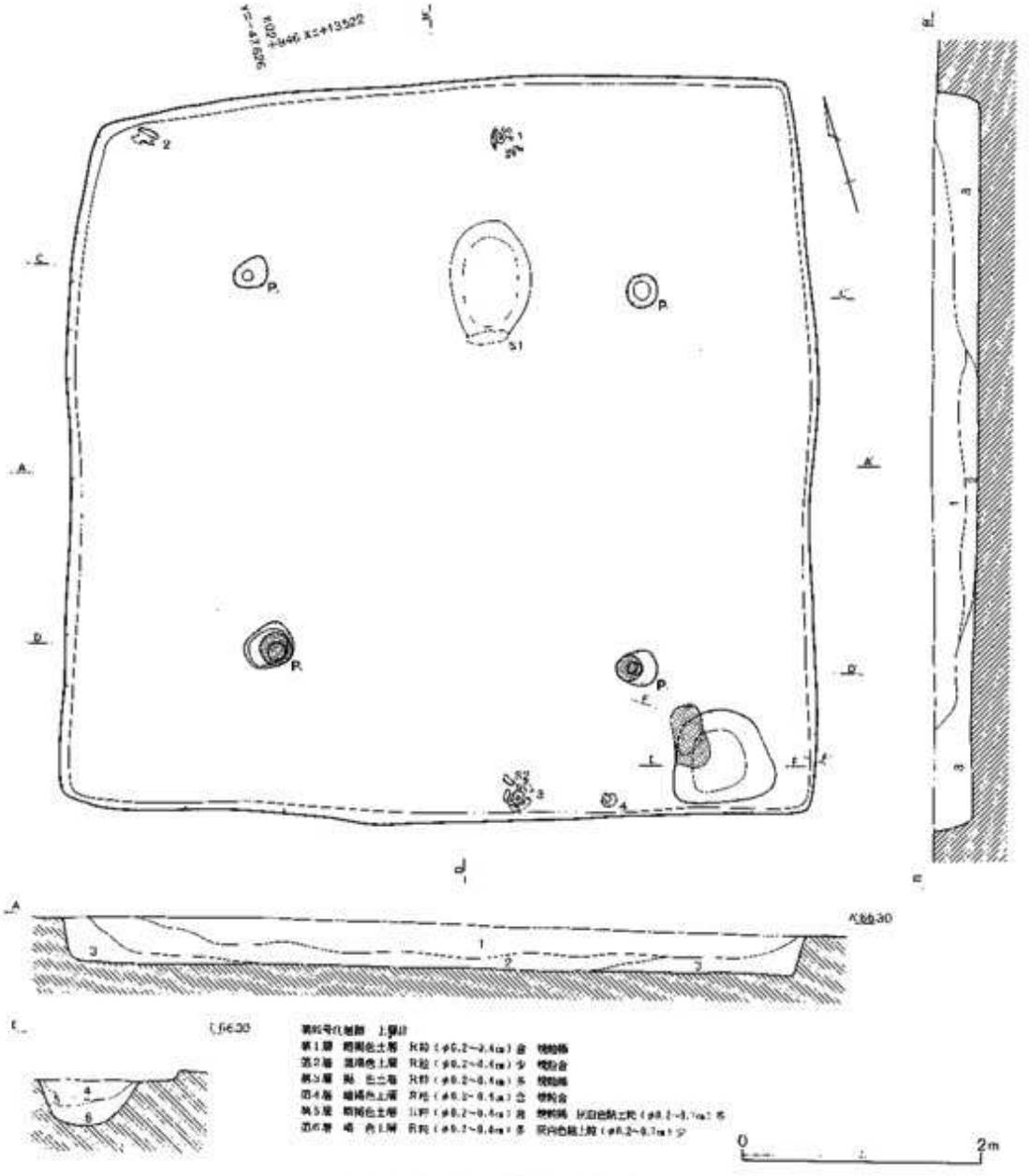
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	16	－ － 13.1	坏下部の接合は脚柱部上端に粘土を巻く手法。脚柱部は裾広がりで僅かな膨らみをもつ。内面5段の輪積み痕残る。裾部は水平に近く開き内面境界部稜をなし端部尖る。	外面坏体部稜以下縦以上横篦ナデ。内面体部丁寧な篦ナデ底面篦ミガキ。外面脚柱部丁寧な縦篦ナデ内面未調整部分の残る指頭ナデ。裾部外面左回り横ナデ後脚柱部～中位放射状に丁寧な篦ナデ、内面横ナデ。	70%,細粗少雲微白多,黒褐色（暗褐色）橙色,№29。
高坏	17	19.5 14.8 17	坏下部で稜をなし体部外反して開き口縁部丸く収まる。脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面1段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は短いホゾによる。裾部湾曲して開き内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ？後上部横ナデ後指頭押圧、やや粗いナデで底部に及ぶ。脚柱部縦ハケ（7本/0.5cm）後若干のナデ、裾部右回り横ナデ。内面坏体部横ハケ（10本/巾0.9cm）後やや粗い横ナデ、底面篦ミガキ。脚柱部上部未調整、下半部右回り断続的篦ケズリ。裾部右回り横ナデ。	80%,細粗少雲微白多,赤褐色／黄褐色,№13。外面一部黒斑。
高坏	18	19.8 － 16	坏下部で接合部利用の稜をなし体部内湾して開き口縁部丸く収まり外面僅かに凸状。脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面1段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は脚柱部粘土巻き付けか？裾部湾曲して開き内面稜をなす。	外面坏体部ハケ？後上部横ナデ後指頭押圧、やや粗いナデで底部に及び若干の粗い篦ナデ加わる。脚柱部縦篦ナデ↓←、裾部丁寧な右回り横ナデ。内面坏体部やや粗い木口状工具による横ナデ、底面篦ミガキ。脚柱部上部未調整部分の残る篦ナデ、下半部丁寧な右回り篦ケズリ。裾部右回り横ナデ。	80%,細粗少雲微白多,赤褐色／暗黄褐色、暗褐色,№20。坏部内外面一部黒斑
高坏	19	20.3 14.5 17	坏下部で接合部利用による緩い稜をなし体部内湾して開き口縁部丸く収まり縁端面僅かに凸状。脚柱部裾広がりで膨らむ。内面ホゾ穴あき以下ケズリにより直線状となる、接合はホゾによるか？裾部湾曲して開き周縁部ほぼ水平内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ？後上部左回り横ナデ後指頭押圧、ナデで底部に及び稜前後粗い篦ナデ加わる。脚柱部極丁寧な縦篦ナデ↓↑←、裾部丁寧な右回り横ナデ。内面坏体部上部横ナデ後横篦ナデ、底面篦ナデ及び指頭ナデ（中位剥離顕著）。脚柱部丁寧な右回り篦ケズリ。裾部丁寧な左回りのナデ、端部磨滅。	90%,細粗少白細粗多,赤褐色／暗褐色,№9。外面一部黒斑
高坏	20	20.5 13.5 7	坏下部で接合部利用の緩い稜をなし体部内湾して開き口縁下直立気味で端部丸く収まる。脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面4段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は短いホゾによる。裾部外反して小さく開き内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ？後上部横ナデ後指頭押圧、ナデで底部に及び稜付近粗い篦ナデ加わる。脚柱部極丁寧な縦篦ナデ↓↑←、裾部左回り横ナデ。内面坏体部上部横ナデ後比較的丁寧な横篦ナデ、底面篦ミガキ。脚柱部上面ホゾ穴あき上部未調整でシボリ痕、下半部粗い右回り断続的篦ケズリ。裾部丁寧な左回り横ナデ。	80%,細粗少雲微白多,赤褐色,№16。外面一部黒斑
壺	21	20.5 5.7 29.2	底部僅かに凸出、周縁部粘土貼付けによるか中央凹む。胴部は長胴形で最大径をほぼ中央にもつ。内面輪積み痕残る。頸部収縮し内面緩い稜をなす。口縁部厚く「く」字状に開き口縁部尖り気味、接合は頸部上面接合。	底面一定方向に篦ケズリ。外面胴部中位以下粗い篦ケズリで若干の篦ナデ加わる。頸部～上胴部丁寧なナデ。口縁部横ナデ。内面丁寧な斜篦ナデ↑→頸部指頭ナデ後横篦ケズリ→←、口縁部横ナデ。	70%,細粗多雲微白全,黄褐色／黒色、暗褐色,№26。外面一部黒斑
壺	22	16.5 6 27.8	底部は僅かに凸出し、長胴形最大径をほぼ中位にもつ。頸部収縮し緩い段、内面稜をなす。口縁部「く」字状に開き、口縁上面ほぼ平坦。	底面中心一定方向→周縁部右回り篦ナデ。外面下胴部横斜ハケ→↑後上胴部斜↑↑←上端部横ハケ←←。口縁部縦ハケ後左回り横ナデで頸部に及ぶ。内面木口状工具による丁寧な横ナデ。口縁部横ハケ←←後軽い横ナデ。内面剥離顕著で詳細不明。	80%,細粗多雲微白多,黄褐色／黒色、黄褐色,№11＋12。外面一部黒斑。



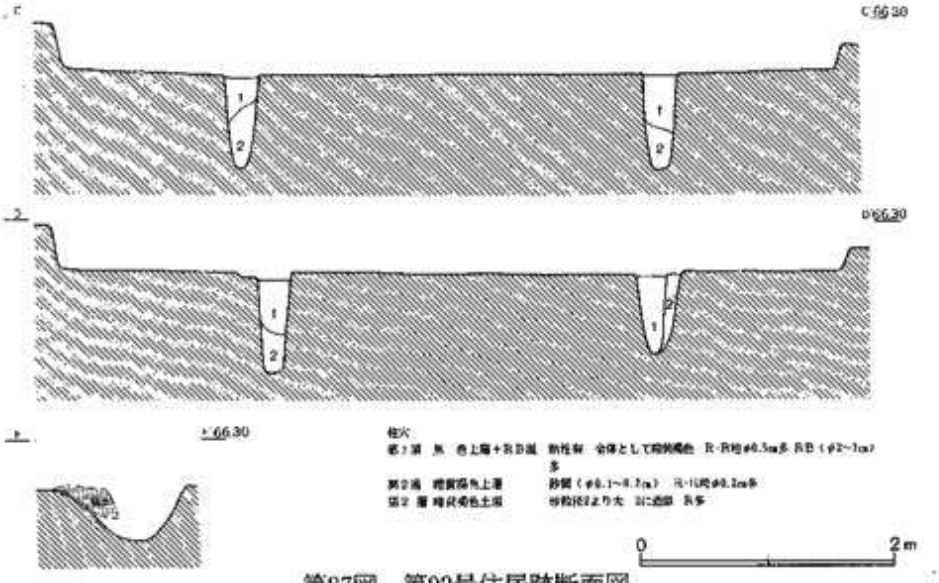
第85図　第16号住居跡出土遺物(2)

d　古墳時代　第3群

第3群は台地頂部の標高66m前後に位置する第92、93、94、96号住居跡によって構成される。出土遺物がないものもあり不明確な部分もあるが、4軒は和泉式期に属しほぼ同一時期と考えられる。4軒の住居規模はややばらついている。大形の第92、93号住居跡は4本主柱穴で貯蔵穴をもち整った住居跡である。第94、96号住居跡は削平されたこともあるが、他に比べて施設は貧弱である。炉跡は第93号住居跡以外は不明確で、第94号住居跡は極端に片寄っている。4軒の住居跡の占有面積は約1271平米とかなり広く、第2群が集合的であるのに対し分散的あり方を示している。



第86図　第92号住居跡平面図



第87図　第92号住居跡断面図

第９２号住居跡（第８５、８６図）

第9、12、16号住居跡とほぼ同一の色調、性状の分布で明瞭な方形の範囲として確認された。東壁は攪乱とほぼ重なり住居内北半部にも攪乱が及ぶ。壁外施設は認められない。

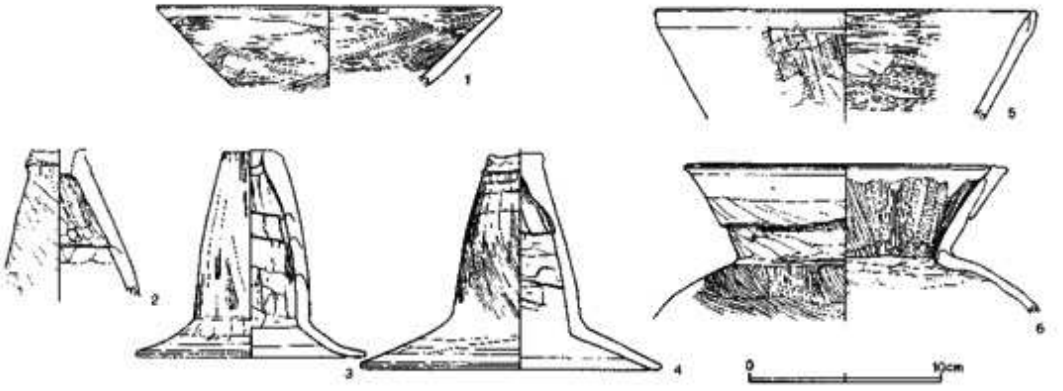
埋土は攪乱もあるがよく残っており自然推積とみられる。出土遺物はほとんどない。

平面形は一辺がやや斜行するやや歪んだ方形乃至台形状。掘り込みは深く壁はやや傾斜する。床はほぼ平坦で、主柱穴内がやや硬いが周辺部は柔らかい。中央部にロームブロック混じりの黒色土の分布がみられる。炉は上層からの攪乱によるためか焼土等は把えられなかった。炉石とみられる細長い石が北側柱穴間にありこの部分が炉に該当するとみられる。柱穴は４本主柱穴でいずれも深く柱痕跡は１本しか認められなかった。柱穴の間隔はP1P3=3.15m、P3P4=2.98m、P4P2=3.15m、P2P1=3.30mである。柱痕跡によると径は0.24mである。貯蔵穴は南東隅に位置し台形状、粘土が上層から中層まで流入する。生活段階に伴う遺物は少なくいずれもやや浮いている。

床の断割りを実施したが明瞭ではなかったので掘り方は存在しないと判断したが、四周に帯状に暗褐色土の分布がみられた。

第92号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	1	18 — 4.1	坏下部で接合部利用の段をなし？体部はほぼ直線的に開き口縁部丸く収まる。坏部はやや浅い。	外面坏体部ハケ後上部横ナデ後粗い横斜筋ミガキ。内面坏体部横ハケ後粗い横斜筋ミガキ。	90% 細砂微少赤粗 赤褐色 No.3。外面一部黒斑
高坏	2	— — 7.6	脚柱部裾広がりで膨らむ内面１段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は短いホゾによる。	外面脚柱部縦筋ミガキ後丁寧なナデ、内面未調整。	70% 細粗微全少 黄褐色、赤褐色 No.1。
高坏	3	11.7 10.8	脚柱部裾広がりで膨らみ内面５段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は短いホゾによる。裾部脚柱部との境で段をなし外反して短く開く。内面段をなし端部丸く収まる。	外面脚柱部縦筋ミガキ？裾部横ナデ。内面脚柱部上部未調整、以下粗い右回りの筋ケズリ。裾部左回り横ナデ。外面赤彩か？	90% 細粗少微微全少 淡赤褐色、黒色／暗黄褐色 No.4。外面黒斑、スス付着。



第88図　第92号住居跡出土遺物

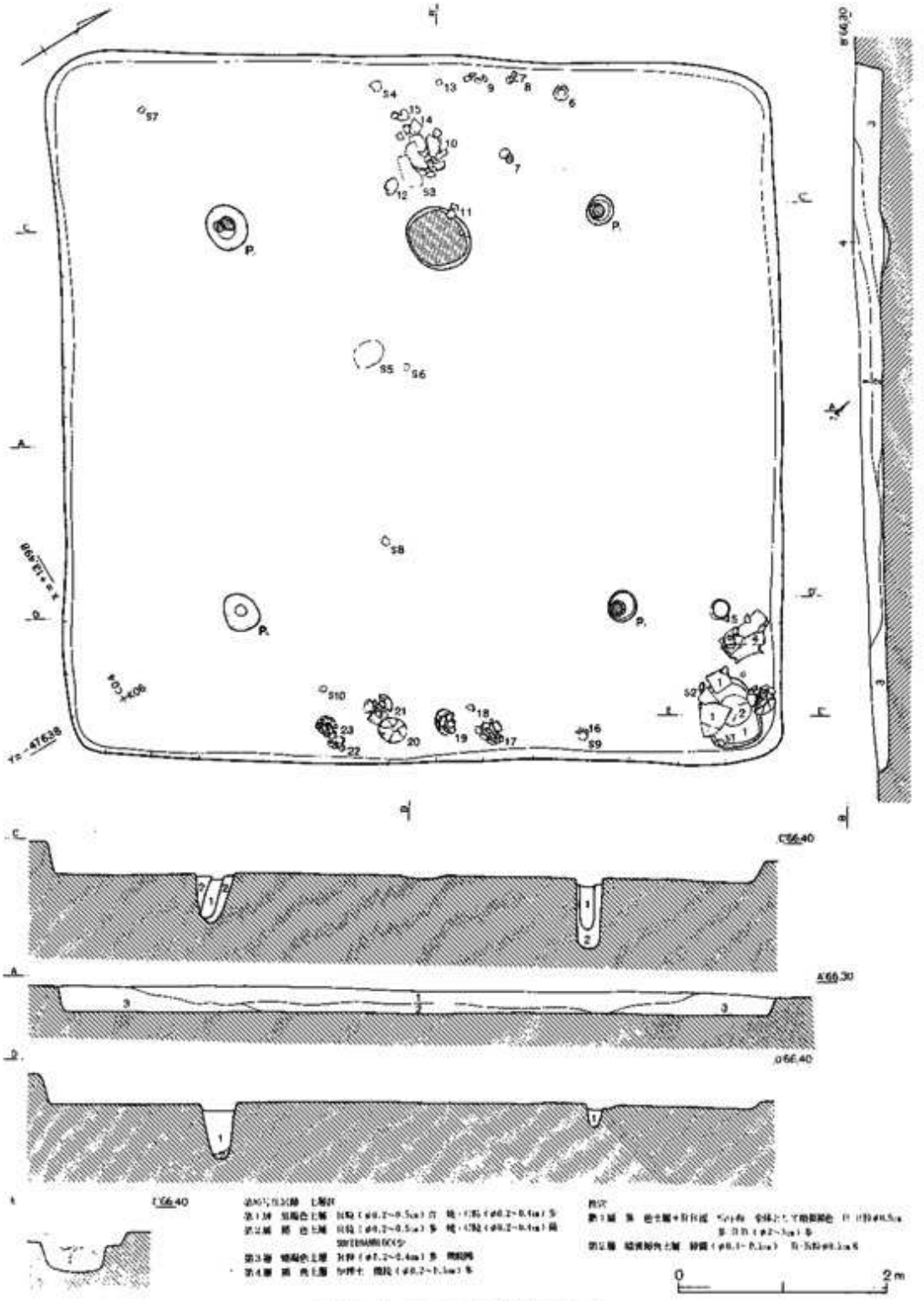
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
高坏	4	－ 15.6 11.2	脚柱部裾広がりで膨らむ内面4段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は脚柱部周縁粘土巻き付けによる。裾部僅かに内湾して開き内面稜をなし端部丸く収まる。	脚柱部縦斜ハケ（本）後若干のナデ、裾部ハケ後左回り横ナデ。脚柱部上部未調整、下半部右回りのやや粗い筆ケズリ。裾部左回り横ナデ。	70% 細粗少礫微全少 暗黄褐色／暗褐色 №1＋床下出土片。 内面黒斑
甕	5	20 － 5.7	体部は僅かに内湾して開き、内外面に輪積み痕残す。口唇部外面面取り状で平坦。	外面口唇下水口状工具ナデ？後縦筆ケズリで下部ミガキ加わる。内面横ハケ（←10本/巾0.9）後口唇下斜ケズリ、下半部指頭押圧加わる。	1/10 赤多細粗 赤褐色 P1上層
壺	6	17 － 8.2	胴部は膨が強く張り、頸部強く収縮し内面稜をなす。口縁部接合は上部接合で短く直線的に開く。複合部は粘土貼付けで下端部密着していない。口唇部平坦で内外面に僅かに凸状呈す。	外面胴部ハケ後斜め筆ミガキ。複合部丁寧な右回り、以下粗い横ナデで筆圧痕残る。胴部内面筆ナデ、頸部指頭押圧ナデ部分的にケズリ。口縁部左回り横ナデ後縦筆ミガキ。	80% 細粗礫微全 暗黄褐色、褐色 №2。外面一部黒斑、スス付着。
甕	7	20 － 5.7	体部は外傾して立ち上がり、口縁部肥厚し内外面緩い稜をなし、口唇部丸く収まる。	体部外面口唇部下横ナデ後縦ハケ（10本/1.0cm）後指頭ナデ。内面横ハケ後木口状工具による横ナデ。	1/10 細粗少礫微赤多 黒褐色 外面一部黒斑

第93号住居跡（第89図）

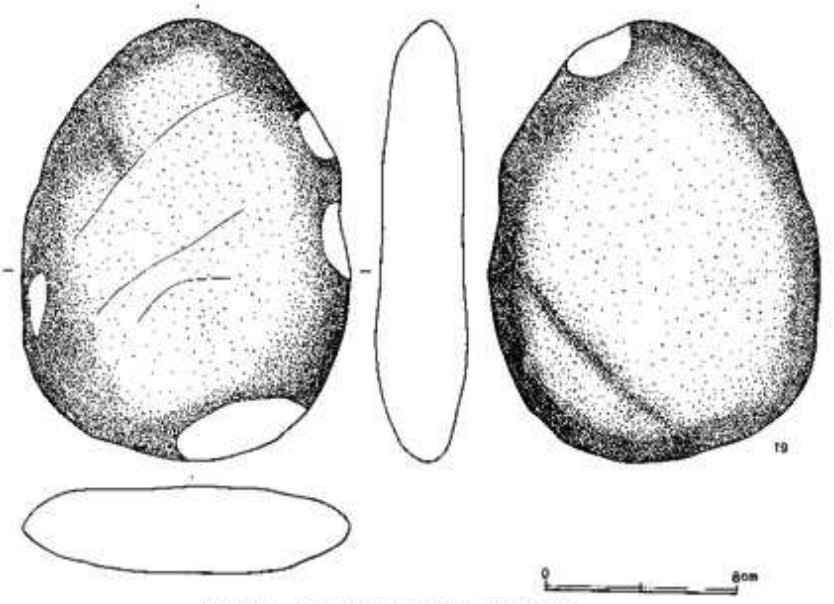
黒色土の長方形範囲として確認され、第92号住居跡とほぼ同じ色調、性状である。東壁下北半部は土壙状の撹乱が及ぶ。壁外遺構は認められない。

埋土はよく残っており第92号住居跡と近似し自然推積とみられる。埋土中出土の遺物は少量であるが大形片が多い。

平面形は僅かに歪んだ方形ないし横長の長方形。掘り込みは比較的深く壁はやや傾斜する。床はほぼ平坦で全体に柔らかいが、四柱穴内がやや硬質。四柱穴内の炉を中心とした部分は黒色土の分布がみられる。炉は西側柱穴間中央やや内側に位置し略円形で、それ程焼けていない。炉石は存在しないがやや離れて大形の河原石が出土した。柱穴は4本主柱穴で、東北隅の1本が浅い他は深い。西側の2本には柱痕跡が認められた。柱穴の間隔はP1P3＝3.81m、P3P4＝3.61m、P4P2＝3.70m、P2P1＝3.62mである。貯蔵穴は東北隅に位置し略長方形でそれ程深くない。上層～中層



第89図　第93号住居跡平面図



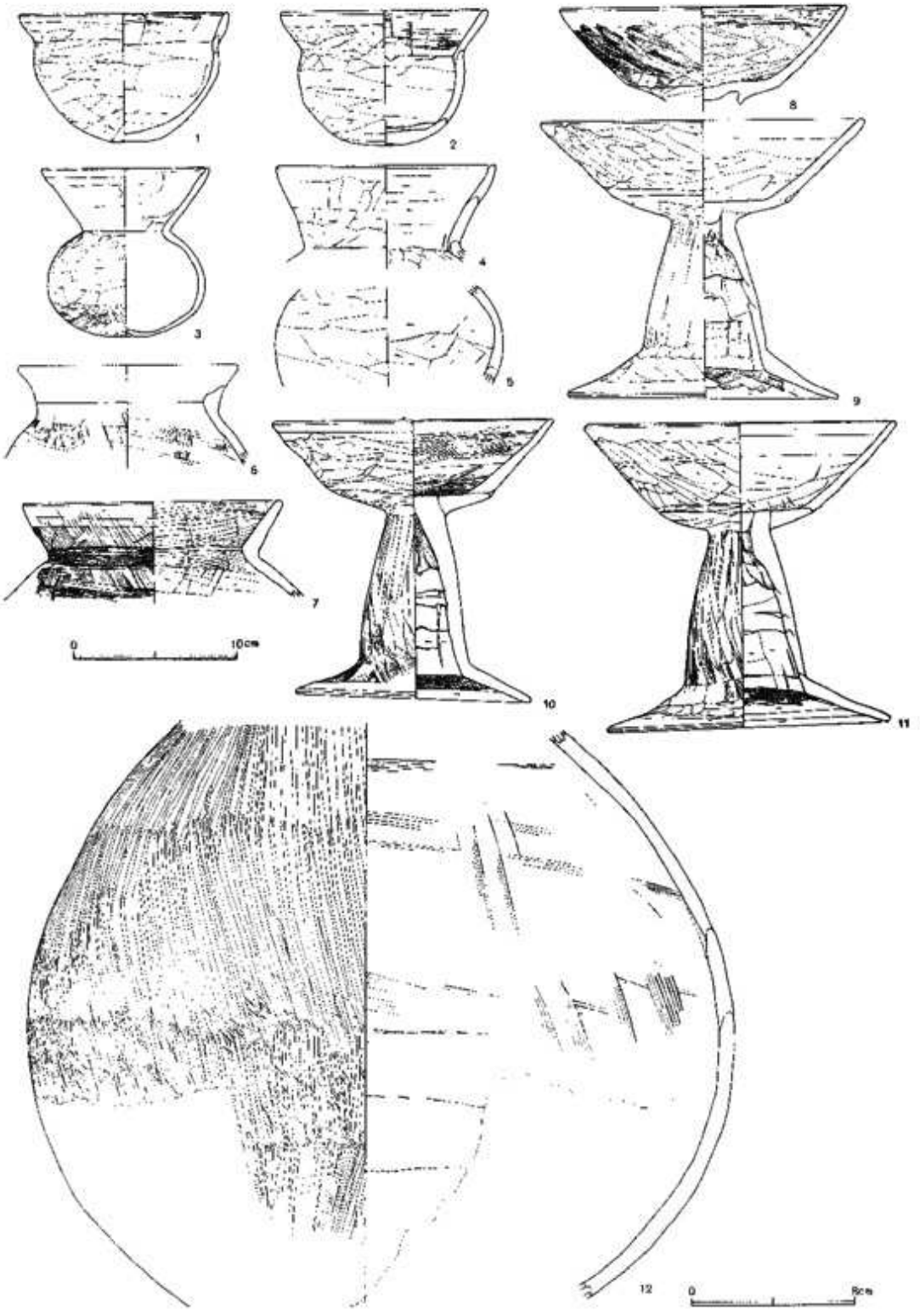
第90図　第93号住居跡出土遺物(1)

に壷形土器が出土している。出土遺物は貯蔵穴周辺、炉の北側及び東壁下中央部に集中し大半は若干浮いているが生活段階に伴うと考えられる。

掘り方は（四周に帯状の暗褐色土が認められ断ち割りを実施したが）明確でなく存在しないと判断した。中心部の黒色土は把えどころがなく掘り方とは認め難い。

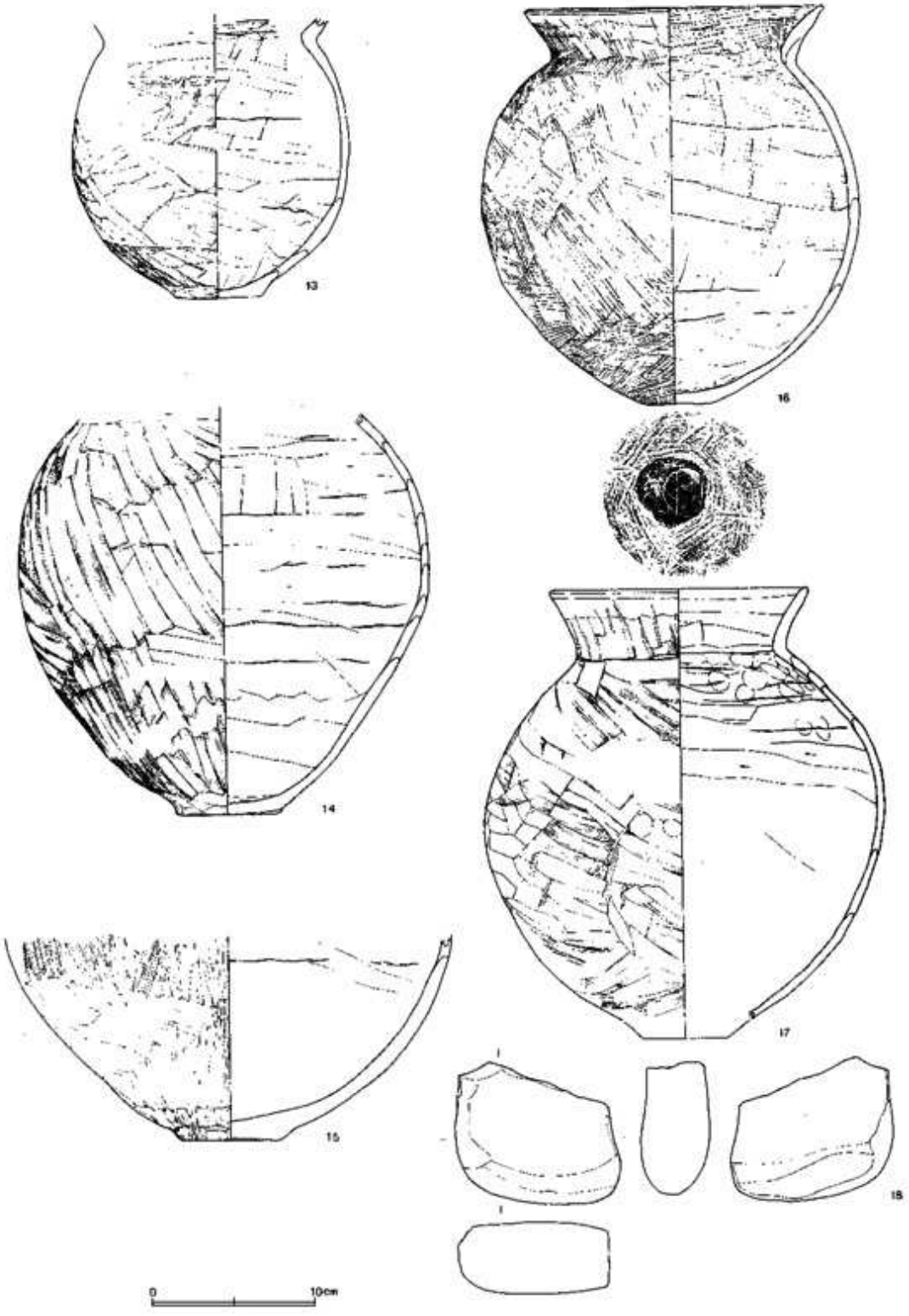
第93号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
鉢	1	12.9 2.6 7.9	底部は小さく平底。体部は内湾して立ち上がり上部で直立し、頸部内面緩い稜をなす。口縁部は短く内湾気味に開き口唇部丸く収まる。	外面体部箆ケズリ後ナデ乃至ミガキ、口縁部横ナデ、底面箆ナデ。内面丁寧なナデ？口縁部左回り横ナデ。	80%細粗礫微白多淡褐色No22。
鉢	2	12.8 2.7 8.3	底部は中央部僅かに凹み周縁微かに平坦面をなす。体部は半球状で頸部僅かに収縮し内面緩い稜をなす。口縁部短く開き口唇部丸く収まり、一ヶ所片口状に小さく打ち欠かれる。	底部未調整部分残る指頭ナデ。外面ハケ後体下部箆ミガキ、体上部丁寧な箆ナデ、口縁部左回り横ナデ後頸部やや粗い指頭押圧ナデ。内面体部横箆ナデ、底面指頭ナデ、口縁部木口状工具ナデ・・・後若干の横ナデ。	90%細少粗微全暗黄褐色／暗褐色No.7。外面一部黒斑
小形丸底土器	3	10.3 3 10.3	底部はほぼ平坦面をなし中心部凹む（0.8cm）。体部は楕円形を呈し最大径を中位にもち口径とほぼひとしい。頸部収縮し内面鋭い稜をなす。口縁部はやや長く直線的に立ち上がり口唇部直立気味で丸く収まる。	外面体部下位横ハケ（9本/1.0cm）後粗い横箆ナデで底面一定方向の箆ナデ、体上部箆及び指頭ナデ。口縁部縦ハケ？後横ナデ中位指頭押圧ナデ加わる。内面口縁部左回り横ナデ、体部箆ナデ底部に及ぶ。頸部指頭押圧ナデ。	90%細少粗微全暗黄褐色／暗褐色No.7。外面一部黒斑
小形壺	4	13.5 － 4	頸部は収縮し内面緩い稜をなす。口縁部は長く外傾して開き中位で内湾して立ち上がり口唇部直立し丸く収まる。	外面口縁部右回り横ナデ、中位指頭ナデ。内面左回り指頭ナデ、頸部指頭押圧、ナデ。	1/3細粗少礫微全少褐色
小形壺	5	－ － 6.1	胴部は球形状で内面輪積み後明瞭に残る。	外面箆ミガキ？内面箆ナデ及び指頭ナデ。	1/2細粗多全赤褐色外面剥離顕著。加熱？
小形壺	6	－ － 3.9	頸部収縮し口縁部は内面接合。	外面横ハケ後丁寧な箆及び指頭ナデ。内面木口状工具ナデ後指頭押圧。	3/4細粗少白多黄褐色No24。



第91図　第93号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	7	16 － 5.9	頸部収縮し内面稜をなし口縁部「く」字状に開き口唇部丸く収まるが一部平坦。接合部は頸部上面に接合。	外面胴部縦斜ハケ後ヨコナデで頸部工具ナデ←←、口縁部縦斜めハケ後右回り横ナデで中位指頭押圧ナデ加わる。内面口縁部横ハケ←←。後横ナデ、頸部横ハケ後木口状工具による横ナデ。	70%細粗少白多暗褐色№8～9。外面一部黒斑、炭化物付着。
高坏	8	17.6 － 5.7	坏下部で接合部利用の緩い稜をなし体部僅かに内湾して立ち上がり口唇部外面平坦面をなす。接合は短いホゾ接合で脚柱上端部粘土巻き付け。	外面坏体部上端部左回り横ナデ後以下指頭ナデ、ハケ乃至木口状工具による斜ナデ↓後軽いミガキ加わる。底部横ナデ。内面坏体部斜ハケ↑→後上部横ハケ←→後やや粗い横ナデ、底面～体下部筆ミガキ。	80%細粗少全暗黄褐色／暗褐色、暗褐色№12。外面一部黒斑
高坏	9	20 16.4 17	坏下部で接合部利用の緩い段をなし体部直線的に開き口唇部丸く収まる。脚柱部裾広がりで下部大きく膨らむ。内面上部シボリ痕以下1段の輪積み痕痕残り、接合はホゾによる。裾部外反して開き内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ？後上部横ナデ後指頭押圧ナデで底部に及ぶ。脚柱部縦ハケ後筆ミガキ乃至丁寧なナデ、裾部ハケ後粗い指頭ナデ先端部右回り横ナデ加わる。内面坏体部ハケ後やや粗い左回り横ナデ、底面筆ミガキ。脚柱部ホゾ穴以下右回り筆ケズリ。裾部放射状右回りハケ（14本/1.3cm）左回り横ナデ。	90%細粗少礫レキ微白多黄褐色№19。外面一部黒斑
高坏	10	17.3 14.2 17	坏下部で接合部利用の稜をなし体部内湾気味に開き口唇部丸く収まる。脚柱部裾広がりで大きく膨らむ。内面5段の輪積み痕上部シボリ痕残り、接合は短いホゾと脚柱上端部粘土巻き付けによる。裾部外反して短く開き内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ？上端部右回り横ナデ後指頭ナデで粗い斜横筆ナデ加わる。底部ハケ後横ナデ？脚柱部縦ハケ（4本/0.5cm）後縦筆ミガキ（中位中心）、裾部斜ハケ後端部左回り横ナデ中位粗い指頭ナデ。内面坏体部横ハケ（6本/1.0cm）後下部横ナデ底面筆ミガキ。脚柱部上部未調整、以下右回り断続的筆ケズリ。裾部左回りハケ後端部横ナデ。	80%細粗少白多褐色／黄褐色№23。外面一部黒斑
高坏	11	19.2 17 18.6	坏下部で接合部利用の緩い稜をなし体部内湾気味に開き口唇部丸く収まる。脚柱部裾広がりで膨らむ。内面上部シボリ痕以下2段の輪積み痕痕残り、接合は短いホゾと脚柱上端部粘土巻き付けによる。裾部中位で屈曲して開き内面稜をなし端部丸く収まる。	外面坏体部ハケ後上部横ナデ後指頭押圧、やや粗いナデで底部に及ぶ。脚柱部縦ハケ（5本/0.5cm）後上部中心にミガキ及び若干のナデ、裾部斜ハケ先端左回り横ナデ後中位指頭押圧ナデ。内面坏体部ハケ？後やや粗い木口状工具（巾1.7cm）によるナデ、底面筆ミガキ。脚柱部ホゾ穴以下比較的丁寧な右回り筆ケズリ。裾部ハケ後左回り横ナデ。	90%細少粗礫レキ微白多黄褐色№20。外面一部黒斑
壺	12	－ － 44.8	大形の壺で胴部のみ残存。	胴部外面粗い斜ハケ後筆ミガキ、内面横斜ハケ（7本1.8cm）後ナデ？剥離磨滅顕著で詳細不明。	1/3細粗礫少白赤多赤褐色、黒褐色№1。
小形壺	13	－ 5.5 17	底部は凸出気味で平底。胴部は球形状で最大径を中位にもち、内面輪積み痕残る。	底面筆ナデ。胴部外面ハケ乃至木口状工具による斜ナデ（上部↑←←後下部↓→）で部分的に筆ケズリ加わる。頸部横ナデ。内面上胴部木口状工具（巾1.5cm）による横斜ナデ、下部筆ナデ底面に及ぶ。	80%細少粗礫微白多褐色、赤褐色№5。外面一部黒斑
甕	14	－ 6.7 24.4	底部凸出し周縁部僅かな粘土貼付けにより中央凹む。胴部やや縦長の球形状で内面輪積み痕残る。全体に器肉薄い。	底面一定方向の筆ナデ、外周未調整部分残る。外面上胴部斜→下胴部縦方向のハケ（5本/0.5cm）乃至木口状工具によるナデ後上胴部中心に丁寧なナデ。内面極丁寧な横筆ナデ。	70%細粗少礫微白多黒褐色、暗黄褐色№20。外面黒斑
甕	15	6.1 12.4	底部は周縁部に僅かな粘土貼付けにより凹む。胴部は大きく内湾して立ち上がる。	底面筆ミガキ。胴部外面斜ハケ（13本/1.0cm）後縦筆ミガキ、内面ハケ後丁寧なミガキ。	1/2細少粗礫多石英白多暗黄褐色、暗赤褐色 №2。外面一部黒斑



第92図　第93号住居跡出土遺物(3)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	16	18.8 4 24.2	底部平底で隅縁部僅かな粘土貼付け、木葉圧痕残る。胴部ほぼ球形状で下部やや尻すぼみで胴部やや張りをもつ。頸部収縮し内面稜をなす。口縁部厚く「く」字状に開き口唇部平坦面をなす。	底面未調整。外面下胴部タタキ風に右回り同心円状のハケ（→↑6本/1.6cm）後上胴部斜ハケ"↑←、口縁部縦ハケ↑→後指頭押圧、横ナデ（左回り）。内面上胴部木口状工具（巾2cm前後）による横斜ナデ←←"以下やや粗い篦ナデ、底部指頭ナデ加わる。口縁部左回り断続的横ハケ←。。	80%細粗少雲微金黒褐色／赤褐色、暗褐色 №3～5。外面黒斑、スス炭化物付着。
壺	17	15.7 ～ 26.4	胴部はほぼ球形状で最大径を中位にもち、頸部収縮し内面稜をなす。口縁部それほど開かずに外反して立ち上がり、口唇部平坦面をなす。内面輪積み痕残る。	外面下胴部ハケ？後篦ミガキか。上胴部斜めハケ後粗いミガキ及び丁寧なナデ、中位粗い斜篦ケズリ。→。口縁部縦ハケ後上端部右回り横ナデ、中位指頭押圧ナデ後間隔おいて縦篦ミガキ↑。胴部内面木口状工具による横ナデ←で粗い横篦ケズリ加わる。口縁部左回り横ナデ。	80%細粗少雲微褐色、暗黄褐色№10＋床下出土。
砥石	18				S4、555g
石皿	19				S5、5.2Kg

第94号住居跡（第92図）

住居跡の大部分をすでに削平されたものとみられるが第26号住居跡に比べて容易に確認された。東西方向に走る溝（現代）によって中央部を切られている。

埋土はほとんど残っておらず、出土遺物もほとんどない。

平面形は東、西壁が歪んでいるが略長方形で南北方向に長い。壁はほとんど残っていない。床は斜面に沿って傾斜している。全体に踏み締まっておらず地山と同等な硬さである。

炉は明確ではなく、わずかな焼土の分布によって判断すると、西壁下北寄り中央からややずれて位置し略円形呈する。

貯蔵穴が西隅に位置し比較的深く0.29mを計り、長方形である。

柱穴、壁溝等は検出されなかった。生活段階に伴う出土遺物は西壁下の石と土器片のみである。

既に掘り方迄削平されており図は復元である。

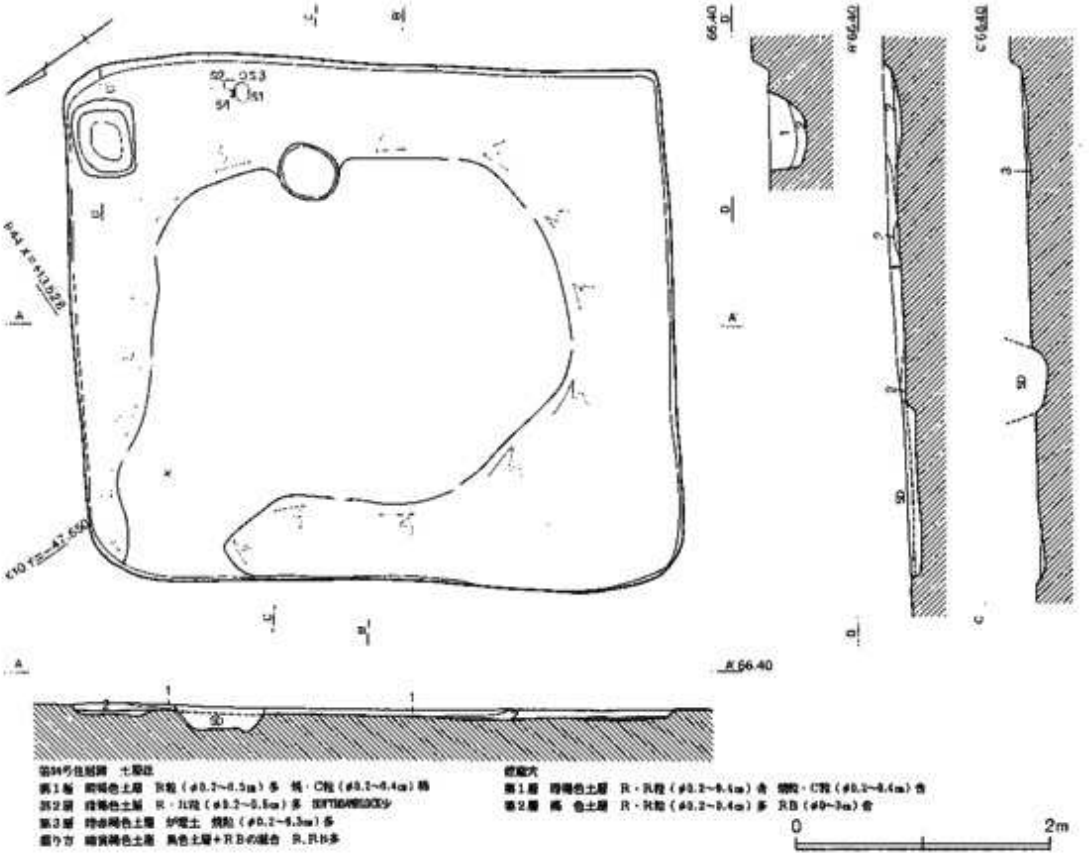
第96号住居跡（第93図）

確認段階ですでに掘り方下部まで削平されたものと考えられ、住居範囲がかすかに把握できたのみである。掘り方平面形は明確に把握できたわけではない。第95号住居跡によって切られている。

掘り方埋土がわずかに残るのみで遺存状態は極悪い。或いは第92～94号住居跡と同様明確な掘り方は存在しなかった可能性もある。出土遺物はない。

平面形は北西、南西壁が僅かに湾曲するほぼ方形の住居跡である。床面は完全にとばされている。炉も同様であるが西壁下の第95号住居跡によって破壊された可能性もある。柱穴は不明瞭なものが3本検出されたので4本主柱穴とみられる。P2が深い他はごく浅い。壁溝、貯蔵穴は認められなかった。

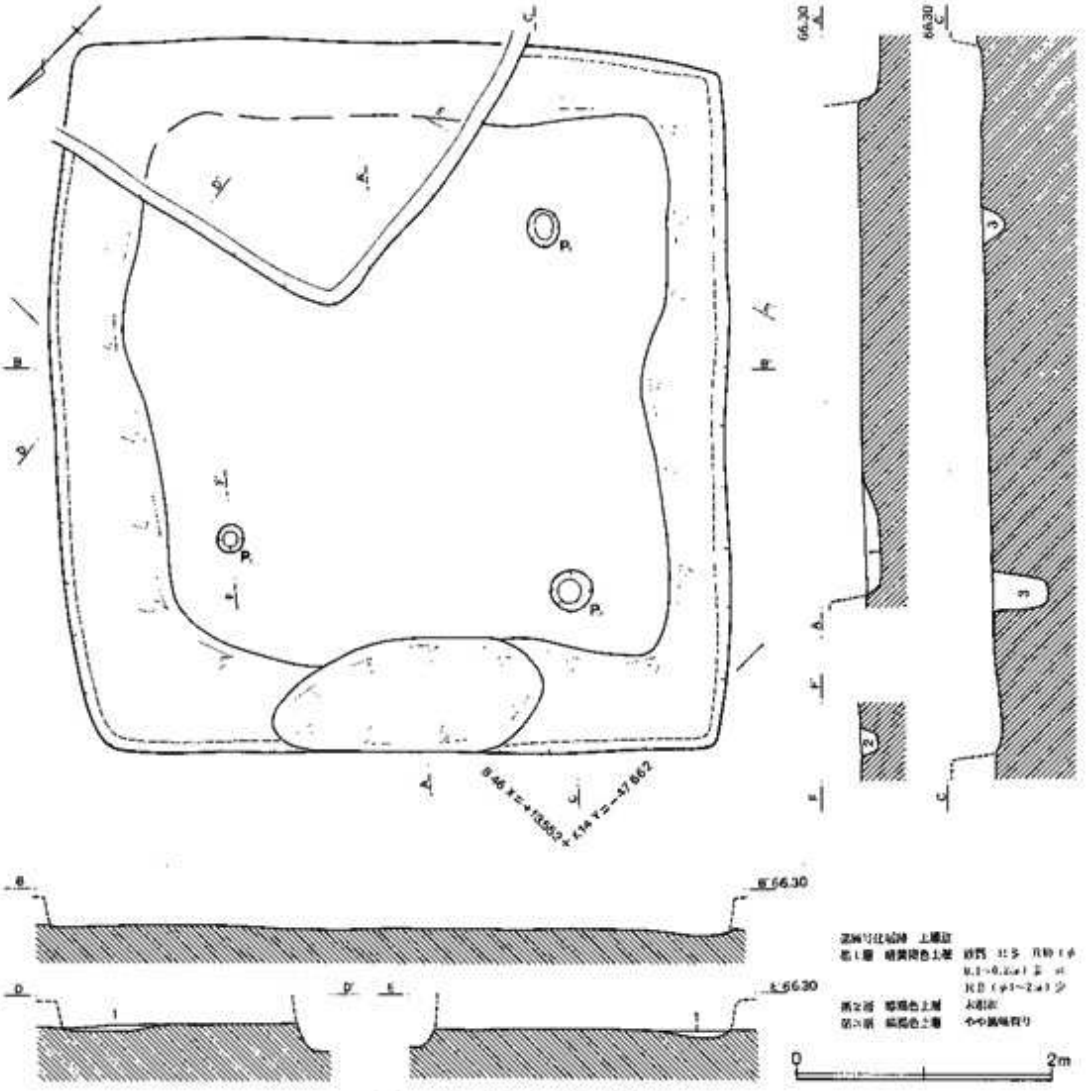
掘り方は図示されたほど実際には明確ではないが、四周を掘り窪めるものと考えられ西壁下中央部が楕円形に深くなる。



第93図　第94号住居跡平面図

第３表　古墳時代住居跡一覧表

住居番号	平面形	規　　模	主軸方向	炉	柱穴	貯蔵穴	掘り方	備　　考
3	隅丸方形	5.91×5.55×0.16	N-18.6° -W	北壁より中央	4本主柱+2	南隅方形	四周	貯蔵穴は他に３ヶ所
9	長方形	5.88×5.81×0.21	N 38.0° -W	中央北西より	4本主柱	南隅	二壁下	間仕切り溝あり
12	長方形	7.40×6.80×0.17	N-40.2° -W	中央北西壁より	4本主柱	東隅	3辺	入口、間仕切あり 貯蔵穴東側
16	方形	7.02×6.86×0.25	N-42.5° -W	北西、南東壁中央	4本主柱	南隅、北西	四周	北西壁下のピット性格不明
26	隅丸長方形	7.45×6.15× －	N-90.0° -W	中央西より	無	無	不明	
92	方形	6.31×6.19×0.36	N-21.5° -E	北側主柱穴間	4本主柱	南東隅	不明	炉は炉石による推定。
93	方形	6.89×6.75×0.21	N-60.0° -W	西側柱穴間	4本主柱	東隅、楕円	不明	
94	長方形	4.69×4.01×0.09	N-56.0° -W	東壁下北寄り	無	東隅	北隅除き全周	
96	方形	5.33×5.29×－	N-45.0° -W	不明	4本主柱?	不明	四周	



第94図　第96号住居跡平面図

3　平安時代以降の遺構と出土遺物

a　概要

平安時代の遺構については住居跡が重複ないし拡張も含めて62軒検出され、その他土壙18基、溝1条が検出されている。

出土遺物の様相は10世紀中葉を中心とする「コ」の字状口縁甕形土器後半ないし末期として一括され、羽釜が組成化する以前の段階と考えられる。以下では「コ」の字状口縁甕形土器の後半ないし末期という一定の限定的時間内における相互に連関する住居跡の累積としての群形成として大まかに把らえておく。

これらの遺構分布範囲は調査区全体に万遍なく分布しているわけではなく、主に北西斜面に分布しており丘陵上から裾まで比高差約5.0米、東西160ｍ×南北250ｍの範囲にある。

さらに外見上これらの遺構群は５群に分割される。(以下では第94図に示すように第１群から第５群に分割する）各々の群はさらに小群に分割され３、４軒の住居跡によって構成されている。第３群はさらに掘立柱建物跡を伴っている。それぞれの住居跡は重複することは少ない。もっとも住居跡本体が重複していないだけで住居外に何らかの施設を想定すると、例えば第32号住居跡のような場合には完全に重複関係にある。直接的切り合い関係にあるものは拡張がほとんどで、各群にほぼ１軒づつ存在する。

各群は大まかにみると東西方向の若干の空間を挟んで長方形状の領域に配置されたような外観を呈している。

しかしながら全体に関わる空閑地等が見られるわけではなく、例えば第３群を中心として他群が配列されるという外観をとるわけでもない。主体をなす住居跡群の周辺部には東側～南側にやや疎らに住居跡が存在している。これらの帰属の不明確な遺構についても便宜上それぞれの群に含めて記述する。

各住居跡の詳細は以下の第４表から第８表に記した。

第４表　平安時代第２住居跡群一覧表

住居番号	平面形	規　　模	主軸方向	竈	貯蔵穴	床下土壙	掘り方	備　　考
1	長方形	3.95×3.38×－	N－35°－W	北西壁中央		竈前方	竈以外全周	掘り方中にピット２ヶ所
5	長方形	2.88×2.22×－	N－54.5°－E	北東壁右		竈前方	2辺(北東から北西壁)	
74a	長方形	3.24×3.06×－	N－48.9°－E	北東壁右			南東壁以外の３辺	拡張か？
74b	長方形？	3.12×2.71×－	N－60°－E	北東壁右				７４ａに切られる
79	長方形	3.43×2.53×－	N－77°－E	北東壁			不明	第109号土壙を伴う。
81	長方形	2.51×2.01×－	N－73.3°－E	北東壁右				第82号住居跡を切る
85	長方形	3.57×2.32×0.13	N－23.8°－W	東壁？			不明	第113号土壙を伴う
86	方形	2.99×2.79×－	N－74°－E	東壁中央				
87	台形	2.55×2.06×－	N－65.2°－E	北東壁中央			四周	
89	方形	2.68×2.45×－	N－32.8°－E	北東壁中央			不明	
98	方形？	2.26×2.21×－	N－56.5°－E	北東壁		中央	南東壁下	

第5表　平安時代第2住居跡群一覧表

住居番号	平面形	規模	主軸方向	竈	貯蔵穴	床下土壙	掘り方	備考
11	不整方形	3.68×3.22×0.05	N 92.5° -W	東壁右			カマド全面から中	
13	長方形	2.8×2.55×0.07	N-62.7° -E	北東壁中央			央残す。	
18	長方形	3.42×2.75×0.14	N-61.2° -E	北東壁中央			中央残し四周	
19	台形	2.72×2.62×0.19	N-68.5° -E	東壁中央			南北壁下	カマド軸N 55.4° -E
20	方形	2.38×2.05×0.22	N-49.4° -E	北東壁中央			中央残し四周	
21	平行四辺形	3.21×2.66×0.1	N-64.2° -E	北東壁中央	方形		中央部のこし四周	第8、9号土壙を伴う。
22	方形	2.47×2.46×0.11	N 61.8° -E	北東壁左	竈右		中央部壁下残し四周	
23	長方形	3.94×3.16×0.17	N-60.8° -E	北東壁中央		中央部	中央部残し四周	カマド内ピット
24	長方形	2.8×2.35×0.06	N-S	北、東壁		竈左		東壁カマド軸
25	長方形	3.33×2.49×—	N-62.6° -E	北東壁中央	竈右	竈前方	竈前面	
27	長方形	3.18×2.73×0.1	N-46.3° -E	北東壁中央	竈右		中央部のこし四周	
28	長方形	3.38×2.72×0.04	N-77.7° -E	北東壁右	竈左	竈前方	南東から南西壁下	
29	長方形	4×2.74×—	N 71.3° -W	東壁左			南北壁下西半部	

第6表　平安時代第3住居跡群一覧表

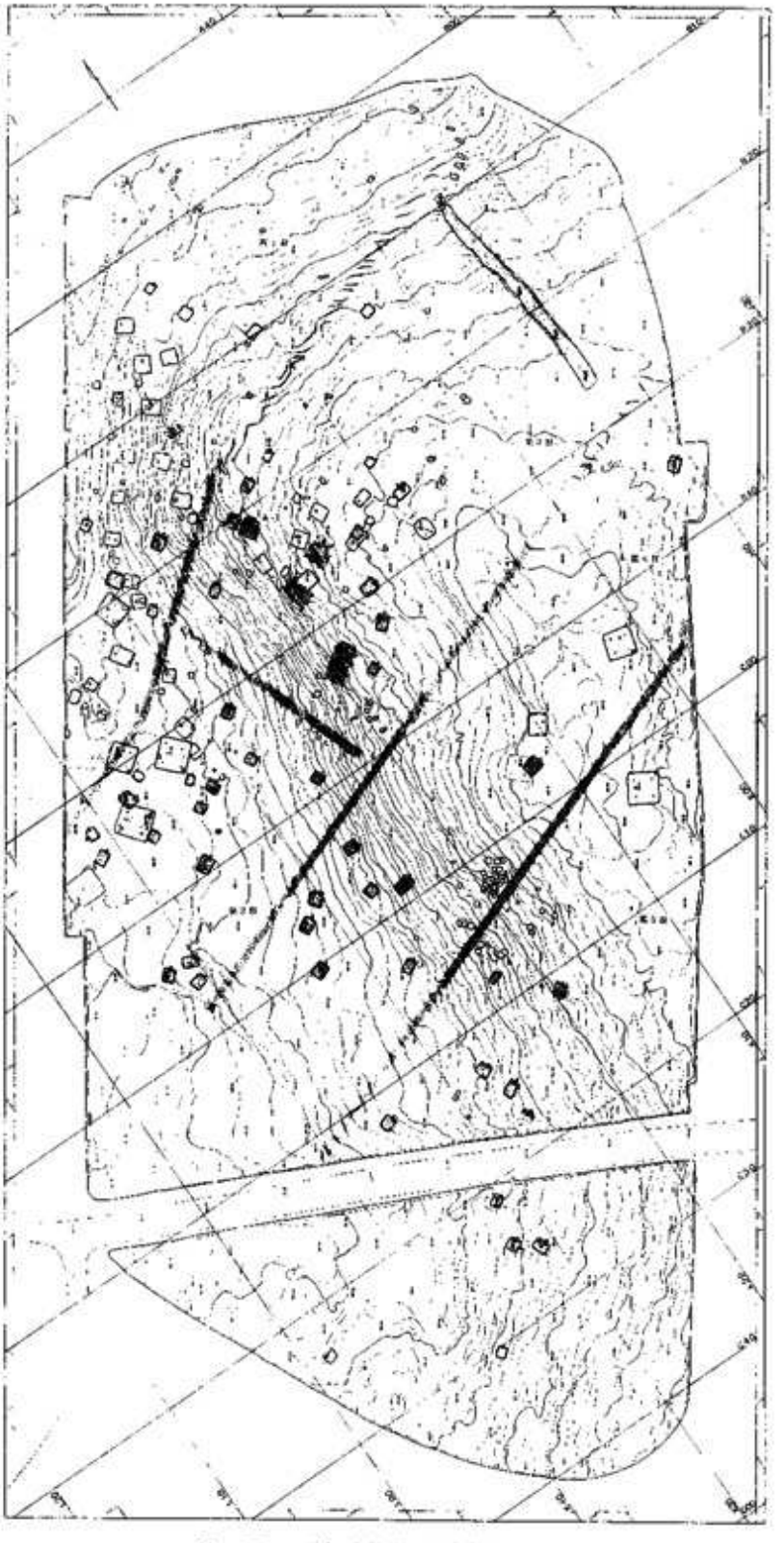
住居番号	平面形	規模	主軸方向	竈	貯蔵穴	床下土壙	掘り方	備考
49	長方形	2.71×2.33×0.14	N-69° -E	北東壁中央		竈前方		カマド内ピット有り。
50	不整方形	3.37×2.87×0.14	N-47.5° -E	北東壁中央		中央	南東壁下	
51	長方形	3.77×3.29×0.23	N-26° -W	北壁右		竈右		中央部残し四周
52	長方形	3.74×2.73×0.16	N-87° -E	東壁中央	竈右 楕円形		南壁以外の三辺	竈2軸N-97.5°-E。竈内ピット、竈前土壙
54	長方形	3.93×2.64×0.22	N-13.5° -W	北壁中央	竈右円形		西壁下	
56	長方形	3×2.39×0.2	N-70.5° -E	東壁右			南壁下中央	竈内ピット、住居内土壙。
60	方形	2.5×2.1×0.08	N-68° -E	北東壁左				竈軸N-47-E
66	長方形	3.49×3×0.1	N-56.5° -E	北東壁右		南西壁下		竈内ピット
67	長方形	3.4×2.23×—	N-34° -W	北西壁左				竈内ピット
67	長方形	4.4×3.25×0.11	N-58.5° -E	北東壁左	竈右	中央部		重複関係。本住居跡が新しい
68	長方形	3.33×2.74×0.14	N-58.5° -E	北東壁中央	竈左円形	竈前方		第101号土壙を伴う
69	長方形	3.31×2.67×0.11	N-60.5° -E	北東壁中央	竈右楕円形		中央、南東壁下残す	竈内ピット
70	長方形	2.37×1.93×0.08	N 64° E	北東壁左		南半部		
71	不整方形	2.92×2.37×0.18	N-63° -E	北東壁左右		中央部	中央部残し四周	竈内ピット
90	長方形	2.78×2.39×0.06	N-65° -W	北壁右		西壁下		

第7表　平安時代第4住居跡群一覧表

住居番号	平面形	規模	主軸方向	竈	貯蔵穴	床下土壙	掘り方	備考
39	隅丸長方形	3.36×2.86×0.25	N-71.2° -E	東壁中央			中央部のこし四周	竈軸N-78.4° -E
40	長方形	3.63×2.81×0.12	N-64.2° -E	北東壁中央			中央部残し四周	竈内ピット
41	不整方形	3.12×3.11×0.1	N-45.6° -E	北東壁左右			中央部残し四周	
42	長方形	3.32×2.49×0.11	N 64.2° -E	北東壁中央	3ヶ所、方形		南西壁下残し三辺	
43	平行四辺形	4.26×2.85×0.19	N-82.5° -E	東壁左右		中央部	中央南壁下残し西端	
44	方形	2.91×2.69×—	N-78.4° -E	東壁中央	竈右円形	中央部		竈軸N-70.5° -E
45	方形	3.04×2.79×—	N-88.8° W	東壁右			東壁下	竈内ピット
48	方形	3.25×2.5×0.12	N-69.3° -E	北東壁中央	竈右円形	中央部		
91	不整方形	3.38×2.86×0.16	N-52.2° -E	北東壁右			中央部残し四周	
95	台形	3.74×3.24×0.19	N-74.1° -E	東壁右	竈右楕円形		北から西壁下	

第8表　平安時代第5住居跡群一覧表

住居番号	平面形	規模	主軸方向	竈	貯蔵穴	床下土壙	掘り方	備考
30	長方形	2.85×2.45×0.1	N-64.5° -E	北東壁中央			中央部残し四周	
31	方形	2.90×2.85×0.05	N-65.4° -E	北東壁中央			中央部残し四周	壁外溝有り
32	長方形	3.40×2.64×0.24	N-68.8° -E	北東壁右		中央部	南西壁下？	
33	長方形	2.54×2.14×0.03	N 51.2° -E	北東壁中央		中央部	南東壁下	
34	台形	2.94×2.15×—	N-22.3° -W	北壁西隅		竈右	西壁下？	
35	長方形	3.21×2.58×0.07	N-E	北東壁右	竈右	3ヶ所？	中央部	
36	長方形	3.16×2.91×—	N-75.2° -E	北東壁中央	北西隅円形		南東壁下	
37a	長方形	3.66×2.46×0.16	N-66.8° -E	北東壁右	竈右楕円形			竈内ピット有り
37b	長方形	3.15×2.23×0.16	N-23.8° -W	北西壁中央	竈右方形	竈前方		重複、拡張で本住居が新
38	方形	2.93×0.8×—	N-70.3° -E	北東壁中央	北壁下方形			拡張住居跡
38	長方形	2.3×0.8×—	N-89.2° -W	北東壁右	南壁下方形			拡張住居で本住が古
46	長方形	2.93×1.89×—	N-72.7° -E	東壁中央			竈壁下	
47	長方形	3.31×2.7×0.19	N-49.7° -E	北東壁中央		竈右	中央、東隅残し三辺	焼土ピット、竈内ピット有



第94図　平安時代住居跡配置図

b　平安時代　第1群

第1群は調査区の西側から北西隅、台地裾の緩斜面から平坦面に位置し、南西から北西方向に細長く延びる住居跡群である。住居跡群が調査区外に広がっていた可能性があるが、すでに現道を挟んで水田化されており不祥である。

住居跡群の占有する範囲は長さ95m（第5号住居跡から第89号住居跡の間隔）、幅33mに亘る。

各住居跡の配置は単独に存在する？第89号住居跡を最北端として、最南端に第1、5、74、98号住居跡が存在し、その中間に竈方向を同じにする第79、81号住居跡、第（85？）、86、87号住居跡が2～3棟一対の外観を呈して存在する。それぞれの距離は約20m前後でほぼ等間隔である。

10棟の住居跡の詳細は以下の記述及び住居跡一覧表によるが、概要を示すと全体に直径2～3m前後の小形の住居跡で構成され、平

面形は長方形状をなすものが大部分で比較的整ったものは少なく、壁の傾斜等不整形なものが多い。窯は東乃至北東壁に付設され、第1号住居跡が北西壁に設置されている。住居構造については全体に遺存状態が悪く単純に比較できないが概して単純な構造のものが多い。竈は壁中央ないしやや右寄りに設置される。明確に構造を把握できるものは第74号住居跡のみである。壁溝を持つものは第1号住居跡のみ、床下土壙を持つものは第1、5、98号住居跡の3軒を数えるのみである。堀り方については不明な部分が大きいが中央部を残して四周を堀り窪めるものと、鍵状に堀り窪めるもの、コ状に堀窪めるものが存在する。住居跡外に土壙をともなうと考えられるものが2軒存在する。

重複関係にあるものは第74号住居跡で、拡張とも断じ難いが相互に関連を持つものと考えられる。他には存在しない。

第1、74、98号住居跡についてはその集合状態から第1a住居跡群（第96図）と呼称する。第96図に示したように3軒の住居跡の占有する範囲は、18.47m×15.04mの長方形状あるいは見方に依っては各住居跡を頂点とした三角形状をなす。出土土器によると若干の段階差があり、第1→98→74号住居跡の変遷が考えられ同時に3軒が存在したわけではない。第1、98号住居跡間9.45m第98、74号住居跡間13.02m、第74、1号住居跡間8.30mの間隔がある（第74、5号住居跡間は11.0mである）。住居跡外に構造物の存在を考慮するならさらに接近することになる。

他の住居跡についても少群に細別される可能性がある。第85、86、87号住居跡はほぼ直線状に配置され26.9m×8.2mの範囲に収る。各住居跡の間隔は第85、86号住居跡間11.9m第86、87号住居跡間6.9mである。出土遺物が少量で変遷過程は判断できない。

第79、81号住居跡は2軒であるがその占有する短形の軸は第85～87号住居跡のものと一致する。両住居跡の間隔は11.4mである。出土遺物によると第81→79号住居跡と考えられる。

第1号住居跡（第97図）

ほぼ床面まで露出しており壁はとばされた状態で確認された。周辺部及び西側竈付近風倒木による攪乱が及ぶ。周辺部にピット等の遺構は認められなかったが、東側で第2号住居跡を切っているのが確認された。

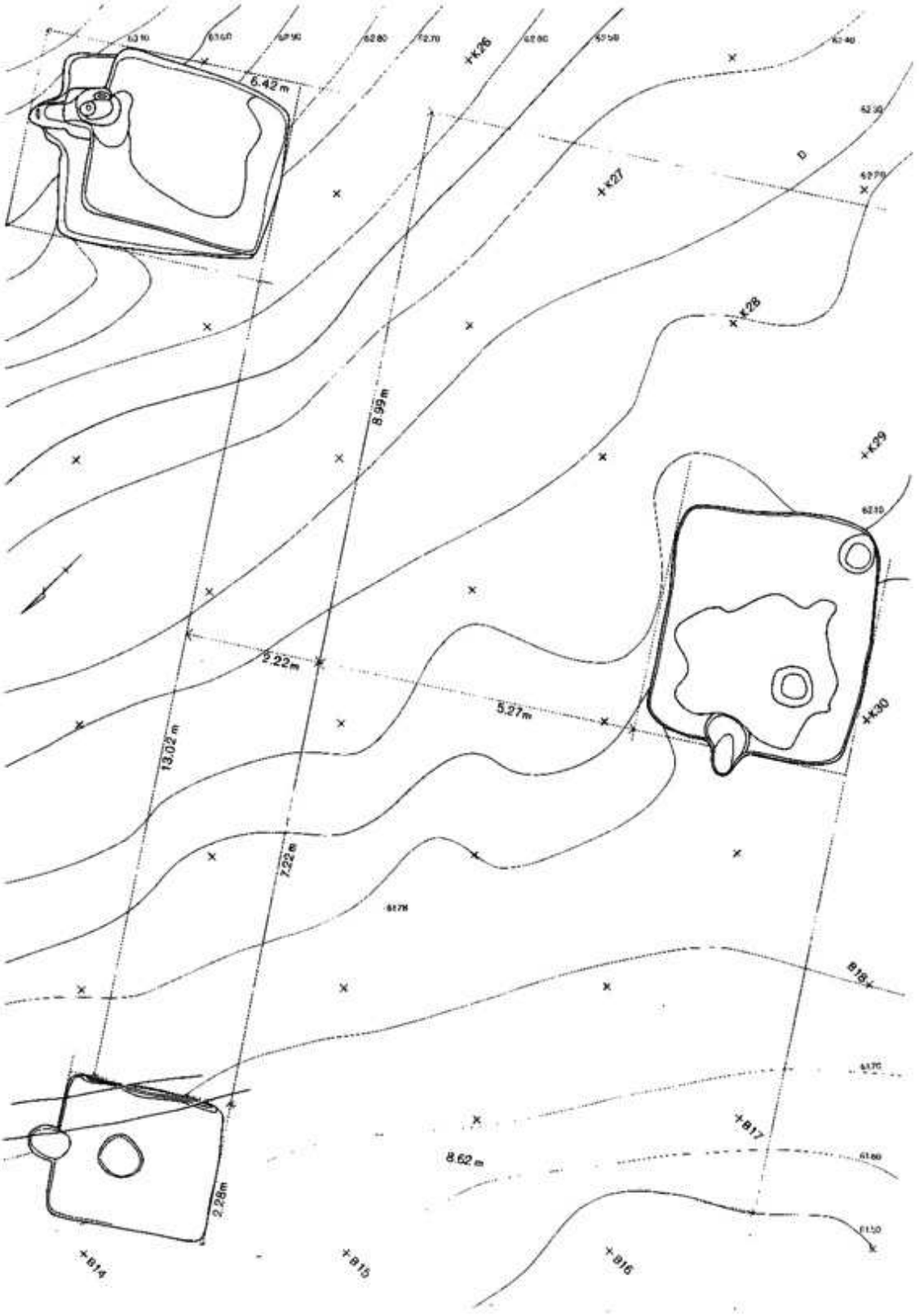
埋土が僅かに残るが5層に分割される。出土遺物はほとんどない。

竈は燃焼部底及び袖基低部が僅かに残る。燃焼面に焼土がブロック状に残りよく焼けている。かき出し口は僅かに凹む。竈以外は不明瞭であるが壁溝が巡る。貼り状が
中央部を中心として細部的に残存する。生活段階に伴う遺物は須恵1点である。

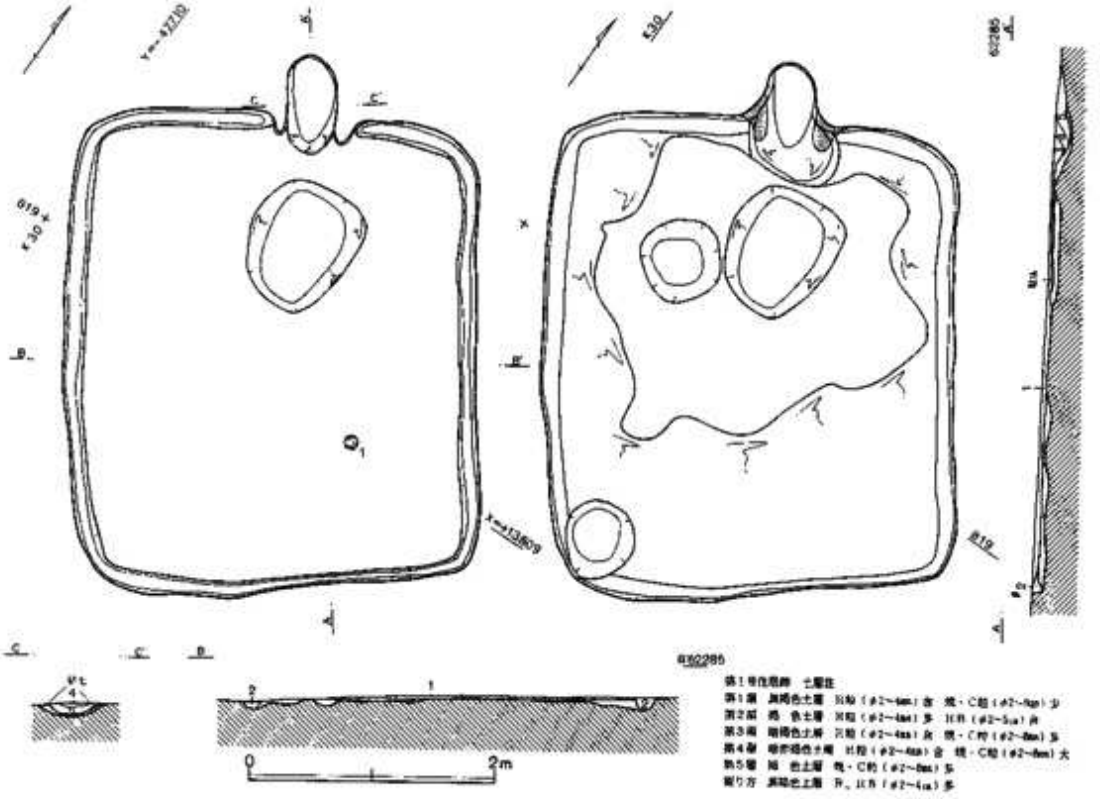
掘り方は周辺部を掘り窪める方法で中央部を掘り残す。竈東南部及び東南隅壁直下に床下土壙が存在する。竈に近い土壙中に焼土が充填していた。竈の構造は不明確であるが掘り方から推定すると袖は粘土貼付け。

第1号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.3 — 2.4	外頻する体部から口縁部に僅かに外反する。端部はやや肥厚し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右巻転）。	10%。須恵1。青灰色。

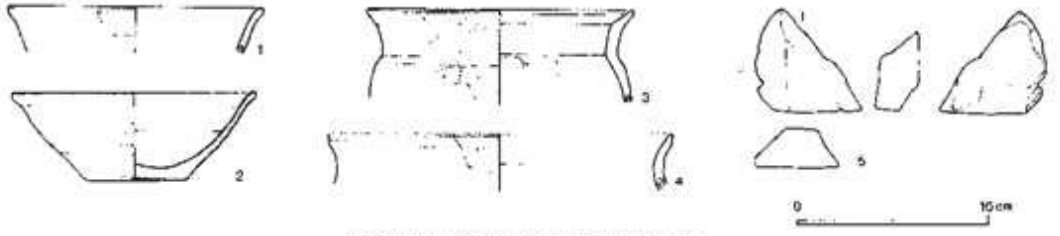


第96図　第１ａ住居跡群配置図

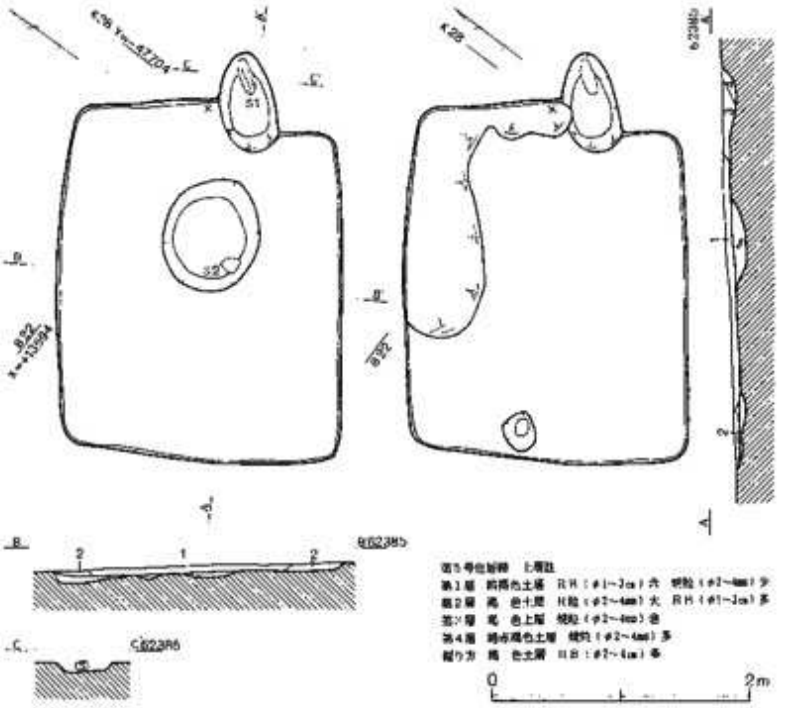


第97図　第１号住居跡平面図

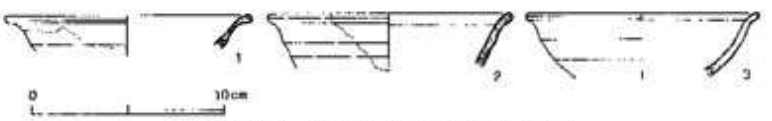
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	2	12.7 4.8 4.6	ほぼ平坦な底部から体部はやや内湾気味に立ち上がる。口唇部は外半し丸く収まる。口縁部は１ヶ所で僅かに歪んでおり片口状をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）後、外周若干の指頭によるナデが加わる。底部回転糸きり痕残り、外周は指頭によるナデ加わる。外面体部一部にススが付着。内面口唇下体部下半まで炭化物付着。	90%。須恵１。黒灰色。床面出土No.1。
甕	3	14.0 － 4.6	胴部上端で段をなし、頸部はやや外傾して立ち上がり、口縁部はさらに外傾する。口唇端部は丸みをもつ。内面口縁部やや湾曲し、頸部で緩い段をなす。	内面ヨコナデ（右回転）。外面頸部下端工具によるナデ後口縁部まで指頭によるナデ（右回転）。胴部上端横方向（左）の箆ケズり。	10%。甕１。赤褐色。内外面ともススが付着。
甕	4	18.0 － 2.6	頸部はほぼ直立し、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部外面僅かに突出する。	内外面ともヨコナデ（右方向）外面頸部末調整部分残り、指頭によるナデ、押圧加わる。	10%。甕１。赤褐色。
紡錘	5				60g



第98図　第１号住居跡出土遺物



第99図　第５号住居跡平面図



第100回　第５号住居跡出土遺物

第５号住居跡（第99図）

竈燃焼部のみ残存する住居として確認、周辺施設は認められなかった。掘り方が部分的に確認され床がとんでいると考えられた。

埋土はほとんど残っていない。南東壁は溝（現代）により、他の部分も風倒木あるいは撹乱による影響を受けている。

平面形は竈部分で段をもつ略長方形で若干歪む。壁は殆ど残っていない。床はほとんど飛んでおり竈前面に若干残る程度である。床下土壙が竈前面に検出された。竈燃焼部平面は楕円形でそれ程焼けておらず、やや中心よりずれて支脚石が存在する。

掘り方は北、東壁を掘り窪めるものか、あるいは西壁も若干窪んでおり遺存状態の悪いことを考えると住居半分を掘り窪めるものである。床下土壙は浅くほぼ円形。竈は北西壁南寄りに敷設され左右約0.5mの段差をもつ。西壁下ピットは現代のものと考えられる。

第５号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	12.9 － 1.8	体部は緩かに内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚し屈曲して大きく開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。	1/3、南比企４。灰白色。ＳＪ－７出土遺物と接合。
須恵坏	2	12.9 － 2.8	体部は緩かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。	1/5。須恵坏１。青灰色。内面摩滅顕著。
須恵坏	3	12.2 － 3.4	体部は内湾して立ち上がり、口唇部外反し肥厚する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。	1/5。須恵坏２。黄褐色。内外面とも摩滅顕著。

第74号住居跡（第101図）

１軒の住居として確認したが南壁はやや湾曲して不自然であった。壁外施設は検出できなかった。

埋土はよく残っており斜面にもかかわらず自然推積をなす。竈前面は比較的厚い粘土の推積がみられた。中層で内側住居の平面形を確認したが当初は壁下にテラス状の部分があると考えていたの

で遺物が竈周辺部を中心に多量に出土したが混在してしまった。出土遺物は一括して図示してある。

第74ａ号住居跡（旧住居跡）

外側に位置し、南壁が斜面のためかやや湾曲する略長方形の住居跡と考えられる。

床面はほとんど残っていないが残存部によると斜面に沿って西へ傾く。貯蔵穴、壁溝等は検出されなかった。遺物は竈周辺から浮いた状態で出土している。

掘り方は残存部分には存在しない。主軸は竈軸とほぼ同一である。

竈は大半を第７４ｂ号住居跡竈によって切られるが、右袖の一部と左袖、燃焼部左側は残っている。燃焼部は略長方形で底面ほぼ平坦、それ程焼けていないが奥壁は加熱により赤変している。袖部は粘土貼り付けで、両面とも壁を掘り込まない。右袖粘土は竈右側に多量に流出している。

第74ｂ号住居跡（新住居跡）

平面形は第７４ａ号住居跡の影響か若干歪んだ略方形。掘り込みは深い。

床面はほぼ水平であるが周辺部はやや凹み全体に柔らかい。竈周辺は比較的踏み締まっている。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は竈周辺及び南壁下中央から集中出土するが、生活段階に伴うものは少ない。

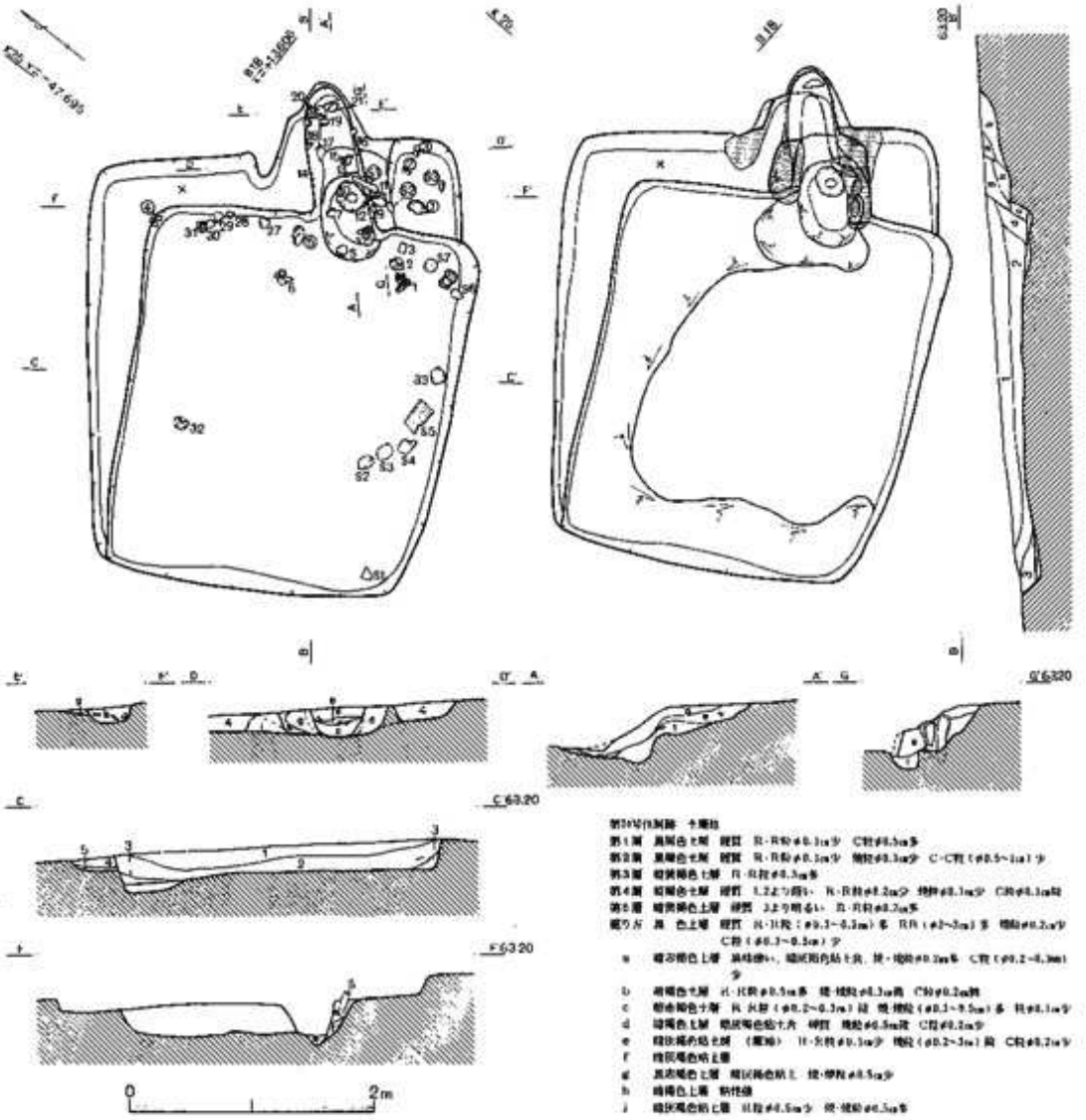
掘り方はごく浅いものが北半部に巡り西壁下はほとんど掘り込まれない。床下土壙はない。竈軸は第７４ａ住居跡に影響されたためか主軸と角度をもつ。

竈の保存状態は良好である。第７４ａ号住居跡燃焼部に重なるように造られており、一部（右袖）利用している可能性もある。煙道部が残存しており外方へ向かって緩く立ち上がる。底面はそれ程でもないが側壁～奥は比較的赤変する。燃焼部は一段深く掘り込まれ、略方形を呈する。奥壁及び右袖下に細長い片岩が突き刺さされ、底面はよく焼けている。両袖はよく残っており、粘土貼り付けで右袖は片岩が補強材となっている。左側はそれ程でもないが右側は大きく壁を切り込んで粘土を貼り付けている。

出土遺物は多量にあるが、浮いているものが大部分である。左袖中から甕口縁部が出土している。

第74号住居跡出土遺物

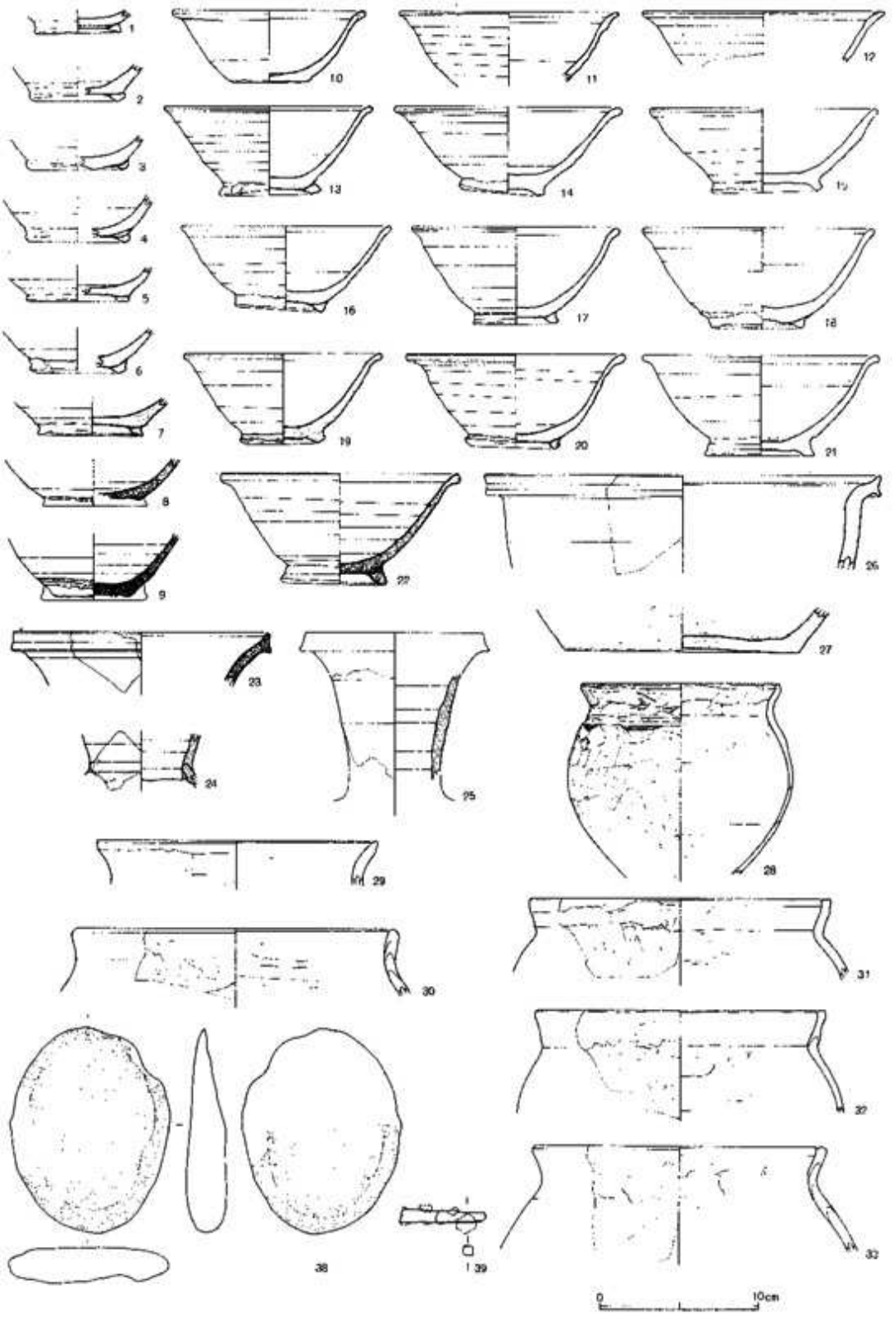
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	－ 4.8 1.5	高台部は小形で低く直立気味、接地面平坦で中央凹む。竹管？による切り離し痕残る。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面中心部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭によるナデ。底面剥離部分に円板技法の痕跡残る。	20%。須恵坏１。灰色（赤褐色）。焼成良好、器壁緻密。
須恵高台坏	2	－ 5.0 2.2	高台部断面三角形状で、体部は外傾して立ち上がる。	内外面とも回転横ナデ、詳細不明。	1/5。末野。灰褐色。
須恵高台坏	3	－ 5.5 2.0	高台部は小形で体部は外傾して立ち上がる。	内外面とも回転横ナデ。	1/5。末野。灰褐色。
須恵高台坏	4	－ 6.0 2.8	高台部は低く外開きで体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転横ナデ、詳細不明。	1/5。末野。灰褐色。



第101図　第74ａ，ｂ号住居跡平面図

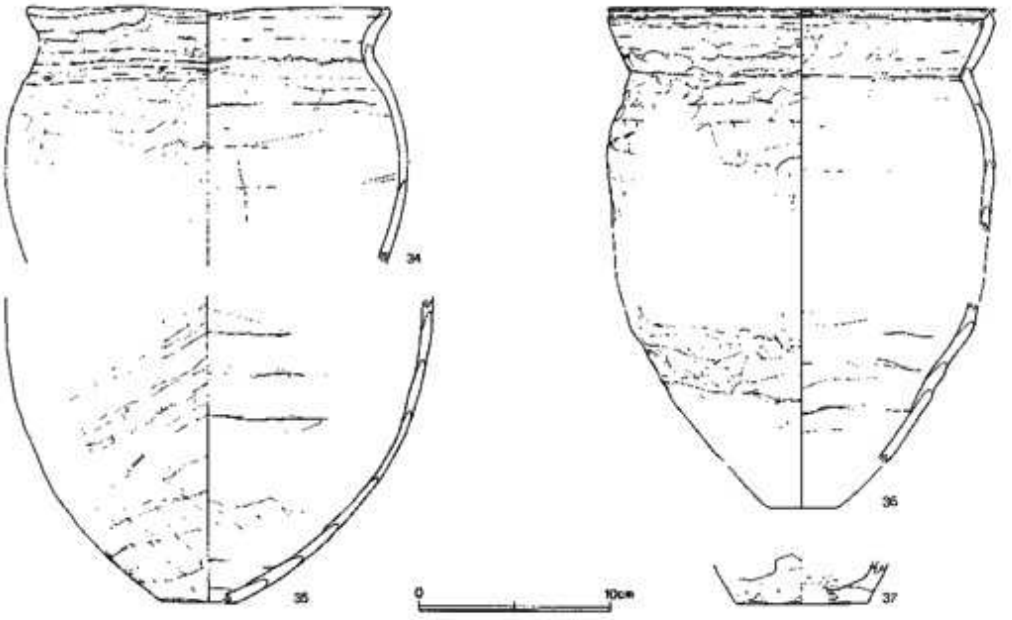
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	5	・・ 6.2 2.0	高台部は低く小さくほぼ直立、接地面ほぼ平坦。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、外面若干のナデ。	20%。須恵坏２赤褐、灰（赤褐）灰。風化により摩滅顕著。
須恵高台坏	6	・ 5.0 2.6	高台部は断面台形状をなし低い。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面は回転糸きり痕残る。高台部は粘土貼付け後指頭によるナデで、はみ出した粘土を工具により整形している。内面及び接地面は摩滅により平滑。	1/5。須恵坏３。灰白色。
須恵高台坏	7	・・ 6.5 2.0	高台部は低く開き気味、接地面は内反りで中央やや凹む。体部はやや内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後、内面指頭によるナデ外面工具ナデ。	10%。須恵坏２。暗赤褐色、灰褐色。風化により摩滅顕著。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	8	－ 5.5 2.8	高台部は剥離する。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、底面糸きり痕残る。	10%。須恵坏２。暗赤褐色。風化により摩滅顕著。
須恵高台坏	9	－ 4.3 3.4	高台部は完全に剥離している。体部は僅かに内湾して立ち上がり、下部に腰をもつ。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残り周縁部に高台部貼付けのための凹線が残る。外面体下部工具による沈線めぐる。	30%。須恵坏２。淡灰褐色。風化により摩滅顕著。
須恵坏	10	11.9 4.6 4.2	ほぼ平坦な底部から体部は内湾して立ち上がる。口唇部は肥厚し屈曲して大きく開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）内面比較的丁寧。外面体部下半若干のナデ加わる。底面糸きり痕残り、周縁部は一部摩滅する。	約80%。須恵坏１。炭白色。口唇部および体部の一部に炭素付着。
須恵高台坏	11	13.8 － 4.8	体部は内湾して立ち上がる。口唇部僅かに外反して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧。	1/2。須恵坏１。赤褐色。焼成良好、器壁堅致。内外面炭化物付着。No17＋28。
須恵高台付椀	12	15.8 － 3.3	体部は直線的に開き口唇部平坦で内面緩い稜をなす。	内外面とも回転横ナデ、詳細不明。	1/5。木野。灰褐色。No13＋20。
須恵高台坏	13	13.1 6.0 5.6	高台部は外側に開きやや歪む接地面は僅かに凹状をなす。体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は屈曲して開き丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面中心部に回転糸きり痕残る。外面口唇下、体部下半若干のナデ加わる。高台部粘土貼付け後底面から指頭による回転ナデ。内面口唇下摩滅顕著。	60%。須恵坏１。灰白色。
須恵高台坏	14	14.4 4.5 5.4	高台部は小形で歪みがある。体部は内湾気味に立ち上がり、下半に腰をもつ、口唇部はやや肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後、底面から指頭によるナデ。外面口唇下及び体部下半若干のナデ加わる。内面は比較的平滑。	60%。須恵坏１。灰色。No３。
須恵高台坏	15	14.3 5.3 6.5	高台部はやや大形で低く、接地面は外反り。体部は中位で内湾して立ち上がり口唇下凹む。口唇部僅かに肥厚し丸く収まる。内面は直線的。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧。口唇下及び体部下端やや強く凹状をなす。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	90%。須恵坏２。赤褐色。内外面一部炭素付着。No３＋13＋11。
須恵高台坏	16	13.3 5.2 5.2	高台部は低く直立し断面三角形状をなす。体部は僅かに内湾して立ち上がり、下位で鋭い稜をなす。口唇部やや肥厚し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面指頭によるナデ加わり平滑、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、密着していない。	80%。須恵坏２。灰褐色。風化により摩滅顕著。内外面一部炭素付着。No４。
須恵高台坏	17	15.0 6.3 6.8	高台部は直立し接地面やや凹む。体部は内湾して立ち上がり、下部で腰をもつ。口唇部は肥厚し外反して開く。口唇部下内外面やや凹む。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面中央部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、外面工具ナデ。	90%。須恵坏２。灰褐色。内外面一部炭素付着。風化による摩滅顕著。No20＋34。
須恵高台坏	18	14.6 6.3 5.3	高台部は直立気味でやや小さい。体部は僅かに内湾して立ち上がり下部に腰をもつ。口唇部肥厚し外反して開く。全体に歪む。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面中央部糸きり痕残る。体下端に円柱状工具の痕跡あり。高台部粘土貼付け（太さは一様でなく密着していない）後指頭によるナデ。	60%。須恵坏１。灰色。風化による摩滅顕著。No７。
須恵高台坏	19	12.5 4.3 5.7	高台部は小形で外方へ開き、底面やや凹む。体部は内湾して立ち上がり、下部で腰をもつ。口唇部やや肥厚し外反して開く。全体に歪んでいる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面は比較的丁寧。底面中心部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後、指頭？によるナデ。体下端かるい工具ナデ？。	2/3。須恵坏２。淡灰褐色。風化により摩滅顕著。No３。
須恵高台坏	20	13.8 5.3 5.9	高台部は低く直立気味で、接地面は外ぞり状。体部は内湾して立ち上がり下部に腰をもつ。口唇部肥厚し丸く収まり外反して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後、内面指頭ナデ、接地面は未調整。	1/3。須恵坏２。灰褐色、灰黒色。内外面炭化物付着。



第102図　第74ａ、ｂ号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	21	15.0 7.0 6.6	高台部はやや大形で僅かに開き、接地面凹む。体部は内湾して立ち上がり、口唇部丸く収まり外反して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、底面中央部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後、内面工具及び指頭ナデ外面工具ナデ。体下端工具により稜をなす。	95%。須恵坏2。淡灰褐色。内外面一部炭素吸着。風化により摩滅顕著。№1＋9＋17＋27＋29。
須恵高台坏	22	－ － －	高台部は高く外開きで、接地面は平坦で中央部凹む。体部は深く内湾して立ち上がる。口縁部は肥厚外反し、外面緩い稜をなす。内面体部下半は剥離顕著。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面中央部糸きり痕残る。体部中位内外面にロクロ痕残る。高台部粘土貼付け後、指頭ナデ（密着していない）、接地面は竹管か？。	80%。須恵坏2。赤褐色・灰褐色相半ば。内面炭素、炭化物付着。№8＋10＋31。
須恵壺	23	16.4 － 3.3	口縁部は外傾して開く。口唇部は上下に凸出し、先端尖り気味。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1/10。須恵壺1。灰白色。焼成良好・器壁堅緻。
灰釉壺	24	－ － 3.4	頸部は強くくびれる。	内外面とも回転横ナデ。	1/5。緻密。灰白色。
灰釉壺	25	－ － 6.6	頸部は外傾して開く。	内外面とも回転横ナデ。	1/5。緻密。灰白色。№20
須恵鉢	26	25.0 － 5.8	体部は内湾して立ち上がり、頸部はほぼ直立する。口縁部屈曲して開き、口唇部は上下に凸出し尖り気味である。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。	1/10。須恵甕1。灰白色。№1。
須恵鉢	27	－ 14.8 2.6	底部は置き台圧痕による凹凸が残る。体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転ヨコナデ（右回転）、内面周縁部～体部は工具ナデ加わる底面未調整。	10%。須恵甕1。灰白色。№1。
台付甕	28	12.7 － 11.9	台脚部は欠失する。胴部は無果花状で最大径を上位にもつ。頸部は微かに段をなし内傾して立ち上がり中位で外傾して開く。口唇部はやや肥厚し、外面緩い稜をなし直立気味。頸部内面緩い稜をもつ。	胴部外面胴部横箆ケズリ（←←↓）以下縦乃至斜箆ケズリ（↓↓←）胴部は指頭による斜方向のナデ加わる、内面指頭による丁寧なナデ。口縁部ヨコナデ後工具による撫で（←↓）指頭による押圧、ナデで内面に及ぶ。内面中位以下工具ナデ（←←）。	40%。甕1。赤褐色。外面炭素付着。№20＋23。
甕	29	17.7 － 2.8	口縁部は外傾して立ち上がり、開きはすくない。口唇部は丸く収まる。	内外面とも工具ナデ後指頭によるナデ（→）か？。	1/10。甕1。赤褐色。焼成良好・器壁堅緻。
甕	30	20.5 － 4.2	口縁部は内傾して立ち上がり、中位で外傾して立ち上がる。口唇下外面緩い稜をなす。	口縁部ヨコナデ（→）後？外面工具ナデ、指頭押圧加わる。内面輪積み痕残る。	1/10。甕3。赤褐色。
甕	31	19.0 － 4.6	張りをもつ胴部から口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部は床平坦で内面僅かに凸状をなす。頸部内面稜をなす。	口縁部内外面ヨコナデ（工具？）後内外面指頭によるナデ。胴部外面縦箆ケズリ（↑←）で口縁部まで及ぶ。指頭によるナデ加わる。内面工具ナデ（単位不明）。	1/10。甕1。赤褐色。焼成良好・器壁堅緻。
甕	32	18.3 － 6.4	張りをもつ胴部から口縁部は外傾して立ち上がる。口唇端部は平坦で内面凸状をなす。頸部内面稜をなす。	胴部外面未調整部分、輪積みの痕の目立つ指頭によるナデ（斜方向←）で口縁部まで及ぶ。内面工具ナデ（←）後若干のナデ。口縁部内面、工具ナデ（←）後若干のナデ。外面工具ナデか？。	1/10。甕1。赤褐色。焼成良好・器壁堅緻。
甕	33	18.5 － 6.5	胴部は張りをもつ。口縁部は屈曲し外傾して開く。口唇部は平坦で外面緩い稜をなす。	胴部ヨコナデ（→）後指頭によるナデ加わる。口縁部ヨコナデ後？工具ナデ（→）。内面ヨコナデ（←←↓）。	1/10。甕1。赤褐色。№20。
甕	34	19.0 － 13.0	胴部最大径を胴部にもつ。頸部は段をなし内傾して立ち上がり、中位で外傾して開く。口唇部丸く収まる。頸部内面緩い段をなす。	胴部外面、胴部横箆ケズリ（←←）以下縦箆ケズリ（↓↑）、内面箆ナデ、中位接合痕残る。口縁部内外面ヨコナデ（→）、外面指頭による押圧後工具ナデ（←←）で未調整部分残る。内外面一部輪積み痕残る。	30%。甕1。赤褐色。外面一部炭化物付着。№3＋15＋18＋20＋24＋25。
甕	35	－ 4.0 15.5	小形の底部から胴部は内湾して立ち上がる。	胴部外面縦箆ケズリ、内面箆ナデ。	1/5。甕1。赤褐色。№25。



第103図　第74ａ、ｂ号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	36	－ － －	胴部下半は直接接合しないが同一個体とみられ長胴で、口縁部は屈折して内湾気味に立ち上がる。口唇下凹状で未調整。内面凹線状をなす。頸部内面鋭い稜をなす。	胴部外面未調整部分、輪積み痕の目立つ指頭によるナデ、内面上半工具ナデ（←）下半斜方向。口縁部工具によるヨコナデ後指頭による若干の押圧、ナデ加わる。口唇内面は巾狭工具により凹線状をなす。 外面笠ケズリ後若干のナデ、内面指頭による一定方向のナデ。胴部外面笠ケズリ。	30%。甕１。黒褐色。No. 5＋6＋11＋20。
甕底部	37	－ 6.0 2.2	底部はほぼ平坦で、やや大形。		1/3。甕２。黒色（淡褐色）黒色。焼成良好・器壁緻密。S２、415g。
砥石？	38				10g。
釘	39				

註１　図示したもの以外に須恵杯口縁部36、底部14、体部30点、須恵器甕胴部６個体分、灰釉壺１個体分が出土している。

註２　須恵杯の胎土は以下のとおりである。

須恵杯１　末野産、ｆ大量　細粗礫

須恵杯２　末野産、ａ～ｆ　細粗　「コ」字状の構成に類似する

須恵杯２　２に類似し、ｄ目立つ

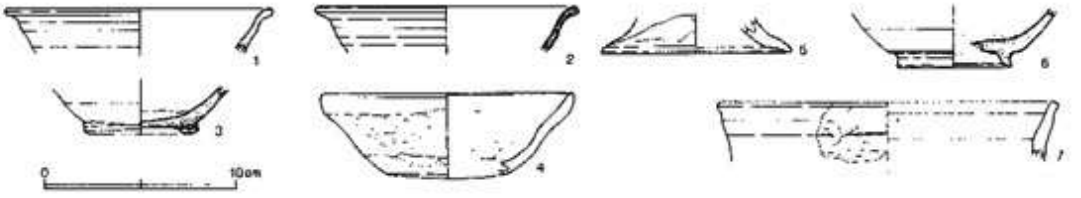
須恵杯３　２に類似し、ｅ目立つ

須恵杯４　南比企産、ｇ含む

須恵甕１　末野産、ｅ目立つ　細粗礫微

須恵甕２　南比企産、ａ～ｈ　細粗礫少量

須恵甕２　２に近似し、ｇは２より少量



第104図　第79号住居跡、第109号土壙出土遺物

第79号住居跡（第105図）

斜面に位置しており北半、西半は全くとんでいた。壁外施設は確認していない。

埋土はほとんど残っていない。少量の遺物が埋土中から出土している。

平面形は長方形とみられ、北壁は復元。床面は残存部分はほぼ平坦で全体に柔らかい。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

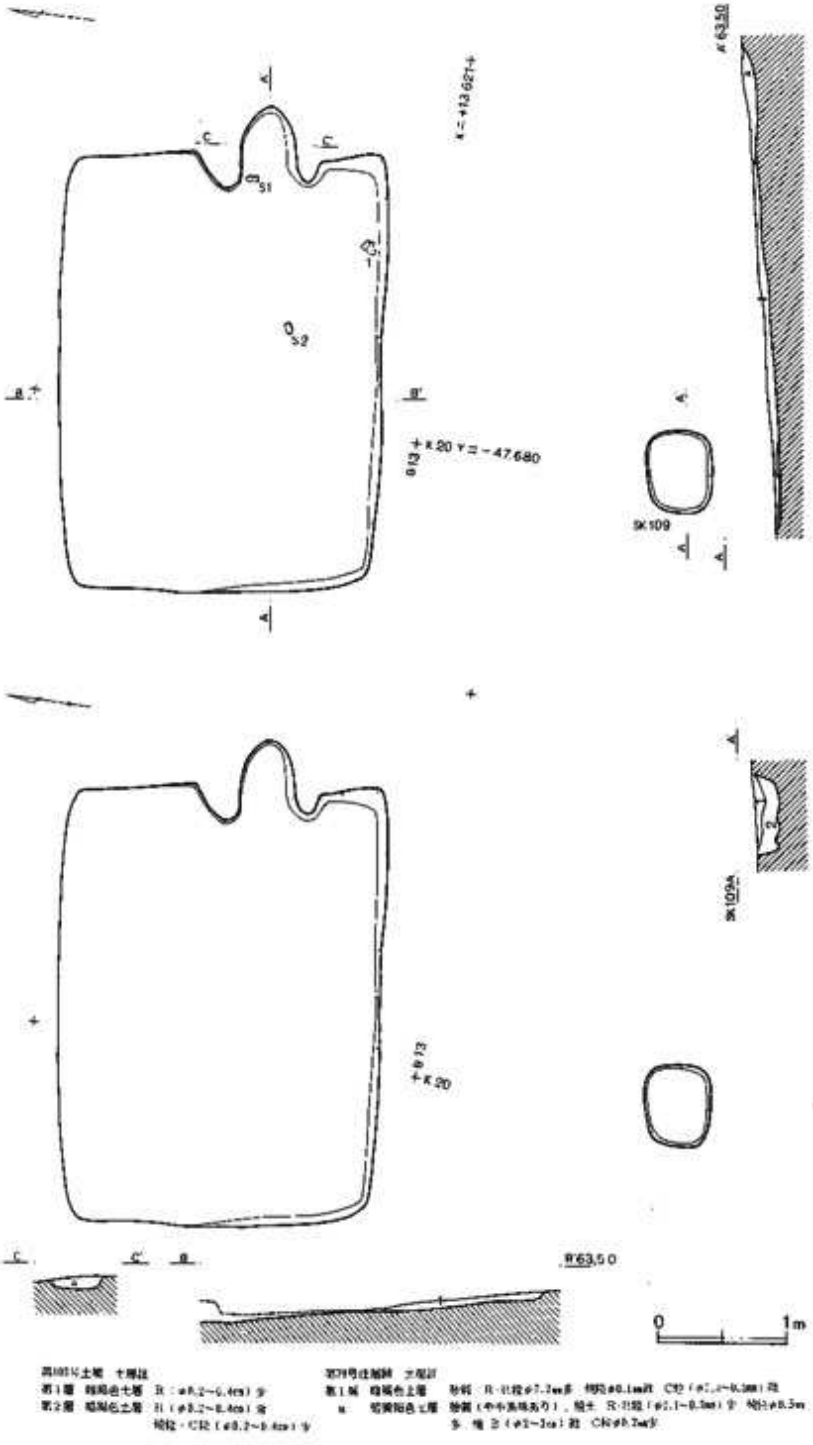
掘り方は存在しない。全体に遺存状態が悪い。

竈燃焼部が残存しているが燃焼部は略楕円形で、ほぼ平坦な底から外方へ向かって緩く立ち上がる。袖はほとんど残っていないが粘土貼り付けか。

第109号土壙（第103図）

第79号住居跡の南側約2.0mに位置する。

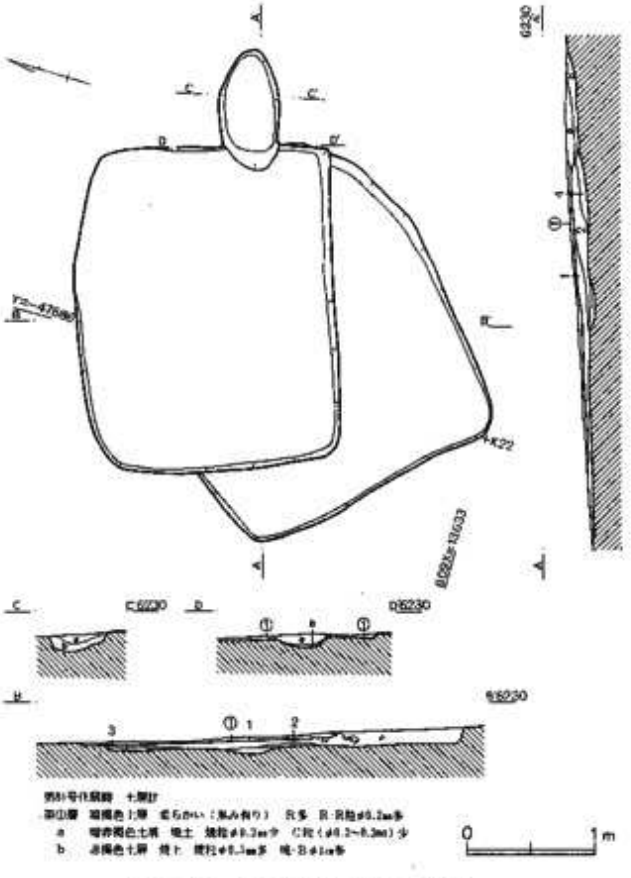
平面形は長方形で主軸は第79号住居跡とほぼ一致する。同住居跡に伴うものと考えられる。この場合土壙が住居範囲の内側か外側かを窺わせるような証左は認められなかった。



第105図　第79号住居跡、第109号土壙

第79号住居跡、第109号土壙出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	14.0 — 2.2	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに屈曲して開き、肥厚して丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1/10。須恵坏1。灰色。焼成良好・器壁堅緻。
須恵坏	2	13.7 — 2.5	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は屈曲して開き、肥厚する。端部平坦面をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。内面丁寧。	1/10。須恵坏4。灰褐色。焼成良好・器壁堅緻。
須恵高台坏	3	— 5.4 2.5	高台部は低く小広で僅かに外開きで、接地面中央やや凹む。体部は内湾して立ち上がる。内面重ね焼きの痕跡？。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭によるナデ。	1/4。須恵坏2。赤褐色、灰褐色。焼成良好・器壁堅緻。
坏	4	13.3 5.2 4.3	底部は僅かに残る。体部は内湾して立ち上がり、中位で屈曲する。口唇部は直立気味。	体部内面～口唇下までヨコナデ（内面丁寧）。体部外面指頭によるナデ、押圧。以下斜方向の箆ケズリ。	1/4。甕1。淡赤褐色。焼成良好・器壁堅緻。
台付甕（脚部）	5	— 9.7 1.8	中位で屈曲して大きく開く。外面屈曲部は凹状をなす。先端尖り気味。	内外面ともヨコナデ、外面屈曲部指頭による押圧、ナデ加わる。	1/10。甕1。黒褐色、赤褐色。焼成良好・器壁堅緻。
須恵及台付椀	6	— 10.2 3.0	高台部は低く外開きで幅狭く、接地面内ソギ状で中央やや凹む。体部は下端で稜をなし内湾気味に立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）、高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ中央糸きり痕残る？。	1/5。須恵坏5。灰色。No.1。SK109。
甕	7	17.8 — 3.2	口縁部下半はほぼ直立か？上半部僅かに開く。口唇部平坦。	口縁部内外面横ナデ（外面未調整部分残る）；後若干の指頭ナデ加わる。	1/20。甕1。淡褐色。SK109。



第106図　第81号住居跡平面図

第81号住居跡（第106図）

竈は比較的明瞭に確認されたが平面形は不明瞭で一軒分の住居跡と考えられた。既に床面をとばして堀り方に達している。

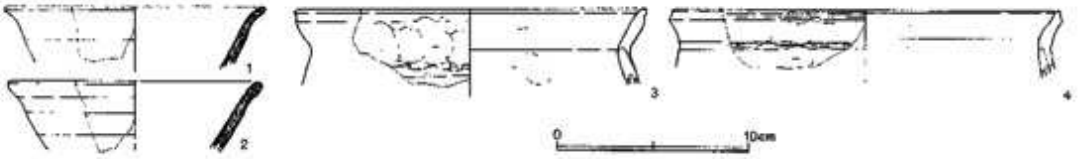
埋土はほとんど残っていない。出土遺物は少量で竈付近に限られる。吉ケ谷式土器の出土があり該期の住居跡の重複が確認された。

平面形は極く小形の長方形で壁外施設が予想されるが検出できなかった。床面は竈前面のみ残存していた。柱穴、溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物ははほとんどない。

掘り方は存在しない。貼り床は認められなかった。

竈は東壁やや右よりに位置し、燃焼部下面のみかろうじて残存した。あまり底面は焼けていない。

ほぼ楕円形で外方へ緩く立ち上がる。袖は完全に崩壊して旧状をとどめていない。壁を掘り込まない粘土貼り付けか？



第81号住居跡出土遺物　　第106図　第81号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.6 － 3.0	体部は内湾して立ち上がり、口唇部外反し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/10。須恵坏2。灰褐色（褐色）黒色。氣化により摩滅顕著。
須恵坏	2	13.3 － 3.7	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面平滑。	1/10。須恵坏2。灰色、灰褐色。
甕	3	18.3 － 4.0	口縁部直立し、中位で外張して立ち上がり、肥厚気味。口唇部やや凸状呈す。内面弱い稜をもつ。外面下部に輪積み痕残る。	内外面ヨコナデ後、外面口唇下及び中位は巾狭工具によるナデで、さらに指頭による押圧、ナデが加わる。	1/10。甕1。赤褐色。焼成良好・器壁緻密。
甕口縁部	4	20.2 － 3.0	口縁部直立し、中位で屈折して開く。口唇部直立し尖り気味、外面稜をなす。	内外面ヨコナデ後、外面口唇下及び中位は巾狭工具によるナデで、さらに指頭による押圧、ナデが加わる。	1/10甕1赤褐色焼成良好・器壁緻密

第85号住居跡（第108図）

他の住居跡から離れて一軒だけ検出されたもので、上部及び東壁はほとんど存在しない。壁外施設あるいは第１１３号土壙との間に何らかの遺構の痕跡は見出せなかった。

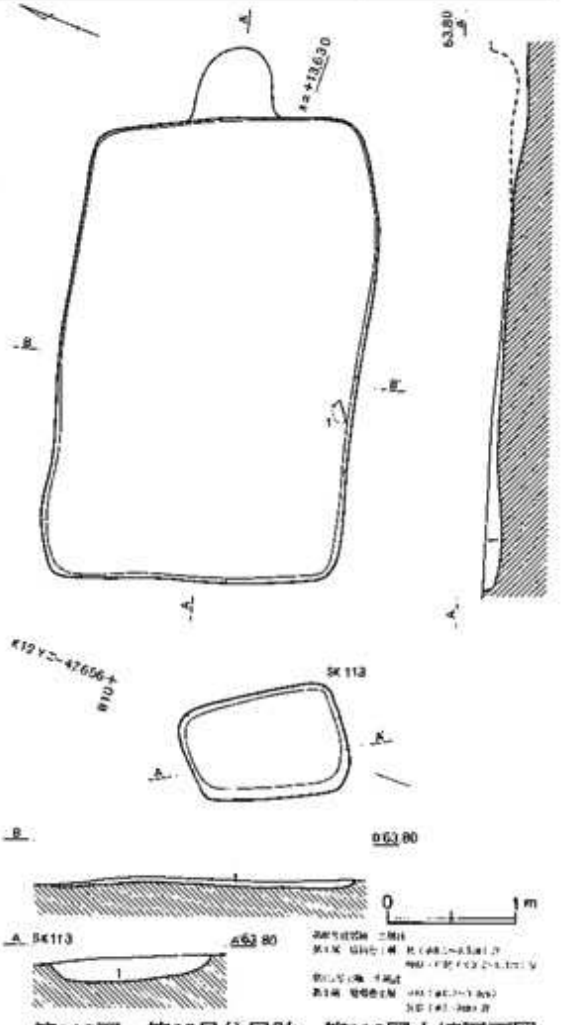
埋土はほとんど残っていない。出土遺物は全て埋土中出土であるが、少量である。

平面形は縦長の略長方形とみられ、東壁は復元である。壁は残存部からするとほぼ直立する。床面は柔らかく硬い部分はほとんどない。

掘り方は存在しない。第１１３号土坑が西約mの致近距離に存在する。長軸は住居跡主軸とほぼ直交するが、付随する土壙と考えられる。

竈は全く痕跡を残さないが、東壁に敷設されていたものと考えられる。

第108図　第85号住居跡出土遺物



第107図　第85号住居跡、第113図土壙平面図

第85号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵壺	1	－ － 2.7	体部は外傾して立ち上がり、口縁下で大きく屈曲し僅かに肥厚して開く。	内外面回転横ナデ。厚減顕著により詳細不明。	1/10。要1。近似白粒細目立つ。赤褐色。

第86号住居跡（第109図）

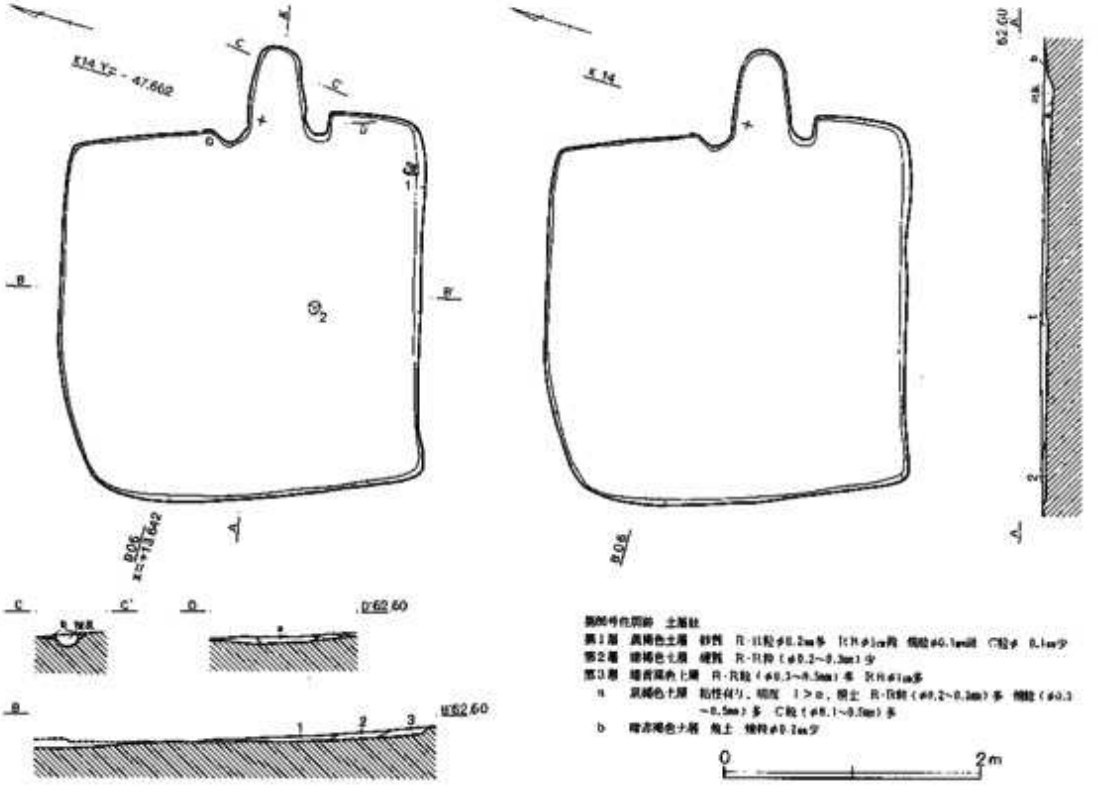
北壁を溝によって切られる。ほとんど残存していなかったが、竈周辺を中心とする部分に床が残り北半は特に欠失している。壁外施設は認められなかった。

埋土はほとんど残っていないが残存部分でみると自然推積か？遺物はごく少量で埋土中出土。

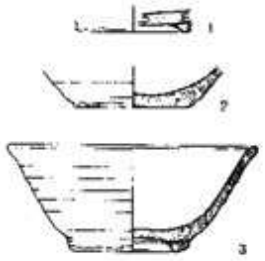
平面形は略方形。床面は残存部はほぼ平坦で全体にそれ程硬くない。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

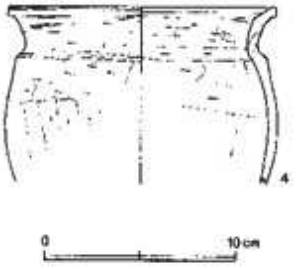
掘り方は存在しない。床面はローム直上である。

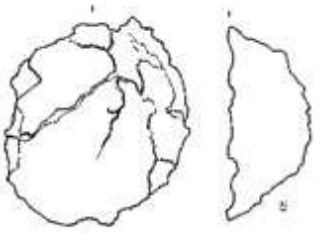
竈は中央部に攪乱が入り燃焼部底面がかろうじて残ったが、それ程焼けていない。袖は基部が残るのみである。



第109図　第86号住居跡平面図







第86号住居跡出土遺物

第102図　第86号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	– 5.2 1.2	高台部は小形で低い。やや外開きである。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。	1/10。須恵坏1。灰白色。№1。
須恵坏	2	– 6.0 1.8	底部はやや凸状呈し体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。	1/10。須恵坏1。灰白色。
須恵高台坏	3	13.1 5.8 5.5	高台部はほぼ直立し低く厚い、接地面ほぼ平坦。体部は外傾して立ち上がりそのまま口縁部にいたる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、底面糸きり痕？底部内面ザラつく。	20%。須恵坏1。灰白色、灰褐色。風化により摩滅顕著。№1。
台付甕	4	14.0 – 9.0	胴部上位はほぼ直立し、明瞭な段をなして口縁部へ移行する。口縁部僅かに外傾して立ち上がり、上位で屈折して開く。口唇部平坦（制作時に逆位にした）で外面ほぼ平坦面を作り出す。内面稜をもつ。	胴部外面横位（←－。）・縦位（↓。－）ケズリの頃、内面丁寧な工具ナデ上部指頭押圧、ナデ加わる。口縁部外面ヨコナデ（段は工具使用か？）、内面工具ナデ後指頭押圧、ナデ。	20%。甕1。赤褐色。
鉄滓	5				520g

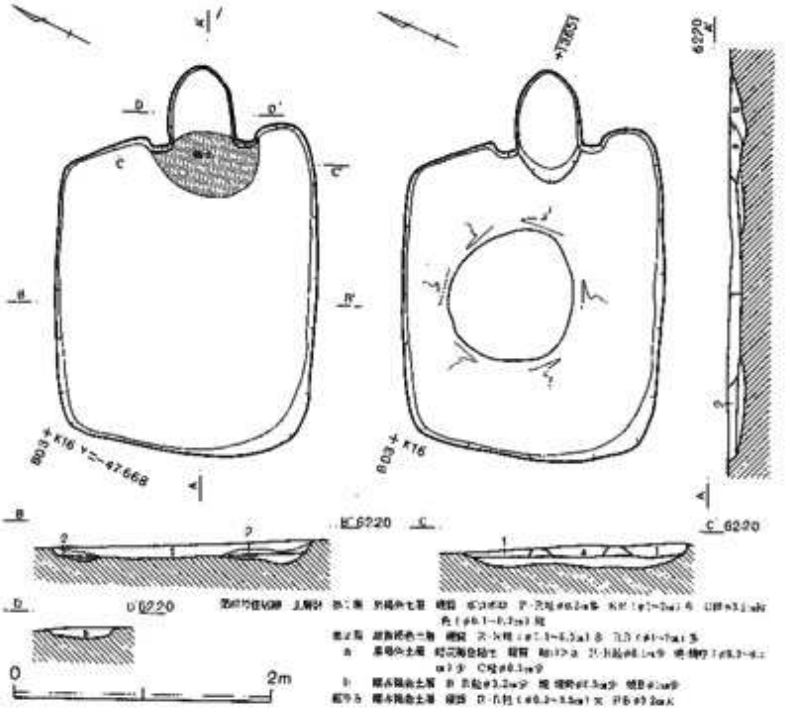
第87号住居跡（第112図）

極く小形の住居跡で遺存状態が悪い。壁外施設は認められなかった。竈前面に粘土の分布が認められた。

埋土は比較的残っていたが埋土中の出土遺物はごく少量。

平面形は東、西壁が斜行する小形の台形状で、隅部は湾曲する。床面は全体に柔らかい。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は断面によると中央部を残して四辺を掘り凹めるものとみられる。貼り床は認められなかった。



第112図　第87号住居跡平面図

第113図　第87号住居跡出土遺物

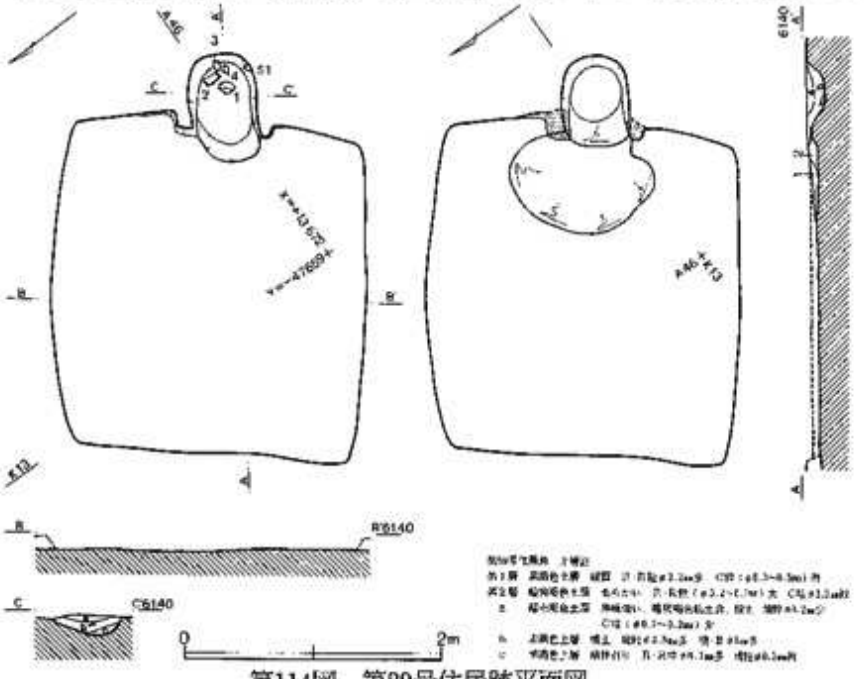
竈は東壁やや右寄りに付く（見ためはほぼ中央であるが、斜行する壁に付設されるので、右寄りとなるか？）。壁に対して竈軸が曲がっており住居主軸とほぼ同じである。燃焼部は略楕円形で外方へ緩く立ち上がりあまり焼けていない。袖部は基部が僅かに残る。掘り方と袖構築の順序は確認していない。壁に取り付く部分は、はっきり確認できた訳ではないが地山を若干切り出しているとみられる。焚き口はほぼ平坦でほとんど焼けていない。

第87号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.8 － 3.5	体部は内湾して立ち上がり口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転横ナデ（右回転？）。	1/10。黄褐の米野。灰色。
須恵坏	2	13.8 － 3.5	体部は内湾して立ち上がり、口唇部はやや肥厚して屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1/10。須恵坏2。灰白色。焼成良好・器壁緻密
高台部	3	5.3 5.8 0.6	高台部は低く小形である。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。	1/4。須恵坏1。灰白色。
台付甕	4	17.2 － 3.2	口縁部は僅かに内傾して立ち上がり、中位で屈曲して立ち上がる。口唇部は直立気味。脚部は屈曲して開き、器は殆ど平坦である。	口縁部内外面ヨコナデ、外面上位は指頭押圧、ナデ。！！は工具によるか？脚部内外面ともヨコナデ。	1/10。甕1。赤褐色。接合しないが同一個体とみられる。
脚部	5	‥ 9.7 1.8	台付甕脚部で外反して開く。	内外面とも横ナデ（左回転か？）。摩滅顕著で詳細不明。	1/4。甕1。黄褐色。4と同一個体の可能性。

第89号住居跡（第114図）

ほとんど竈だけ残存する住居跡で、西壁推定部分から1m程で調査区外となる。壁外施設は全く判らなかった。調査区際断面にも耕作が地山まで達しておりそれらしき痕跡はない。



第114図　第89号住居跡平面図

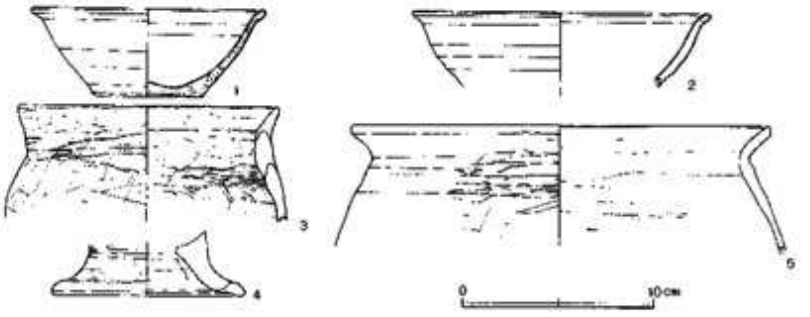
埋土は竈燃焼部を除いて全く残っていない。住居跡本体からの遺物出土はない。

平面形はわずかに残る暗褐色土の分布を拾ったもので復元であるが、略方形とみられる。床は完全にとんでいる。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検

出されなかった。

掘り方は不明。竈前面は楕円形状に凹む。

竈は燃焼部が比較的よく残ったが袖は完全に崩壊している。燃焼部は略長方形で掘り込みは深い。底面～側面下部はよく焼け赤変硬化している。須恵坏が浮いた状態で出土している。袖部は粘土貼り付けで壁は掘り込まない。



第115図　第89号住居跡出土遺物

第89号住居跡出土遺物

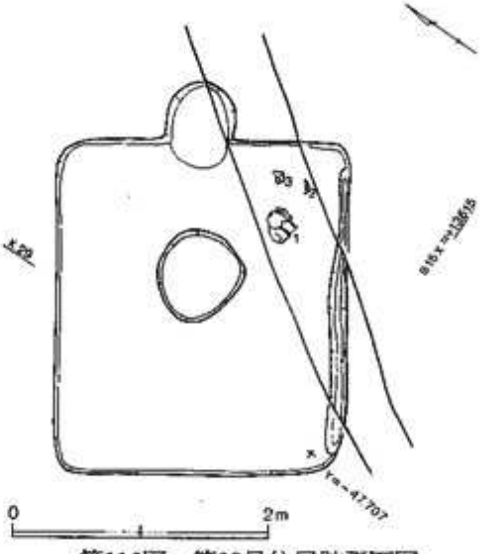
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	12.2 5.2 4.6	平坦な底部から体部は内湾して立ち上がる。口縁部は屈曲して開き丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）内面丁寧で平滑。底面糸きり痕残存、周縁部擦減顕著。	1/2。須恵坏1。灰白色。焼成良好・器壁堅緻。№1。
須恵坏	2	13.6 － 4.0	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反し、口唇部は丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、内面丁寧で平滑。	1/4。須恵坏2。淡褐色。№3。
台付甕	3	13.6 － 5.8	胴部は張りをもち頸部で微かな段をなす。口縁部は直立して立ち上がり、中位で僅かに外傾して開く。輪積み痕残る。内面中位及び頸部は稜をもつ。脚部は屈曲して開き、先端外面緩い段、内面凸状をなす。	胴部外面横箆ケズリ（←←↑）内面ヨコナデ（←←）後指頭による押圧、ナデ。口縁部ヨコナデ（→）後、外面下端巾狭工具ナデ（←←）で段を造出する。中位は指頭によるナデ（←←）加わる。脚部内外面指頭ナデ（←←）外面指頭押圧加わる。	1/2。甕1。赤褐色。№2、4及び脚部は接合しないが同一個体とみられる。外面炭素付着。
甕	4	22.0 － 6.4	張りのある胴部からそのまま口縁部へ移行し、中位で屈曲して立ち上がる。口唇部は直立気味で、外面緩い稜をもつ。	胴部外面横箆ケズリ（←←）後指頭ナデ、内面工具ナデ後指頭による押圧、ナデ。口縁部内外面ヨコナデ後、外面末調整部分を挟んで指頭による（←←？）。	1/10。甕3。赤褐色。

第98号住居跡（第116図）

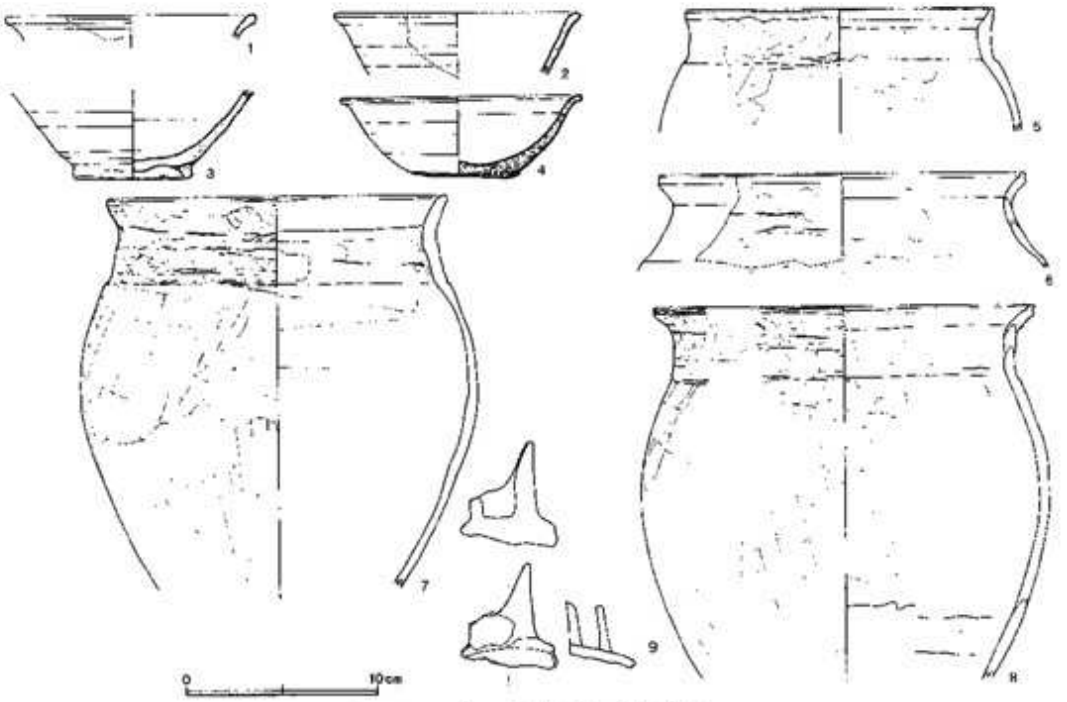
現道部分の調査時に認められたもので、調査区と現道との境界が土堤状に残存した部分にかろうじて存在していた。大部分は掘削により破壊されている。

帯状に残った部分断面によると、下層まで耕作が及んでおり壁外の様相は判断できなかった。埋土中の出土遺物は少量である。

平面形は推定であるが小形の方形ないし長方形と考えられる。残存部床面はほぼ平坦。壁溝が東壁下に認められた。幅10cm前後で竈、壁には認められない。柱穴はない。床下土壙が痕跡的ではあるが竈前面に存在する。略円形。竈右側から甕、須恵坏が出土している。



第116図　第98号住居跡平面図



第117図　第98号住居跡出土遺物

掘り方、壁外施設については不明である。

竈は北壁に付設され燃焼部が若干残ったが詳細は不明である。

第98号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.2 － 1.4	口縁部は肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ。	1/10。須恵坏6。赤～茶色粒子。灰白色。
須恵高台坏	2	13.0 － 3.3	体部は内湾して立ち上がり、やや屈曲してそのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/10。須恵坏6。赤～茶色粒子。灰白色。摩滅顕著。
須恵高台坏	3	－ 5.2 4.5	高台部ほぼ直立し接地面丸く収まり、体部はやや内湾して立ち上がる。底部外面指頭痕による凹凸目立つ。	内外面回転と小ナデ（左回転）、内面底部一定方向のナデ、外面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、切り離し痕？残る。	60%。須恵坏1。灰色。
須恵坏	4	12.7 5.0 4.2	やや凸出する底部から体部は内湾して立ち上がり屈曲して薄い口唇部に移行する。内面重ね焼き痕が粘土付着する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧。外面下半若干のナデ加わる。底面糸きり痕残る。	90%。須恵坏1。灰色、赤褐色、赤灰色。№2＋3。
台付甕	5	16.2 － 6.2	やや張りをもつ胴部から頸部で段をなし僅かに外傾する口縁部に移行する。上位で外反して開き口唇部直立し尖り気味で外面稜をなす。内面中位、頸部稜をなす。	胴部外面横斜め箆ケズリ（←）、内面箆ナデ。口縁部横ナデ後頸部工具ナデ、指頭押圧加わる。	1/5。甕1。淡褐色。外面炭素付着。
甕	6	19.2 － 5.0	張りのある胴部から？微かな稜をなし内傾する口縁部にそのまま移行する。上位で屈曲し小さく開き口唇部は直立する。外面沈線状？に凹み緩い稜をなす。内面緩い稜をなし外反する。輪積み痕残る。	胴部外面横箆ケズリ、内面箆ナデ。口縁部横ナデ、外面屈曲部工具ナデ、指頭押圧加わる。	1/10。甕2。暗褐色。摩滅顕著。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	7	17.8 — 20.3	胴部は尻すぼみで最大径を上位にもち、頸部で僅かに段をなし内傾する口縁部に移行する。上位で屈曲し内約気味に小さく開き、口唇部尖り気味。内面頸部で稜をなし、緩く外反して開く。外面輪積み痕残る。	胴部外面上位斜、横箆ケズリ（←←↓）以下縦箆ケズリ（↓）。内面箆ナデ？頸部指頭押圧。口縁部横ナデ後頸部、屈曲部工具ナデ（巾0.9cm）で指頭押圧、ナデ加わる（未調整部分残る。）内面下半工具ナデ？後指頭押圧。	1/4。甕1。赤褐色／黒褐色、淡褐色。No1。剥離、摩滅顕著。
甕	8	20.0 — 19.0	胴部は長胴気味でやや下位に最大径をもつ。頸部は段をなしほぼ直立する口縁部に移行し、上位で屈曲して小さく開く。口唇部直立し外面下沈線状に凹み稜をなす。内面頸部稜をなし緩く外反する。	胴部外面上位横斜箆ケズリ（←←↓）以下縦箆ケズリ（↑↓）、内面箆ナデ丁寧頸部指頭押圧？口縁部横ナデ外面頸部、屈曲部工具ナデ後指頭押圧、ナデ加わる。箆ケズリ痕残る。内面下半指頭押圧か？。	1/2。甕1。淡褐色。接合しないが同一個体。
鉄製品	9				1/10。80g

注　第1群の図示したもの以外の各器種と粘土との対応関係は以下のとおりである。

第5号住居跡　甕1（胴部4）　甕1'（胴部1）　須恵坏1（体部3）　須恵坏2（体部1）

第79号住居跡　甕1（胴部15）　甕1'（胴部2）　須恵坏1（体部1）　須恵坏2（底部1）　須恵坏4'（体部1）　灰釉壺

第81号住居跡　甕1（口縁部2、胴部25）　甕1'（胴部6）　須恵坏1（体部1）　須恵坏2（体部2）　須恵坏2'（体部3）

第86号住居跡　甕1（口縁部1、胴部13）　須恵坏1（口縁部3、底部2）　須恵甕1（体部1）

第87号住居跡　甕1（口縁部1、胴部17、脚部1）　須恵坏1（底部1）　須恵坏2'（口縁部1）

第89号住居跡　甕1（胴部7）　甕1'（胴部1）　須恵坏2（口縁部1、体部1）　須恵坏3（口縁部1）

第98号住居跡　甕1（口縁部1、胴部35）　甕1'（胴部3）　甕2（口縁部1、胴部7）　須恵坏1（口縁部5、底部2）

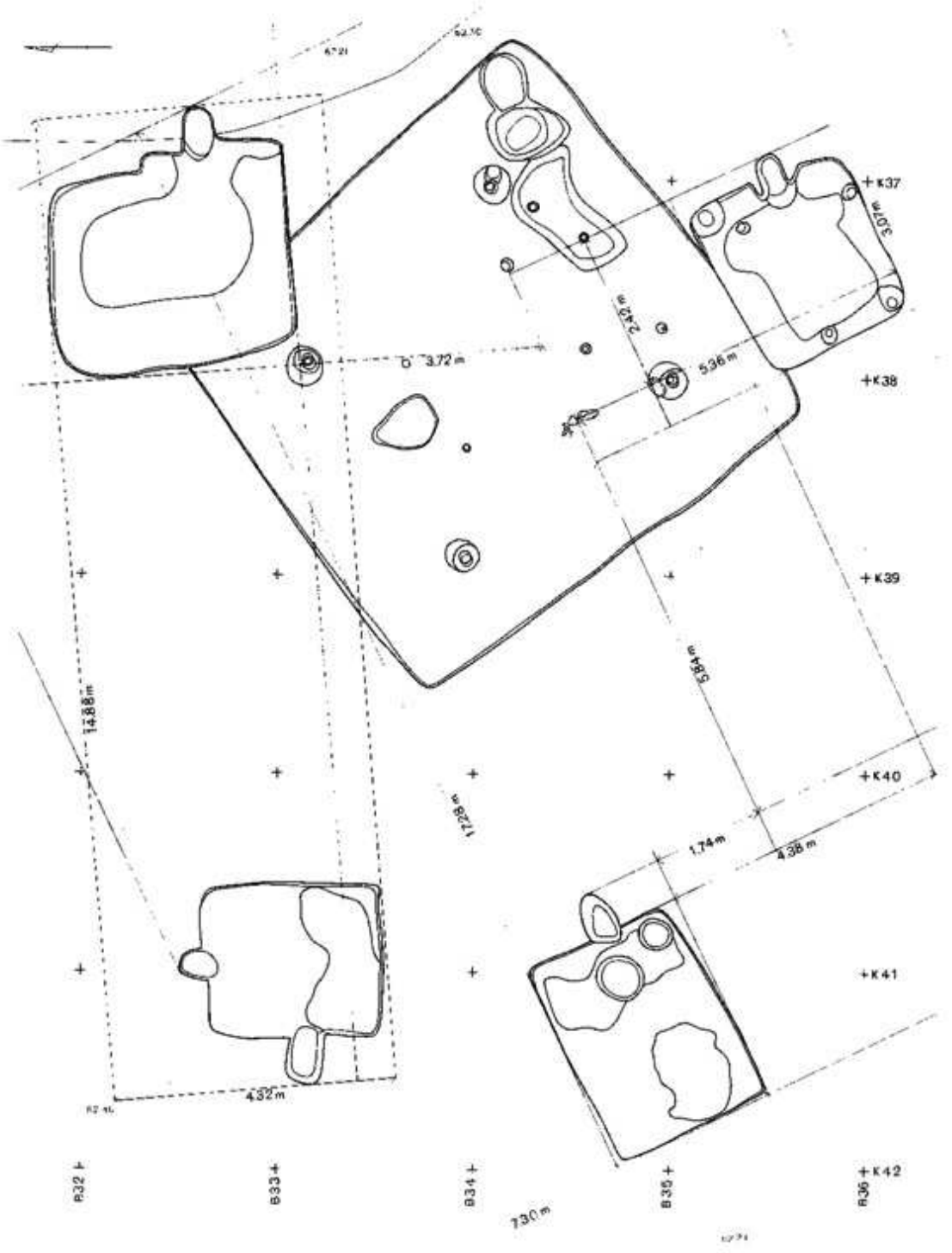
C　平安時代　第2群

第2群は調査区の西側中央部、台地裾の平坦面（標高62.3m前後）に位置し、南西側は小さな谷によって限られる。比較的狭い範囲に集合する住居跡群で、現道を挟んで調査区外に広がっていた可能性は少ない。

住居跡群の占有する範囲は（第18、48号住居跡の竈を結ぶ線を基準に14軒の住居跡を囲む範囲）長さ57.0m、幅40.6mに亘り、約2,300m²に及ぶ。この矩形の主軸方向はほぼ東西方向を向く。第1群の第5号住居跡からの距離は約15.0mである。

各住居跡の配置は、第48号住居跡が他の住居からやや離れて単独？に存在する他は大部分の住居跡が北半に片寄り、第23号住居跡がほぼ中央、最南端の隅に第27、28、29号住居跡がかたまって存在する。本住居跡群は集中的な存在形態を取るものが多く、3小群に細別される。上述の2b群の他に、第11、13、24、25号住居跡、第20、21、22号住居跡がありそれぞれ第2a、2c群と呼称する。3軒前後の住居跡が比較的狭い範囲に固まる存在形態は他群にはみられない。

10軒の住居跡の詳細は以下の記述及び住居跡一覧表によるが、概要を示すと直径3.0～3.5m前後のものが多く、3.0m以下、4.0m前後の住居跡で構成される。平面形は長方形状をなすものが多い。竈は東乃至南東壁に付設され、第24号住居跡が北、西壁の2ヶ所に設置されている。竈は壁中央ないしやや右寄りに設置されるものが圧倒的で左竈は少ない。明確に構造を把握できるものは第23号住居跡のみである。貯蔵穴をもつものは少ないが、竈の左右両者とも存在する。床下土壙を持つものは第23、25、28号住居跡の3軒を数えるのみである。堀り方については不明瞭な住居跡もあるが、中央部を残して四周を掘り窪めるものが主体を占め、三辺、二辺、一辺を掘り窪めるものが有り壁際を残すものもある。壁溝を持つものは存在しない。全体に単純な構造である。



第117図　第2a住居跡群配置図

重複関係にあるものはなく、竈付け替えの住居跡（第24号住居跡）があるのみである。

住居跡外に土壙をともなうと考えられるものが1軒存在する。

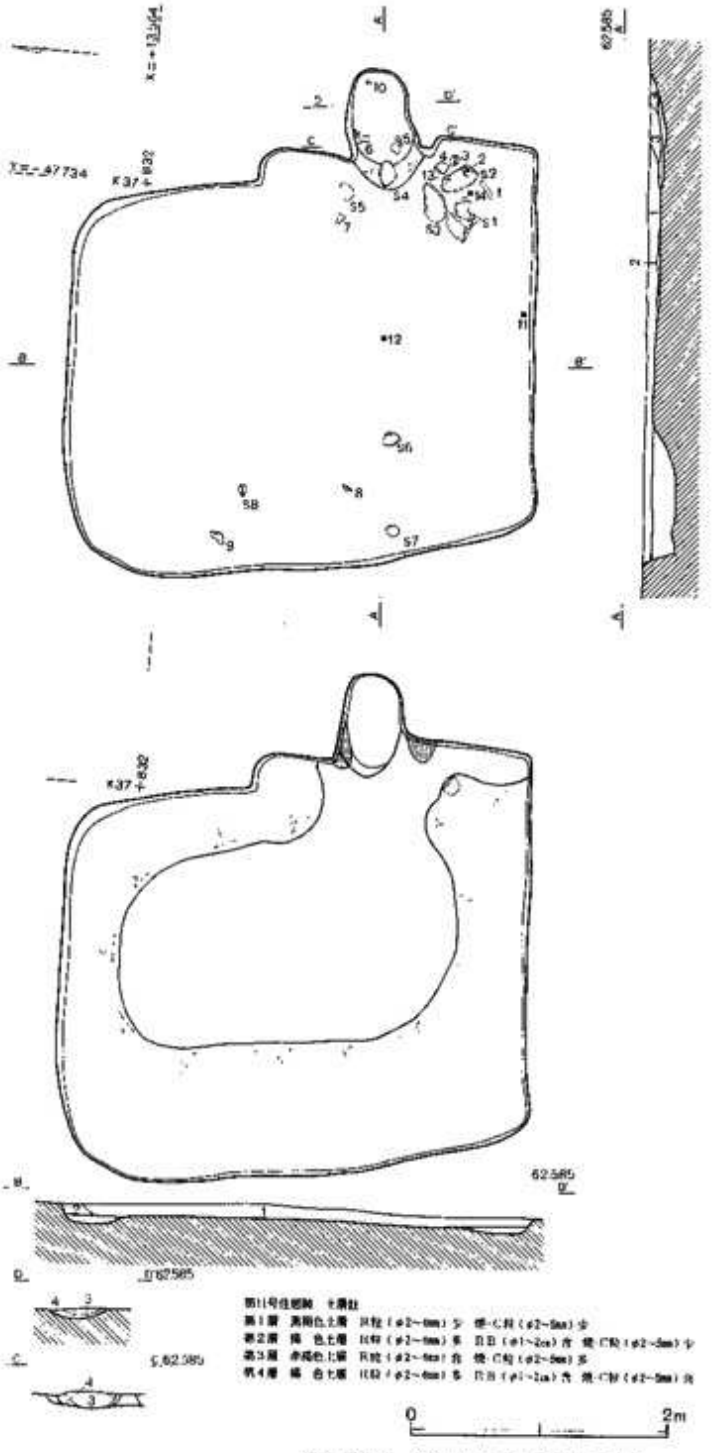
第2a住居跡群（第118図）は17.28×14.40mの矩形範囲に収まりやや広い範囲を占有する。

第2b住居跡群は第127図に示したように3軒の住居跡の占有する範囲は、10.28×7.78mの長方形状。各住居跡の間隔は2m前後の至近距離にある。

出土土器によると若干の段階差があり、第21→20→22号住居跡の変遷が考えられ同時に3軒が存在したわけではない。

第21号住居跡、第8号土壙間は1.94mで、土壙までが住居跡占有範囲とすると他の2軒と完全に重複するか接することになる。

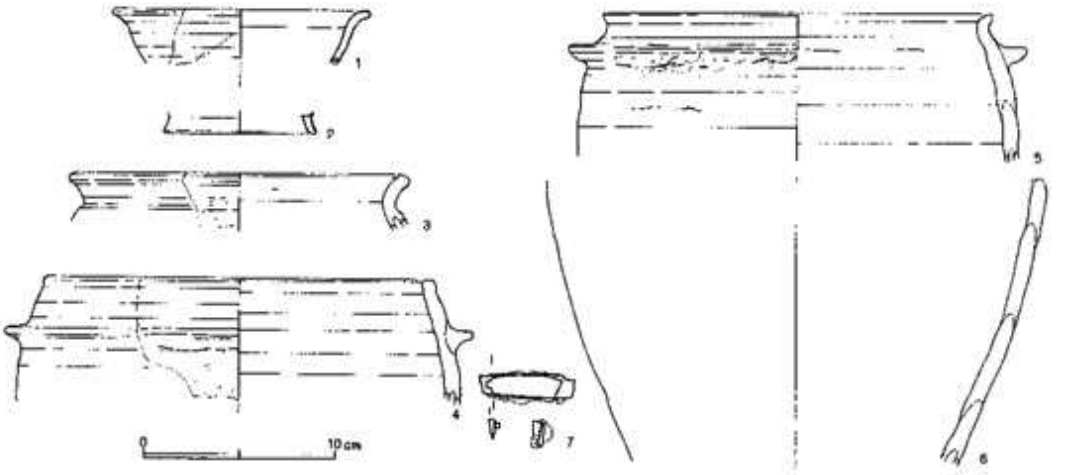
第2c住居跡群（第141図）は9.73m×7.48m（第27号住居跡が最も残りがよく矩形範囲の基準とした）の範囲が占有領域である。各住居跡間は第2b群よりも更に狭い。第28、29号住居跡間は1.31mである。出土土器によると第29→27→28号住居跡の変遷が考えられ、第2b群同様重複を避けている。



第118図　第11号住居跡平面図

第11号住居跡（第118図）

溝及び土壙（現代）等による撹乱が顕著で、竈の裾石がすでに露出していた。第12号住居跡を切っている。周辺施設は認められなかった。



第119図　第11号住居跡出土遺物

埋土はほとんど残っていない。遺物は竈周辺のものが床直で他は浮いている。

平面形は東壁が段をもつ略長方形で、南北壁はほぼ直線的で平行、東西壁はやや湾曲し全体に歪んでいる。

壁外に何らかの構造が予想されたが痕跡は精査にもかかわらず認められなかった。

床は全体に柔らかい。柱穴、壁、溝等は検出されなかった。

掘り方は竈前方及び中央を掘り残すもので、全体に浅い。

竈は東壁南寄りに敷設され壁は左右で若干の段をなす。燃焼部は略方形で壁は緩やかである。裾は粘土貼り付けで殆ど崩壊している。竈右前面に存在する扁平な石は裾等の補強に使用したものか。竈壁は段をなし厨房的空間の存在を思わせる。

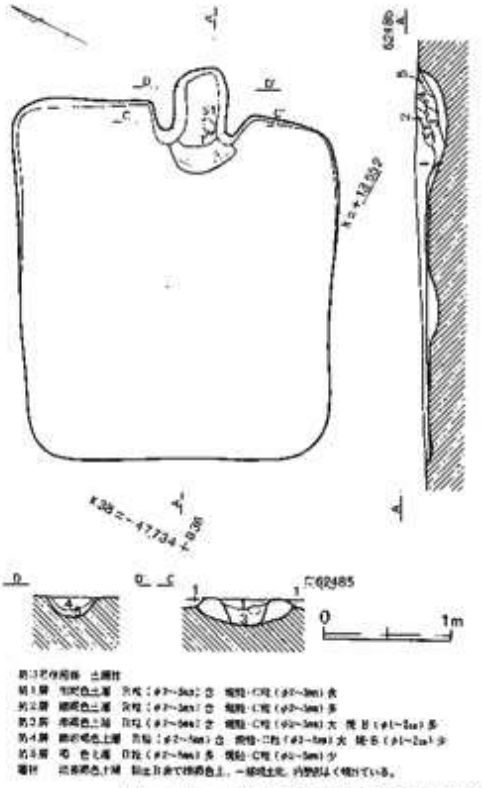
第11号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.5 — 2.8	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は外反し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）	1/10,須恵坏2,黒色、灰黒色,内面炭化物付着。
須恵高台部	2	— 7.7 1.1	高台部は比較的高く外反して開く。	内外面とも回転横ナデ。詳細不明。	1/20,須恵坏1,灰褐色.
甕	3	18.7 — 2.5	器肉厚く胴部との境は稜をなし口縁部は短く大きく屈曲する。口唇部僅かに直立する。	胴部外面横筆ケズリ口縁部内外面横ナデ。一部木口状工具ナデ。	1/20,甕1,暗赤褐色.
羽釜	4	20.5 — 6.5	胴部は内湾して立ち上がる。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部は平坦。鍔は断面三角形でほぼ水平につく。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、胴部筆ケズリ？鍔は粘土貼付けでよく密着する。	1/10,須恵甕3'灰色,No.3
羽釜	5	20.3 — 7.5	胴部は内湾して立ち上がり、そのまま口縁部へ移行する。口唇部は内そぎ状で、外面凸状を呈する。鍔断面三角形状で、上面ほぼ水平、下面は密着していない。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面指頭ナデ加わる。胴部外面は工具によるナデか？	1/10,須恵甕5,赤褐色,No.1
羽釜	6	— — 14.8	甕ないし羽釜の胴部。緩く内湾して立ち上がる。	加熱による剥離及び磨滅顕著で詳細不明。	1/5,甕1角,赤褐色.
刀子	7				10g

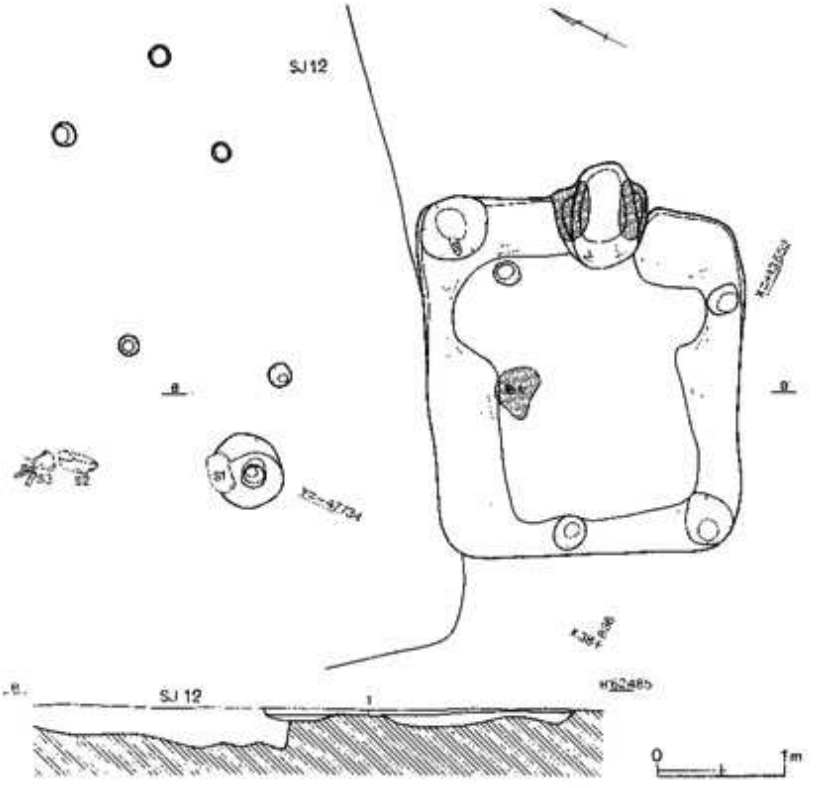
第13号住居跡（第120,121図）

木根及び耕作による撹乱で残存状態は悪く東半部分がかろうじて残った。西半部分の床面はほとんどとんでいると見られる。周辺施設は認められなかったが、第12号住居跡上面に大形の石が露出しており、あるいは壁外施設として認識されるかもしれない。竈前面に粘土が分布する。又北壁からやや離れた第12号住居跡上面に焼土が分布していた。埋土は東半部、竈周辺が比較的残るほかほとんど残存しない。竈は崩れたような状態である。中央部に焼土が分布していた。

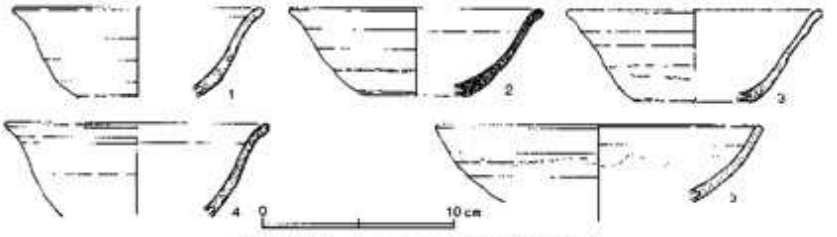
平面形は東壁が僅かに段をなす略方形で、深さ5cm前後と壁は殆ど残っていない。床面は東半部でほとんど露出したような状態であった。それほど固くなく、むしろ柔らかい。柱穴等は検出されていない。貯蔵穴は竈左側、北東隅に略方形でやや深いものが検出された。石が出土している。出土遺物はほとんどない。



第120図　第13号住居跡平面図(1)



第121図　第13号住居跡平面図(2)



第122図　第13号住居跡出土遺物

掘り方ははっきりしないが四壁下をめぐるものと考えられ、西壁下は不明確。

4ヶ所でピット状の掘り込みが認められ、南壁下のものはやや深くしっかりしている。床下土壙は明確に把えられなかったが焼土及び粘土の分布が確認されている。

竈は東壁中央でほとんど崩れたような状態で確認された。焼焼部は略楕円形で外方へ向って緩く立ち上がる。袖に対応する内面（側面）が比較的焼けているが全体にはそれ程でもない。支脚石が燃焼部中央から右側へややずれた位置で検出された。袖はかろうじて基部が残ったもので、東壁を略方形に掘り込んで左右段状をなし、この段状部分の両側に粘土を貼り付け袖とするもので、芯は存在しなかった。

第13号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.2 － 4.8	体部は内湾して立ち上がり、上部は外反しそのまま口唇部に至る。先端部ほぼ平坦。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）	1/5, 須恵坏2，赤褐色，カマド出土。加熱を受ける。
須恵坏	2	13.2 － 4.5	高台部は剥離か？高台部はやや内湾気味に立ち上がり、口唇部はやや肥厚し外反する。外面体部下半に輪積み痕？。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。底面糸きり痕残る。	1/5, 須恵坏3，褐色，竈＋貯蔵穴。
須恵高台坏	3	13.4 6 4.8	高台部は剥離する。体部は外傾して立ち上がり口唇部外反し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。底面糸きり痕残る。	1/4, 須恵坏3，赤褐色，竈出土。外面加熱による剥離目立つ。
須恵高台坏	4	13.8 － 4.9	体部は内湾して立ち上がり、口唇部はやや肥厚し外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。	1/5, 須恵坏1，赤褐色，堀り方出土。外面加熱による剥離顕著。
灰釉椀	5	17.1 － 4.0	体部は内湾して立ち上がりそのまま口唇部にいたる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、体部下半ケズリ？体部上半内外面に施釉（黄灰色）が及ぶ。	1/4, 廃棄？，灰白色，貯蔵穴出土

第18号住居跡（第123図）

溝及び土坑による撹乱が確認されている。周辺に壁外施設は認められなかった。

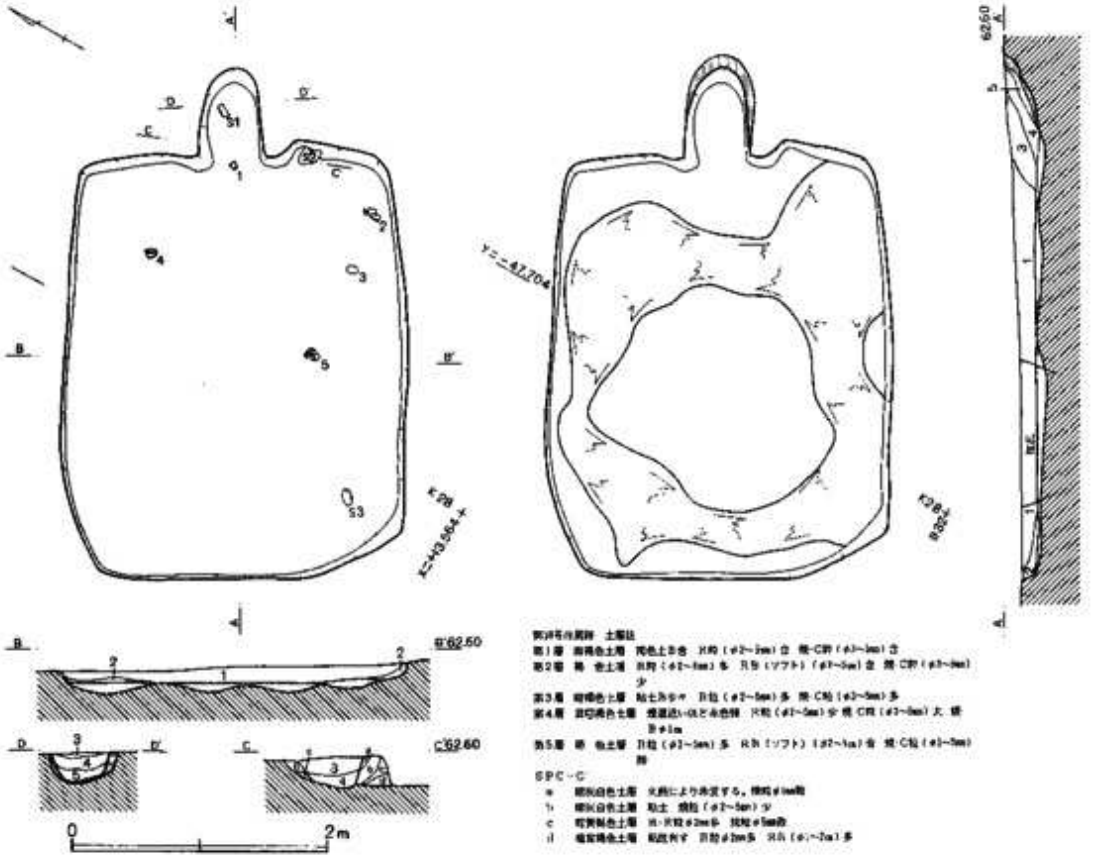
埋土は比較的残っている方で撹乱の影響は少なくほぼ自然推積と考えられる。出土遺物は少量。

平面形はほぼ長方形であるが全体に整わない。床は、柔かく、竈前方が比較的踏み締っていた程度で貼り床等は認められなかった。

壁、溝、柱穴、床下土壙等は検出されなかった。

生活段階の遺物は、若干浮いているが竈周辺のものを除くとほとんどない。

掘り方は、中央部と南東壁の両側を除いた3辺を堀残すもので、埋土は黒色土を主体として平坦にされるが固く締っているわけではない。



第123図　第18号住居跡平面図

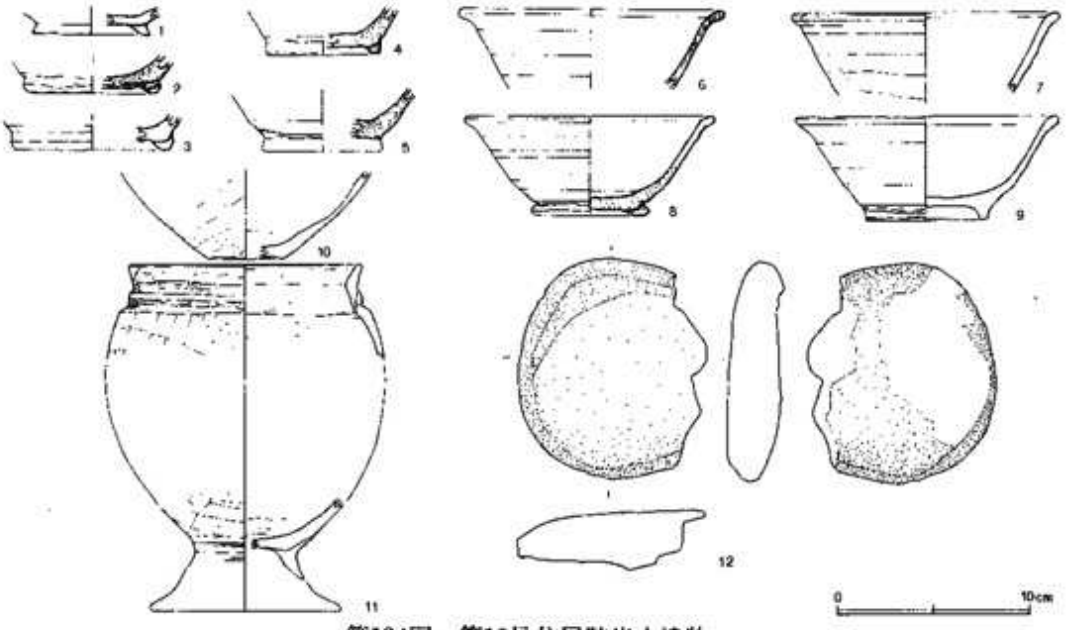
竈は、焼土の赤変範囲及び袖崩壊粘土範囲として容易に認められた。規模は長さ0.81m、幅0.37mである。

燃焼部は軸方向にやや長い略長楕円形状で、外方へ向かって緩く立ち上がる。壁面は比較的よく焼けているが底面はそれほど焼けていない。支脚石が倒れかかった状態で出土している。焚き口部はほぼ平坦面をなし焼土等ほとんどない。

袖はほとんど崩壊していると考えられる。右袖脇に袖石（片岩？）が出土している。構造は壁を若干掘り込んで粘土を貼り付ける（掘り込み部分に粘土が残る）ものである。

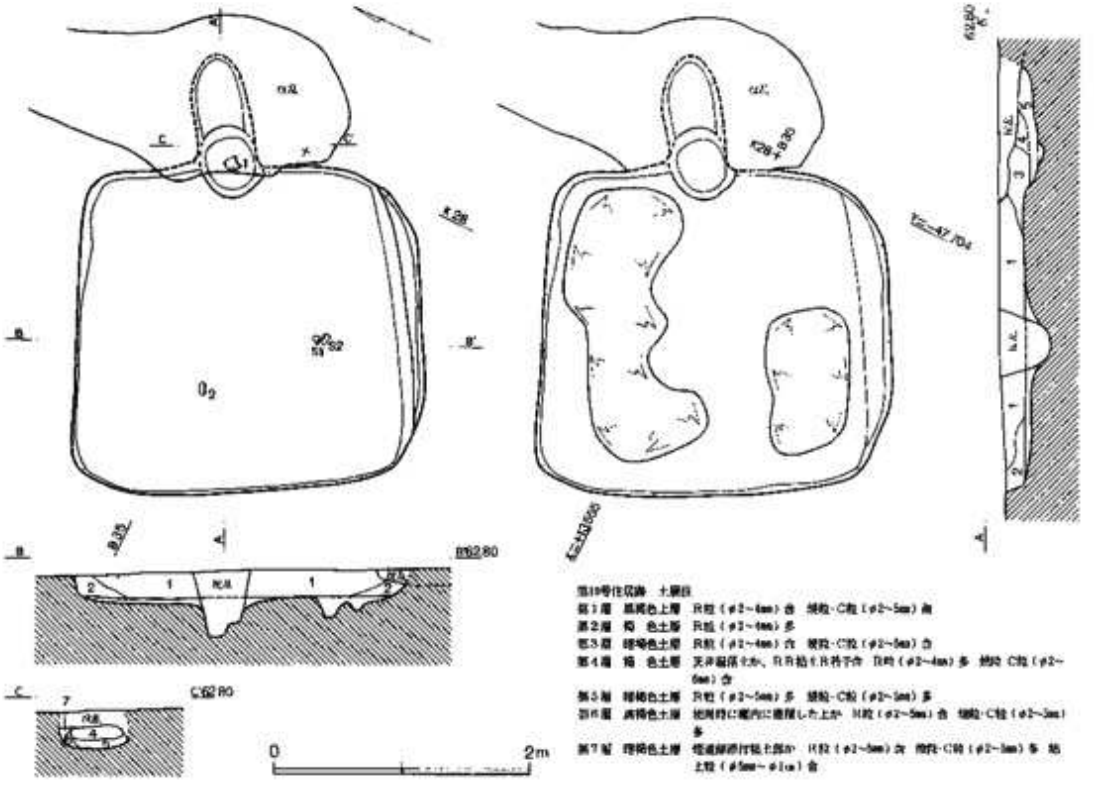
第18号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	－ 6.1 1	高台部は小形で低く、外開きである。接地面平坦。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/4.須恵坏2′，灰白色，風化により摩滅顕著。
須恵高台坏	2	6 － 1.6	高台部は低くやや広、体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ，外面工具ナデ。	1/4.須恵坏2，淡褐色，摩滅顕著。



第124図　第18号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	3	－ 8 1.6	高台部は低く巾広いでほぼ直立する。接地面は湾曲する。体部への移行は指頭による稜をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）	1/5，須恵坏２，黒灰色，風化による摩滅顕著。
須恵高台坏	4	－ 6 2.3	高台部は小形で低くほぼ直立する。接地面ほぼ平坦であるが中央僅かに凹む。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）、底面糸きり痕残る。	1/5，須恵坏２，赤褐色、灰褐色，摩滅顕著
須恵高台坏	5	－ 5.5 2.2	高台部は剥離する。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）、底面糸きり痕残る。	1/3，須恵坏１，黒色。
須恵高台付椀	6	14.0 － 4.2	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）	1/5，須恵坏１，灰白色，風化により摩滅顕著。
須恵高台坏	7	14 － 4.4	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は僅かに肥厚し外反する。口唇部内面摩滅顕著。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）	1/4，須恵坏２，黒褐色，摩滅顕著。
須恵高台坏	8	13.1 5.6 5.2	高台部は低く小形である。接地面は外ソギ状。体部は内湾して立ち上がり、口唇部僅かに外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。外面指頭ナデ？高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、外面よく密着していない。底面糸きり痕残る。	1/4，須恵坏２，赤褐色。
須恵高台坏	9	13.8 5.8 5.4	高台部は小形で低くほぼ直立する。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに肥厚し外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面巾狭工具によるナデ。比較的密着している。	70%，須恵坏３，灰褐色，№７＋堀り方。外面炭素付着。
甕底部	10	－ 3.9 4.5	底部はほぼ平坦でやや厚い。胴部は外傾して立ち上がる。	底面未調整、外周部は横箆ケズリ。胴部外面斜箆ケズリ。	約1/2，甕１，赤褐色、淡褐色，加熱による剥離顕著。
台付甕	11	12.2 － 18	胴部は張りをもち明瞭な段をなして口縁部へ移行する。口縁部は内傾して立ち上がり中位で外傾して開く。口唇部丸く収まる。内面屈曲部、頸部稜をなす。脚部はやや大形で大きく開く？	口縁部ヨコナデ（→）後、外面中位及び頸部巾狭工具によるナデ（→）。上胴部外面横、斜ケズリ（←←↓）以下縦ケズリ？内面ヨコナデ上部指頭押圧、ナデ。脚部貼付け後回転？ヨコナデ（←）	30%，甕１，褐色、黒褐色。赤褐色，№４，床下。上下は接合しないが同一個体。加熱により剥離顕著。



第125図　第19号住居跡平面図

第19号住居跡（第125図）

竈付近～南壁は耕作ないし開墾による、北壁～西壁は耕作及び風倒木による攪乱が顕著である。上層からピットが切り込まれている確認段階では竈の位置は全く判らなかった。

壁外施設については確認できなかった。

埋土は比較的単純な自然推積とみられる。

南壁上部は攪乱が及び壁は不安定であるが、下層で壁の立ち上がりが確認されている。出土遺物は少量で埋土中から出土している。

平面形は西壁がやや長い台形状をなし隅部は丸味をもつ。

床は明確ではなく全体に柔らかく、貼り床等は認められなかった。

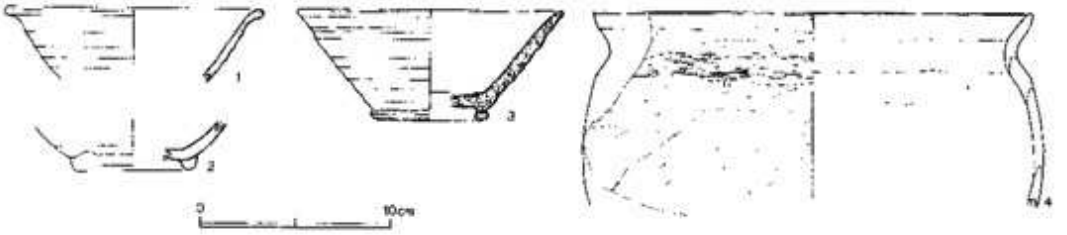
柱穴、壁溝、貯蔵穴等の施設は認められなかった。生活段階に伴う遺物は竈内のもののみである。

掘り方は、壁直下を若干残して、四周を窪めるものと考えられるが、竈右及び北西隅はやや浅くなる。全体に攪乱のためかはっきりしない。

床下土坑は検出されなかった。

竈上部は攪乱が顕著であるが、下部は比較的よく残っていた。

竈の形態は他の住居跡と若干相違しており、幅広の煙道部が外方へ向かってのびるものである。



第126図　第19号住居跡出土遺物

燃焼部は略方形で若干窪み比較的焼けている。煙道部は外方へ向かって緩く立ち上がり、幅は燃焼部とほぼ同じで、側面はやや焼けている。煙出し部は直立気味に立ち上がるが上部は撹乱により不明瞭である。袖は完全に崩壊している。焚口部分はほぼ平坦で、狭い範囲である。(掘り方との関係は不明確である。

規模は長さ1.09m、幅0.41mで竈軸は住居跡主軸とやや異なっておりN－55.4°－Eである。

第19号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.6 ‥ 3.8	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し外反して開く。器壁薄い。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）。	1/8，須恵坏1，灰白色，摩滅顕著。
須恵高台坏	2	－ 6 2.3	高台部は低くほぼ直立しやや幅広。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/3，須恵坏2，黄褐色，摩滅顕著。
須恵高台坏	3	14 5.2 5.8	高台部は小形で低くやや外開きである。接地面外ソギ状で中央部凹む。体部は外傾して立ち上がり（直線的）そのまま口唇部に至る。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面丁寧で平滑、外面口唇下半垣面を作り出す。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/5，須恵坏2'，灰白色。
甕	4	23 － 10	胴部は張りをもち微かな段をなして口縁部に移行する。口縁部は中位で屈曲して内湾気味に開く。口唇部丸く収まる。	口縁部ヨコナデ（←）で内面丁寧、外面指頭押圧、工具ナデ加わる。胴部外面横、斜筋ケズリ（→←↓）以下斜筋ケズリ（→←）、内面筋ナデで平滑丁寧。	1/5，甕1，淡赤褐色，№1，外面帯状に炭素付着。

註1　図示したもの以外に土師器甕口縁部13、須恵坏口縁部6、底部1、体部1、須恵甕体部2点が出土している。

註2　土師器甕の胎土は以下のとおりである。

土師器甕1、c目立つ　細

土師器甕1'　1に近似、d目立つ

土師器甕2　1に近似、a、f目立つ　粗

土師器甕3　a－d　e目立つ　細粗大景礫

註3　各器種と胎土の対応関係は以下のとおりである。

甕1（口縁部13）　須恵坏1（口縁部4、体部1）　須恵坏2（口縁部4、底部1）　須恵坏2'（口縁部1）

須恵甕1（体部1）　須恵甕2'（体部1）

註4　第2群の他の住居跡において図示したもの以外の各器種と胎土との対応関係は以下のとおりである。

第11号住居跡　甕1（口縁部22）　須恵坏1（口縁部1、底部1）　須恵坏2（底部1）　羽釜

第13号住居跡　甕1（口縁部17、底部1）　甕2'（体部1）　須恵坏1（口縁部1）　須恵坏2（口縁部3）

第18号住居跡　甕1（口縁部6、底部1、体部40）　甕3（口縁部1）　須恵坏1（口縁部5、底部2）　須恵坏2（口縁部2、底部2）　須恵坏2'（底部1）　須恵坏3（底部1）　須恵鉢2（口縁部1、体部1）

第20号住居跡　甕1（口縁部1、底部3、体部30）　須恵坏1（体部1）　須恵坏1'（口縁部1）　須恵坏2'（体部1）　土師坏1（口縁部1）

第21号住居跡　甕1（口縁部2、体部4）　須恵坏2'（体部1）

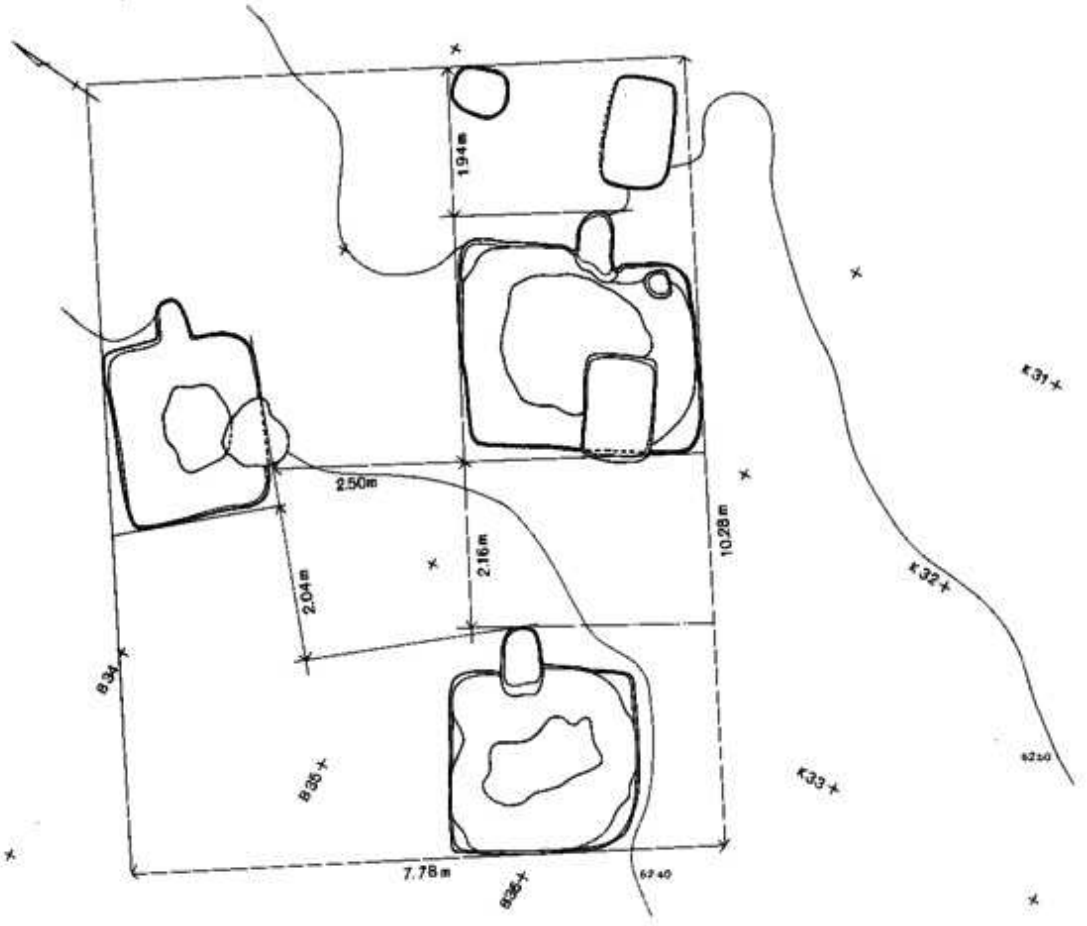
第22号住居跡　甕1（口縁部2、底部1、体部17）　須恵坏1（口縁部2、　体部1）　須恵坏2（口縁部1）　須恵坏2'（体部1）　羽釜1（体部1）

第24号住居跡　甕1（底部1、体部6）　須恵坏2（口縁部1、底部1）

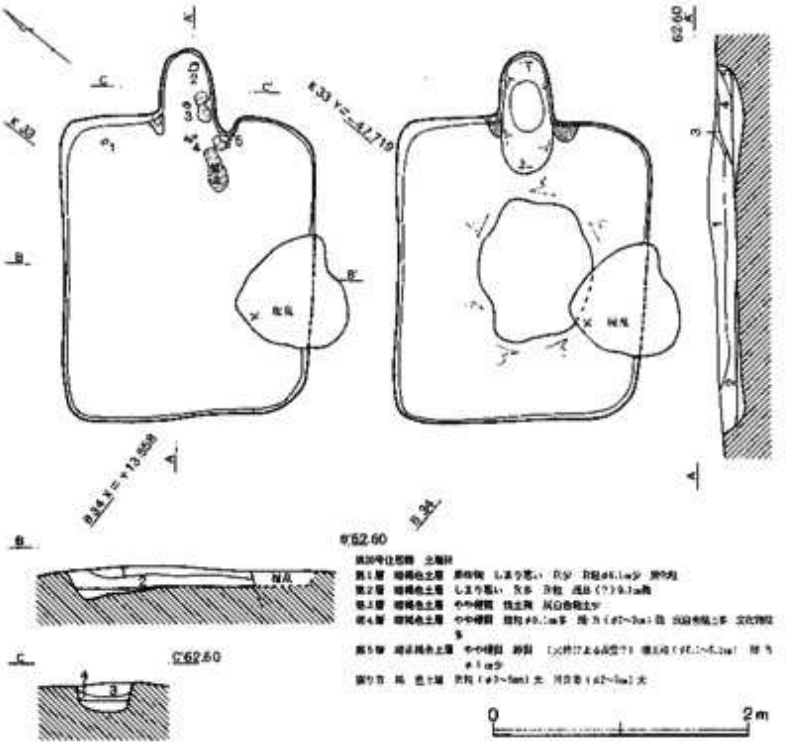
第27号住居跡　甕1（口縁部8、胴部43）　甕1'（口縁部1、胴部9）　甕2（底部3）　須恵坏1（口縁部1）　須恵坏2（口縁部3、底部1）　須恵坏2'（体部1）

第28号住居跡　甕1（口縁部3、体部7）　甕1'（体部4）　甕2（体部1）　須恵坏1（口縁部4、体部7）　須恵坏2（口縁部10）　須恵坏2'（体部1）　羽釜6（体部1）

第29号住居跡　甕1（口縁部2、体部4）　甕1'（口縁部1、体部4）　土師坏1（口縁部1）　須恵坏2（口縁部5、体部3）　須恵甕1（体部2）　須恵甕3（体部1）　須恵甕4（体部2）



第127図　第26号住居跡群配置図



第128図　第20号住居跡平面図

第20号住居跡（第128図）

小形の方形の黒色土範囲として確認され、南壁中央は土坑に切られている。

住居跡周辺部は暗褐色土が広く分布していたが、住居外施設として明確な遺構は認められない。

埋土は浅いが比較的よく残っており自然推積と判断される。竈前方に袖の流出粘土が分布し、右側は塊状をなす。出土遺物は大部分が埋土中からの出土。

平面形は小形方形で隅部は丸味をもつ。竈の付く壁は、竈部分でわずかに段状をなしずれる。

床面は全体に不明瞭で柔かい、踏み締まり、貼り床等は存在しない。柱穴、壁溝等は認められなかった。竈内の遺物は浮いた状態で出土している。

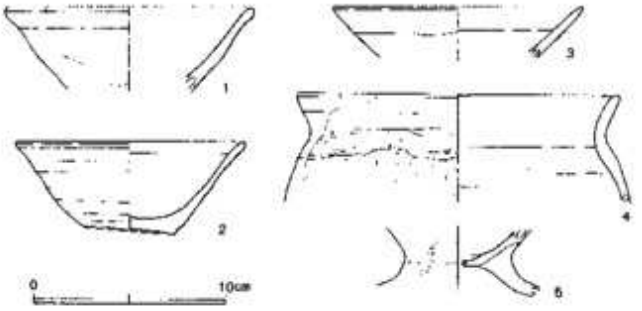
掘り方は、中央部を残して四辺を掘り窪めるもので、掘り込みは西壁下がやや深い他は概して浅い。竈燃焼部下はやや深めに掘り込まれている。

竈は焼土及び流出粘土の範囲として明確に確認された。規模は長さ0.95m、幅0.44mである。

燃焼部は略楕円状で、側面、底面ともそれ程焼けていない。

竈掘り方は比較的深く楕円状に掘り込まれ（燃焼面ほぼ平坦である）ほとんど焼けていない。

袖はほとんど崩壊しており（左袖は完全に崩壊。）、流出粘土が竈前面に分布する。



第129図　第20号住居跡出土遺物

第20号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13 － 4.3	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は僅かに外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1/5,須恵坏1′，黒色、赤褐色,内面加熱により剥離顕著。
須恵坏	2	12.0 4.8 4.7	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。下部に腰をもち、口唇部下ややくぼみ、口唇の外反を強調する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面丁寧で平滑、外面下半若干のナデ加わる。底面糸きり痕残る。	3/4,須恵坏2，赤褐色,No.2
坏	3	13.0 － 2.6	体部は直線的に開く、口唇部やや尖り気味。	内外面ヨコナデ（→）、外面下半箆ケズリ？	1/10,坏1,黒褐色，.
甕	4	16.8 － 5.7	張りのある胴部から微かな段をなし口縁部に移行する。口縁部はやや下位で屈曲し外傾して開く。口唇部丸く収まる。	口縁部ヨコナデ（→）内面丁寧、外面指頭押圧加わる。胴部外面横箆ケズリ（→←）内面箆ナデで丁寧。	1/10,甕1,赤褐色，.
脚部	5	－ － 3.5	脚部は外反して大きく開く。底部は極薄い。	脚部内外面胴部下端まで回転ヨコナデか（右回転）？	約1/2,甕1,赤褐色,No.5＋6

第21号住居跡（第130図）

竈付近から東側は焼土、土器片を含む黒色土が分布し小ピットの存在も認められたが、明確な壁外施設は検出できなかった。西壁は第11号土壙によって切られている。

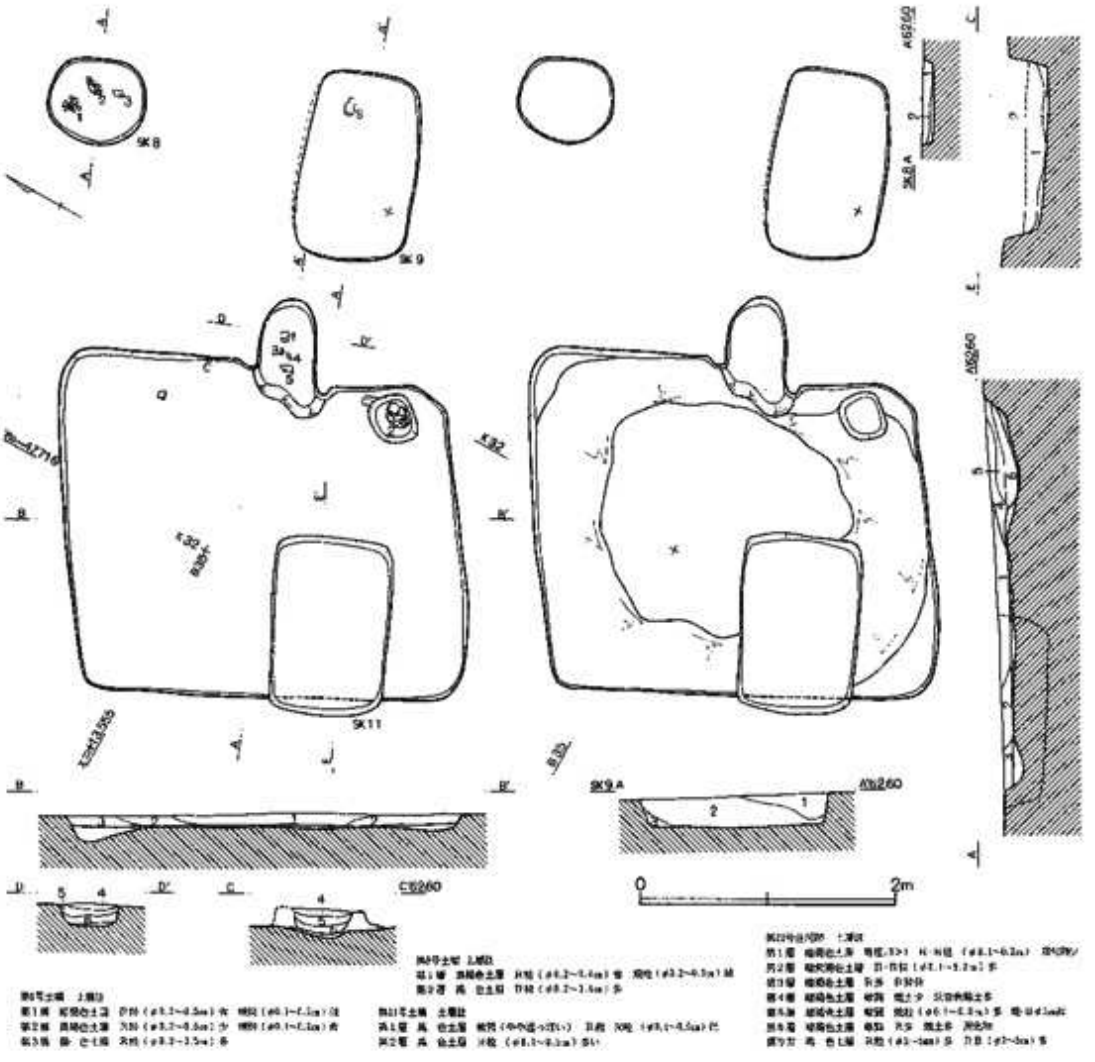
埋土は浅く黒色土（軟質、砂質）を主体とするもので比較的よく残った部分からみると自然推積。出土遺物は埋土中からのものが大部分である。

平面形は横長の平行四辺形状で東壁は若干の段差をもつ。床は第20、22号住居跡に比較するとやや不明確で、周辺部が黒色土混じりで柔らかい。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は竈右側、略方形でやや浅く須恵器が浮いた状態で出土した。

掘り方は隅部と中央部及び竈付近を堀り残し、四周を掘り窪めるもので、隅部はやや深い。床下土壙は不明瞭で判然としない。

壁外ピットは北東隅に位置し略円形状で黒色土を充塡する。竈北東方向にある第8号土壙は伴うものとみられる。

竈は東壁やや南寄りに付設され明確な焼土赤変範囲として確認され、袖の崩壊粘土の分布が認められた。燃焼部は略方形？で底面、側面ともそれ程焼けていない。遺物は浮いた状態で出土している。掻き出し部は緩く傾斜し焼土等僅かであまり焼けていない。袖はほとんど崩壊していると考え

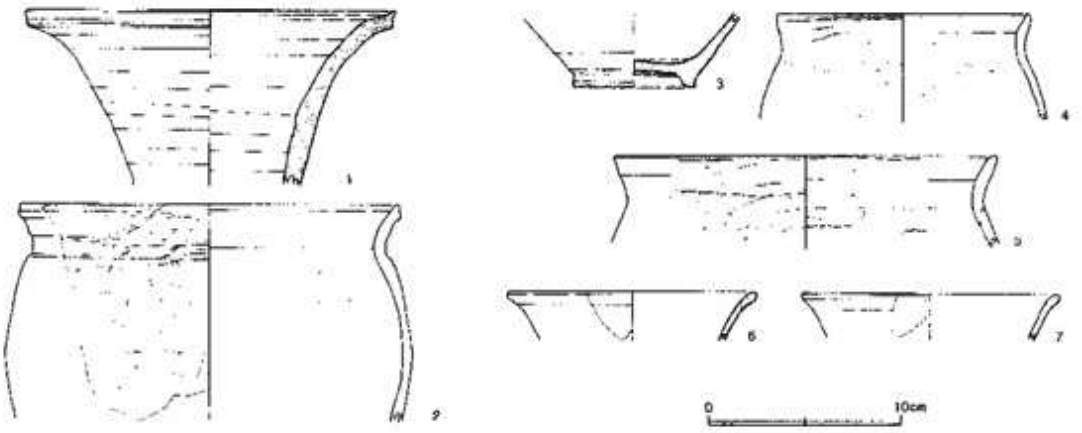


第130図　第21号住居跡、第８、９、11号土壙平面図

られる。粘土貼り付けである。掘り方は手前に向って深くなるが、燃焼面との関係は不明である。第11、12号土壙は近・現代のものと判断され本住居跡には伴わない。

第21号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵壺	1	19 - 9.1	頸部は外傾して立ち上がり、外反してそのまま口縁部に至る。口縁部直立し凸状呈す。全体に歪みが顕著である。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	90%，須恵質１，灰白色，№２，外面一部炭素付着。
甕	2	19.6 - 11.2	胴部は張りをもち、明瞭な段をなして口縁部へ移行する。口縁部は僅かに外傾し中位で屈折して立ち上がる。口縁部直立し外面沈線？内面滑らかに屈曲する。	口縁部ヨコナデ（→）、外面粗く未調整部分の残る指頭ナデ、下半巾狭工具によるナデ（→）で段を作り出す。胴部外面横位ケズリ（←―↓）以下斜位ケズリ（←）頸部指頭ナデ加わる。内面位ナデ、頸部指頭押圧、丁寧平滑。	1/5，要１，赤褐色，№５



第131図　第21号住居跡、第８、９、11号土壙出土遺物

第8号土壙（第130図）

第21号住居跡の東側1.94mに位置し、比較的広範囲にわたる黒色土中に確認された土壙である。

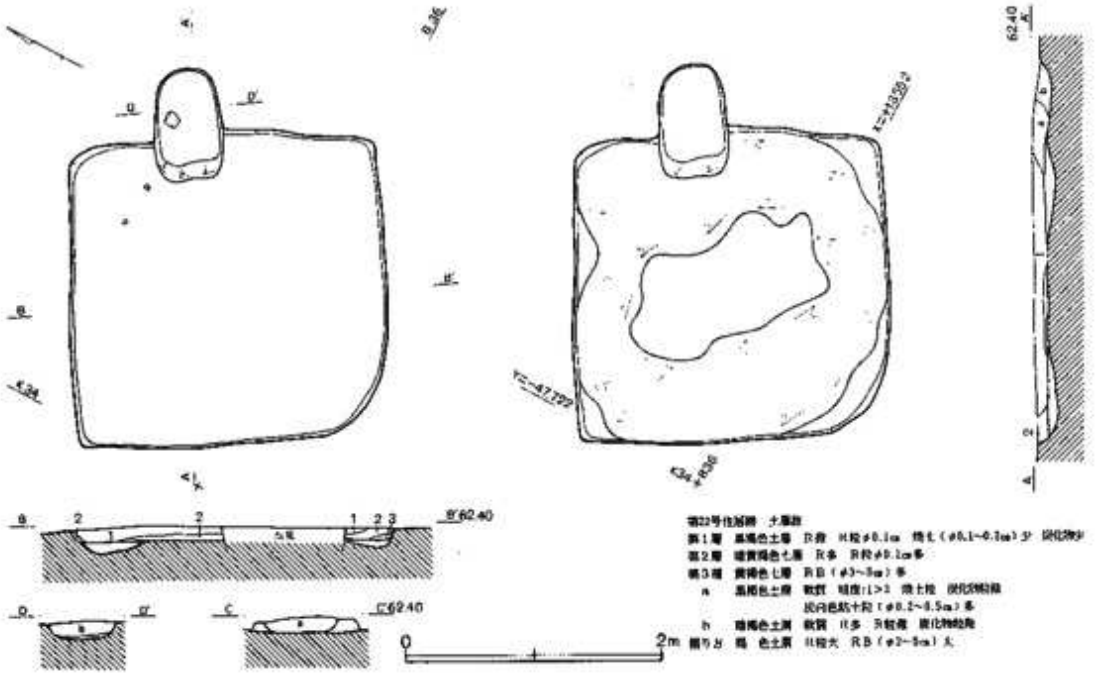
平面形は楕円形状を呈し、掘り込みは比較的しっかりしている。

規模は直径0.76m、短径0.66m、深さ0.09mを測る。

遺物は何れも浮いた状態で出土している。

第8,9,11号土壙出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	3	－ 5.8 3.6	高台部ほぼ直立し幅広く、接地面ほぼ平坦で内側沈線状に凹む。体部は下端で沈線による稜？をなし、外傾して開く。	内外面回転横ナデ（右回転）高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ中央糸きり痕残り、内面工具ナデ。外面下端沈線巡る。	2/3,須恵坏５,灰白色,No. 1
台付甕	4	13.2 － 5.5	やや張りのある胴部からそのまま口縁部に移行する。下半はほぼ直立し中位で外半して小さく開き、内面稜をなす。口唇部直立し先端部平坦。	胴部外面上部横斜め箆ケズリ（←←？）、内面箆ナデ（←？？）頸部指頭押圧、口縁部内外面横ナデ、外面指頭押圧加わる、頸部指頭ナデないしケズリ（←←）	1/2,甕１,暗褐色,No.1＋2,内外面ともススが付着
台付甕	5	19.9 － 4.5	胴部は張りを持ち口縁部は外反してやや小さく開く、口唇部は外そぎ状で先端部丸く納まる。	胴部外面上部横箆ケズリ（←←↓）、内面箆ナデおよび若干の指頭ナデ、口縁部横ナデ(→)	1/10,甕１,赤褐色,No.3
須恵高台坏	6	13 2.5 －	体部は外傾して開き外反してそのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）。	10%,須恵坏7,黒褐色／黒色.
須恵高台坏	7	13.5 － 2.3	体部は外傾して立ち上がり？外反してそのまま僅かに肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1/20,須恵坏５,褐色／暗褐色.



第132図　第22号住居跡平面図

第22号住居跡（第132図）

西壁～中央部にかけて現代の土壙によって切られている。北～西の壁外に黒色土が分布するが壁外施設の有無は判然としなかった。

埋土は黒色土を主体とするもので浅く自然推積とみられる。出土遺物は大半が埋土中から出土している。

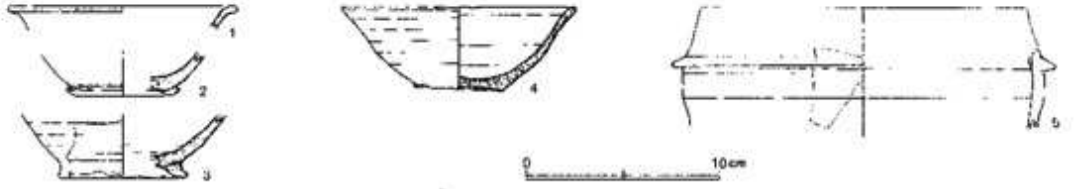
平面形は小形の略方形で竈壁は僅かな段差をもつ。床面は全体に柔らかく不明瞭である。柱穴、壁溝等は検出されなかった。

掘り方は竈前面及び隅部（北隅を除く）をわずかに掘り残し、四周を掘り窪めるもので東側の隅部２ケ所はやや深い。北壁下西半は溝状に窪んでいるが明確に壁溝と認められなかった。

竈は東壁北寄りに敷設され、焼土及び粘土の分布は少ない。竈施設はほとんど残存しておらず完全に崩壊したとみられる。袖は全く残っていない。須恵坏が浮いた状態で出土した。

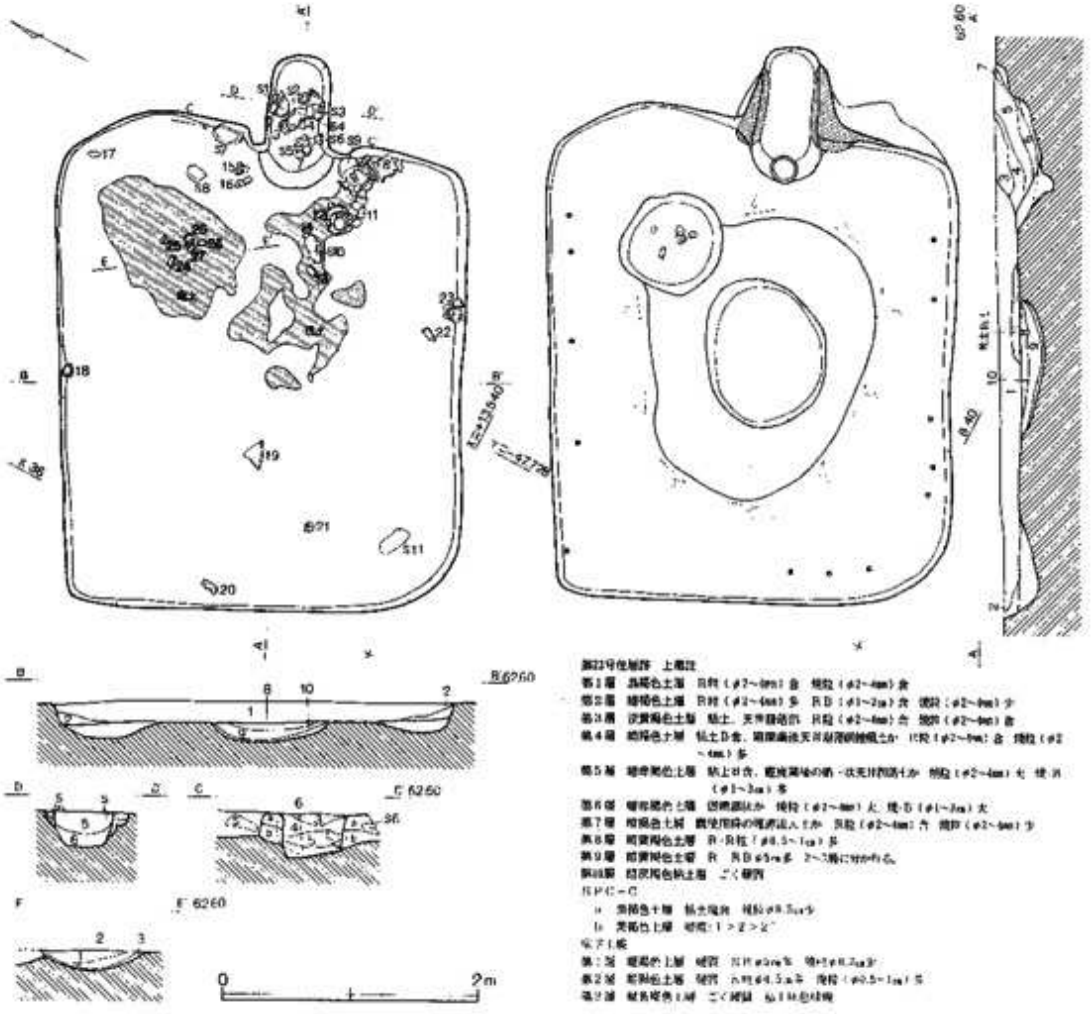
第22号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	12 — 13	口唇部は肥厚して屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/10,須恵坏２,赤褐色、黒褐色,摩滅顕著
須恵高台坏	2	— 5 2.6	高台部は低くやや幅広で外開きである。接地面は外ソギ状である。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ	1/5,須恵坏１,灰白色,摩滅顕著
須恵高台坏	3	— 6.4 3.3	高台部はほぼ直立し、接地面は平坦で切り離しの痕跡が残る。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面丁寧、底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面撫でナデ。	約2/3,須恵坏２'.赤褐色、灰褐色、床下出土

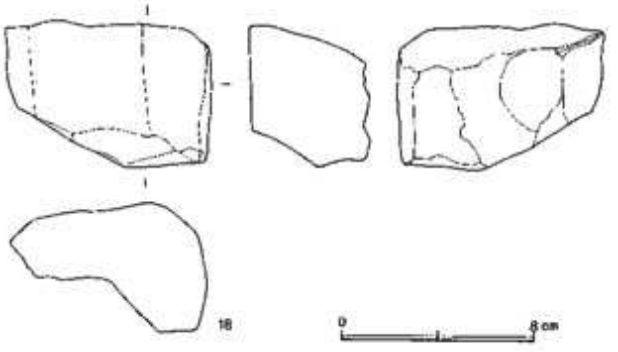


第133図　第22号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	4	11.2 4.7 4.3	底部は平底で、体部は内湾して立ち上がる、口縁部下で若干外反しそのまま開く。口縁部一ヶ所ケズリにより片口状をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面は平滑で平滑、底面糸きり痕残る。内面口縁部下に刷毛目の痕跡？あり。	95%，須恵坏1，灰白色，No 1。内面の大部分及び外面一部炭化物付着。
羽釜？	5	－ － －	全体に小形である。鍔断面は下向きの三角形状。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/20，須恵器（土師器に近似），黒色（淡褐色）黒色。



第134図　第23号住居跡平面図



第135図　第23号住居跡出土遺物

第23号住居跡（第124図）

開墾及び風倒木による攪乱、小ピットが住居内及び周辺に確認されたが、保存状態は比較的良好である。壁外施設は攪乱により明確でなかった。

埋土は黒色土を主体とするもので自然推積と考えられる。竈前面は流出粘土が分布する。出土遺物は竈内及びその右側に集中し浮いた状態である。

平面形は竈壁が斜行する台形状乃至長方形で全体に歪む。床ははっきりしなかったが竈周辺が比較的固く他は全体に柔らかい。柱穴状のピットが検出されたがいずれも近現代の攪乱と判断される。床下土壙、貯蔵穴については貼り床のため床直上で確認していない。竈内の出土遺物は伴うと考えられるが他は浮いている。

掘り方は中央部を堀り残し四周を堀り窪めるもので、隅部は若干深い。

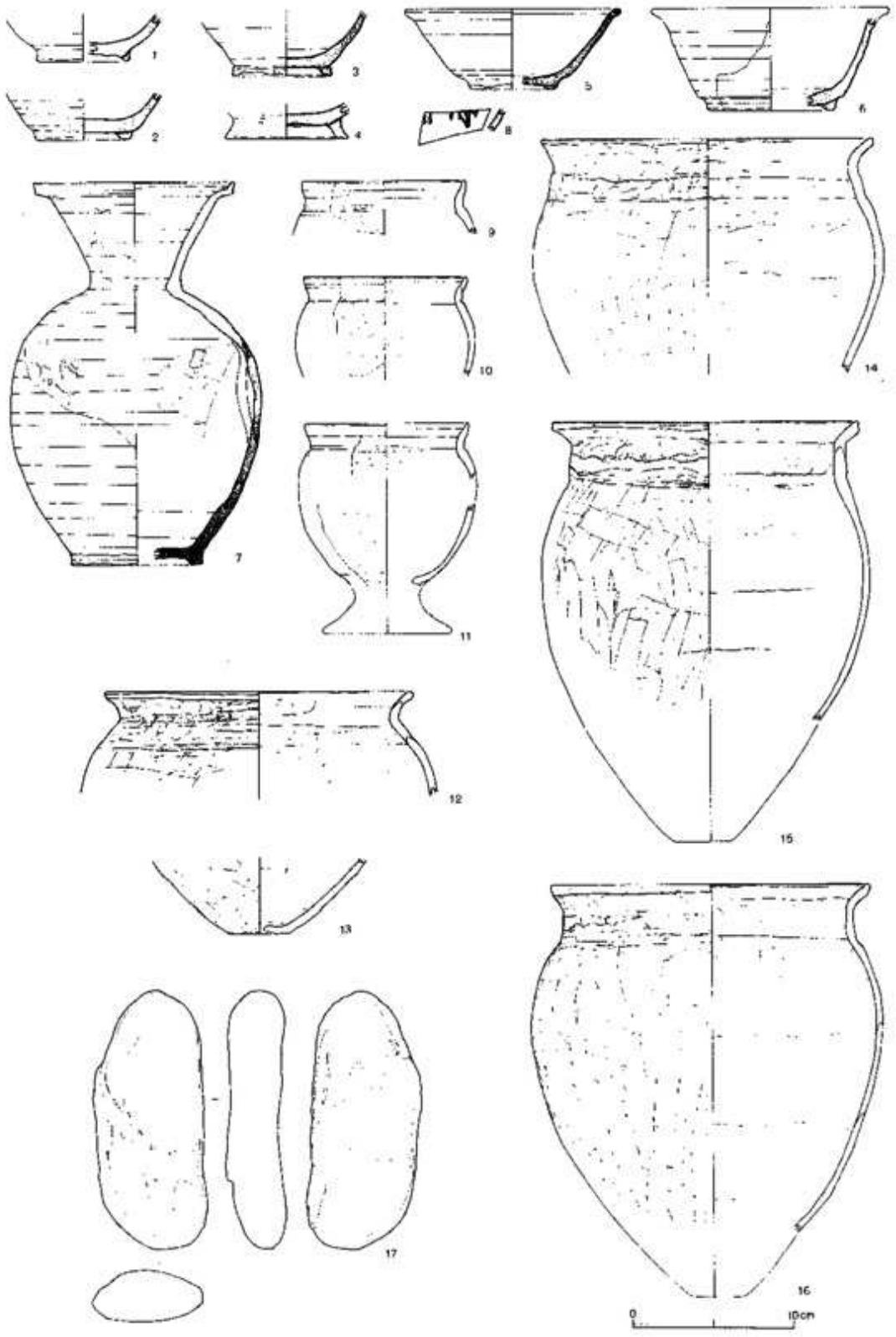
壁際は材の痕跡を確認するため断割りを実施したが木根の可能性もあり確証はない（位置のみ記してあるがその間隔は比較的一定している）。床下土壙は中央部と竈左前方に存在する。前者は下層に粘土が貼り付けられていた。後者は土壙→掘り方の順で構築され少量の遺物が出土する。

竈は焼土赤変範囲及び灰褐色粘土の分布範囲として明確に認められた。燃焼部は略長方形状で、側面～底面は比較的焼けている方である。底面は湾曲し外方へ向かって緩く立ち上がる。焚き口部に小ピットが存在する。袖は片岩を芯にした粘土貼り付けである。天井部の構造は不明である。

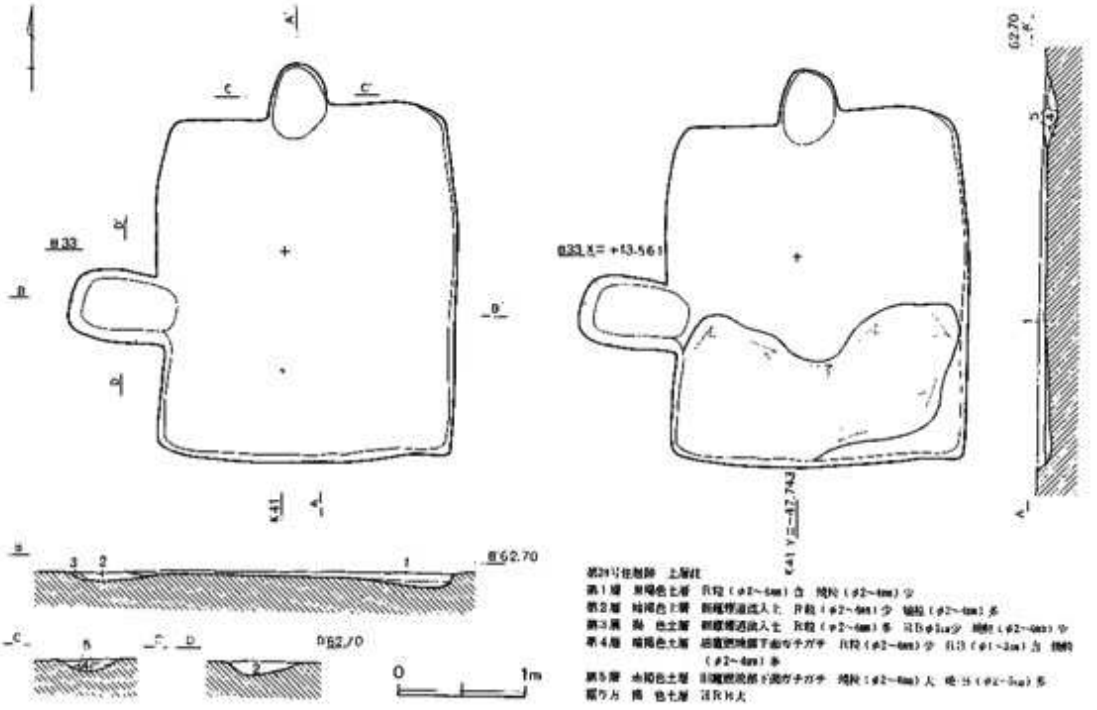
第23号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	－ 5.2 2.5	高台部ほぼ直立し細い、接地面外ソギ状。体部は大きく内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/3、須恵坏1、赤褐色、№21。加熱により内外面剥離顕著。
須恵高台坏	2	－ 5 2.9	高台部ほぼ直立し低くやや雑なつくり。体部は下端で緩い稜をなし内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面工具ナデか？接地面未調整。	30%、須恵器1、黒色（淡褐色）黒褐色、№2。風化による摩滅顕著。
須恵高台坏	3	－ 6 3.4	高台部はやや外開きで低く中狭い、体部との界は沈線状の段をもつ。接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下端で稜をなし、内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面丁寧で平滑、工具使用か？外面下部指頭によるナデ加わる。高台部粘付け後内面全面指頭ナデ、外面工具によるか？	50%、須恵坏2、赤褐色、№3。外面黒班あり。
須恵高台付椀	4	－ 7.5 1.7	高台部は外開きで高い。接地面平坦で中央部凹む。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、工具ナデ。	20%、須恵坏2、暗緑、黒色（淡褐色）黒色、№18

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	5	13.5 5 5	高台部は小形で低くほぼ直立する。底面外ソギ状。体部は内湾気味に立上り下位に腰をもつ。口唇部やや肥厚し僅かに外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）内面丁寧、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。外面密着していない。	1/4,須恵坏２,赤褐色,№７＋竈。摩滅顕著。
須恵高台付椀	6	15 7.6 5.5	高台部は小形で低くほぼ直立する。接地面ほぼ平坦。体部は下端で緩い段？をなし内湾して立ち上がる。上端部外反する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/5,須恵坏１,灰白／灰黒色、灰白色.
須恵長頸壺	7	12.5 6.6 23.5	高台部はほぼ直立し低い、接地面はほぼ平坦で未調整。体部は倒卵形で胴部はほとんど張りをもたない。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部は段をなし口唇部は直立し尖り気味。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。体部中位以下は指頭によるナデ加わる。	60%,須恵坏１,灰色,№４＋７＋２２＋２３
須恵坏	8	― ― ―	体部小破片である。	内外面とも回転横ナデ（左回転か？）。体部外面横位墨書あり。	1/20,白細多,灰色.
台付甕	9	10.2 ・ 3.3	張りのある胴部から段をなし、口縁部はほぼ直立し中位でやや外傾して開く。口唇部やや尖り気味。	胴部外面横、斜め篦ケズリ（←）内面篦ナデ。口縁部ヨコナデ？外面下半工具ナデ（→）	1/10,甕１,赤褐色.
台付甕	10	10.2 ― 4.1	上部に張りをもつ胴部から緩い段をなし、口縁部はほぼ直立し中位で僅かに内湾して立ち上がる。	上胴部横篦ケズリ（←←↓）以下縦篦ケズリ。内面篦ナデ。口縁部ヨコナデ、外面下半工具ナデ。	1/10,甕１,赤褐色,竈出土。
台付甕	11	10.2 ― 13.2	胴部は屍すぼみで、頸部で明瞭な段をなす。口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部は尖り気味。	胴上部横篦ケズリ、以下縦篦ケズリ、内面篦ナデ。脚接合部ヨコナデ。口縁部ヨコナデ、外面下端部棒状工具によるナデ。	1/10,甕１,黒褐色（褐色）黒褐色,竈出土片と接合。口縁部と胴部は接合しないが同一個体。
甕	12	19.1 ― 6.2	張りのある胴部から、微かな段をなしそのまま口縁部に移行する。口縁部は中位で屈曲し外傾して開く。口唇部は丸く収まり、外面直下は緩い段をなす。口縁部外面中位輪積み痕？残る。	胴部外面横篦ケズリ（←←）、内面篦ナデで丁寧平滑。口縁部ヨコナデ後外面上位、下端は工具ナデ、中位指頭押圧、ナデ加わる。内面頸部？指頭押圧加わる。	約1/2,甕１,淡褐色,№２０＋２４－２６。接合しないが同一個体とみられる。
甕	13	― 3.7 4.5	小形の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。	胴部外面斜縦篦ケズリ↓、内面比較的丁寧な篦ナデ。	1/2,甕１,赤褐色,№１８
甕	14	20.6 ― 14.5	最大径を上位にもち張りのある胴部から、頸部で段をなし、口縁部は僅かに内傾して立ち上がり中位で屈折して開く。外面中位部分的に輪積み痕残る。口唇部は丸く収まる。	胴部外面上位横篦ケズリ（←←↓）、以下縦篦ケズリ（↓←？）、内面篦ナデで丁寧平滑、頸部指頭押圧加わる。口縁部ヨコナデ（←？）、外面中位、頸部は工具ナデで上半部指頭押圧、ナデ加わる。	約60%,甕１,淡褐色,№１２＋１５＋１７－竈。摩滅顕著。
甕	15	19 ― 18.8	長胴気味で中位に最大径をもつ胴部から、頸部で緩い段をなし口縁部は僅かに内傾して立ち上がり、上位で屈折して開く。外面輪積み痕残る。口唇部直立し外面稜をもつ。口縁部内面緩い段をなす。	胴部外面上位横斜篦ケズリ（←←↓）で口縁中位及び下位縦篦削り（↑↑・）内面篦ナデ、接合部指頭押圧。口縁部ヨコナデ（→）頸部、屈曲部は工具ナデで中位～上位は指頭ナデ（←？）加わる。内面中位、頸部若干の指頭押圧加わる。	約1/2,甕１,赤褐色,№８＋竈。外面一部黒斑。
甕	16	19.8 ― 21.5	胴部は上位に最大径をもちしりすぼみ。頸部で緩い段をなし、口縁部は僅かに内傾して立ち上がり中位で屈折して開く、外面輪積み痕残る。口唇部は屈折し外面稜をなす。	胴部外面上位横篦ケズリ（→←↓）、以下縦篦ケズリ（↓↓・）。内面篦ナデ（←←↑）。頸部、接合部指頭押圧加わる。口縁部ヨコナデ後外面頸部、中位、口唇部工具ナデで指頭押圧、ナデ加わる。	約80%,甕１,赤褐色,№１０＋竈。内面加熱による剥離顕著。
	17				S９、580g
砥石？	18				S３、1.11Kg



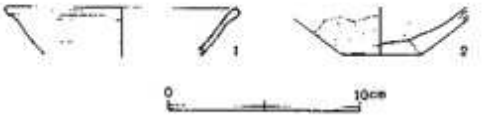
第136図　第23号住居跡出土遺物(2)



第137図　第24号住居跡平面図

第24号住居跡（第137図）

開墾及び溝或いは畠畝による撹乱でほとんど残っていない。かろうじて竈の存在により住居跡と認識された。壁外施設については不明である。



第138図　第24号住居跡出土遺物

埋土は竈を除いてほとんど残っていない。出土遺物はほとんどない。

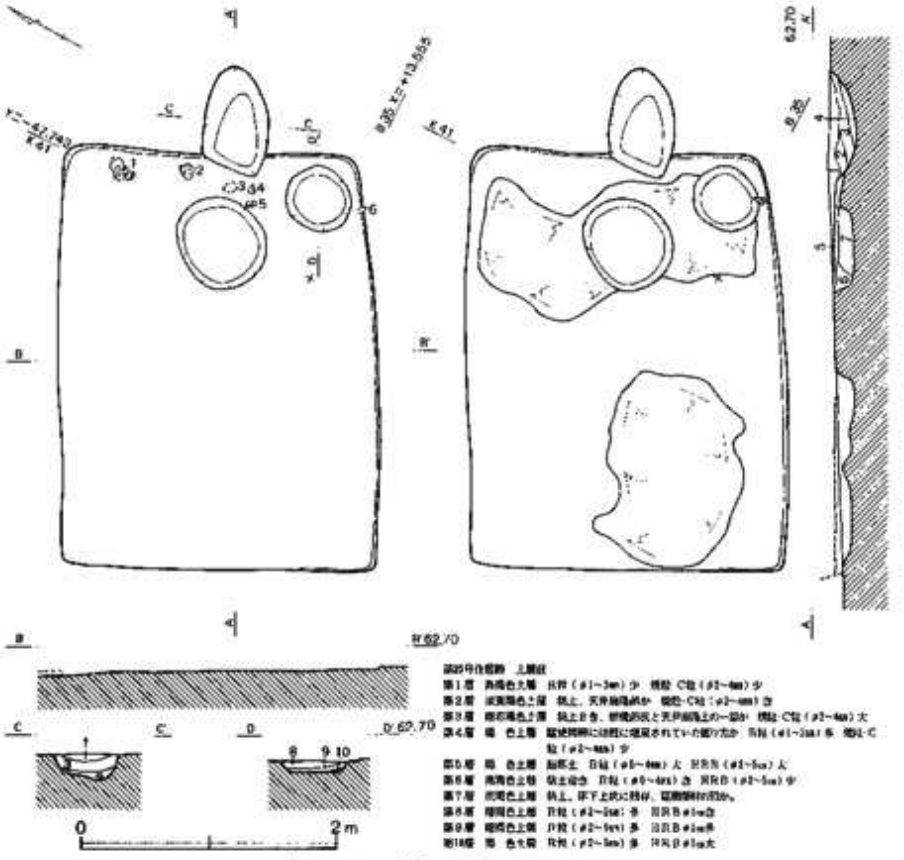
平面形は小形の方形ないし長方形とみられる。床ははっきりしないが北竈前方部分で残存している。竈は北、西壁に敷設され北竈の方がよく焼け締まっている。構築順序は袖の残存がなくわからないが残り具合からすると西→北の順か？

掘り方は撹乱のため不明である。残存部中央はよく踏み締まっているのでローム直上が或いは床面かもしれない。

竈はいずれも燃焼部下面のみ残存し略長方形ないし楕円形状で、西竈は下面をやや掘り窪める。北竈は外方へ向かって緩く傾斜し燃焼面は固く焼き締まっている。

第24号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	12.2 2.6	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚して外反して開く。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/10,須恵坏2,表褐色,焼成頗著
甕	2	4 1.9	底部は小形でやや厚く平底である。	胴部縦位ケズリ（↓→）後底部横ケズリ。内面篦ナデ。	約1/2,甕1,淡褐色。



第139図　第25号住居跡平面図

第25号住居跡（第139図）

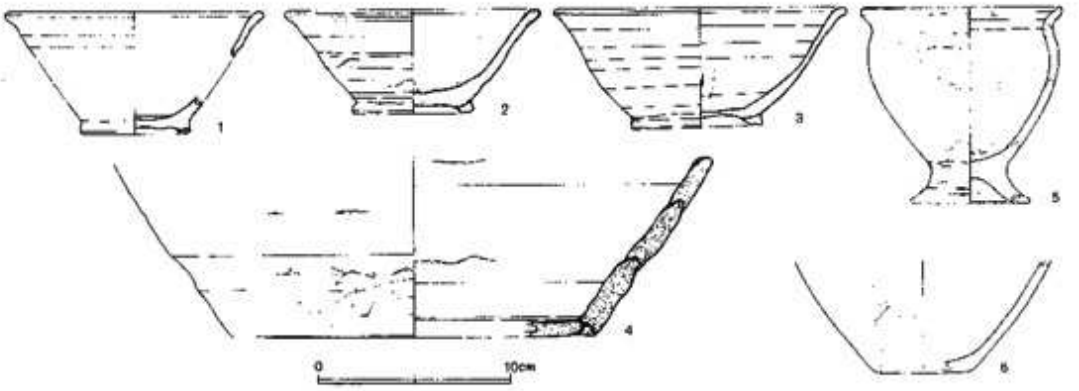
耕作による撹乱により大部分破壊されている。竈付近のみ残存していた。

埋土はほとんど残っておらず部分的に床が露出した状態である。出土遺物は竈周辺のみで大部分浮いた状態。

平面形は略長方形で、北半分のみ床が残り全体に柔らかく固い面はほとんどない。柱穴、壁溝等は検出されなかった。床下土壙ははっきりしないが竈前面に位置する。貼り床は不明。貯蔵穴は竈右側で不明瞭な円形。若干の出土遺物があった。

掘り方は南半部は床がすでにとんでいるが中央を堀り残し、四辺を堀り窪めるものと思われ、竈両脇がやや深い。床下土壙中に多量の粘土が検出された。

竈は撹乱により燃焼部のみ残り、平面形は長方形ないし楕円形。全体によく焼けており深い。袖は全く残っていない。



第140図　第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土遺物

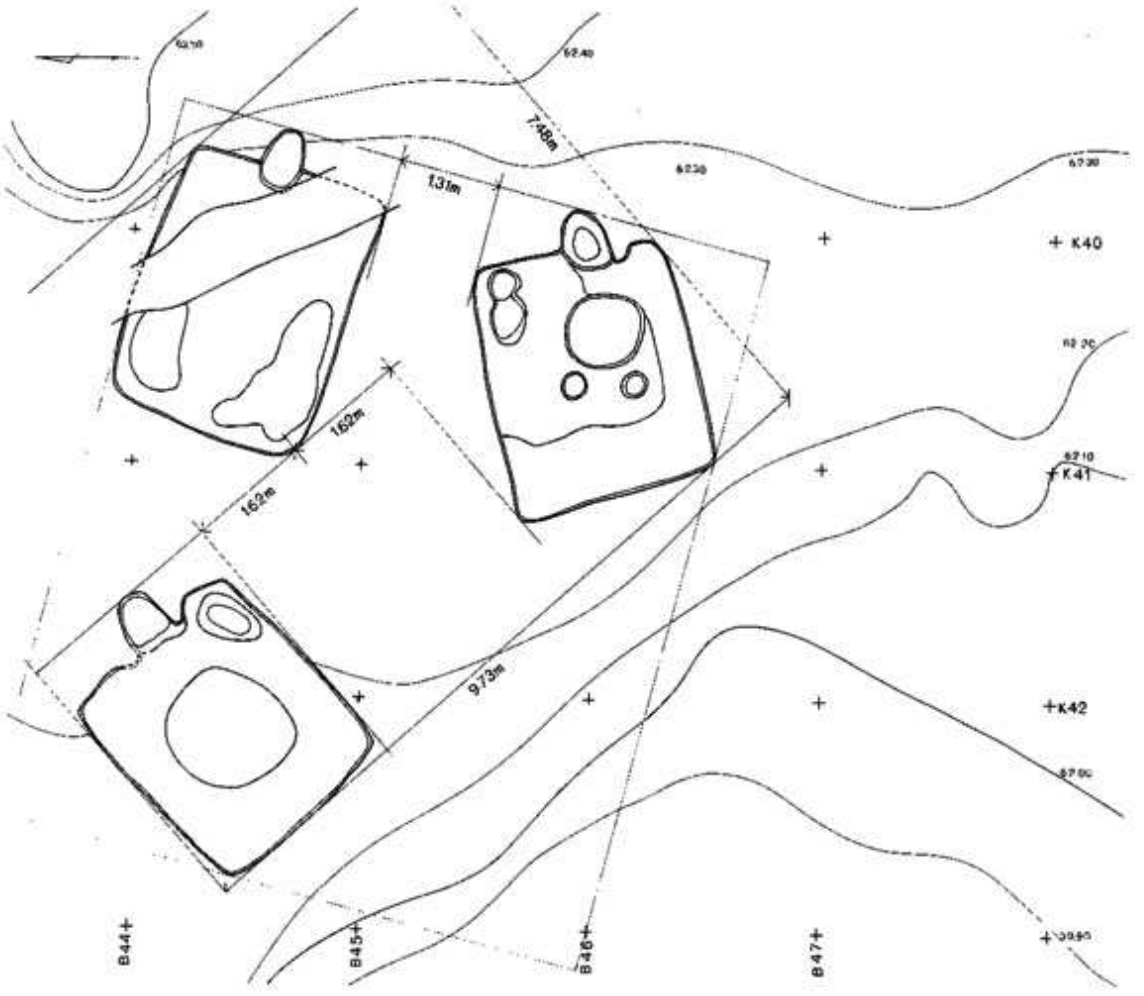
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.6 5.4 6.4	高台部は殆ど剥離するが、残存部によるとほぼ直立し低く小形である。体部は接合しないが内湾して立ち上がるとみられる。口唇部は肥厚し僅かに外反する。	内外面とも回転ヨコナデ。底面糸きり痕残る。	1/10,須恵坏2,赤褐色,加熱による剥離顕著
須恵高台坏	2	13.4 6 5.4	高台部は低くやや幅広で外開き、接地面平坦。体部は内湾して立ち上がり口唇部やや肥厚し外反する、端部は緩い稜をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、底面糸きり痕残る。内面丁寧で平滑。高台部貼付け後内面指頭ナデ。	約1/3,須恵坏1,灰白色,№2。摩滅顕著
須恵高台付椀	3	15.3 6.6 6.2	高台部は低くやや幅広でほぼ直立する。接地面平坦で中央凹む。体部は内湾して立ち上がり、下位に腰をもつ。口唇部屈曲し一部凸状をなす。口唇部内面摩滅する。内面下位に平行する刃物の痕跡あり。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、底面中央糸きり痕残る。内面丁寧で平滑、外面下部指頭ナデ加わる。高台部貼付け後内面指頭ナデ。	90%,須恵坏5（1に近似し凸粒目立つ）,灰白色,№1＋3
須恵甕	4	－ 18.8 9	底部は平坦で、体部は外傾して立ち上がる。外面輪積み痕？残る。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。底面未調整？	1/10,須恵甕1,灰色（赤褐色）灰褐色,№3＋7
台付甕	5	10.5 6 10.1	脚部は外反して開く、下半は欠失する。胴部は尻すぼみで胴部で緩い稜をなし口縁部に移行する。口縁部は内傾して立上り中位で屈曲して開く。口唇部凸状をなす。	口縁部ヨコナデ（→）後外面指頭押圧、胴部外面縦部横箆ケズリ（→）、以下縦箆ケズリ（↓→）、内面箆ナデで平滑。脚部ヨコナデ後接合部工具ナデ。脚部成形後胴部を積み上げる。	約1/3,甕1,暗褐色,№4。外面すす付着。
甕	6	－ 4.8 5.7	底部はやや凸出気味で厚めである。胴部は外傾して立ち上がる。	底部は一定方向の箆ケズリで、胴部は縦乃至斜箆ケズリ（↓）。	1/3,甕1′,暗褐色、赤褐色,№3。内外面とも加熱による剥離顕著。

註1　図示したもの以外に下師器甕底部1、体部25点、須恵杯口縁部5、底部2、体部5点、須恵器甕底部3、胴部3点が出土している。

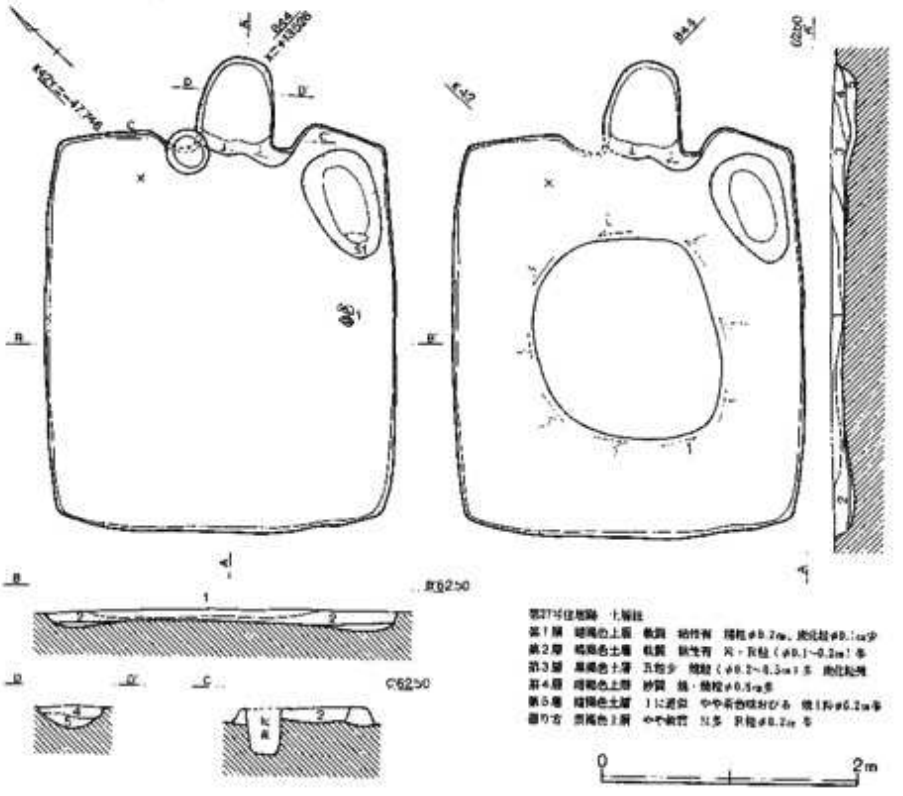
註2　各器種と脚土との対応関係は以下のとおりである。

甕1（底部1、体部20）甕1（体部5）須恵杯1（口縁部1、底部1、体部3）須恵杯（口縁部4、体部2）須恵杯2、（底部1）須恵甕1（底部3、体部4）

註3　須恵甕1　a～f、h少量含む　d目立つ　細部観察無



第141図　第2c住居跡群配置図



第142図　第27号住居跡平面図

第27号住居跡（第142図）

南半は谷にかかっており、谷を切って構築される。壁外施設は不明。竈袖は近現代のピットによって破壊されている。

埋土は黒色土を主体とするもので浅くほとんど残っていない。遺物は少量で埋土中から出土。

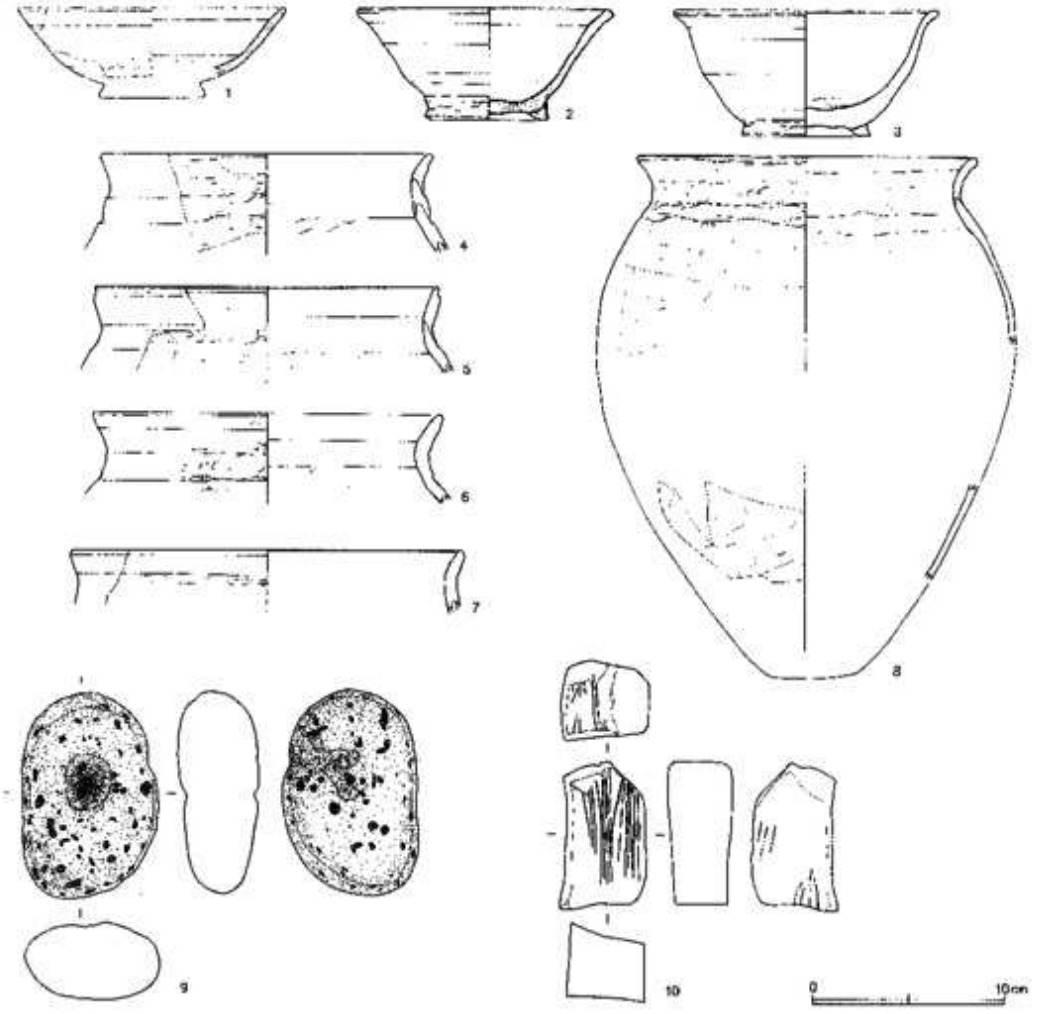
平面形は竈壁がやや湾曲する略方形。床は竈前面がやや固く締まっている他は柔らかく明確でない。貯蔵穴は竈右側に位置し楕円形状呈す。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は中央部を残して四周を掘り下げるもので、隅部がやや深くなる。

竈は東壁ほぼ中央に敷設され、燃焼部は略長方形状で底面は緩く立ち上がる。底面、側面ともそれ程焼けていない。両袖は粘土が多少残っていたがピットによる撹乱で旧状をとどめていない。

第27号住居跡出土遺物

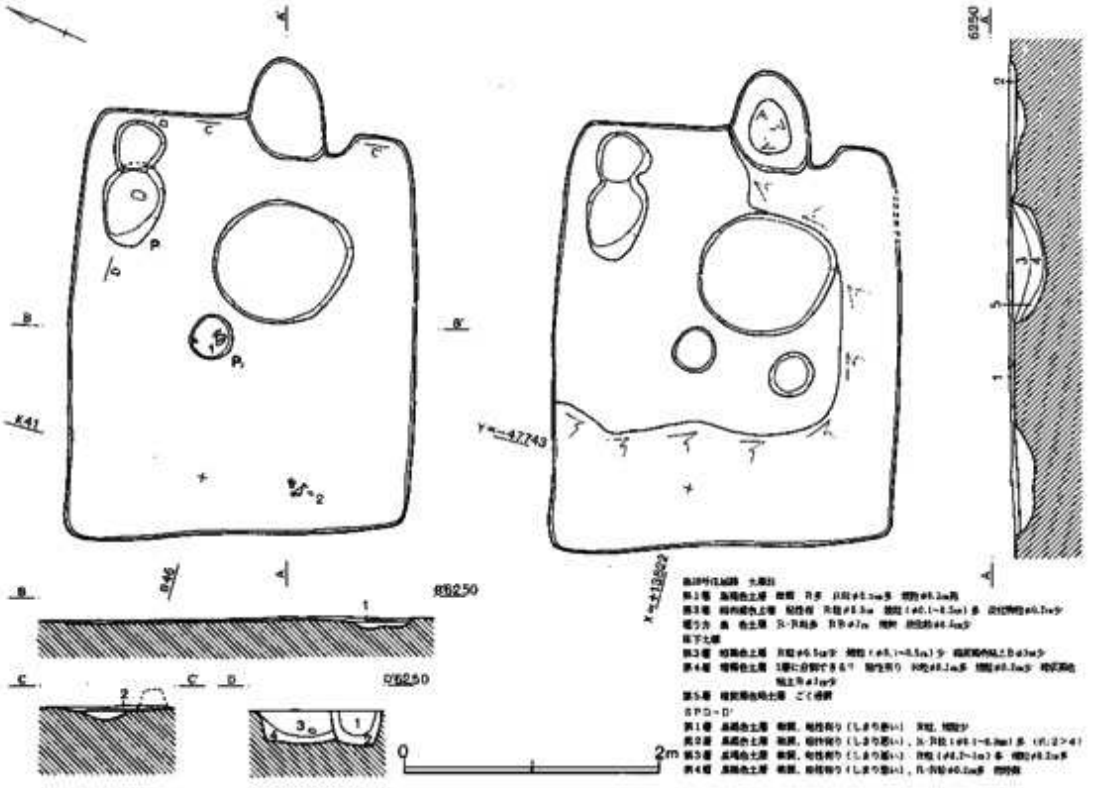
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉椀	1	14 — 3.6	体部は内湾して開き外面下部微かに稜をなす。口唇部丸く収まる。器肉比較的厚い。	内外面とも丁寧な右回転横ナデ、内外面全体に釉がかかる。	1/10,無粒漆段？,灰緑色（灰色）灰緑色.
須恵高台付椀	2	13.4 5.7 5.8	全体に小振りであるが高台部は大きく、巾広で低くほぼ直立し接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は内湾気味に立ち上がるが、下位に腰をもつ。口唇部やや肥厚して僅かに外反する。上端緩い稜をなす？	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、底面糸きり痕なで消す。高台部貼土貼付け後内外面指頭ナデ。内面体下部～底部は粗い工具ナデ加わる。	70%,須恵質1,灰色,No 1。内面一部炭化物付着。



第143図　第27号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	18.2 4.3	張りのある胴部上端から、口縁部は内傾して立ち上がり中位で外反して開く。口唇部はほぼ丸く収まる。	胴部外面指頭押圧、口縁部ヨコナデ？後上半～内面及び外面下端工具ナデ（←）、外面指頭押圧、ナデ加わる。	1/10,甕1,暗褐色,竪出土
甕	7	20.5 2.8	口縁部はやや外傾して立ち上がり、中位で更に外傾して開く。口唇部は尖り気味で外面緩い稜をなす。	内外面ヨコナデ（→？）、外面屈折部及び下位は工具ナデ。	1/10,甕1,赤褐色,床下出土。摩滅顕著。
甕	8	17.7 27.2	張りをもつ胴部から微かな段をなし、口縁部は緩く外反して立ち上がる。口唇部は外面凸状をなし丸く収まる。口縁部外面下位輪積み痕？残る。	胴部外面横箆ケズリ（←←↓）一部口縁部に及び、内面丁寧な箆ナデ（←←↓）。口縁部ヨコナデ（→）後外面中位指頭押圧、強いナデ乃至ケズリ。下端工具ナデ（←）で緩い段を造出する。	約1/3,甕1,赤褐色,外面帯状にススが付着。
?	9				・S1、475g
砥石	10				180g

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	3	13.8 5.5 6.5	高台部はほぼ直立し低くやや巾広、接地面ほぼ平坦で中央部やや凹む。体部はやや内湾気味に立ち上がり、器肉薄い。口唇部そのまま外反する。内面下部に重ね焼き痕？残る。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ、体部下端工具ナデ。	1/3,須恵坏1,灰色,№1
甕	4	17.3 － 5.2	脚部上端から口縁部は僅かに内傾して立ち上がり中位で外傾して開く。口唇部は丸く収まり外面凸状屈す。外面輪積み痕？残る。	脚部上端横篦ケズリ。口縁部内外面ヨコナデ？後外面上半部工具ナデ、下端棒状工具によるナデ（→？）。内外面指頭押圧加わる。	1/20,甕1,赤褐色,床下出土
甕	5	17.9 － 4.3	脚部上端から緩い段をなし、口縁部は内傾して立ち上がり中位で外反して開く。口唇部尖り気味で外面段をなす。外面輪積み痕？残る。	脚部外面横篦ケズリ（→←）、内面篦ナデ。口縁部内外面ヨコナデ（→）後外面指頭押圧？	1/20,甕1,淡褐色、赤褐色。



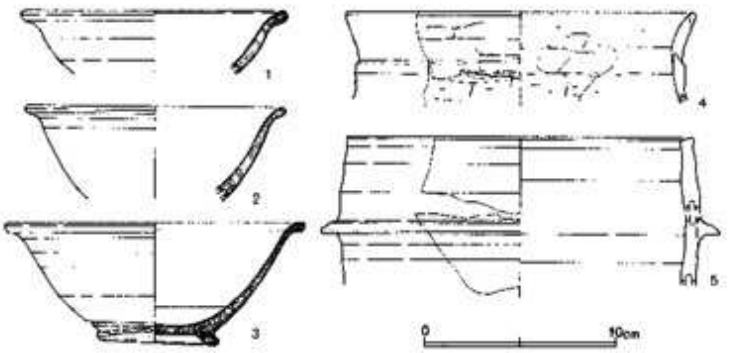
第144図　第28号住居跡平面図

第28号住居跡（第144図）

西半は谷にかかり、谷を切って構築される。耕作による溝、ピット等の攪乱によりほとんど壊滅状態で床面あるいは床面下迄達している。

埋土わずかに残り黒色土主体。出土遺物はほとんどない。

平面形は略長方形。床は東半部分で比較的残っておりやや固く締まっている。柱穴、壁溝は検出されなかった。床下土壙が竈前方に存在し貼り床は認められなかった。底面に粘土が張り込まれたような状態であった。北壁下ピットは貯蔵穴？で楕円形状呈し深い。中央やや北寄り小ピット中から土器片が出土したが他のピットも含めて新しい。



第145図　第28号住居跡出土遺物

掘り方は不明確で南壁下～竈付近迄存在するが西壁下は谷肩部と重なっており判然としない。他はローム直上を床として利用する。

竈は東壁やや南寄りに敷設され左右でわずかに段をもつ。右袖は残っていない。燃焼部下面のみの残存でほとんど焼けていない。袖は右袖基部がわずかに残存し粘土貼り付け。焚き口ほとんど平坦。

第28号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	14 ‥ 3.3	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚し上端尖り気味で屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。	1/10,須恵坏1,灰色.
須恵坏	2	13.6 － 4.9	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ。	1/5,須恵坏2,淡褐色,床下出土。内外面とも剥離顕著。
須恵高台付椀	3	15.7 5.6 6.4	高台部は低く幅広でほぼ直立し、接地面はほぼ平坦で中央がやや凹む。体部は内湾して立ち上がり口唇部は肥厚して開く。上端は緩い稜をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）内面丁寧で平滑、口唇部下内面摩滅する。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、工具ナデ加わり外面体部下端に及ぶ。接地面は未調整で圧痕残る。	約70%,須恵坏3,灰色、灰褐色,№1。外面一部スス付着。
甕	4	18.2 － 4.5	歪み顕著。胴部から口縁部は僅かに内傾して立ち上がり中位で段をなし外傾して開く。口唇部はほぼ丸く収まる。	胴部外面横篦ケズリ（←←）で、口縁下半に及び、内面篦ナデ。口縁部ヨコナデ乃至工具ナデ（→）で段は工具により造出する。指頭押圧、ナデ加わる。	1/20,甕1,淡褐色、灰褐色,№2
羽釜	5	18.2 － 7.8	体部はほぼ直立して立ち上がる。鍔断面は三角形状をなし上面やや下向きである。口縁部僅かに内傾するとみられる。口唇部内ソギ状で外面やや凸状を呈す。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、比較的丁寧。鍔はよく密着する。	1/10,須恵甕6,灰色、灰黒色,胴部と口縁部は接合しないが同一個体とみられる。内面炭化物付着。

第29号住居跡（第146図）

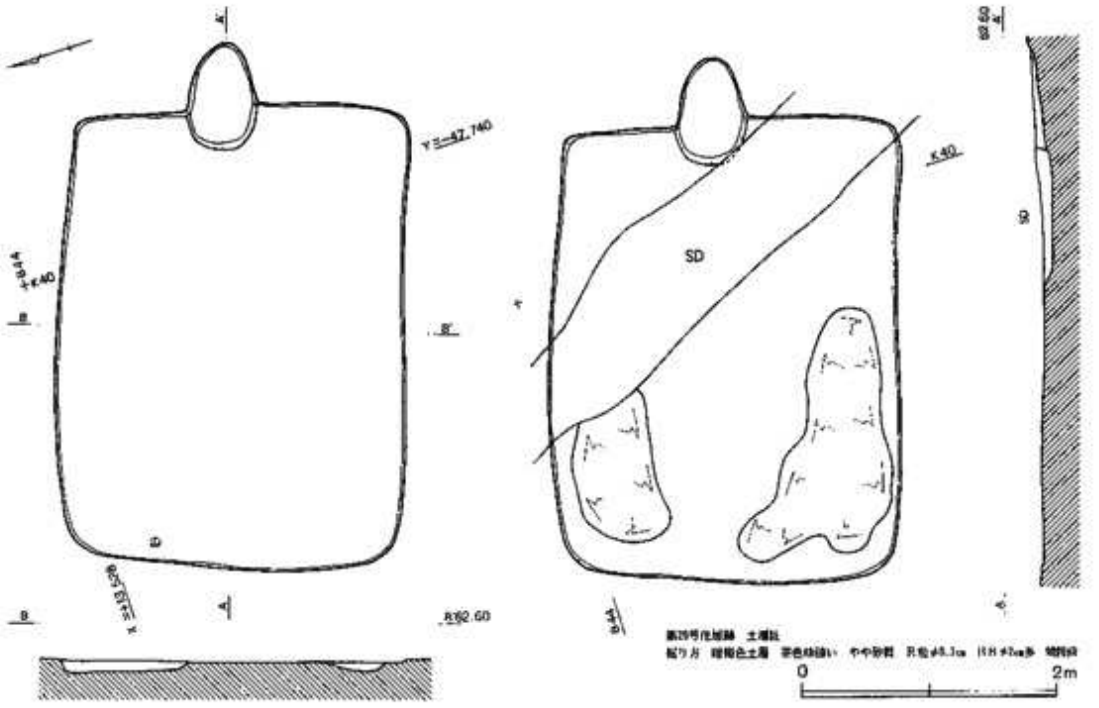
谷肩部からわずかに離れた位置にあり、溝、木根等の撹乱によって殆ど壊滅状態で竈のみ残存する。確認面がほぼ住居跡床面でほとんど残っていない。

埋土は既に失われている。出土遺物は耕作溝中から出土している。

平面形は推定で長方形。柱穴、壁溝等は検出されなかった。出土遺物はない。

掘り方は溝に切られてはっきりしないが、中央を残して四周を堀り窪めるものと考えられる。

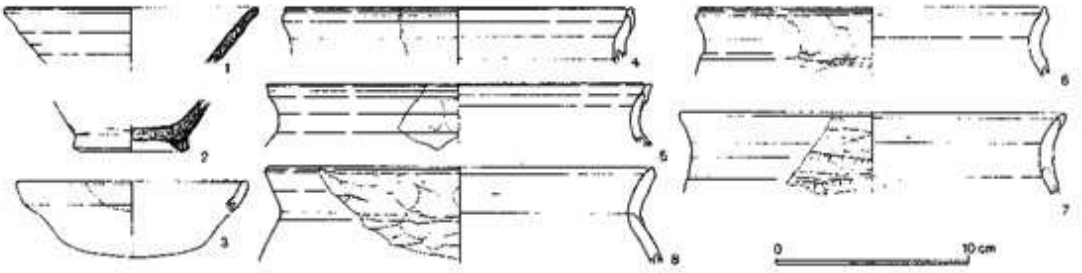
竈は東壁やや北寄りに敷設され、燃焼部底面のみ残存し略楕円形ないし長方形状、あまり焼けていない。底面は外方へ緩く立ち上がる。袖は全く残っていない。



第146図　第29号住居跡平面図

第29号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.2 — 3	体部は外傾して立ち上がりそのまま口唇部に至る。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）	1/4,須恵坏1,灰白色,焼成良好・器壁軟弱
須恵高台坏	2	— 5.2 2.6	高台部やや外開きで接地面外ソギ状。外面密着していない。体部は内湾ぎみに立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	1/3,須恵坏5（1に近似しdが目立つ）。灰色,竈出土。
坏	3	12 — 1.7	体部から内湾してそのまま口縁部に至る。口唇部は内ソギ状。	内外面ともヨコナデ。	1/20,甕1,淡褐色
甕	4	18.2 — 2.5	口縁部下半は僅かに外傾して立ち上がり、中位で屈曲して大きく開く。口唇部は直立し丸く収まる、外面凹む。	内外面ともヨコナデ。	1/20,甕1,黒褐色、暗褐色,竈出土。
甕	5	20 — 3.2	口縁部は中位で大きく屈曲して立ち上がり、口唇部外面緩い稜をなし丸く収まる。	内外面ともヨコナデ（→？）で、外面屈曲部指頭押圧ナデ加わり、下端は指頭ナデか？	1/20,甕1,赤褐色
甕	6	18.1 — 3.5	張りのある胴部から、口縁部は緩く外反して立ち上がる。口唇部は小さく直立し、尖り気味で外面緩い段をなす。	胴部外面横、斜筈ケズリ（←？）、内面筈ナデ？口縁部ヨコナデ（→？）後外面指頭押圧加わる。	1/10,甕1′,橙褐色,竈出土。摩滅顕著。
甕	7	20 — 4.2	張りのある胴部から口縁部はやや内傾して立ち上がり中位で外反して立ち上がる。外面輪積み痕残る。	口縁部内外面ともヨコナデ（工具使用か？）、外面上部指頭押圧、ナデ。胴部横筈削り（←・）で口縁部下半に及ぶ。	1/20,甕1,暗褐色,床下出土。
甕	8	20.3 — 4.2	張りのある胴部から口縁部は中位で屈曲して立ち上がる。口唇部は尖り気味で外面稜をなす。	口縁部内外面ヨコナデ（→）、外面屈曲部以下指頭押圧、ナデ（←）。	1/10,甕1,赤褐色



第147図　第29号住居跡出土遺物

注　平安時代の出土々器胎土は可能な限り類型化につとめたが、これに該当しないものもある。各器種の胎土は以下のとおりである。

須恵坏1　末野産、f大量　細粗礫

須恵坏1'　末野産、f多量、d目立つ　細粗礫

須恵坏2　末野産、a～f　細粗　「コ」字襞の構成に類似する

須恵坏2'　2に類似し、d目立つ

須恵坏3　2に類似し、e目立つ

須恵坏4　南比企産、g含む

須恵坏4'　南比企産、g少量、e目立つ

須恵坏4"　南比企産、g極微量

須恵坏5　末野産、f大量、e　細粗礫

須恵坏6　末野産、d目立つ

須恵坏7　須恵襞1に近似し精緻、e目立つ　細粗微

土師質坏　須恵坏2（末野産、a～f　細粗　「コ」字襞の構成に類似する）に類似　混入物極微量

須恵鉢1　須恵坏1（末野産、f大量　細粗礫）に同じ

須恵鉢2　a～f　細　精緻

須恵襞1　末野産、e目立つ　細粗礫微

須恵襞1'　a～f、h少量含む　d目立つ　細粗礫微量

須恵襞2　南比企産　a～h　細粗礫少量

須恵襞2'　2に近似し、gは2より少量

須恵襞3　須恵坏1　（末野産、f大量　細粗礫）にほぼ同じ

須恵襞3'　3に近似　a、e多量

須恵襞4　須恵坏1'（末野産、f多量、d目立つ　細粗礫）にほぼ同じ

須恵襞5　南比企産　i含む

須恵襞6　末野産？　e

須恵襞7　1に類似　h多量

須恵襞8　「コ」字襞の構成に類似　c目立つ

羽釜1　末野産、e目立つ　細粗礫　須恵壺1に近似

羽釜2　須恵襞2（南比企産　a～h　細粗礫少量）にほぼ同じ

羽釜3　須恵襞3にほぼ同じ

羽釜3'　末野産　a、e多量　細粗

羽釜4　須恵襞4にほぼ同じ

羽釜5　2に近似、a～f、hは少量、i微量

羽釜6　a～f、hは極少量、e、i微量　混入物微量で目立たない

須恵壺1　須恵襞1（末野産、e目立つ　細粗礫微）にほぼ同じ

須恵壺2　須恵坏2（末野産、a～f　細粗　「コ」字襞の構成に類似する）にほぼ同じ

須恵壺2'　須恵坏2'（2に類似し、d目立つ）にほぼ同じ

須恵壺3　須恵坏3（2に類似し、e目立つ）にほぼ同じ

須恵壺3'　須恵壺3に近似　d目立つ

土師器襞1　c目立つ　細

土師器襞1'　1に近似、d目立つ

土師器襞2　1に近似、a、e、f目立つ　細粗

土師器襞2'　1に近似、a、f目立つ　細粗

土師器襞3　a～d　e目立つ　細粗大量礫

土師器坏1　c目立つ　細　土師器襞1に近似

土師器坏1'　1に近似、d目立つ

d　平安時代　第３群

第３群は調査区の中央部やや北側、台地頂部から西側斜面（標高63.5～65.5m前後）にかけて位置し、東側はほぼ南北方向に延びる第１号溝によって限られ、第２群とは比較的急な斜面によって限られる。この住居跡群の東、南側は遺構は疎らとなる。第１号溝、第90号住居跡を含むため広い範囲にわたる。住居跡の集中する西側に限ると土壙群及び堀立柱建物跡を中央に、北、南、東側に住居跡を配しており平安時代白草遺跡のほぼ中央部と言えるだろう。

住居跡群の占有する範囲は（西側）長さ47.2m、幅45.5mに亘り、約2,150m²に及ぶ。ほぼ方形領域をしめるが第１号溝まで含めると主軸方向はほぼ東西方向である。

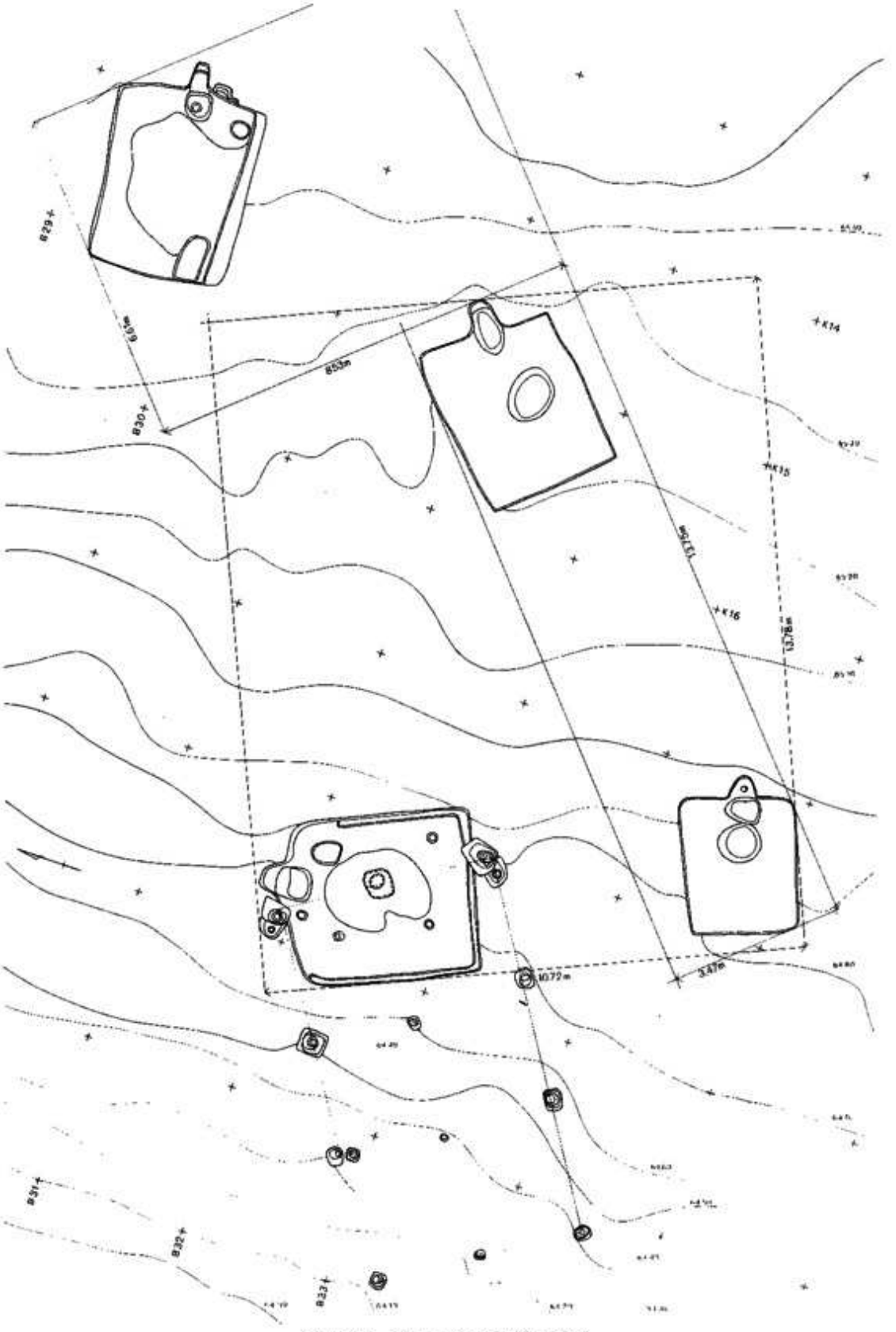
各住居跡の配置は第90号住居跡が他の住居から離れて単独で存在する。この様に住居跡群からかなり離れて存在するものについては集落全体の中で位置づける必要がある。他の住居跡が西半に集中し、第１～３号堀立柱建物跡がほぼ中央、北西側に第66～71号住居跡が東西方向にほぼ直線状に存在し、第71号住居跡以外は集中する。東側から南側にかけて疎らな直線状に第49～52、54、56、60号住居跡が並んでいる。第66～70号住居跡と第49～52号住居跡をそれぞれ第３ｂ、３ａ群と呼称する。

15軒の住居跡の詳細は以下の記述及び住居跡一覧表によるが、概要を示すと直径2.5～3.5m前後のものが多く、2.5m以下、3.5m以上の住居跡は少ない。平面形は不整形にものを含めて長方形状を呈するもので、横長のものもある。竈は２種類存在し東乃至北東壁に付設されるものと、北壁に設置されるものとがある。重複関係からみると後者が古いが、出土土器でみるとそれほどでもない。第３号堀立柱建物跡の切り合いによって主軸が南北方向のものが古く、東西方向のものが新しいことが判るが住居跡と連動するかどうか判断は難しい。住居構造についてみると、竈は壁中央ないしやや右寄りに設置されるものが圧倒的で左竈は少ない。明確に構造を把握できるものは第52、54、71号住居跡の３軒である。貯蔵穴をもつものは６軒で、竈の左側は第68号住居跡のみである。床下土壙を持つものは７軒を数える。堀り方については不明瞭な住居跡もあるが、中央部を残して四周を掘り窪めるものが主体を占め、三辺、二辺、一辺を堀り窪めるものが存在する。壁溝を持つものは第51、54、56号住居跡の３軒で第51、54号住居跡は柱穴が存在する。

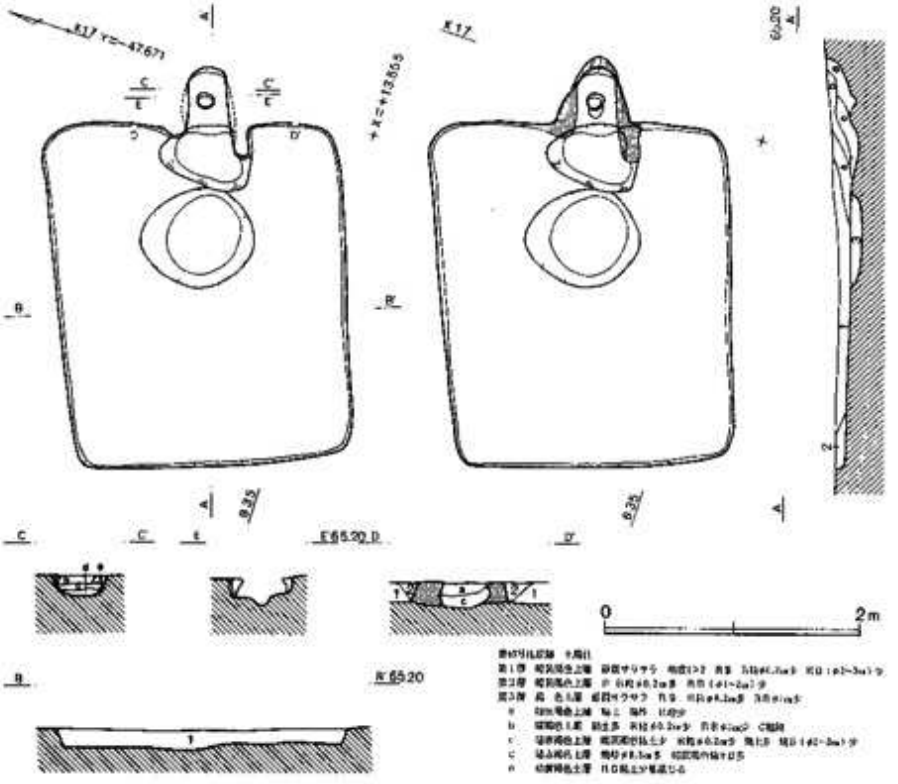
重複関係にあるものは、上述のように２例認められる。

住居跡外に土壙をともなうと考えられるものが１軒存在する。

第３ａ住居跡群（第148図）は13.75×8.53mの鍵形の範囲に収まりやや広い範囲を占有する。第３ｂ住居跡群は第163図に示したように６軒の住居跡の占有する範囲は、19.50m×8.36mの鍵形状。各住居跡の間隔は５m前後の至近距離にある。出土土器によると若干の段階差があり、同時に存在したわけではない。



第148図　第３ａ住居跡群配置図



第149図　第49号住居跡平面図

第49号住居跡（第149図）

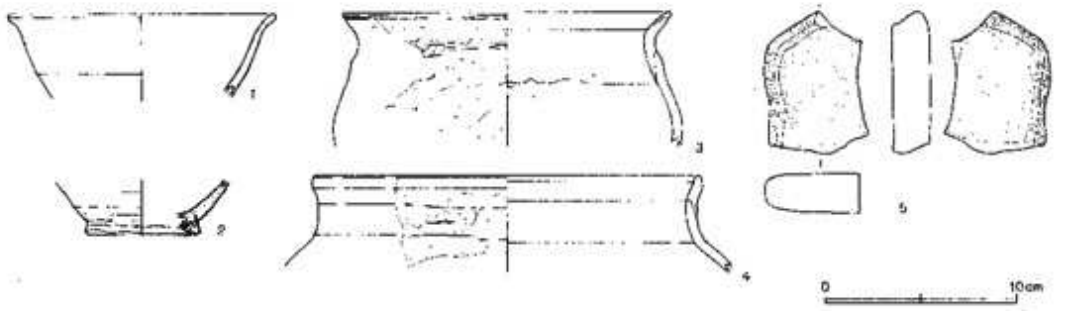
竈及び住居中央部～南東側は木根による攪乱が顕著である。

埋土は２層であるが、東半は攪乱顕著。竈袖部分は流出、５層に分割される。出土遺物は少量で竈周辺埋土中から出土。

平面形は平行四辺形乃至方形。貼り床が竈前面については木根による攪乱で不明確であるが中央部にかけて存在したとみられる。床下土坑は竈前方やや中央寄りに存在し略円形呈し床上に灰褐色粘土を貼り付けている。遺構内及び周辺にその他の施設は検出されなかった。出土遺物は床面直上のものはない。

掘り方は中央部を残して周縁部を掘り窪めるものとみられる。床下土壙底面は粘土が貼り付けられる。

竈は東壁ほぼ中央に位置し、燃焼部～煙道部の遺存状態は良好で両側面がオバーハングしており、天井部粘土が部分的に残る。袖の大部分は流出している。火焼面は比較的よく焼けており、狭い範囲であるが赤変硬化していた。支脚穴か中央部やや左にずれてピットが存在する。竈は周縁を楕円形状に掘り窪め側面～天井部に粘土を貼り付けて構築したとみられる。袖は流出するが、基部は貼り床上に載っている。



第150図　第49号住居跡出土遺物

第49号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	14.0 － 4.4	体部は内湾して立ち上がり、口唇部は外反し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1／5。須杯2。灰褐色。床下出土。内外面とも摩滅顕著。
須恵高台杯	2	－ 5.5 2.7	高台部はやや外開きで細い。底面外ソギ状で中央部凹む。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）、高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ、よく密着していない。	約1／4。須恵杯2。灰白色。床下出土。摩滅顕著。
甕	3	17.0 － 7.1	丸みをもつ胴部からそのまま口縁部へ移行する。口縁部屈曲し外傾して開く。口唇部凸出気味で外面直下沈線状に凹む。外面輪積み痕残る。	胴部外面横、斜め箆ケズリ（←・↓）、内面箆ナデ頸部指頭押圧加わる？口縁部横ナデ（←？）、外面状半、屈曲部は工具ナデ、中位は未調整部を残す指頭ナデ（←）。	1／8。甕1。赤褐色。甕＋床下出土。
甕	4	20.2 － 4.7	張りのある胴部から口縁部は緩かに内傾して立ち上がり、中位で屈曲し内湾気味に開く。口唇部は直立して丸く収まり、外面直下微かに陵をなす。	胴部外面横箆ケズリ（←・↑）、内面箆ナデ？口縁部ヨコナデ後、外面指頭押圧、ナデ。外面工具ナデ加わるか。	1／10。甕1。淡褐色、赤褐色。甕出土。
砥石	5				125g。

第50号住居跡（第151図）

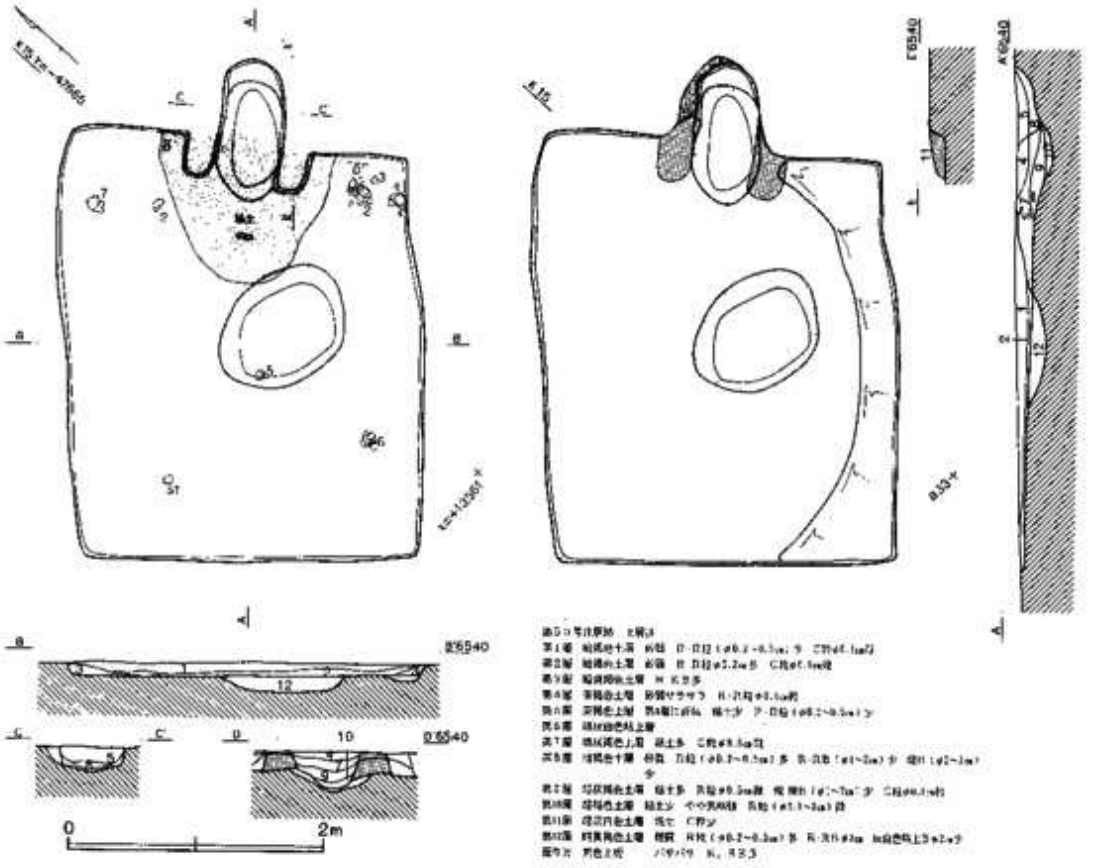
上面は耕作による影響で灰褐色土（砂質）の分布範囲として確認された。周辺部は新しいピットが分布し耕作と相まって壁外施設は不明である。

埋土は耕作土が混入するためか全体に砂質。竈前面に粘土が厚く分布する。出土遺物は少量で大半が埋土中から出土。

平面形はやや歪んだ長方形ないし平行四辺形であるが、みためはそれ程でもない。床面は竈前面～中央部にかけて硬質面が広がり周辺部は柔らかい。貼り床はないが床下土壙は生活段階で全く確認できなかった。柱穴、壁溝等は検出されなかった。

掘り方は不明瞭であるが、南壁下に認められごく浅い。床下土壙が中央部よりやや右寄りに検出されている。生活段階では開口していなかったと考えられる。

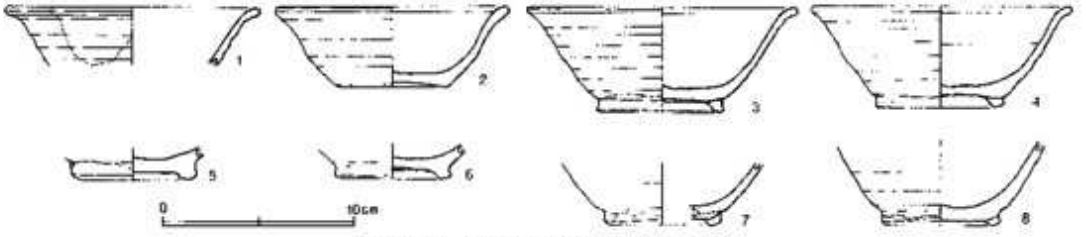
竈は斜行する東壁ほぼ中央に位置し燃焼部の赤変範囲として比較的明確に検出された。袖はほとんど壊滅状態で天井部も含めて流出粘土が手前に分布していた。袖は粘土貼り付けで壁はほとんど掘り込まない。燃焼部は長楕円形状で、手前は略楕円形状にやや深くなる。底面は外方へ緩く立ち上がり、側面は比較的よく焼けている（特に左側）。



第151図　第50号住居跡平面図

第50号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台杯	1	13.4 — 3.0	体部は外傾して立ち上がり、口唇下屈曲し肥厚して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）。	1/4。須恵杯1。赤褐色（黒色）赤褐色。電土出。内外面加熱による、剥離顕著。
須恵杯	2	12.2 5.4 4.2	僅かに上げ底の底部から体部は内湾して立ち上がり、上位で外半しそのまま口唇部に移行する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、外面体部下半指頭ナデ、底面糸きり痕残る。	1／3。須恵杯2。灰褐色て赤褐色。No.6。底面炭素付着。
須恵高台付椀	3	14.2 6.2. 5.4	高台部直立し薄く接地面平坦で中央凹む。体部は内湾して立ち上がり、下位に膨をもつ。口唇部僅かに肥厚し外半して開く。底部内面ほぼ平坦面をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ、接地面中央棒状工具によるか？。	約90%。須恵杯3。淡褐色。No.2＋4。内面剥離顕著。内外面一部黒班あり。
須恵高台付椀	4	13.5 6.0 5.3	高台部低くほぼ直立し接地面平坦で部分的に外ソギ状。体部は下端で稜をなし僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し外半して開く。底部内面ほぼ平坦面をなす。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、外面工具ナデ。よく密着していない。	2／3。須恵杯2。赤褐色、黒褐色。No.4。内面炭素付着。内面剥離顕著。



第152図　第50号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台杯	5	－ 5.5 1.1	高台部はほぼ直立し厚く、接地面外ソギ状。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	約80%。須恵杯2。淡褐色／赤褐色。№5。
須恵高台杯	6	－ 5.3 1.4	高台部は低く外半気味で接地面外ソギ状。体部下端で稜をなし外傾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）、底面中央僅かに糸きり痕残る。高台部粘土貼付後内面指頭ナデ、外面工具ナデ？	約90%。須恵杯2。赤褐色。
須恵高台杯	7	－ 5.2 3.2	高台部はほぼ直立し低い、底面外ソギ状でよく密着する。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）。高台部粘土貼付後内面指頭ナデ外面工具ナデ。	1／5。須恵杯1。赤褐色（黒褐色）赤褐色。
須恵高台付椀	8	－ 5.5 4.0	高台部はやや外開きで低く、底面外ソギ状。体部は下端で緩い稜をなし、僅かに内椀して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ外面工具ナデ？	1／2。須恵杯1。褐色。№1。内外面とも摩滅顕著。

第51号住居跡（第153図）

第1号掘立柱建物跡と重複しており、本住居跡の竈左袖の部分、住居跡内部、及び南壁をそれぞれ第1号堀立柱建物跡のP4、P5、P3、P1が切っていることが確認された。

したがって新旧関係は、第51号住居跡（旧）→第1号堀立柱建物跡（新）の順と判断されるが、堀立柱建物跡の東端ピット列は掘り方も含めて実際には不明瞭で、特にP3は掘り方、柱痕ともにそれ程はっきりしていた訳ではない。東～南壁にかけて木根及び風倒木による攪乱を受けていたことも、不明瞭であった原因の一つと考えられる。

埋土は良く残っており概ね自然堆積と判断される。

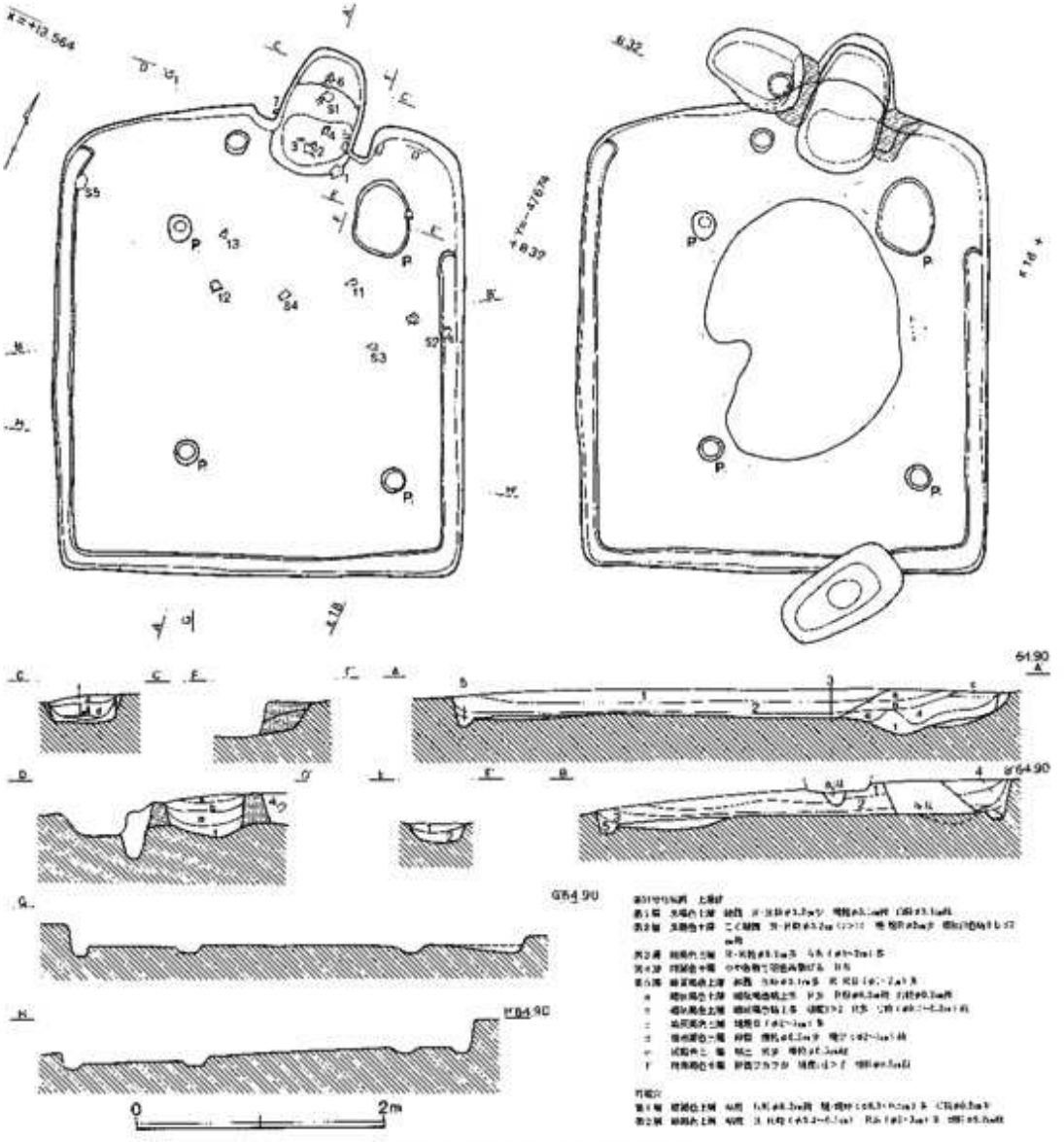
出土遺物は大部分が埋土中の出土である。

平面形は北壁が湾曲し弧状を呈するがほぼ長方形である。北壁以外は直線状で良く整っている。床面は南壁下がやや傾斜する以外ほぼ平坦で、竈前面～中央部にかけて硬質面が広がり他は柔らかい。貼り床が存在する訳ではない。

柱穴は3ヶ所で検出され、貯蔵穴の存在する位置が欠落する。柱穴配置はやや歪んでおり、P4がやや外側に配置されている。いずれも浅いものである。3本の計測値を示すと次のとおりである。P2は長径0.22m、短径0.2m、深さ0.06mである。P3は径0.2m、深さ0.04m。P4は径0.2m、深さ0.2mである。

各穴柱の間隔は、P2P3＝1.77m、P3P4＝1.70mである。

その他竈左袖付近に小ピットが存在するが、これは竈左袖をきるピットと共に第1号堀立柱建物跡に伴うものとみられる。



第153図　第51号住居跡平面図

壁溝は竈壁及び北隅を除いて一巡するやや幅広のものである。精査にもかかわらず壁材痕等は認められなかった。

貯蔵穴は竈右側に位置し楕円形状で比較的浅い。規模は長径0.61m、短径0.44m、深さ0.15m。生活段階に伴う遺物はほとんどなくいずれも若干浮いている。

掘り方は不明瞭であるが、四周をごく浅く掘り凹め中央を残すものと考えられ隅部はやや深い。貯蔵穴の部分はやや広めに掘り凹める。

竈は北壁東寄りに位置し、長径1.05m、短径0.65mを計る。

竈軸方向は住居跡主軸に対してかなり傾斜している。竈軸方向はN－8°－wである。

燃焼部壁の赤変範囲として明確に確認された。

竈左側は第1号掘立柱建物跡に切られるためもあるが、壁が外側へ凸出している。燃焼部は方形な

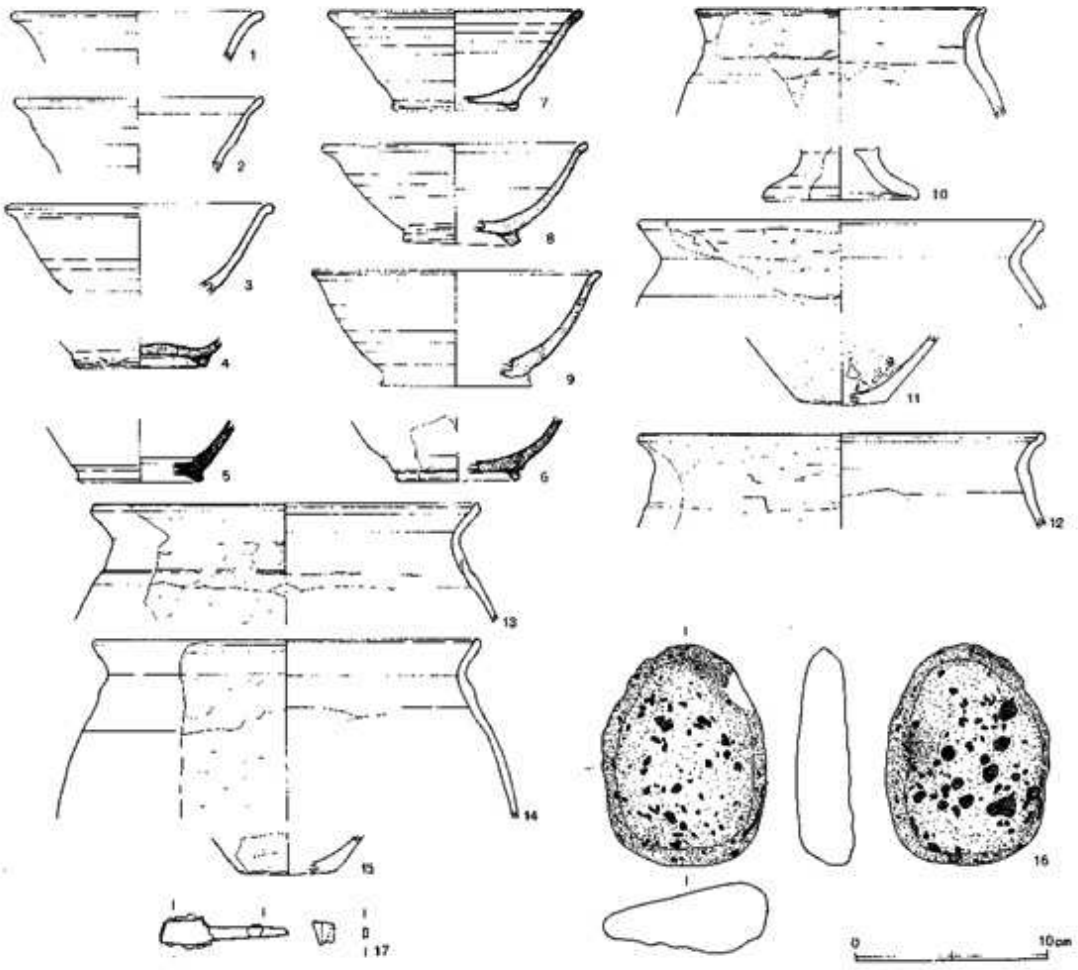
いし楕円形状で掘り込みは深い。底面～両側面ともよく焼けているが、特に左側が顕著である。竈内および周辺部出土遺物は大半が浮いた状態で出土している。

袖は粘土貼り付けで、壁をやや掘り込む。掘り方との関係は袖に対応する部分は掘り残している。

焚き口はやや深く手前に向かって緩やかに立ち上がる。

第51号住居跡出土遺物

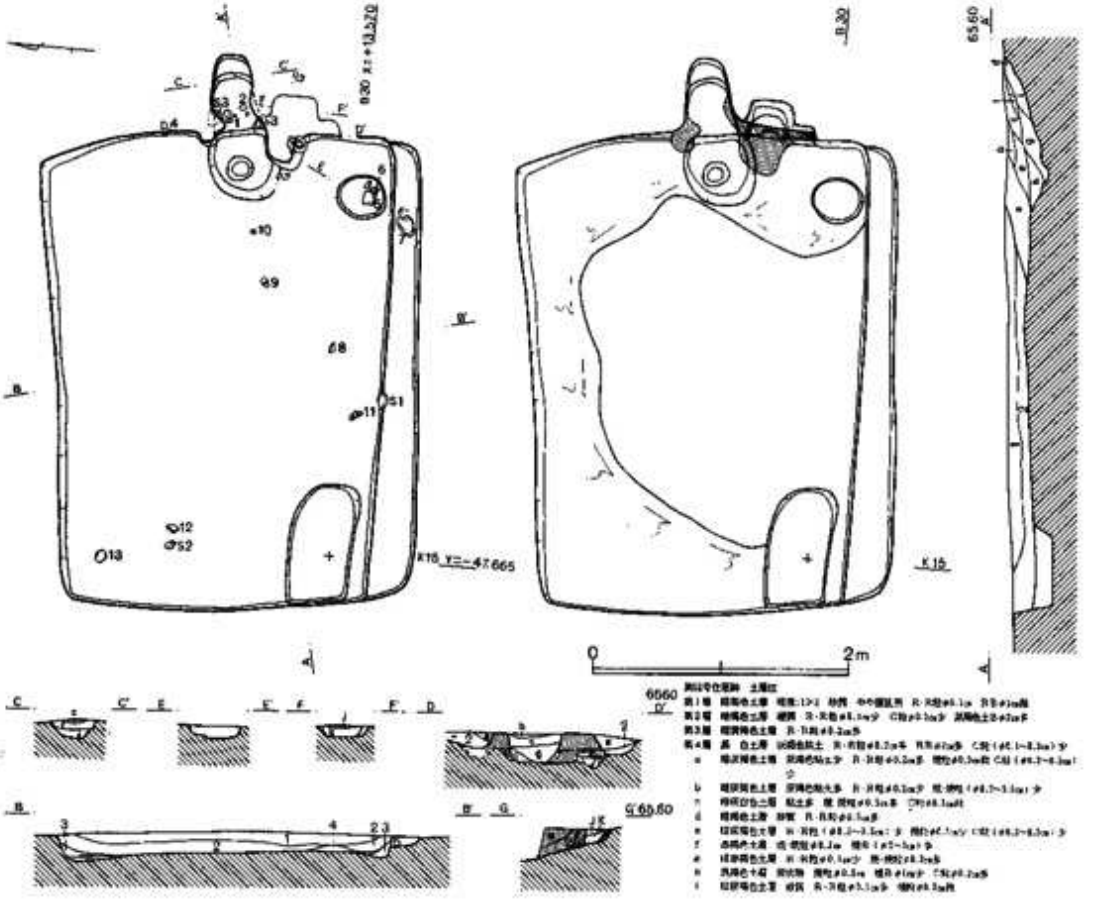
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.2 － 2.7	体部は外傾して立ち上がり、口唇部僅かに肥厚し外半して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧で平滑。	1／10。須恵杯2。灰褐色／赤褐色。
須恵杯	2	13.0 － 4.0	体部は外傾して立ち上がり、口唇部僅かに肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑。	1／5。須恵杯1。灰白色。竈出土。
須恵高台付椀	3	14.0 － 4.7	体部は内湾して立ち上がり、口唇部肥厚して丸く収まり外半して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）、内面丁寧平滑。	1／5。須恵灰2。赤褐色。№5＋7＋竈。摩滅顕著。
須恵高台杯	4	－ 6.0 1.4	高台部低くほぼ直立し厚く、接地面はほぼ平坦。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ、糸きり痕ナデ消される。よく密着していない。	約90%。須恵杯。灰白色。№10。
須恵高台杯	5	－ 6.0 3.0	高台部低くほぼ直立し、接地面外ソギ状。体部薄かに内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面平滑。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	1／5。須恵杯1。黒褐色。床下出土。
須恵高台付椀	6	－ 6.0 3.1	高台部は低く外開きで細い。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑。粘土貼付け後内外面指頭ナデ？	1／10。須恵杯1。灰白色。竈出土。
須恵高台杯	7	13.2 6.2 5.2	高台部は低くやや巾広で外開き。体部はほぼ外傾して立ち上がり僅かに屈曲して口唇部に移行、肥厚する。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑。底面中心部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデで体部下位まで及ぶ。	1／4。須恵杯。灰白色。
須恵高台付椀	8	13.9 5.5 5.2	高台部低く外半気味で、接地面外ソギ状。体部大きく内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑。外面下金指頭ナデ加わる。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。よく密着していない。	約80%。須恵杯3。淡褐色。№12。摩滅顕著。
須恵高台付椀	9	15.0 － 5.4	高台部は剥離する。体部は内湾して立ち上がり、口唇部僅かに肥厚しそのまま開く。円柱技法か？	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑。外面下半若干の指頭ナデ加わる。	1／2。須恵杯2。赤褐色。№9＋13。外面炭化物付着。
台付甕（脚部）	10	－ 8.0 2.7	比較的小形の脚部である。外反して開き先端直立気味に凸出し、外面緩い段をなす。	内外面回転ヨコナデ（右回転）か？内面上半部指頭ナデ。	1／10。赤褐色。内面一部黒斑あり。
（口縁部）		15.2 8.0 5.5	張りのある胴部から僅かな段をなし口縁部は移行し、中位で外反して開く。口唇部下沈線状に凹む。内面中位、頸部稜をもつ。	胴部外面横筆ケズリ（←）内面工具ナデ（・）。口縁部ヨコナデ（→）外面工具ナデ？中位指頭押圧、ナデ加わる。輪積み痕残る。	1／5。甕1。赤褐色。竈出土。



第154図　第51号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕 (底部) (口縁部)	11	－ 4.6 3.5 21.2 － 4.5	底部は小型で器肉薄く、平底内面粘土付着する。押圧技法か？ 胴部は張りをもち？頸部で微かな段をなし口縁部に移行する。中位で屈曲し内湾気味に立上り口唇部は直立し肥厚する。内面中位微かな段をなす。	胴部外面縦、斜め篦ケズリ（↓→）後、底面一定方向の篦ケズリ。内面指頭ナデ。 胴部外面横篦ケズリ（←）、内面篦ナデ（←）。口縁部ヨコナデ後、外面頸部、屈曲部、口唇部横下工具ナデで頸部～上位指頭押圧、ナデ加わる。上半部は未調整部分が残る。	1／2。甕1。暗褐色、亜褐色。No.6＋床下出土。 1／5。甕1。赤褐色。竈出土。
甕	12	20.2 － 6.0	胴部は張りょもち、頸部で段をなし口縁部に移行し、中位で屈曲して開く。口唇部は直立し尖り気味で、外面下沈線状に凹む。内面中位微かに段をなす。	胴部外面横篦ケズリ（←←）、内面篦ナデ。口縁部ヨコナデ（←）、頸部外面工具ナデ？頸部～中位指頭押圧、ナデで未調整部分残る。微かに輪積み痕残る。	1／5。暗赤褐色。竈出土。内外面摩滅顕著。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	13	20.2 ‥ 9.5	胴部はは理をもち、頸部で微かな段をなし口縁部へ移行する。口縁部中位で屈曲して開き、口唇部直立気味でやや肥厚する。外面下丸く収まる。内面中位、頸部緩い稜をなす。	胴外面横箆ケズリ（←）、内面箆ナデ。口縁部ヨコナデ？頸部～上位指頭押圧加わる。工具ナデは未詳。	1／10。甕2。赤褐色。竈出土。内外面摩滅顕著。
甕	14	21.3 － 4.8	張りをもつ？胴部から頸部で微かな段をなし口縁部へ移行する。中位で屈曲し、口唇部は直立し肥厚する。外面直下緩い面をなす。内面中位、頸部は緩い稜をなす。	胴部外面横箆ケズリ（←）、内面箆ナデ。口縁部ヨコナデ？後頸部、屈曲部、口唇直下、工具ナデで頸部～上位指頭押圧、ナデ加わる。未調整部分残る。	1／5。甕2。黒色、茶褐色。№1＋竈。
甕底部	15	－ 5.0 1.8	底部は僅かに凸出し器肉厚い。	外面縦箆削り↓↓←。磨滅顕著で詳細不明。	1／5。甕1。暗褐色。
磨石	16				435g。
刀子	17				10g。



第155図　第52号住居跡平面図

第52号住居跡（第155図）

上層及び南壁は耕作による影響を受ける。周辺にピットが存在するが新しいもので伴うものは認められなかった。

埋土は黒色土を主体とするもので自然推積。竈前面は流出粘土の分布がみられた。遺物は竈周辺と北東隅から出土し、大部分は埋土中出土である。断面によると外側→内側の順での縮小が把握される。

平面形は新しいものが南北壁が斜行する縦長の台形状で、古いものは南壁が残るのみで他は新しい住居と重なるものと考えられる。見た目はよく整っている。床面はほぼ平坦で竈前面～中央部に硬質面が広がりその他は柔らかい。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は壁際に位置しやや浅い。西壁下に土壙、長方形状で深く出土遺物はない。

掘り方の新旧関係があるはずであるが全く把握できなかった。新住居跡？のものは中央部を掘り残し四周を凹めるもので、西壁下以外は浅い。貼り床は存在しない。

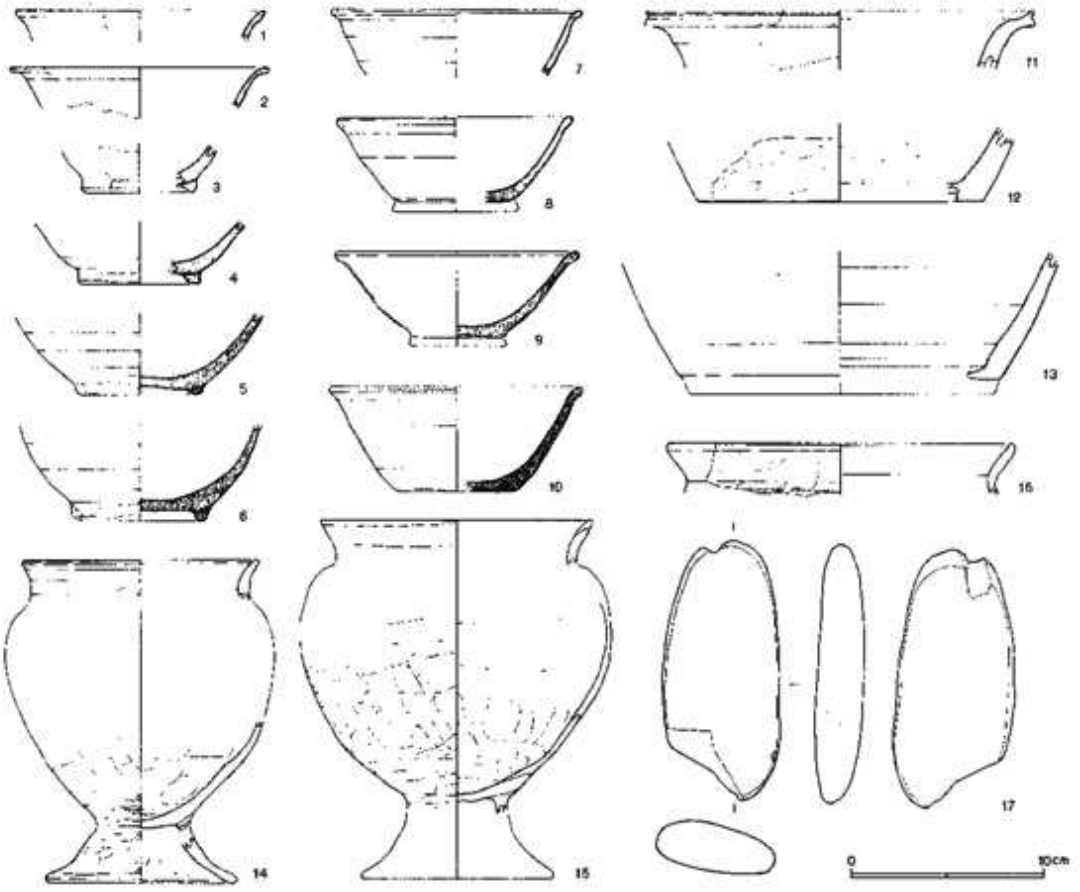
竈はいずれの住居跡も東壁に位置する。

新竈は粘土のみの分布範囲として確認され保存状態は良好である。右側の旧竈を切って構築され、旧竈前面は粘土貼り付けで壁を造り出している。煙道部の一部が残り、燃焼部から緩やかに外方へのびあまり焼けていない。燃焼部は長方形ないし楕円形で底面は緩やかに立ち上がり煙道部へ続く。側面はそれ程でもないが底面はよく焼けている。焚き口に続く手前側はやや深く支脚穴か小ピットが穿たれる。袖部は粘土貼り付けで（粘土貼り付けは旧竈封鎖後）、天井部は崩れた状態であるが残存していた。片岩が壁との境付近の両側に突き刺されていた。出土遺物は全て浮いた状態である。

旧竈は幅5cm前後の粘土壁の外側に、天井部をそのままつぶしたような状態で遺存する。燃焼部のみの残存で略方形、全体にあまり焼けていない。底面ほぼ平坦で外側に段をもつ。袖を付設するためか右側壁をやや掘り込んでいる。逆位の甕が出土した。

第52号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	6	－ 6.0 5.0	高台部一部剥離する。低くほぼ直立し巾狭い。体部は下位に腰をもち、大きく内椀して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、底面糸きり痕残る。外面下位指頭ナデ。	約70%。須恵杯2。淡褐色、赤褐色。№1。竈。内外面剥離顕著
須恵高台杯	7	13.2 － 3.4	体部は内湾して立ち上がり、屈曲して口唇部に移行する。器肉薄い。	内外面とも回転ヨコナデ	1／10。須恵杯1。黒色、黒褐色。
須恵高台杯	8	12.4 － 4.4	高台部は剥離する。体部は内湾して立ち上がり、口唇部は肥厚し僅かに屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、内面丁寧平滑。外面下位指頭ナデ加わる。底面糸きり痕残る。	1／10。須恵杯5。灰白色。№10。
須恵体台杯	9	12.8 － 4.5	高台部剥離する。体部は下位に腰をもち、僅かに内湾して立ち上がる。口唇部肥厚しそのまま開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、内面丁寧平滑。	約1／3。須恵杯6。黒褐色、黒色。№7。内外面炭素、口唇部一部炭化物付着。
須恵高台杯	10	13.2 6.0 5.4	高台部剥離する。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、底面糸きり痕残る。	1／5。須恵杯1。灰白色。№13。内外面とも摩滅顕著。
須恵壺	11	20.2 － 3.0	外傾する頸部から口縁部は屈曲して開く。口唇部は上下に凸出し先端尖る。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転？）。	1／10。須恵壺1。灰白色（赤褐色）灰白色。



第156図　第52号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.0 － 1.5	体部は外傾して立ち上がり、屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。	1／10。須恵杯4。灰白色。
須恵杯	2	13.5 － 2.2	体部は外傾して立ち上がり、口唇部肥厚し大きく屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1／5。須恵杯6。灰色。
須恵高台杯	3	－ 5.5 2.2	高台部は低く外開きで巾狭く、接地面外ソギ状。体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	1／10。須恵杯1。赤褐色。
須恵高台杯	4	－ 6.0 3.2	高台部低くほぼ直立しやや幅広、接地面平坦。体部は下位に膨をもち内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）、内面丁寧平滑。高台粘土貼付け後内外面指頭ナデ？。	約1／4。須恵杯2。赤褐色。竈出土。
須恵高台付椀	5	－ 6.0 4.0	高台部低くほぼ直立する。体部は大きく内湾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）、内面丁寧平滑、剥離顕著。外面下位指頭ナデ。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ。接地面未調整で圧痕残る。	約1／2。須恵杯5。灰褐色。№11。内外面一部黒斑あり。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	12	－ 3.1 14.8	底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部外面一定方向の篦ケズリる胴部外面篦ケズリ（→）、内面篦ナデ、指頭押圧。	1／3。須恵甕1。灰色（灰褐色）、暗灰色。№5。
須恵甕	13	－ 6.0	底部は就離する。体部は外傾して立ち上がる。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転）、外面底部周縁は工具ナデ？。	1／10。須恵甕1。灰褐色（黒色）、灰黒色。№5。
台付甕	14	12.4 9.5 17.0	口縁部はそれほど開かれず外傾して立ち上がる。口唇部凸出気味で胴部は尻すぼみ。脚部は外反して開き先端丸く収まる。外面緩い稜をなす。接合しないが同一個体とみられる。	口縁部ヨコナデ（→）、過半部指頭押圧。胴部下半部縦、斜め篦ケズリ（↓←）後下部回転ヨコナデ（右回転）か？脚部内外面回転ヨコナデ？（右回転）、外面下半指頭押圧、ナデ。	約1／3。甕1。赤褐色。脚部を除く内外面の一部炭素付着。
台付甕	15	14.2 － 15.0	口縁部中位？で屈曲して開く。口唇直下沈線状に凹む。胴部は尻すぼみで最大径は上位にもつか？脚部は大部分欠失する。口縁部、胴部は接合しないが同一個体とみられる。	口縁部ヨコナデ後？工具ナデ（→）、口縁部指頭押圧。胴部し容易横篦ケズリ（←↓）、以下縦、斜め（↓←）篦ケズリ後下部指頭ナデ（→）。	約1／2。甕1。赤褐色。竈及び竈前方出土。内面剥離顕著。内外面一部炭素付着。
甕	16	18.2 － 2.6	口縁部中位？で屈曲し外傾して開く。口唇部は直立し尖り気味で、外面直下緩い稜をなす。	口縁部ヨコナデ（→）、屈曲部指頭押圧。	1／10甕1。赤褐色。竈出土。
磨石	17				床下、330g

第54号住居跡（第157図）

黒色土のよく整った長方形に確認され、周辺部も精査したが壁外施設は認められなかった。第55号竪穴状遺構は明らかに第54号住居跡によって切られている。

埋土は良く残っており自然推積。

出土遺物は大部分が埋土中からの出土で竈右側に集中する。竈前面の粘土流失は比較的小範囲に収まっている。

壁溝埋土は平面ではやや内側に壁材痕が認められたが（内側はわずかに砂質）、断面ではやや不明確である。

平面形は横長の略長方形で、北壁は竈部分で段をなし、隅部は北西以外は湾曲する。

床面はほぼ平坦で概して堅緻であるが、竈前面はよく踏み締まっている。

柱穴か南壁下中央寄りに1ケ所存在する。径0.6m、×深さ0.11m。柱痕跡は図ほど明瞭ではない。

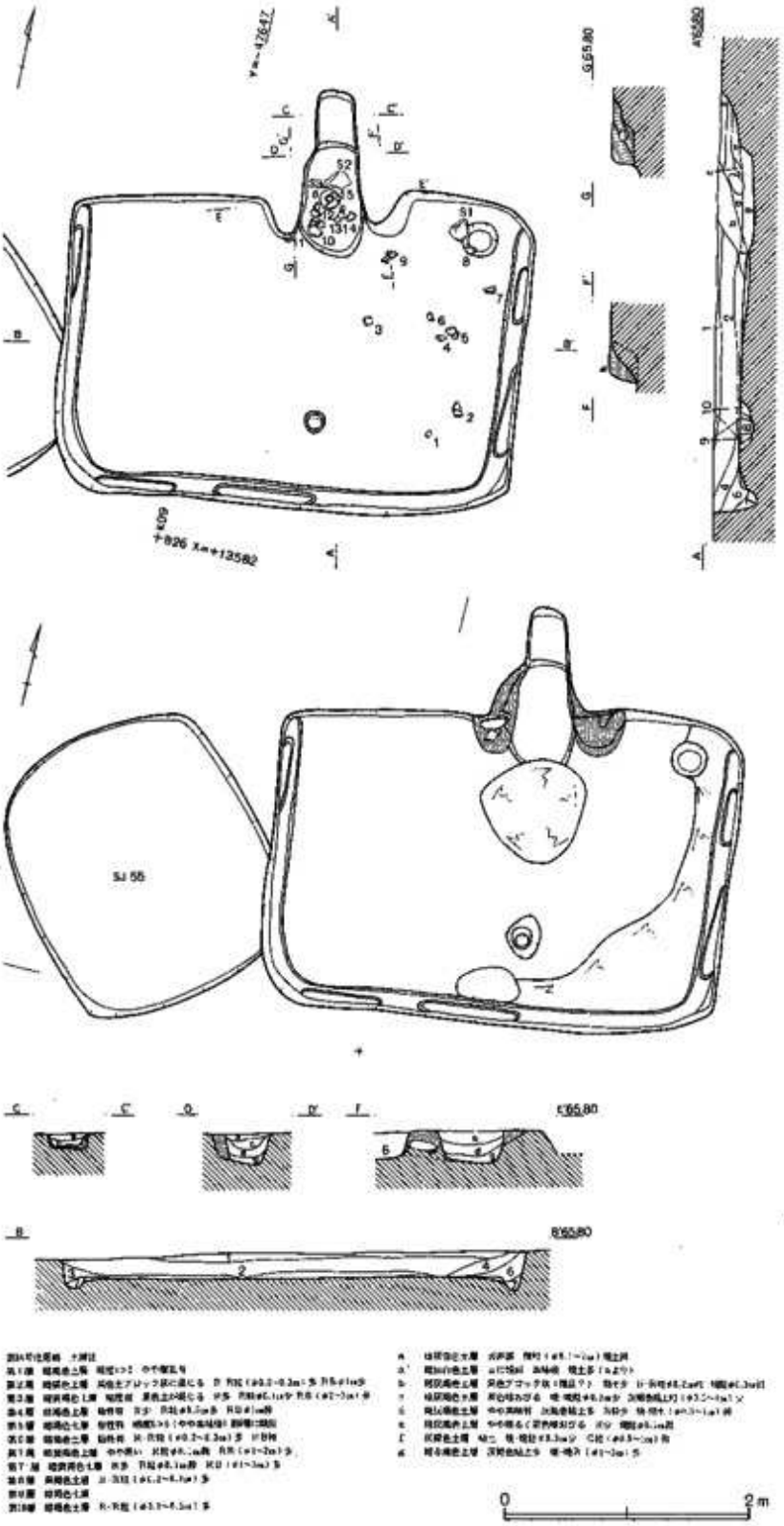
壁溝は北壁を除いて一巡し、壁材のためか径0.28m×深さ0.08mを測る。部分的に内側がやや深くなる（溝内に小ピットが数ケ所に存在した）。

貯蔵穴は北東隅（竈右側）に比較的浅く小形のものがある。

床下土壙状の掘り込みが床面ほぼ中央に存在するが生活段階では確認できず不明瞭なものである。

掘り方は明確ではなく、東壁がわずかに凹む程度で、竈前面はやや掘り凹めてある。床下土壙状のほりこみは構造段階で検出した。壁溝との構築順序は断面で把握できなかった。

竈は北壁中央に敷設され、あまり赤変していなかったが比較的明確に確認された。。煙道部は外方へむかって緩く傾斜し、底面～側面は比較的焼けている。燃焼部は長方形ないし長楕円形状で、



第157図　第54号住居跡・第55号竪穴状遺構平面図

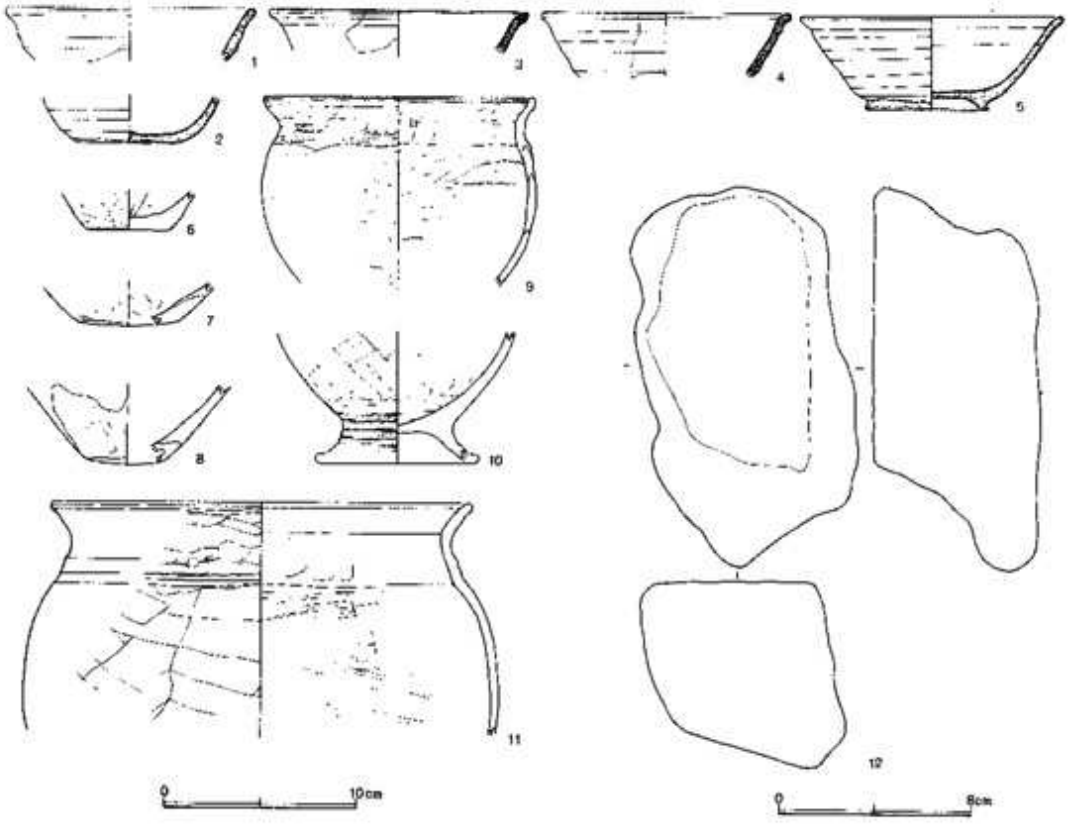
やや深く掘り込まれる。底面は平坦で段をなして煙道部へ続く。

袖部は粘土貼り付けで、下部は地山を切り出している。左袖は壁をやや大きめの楕円状に掘り込み、地山を切り出す。更に河原石を芯としている。

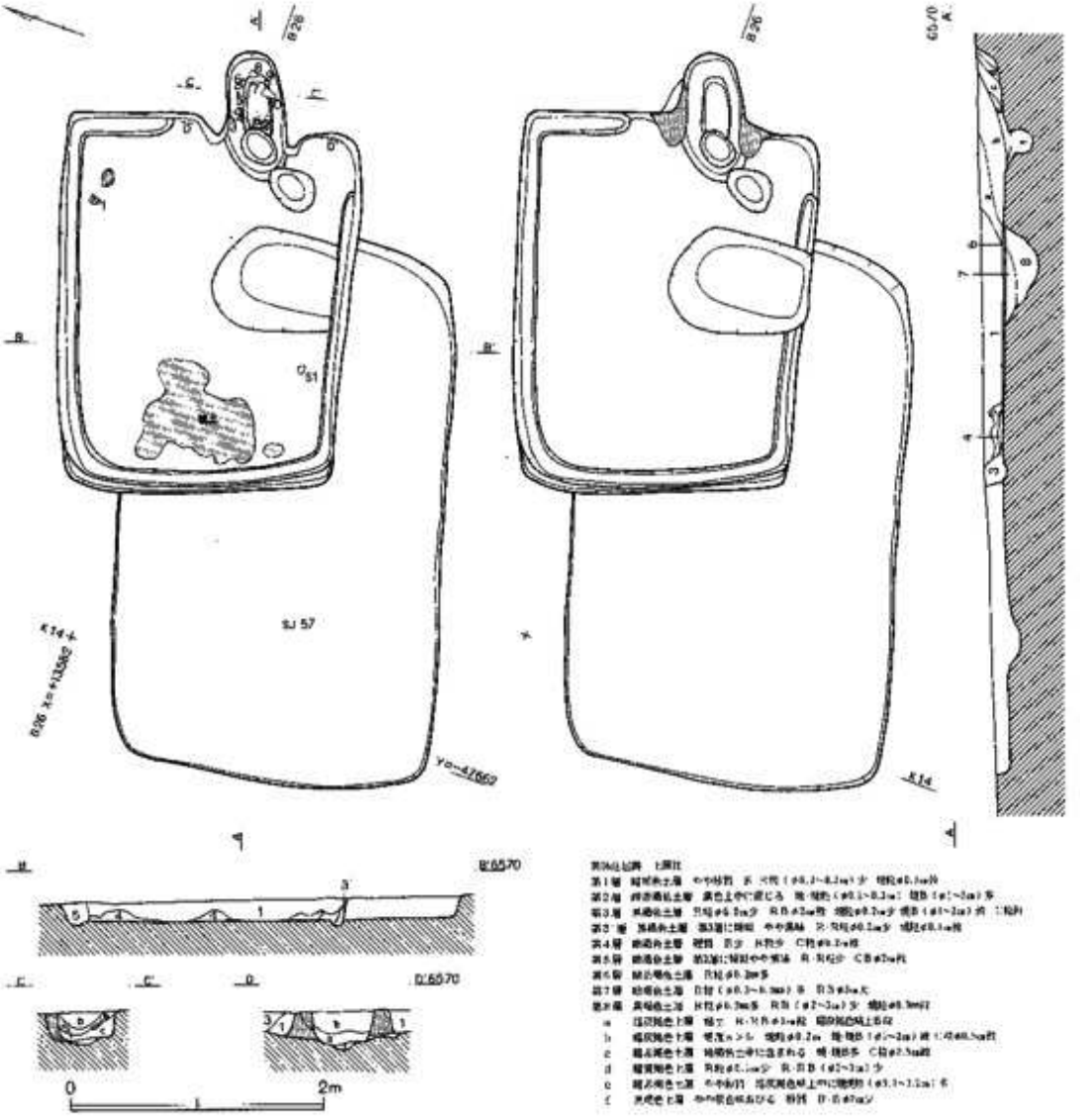
出土遺物は全て浮いた状態である。

第54号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.0 － 2.8	体部は僅かに内湾して立ち上がり。口唇部肥厚しやや屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1／10。須恵杯1。灰色。
須恵高台付椀	2	－ 5.2 2.4	高台部は完全に剥離する。体部は内湾して立ち上がり、そのまま肥厚する口唇部に移行する。下位に腰をもつ。	内改面回転横ナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。	約60%。須恵杯6。赤褐色／灰褐色。№3摩滅顕著。
須恵高台杯	3	13.0 － 3.4	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部肥厚し僅かに外反して開く。	内外面とも回転ヨコナデ。	1／10。須恵杯1。淡褐色。内外面摩滅顕著。
須恵杯	4	13.5 － 2.0	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1／10。須恵杯1。灰色。
須恵高台付椀	5	13.8 6.2 4.8	高台部は低く外開きで巾狭い。接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下位に腰をもち外傾して立ち上がり、僅かに屈曲してそのまま口唇部に移行する。底部内面平坦面をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、体部下半に及ぶ。	約90%。須恵杯1。赤褐色。口唇部片口状に打ち欠かれる？
甕底部	6	－ 4.2 1.8	底部ほぼ平坦、胴部外傾して立ち上がる。器肉やや厚い。	胴部外面縦、斜め箆ケズリ（↑←）後、底面一定方向の箆ケズリ。内面箆ナデ。	約1／4。甕1。暗褐色、赤褐色。
甕底部	7	－ 5.2 2.0	底部は小形でやや凹出気味。	胴部外面箆ケズリ後底部箆ケズリ。内面指頭ナデ。	1／5。甕1。黒褐色、赤褐色。
甕底部	8	－ 4.2 4.0	小形で薄い底部から胴部は外傾して立ち上がる。押圧技法か？	胴部外面縦、斜め箆ケズリ。内面指頭ナデ。	1／3。甕1。赤褐色。№11－12。加熱による剥離、摩滅顕著。
台付甕	9	14.2 － 9.6	胴部は上部に最大径をもち、頸部緩い段をなし内傾する口縁部に移行する。口縁部は中位で屈曲し小さく開く。口唇部直立し端部尖り気味で外面緩い稜をなす。内面中位、頸部稜をなす。	胴部外面上位横箆ケズリ（←↓）以下縦箆削り（↓↑）、内面箆ナデ（←）後指頭ナデ。口縁部横ナデ（→）後面面指頭押圧、ナデ。	約80%。甕1。赤褐色。№7＋13－重。
台付甕	10	5.6 6.7	胴部は尻すぼみで脚部は外反して開く。胴部成形後脚部接合か？	胴部外面斜め箆ケズリ（↓←）、内面箆ナデ、指頭ナデ。脚部内外面回転横ナデか？（右回転）。	約70%。甕1。赤褐色。№14＋16。
甕	11	22.0 － 11.8	胴部を上位に最大径をもち、頸部で段をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲し小さく開き、口唇端部は面をなし直下は稜をもつ。内面中位、頸部は緩い段をなす。	胴部外面横、斜箆ケズリ（←→干たりや↓）、内面箆ナデ後指頭押圧、ナデ。口縁部横ナデ、外面頸部工具ナデ後指頭押圧、ナデ加わる（未調整部分残る）。内面下半指頭押圧。	1／5。甕。赤褐色。№4。内面一部炭化物、外面炭素付着。
礫石？	12				S 2、5.5kg



第158図　第54号住居跡出土遺物



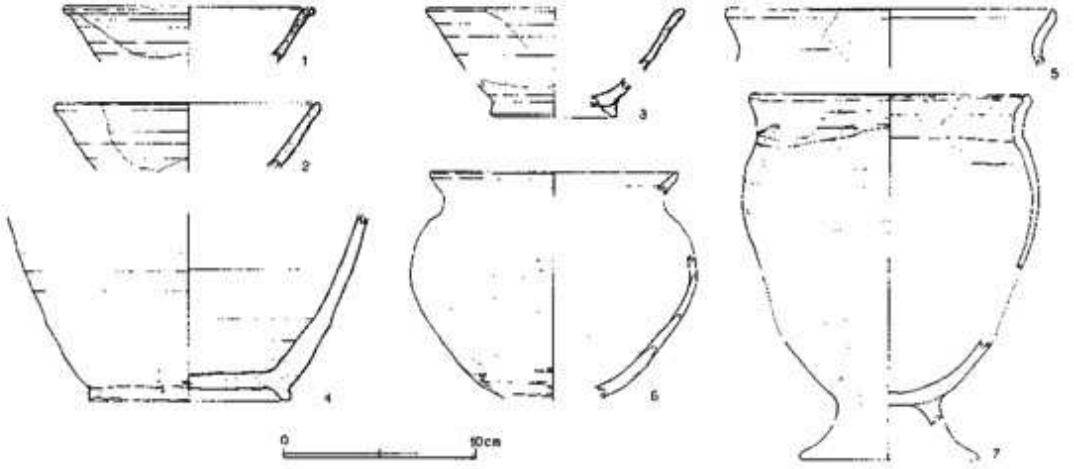
第56号住居跡（第159図）

第57号住居跡を切って構築される。北東壁は風倒木及び土壙によって切られる。

埋土は黒色土を主体とするもので良く残っている。西壁下に大量の焼土が分布しており、ある程度埋没した段階で投棄されたものとみられる。出土遺物は少量で埋土中からの出土。

平面形は略方形で東壁が竈部分で若干段をなす。床面ほぼ平坦で、中央部分に硬質面があり他も比較的硬い。第57号住居跡床面とほぼ同一レベルである。柱穴は検出されなかった。竈右側手前に小ピットが存在する。壁溝は竈～南東隅を除き一巡する（床下土壙を切っている）。床下土壙は深くしっかりしたもので、南壁下中央に接して存在する。

掘り方は竈右側が若干掘り込まれている程度で存在しない。壁溝中に壁材痕等は検出されなかった。



第160図　第56号住居跡出土遺物

竈は東壁やや右寄りで明確な赤変範囲として検出された。燃焼部は楕円形で深く掘り込まれ底面～側面はよく焼けている。右側は貼り付けた黄褐色粘土がよく残っている（天井の一部か）。袖部は大部分崩壊しているとみられる。補強の石材等はみられない。焚き口部は比較的大きなピットが穿たれる。支脚穴か黒色土を主体とするが焼土はほとんど含まれない。掘り方はやや大きめの楕円形で床は袖に対応する部分は掘られていない。

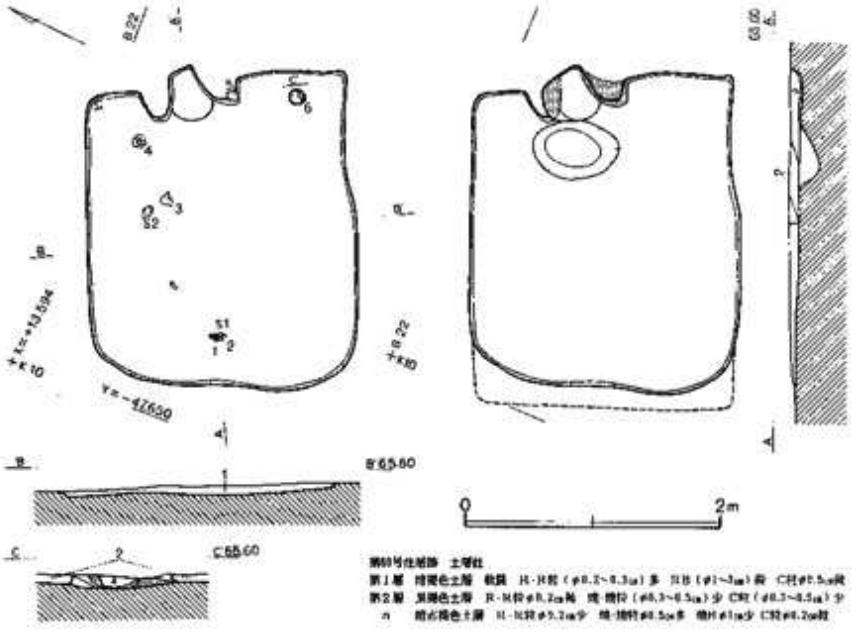
第56号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.2 － 3.0	体部は外傾して立ち上がり、口唇下で屈曲して開く。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。口唇部内面平滑。	1／。須恵杯2。灰白色。№2。
須恵杯	2	13.8 － 3.4	体部は外傾して立ち上がり、そのまま口唇部に移行し丸く収まる。	内外面とも回転ヨコナデ（右回転）。	1／5。須恵杯2。褐色。
須恵高台杯	3	13.5 6.0 5.6	高台部は高くほぼ直立する。体部は内湾して立ち上がり？そのまま口唇部に移行する。	内外面とも回転ヨコナデ（左回転？）。底面糸くり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、よく密着する。	1／4。須恵杯7。灰褐色／灰白色№3。
須恵壺	4	－ 9.5 9.5	高台部低くほぼ直立し、巾は一定しない。接地面ほぼ平坦。底部ほぼ平坦。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面回転ヨコナデ（右回転）、外面下端箆ケズリ。底面指頭ナデで未調整部ふくむ。内面周縁部指頭押圧加わる。高台貼付け後内外面工具ナデか？接地面圧痕残る。	約1／3。須恵杯1。灰色（褐色）灰白色。№10。外面一部暗赤褐色。
甕	5	17.2 2.7	口縁部上半は緩く屈曲し小さく開く。口唇部直立し尖り気味。	内外面とも横ナデ、外面屈曲部指頭押圧加わる。	1／20。甕1。暗褐色。
台付甕	6	13.0 － 12.0	胴部大半を欠失する。胴部は尻すぼみで、上位に最大径をもつ。頸部で微かな段をなし口縁部に移行し、中位で緩かに外反して立ち上がる。口唇部直立し尖り気味、外面直下鋭い段をなす。	口縁部ヨコナデ（←）、外面中位指頭押圧、ナデ。胴部外面上位横箆ケズリ（←←↓）、以下縦、斜箆ケズリ（↓）で下部若干の指頭ナデ。内面箆ナデ、丁寧平滑。接合部は回転ヨコナデ（右回転）か？内面指頭ナデ。	約1／3。甕1。赤褐色。№3－8。内外面一部炭化物付着、接合しないが同一個体。

第56号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	7	14.5 — 19.0	底部はやや凸気味で、器肉薄い。胴部は外傾して立ち上がる。口縁部は内傾して立ち上がり、中位で屈曲して内湾気味に開く。口唇直立し先端尖り気味。外明直下緩い稜をなす。下胴部から脚部は接合しないが同一個体。脚部は低い。	胴部外面縦筋ケズリ（↓）。底面筋ケズリか？内面指頭ナデ？。口縁部内外面ヨコナデ（→）、外面屈曲部〜上位は指頭押圧。胴部上半横筋ケズリ、以下縦筋ケズリ。接合部横ナデ（或は回転横ナデか接合部ナデ（或は回転横ナデか？）。	1／5。素1。淡赤褐色。赤彩顕著。

第60号住居跡（第161図）



第161図　第60号住居跡平面図

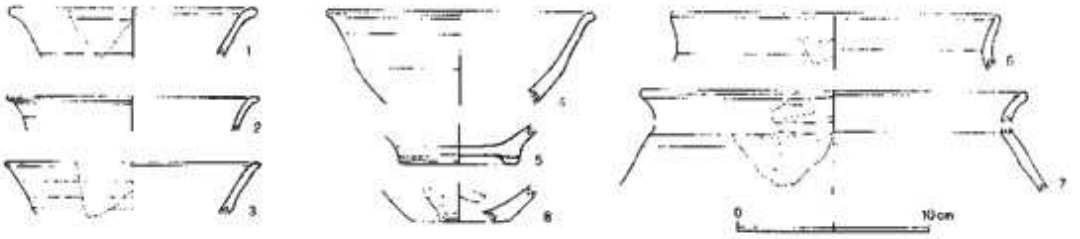
ごく小形の住居跡として確認され壁外施設は検出されなかった。

埋土はほとんど残っていない。出土遺物は少量で大部分が竈周辺の埋土中出土。

平面形は小形の方形乃至長方形（西壁はすでに削手されている）。南壁は中央部で若干歪む。床面は部分的に露出していた。ほぼ平坦で、全体に堅いが特に竈前面右側が硬い。柱穴、壁溝等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はほとんどない。

掘り方は竈前面が楕円形に若干凹むが存在しない。貼り床も認められなかった。

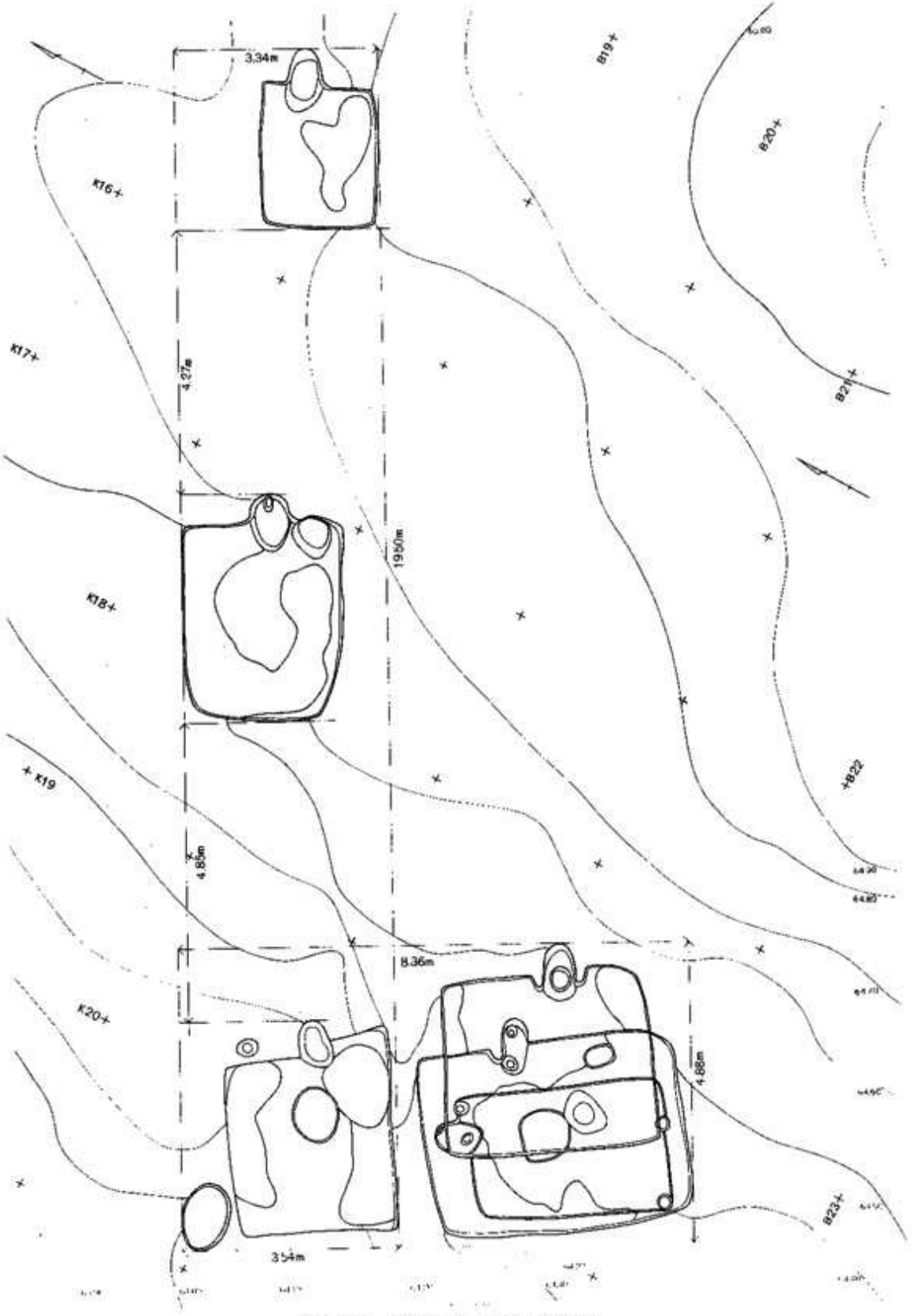
竈は東壁左寄りに付設され、焼土の赤変範囲として明確であった。竈軸は住居主軸に対してかなり傾いている。燃焼部は略方形で左側面は緩く立ち上がる。底面ほぼ平坦で焚き口迄のびる。袖はほとんど残存していない。



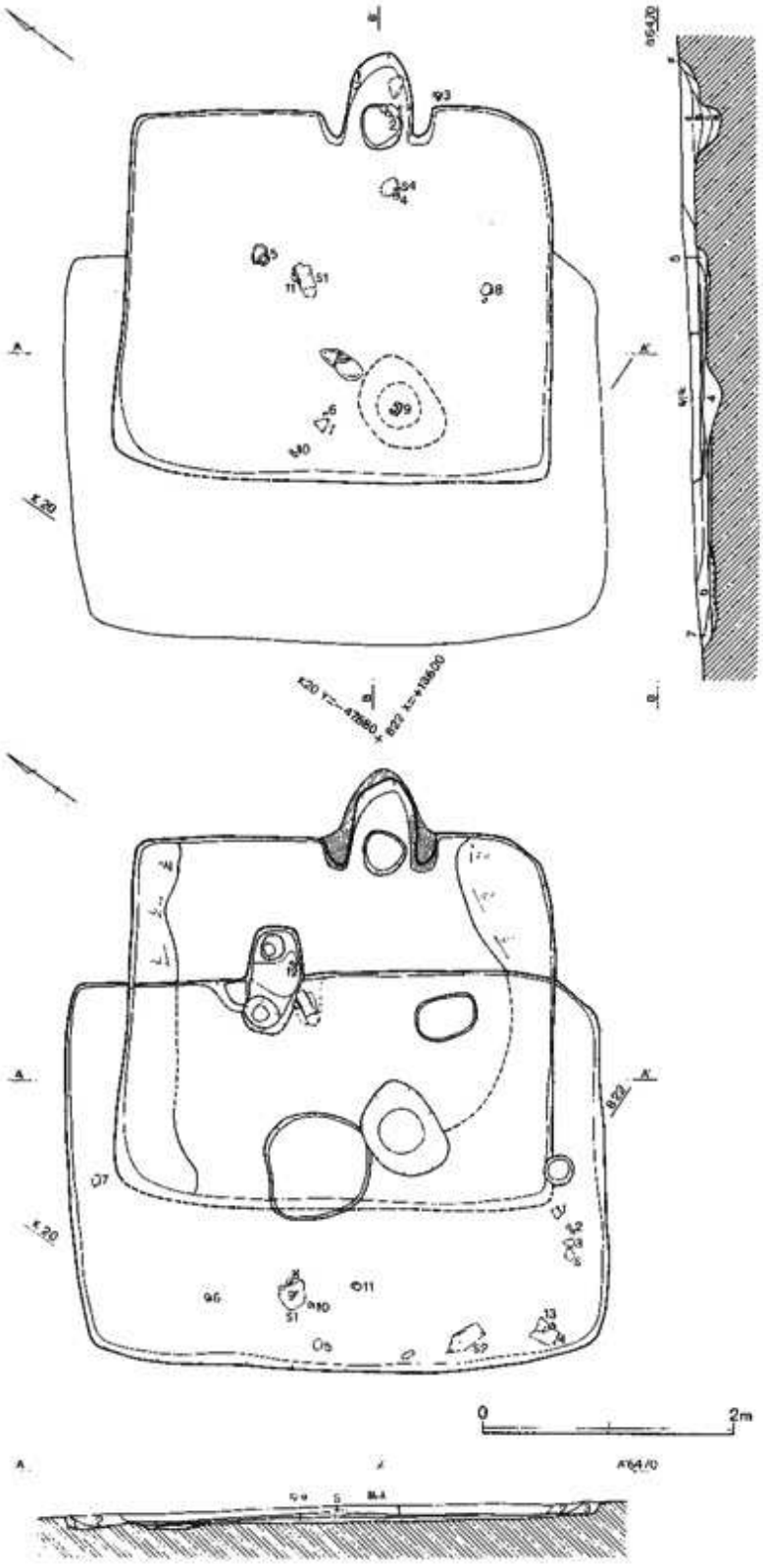
第162図　第60号住居跡出土遺物

第60号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台杯	1	13.0 － 2.3	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1／10。須恵杯2。黒褐色。摩滅顕著。
須恵高台杯	2	13.4 － 2.7	体部は外傾して立ち上がり、そのまま口唇部にい項し、やや外面凸状を呈す。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面平滑。	1／10。須恵杯5。灰白色。No 6
須恵杯	3	13.2 － 1.8	体部は外傾して立ち上がり、口唇部肥厚し大きく屈曲して開き、上面ほぼ平坦。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1／10。須恵杯1。灰白色。
須恵高台付椀	4	14.0 － 4.8	体部は内湾して立ち上がり、そのまま口唇部に移行し、外面やや凸状を呈す。比較的器肉厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面平滑。	約1／4。須恵杯5。灰白色
須恵高台杯	5	－ 6.0 1.5	高台部は低く幅広、接地面ほぼ平坦で中央凹む。底部は凸出しやや厚く、体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面丁寧平滑。高台部貼付け後指頭ナデ、底面糸きり痕跡で消す。或は円板技法か？	約90%。須恵杯5。灰褐色。No 4。
甕	6	17.2 － 2.6	口縁部は中位で屈曲して開く。口唇部丸く収まる。	口縁部横ナデ、外面指頭押圧加わる。	1／20。甕1。褐色。No 6。内外面一部黒斑。
甕	7	20.2 － 1.6	口縁部は中位で外反して開く。口唇部は直立気味で丸く収まる。	口縁部横ナデ、外面指頭押圧、ナデ加わる。	1／20。甕1。赤褐色（黒色）。No 3。摩滅顕著。
甕底部	8	－ 5.0 1.5	底部は小形で器肉薄い。体部は外傾して立ち上がる。	胴部外面縦、斜め箆ケズリ、底面箆ケズリ。内面箆ナデ、丁寧平滑。	1／3　甕1。赤褐色。



第163図　第３ｂ住居跡群配置図



第164図　第66、67号住居跡平面図

第66号住居跡（第164図）

第67号住居跡との重複であるが第66号住居跡の範囲は不明確であった。すでに遺物が露出している状態であった。

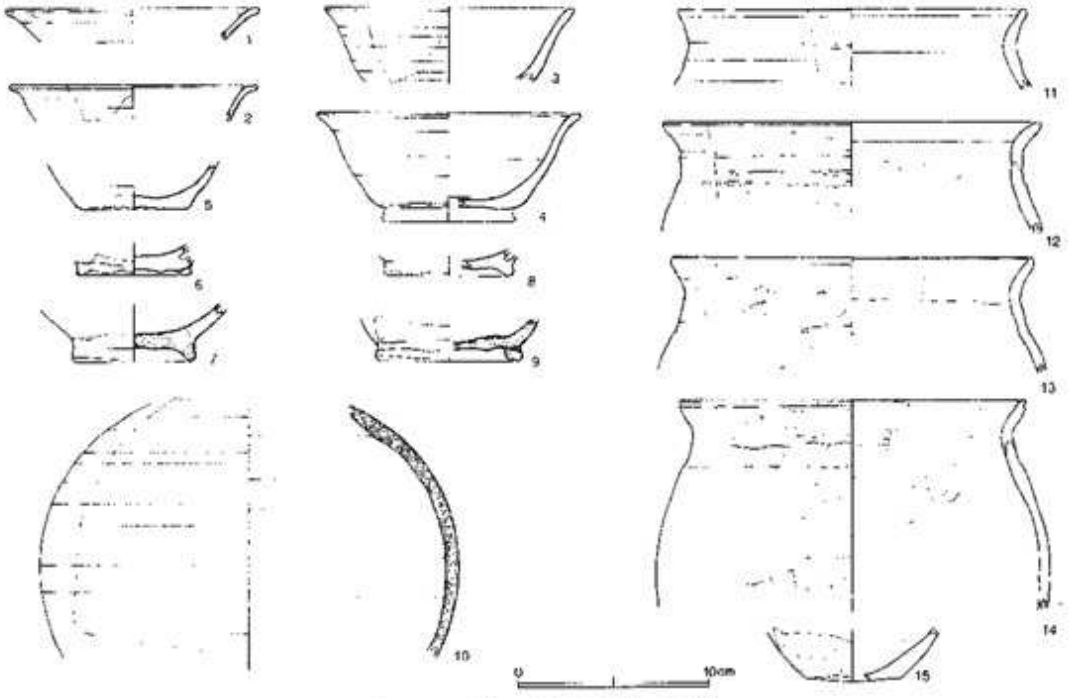
埋土は浅いが少量の遺物は大部分埋土中出土。第67号住居跡との関係は断面によると第67号住居跡埋土がやや推積した段階で、埋土を切り込んで第66号住居跡を造成している。第67号住居跡→第66号住居跡の構築順で、第67号住居跡竈は埋め戻し後貼り床状に硬く締められている。平面形はやや横長の長方形で、南東隅が湾曲する。床面はほぼ平坦で全体に柔らかい。竈前面～中央部がやや硬い程度、第67号住居跡と重複部分は貼り床が施される。北半はロームブロックの凹凸が目立つ。柱穴、壁溝等は検出されなかった。西壁下の床下土壙ははっきりしないが伴うか。生活段階に伴う遺物はほとんどない。

掘り方は南、北壁下に比較的浅いものが存在する。第67号住居跡と重複する部分は不明瞭で、第67号住居跡掘り方と区別（切り合いは把めなかった）できなかった。西壁外側に位置するやや扁平な石は、中央に存在する石をみるとあるいは共存するかもしれない。第68号住居跡がすぐ北側約0.9mに位置する。

竈は東壁やや右よりに付設され明確な赤変範囲として確認された。竈前方に流失粘土が分布する。燃焼部は楕円形で底面～側面はよく焼けている。底面にはやや大きめのピットが穿たれる。
袖部は粘土貼り付けで壁をやや掘り込む。
出土遺物は全て浮いた状態である。

第66号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.4 － 1.6	体部は外傾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲する。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1／10。須恵杯2。淡褐色。
須恵杯	2	13.0 － 1.9	体部は外傾して立ち上がり、口唇部大きく屈曲する。先端尖る。	内外面回転横ナデ（右回転）。口唇部内面平滑。	1／10。須恵杯1。灰白色。
須恵高台付椀	3	13.0 － 3.9	体部は緩かに内湾して立ち上がり、やや屈折してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、口唇内面直下平滑。	1／5。須恵杯5。灰色。
須恵高台付椀	4	13.8 － 5.1	高台部は剥離する。体部は下端に腰をもち内湾気味に立ち上がり口唇部肥厚し外反して開く。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。底面糸きり痕跡で消す？	1／2。須恵杯1。灰白色。№9＋SJ66出土片。
須恵高台杯	5	－ 5.4 2.4	高台部は剥離する。底部は凸出気味で器肉厚く、体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。内面丁寧平滑。	約80%。須恵杯2。褐色。№10＋SU67 №6。
須恵高台杯	6	－ 5.6 0.8	高台部低く外反気味で、巾は一定しない。接地面外ソギ状	内外面回転横ナデ（左回転）、底面中心部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、外面工具ナデか？接地面未調整で圧痕残る。	約90%。須恵杯5。茶褐色（褐色）茶褐色。
須恵高台杯	7	－ 6.0 2.7	高台部やや高く外反気味、接地面外ソギ状。よく密着していない。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）。内面丁寧平滑。	1／4。須恵杯1。褐色。内面黒斑。



第165図　第66号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台杯	8	ー 6.5 1.0	高台部やや外反気味で低い。接地面外ソギ状。	内外面回転横ナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	1／3。須恵杯3。褐色。
須恵高台付椀	9	ー 7.2 2.1	高台部は中位で段をなし幅広い。接地面丸みをもち中央やや凹む。体部下端で緩い稜をなし立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。高台部粘土貼付け後内面強い、外面体部下端まで及ぶ指頭ナデ。	約1／4。須恵杯1。灰色。
須恵壺	10	ー - 13.2	体部は張りをもち上位に最大径をもつ。大半を欠失する。	内外面回転横ナデ（右回転）、外面若干のナデ加わる。	約1／4。須恵壺1。灰色、灰白色。No.5。焼成良好・器壁堅緻。
甕	11	18.2 ー 4.0	頸部で段をなし、口縁部はやや内傾して立ち上がり、中位で屈曲して開く。口唇部直立し丸く収まり、外面直下緩い稜をなす。	口縁部横ナデ、外面中位～上位指頭押圧、ナデ加わる。	1／10。甕1。淡褐色。
甕	12	19.7 ー 5.8	やや張りをもつ胴部から頸部で段をなし、口縁部に移行する。口縁部僅かに内傾して立ち上がり、中位で屈曲して開く。口唇部丸く収まる。内面中位、頸部緩い稜をなす。	口縁部横ナデ（→）後、外面中位、頸部工具ナデ（←）で内外面頸部～上位指頭押圧、ナデ加わる。	1／5。甕1。黒褐色、赤。外面炭素付着。
甕	13	19.0 ー 5.3	張りのある胴部から微かな段をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き、口唇部直立する。外面下緩い稜をなす。内面緩い稜をなす。	胴部外面横斜ケズリ（←←）、内面荒ナデ後指頭ナデ。口縁部横ナデ（→）、外面頸部、屈曲部工具ナデ後指頭押圧、ナデ。	1／4。甕1。淡褐色。
甕	14	18.1 19.0 ー	最大径を上位にもち張りのある胴部から、頸部で緩い稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開く。口唇部は直立し尖り気味で外面下沈線状をなし緩い稜をもつ。外面輪積み痕残る。	胴部外面横斜め荒ケズリ（←←）、以下縦斜ケズリ（↓←）。内面荒ナデ、上位指頭ナデ加わる。口縁部横ナデ、外面頸部、屈曲部工具ナデで下半中心に指頭押圧、ナデ。内面ハケ状工具によるナデ（←←↓）。	1／5。甕1。褐色。No.2・覆出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	15	・・ 5.0 2.4	底部はやや凸出気味で器壁薄い。押圧技法か？	外面縦篦ケズリ（ナー）後、底面→定方向の篦ケズリ。内面荒なで、丁寧平滑。	1／3。焼1、黒色、赤褐色。

第67号住居跡（第164図）

第67a号住居跡

当初第66号住居跡に切られる吉ケ谷式期の住居跡と考えられた。壁外施設は認められなかった。下層住居跡（第67b号住居跡）の存在は全く判らなかった。

埋土はほとんど残っていない。竈部分は若干の焼土が分布する程度。出土遺物は少量で第66号住居跡の外側特に西壁下に集中出土する。

平面形は横長の長方形で、北隅以外は湾曲する。床面は第66号住居跡より約5cm程低く北側に向ってやや傾く。柱穴は1ケ所南壁下で抜き取り痕が残る。壁溝は認められなかった。貯蔵穴は竈右側のやや離れた位置の長方形のものと南西隅の小ピットが該当する。生活段階に伴う遺物は貯蔵穴出土のものだけである。床下土壙の帰属は不明確である。須恵大甕が出土する。

掘り方は北半部に存在し、第66号住居跡との重複によるか北隅がやや深い。床下土壙がほぼ中央に存在するがごく浅いもので皿状の断面をもつ。第67a、b号住居跡どちらに伴うか判然としないが遺物の存在と住居跡中央という点から第67a号住居跡（上層）に伴うものとした。

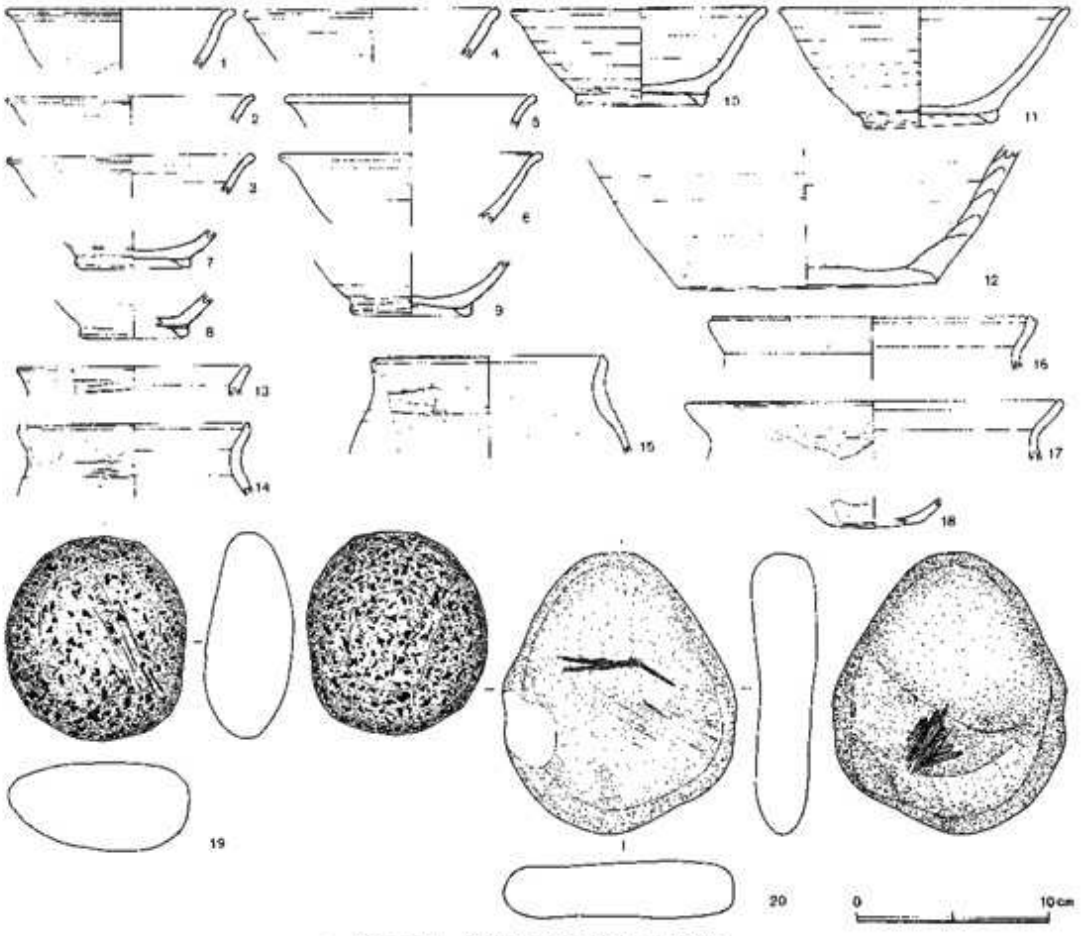
竈は東壁左寄りで燃焼部と袖の一部がかろうじて残存した。燃焼部は略長方形で下面及び側面上部がよく焼けており両側に小ピットが穿たれる。出土遺物は底面から須恵坏が出土した。袖部は粘土貼り付けで右袖は棒状の片岩が芯として使用されていた。粘土は壁をやや掘り込んで貼り付けてある。第68号住居跡は北壁から 0.4～ 0.7m程しか離れていない。

第67b号住居跡

掘り方段階で焼土の出土により竈と判断されたもので、上層から全く把握できなかった。第67b号住居跡竈は燃焼部のみで、ほぼ楕円形状でそれ程焼けていなかった。燃焼部下底面のみの残存で住居範囲も全くの推定である。第66、67a号住居跡と直交する。第66号住居跡及び第67a号住居跡aによってほとんど破壊されており詳しいことは判らない。第67a号住居跡の掘り方下で竈右側から小ピットが検出されたが、これは第67b号住居跡に伴うものとする。貼り床はみられなかった。

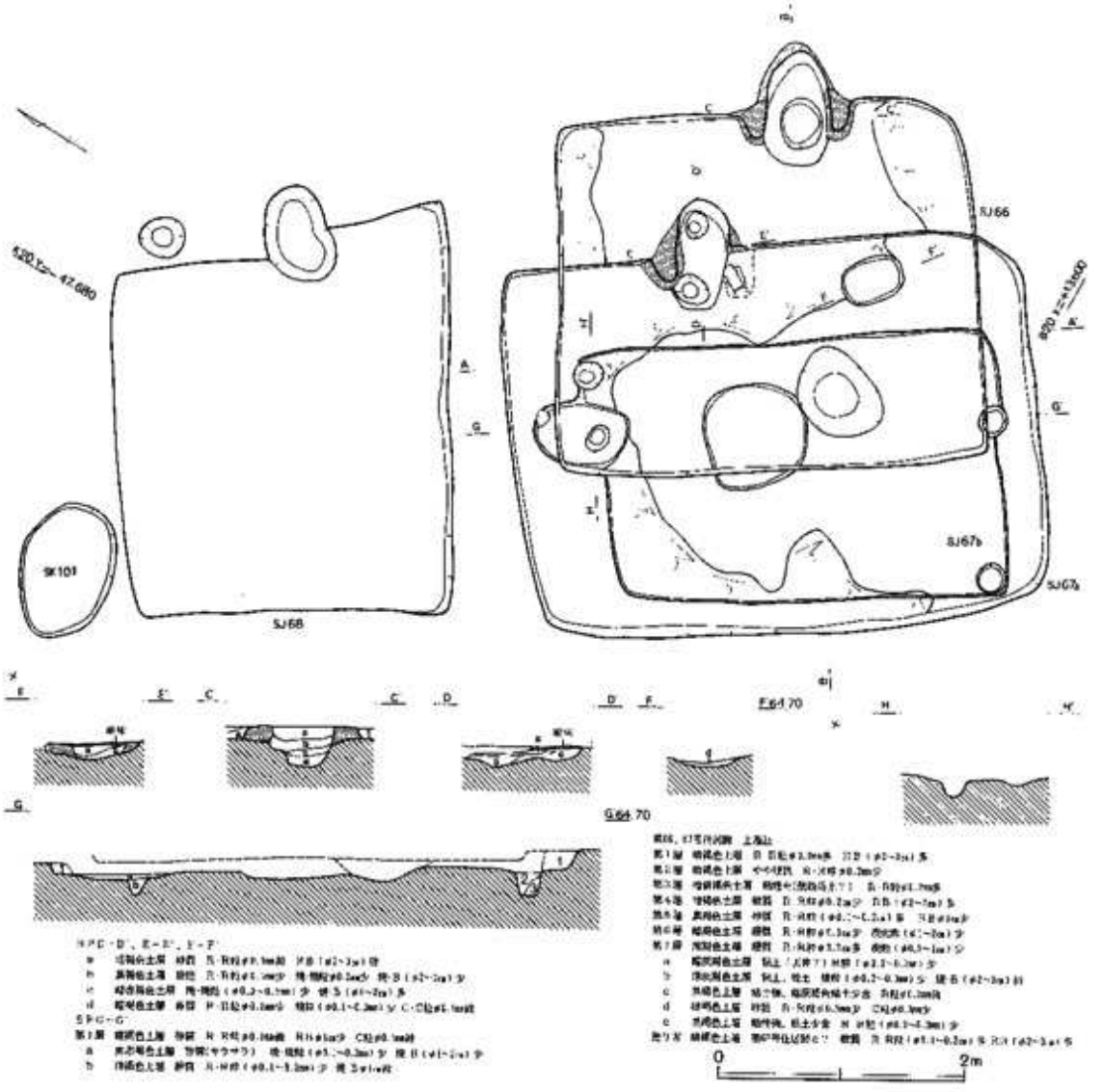
第67号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	12.0 － 3.1	体部は内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し大きく屈曲する。	内外面回転横ナデ。	1／5。須恵杯2。赤褐色。床下出土。
須恵杯	2	13.0 － 1.6	体部は外傾して立ち上がり、屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1／10。須恵杯2。灰褐色（褐色）灰褐色。新竈出土。



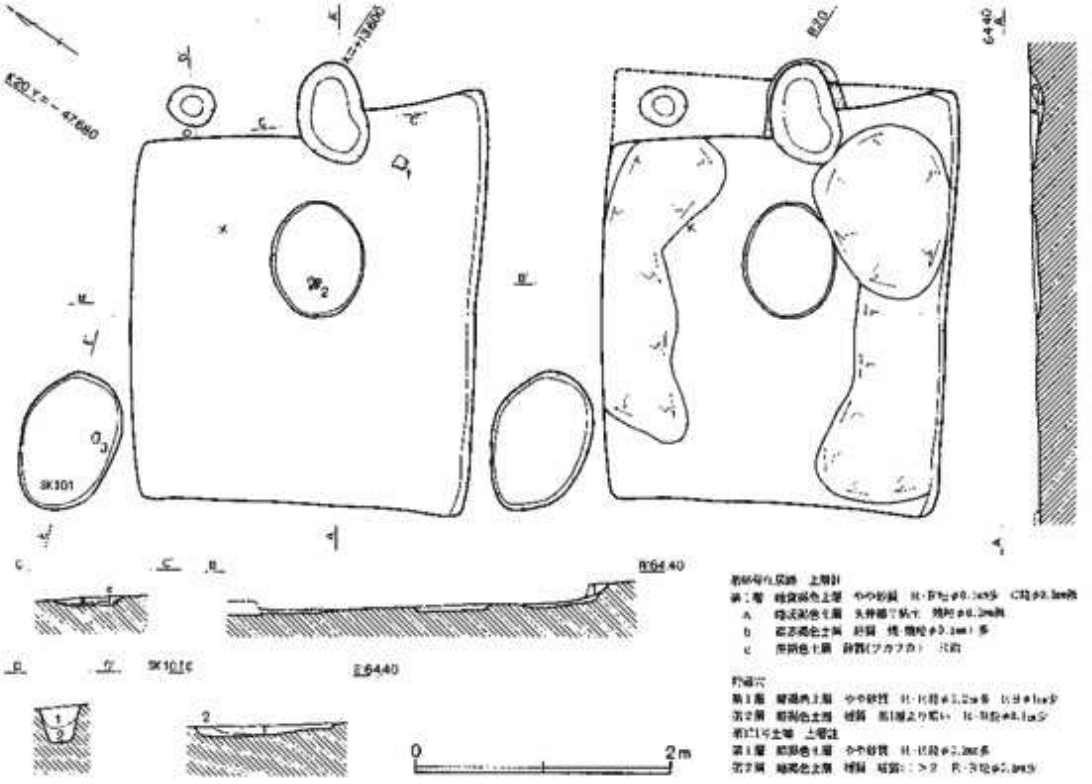
第166図　第67号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	3	13.0 － 2.0	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚しやや屈曲する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	約1／3。須恵杯7。黒色（淡褐色）灰黒色。№12＋床下＋竈。
須恵杯	4	13.4 － 2.7	体部は僅かに内湾して立ち上がり、やや屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ。	1／10。須恵杯2。淡褐色。床下出土。
須恵杯	5	13.2 － 1.8	体部は外傾して立ち上がり、口唇部飛行し僅かに屈曲して開く。	内外面回転横ナデ。	1／10。須恵杯2。淡褐色。新竈出土。摩滅顕著。
須恵高台付椀	6	13.8 － 3.7	体部は内湾して立ち上がり、屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、外面下反指頭ナデ、内面丁寧平滑。	1／3。須恵杯1。灰褐色。床下出土。
須恵高台杯	7	－ 5.7 1.5	高台部は低くほぼ直立する。接地面ほぼ平坦で中央やや凹む。体部は下端で稜をなす。	内外面回転横ナデ。高台部粘土貼付け。	約80%。須恵杯3。灰白色。№12＋竈。摩滅顕著。
須恵高台付椀	8	－ 5.8 2.8	高台部低くほぼ直立し、やや巾狭い。接地面外ソギ状。体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。接地面摩滅顕著。	1／3。須恵杯1。灰白色、灰色



第167図　第66～68号住居跡、第101号土壙平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台杯	9	－ 5.8 2.8	高台部ほぼ直立し巾狭く、接地面外ソギ状。凸出する底部に低い高台部を張り付ける。体部は下端で稜をなし内湾気味に立ち上がる。内面重ね焼き痕？残る。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面指頭ナデ。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデで粗く糸きり痕撫で消す、外面工具ナデ。	約70%。須恵杯２。褐色。№５。底面炭素付着。
須恵高台付椀	10	13.3 6.3 5.1	高台部はやや高くほぼ直立し巾狭い。接地面尖り気味。体部は下位に稜をもち内湾気味に立ち上がり、僅かに屈曲しそのまま口縁部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。底面糸くり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、接地面撫ナデか？。	約80%。須恵杯５、白粒大量。灰色／灰褐色。№１～３＋ＳＪ66出土片。
須恵高台付椀	11	15.2 6.1 6.2	高台部ほぼ直立しやや低い。接地面外ソギ状。体部は内湾して立ち上がり僅かに外反して口縁部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、高台部粘土貼付け後内面指頭ナデで糸きり痕粗く撫で消す、外面工具ナデ。	約80%。須恵杯５。粒度小さい。灰白色。№４－８＋13＋床下出土。摩滅顕著。



第168図　第68号住居跡、第101号土壙平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵甕	12	― 13.5 7.0	ほぼ平坦な底部から、体部は僅かに内湾して立ち上がる。部内面凹凸目立つ。	板状の底部に体部は2センチ前後の粘土紐積み上げ。内外面回転横ナデ（右回転）、外面篦ナデ。底部内面指頭押圧ナデ。外面周辺篦ケズリで中央部右回転調整部分の残る篦ナデ。	1／3。須恵甕1。灰色。№4。
台付甕	13	12.2 ― 1.6	口縁部は中位で屈曲し？外傾して小さく開く。内面緩い稜をなす。器肉厚い。	口縁部横ナデ、外面口唇下工具ナデ。屈曲部指頭押圧、ナデで胴部篦ケズリ痕残る。	1／10。甕1。赤褐色。№1。
台付甕	14	12.0 ― 3.6	張りのある胴部から微かな段をなし口縁部に移行する。口縁部僅かに内傾し中位で屈曲して小さく開く。口唇部直立し先端尖り、端面沈線状をなす。	胴部外面横篦ケズリ（←）後指頭ナデ、内面篦ナデ後指頭押圧。口縁部横ナデ、頸部工具ナデ（←）で中位指頭押圧、ナデ（←←）加わる。	約1／3。甕1。赤褐色。床下出土＋竈
台付甕	15	12.0 ― 5.0	張りのある胴部から頸部は微かな稜をなし内傾してそのまま口縁部に移行する。中位で直立気味に立ち上がり、外面稜をなし端面沈線状巡る。内面中位、頸部稜をなす。微かに輪積み痕残る。	胴部外面横斜め篦ケズリ（←←）、内面篦ナデ後指頭ナデ。口縁部横ナデ（→）、頸部、口唇部工具ナデ。	1／4。甕1。赤褐色。№7。内外面一部炭素付着。
甕	16	16.8 ― 2.8	口縁部は中位で屈曲し、内湾気味に開く。口唇部小さく直立し、外面稜をなし端面沈線状に凹む。内面緩い稜をなす。	口縁部横ナデ、外面屈曲部指頭押圧、ナデで未調整部分残る。	1／10。甕1。赤褐色。床下出土。
甕	17	19.8 ― 3.0	口縁部は内傾して立ち上がり、中位で屈曲して開く、口唇部直立気味で丸く収まり、外面鈍い稜をなす。	口縁部横ナデ（→）後、屈曲部～上位指頭押圧、ナデ加わる。	1／10。甕1。赤褐色。床下出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕底部	18	5.0 1.2	底部は凸出気味で、器肉薄い。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面縦箆ケズリ、底面箆ケズリ。内面箆ナデ。	1／10。甕1。赤褐色。床下出土。
砥石	19				S 7、655g
砥石	19				S 7、740g

第68号住居跡（第168図）

殆ど壊滅状態の住居跡で南壁下がわずかに残っている。床面はほぼ露出しており部分的にはとんでいる。第66～67号住居跡とごく接近している。西隅に近接して第101号土壙が存在する。

埋土はほとんど残っていない。

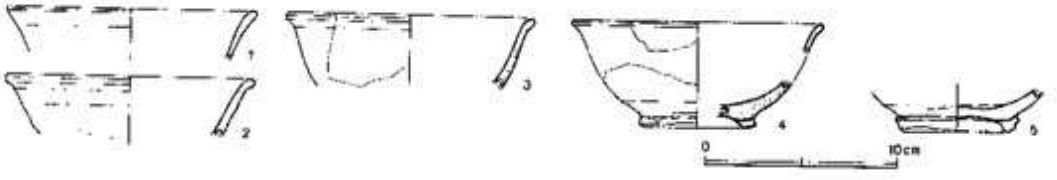
平面形は略長方形ないし方形で、竈壁が外側へ広がると考えられる（貯蔵穴を含む範囲）。床面はすでに削手されてとんでいる。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は竈左側、北隅の小ピットが該当する。床下土壙が竈前面に認められやや楕円形呈する。

掘り方は南壁下のものは明確であるが、北壁下のものは不明確。全周した可能性もある。掘り方内、及び床下土壙から遺物が出土している。

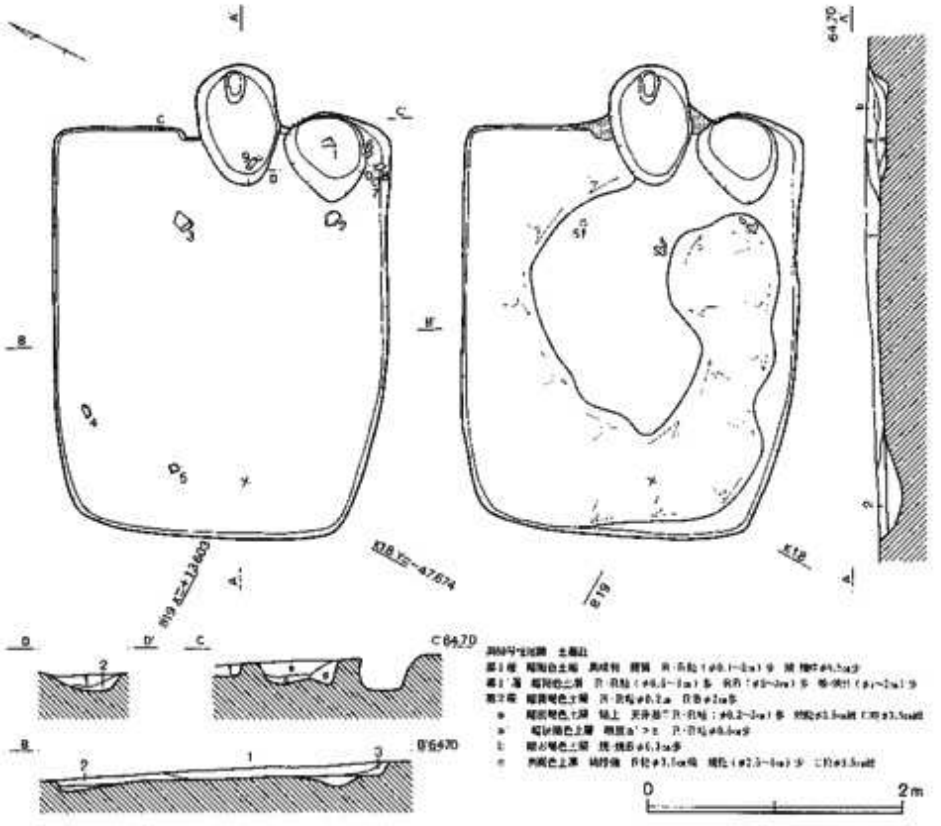
竈は東壁ほぼ中央に位置し、燃焼部底のみ残存する。燃焼部は楕円形で底面はよく焼けていた。袖は全く残っていない。

第68号住居跡、第101号土壙出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.1 － 2.4	体部は外傾して立ち上がり口唇部肥厚しそのまま開く。器壁薄い。	内外面回転横ナデ。	1／5。赤褐色。床面出土。
須恵杯	2	13.0 － 3.2	体部は外傾して立ち上がり、口唇部僅かに肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1／10。須恵杯1。灰白色。床下出土。
須恵高台付椀	3	13.0 － 3.8	体部はやや内湾して立ち上がり、口唇部肥厚しやや屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1／5。須恵杯1。灰褐色。№2。摩滅顕著。
須恵高台付椀	4	13.1 5.0 5.6	高台部はやや外開きで低く幅広い。接地面ほぼ平坦。僅かに凸出する下部に粘土紐付け。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は接合しないが同一個体で、僅かに屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。高台部粘土貼付付け後指頭ナデ。密着していない。	1／3。須恵杯2。赤褐色。№3。摩滅
須恵高台杯	5	－ 5.4 2.0	高台部は低く逆台形で幅広く、接地面丸みを持ちよく密着していない。体部はやや内湾気味にたちあがる。	内外面回転横ナデ（右回転）、高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ、底面糸きり痕残り、外面工具ナデ。	1／3。須恵杯1。灰色。№1。SK101。



第169図　第68号住居跡、第101号土壙出土遺物



第170図　第69号住居跡平面図

第69号住居跡（第170図）

黒色土の明確な範囲として確認された。竈両脇やや離れて小ピットが存在するが新しく他に伴うような壁外施設は認められなかった。

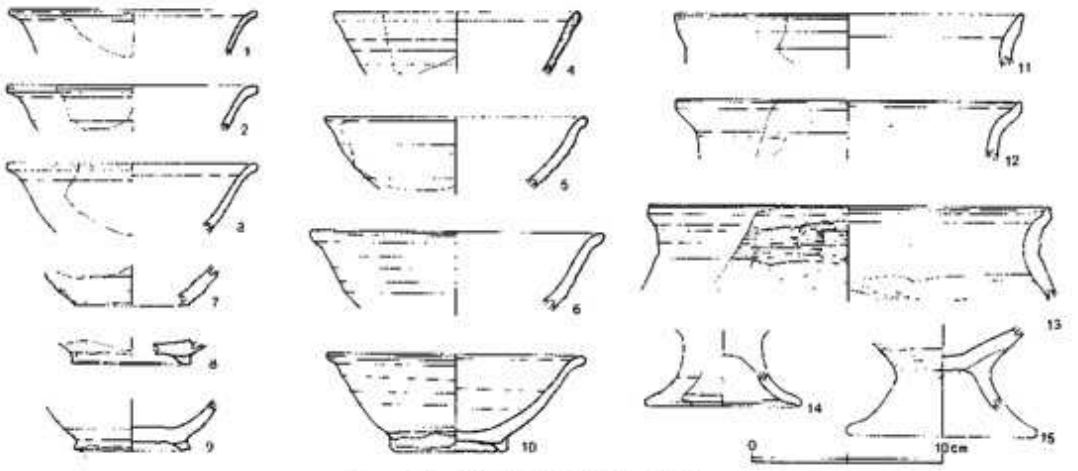
埋土は比較的残っており自然堆積とみられる。出土遺物は少量である。

平面形は斜面に沿うためか西壁が湾曲する略長方形。東壁は貯蔵穴の分だけ壁が凸出する（わずかに段をもつ）。

床面は斜面に造られているため西北へわずかに傾斜し竈前面を中心として比較的硬いが、貼り床はない。柱穴、壁溝は認められなかった。貯蔵穴は竈右袖に接する位置にあり、壁にかかる部分はオバーハングする。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は西壁北半を除いて一周し各隅はやや深く掘り込まれる。

竈は東壁ほぼ中央に位置する。燃焼部は略楕円形で、底面はやや焼けているが全体によく焼けて。先端部と右袖下に縦長の小ピットが穿たれる。袖基部が若干残存したが大部分崩壊したと考えられる。壁をやや掘り込んでいる。焚き口は緩く立ち上がり周辺はよく踏み締まっている。



第171図　第69号住居跡出土遺物

第69号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.0 － 2.3	体部は外傾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転？）。	1／10。須恵杯5。灰黒色（地色）灰褐色。
須恵杯	2	13.2 － 2.4	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部肥厚しやや屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1／10。須恵杯5。黒褐色黒褐色。（褐色）
須恵高台杯	3	13.2 － 3.6	体部は僅かに内湾して立ち上がり、屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面平滑。	1／10。須恵杯6。灰色。
須恵杯	4	13.0 － 3.4	体部は僅かに内湾して立ち上がり、やや屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）。内面平滑丁寧。外面屈曲は指頭ナデによる。	1／10。須恵杯2。赤褐色。
須恵高台付椀	5	13.8 － 3.7	体部は大きく内湾して立ち上がり、屈曲してそのまま開く。器内厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。屈曲部は指頭ナデによる。	約1／4。須恵杯5。灰色。№6。
須恵高台付椀	6	15.4 － 4.1	体部は内湾して立ち上がり、やや屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転？）。	1／4。須恵杯1。黒色。摩滅顕著。
須恵高台杯	7	－ 6.0 1.8	高台部剥離する。底部は僅かに凸出し、体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ(右回転)、内面丁寧。底面糸きり痕残る。	1／4。須恵杯1。暗赤褐色、黒色。
須恵高台杯	8	－ 6.1 1.1	た褐色台部低くほぼ直立し幅広い。接地面内ソギ状。	内外面回転横ナデ。	1／5。須恵杯3。淡褐色。風化により摩滅顕著。
須恵高台杯	9	－ 5.2 2.4	高台部は外開きで低く、接地面平坦。体部は内湾して立ち上がり、下位で稜をなす。底面厚い。	内外面回転横ナデ（右回転？）、外面下反指頭ナデ、内面丁寧平滑。高台部粘土貼付け後内面指頭、外面工具ナデ。底面糸きり痕残る。	1／3。須恵杯2。淡褐色。風化による摩滅顕著。
須恵高台付椀	10	13.6 5.8 5.1	高台部直立し幅広い接地面外ソギ状、体部は内湾して立ち上がり大きく屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。底面糸きり痕残る。高台部やや凸出する底部に粘土貼付け、内外面指頭ナデで密着していない。	90%。須恵杯5、粒度大、大量。灰褐色、黒褐色。

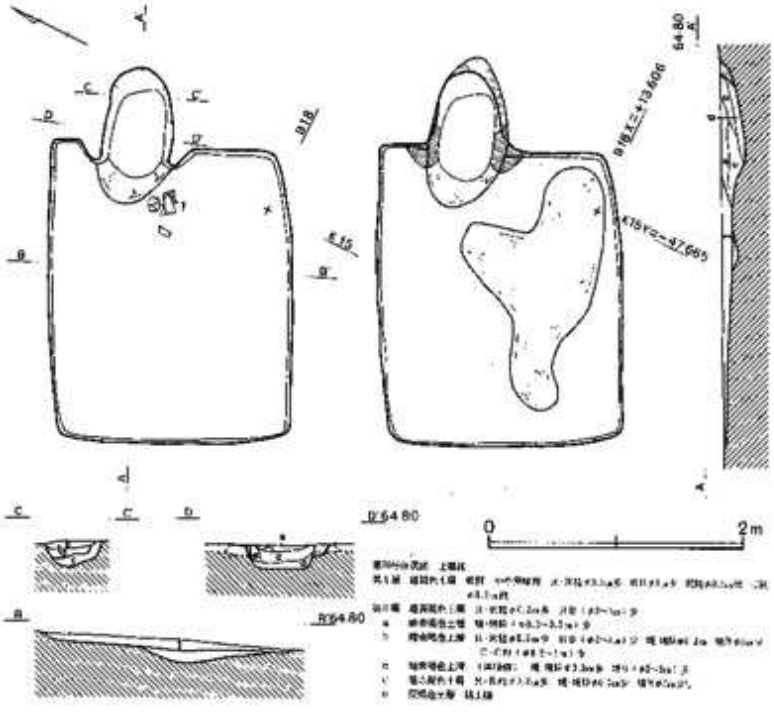
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	11	18.3 － 2.7	口縁部はやや内傾して立ち上がり、中位で屈曲して内湾気味に開く。口唇部尖り気味で外面僅かに凸出量す。	口縁部横ナデ（←）。	1／10。甕1。淡褐色。
甕	12	18.2 － 3.2	口縁部は内傾して立ち上がり、中位で外傾して開く。口唇部直立し外面緩い稜をなす。	口縁部横ナデ、外面屈曲部以上は工具ナデ（←）、以下指頭ナデ加わる。	1／10。甕1。淡褐色。外面炭素付着。
甕	13	21.0 － 4.6	張りのある胴部から頸部で段をなし口縁部に移行する。口縁部内傾気味に立ち上がり上位で外傾して開く口唇部直立し尖り気味で外面下沈線状に凹み段をなす。	胴部外面斜め筋ケズリ（←←）、内面筋ナデ。口縁部横ナデ（← ?）、外面未調整部分残る。頸部～中位工具ナデ（←）。	1／5。甕1。赤褐色。No 8。外面一部炭素付着。
台付甕	14	8.0 － 1.8	脚部は外反して開く。外面下位やや凹み先端凸出する。	内外面回転横ナデ（右回転）か？外面下位指頭押圧、ナデ。	1／10。甕1。褐色（赤褐色）、粗。裕電出土。
台付甕	13	－ － 3.5	接合部のみ残存し、胴部成形後脚部接合。底面器肉薄い。	脚部外面指頭ナデ、内面筋ナデ後指頭ナデで丁寧平滑。接合部内外面回転横ナデか（右回転）？	約80%。甕1。赤褐色。No 5

第70号住居跡（第172図）

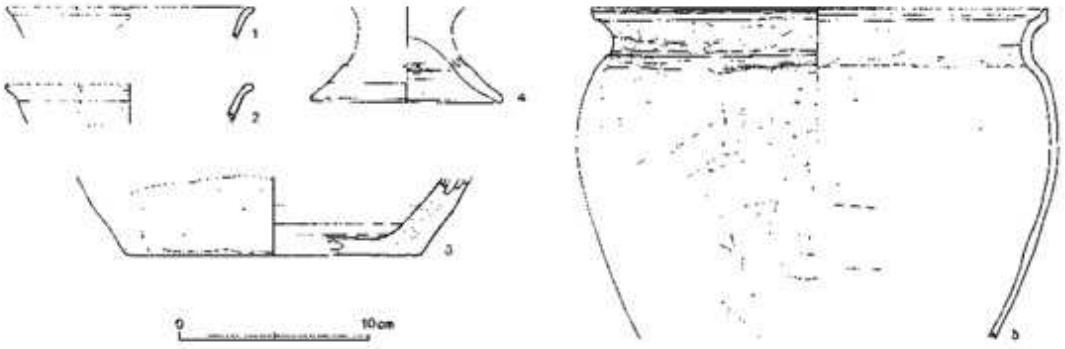
ごく小形の住居跡でほとんど残っていない。床面の大半が露出したような状態である。壁外施設は判らなかった。

埋土はほとんど残っていないが出土遺物は全て埋土中出土である。

平面形は略長方形でやや歪みがみられる。東壁は竈部分で若干の段差をもつ。床面は南側へ向かってやや傾斜し全体に柔らかい。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物は正確にいうとない。竈前面のものは若干浮いている。



第172図　第70号住居跡平面図



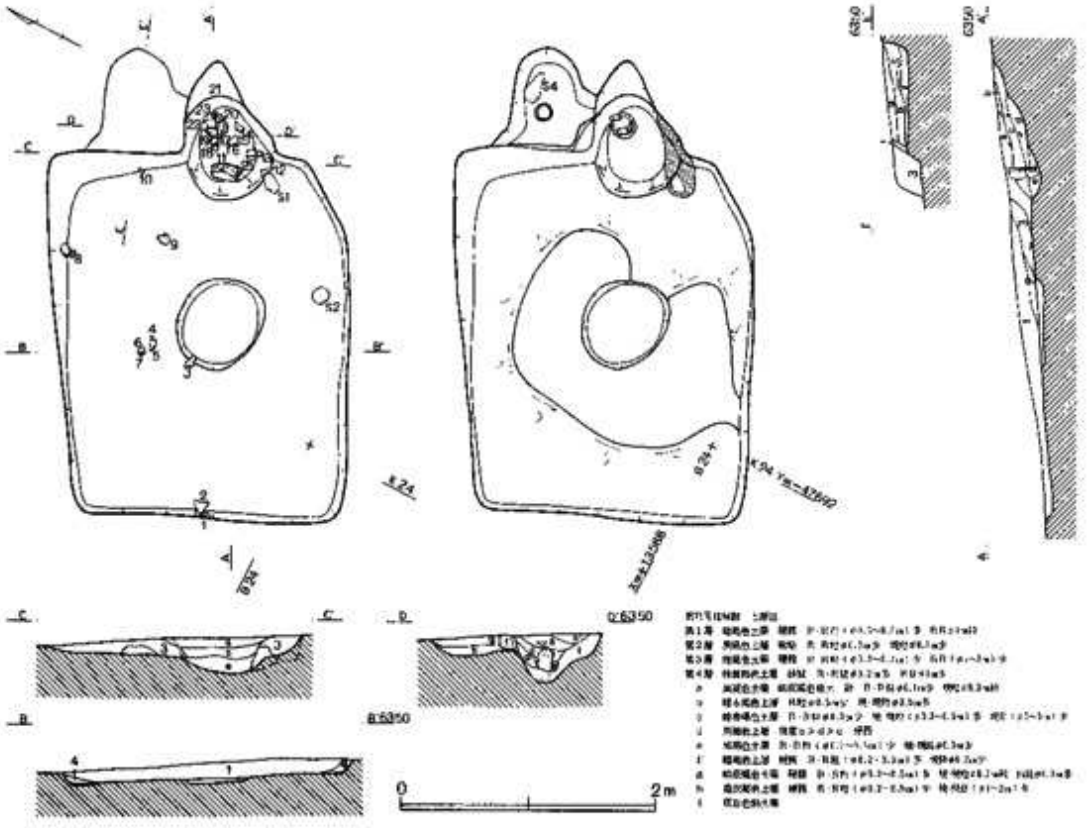
第173図　第70号住居跡出土遺物

掘り方ははっきりしないが、南半部に存在し東、西側が土壙状に深くなる。

竈は東壁左寄りに敷設される。燃焼部は楕円形で手前がやや深くなり比較的よく焼けている。袖部粘土は殆ど流出しているが壁をやや掘り込んで構築されている。補強はみられない。

第70号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.0 － 1.8	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部肥厚し僅かに屈曲して開く。	内外面回転横ナデ。	1／10。須恵杯7。黒色。
須恵杯	2	13.0 － 2.0	体部は外傾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1／10。須恵杯1。灰白色。
須恵甕	3	－ 15.5 4.0	ほぼ平坦な底部から体部は外傾して立ち上がる。底部器肉薄く、体部極厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）、体部下端箆ケズリ、底面未調整？	1／5。須恵甕1。灰褐色。竈出土。軟質。
台付甕	4	9.8 － 2.5	脚部は外反して開き下部でやや屈曲する。先端部ほぼ丸く収まる。	内外面回転横ナデ（右回転）か？外面中位～下位は指頭ナデ加わる。	口縁1／4。甕1。赤褐色。竈出土。
甕	5	23.9 － 17.3	胴部は尻すぼみで最大径を上部にもつ。頸部で大きく屈曲し段をなし、ほぼ直立する口縁部に移行する。中位で外反して開き口唇部直立し外面凸状を呈し直下は鋭い段をなす。内面頸部稜をなし緩く外反する。	胴部外面上端横箆ケズリ（→→）W以下斜め（↑→）、縦（↑）箆ケズリ。内面箆ナデ（←←）、頸部指頭押圧。口縁部横ナデ後外面指頭押圧、ナデで頸部に及ぶ。口唇部はつまみ出すか？	1／3。甕1。赤褐色。No.1。外面。中位炭素付着。



第174図　第71号住居跡平面図

第71号住居跡（第174図）

斜面上に位置しており西壁はほとんど残っていない。竈左側に比較的明瞭に旧竈が認められた。壁外施設は認められなかった。

埋土は西半は残存していないが、東半はよく残っており、斜面上部からの流入が窺える。出土遺物は東半部に多いが、埋土中出土のものが大部分である。

平面形は東隅、竈右側が大きく屈折するが略長方形状でやや歪む。床面は斜面に対してほぼ水平を保っているが、西壁近くはやや傾斜する。全体に硬い面が広がる。柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。東北隅は壁がわずかに段をなしており、旧竈の存在から旧住居跡の名残りか。生活段階に伴う遺物は全くない。

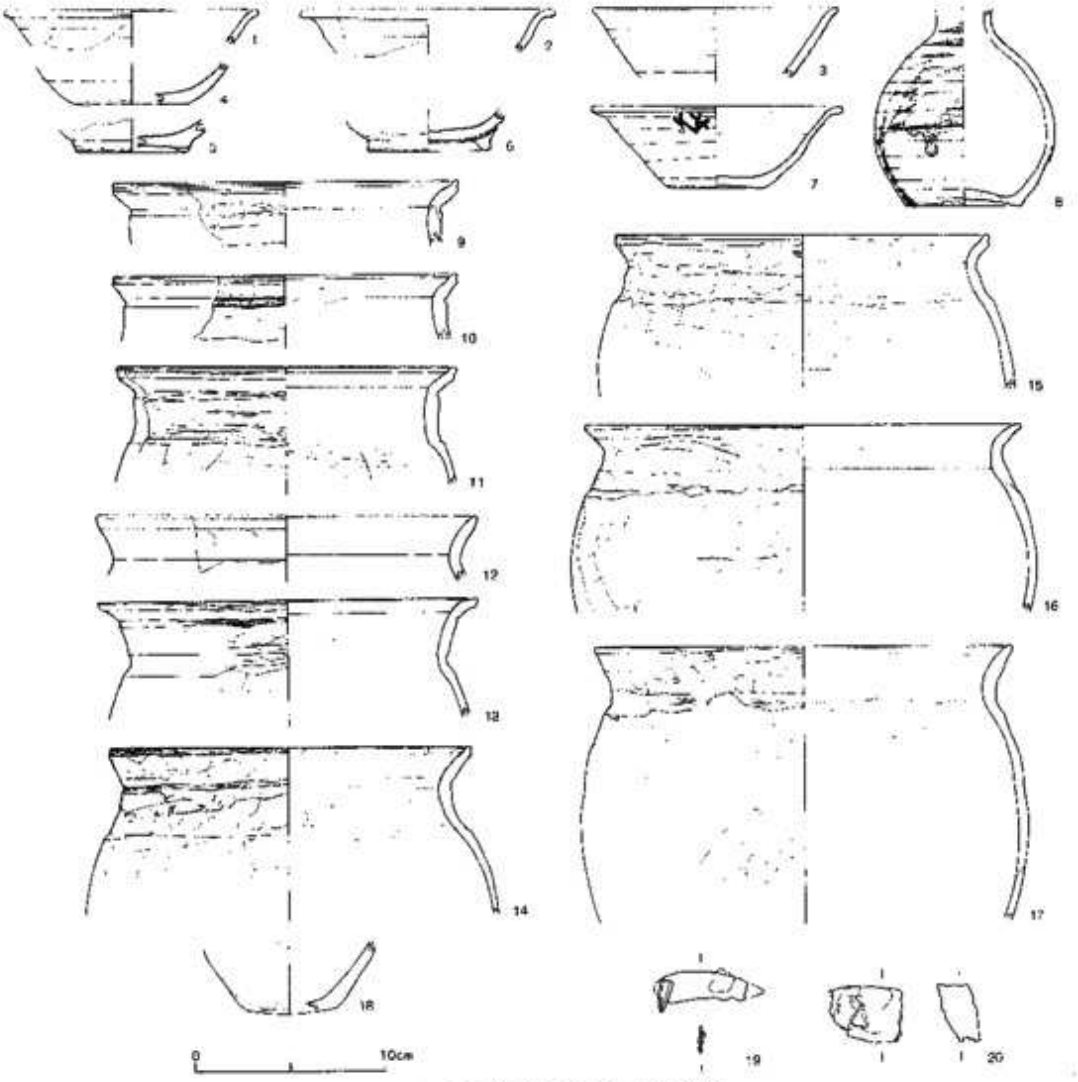
掘り方は全体に浅く、西壁下は溝の影響もあり不明確であるが、中央部～竈前面を残して四周を凹めるものか。南壁下中央も残す。貼り床は認められなかった。床下土壙がほぼ中央から検出されたが略円形の浅いものである。

竈は東壁右寄りに付設される。煙道の一部が残っており、先端部が凸出している。底面は平坦でほとんど焼けていない。燃焼部は略長方形状でやや深く掘り込まれる（焚き口に近い方が深い）。遺物は全て浮いた状態で出土している。袖部はほとんど崩壊状態あるが、粘土貼り付けと考えられる。右袖は流失した河原石？が倒立した状態で出土した。左袖は見られなかった。焚き口部は若干深く、横倒しの甕口頸部が浮いた状態で出土している。右袖は壁を斜めに掘り込んでいる。

旧竈は新竈の左側に位置し、完全に埋め戻しないし崩されたような状態であった。燃焼部が残っており、略長方形で底面ほぼ平坦、ややずれた位置に小ピットが穿たれる。全体にそれ程焼けていなかった。竈芯か支脚石とみられる河原石が横位で出土（浮いている）。

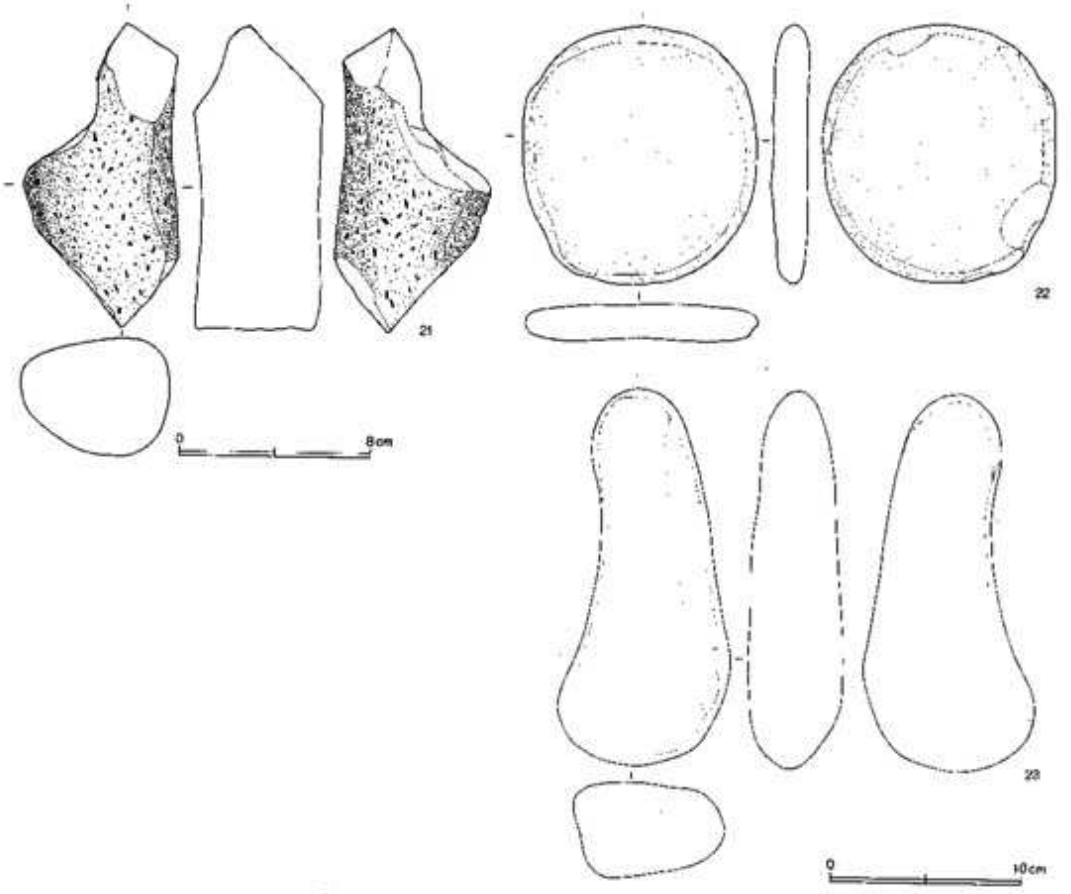
第71号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.4 － 2.4	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部は肥厚し大きく屈曲して開く。器肉薄い。	内外面回転横ナデ。	1／5。須恵杯1。灰色。内外面摩滅顕著。
須恵高台杯	2	13.4 － 2.0	体部は内湾気味に立ち上がり、口唇部やや肥厚し僅かに屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転？）	1／10。須恵杯1。灰白色。内外面摩滅顕著。
須恵高台杯	3	13.0 － 3.7	体部は僅かに内湾して立ち上がり、そのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面丁寧平滑。	1／10。須恵杯5。灰色。
須恵杯	4	－ 6.0 1.9	ほぼ平坦な底部から、体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも回転横ナデ（左回転）、底面糸きり痕残る。内面平滑。	1／3。須恵杯2。黒褐色（赤褐色）黒褐色。内外面剥離顕著。
須恵高台杯	5	－ 6.0 2.0	高台部外開きでやや反り気味、接地面外ソギ状で内面ほぼ平坦。外面より密着していない。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、接地面外面面ケズリ？	1／3。須恵杯6。（黒粒）灰白色。
須恵高台杯	6	－ 5.5 1.3	高台部形状で、低い。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転？）、内面丁寧。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1／5。須恵杯2。赤褐色。摩滅顕著。
須恵杯	7	13.2 4.8 4.3	ほぼ平坦な底部から体部は下位に腰をもち、やや内湾して立ち上がり屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧。底面糸きり痕残る。外面体下半指頭ナデ加わる。外面口唇部下墨書あり。	60%。須恵杯2。褐色／黒色。№8。内外面下半墨班、剥離顕著。
灰釉壺	8	－ 6.2 10.4	やや大形で上げ底気味の底部から体部は湾曲して立ち上がり細い頸部に移行する。	内外面とも回転横ナデ（右回転）、下端部指頭ナデ。底面糸きり痕残り粘土が付着する。体下半まで施釉（灰緑色）される。	約90%。灰釉1。灰白色。№9。焼成良好・器壁堅緻。
甕	9	18.2 － 3.4	口縁部下半僅かに内傾して立ち上がり、上半は屈曲して開く。口唇部直立し、外面下沈線状に凹み稜をなす。内面緩い段をなす。	内外面横ナデ？、外面屈曲部、口唇下工具ナデ後指頭押圧、ナデ。内面下半指頭ナデ。	1／10。甕1。赤褐色。
甕	10	18.0 － 3.4	口縁部下半やや内傾して立ち上がり、上半部屈曲して開く。口唇部直立し尖り気味で、外面下沈線状に凹み稜をなす。内面緩い段をなす。	内外面横ナデ（→？）、外面屈曲部棒状工具によるナデ後、指頭押圧、ナデ（←）。	1／10。甕1。赤褐色。
甕	11	17.8 － 6.0	張りのある胴部？から頸部で段をなしほぼ直立する口縁部に移行する。上位で屈曲して小さく開き口唇部は直立する。外面下緩い稜をなす。内面中位、頸部段をなす。	胴部外面横箆ケズリ（←）、内面箆ナデ（←←）。口縁部内面横ナデ、外面工具ナデで頸部、屈曲部巾狭い。若干の指頭ナデ加わる。	1／5。甕1。赤褐色。№13。
甕	12	20.0 － 3.2	口縁部内傾して立ち上がり？中位で口縁して開く。口唇部尖り気味。	口縁部横ナデ（→）、外面屈曲部～上位指頭押圧、ナデ。	1／10。淡赤褐色。



第175図　第71号住居跡出土遺物(1)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	13	20.0 － 6.2	張りのある躯部から頸部で段をなし、やや外傾する口縁部に移行する。上位で屈曲して小さく開き、口唇部直立し外面下沈線状をなし稜をもつ。内面中位、頸部緩い段をなす。	胴部外面横箆ケズリ（←）、内面箆ナデ。口縁部横ナデで外面頸部工具ナデ、屈曲部棒状工具ナデ後指頭押圧ナデ加わる（未調整部分残る）。	1／5。甕1。赤褐色。床下出土。
甕	14	19.0 － 8.7	張りのある胴部から頸部で稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き口唇部は直立気味で、外面沈線状に凹み稜をなす。外面部分的に輪積み痕残る。内面緩く外反する。	胴部外面横箆ケズリ（→→）、内面箆ナデ後指頭押圧、ナデ。口縁部横ナデ後内面上部工具ナデ、外面中位、頸部工具ナデ後指頭押圧、ナデ加わり特に頸部は入念。中位以上は本調整部分残る。	80%。甕1。赤褐色。No11。内面制羅麻著。外面炭素付着。
甕	15	19.6 － 8.5	やや張りをもつ胴部から頸部で緩い段をなし、内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き、口唇部は直立し外面沈線状に凹み直下緩い段をなす。内面緩く外反する。	胴部外面横斜め箆ケズリ（←←↓）、内面箆ナデ（←）、頸部指頭押圧加わる。口縁部横ナデ、外面屈曲部、頸部工具ナデ指頭押圧加わる。	約1／2。甕1。淡褐色。No21＋23＋竈、No14＋25は接合しないが同一個体。



第176図　第71号住居跡出土遺物(2)

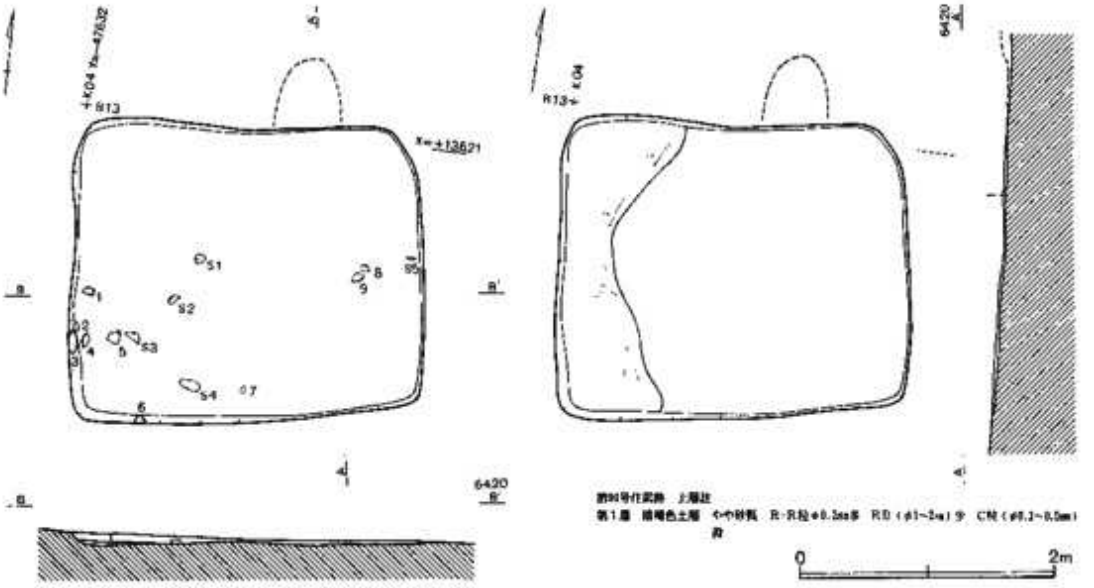
第71号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	16	22.9 － 9.8	張りのある胴部から頸部で微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開きそのまま口唇部に至る。外面輪積み痕残る。内面緩く外反する。	胴部外面横斜め箆ケズリ（→→↓）、一部口縁部まで及ぶ。内面箆ナデ頸部指頭押圧？口縁部横ナデ、外面上半工具ナデ後若干の指頭押圧。	1／4。甕1。淡褐色。No 1＋2。外面炭素付着。
甕	17	22.0 － 14.5	張りのある胴部から頸部で微かな稜をなしほぼ直立する口縁に移行する。中位で屈折して小さく開きそのまま口唇部に至る。内面緩く外反する。	胴部外面横斜め箆ケズリ（→→↓）、以下斜め箆削り（↑）、内面箆ナデ頸部指頭押圧？口縁部横ナデ、外面工具ナデ後若干の指頭押圧ナデ、内面工具ナデ。	1／5。甕1。淡褐色。No12＋18＋19＋竈出土。
甕	18	－ 4.8 3.5	底部はやや凸出気味で、胴部は外傾して開く。押圧技法か？	胴部外面縦、斜め箆ケズリ（↓→）、底部箆ケズリ。内面箆及び指頭ナデで平滑。	1／3。甕1。赤褐色。竈出土。
刀子	19				10g。
鉄滓	19				50g。
砥石	20				S 3、1.86kg。
敲石	22				S 2、560g。
磨石	23				S 4、1.355kg。

第90号住居跡（第177図）

西壁及び竈焼土を除いて殆ど残存していない。壁外施設は全く判らなかった。

埋土は西半部のみ残っていた。東半部は床が露出しており大半は床下まで失われている。出土遺



第177図　第90号住居跡平面図

物は比較的多く全てわずかに浮いている。

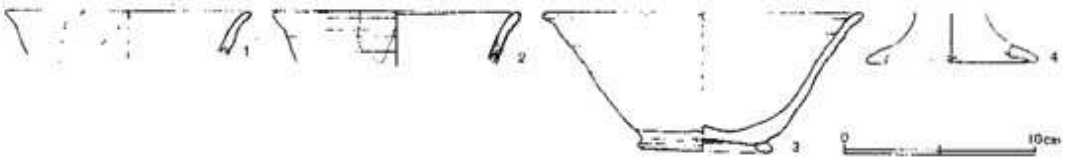
平面形は横長の長方形状と考えられる。床面は硬質面が竈～南壁際まで残存していたが全体に不明確。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方は不明確で東壁下にわずかに存在する。貼り床はない。

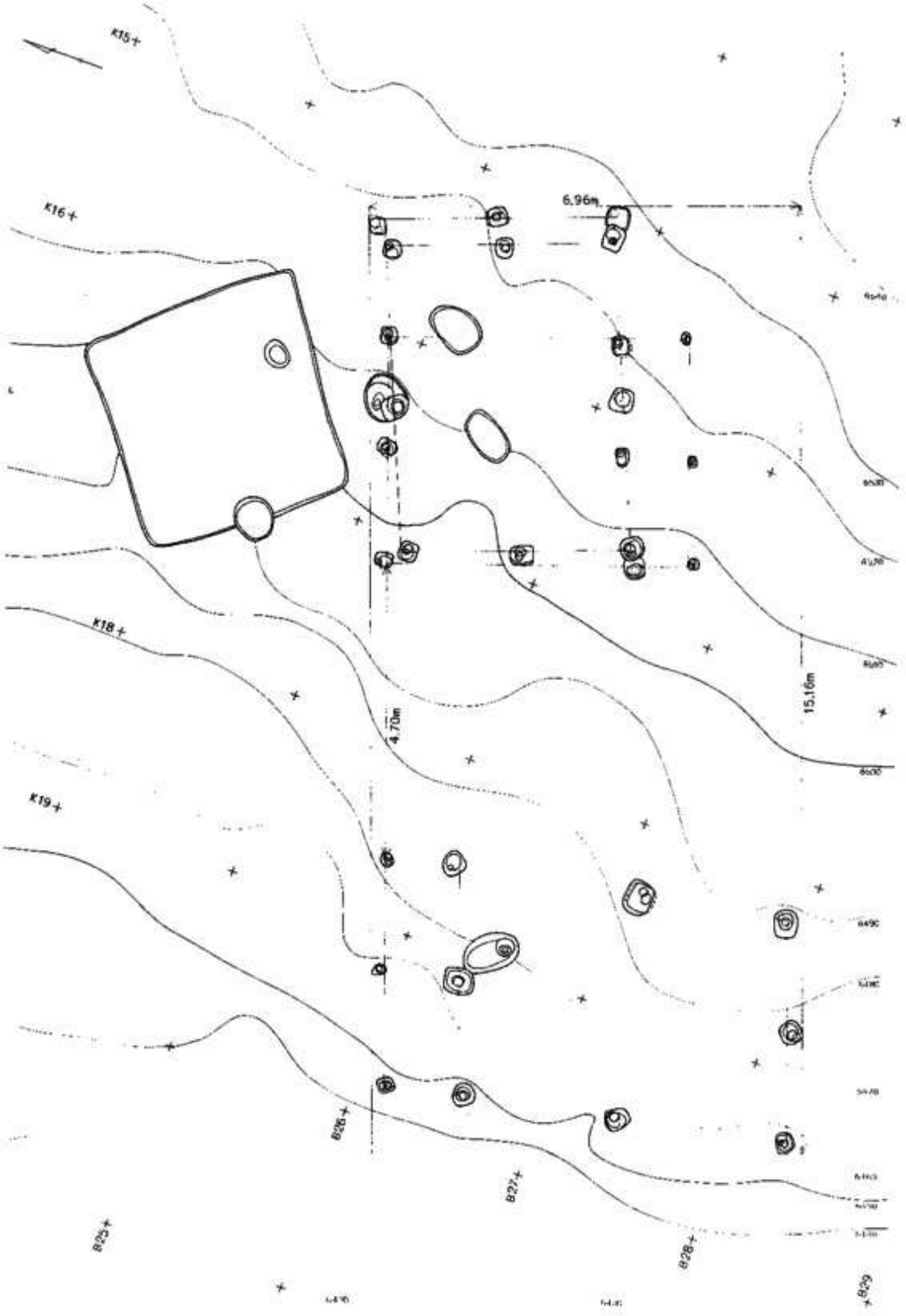
竈は北壁右寄りに位置するがほとんど残っていない。燃焼部底面の火熱により赤変した部分が残ったものか？

第90号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.0 － 2.4	体部は内湾して立ち上がり、僅かに屈曲してそのまま口唇部に移行する。先端部は平坦面をなす。	内外面回転横ナデ（左回転？）。	1／10。須恵杯4。灰白色。摩滅顕著。
須恵杯	2	13.0 － 2.7	体部は外傾して立ち上がり、僅かに屈曲しやや肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1／10。須恵杯2。赤褐色、黒褐色。
須恵高台付椀	3	17.7 6.4 7.2	高台部は低く、大きく外方に屈曲する。接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下端で稜をなし内湾して立ち上がる。口唇下屈曲し肥厚して開く。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧、外面下半若干の指頭ナデ。底面中央糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ。	約90%。須恵杯1。灰白色。No 1～6が接合。
台付甕脚部	4	－ 7.8 1.0	脚部下半は大きく開き端部は丸く収まる。	内外面回転横ナデか？	1／10。甕1。暗赤褐色。



第178図　第90号住居跡出土遺物



第179図　第３群掘立柱建物跡配置図

第１号掘立柱建物跡（第180図）

斜面上に位置し比較的容易に確認された。第51号住居跡を切って構築される。P3は第51号住居跡埋土中ではっきりしなかった。

埋土は比較的単純で２～３層に分割される。出土遺物はない。

桁行３間×梁行２間の総柱で斜面であるためか、P7、P10は中心よりややずれており全体に歪んでいる。各柱穴の深さは一定しないが、左右桁はほぼ対応する。P1、2とP4、5は重複しており、P1、P4の外側のものが新しい。P3もあるいは内側に柱穴があったかもしれない。P11は内側にずれている。

掘り方は大略方形で浅く掘られており、中心のP7、10、14は掘り方をもたない（P3は断面でも不明確であった）。大半は抜き取られているが、P11、12は柱痕跡が残っていた。斜面下方の柱穴も一定以上の深さがある。

第２号掘立柱建物跡（第181図）

２～３棟の重複で、主軸が東西方向のものが新しく、軸をほぼ直交させるように重複している。付近には新しいピット（近現代）も存在する。平安時代の土壙が２基内側に取り込まれている。南、東側にとびだした部分を庇とすればもう一棟考えられる（P16、17及びP11、12の重複が問題）

埋土は比較的単純で柱抜き取り後埋まったものもあるが、柱痕跡が明瞭であるものが多い。P11、12及びP16、17は重複しP12、P16が新しい（P11ははっきりしなかった）。P3とP13の間は精査にもかかわらず柱穴は見出せなかった（P11、12とP18の延長線上も同様）。

平面形は掘立柱建物跡ａ（古）が２間×２間の南面庇でやや歪む（P17、10、7の柱間がずれる）。掘立柱建物跡ｂ（新）が２間×２間の東面庇？で柱間がやや広い（P1、8、11はやや広がり気味で庇としてよいかどうか問題が残る）。

全ての柱穴が掘り方をもつが、南側のP18～20はやや小形の方形である。出土遺物は１点のみである。P1～P17とP11～P17の列は配置がえが行なわれたかあるいは２棟の重複か判断し難い。

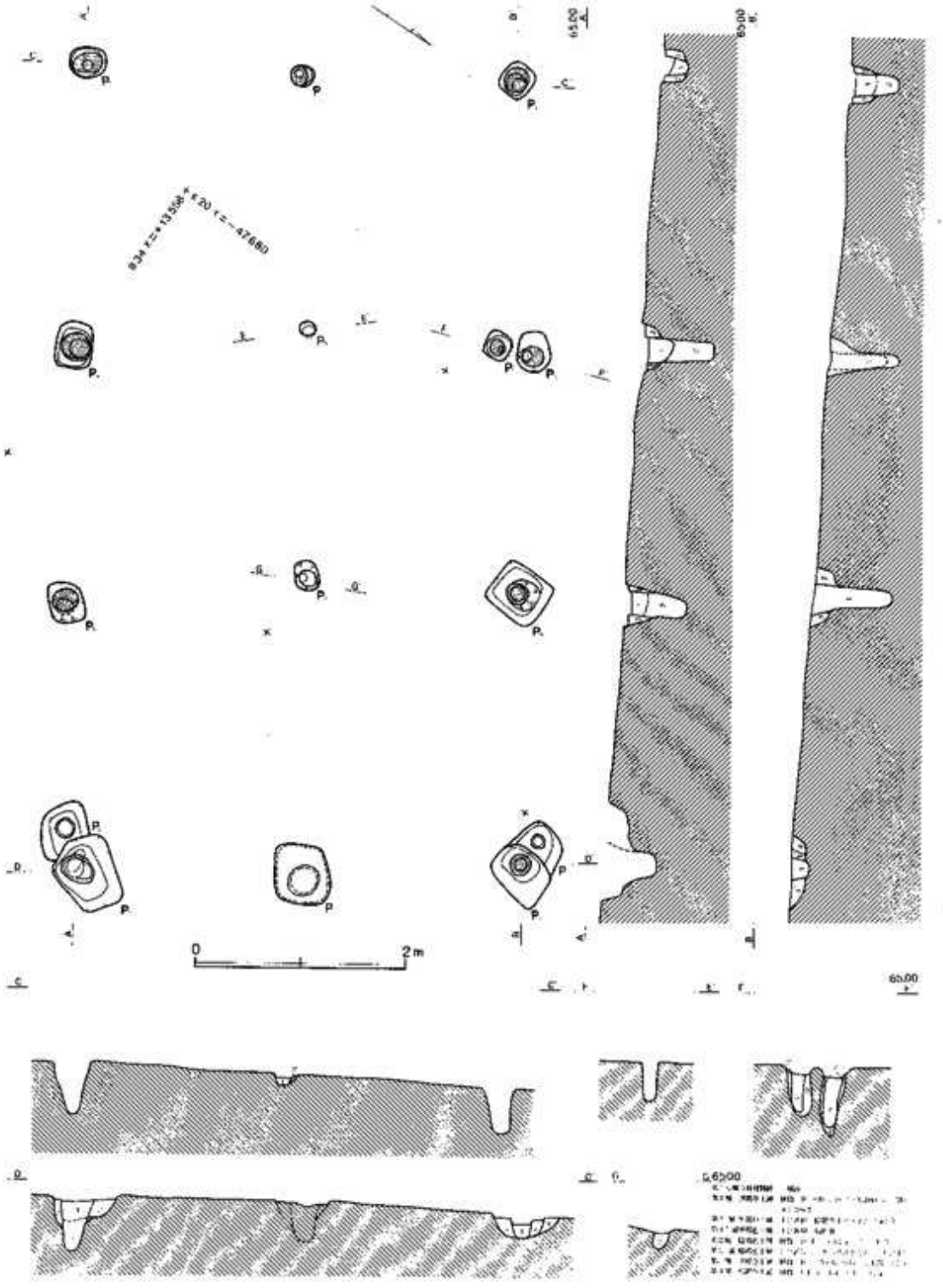
第３号掘立柱建物跡（第182図）

比較的容易に検出されたがP2、P4、P9、P11はやや不明確であった。斜面上につくられ全体に歪んでいる。吉ヶ谷式期の住居跡を切って（P6）構築され、P11は撹乱を受ける。第95号土壙を切っている。

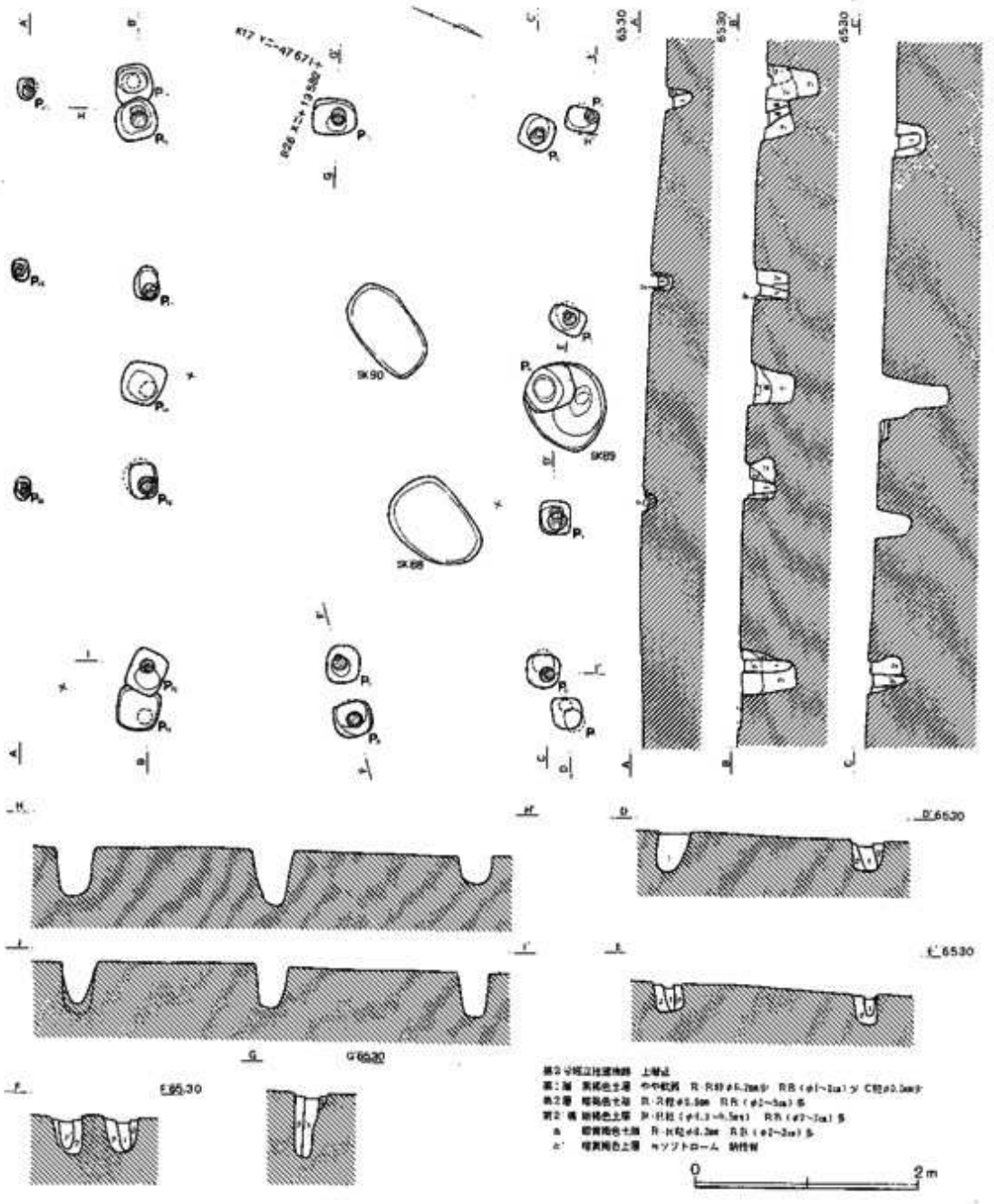
埋土は単純で柱痕跡をもつものと抜き取ったものが、相半ばする。出土遺物は少量。

平面形は斜面上のためか、平行四辺形状に歪んだ２間×２間の西面庇の建物である。柱間は梁行が短く桁行の約1/2程でP6はややずれている。P1はP2～P3の延長上にない。深さは一定しないが庇柱は他よりもやや浅い。

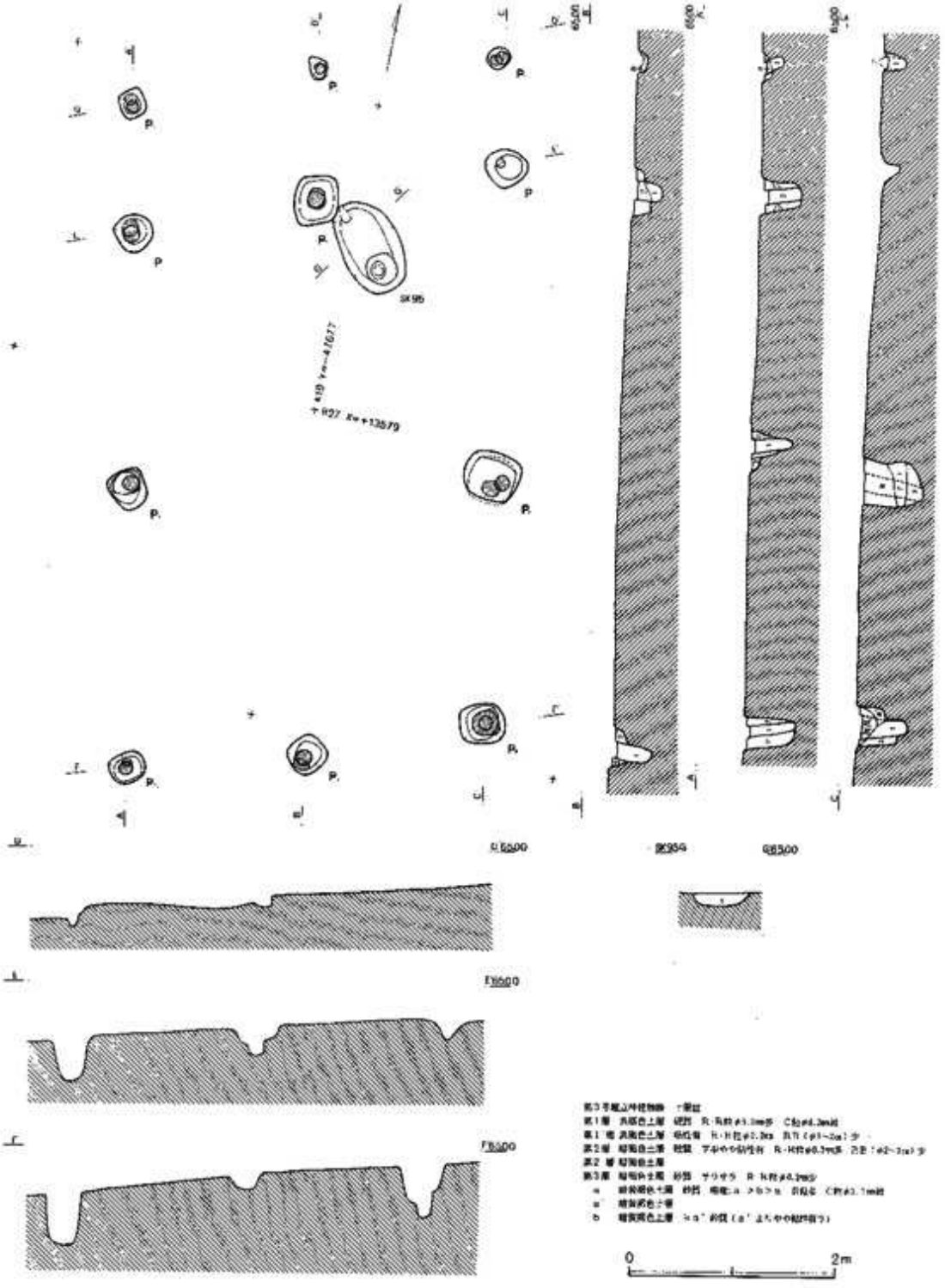
いずれも方形の掘り方をもつ。上部を浅く掘り込むものと、丸掘りするものとある。



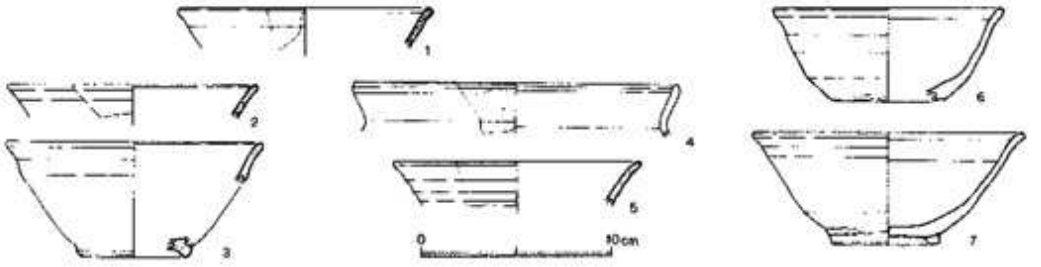
第180図　第１号掘立柱建物跡平面図



第181図　第２号掘立柱建物跡平面図



第182図　第３号掘立柱建物跡平面図



第183図　第３号掘立柱建物跡、第88、90、92号土壙出土遺物

第３号掘立柱建物跡・第88・90・92号土壙出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵杯	1	13.4 － 2.2	体部は外傾して立ち上がり、そのまま肥厚する口唇部にいこうする。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1／10。須恵杯５。灰色。Ｐ６埋土中出土。ＳＢ３。
須恵杯	2	13.0 － 1.8	体部はほぼ外傾して開き、口唇部僅かに肥厚し外面下縁い稜をなす。	内外面回転横ナデ？	須恵杯２。暗褐色。内外面とも摩滅顕著。ＳＫ88。
須恵高台付椀	3	13.4 5.3 6.1	高台部は低くほぼ直立し幅狭く、接地面ほぼ丸く収まる。体部は外傾して立ち上がりやや外反してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。詳細不明	1／20。須恵杯５。暗褐色。ＳＫ88。
甕	4	17.0 － 2.6	口縁部中位で屈曲し外傾して開く。口唇部外面稜をなし丸く収まる。	内外面横ナデ、外面指頭押圧加わる。	1／20。甕１。黄褐色。ＳＫ88。
須恵杯	5	13.0 － 2.3	体部は外傾して開き、そのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）内面丁寧。	1／5。須恵杯５。灰色。ＳＫ90。
須恵杯	6	12.2 6.0 4.8	平底？の底部から体部は下位にこしをもち、内湾して立ち上がり口唇部やや屈曲する。	内外面右回転横ナデ、内面指頭痕、底面糸きり痕残る。	1／5。普通末野。灰白色。ＳＫ92。
須恵高台付椀	7	14.3 5.7 5.9	高台部は低くやや幅広で底面凹む。体部は下部でこしをもち内湾して開く。口唇部僅かに肥厚し外反する。	内外面とも回転横ナデ。体部外面下半指頭ナデ。	1／3。甕１。暗褐色。No13。ＳＫ９２。

e　平安時代　第４群

第４群は調査区の中央部やや南側、台地西側斜面（標高63.5～65.5m前後）から台地頂部、東側緩斜面に至る長大な範囲であるが、東端部に位置する第91号住居跡、台地頂部の第95号住居跡については本群の主体をなす西側斜面の住居跡群からかなり離れている。

ほぼ単独で存在する２軒の住居跡については、集落全体との関係で位置付けるべきで本群に含めたのは便宜上の設定である。したがって本群の各住居跡位置は大まかに２分され、主体は西側の７軒ということになる。これは更に集合状態によって２分される。東側に単独住居跡、西側に住居跡が集中するという形態は、第３群に近似している。

西側の住居跡の占有する範囲は長さ30m、幅25m、約750m²に及び、ほぼ東西方向に主軸をもつやや小型の矩形領域をなす。

７軒の住居跡の詳細は以下の記述及び住居跡一覧表によるが、概要を示すと、直径3.5m前後のものが多く、3.5m以上の住居跡は少ない。

平面形は方形、長方形、不整形なものがほぼ拮抗している。

竈は何れも東壁ないし北東壁に付設され大部分が壁中央乃至右側である。第39、44号住居跡は竈が付け替えられ、何れも左側のものが古い。

約半数の住居跡に貯蔵穴が設置され竈の右側にあるものが圧倒的である。床下土壙をもつものは３軒と少数である。

第44、48号住居跡の２軒以外は掘り方が存在する。中央部を残して四周を掘り窪めるものが主体である。

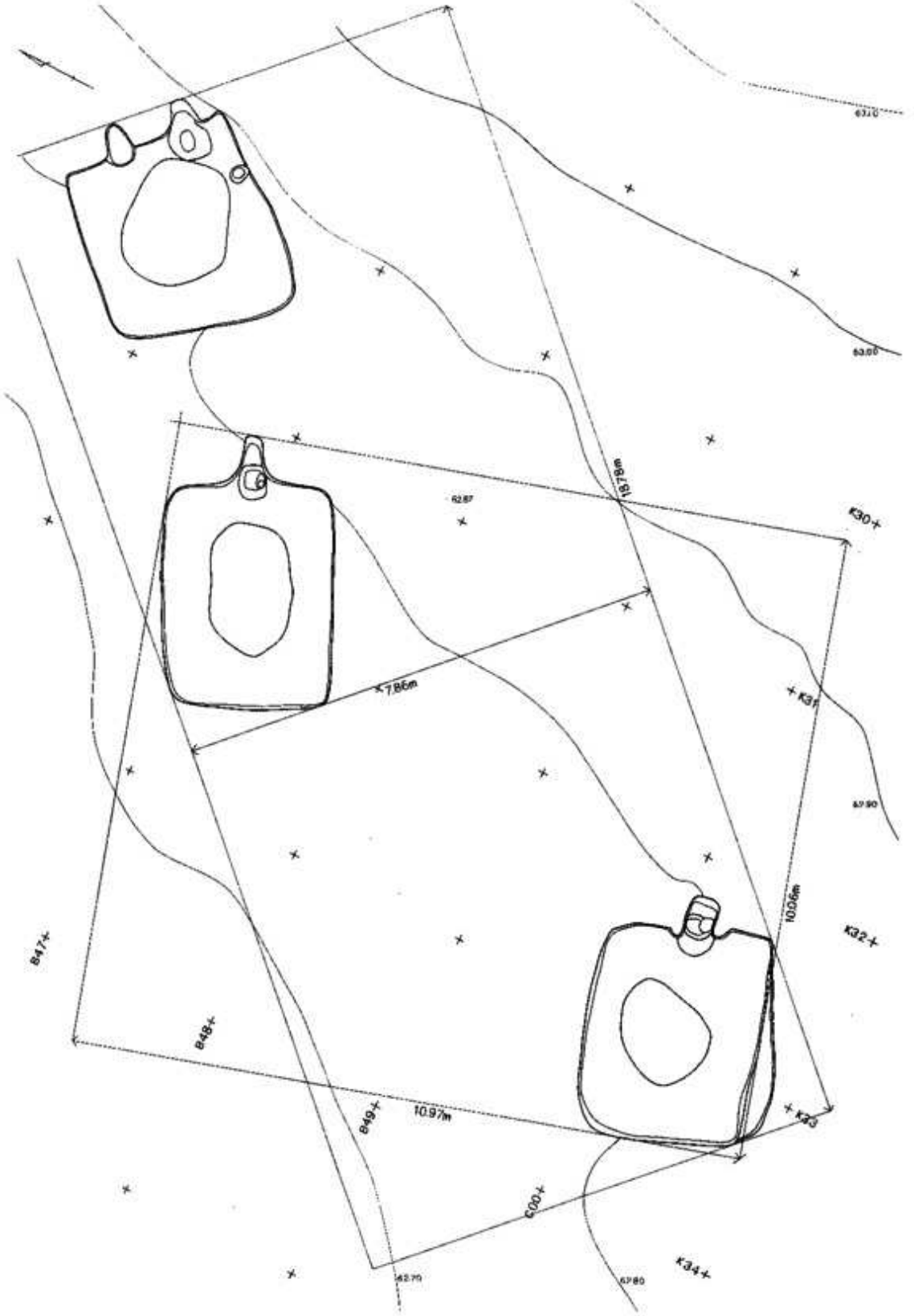
壁溝、柱穴をもつものはない。

本群は拡張住居跡はあるが、重複関係にあるものは存在しない。また住居跡外に土壙等をともなうものも存在しない。

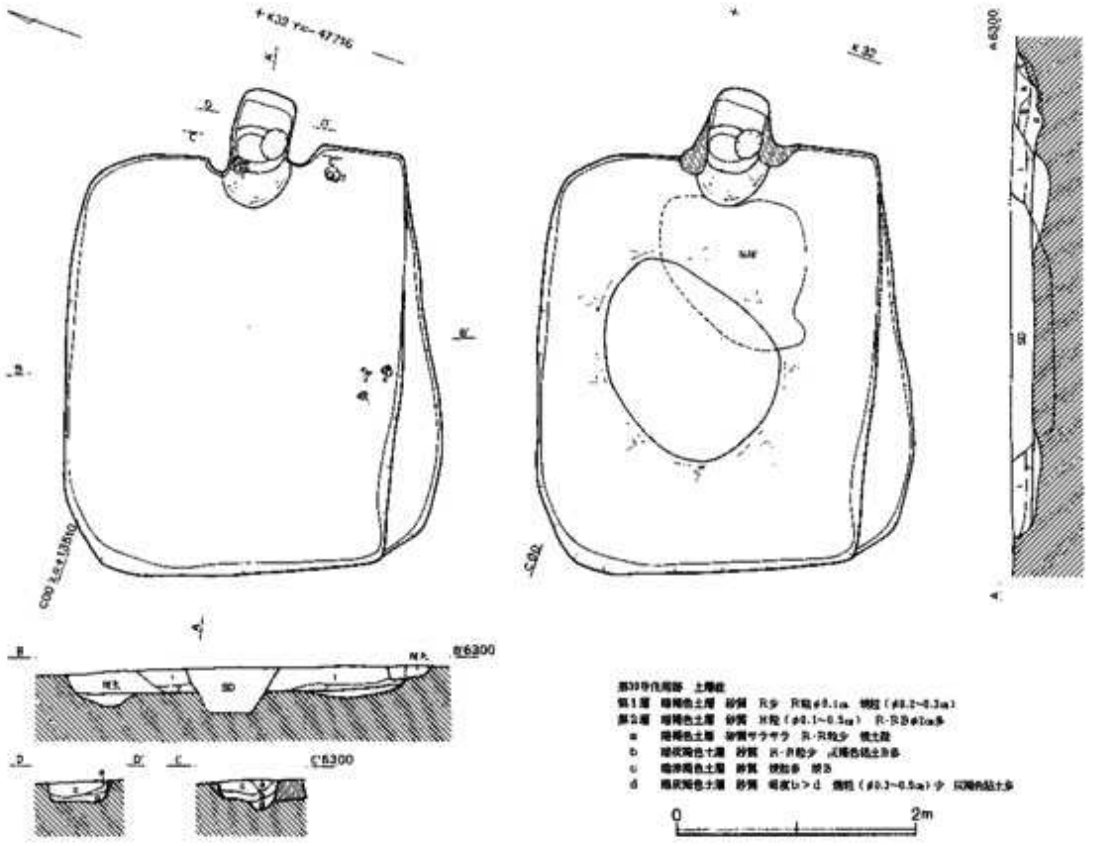
西側住居跡群は２小群に分割され、第39、40、41号住居跡を第４ａ住居跡群（第185図）、第43、44、45号住居跡を第４ｂ住居跡群（第200図）と呼称する。いずれも直線状ないし弧状に配置される。

第４ａ住居跡群は18.78×7.86mの長方形ないし「Ｌ」字状の範囲を占有する。第４ｂ住居跡群とした３軒の住居跡の占有する範囲は、16.13m×10.00mの長方形状ないし「Ｌ」字状である。両住居跡群は２軒が接近（２軒の住居跡間隔は３mの至近距離にある）し、１軒がやや距離をおくという共通する配置関係をもつ。

出土土器によると若干の段階差があり、第39→40号住居跡、第43→44号住居跡の変遷が考えられ各住居跡が同時存在したわけではない。



第185図　第４ａ住居跡群配置図



第186図　第39号住居跡平面図

第39号住居跡（第185図）

竈の赤変範囲として認められた。東西方向の溝（現代）によって中央部を切られ南壁下は耕作による撹乱をうけている。

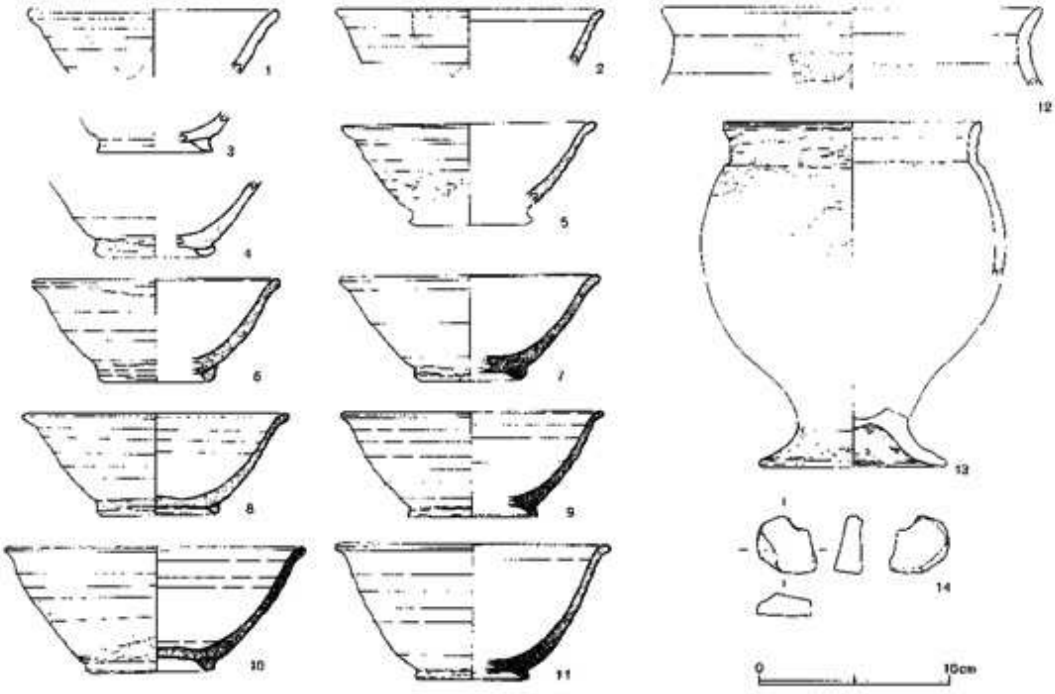
埋土は中央部で顕著な撹乱を受ける。出土遺物は少量で竈周辺及び南壁中央部に集中し大部分が埋土中の出土である。

平面形は略長方形状で東壁は竈部分で段をなす。床面はほぼ平坦で竈前面に貼り床が施される。柱穴、壁溝等は検出されなかった。生活段階に伴う遺物は竈部分出土の須恵坏を除いてほとんどない。

掘り方は撹乱顕著ではっきりしないが、中央部を堀のこし四周を掘り窪めるものと考えられる。竈両側（東壁両隅）はやや深くなる。

竈燃焼部は略長方形状で底面及び側面は比較的焼けている。天井部は崩壊している。焚き口部はやや深く、支脚穴か右側にピット状のおちこみが穿たれ、外方へ向かって緩やかに立ち上がる。袖部は旧状をとどめていないが、補強材は存在しない。

壁の掘り込みは粘土を貼り付け易くするためか手前側がやや広く斜めに掘り込まれている。掘り方利用のかきだし部分が続く。



第187図　第39号住居跡出土遺物

第39号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.2 － 3.4	体部は外傾して立ち上がり、僅かに屈曲してそのまま口唇部に移行する。器肉厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1/10,須恵坏5,灰白色.
須恵坏	2	14 － 3	体部は外傾して立ち上がり、内面に肥厚する口唇部にそのまま移行する。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面平滑、口唇部内面摩滅する。	1/10,須恵坏7,灰色,或は椀か？
須恵高台坏	3	－ 6 1.8	高台部は僅かに外反し接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下端で段をなし外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/3,須恵坏5,灰褐色,竈出土。摩滅顕著。
須恵高台坏	4	－ 5.3 4	高台部やや外傾し低く幅広い。接地面外ソギ状。体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、よく密着していない。	1/2,須恵坏2,灰褐色,№2＋床下出土。
須恵高台付椀	5	13.4 － 4.3	体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部やや肥厚し屈曲して開く。外面輪積み痕？残る。	内外面回転横ナデ（右回転）、外面下半指頭ナデ加わる。	1/3,須恵坏2′,赤褐色,床下出土。外面黒斑あり。
須恵高台坏	6	13 5.2 5.4	高台部はほぼ直立し高い。体部は内湾して立ち上がり、屈折して肥厚する口唇部に移行する。器肉厚い。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。高台部やや凸出する底部に粘土貼付け、内外面指頭ナデ。密着していない。	1/4,須恵坏7,灰褐色、灰色,竈出土。
須恵高台付椀	7	13.2 5 5.5	高台部は低く断面三角形状の粘土貼付け。体部はやや内湾して立ち上がり僅かに屈曲して肥厚する口唇部に移行する。底部厚く凸出する。	内外面回転横ナデ（左回転？）。高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ。	1/3,須恵坏2′,褐色,摩滅顕著。
須恵高台付椀	8	14.5 5.8 5.4	高台部低く直立し巾は一定しない、接地面外ソギ状。体部中位に膨をもち内湾して立ち上がる。屈曲して口唇部に移行する。	内外めんかいてんこナデ（左回転）、内面丁寧平滑。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後内面工具、外面指頭ナデ、密着していない。	約90%,須恵坏2,褐色,№2。内外面一部黒斑、内面炭化物付着。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	9	13.8 6.7 5.5	高台部は低く直立し細い、接地面内ソギ状で中央凹む。体部は内湾して立ち上がり、口唇部屈曲してそのまま開く。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/4,須恵坏1,灰白色,№4＋床下出土。
須恵高台付椀	10	15.8 5.5 6.5	高台部低く直立し巾広で接地面ほぼ平坦。体部は下端で稜をなし内湾して立ち上がり上位でやや屈曲気味。口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半指頭ナデ加わる。底面糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。接地面大半は未調整。	80%,須恵坏1,黒色／褐色,№1＋竈出土。
須恵高台付椀	11	14.5 5.7 7.1	高台部は低く外開きで細い。接地面ほぼ平坦。体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がる。口縁部は接合しないが、屈曲してそのまま開く。	内外面回転横ナデ（左回転？）。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/4,須恵坏3,赤褐色、灰褐色,№1、2。摩滅顕著。
甕	12	20 — 4	口縁部は内傾して立ち上がり上位で屈折して開き、そのまま口唇部に移行する。内面外反して開く。	口縁部横ナデ、外面屈折部工具ナデで指頭押圧加わる。	1/20,甕1,赤褐色,床下出土。
台付甕	13	13.5 9.4 18	脚部は外反して開き先端丸く収まる。脚部成形後か？上胴部は接合しないが同一個体。肩部段をなしほぼ直立する口縁部に移行する。中位で屈折して開き口脣部直立し外面稜をなす。	脚部外面横箆ケズリ（←）以下縦箆ケズリ、内面箆ナデ。口縁部横ナデ、外面工具ナデ後指頭押圧、ナデ。脚部回転横ナデか？（右回転）外面上半指頭ナデ加わる。	1/5,甕1,赤褐色,№3＋竈＋床下出土。
底石	14			№4、1.5g	

第40号住居跡（第189図）

周辺部は風倒木痕、耕作による撹乱があり特に北壁は著しい。壁外施設については不明である。

埋土は黒色土を主体とする柔らかいもので竈前面は焼土、粘土の推積がみられた。出土遺物は少量。

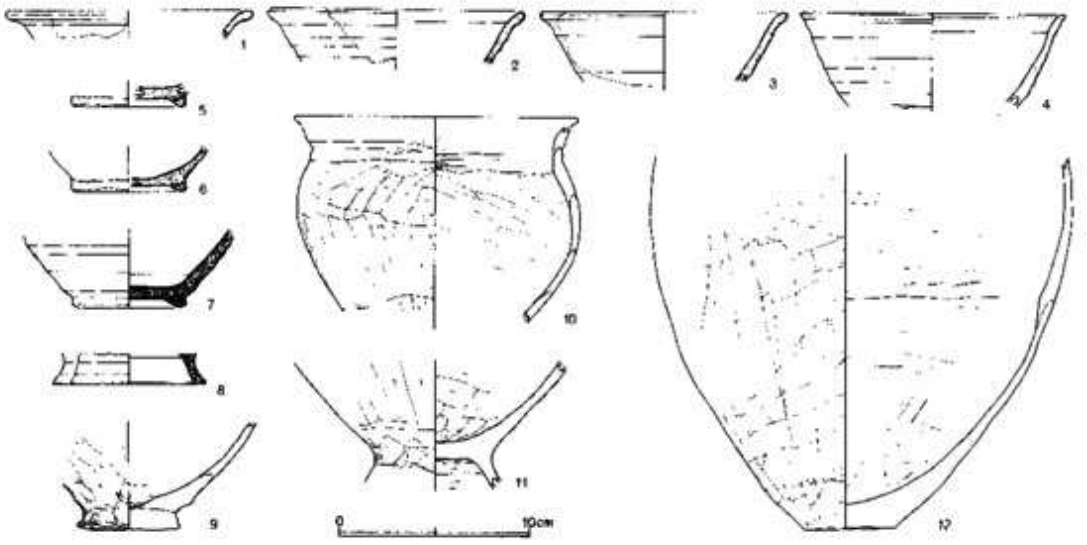
平面形は整った隅丸長方形状である。床はほぼ平坦で竈前面～中央部にかけて硬質面が広がるが、他は柔らかい。柱穴、壁溝、貯蔵穴、床下土壙等は検出されなかった。出土遺物は竈右側及び中央部に分布しほぼ床面出土。

掘り方は全体に浅くはっきりしないが、中央部を残して四周を窪めるものと考えられる。竈前面及び南壁下に3ケ所のピット状の浅い窪みを認めたが置柱あるいは柱穴の確証はない。

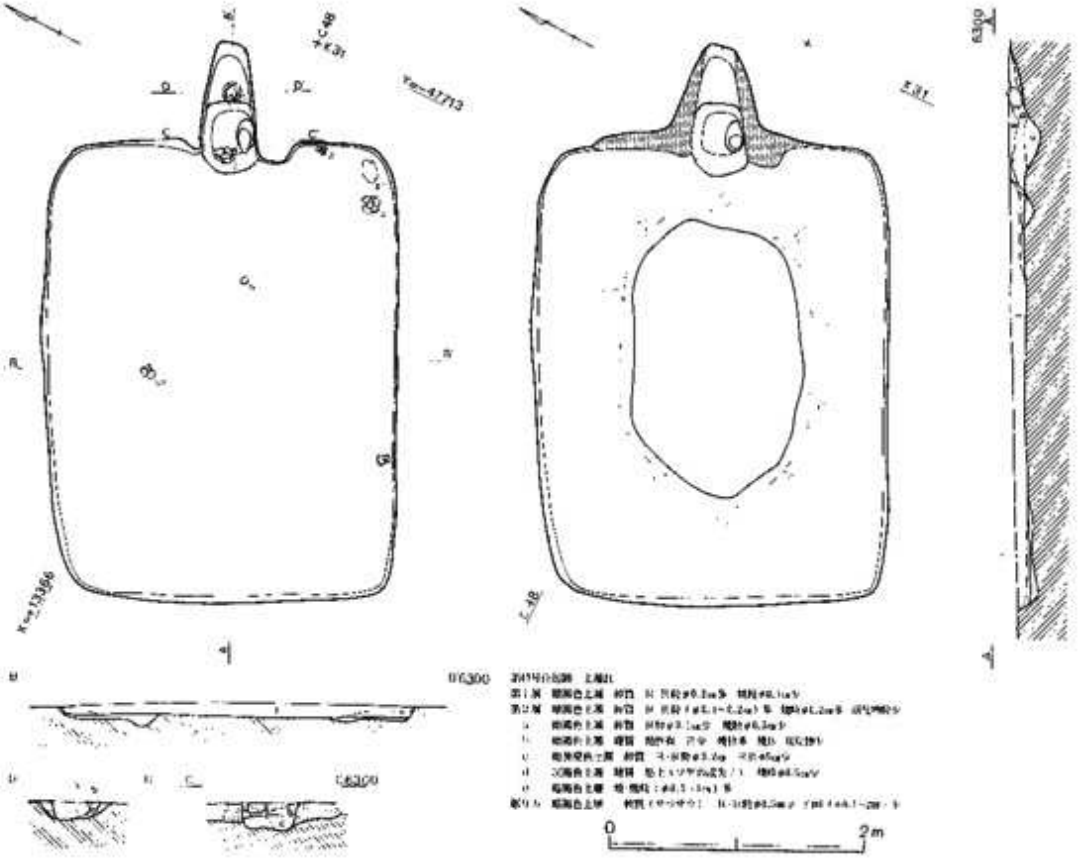
竈は東壁ほぼ中央に位置し、側面の赤変及び粘土の分布範囲として明瞭に確認された。煙出し部は不明。煙道部は緩く立ち上がり、底面はそれ程焼けていないが側面はよく焼けて赤変する。燃焼部は略長方形状で底面～側面がよく焼けている。右側面は袖石が残る。煙道部との境に逆位の甕がすえおかれていた。袖は粘土貼り付けでほとんど崩壊している。壁をやや掘り込んで袖を付設している。

第40号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 — 1.5	体部は外傾して立ち上がり、外反して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1/10,須恵坏2,赤褐色.
須恵坏	2	13.6 — 2.7	体部は僅かに内湾して立ち上がり、やや外反して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/10,須恵坏2,灰白色,摩滅顕著。
須恵坏	3	13 — 3.7	体部は僅かに内湾して立ち上がり、やや屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/4,須恵坏2,褐色,摩滅顕著。



第188図　第40号住居跡出土遺物



第189図　第40号住居跡平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	4	14 － 4.9	体部は僅かに内湾して立ち上がり、そのまま口唇部に移行する。口唇部先端は内ソギ状で内外面稜をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面平滑丁寧。	1/10,須恵坏5,灰色,焼成良好・器壁堅緻。
須恵高台坏	5	－ 5.6 0.5	高台部はほぼ直立し低い。底部はやや凸出気味。	高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ。中心部糸きり痕残る（右回転？）。	1/4,須恵坏3,赤褐色.
須恵高台坏	6	－ 5.6 2.1	高台部は低く直立し接地面内ソギ状。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面平滑。底面糸きり痕残る。	1/2,須恵坏5,灰褐色、灰白色,摩滅顕著。
須恵高台坏	7	－ 5.3 3.7	高台部やや外開きで低く幅広い。接地面外ソギ状。体部は内湾気味に立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、高台部粘土貼付け後指頭ナデ。底面糸きり痕軽く撫で消す。	1/2,須恵坏2,黒色,No.3＋6。内外面剥離顕著。
須恵高台坏	8	－ 7.8 1.6	高台部は外反し高く細い。接地面ほぼ平坦で中央やや凹む。	内外面回転横ナデ。	1/10,須恵坏2,赤褐色.
壺底部	9	－ 5.8 5.5	底部は大きく凸出し底面平坦。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面斜め箆ケズリ（↙）、内面箆ナデ。底部指頭押圧、ナデにより接合。底面未調整。	70%,褐1、含有物はいずれも微量,黒色、赤褐色／黒色,No.5
台付甕	10	15 － 10.5	胴部は尻すぼみで、上位に最大径をもち、脚部は微かに段をなす。口縁部下位はほぼ直立する。外面一部粘土？付着。	上胴部横箆ケズリ（←・ ，）以下縦、斜箆ケズリ（↑）、内面箆ナデ頸部指頭押圧加わる。口縁部横ナデ？頸部外面工具ナデ（←）、若干の指頭押圧。	70%。褐1,褐色.No.1。
台付甕	11	－ － 5.9	胴部は内湾して立ち上がる。脚部大半を欠失する。脚部成形後接合。	胴部外面縦箆ケズリ、内面箆ナデ後指頭ナデ。肩部～胴部下端は回転横ナデか？（右回転）	1/2,褐1,淡褐色、赤褐色,No.2。
甕	12	－ 4.7 19.4	やや大きめの平底の底部で器肉厚い。胴部は内湾して立ち上がり、長胴形をなす。外面一部粘土付着する。	底部一定方向の箆ケズリ。胴部外面上端斜め、以下縦箆ケズリ（↙・↙）、底部周縁彩い横箆ケズリ。内面箆ナデ、丁寧平滑、接合痕残る。	30%,褐1′,黒褐色、茶褐色,No.2＋4＋竈出土。

第41号住居跡（第190図）

耕作及び木根による攪乱顕著で南北方向の溝及び北、南壁下に存在する木根によりほとんど南北壁は破壊されている。壁外施設については不明。

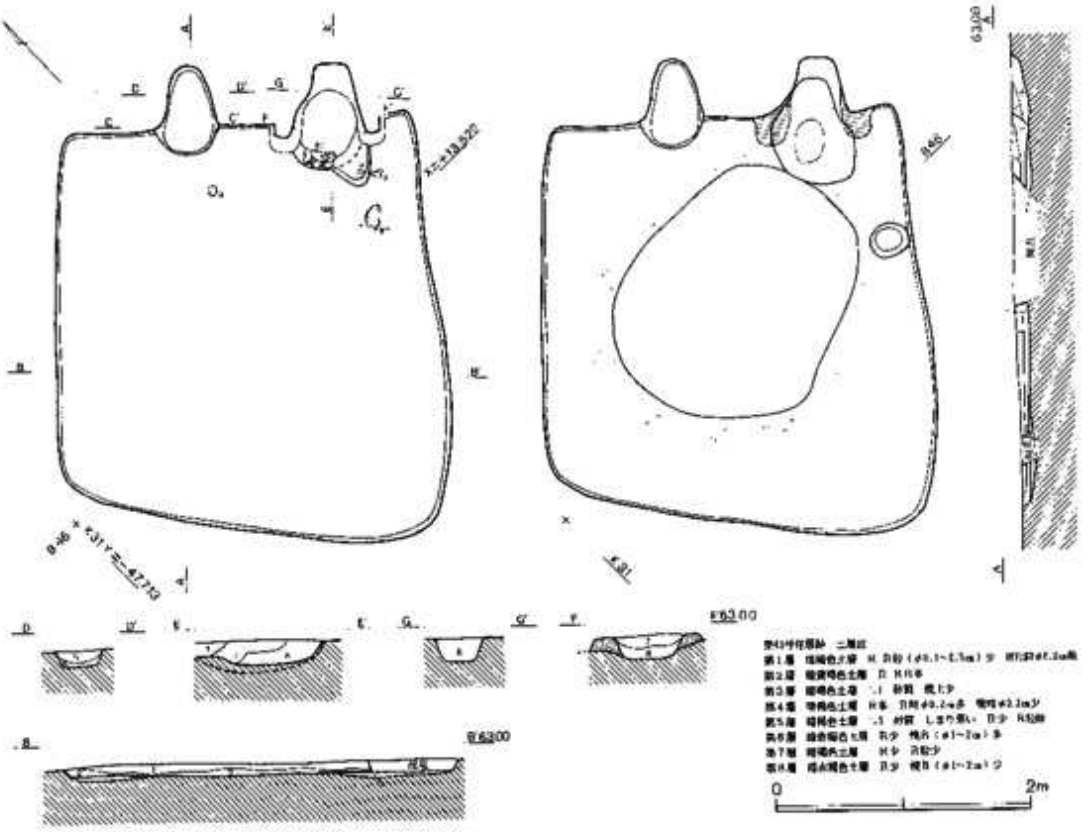
埋土は浅く攪乱顕著でほとんど残っていない。竈周辺部がわずかに残る程度である。出土遺物は少量で全て埋土中出土。

平面形は略方形乃至長方形を呈すると考えられる。床面は攪乱により保存状態が悪い。東壁下にやや大きめのピットが検出されたが埋土からすると新しい。生活段階に伴う遺物はない。

掘り方はほとんど存在せずわずかに竈前面が掘り窪められ東隅は掘り残している。ローム直上が床面か。

竈は２ケ所に検出され残存状態から左→右の付け替えが想定される。旧竈は燃焼部のみの残存で略楕円形状ほとんど焼けていない。袖は残っていない。

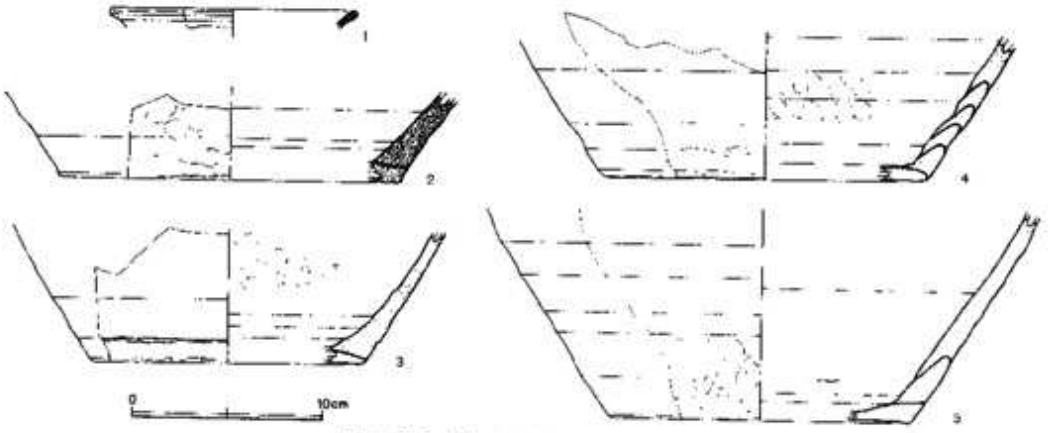
新竈は煙道部がわずかに残る。燃焼部は略楕円形状で比較的掘り込みは深く、全体にあまり焼けていない。出土遺物は全て浮いた状態である。袖は基部がわずかに残り粘土貼り付け、竈前面の石は袖石か。掘り方との関係は不明。



第190図　第41号住居跡平面図

第41号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 － 1	口唇部は肥厚しやや外反して開く。	内外面回転横ナデ。	1/20,須恵坏2,淡褐色,鍛出土。
須恵甕	2	－ 17.8 4.3	平底の底部から、体部は外傾して立ち上がる。	内面回転横ナデ、外面下端回転箆ケズリ(右回転)。底面周縁部箆ケズリ。	1/10,須恵甕6,赤褐色、暗褐色,No.4。
須恵甕	3	－ 16.8 7	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、若干の指頭押圧、ナデ加わる。内面布圧痕残る。外面下端箆ケズリ。底面未調整部分残る箆ナデ。	1/10,須恵甕3,灰色,No.1。
須恵甕	4	－ 14 7	底部は平底で体部は直線的に立ち上がる。体部内面輪積み痕残る。	内外面とも右回転横ナデ、外面指頭ナデ後底部周縁箆ケズリ、内面指頭押圧加わる。底面箆ケズリ。	1/10,今熊細粗雲母,灰色,ＳＪ４０出土片と接合。
須恵甕	5	－ 15.7 10.7	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）。外面若干の指頭ナデ加わる。下端部箆ケズリ，底面未調整。	1/10,須恵甕3,赤褐色,No.2。



第191図　第41号住居跡出土遺物

第42号住居跡（第192図）

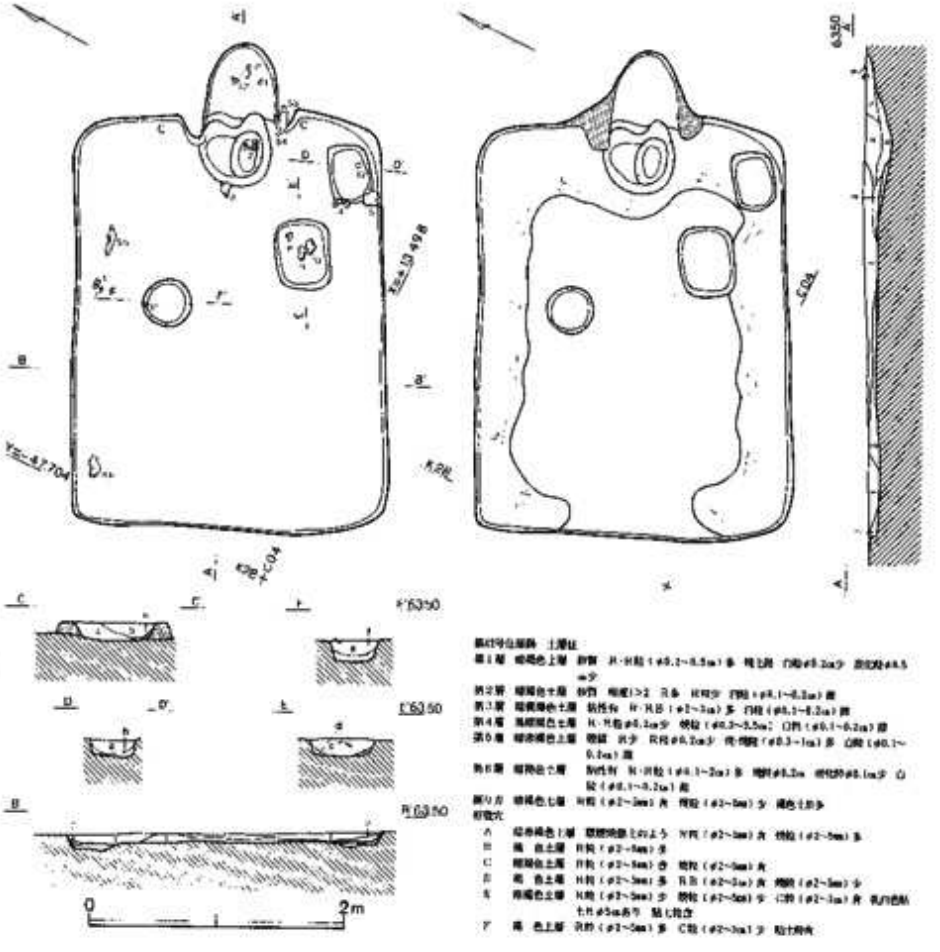
耕作による攪乱が著しく住居内外に新しいピットが存在する。壁外施設については判らなかった。

竈周辺の遺物はすでに露出した状態であり、埋土の状態は悪い。出土遺物は北壁下と竈右に分布しほとんどは埋土中出土である。

平面形は比較的整った隅丸長方形で東壁が竈部分でわずかに段をなす。

床面ほぼ平坦で竈前面～中央に硬質面が広がるが他は柔らかい。

貯蔵穴が3ケ所検出された。竈前方右側のものは上層が硬く貼り床状であった（新旧は確実ではないが竈右が新しいと考えられる）。



第192図　第42号住居跡平面図

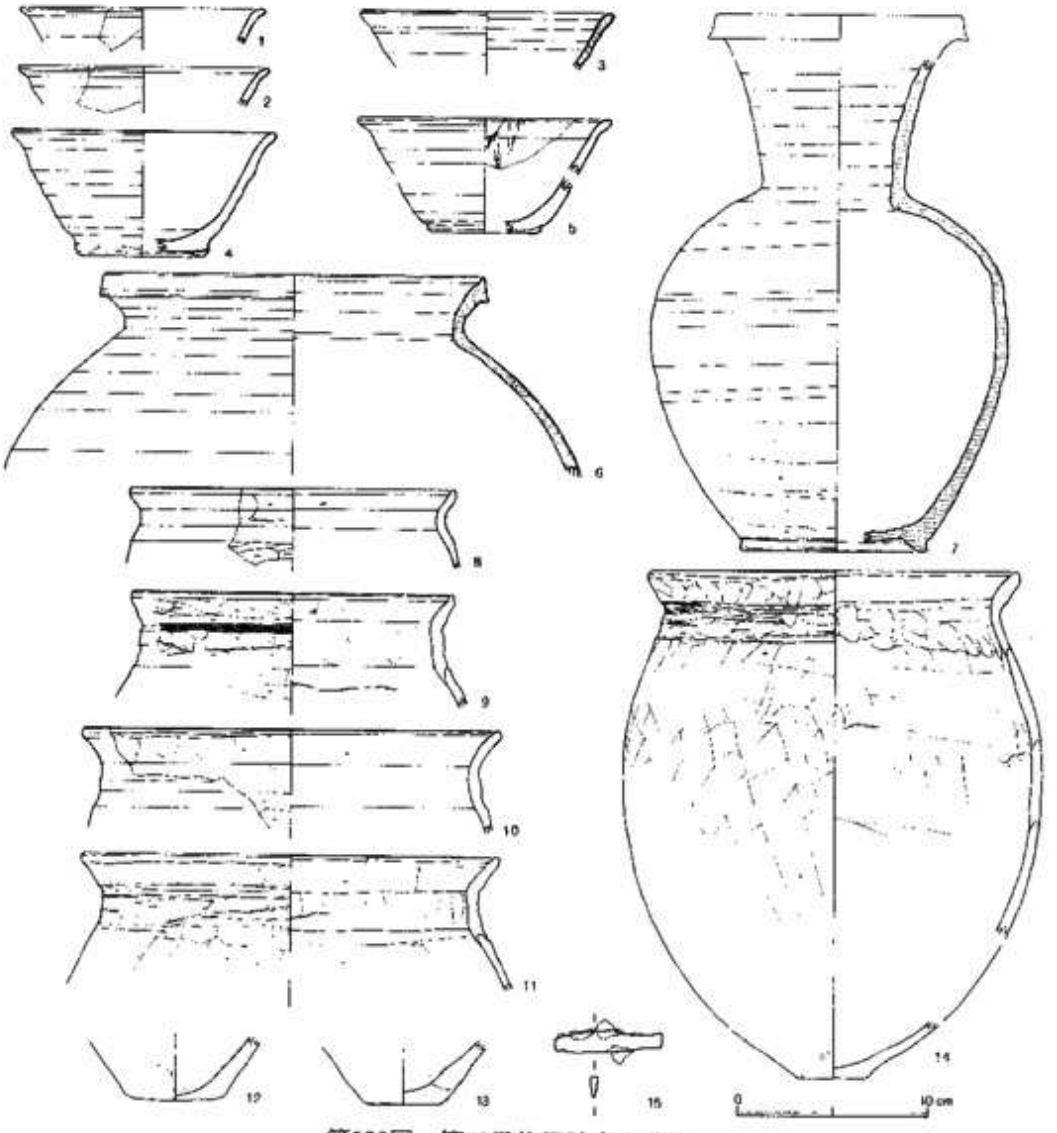
北壁下中央のものは新しいピットである可能性もある。柱穴、壁溝等は検出されなかった。生活段階の遺物はほとんどない。

掘り方は中央部をやや広めに略方形状に掘り残し、周辺部を窪めるもので（竈対壁はごくわずか）貼り床は認められない。

竈は東壁ほぼ中央に敷設され燃焼部下部が残る。右袖は土壙に切られている。燃焼部底面は外方へ向かって緩く立ち上がり、住居の部分はやや深く略方形状に掘り込まれる。右側はピット状に窪む。側面はやや焼けており赤変するが、底面はほとんど焼けていない。袖は左袖に粘土が残るがほとんど崩壊している。右袖に袖石が残存するが土壙による攪乱を受ける。壁をわずかに掘り込む。掘り方埋め戻し後袖を構築している。

第42号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 — 1.9	体部は外傾して立ち上がり屈曲してやや肥厚する口縁部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1/10,須恵坏1,灰色
須恵坏	2	13.2 — 2	体部は内湾して立ち上がり屈曲してそのまま口縁部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）、口唇部下のくぼみは指頭による。	1/5,須恵坏2,赤褐色,摩滅顕著。
須恵坏	3	13.4 — 3	体部は僅かに内湾して立ち上がりやや外反して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1/5,須恵坏2,赤褐色,№2。内外面一部黒斑。
須恵高台付椀	4	14 6.1 6.5	高台部は低くほぼ直立し幅広い。接地面ほぼ平坦。底部は凸出し体部は下端で稜をなし内湾気味に立ち上がる。僅かに外反し肥厚する口唇部に移行する。接合しないが同一個体。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、底面中心部糸きり痕残る。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ。体部下端の稜、上端の外反はやや強い指頭ナデによる。	約1/3,須恵坏5,灰白色,№8＋床下土壙№1＋貯蔵穴出土。
須恵高台付椀	5	13.4 5.3 6	高台部剥離する。底部は凸出し段をなす。体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がり、外反してやや肥厚する口唇部に移行する。接合しないが同一個体とみられる。	内外面回転横ナデ（左回転？）、内面丁寧平滑、底面糸きり痕残る。	1/5,須恵坏5,赤褐色、灰褐色,摩滅顕著。
須恵甕	6	20 — 10.4	胴部は強く張り頸部に向かって収縮する。頸部は短く外反して立ち上がり、口縁部肥厚し複合口縁状を呈す。	内外面回転横ナデ（右回転？）。磨滅剥離顕著で詳細不明。	1/3,須恵甕1′,灰褐色（赤褐色）灰褐色,やや軟質。
灰釉長頸壺	7	— 9.7 25.5	高台部は低くほぼ直立し、接地面平坦内面内ソギ状。体部は卵側形で肩がはり、屈折して直立気味に立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、底面～体部下半篦ケズリ、高台部粘土貼付け後指頭ナデ。灰緑色の釉が体部上半、頸部内面にかかる。	80%,廃棄？,灰白色,№5＋床下土壙№1。内面スス付着。
台付甕	8	17.2 — 4	やや張りをもつ胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き口唇部直立し、外面下縁い稜をなす。内面頸部、中位緩い段をなし外反して立ち上がる。	胴部外面横篦ケズリ（←）、内面篦ナデ後指頭押圧。口縁部横ナデ、外面指頭押圧、ナデ。	1/10,甕1,黒色（褐色）黒色。
台付甕	9	17 — 5.7	やや張りをもつ胴部から微かに稜をなし僅かに内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して開き口唇部直立し端部尖り気味で、外面下稜をなす。内面中位、頸部緩い稜をなす。	胴部外面横篦ケズリ（←）、口縁下位に及ぶ。内面篦ナデ。口縁部横ナデ、外面頸部、屈曲部工具ナデで指頭押圧・ナデ加わる（未調整部分残る）。内面指頭押圧・ナデ。	1/10,甕1,赤褐色,№2。



第193図　第42号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	10	22 － 5	やや張りをもつ胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き口唇部肥厚し外面凸状呈す。内面は外反して立ち上がる。	胴部外面横箆ケズリ（←）。口縁部横ナデ、外面頸部、屈曲部工具ナデ後指頭押圧、ナデ。	1/5.甕1.暗褐色.No.2。
甕	11	22 － 7	張りをもつ胴部から微かに段をなし僅かに内傾する口縁部に移行する。中位で屈折して開き口唇部直立し、頸部丸く収まり、外面下膨い稜をなす。内面頸部、中位緩い稜をなし外反して立ち上がる。	胴部外面横箆ケズリ（←←）、口縁下位に及ぶ。内面箆ナデ、頸部指頭押圧。口縁部横ナデ、外面頸部、屈曲部工具ナデ（巾0.6cm前後）後指頭押圧・ナデ加わる。	1/3.甕1.淡褐色.No.9＋覆＋床下上端。
甕	12	－ 3.7 3	底部は小形で平底。押圧技法か？	磨滅顕著で詳細不明。	1/2.甕1.橙褐色.貯蔵穴出土.No.11と同一個体か？

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	13	—	底部は小形で、平底。押圧技法か？	磨滅顕著で詳細不明。	1/5,甕1,赤褐色.
甕	14	4.4 3.1 19.5 3.5 26.6	胴部は尻すぼみで最大径を上位にもち、肩はあまり張らない。頸部で段をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して開き口唇部直立し内面凸状、外面下縁い稜をなす。内面外反して立ち上がる。	胴部外面上端横（←←）中位斜（←←↓）以下縦（↓）筋ケズリで口縁下位に及ぶ。内面筋ナデ、上部指頭押圧。口縁部横ナデ、外面頸部の段は指頭押圧、ナデによる。屈曲部工具ナデ（巾0.7cm前後）後指頭押圧・ナデ加わる。内面対応する位置も指頭押圧。	1/3,甕1′,淡褐色.底部は接合しないが同一個体とみられる。外面スス付着。
刀子	15				10g

註　第39号住居跡　甕1（口縁部4、胴部25）　甕1′（胴部3）　甕2（胴部5）　須恵坏1（口縁部5、胴部7、底部1）　須恵坏2（口縁部3、胴部2、底部1）　須恵坏2′（口縁部1）　須恵坏3（口縁部2、底部2）　須恵坏5（口縁部1、胴部4）　須恵坏7（口縁部2、胴部1）　須恵甕1（胴部2）　須恵甕（胴部2）

第40号住居跡　甕1（口縁部3、胴部58、底部2）　甕1′（胴部3、底部1）　甕2（胴部6、底部1）　須恵坏2（口縁部6、底部2）　須恵坏3（口縁部1、底部1）　須恵坏5（胴部1、底部1）　須恵坏7（口縁部1、底部1）　須恵甕1（胴部3、底部1）　須恵甕1′（胴部1）　須恵甕3（胴部2、底部1）

第41号住居跡　須恵坏2（口縁部1）　須恵坏7（胴部1）　須恵甕1（胴部1）　須恵甕3（胴部1）　須恵甕6（胴部1）

第42号住居跡　甕1（口縁部6、胴部60、底部2）　甕1′（胴部10、底部1）　甕2（胴部3）　須恵坏1（口縁部2、胴部5）　須恵坏2（口縁部1、胴部1）　須恵坏2′（口縁部2、底部1）　須恵坏5（口縁部3、底部2）　須恵坏6（口縁部1、底部1）　須恵甕1（胴部1）　須恵甕1′（胴部7）　須恵甕3（胴部1）　須恵甕7（胴部1）

第43号住居跡（第194図）

竈が耕作用の溝によって切られていたため当初単独の竈と認識していた。壁外施設については不明である。

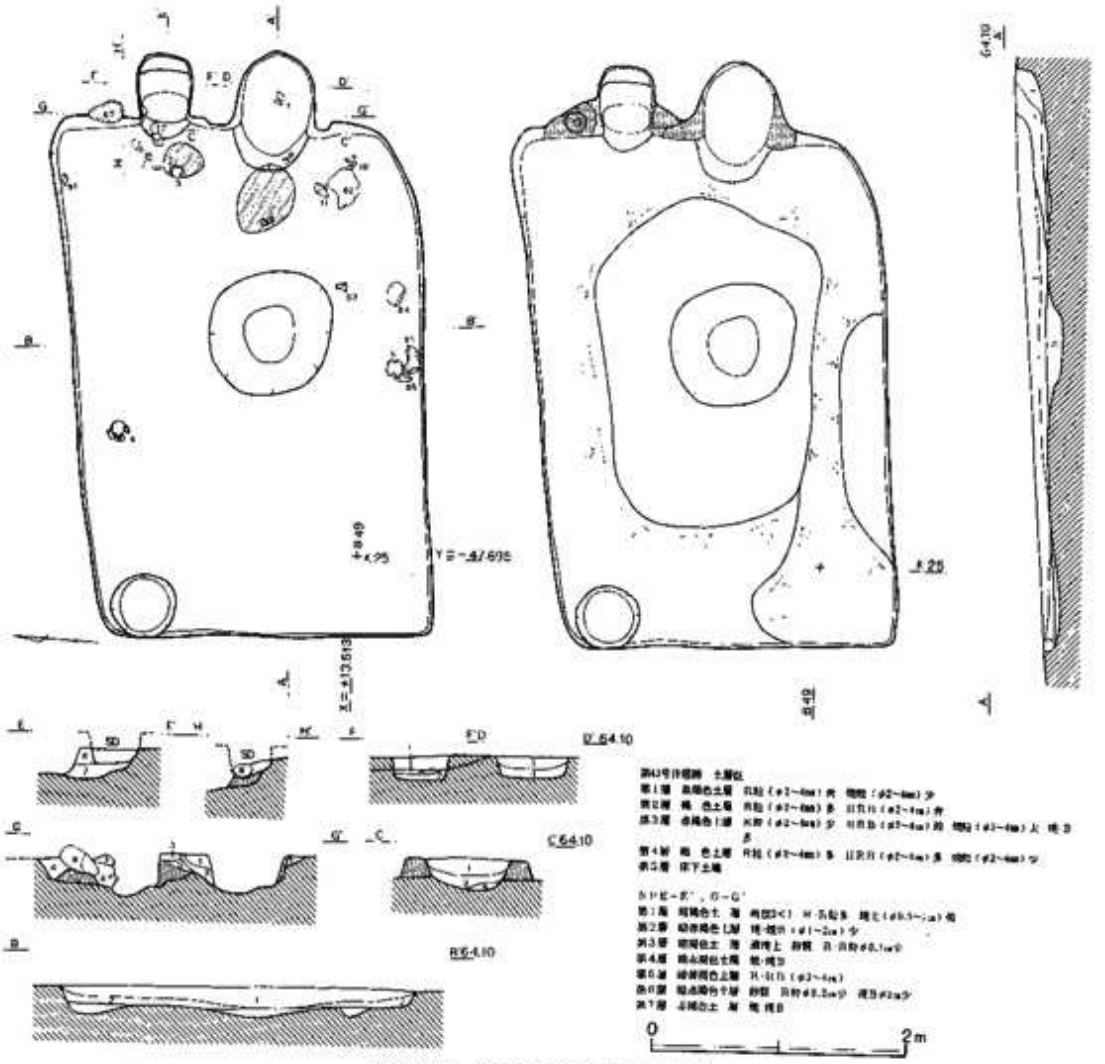
埋土は上方からの流入かほとんど一層、竈前面～中央部にかけて焼土が堆積する。出土遺物は少量で埋土中出土。

平面形は歪んだ平行四辺形状呈す（外観状はそれ程でもなく長方形状）。床面は竈付近は平坦であるが、中央～西壁は斜面に沿うような形である。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴ははっきりしないが北西隅のピットか。

掘り方は全体に不明瞭である（拡張により旧住居跡を埋め戻しているとみられ、中央部の狭い範囲がやや高く残っている。旧住居跡掘り方と重複すると考えられるのではっきりしない）。明確なのは、竈右側と南西隅の掘り込みのみである。中央部やや南寄りに床下土壙が検出され新住居に伴うとみられる。上部は貼り床が施されていた。構造段階で旧竈及び南壁下に溝状の掘り方を認めたが、これは北、東壁を新住居跡と共有する旧住居跡の一部と判断される。

新竈の燃焼部は略楕円形で手前は略方形状に掘り込まれ、底面はよく焼けており、ほぼ平坦、側面はそれ程焼けていない。底面に袖石の痕跡かピットが存在する。袖は粘土貼り付けで掘り方との関係は不明。

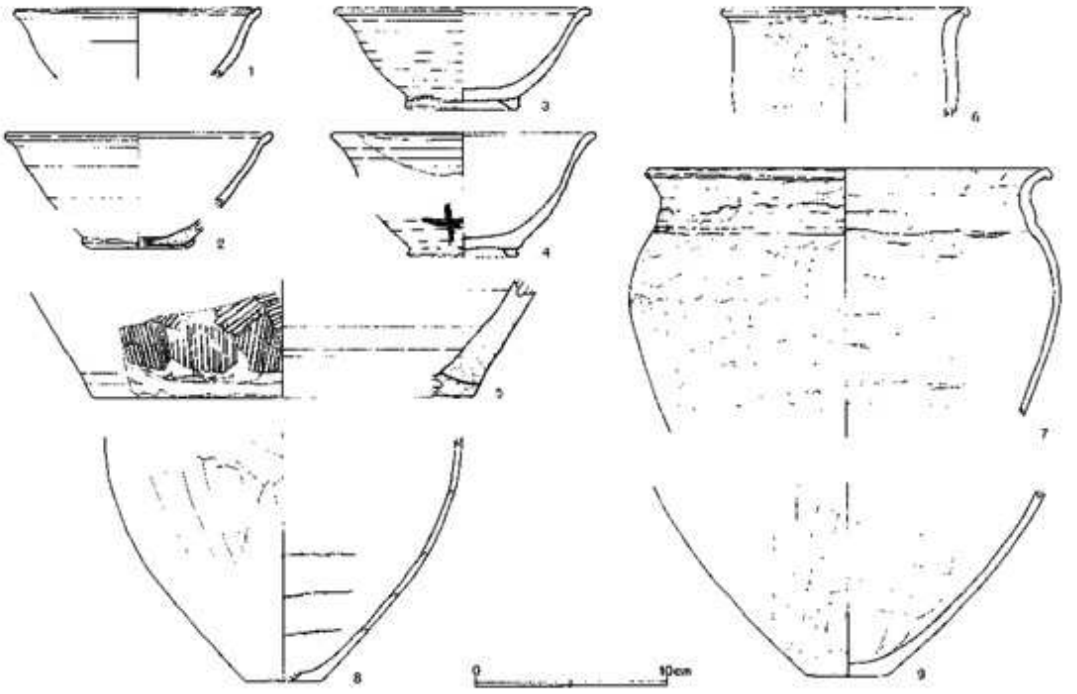
旧竈の燃焼部は現代の溝によって切られる。溝中に袖石が露出していたが新竈のものと考えていた。燃焼部は略方形で底面～側面、北東隅及び竈前面はよく焼けている。袖が一部残存しており右側粘土貼り付け部分は新竈によって切られている。壁をやや大きめに掘り込んで、粘土を貼り付ける。左袖石がやや傾いた状態（地山に突き刺したような状態）で検出された。



第194図　第43号住居跡平面図

第43号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 — 3.6	体部は内湾して立ち上がり、そのまま内側に肥厚し微かな稜をなす口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）。口唇部外面下やや強いナデにより外半を造出する。	1/10、須恵坏1、黒色（灰白色）黒色。
須恵高台坏	2	14.1 5.1 6	高台部は低くほぼ直立し幅狭く接地面外ソギ状。底部はやや凸出する。体部は僅かに内湾して立ち上がり、口唇部は屈折して開き肥厚する。	内外面回転横ナデ（左回転？）、底面糸きり痕残る。凸出する底部に小粒の粘土貼付け、密着していない。	1/5、須恵坏2、赤褐色。
須恵高台付椀	3	13.5 5.5 5.3	高台部は低くやや外開きで厚め。接地面外ソギ状。底部は厚くやや凸出し体部は中位に腰をもち内約して立ち上がる。口唇部は肥厚し外面凸状を呈する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面極丁寧平滑。底面中心部糸きり痕残る。高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ。密着していない。	70%、須恵坏2、赤褐色、No.4。外面一部剥脱。



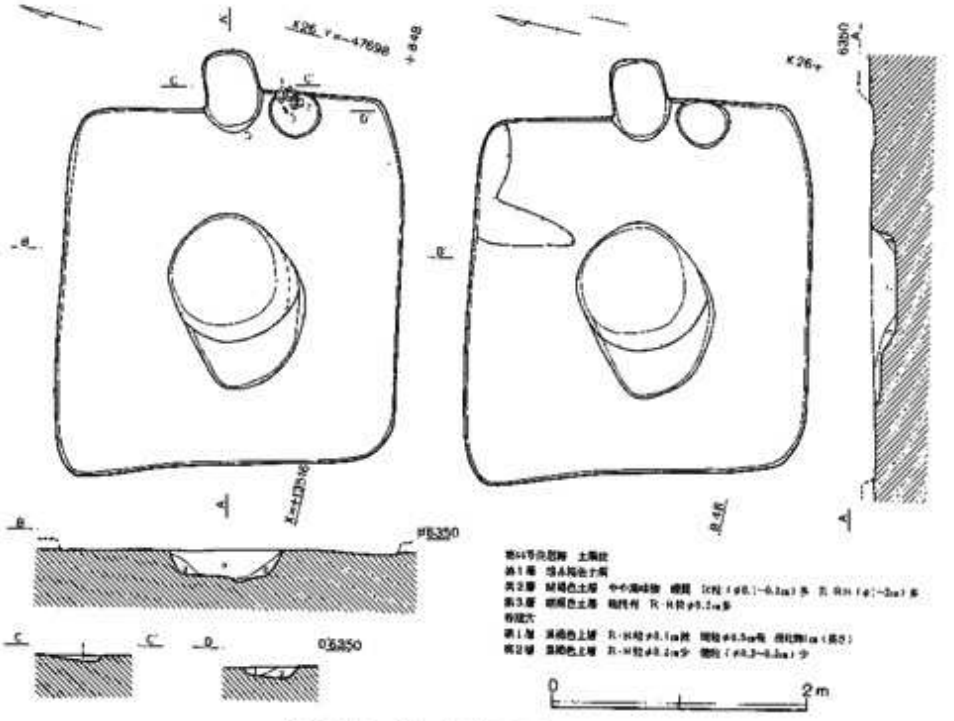
第195図　第43号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	4	14 5.6 6.5	高台部は極低く幅広、接地面平坦で竹管状の圧痕残る。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は接合しないが同一個体とみられ、外反してそのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。外面体部下半墨書あり。	80%,須恵坏2、角閃石極微量。,黒色（淡褐色）黒色,№5。
須恵甕	5	－ 20 5.5	平底の底部から体部は外傾して立ち上がる。全体に器肉厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）後外面叩き、下端部篦ナデ。底面未調整。	1/20,須恵甕1,灰白色,№1。内面自然釉付着。
甕	6	13 5.5	胴部は内傾気味に立ち上がり、上部で僅かに屈折して開く。口唇部は直立し外面凸状をなす。内面緩い段をなし外反する。	外面縦篦ケズリ（↑←）で口唇下に及ぶ、内面横篦ナデ後指頭ナデ。口縁部横ナデ？	1/20,甕1、角閃石極微量。,褐色／黒色,外面黒斑。
甕	7	21 13	胴部は無果花状？で最大径は上位にある。頸部段をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲し小さく外反して開く。口唇部直立し尖り気味で、外面一部下垂する。口縁部、頸部輪積み痕残る。内面外反する。	胴部外面横篦ケズリ（←←）以下縦篦ケズリ（粘土？付着し詳細不明）、内面篦ナデ？頸部指頭押圧。口縁部横ナデ後内外面工具ナデ、指頭押圧（凹凸顕著）。	1/2,甕1,赤褐色、淡褐色,№2＋竈。磨滅剥離顕著。
甕	8	－ 4 12.6	底部はやや凸出気味で、器肉薄い。胴部は内湾して立ち上がり、尻すぼみ？	内外面磨滅顕著で詳細不明。	1/5,甕1′,赤褐色、橙褐色,№6＋11。
甕	9	－ 4.2 9.5	小形で平坦な底部から胴部は外傾して立ち上がる。押圧技法か？	底面未調整部分の残る篦ケズリ。胴部外面縦、斜篦ケズリ（↓←）。内面篦ナデ丁寧平滑。	60%,甕1,暗褐色／淡褐色、淡褐色,竈出土。8と同一個体か？

第44号住居跡（第196図）

確認段階ですでに大部分の床面が露出あるいはすでにとんでいるような状態で（掘り方迄達している）竈も燃焼部底だけ辛うじて残ったもの。壁は全くの復元で、壁外施設は不明。

埋土は残っていない。



第196図　第44号住居跡平面図

平面形は暗褐色土のシミ状の部分をみると、やや内側になる可能性もあり不明確。東壁は竈部分で段をなす。竈右側に貯蔵穴があり甕が出土している。床下土壙が中央部に存在し西側がテラス状となる。出土遺物はない。

掘り方は存在しないと考えられる。

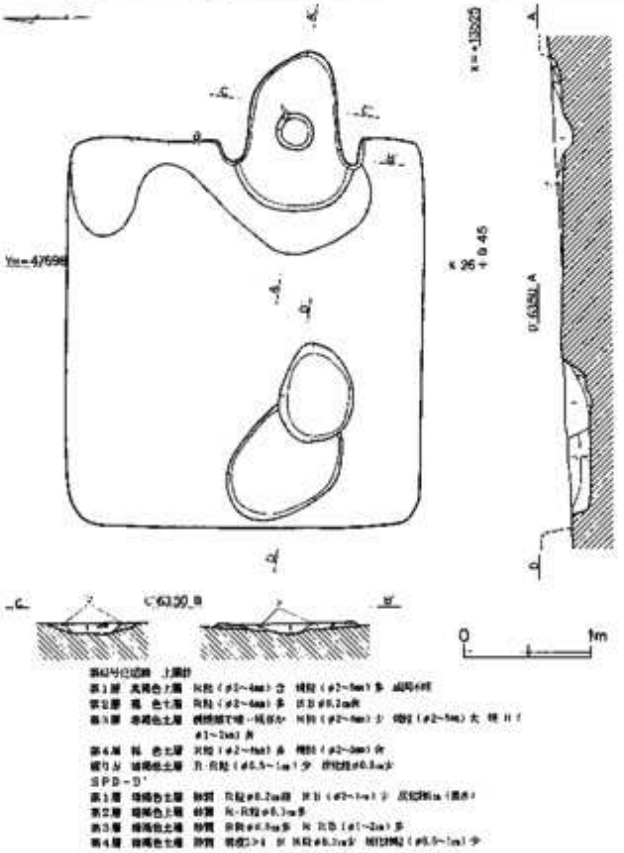
竈は東壁ほぼ中央に位置し、燃焼部底のみ残存し略長方形状呈す。

第44号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.4 － 3.4	体部は内湾して立ち上がり、口唇部小さく屈折して開き、外面凸状稜をなす。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/4、須恵坏1、灰色、磨滅顕著。
須恵高台付椀	2	14.7 5.9 4.7	高台部は低くほぼ直立し幅狭く、接地面外ソギ状。体部は下位に腰をもち、内湾して立ち上がり屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）内面丁寧平滑、外面若干の指頭ナデ。底面中心部糸きり痕残る。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。	1/2、須恵坏1、赤褐色、貯蔵穴№1＋床下出土。
須恵高台坏	3	12.9 5 5.3	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面外ソギ状で中央凹む。底部はやや凸出し器肉厚い。体部はやや内湾して立ち上がり屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑持に口唇部下顕著。底面中心部糸きり痕残る。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ。体部上端やや強い指頭ナデ。	1/3、須恵坏5、灰白色、貯蔵穴№3。
須恵甕	4	－ － 4.4	底部は剥離する。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1/5、須恵甕1'、灰褐色、貯蔵穴№2。磨滅顕著。

第197図　第44号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	5	18.2 － 2.4	口縁部は外反して開き、口唇部は直立し端部尖り気味で、外面下凹み、緩い稜をなす。	口縁部横ナデ、外面指頭押圧加わる。	1/20,甕1,黒色、赤褐色,床下出土。



第198図　第45号住居跡平面図

第45号住居跡（第198図）

竈周辺部のみ確認された。すでに掘り方まで達していると考えられ床は全く残存していない。

埋土は全く残っていない。

出土遺物はごく少量である。

平面形は全くの復元で、柱穴、壁溝等は検出されなかった。

床下土壙としたピットは確実ではない。

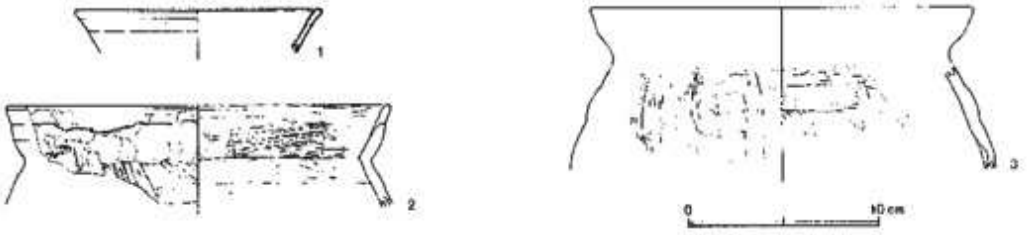
掘り方は竈両側に認められ、わずかに掘り込みが残る。

北東隅は第44号住居跡と同じような形である。

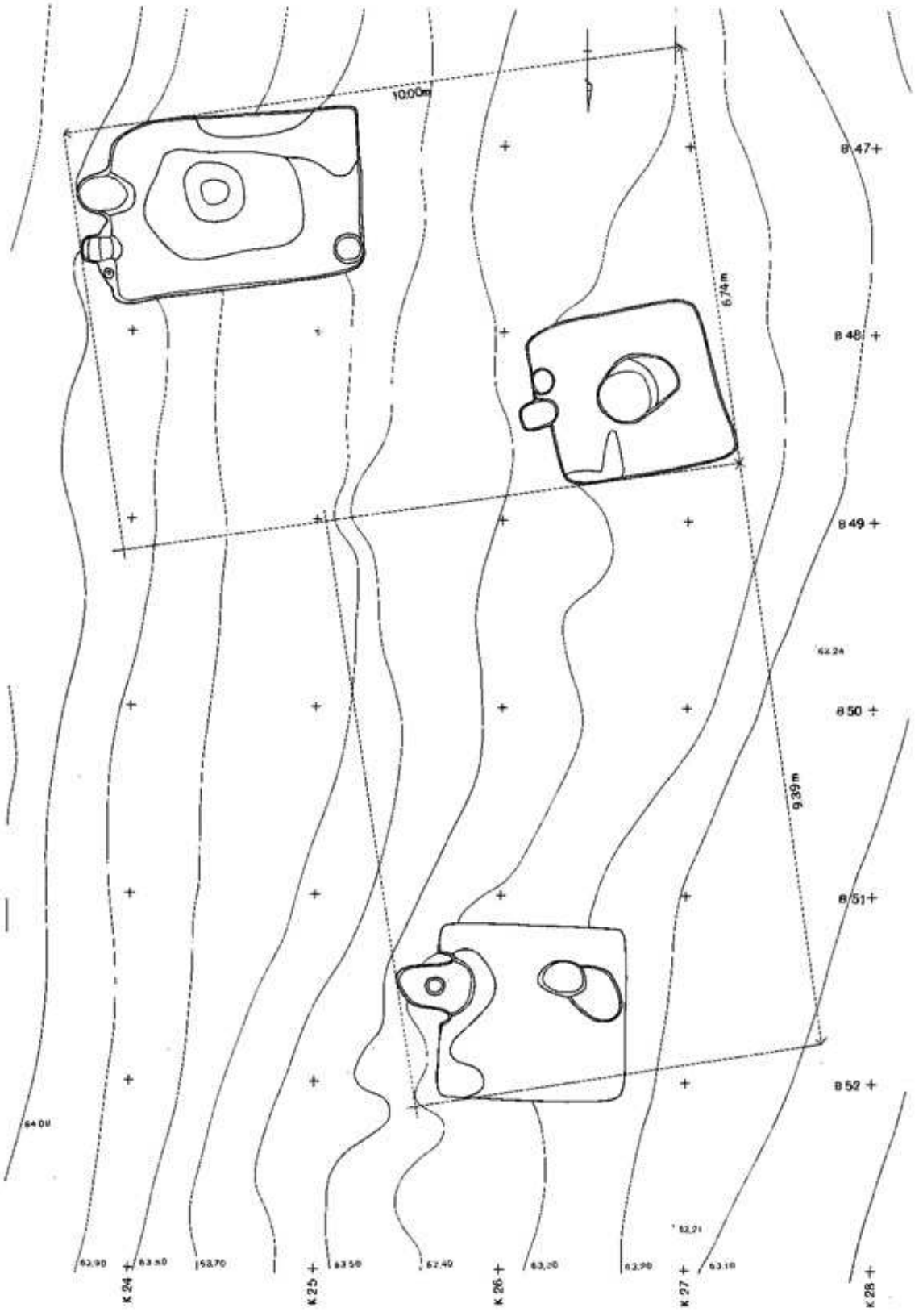
竈は東壁右寄りに敷設され、燃焼部底がかろうじて残った。底面は比較的よく焼けており赤変する。

中央部に支脚の痕跡かピット穿たれる。

袖は粘土貼り付けで基部のみ残る。袖部分はやや壁を掘り込んでいる。



第199図　第45号住居跡出土遺物

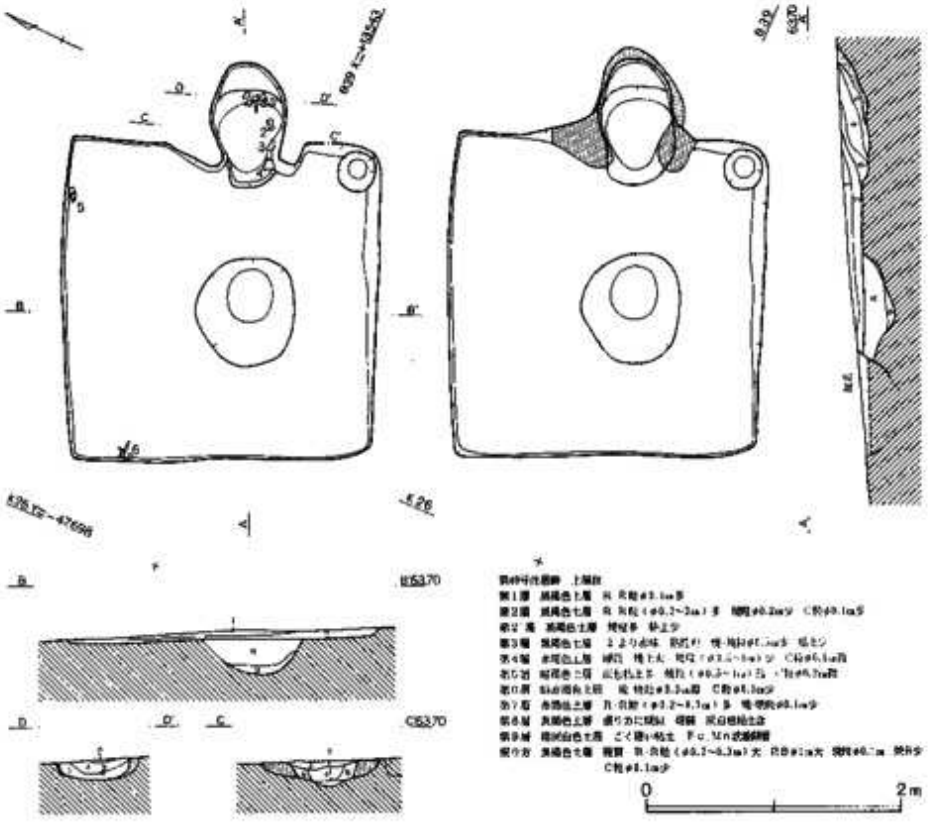


第200図　第４ｂ住居跡群配置図

第45号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 — 2.3	体部は外傾して立ち上がりそのまま僅かに肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/4,須恵坏1,黒色,竈出土。
甕	2	20.1 — 5.1	張りにある胴部から頸部で屈折して、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部やや内ソギ状。口縁部外面上位輪積み痕残り、頸部内面稜をなす。	胴部外面斜め刷毛、内面同様で指頭押圧加わる。口縁部横ナデ？外面指頭押圧、ナデ（未調整部分残る）、内面横刷毛、若干の指頭ナデ。	1/5,甕1、角閃石微量,暗褐色,竈出土。
甕	3	— — 5.4	胴部～頸部で外面輪積み痕による凹凸目立つ。	外面縦、斜め刷毛（↑）後指頭押圧？内面斜め刷毛（1cm/8本）後頸部横刷毛。	1/10,甕1、角閃石微量,赤褐色,竈出土。

第48号住居跡（第２０１図）



第201号　第48号住居跡平面図

周辺部に壁外遺構は検出できなかった。西壁は攪乱により不明確。

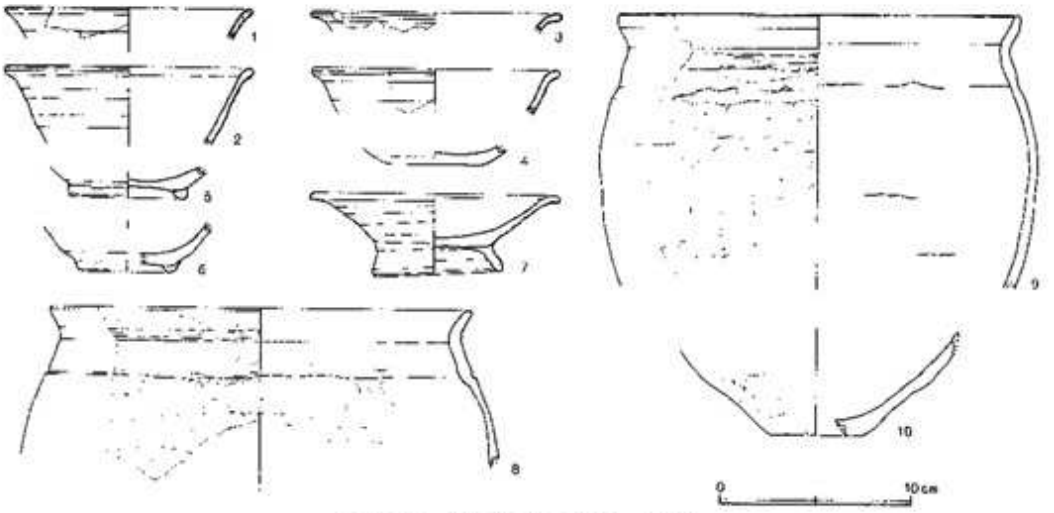
埋土は２層に分割される。竈は完全に崩壊しているとみられる。

平面形は竈壁及び対壁が僅かに斜行する台形乃至小形の方形。

床はほぼ平坦で貼り床が竈前面～中央に存在する。

壁溝、主柱穴等は存在しない。床下土坑は竈前面略円形の黒色土の落ち込みとして検出された。貯蔵穴は東南隅壁直下の比較的小形で浅いピット（炭化物多量に含む）。出土遺物は竈及びその周辺から出土し埋土中出土が多い。

掘り方は中央部を残し周辺部を掘り窪める方法と考えられるが掘り込みは全体に浅く不明瞭。床



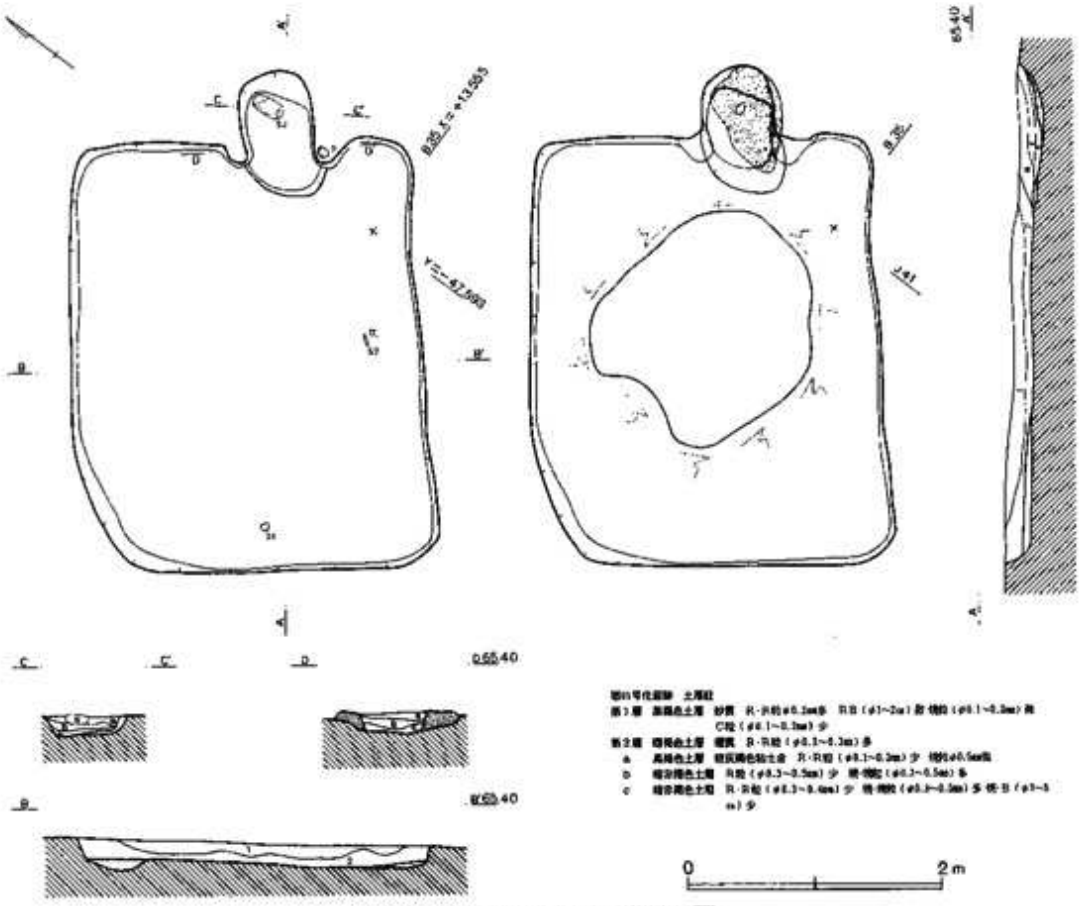
第202図　第48号住居跡出土遺物

下土壙は貼り床直上で確認されたので生活段階で開口していたと考えられる。周縁～底面にかけて暗灰白色粘土が貼り込まれ底面は特に厚い。出土遺物はない。

竈は東壁中央に敷設される。天井～袖部分は崩壊して完全に粘土が流出した状態。燃焼部～煙道？側面に灰褐色粘土の貼り付け痕跡が残る。底面は僅かに赤変し柔らかい。周囲を掘り込み側面に粘土を貼り付ける構築方法と考えられ袖芯は不明確。

第48号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 － 1.7	体部は外傾して立ち上がりそのまま内側に肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ。	1/10,須恵坏7、白粒粒度小やや多量,灰白色,竈出土。
須恵高台付椀	2	13 － 4	体部はやや内湾して立ち上がり屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。	1/4,須恵坏5,灰白色,磨滅顕著。
須恵坏	3	13.2 － 1.6	外傾する？体部から大きく屈曲して肥厚する口唇部に移行する。全体に器肉薄い。	内外面回転横ナデ。	1/5,甕1,赤褐色,№1＋雲。磨滅顕著。
須恵高台付椀	4	13 5 5	高台部は剥離する。体部は内湾して立ち上がり、大きく屈曲して肥厚する口唇部に移行する。接合しないが同一個体とみられる。	内外面回転横ナデ（左回転？）。底面回転糸きり痕残る。	1/10,須恵坏2,赤褐色,
須恵高台坏	5	－ 4.2 2.3	高台部は低く外傾気味、底面凹凸目立つ。体部は下部で屈をもち内湾して立ち上がる。	内外面とも右？回転横ナデ、底面糸きり痕残る。磨滅顕著。	1/3,白多細粗,淡褐色,№1
須恵高台坏	6	4.2 2.3 －	高台部は低く内傾し幅狭い、接地面ほぼ平坦。底部はやや凸出し体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ、底面糸きり痕残る。高台部は凸出する底部に僅かな粘土を張り付ける。	1/2,須恵坏2,淡褐色,№1。磨滅顕著。
須恵高台付皿	7	13.2 6.4 4.2	高台部は高く外開きで薄い。接地面丸く収まる。体部は外傾して大きく開き、口唇部肥厚しほぼ水平。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。高台部粘土貼付け後回転横ナデ。底面糸きり痕撫で消す。	80%,須恵坏7,黒色,№6。



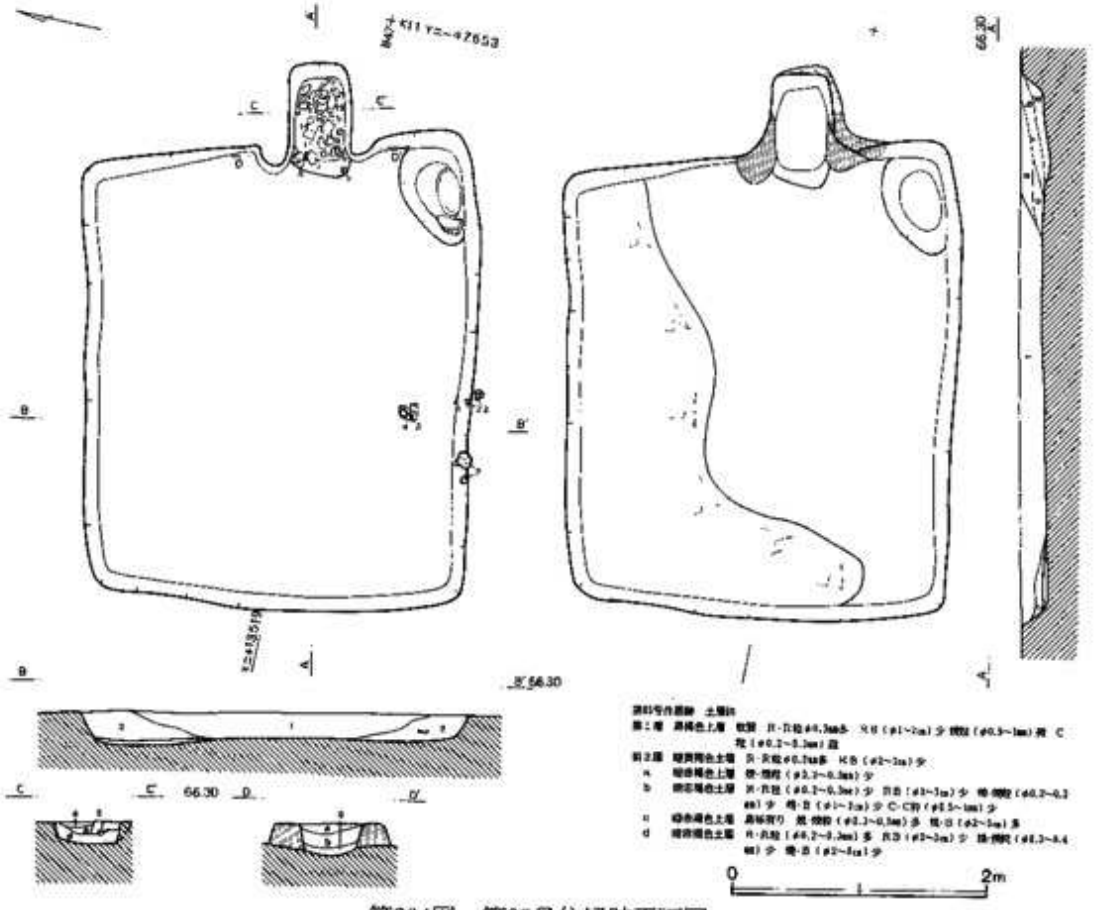
第203図　第91号住居跡平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	8	22 － 7.7	やや張りをもつ胴部から段をなし内傾する口縁部に移行する。上位で屈折して小さく開きそのまま口唇部に移行する。内面頸部、中位緩い段をなし外反して立ち上がる。	胴部外面横箆ケズリ（←←↓）、口縁下位に及ぶ。内面箆ナデ、頸部指頭押圧。口縁部横ナデ？外面頸部、屈折部棒状工具ナデ後指頭押圧、ナデ（内面対応する）。	1/10,甕1,淡褐色,床下出土。磨滅顕著。
甕	9	21 － 14.2	やや張りをもち最大径を上位にもつ胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。上位で外反して内湾気味に開く。口縁部直立し厚く外面稜をなす。内面外反して開く。	胴部外面上端横箆ケズリ（←←）以下縦箆ケズリ（↓←）。内面箆ナデ頸部指頭押圧。口縁部横ナデ（←？）外面中位工具ナデ後指頭押圧。	1/10,甕1,赤褐色、淡褐色,№2－4。外面スス、炭化物付着。
甕底部	10	4.8 4.3 －	平底の底部？から胴部は外傾して立ち上がる。器肉厚い。	底面箆ケズリ、胴部外面斜め箆ケズリ（↓→）、内面箆ナデで丁寧平滑。	1/5,甕1,暗褐色、赤褐色,№3。

第91号住居跡（第203図）

東側斜面で単独で確認された住居跡で、竈焼土の赤変範囲が明確で袖石が露出していた。壁外施設は認められなかった。埋土はよく残存したが出土遺物は極少量で図示できるものはない。竈周辺の粘土流失はあまりみられない。

平面形は全体にやや歪んでいるがほぼ長方形で、西隅が屈曲する。床面は全体に柔らかく判然としない部分があった（特に西半）。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。生活段階に伴う遺



第204図　第95号住居跡平面図

物はない。

掘り方は不明確。貼り床はない。

竈は東壁やや右寄りに敷設され明確な燃焼部赤変範囲（特に右側）として確認された。燃焼部は略長方形で深く掘り込まれ、奥半分はよく焼けている。支脚石か横倒しで浮いた状態の河原石が出土している。袖部は粘土貼り付け。左右とも壁を掘り込むが、右側の方が大きく食い込む。焚き口は緩やかに立ち上がり、袖石の痕跡か右側に扁平なピットが穿たれている。

第95号住居跡（第204図）

第96号住居跡を切っており付近には該期の住居跡は存在しない。台地頂部に位置する住居跡である。南西隅は土壙によって切られる。壁外施設は検出されなかった。

掘り込みは深く埋土はよく残っていたが、ごく単純な自然推積である。遺物は竈内と南壁中央に限られ南壁下のものは投棄と見られる。

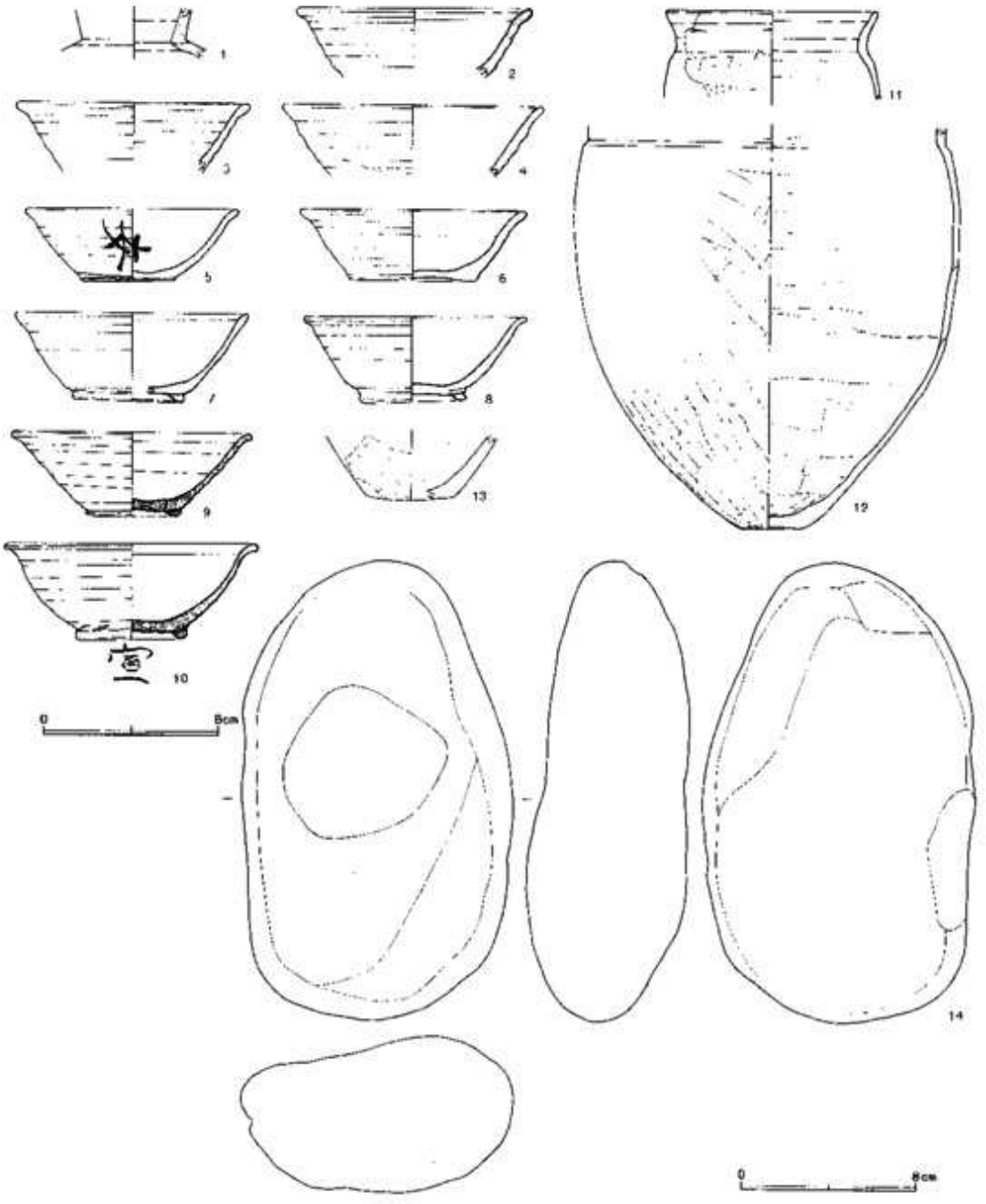
平面形はやや歪んだ長台形状を呈する。床面はほぼ平坦で全体に硬く、周辺部がやや柔らかい。柱穴、壁溝は検出されなかった。貯蔵穴が竈右側、壁に接して検出され、略楕円形状である。大形の河原石と須恵片が上層から出土している。

掘り方は極浅いもので全体に不明瞭で確証はない。貼り床は検出されなかった。

竈は東壁やや右寄りに敷設され、燃焼部赤変範囲として明確であった。燃焼部は深く掘り込まれ、長方形、底面わずかに凹む程度である。底面～側面、特に奥壁～右側はよく焼けている。ほぼ中央にやや傾いた状態で片岩の支脚石が出土した。袖部は粘土貼り付けで補強は認められない。両側とも壁を掘り込むが、右側の方がやや大きくくいこむ。

第95号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵壺	1	— — 2.2	頸部は強く屈折して張りのある体部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内外面丁寧平滑。	1/2,須恵壺1、極精緻,灰色,体部片は接合しないが存在する。加熱？
須恵坏	2	13.6 — 4	体部は外傾して立ち上がり、口縁部小さく屈曲して開き肥厚する。外面ロクロ痕目立つ。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。口縁下やや強いナデで屈曲させる。	1/3,須恵坏1,灰白色.
須恵坏	3	13.4 — 4.1	体部は外傾して立ち上がり、口唇部小さく屈曲して開き肥厚し凸出気味。外面ロクロ痕目立つ。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。口唇下やや強いナデで屈曲させる。	1/3,須恵坏2、角閃石微量.,赤褐色.
須恵高台付椀	4	15 — 4	体部は外傾して立ち上がりそのまま肥厚する口唇部に移行する。内外面ロクロ痕目立つ。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。外面口唇下やや強いナデで外半気味に作り出す。	1/10,須恵坏1,灰白色,内外面一部炭素付着。
須恵坏	5	12.3 5.3 4.1	やや厚く凸出する底部から、体部は内湾して立ち上がり屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面下半若干のナデ加わる。底面糸きり痕残り、外周指頭ナデ。体部外面墨書「安？」。	99%,須恵坏1,灰白色.
須恵坏	6	13 7 4	底部はやや凸出し体部は僅かに内湾して立ち上がる。口唇部は肥厚し僅かに外反する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、底面糸きり痕残る。	1/4,須恵坏5石英粒度大多量,灰色.
須恵高台付椀	7	13.3 6.1 5	高台部は低くほぼ直立し幅狭い、接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下端で緩い稜をなし、内湾気味に立ち上がる。口唇部やや肥厚しほぼそのまま閉く。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面粗いナデ加わり、口唇部下やや強いナデで外反させる。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ中央糸きり痕残り、外面工具ナデ。	70%,須恵坏1,灰白色.
須恵高台付椀	8	12.8 5.9 4.9	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面やや外ソギ状で中央僅かに凹む。底部はやや凸出し？体部は下位に腰をもち、内湾して立ち上がり口唇部小さく屈曲して開き器厚を次第に減じる。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部凸出する底部？に僅かな粘土貼付け後内面指頭ナデ糸きり痕残る、外面工具ナデ。	60%,須恵坏2,赤褐色,内面炭素、炭化物付着。
須恵高台坏	9	13.7 4.1 4.8	高台部は極低くほぼ直立し幅広で接地面外ほぼ平坦。体部は下端に腰をもち、ほぼ外傾して立ち上がり、屈曲してやや肥厚する口唇部に移行する。内外面ロクロ痕やや目立つ。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部粘土貼付け後指頭ナデ。接地面押圧か？底面中央糸きり痕残る。	80%,須恵坏2,淡褐色,外面一部黒斑。
須恵高台付椀	10	14.6 5.9 5.5	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面ほぼ平坦で中央やや凹む。体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がる。口唇部大きく屈曲し肥厚し凸状態す。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面若干のナデ加わる。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ、底面糸きり痕微かに残る。底面墨書「宜」。	80%,須恵坏2'赤色粒子粒度大多量,灰褐色、暗褐色、№1＋23。
台付甕	11	12.2 — 5	やや張りをもつ胴部から段をなし僅かに内傾する口縁部に移行する。中位で外反して小さく開きそのまま口唇部に移行する。内面頸部緩い稜をなし外反して開く。	胴部外面横箆ケズリ（←）、11縁下位に及ぶ。内面箆ナデ丁寧。口縁部横ナデ、外面頸部工具ナデ後指頭押圧？	1/3,甕1,橙褐色、赤褐色,磨滅顕著。



第205図　第95号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	12	3.5 22.9	小形で薄い底部から胴部はほぼ内湾して立ち上がり、最大径を中位にもつ長胴形。頸部で段をなし口縁部に移行する。内面中位接合痕あり。	胴部外面上端横・斜め筆ケズリ（←・↓）以下中位まで斜め筆ケズリ（↑・）下部縦筆ケズリ（↓←）、底部筆ケズリ。内面筆ナデ丁寧平滑、頸部指頭押圧、ナデ。	60%、甕1、暗褐色、赤褐色、
甕底部	13	－ 5 3.5	平底の底部から？胴部は外傾して立ち上がる。	底面筆ケズリ？胴部外面縦筆ケズリ（↓←）。内面筆ナデ。	1/4、甕1、暗褐色（黒色）暗褐色、
石皿？	14				S 2、9.9Kg

f　平安時代　第５群

第５群は調査区の南西端、現道（現道下に遺構は存在しないことは確認済みである）の両側に展開する長さ96m、幅45m、占有領域の面積は約4,300㎡でやや広範囲に亙る住居跡群である。

台地の西側緩斜面上、標高62.9～65.0m前後に位置し、北側は第４群と接し、南西側は調査区外となり第一次調査によって遺跡の限界であることが確認されている。また西側は谷によって画される。

全体に分散的であるが、中央部の６軒が本群の主体をなす。第33、34、35号住居跡は単独で存在する可能性もあるが、谷を取り囲むような配置を考慮して本群に含めておく。また第46、47号住居跡は主体となる住居跡群からやや距離をおくが、現場における所見から本群に含めておく。構成要素として土壙１基が存在する。

主体となる６軒の住居跡群は、集合状態からさらに２小群に細別される。第30、31、32号住居跡を第５ａ住居跡群、第36、37、38号住居跡群を第５ｂ住居跡群と呼称する。

ほぼ直線上に並んだ２～３軒の小群が、やや散在的に群を構成する形態は第１群の在り方と類似する。

拡張を含めて13軒の住居跡の詳細は、以下の記述及び第８表平安時代第５住居跡群一覧表によるが、概要を示すと、規模は直径３ｍ前後のものが大部分で、2.5m以下および3.5m以上の住居跡は少ない。

平面形は長方形が圧倒的で方形、台形が３軒ある。

竈は北東壁に付設されるものが殆どで、北、北西、東竈が各１例存在する。第34号住居跡を除いて壁中央乃至右側に設置される。竈の付け替えが第38号住居跡、住居跡の重複が第37号住居跡で認められた。

約半数の住居跡に貯蔵穴が設置され、竈の右側にあるものがやや多い。６軒の住居跡で床下土壙が検出され、第35号住居跡は複数存在する。

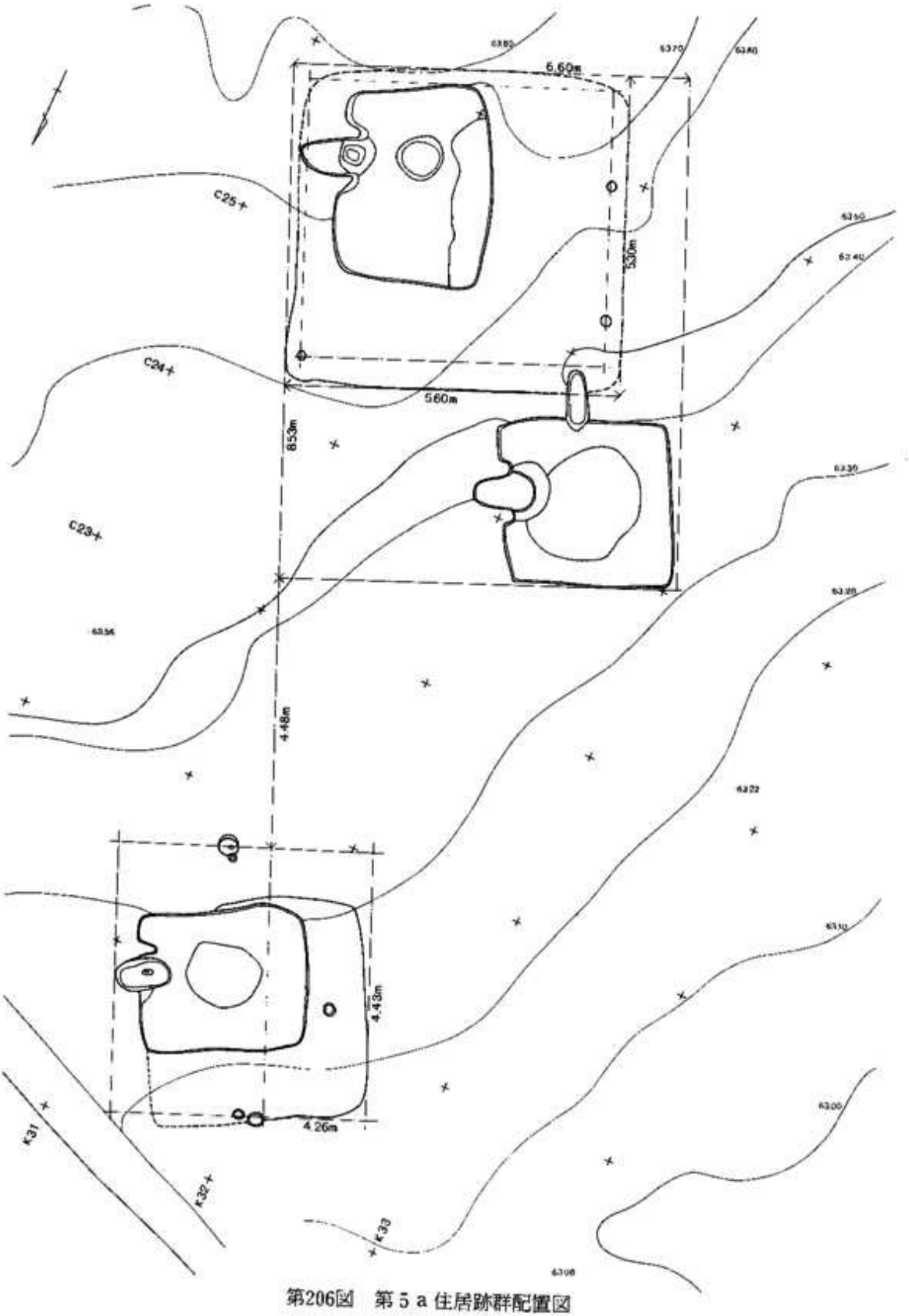
第37、38号住居跡の２軒以外は掘り方が存在する。中央部を残し四周を掘り窪めるものは少数で、一辺を掘り窪めるものが多い。

第37号住居跡で壁溝が検出された。住居跡内に明確な柱穴をもつものはないが第30号住居跡で壁外ピット、第31号住居跡で住居外に延びる溝を検出している。

第５ｂ群では拡張住居跡が２軒検出されている。

第５ａ住居跡群は17.44×9.10mの長方形ないし「Ｌ」字状の範囲で約159　㎡を占有する。第５ｂ住居跡群とした３軒の住居跡の占有する範囲は、9.08？ｍ×15.78mの長方形状ないし「Ｌ」字状で約143㎡を占有する。両群の住居跡配置は２軒が接近ないし境を接し、１軒がやや距離をおくという第４群の配置と共通するものである。更に第46、47号住居跡も明確ではないが小群をなすと考えられる。出土土器によると住居跡群内部で若干の段階差があり、第32→30→31号住居跡、第38→37号住居跡の変遷が考えられ各住居跡が同時に存在したわけではない。

その他に第47号住居跡からは焼土ピット、鉄滓が出土している。



第206図　第５ａ住居跡群配置図

第30号住居跡（第207図）

北、南、西壁からそれぞれやや離れて３ケ所にピット検出。竈袖石が露出した状態で確認された。

埋土は竈を含めて４層に分割される。北～西壁外側に住居跡を囲むように暗褐色土の分布が確認されたが、明確な遺構はみられなかった。

平面形は略長方形で南壁が歪む。床は竈前面～中央部にかけて比較的固く締まっているが他は柔らかい。屋内柱穴、壁溝、貯蔵穴は検出されなかった。住居跡外施設かどうか確証はないが住居の西半部1.0m前後外側から４本の小ピットが検出されたが、南側のものを除いて径20cm前後で浅いものである。南北壁外のピットは住居跡内の石（Ｓ３）を中心として略等位置にある。西半部をとり囲むように暗褐色土が分布する。竈袖は完全に崩壊した状態である。生活段階に伴う遺物は竈内を除いてない。

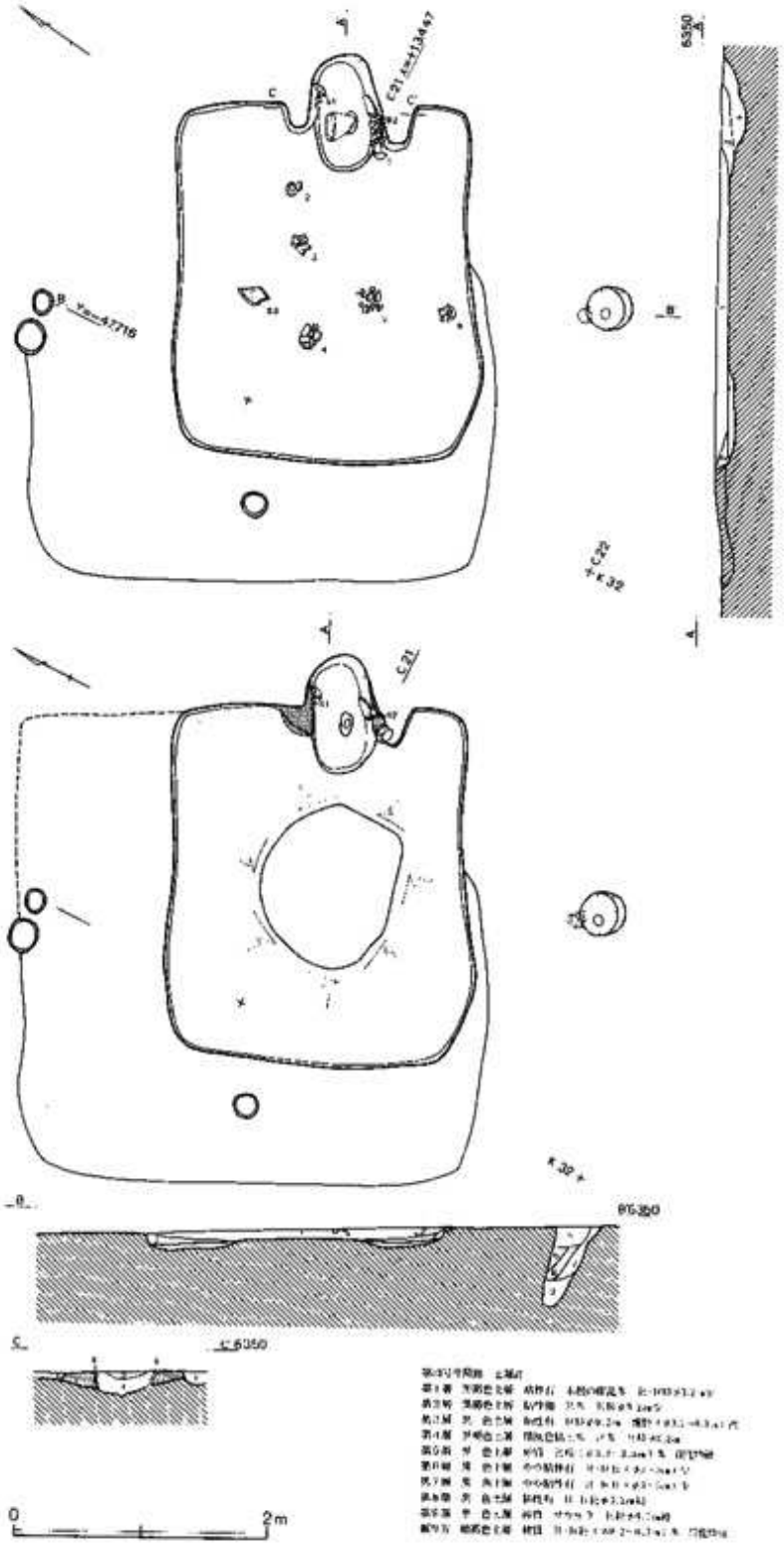
掘り方は全体にはっきりしないが、中央部を残して四周を掘り窪めるものと考えられ、隅部は南東隅を除いて若干深い。

西半部住居跡外は遺構の痕跡は認められなかった。小ピットは不明瞭である。南側の大形ピットは深く、断面によると抜き取ったものと判断される。調査区際まで遺構が延びている可能性もあり、断面観察を行なったが遺構の存在は認められなかった。

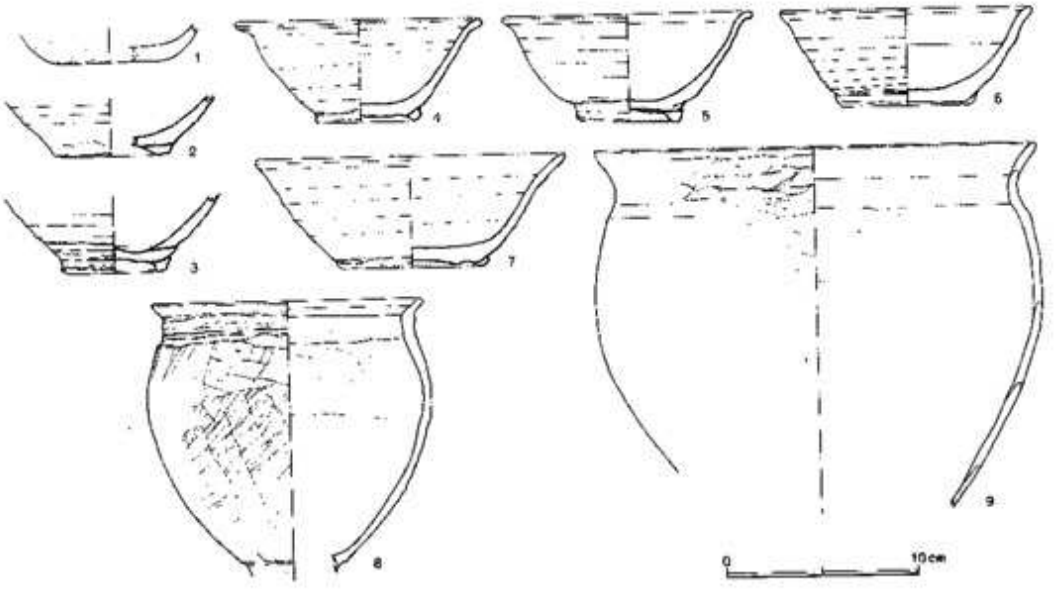
竈は東壁やや右寄りに敷設される。燃焼部は略長方形ないし楕円形状で、底面、側面ともそれ程焼けていない。底面はやや深く外方へ緩く立ち上がる。中央からやや右側へずれて倒れた状態で支脚石（片岩）が検出された。袖は完全に崩れ燃焼部内面両側に片岩がすえてあった。ほとんど焼けていない。右袖内部から土器が出土している。

第30号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	－ 5.8 1.7	ほぼ平底の底部から体部は内湾して立ち上がる。	体部内面回転横ナデ（右回転）、外面指頭ナデ。底面篦ケズリ。	1/3.須恵坏２.灰褐色.№17。
須恵高台坏	2	－ 4.8 3	高台部は低く外傾し幅広く、接地面平坦で中央凹む。底部は凸出し体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ。	1/5.須恵坏１.灰色.№２。
須恵高台坏	3	－ 4.6 4	高台部やや高く外傾そのまま体部に移行するが密着せず輪積み痕状に残る。接地面外ソギ状。体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面工具ナデ加わるか？外面若干の指頭ナデ。高台部粘土貼付け後指頭ナデ中央糸きり痕跡で消す。	70%.須恵坏２、角閃石微量。.赤褐色.№２。
須恵高台付椀	4	13 5.1 5.3	高台部は低くほぼ直立し、接地面ほぼ平坦。底部はやや凸出し？体部は中位に腰をもち内湾気味に立ち上がる。口唇部肥厚し屈曲して開き外面凸出気味。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧、外面粗いナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後内面指頭ナデ、糸きり痕残る。外面工具ナデ。	90%.須恵坏３.灰褐色.№６。内外面一部黒斑。磨滅顕著。
須恵高台付椀	5	13 5 5.6	高台部やや高く直立し幅広く接地面ほぼ平坦で中央凹む。底部はやや凸出し下位で腰をもち内湾して立ち上がる。口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面粗いナデ加わる。高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ。底面中心部糸きり痕残る。	70%.須恵坏１.灰褐色.№１。内外面一部黒斑。



第207図　第30号住居跡平面図



第208図　第30号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	6	13.2 6.9 5.2	高台部極低く痕跡的で幅広く接地面平坦で沈線？巡る。底部は凸出し厚く、下位に稜をもち外傾して立ち上がる。口唇部肥厚し緩く外反する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面付位粗いナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後内面指頭ナデ、中央糸きり痕残る。外面指頭ナデで下端の稜、上位の外反を作り出す。	80%,須恵坏5、石英粒度大多量,灰褐色（黒色）灰褐色,
須恵高台付椀	7	16.2 7.5 5.8	高台部剥離する。底部は厚くやや凸出する。体部は内湾して立ち上がり、上位で外反して開きそのまま口唇部に移行する。底部内面平坦で、重ね焼き痕？残る。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ（内面強く凹む）、中心部糸きり痕微かに残る。	1/2,須恵坏5、石英粒度大多量,灰白色,
台付甕	8	14.2 — 14.2	胴部は最大径を上位にもつ長胴形で肩はあまり張らない。頸部で段をなし内傾する口縁部に移行する。上位で屈曲して小さく開きそのまま平坦面をなす口唇部に至る。内面中位、頸部は段をなす。	胴部外面上部横（←←）以下中位まで斜め（↑←）下部縦箆ケズリ。内面箆ナデ頸部指頭押圧、丁寧平滑。口縁部横ナデ？外面棒状工具ナデ後上半部指頭押圧、ナデ（内面対応する）	70%,褐1,暗褐色,No1＋17。
甕	9	23 — 18.9	やや張りをもつ胴部から緩かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲してそのまま尖り気味の口唇部に至る。外面輪積み痕残る。内面外反して開く。	胴部外面横箆ケズリ（←）。内面箆ナデ頸部指頭押圧。口縁部横ナデ（未調整部分残る）後工具ナデ指頭押圧。	1/5,褐1,褐色,No5。

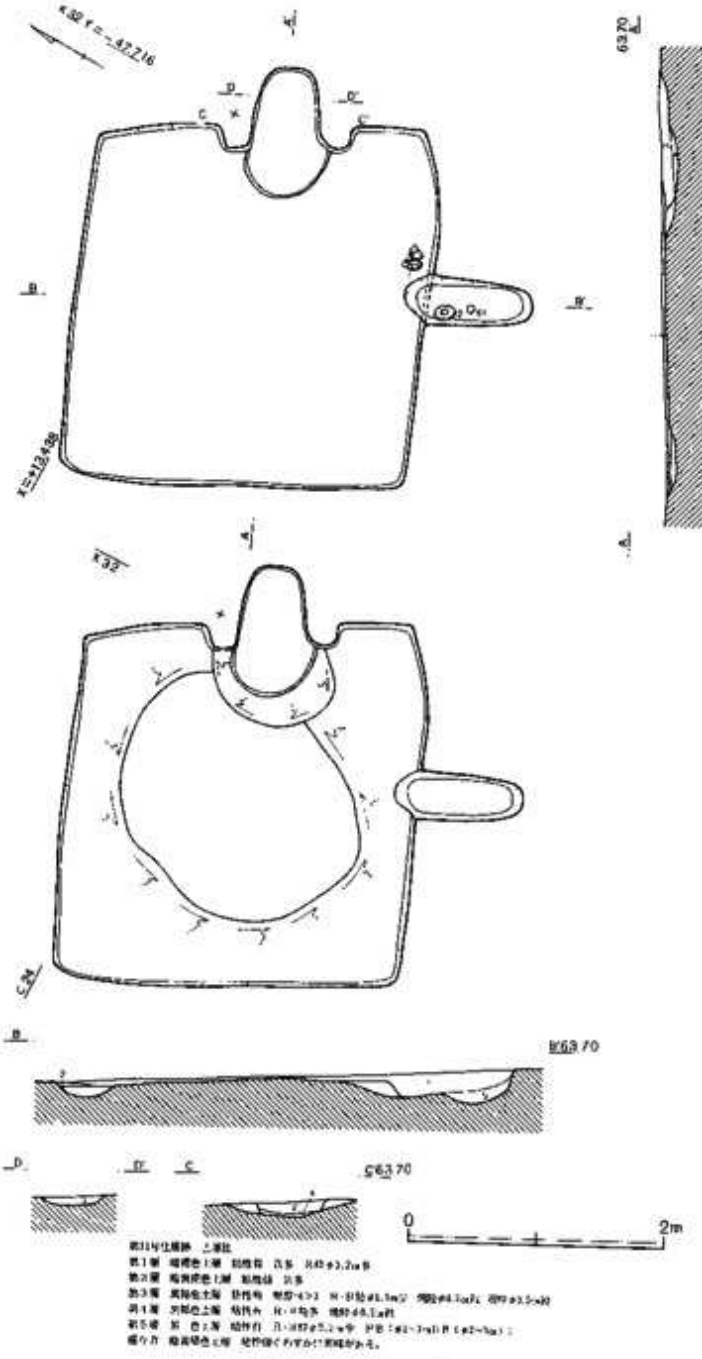
第31号住居跡（第209図）

明確な壁外施設は認められなかったが南壁溝状の凸出部分の重複関係は把握できなかった。埋土は浅くほとんど残っていない。断面では溝との新旧関係はつかめなかったので住居跡の一部と考えられる。

平面形は東西壁が斜行する平行四辺形状。床面は全体に柔らかくはっきりしない。柱穴、壁溝、貯蔵穴等は検出されなかった。出土遺物はほとんどないが南壁下の須恵坏はほぼ床直である。溝中出土の須恵坏も伴う。

掘り方はっきりしないが、中央部を残して四周を掘り込むもので、竈左側を除いて隅部がやや深い。南壁凸出部分は第30号住居跡ピットと同じようなものか。

竈は東壁ほぼ中央に敷設される。袖は大部分崩壊した状態である。燃焼部は略長方形、ないし楕円形で底面は外方へ緩く立ち上がり、底面、側面ともよく焼けていない。



第209図　第31号住居跡平面図

第210図　第31号住居跡出土遺物

第31号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	－ － 0.9	高台部剥離する。底部はやや凸出する。	内外面回転横ナデ（右回転）、底面糸きり痕残る。	1/2,須恵坏1,灰色、灰白色,磨滅顕著。
須恵高台坏	2	－ － 1.7	高台部剥離する。体部は下位で稜をなし外傾して立ち上がる。	内外面とも右？回転横ナデ。底面中央部糸きり痕？	1/5,白多細粒多,褐色.
須恵高台付椀	3	12.6 6.1 4.9	高台部は低くほぼ直立し幅狭く接地面外ソギ状。体部は下端で微かな稜をなし外傾して立ち上がり、そのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面若干のナデ加わる。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、底面中央糸きり痕撫で消し、外面下端稜を作り出す。	80%,須恵坏2、角閃石微量。,赤褐色,№1。磨滅顕著。
須恵高台付椀	4	13.9 5.5 6.5	高台部は低くほぼ直立し幅広く接地面ほぼ平坦で中央凹む。底部は凸出し体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がる。口唇部肥厚し僅かに屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面若干のナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ、底面糸きり痕残る。密着していない。	完存,須恵坏1,黒色,№2。内面剥離顕著。

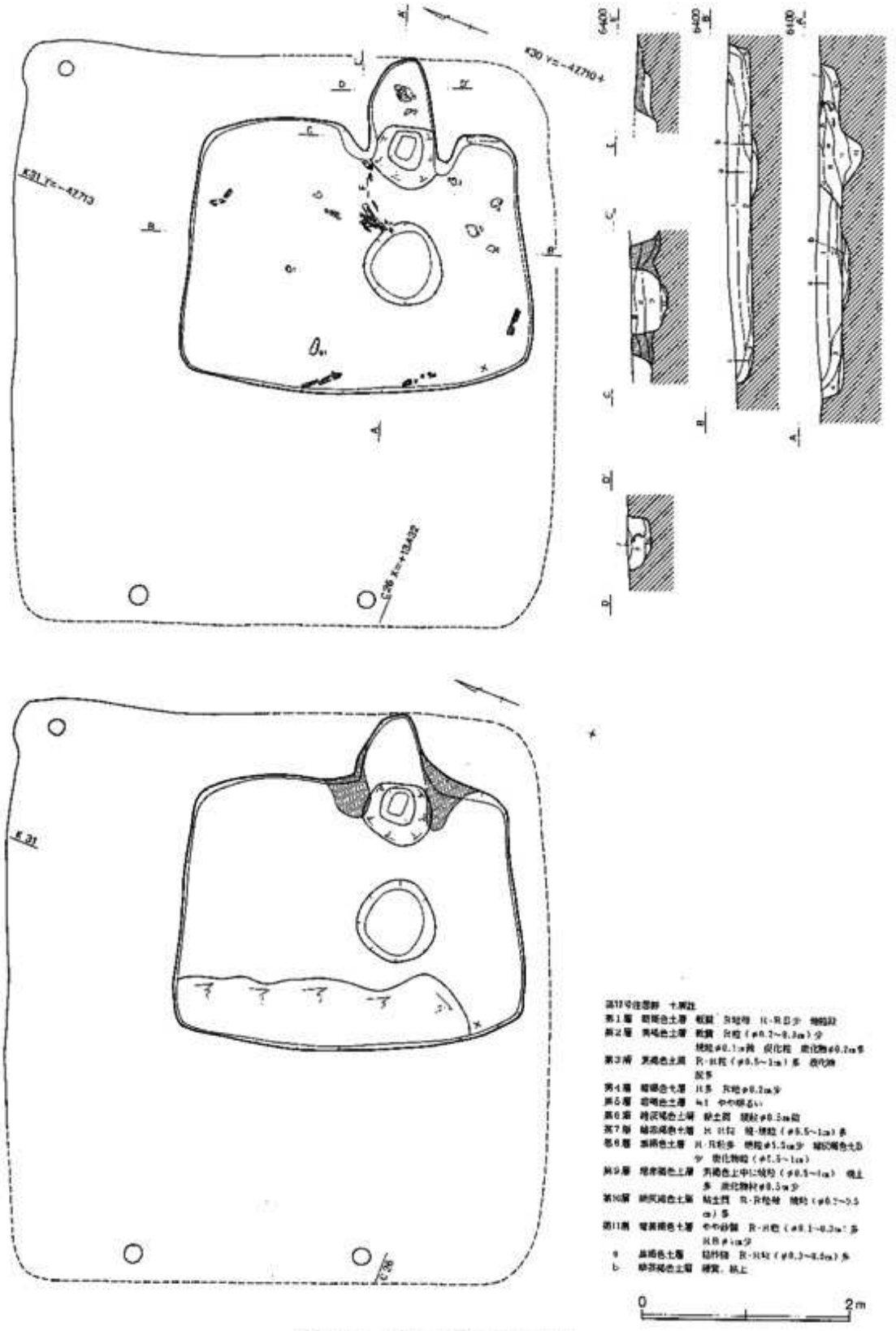
第32号住居跡（第211図）

竈右側は風倒木ないし土壙による攪乱を受け不明瞭。東壁上部は近、現代の溝に切られている。壁外施設不明確であるが、北西側にピット状（木根か？）の落ち込みが認められ、第30号住居跡と同様に断片的に暗褐色土の分布が住居跡を囲むように存在する。

埋土は比較的単純な自然推積と考えられる。出土遺物は大部分が埋土上層から出土し、竈前面に炭化物、炭化材が分布する（壁際～竈）。

平面形は西壁及び竈壁が湾曲する台形状。床面は竈前面～中央部が堅緻で周辺部は柔らかい。柱穴、壁溝等は存在しない。竈側半分程が貼り床で床下土壙は当初検出できなかった。生活段階の出土遺物はない。

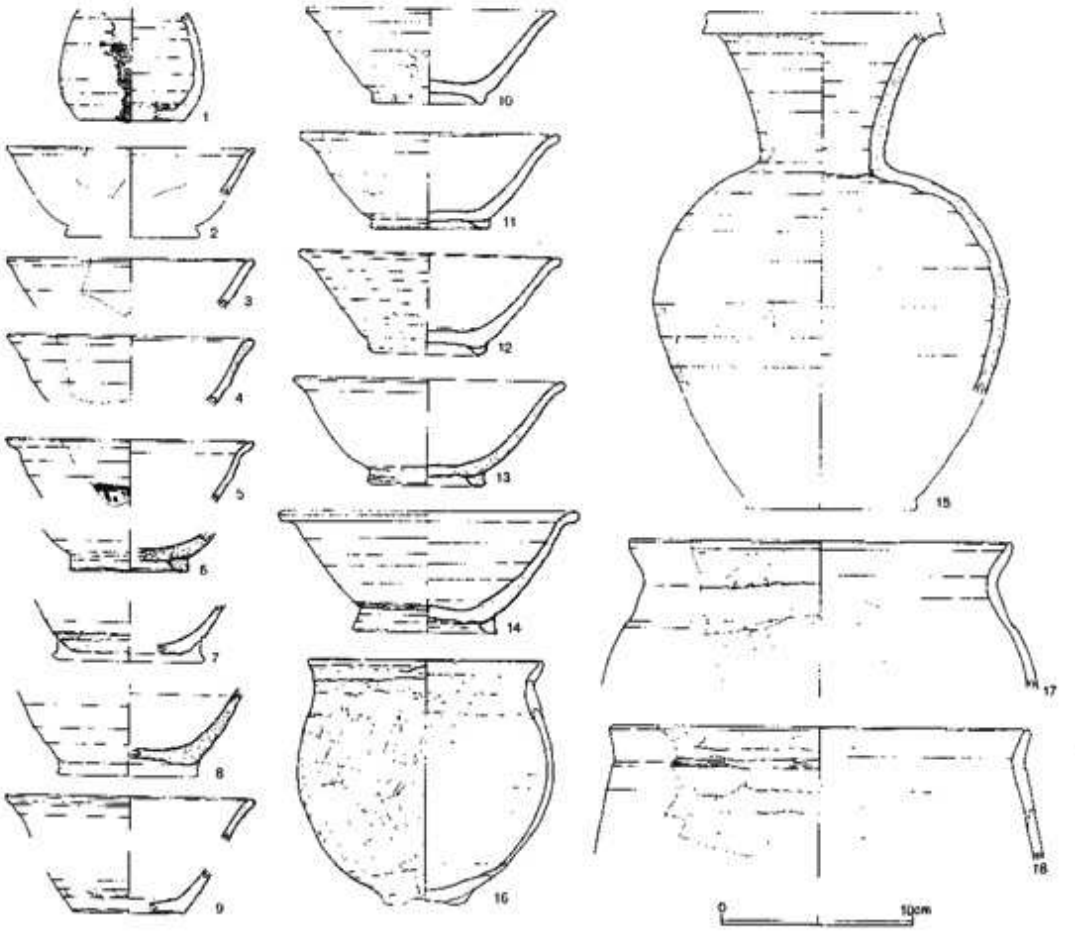
竈は東壁やや右寄りに存在し壁際はよく焼けている。煙出し部は確認されていない。燃焼部は略長方形状で底面はほぼ平坦。左側壁が緩い段をもつ（中央から逆位の台付甕が浮いた状態で出土）焚き口部はピット状に掘り込まれており使用時にも窪んでいたと考えられる。袖は粘土貼り付けで、壁をやや掘り込んで付設され、補強材はみられなかった。袖粘土は床下土壙のあたりまで流出している。出土遺物はいずれも浮いた状態である。



第211図　第32号住居跡平面図

第32号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
緑釉？壺	1	－ 5.5 5.8	平底の底部から体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、底面糸きり痕残る。外面及び底部内面釉かかる（外面加熱により変色？）。	1/4,猿投？,灰白色,
緑釉椀？	2	13 － 2.5	体部は外傾して立ち上がり口唇下僅かに屈曲し先端尖り気味。	内外面回転横ナデ（右回転？）。	1/20,猿投？極精緻,緑灰色（灰白色）青灰色
須恵坏	3	13 － 2.5	体部は外傾して立ち上がりそのまま口唇部に移行する。端部内ソギ状。	内外面回転横ナデ。	1/20,須恵坏７,灰色.
須恵坏	4	12.9 － 3.5	体部は外傾して立ち上がりそのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。	1/10,須恵坏１,灰褐色,磨滅顕著。
須恵坏	5	13 － 3.2	体部はやや内湾して立ち上がり屈曲して僅かに肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転？）。外面墨書（部分）。	1/10,須恵坏１,灰白色,磨滅顕著。
須恵高台坏	6	－ 5.8 2	高台部はやや高く直立し幅広く接地面内ソギ状で中央凹む。底部はやや凸出し体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ（外面工具ナデか？）、底面糸きり痕残る。	1/2,須恵坏３,灰褐色,№１。外面一部黒斑。
須恵高台坏	7	－ － 2.6	高台部剥離する。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）、高台部外面棒状工具ナデで凹む。	1/3,須恵坏５,灰色,
須恵高台付椀	8	－ － 3.6	高台部剥離する。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。底面糸きり痕残る。	1/5,須恵坏２,橙褐色、赤褐色,
須恵高台付椀	9	13 5.8 6.2	高台部剥離する。やや上げ底の底部から、体部は内湾して立ち上がりそのまま僅かに肥厚する口唇部に移行する。接合しないが同一個体とみられる。	内外面回転横ナデ（右回転？）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。底面糸きり痕残る。	1/5,須恵坏１,灰色,№１，竈出土
須恵高台坏	10	13 5.2 4.9	高台部は低く直立し幅狭く接地面外ソギ状。底部はやや凸出し内面平坦、体部は下端で稜をなし外傾して立ち上がりそのまま口唇部に至り、外面やや凸状呈す。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面若干ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ、底面中央糸きり痕残る。	1/5,須恵坏２,赤褐色,№１。磨滅顕著。
須恵高台付椀	11	13.6 6 5	高台部は低くほぼ直立し接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部はやや内湾して立ち上がり、僅かに外反して肥厚する口唇部に至る。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ中央糸きり痕微かに残り、外面工具ナデ。口唇部内面磨滅。	1/2,須恵坏２,黒色,
須恵高台坏	12	13.8 5.2 5.2	高台部は低くほぼ直立し幅広く接地面外ソギ状。底部はやや凸出し下端で稜をなしほぼ外傾して立ち上がり、僅かに外反して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後内面指頭及び工具ナデで糸きり痕撫で消す。外面指頭ナデで稜を造出する。	60%,須恵坏２、角閃石微量。,黒色／黒褐色,
須恵高台付椀	13	13.2 5.7 5.5	高台部ほぼ直立し端部凸状幅広、接地面平坦で中央凹む。底部はやや凸出し？体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がり僅かに外反してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面若干ナデ加わる。高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ、底面糸きり痕撫で消す。	1/5,須恵坏５,黒色／赤褐色,
須恵高台付椀	14	15.7 7.3 6.3	高台部は高く外開きで幅広く、接地面平坦で中央凹む。体部は下端で稜をなしやや内湾して立ち上がり、大きく屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面粗いナデ加わる。高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ中央糸きり痕残り、外面工具ナデで稜を造出する。上端屈曲部は強い指頭ナデによる。	90%,須恵坏５,灰白色,№３＋４。磨滅顕著。

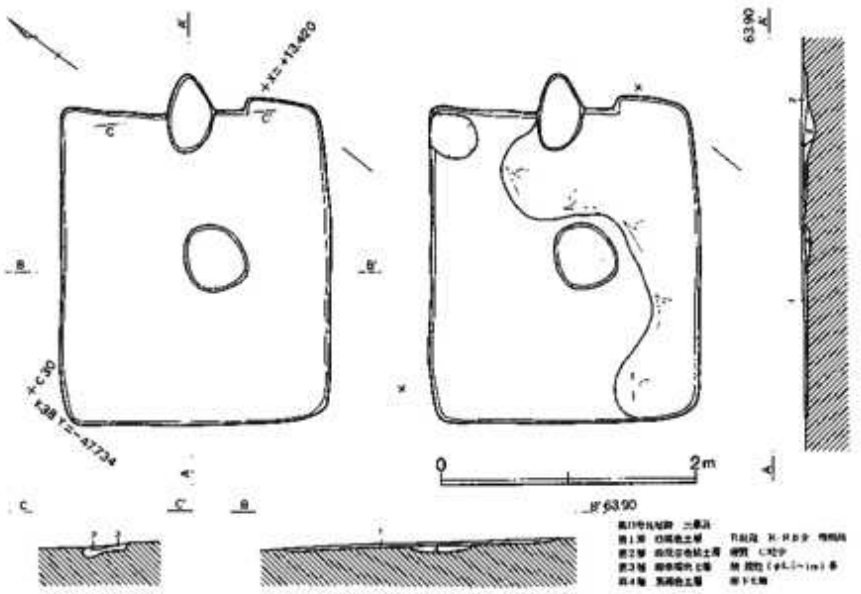


第212図　第32号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉長頸壺	15	－ － 18.5	体部は倒卵形とみられ、頸部は外反して立ち上がる。他に数点破片が存在するが接合しない。	内外面回転横ナデ（左回転）、外面体部下半は回転箆ケズリ？。外面頸部下端～体部上半に施釉（緑色）される。	1/3，猿投？，灰白色，加熱される？
台付甕	16	13.3 － 12.6	脚部欠失する。胴部下半球形に近く上部は緩く立ち上がり最大径は中位。頸部微かに段をなし内傾して立ち上がり、中位で屈折して小さく開く。口唇部一部平坦面をなす。内面頸部、屈曲部稜をなす。口縁部内外面輪積み痕残る。	胴部外面上半横箆ケズリ（←←↓）以下縦斜め箆ケズリ（↓↑←）、下部回転横ナデ（右回転）？内面箆ナデ頸部指頭押圧、ナデ。口縁部横ナデ、外面工具ナデ後指頭押圧、ナデ。	80%，要1，赤褐色，№1。加熱により剥離顕著。
甕	17	20 － 7.7	やや張りをもつ胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲し小さく開き、口唇部直立し尖り気味で外面鋭い稜をなす。内面外反して立ち上がる。	胴部外面上部横箆ケズリ（←）、内面箆ナデ（←）頸部指頭押圧。口縁部横ナデ、外面下半工具ナデ後指頭押圧、ナデ。	1/10，要1，褐色，竪出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	18	22 — 6.6	胴部は張りをもたずそのまま口縁部に移行する。中位で段をなし小さく開き口巻部直立する。輪積み痕残る。内面外反して開く。	胴部外面横、斜筋ケズリ（←←↓）、内面筋ナデ頭部指頭押圧。口縁部横ナデ（未調整部分残る）屈曲部工具ナデ後指頭押圧。	1/10,褐1,淡褐色.No.2。

第33号住居跡（第213図）



第213図　第33号住居跡平面図

確認段階ですでに床面の大部分が露出している状態で東、北壁は存在しなかった（図上復元）。壁外施設は不明である。北壁外側に風倒木状の攪乱がある。

埋土はほとんど残存していない。出土遺物はない。

全体に遺存状態が悪くはっきりしないが平面形は略長方形状と考えられ、東壁は竈右側で段をもつ。床面は全体に柔らかい（西半部は全てとんでいる）。床下土壙は生活段階で全く検出できなかった。

掘り方は南半部に存在し、中央部を掘り残す。全体に浅く不明確。竈前面は焚き口部に対応するようにやや深い。床下土壙は貼り床が施されやや浅い。

竈は東壁ほぼ中央に敷設され、燃焼部底面のみ残存した。略楕円形状で、底面はそれ程焼けていない。ほぼ平坦。焚き口部はやや深く掘り方との境は明瞭ではない。袖部は粘土貼り付けと考えられるが流出により残存していなかった。

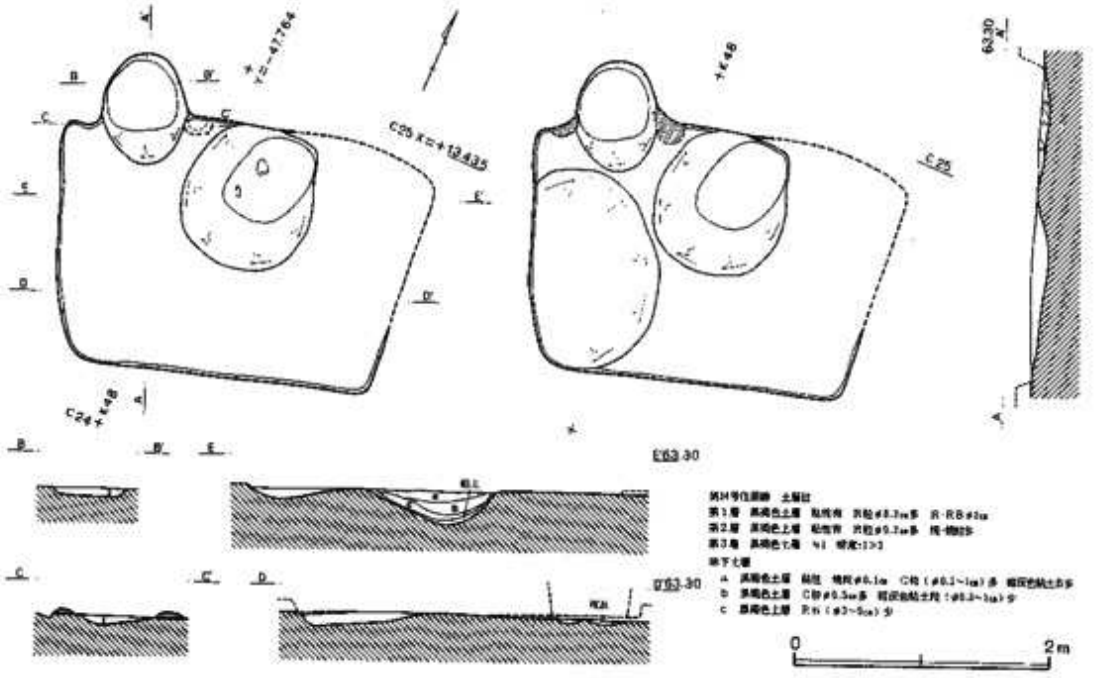
図示できるような出土遺物はない。

第34号住居跡（第214図）

確認段階で平面形はよく把握できかった（竈焼土のみ明確）。周辺部は風倒木が多数存在する。又耕作による攪乱も及ぶ。壁外施設は不明。

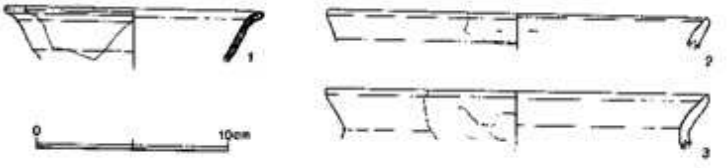
すでに床はとんでいると考えられ、埋土は存在しない（掘り方まで達している）。出土遺物はない。

平面形は極小形の台形乃至方形。生活段階に伴う施設は竈底面のみで、床下土壙が開口していたかどうか判らない。



第214図　第34号住居跡平面図

掘り方は東～南壁下に存在し、隅部がやや深い。床下土壙は掘り方の一部を転用したものか立ち上がりがはっきりしない。南側に粘土が貼ってある。確認時の平面形は略円形である。

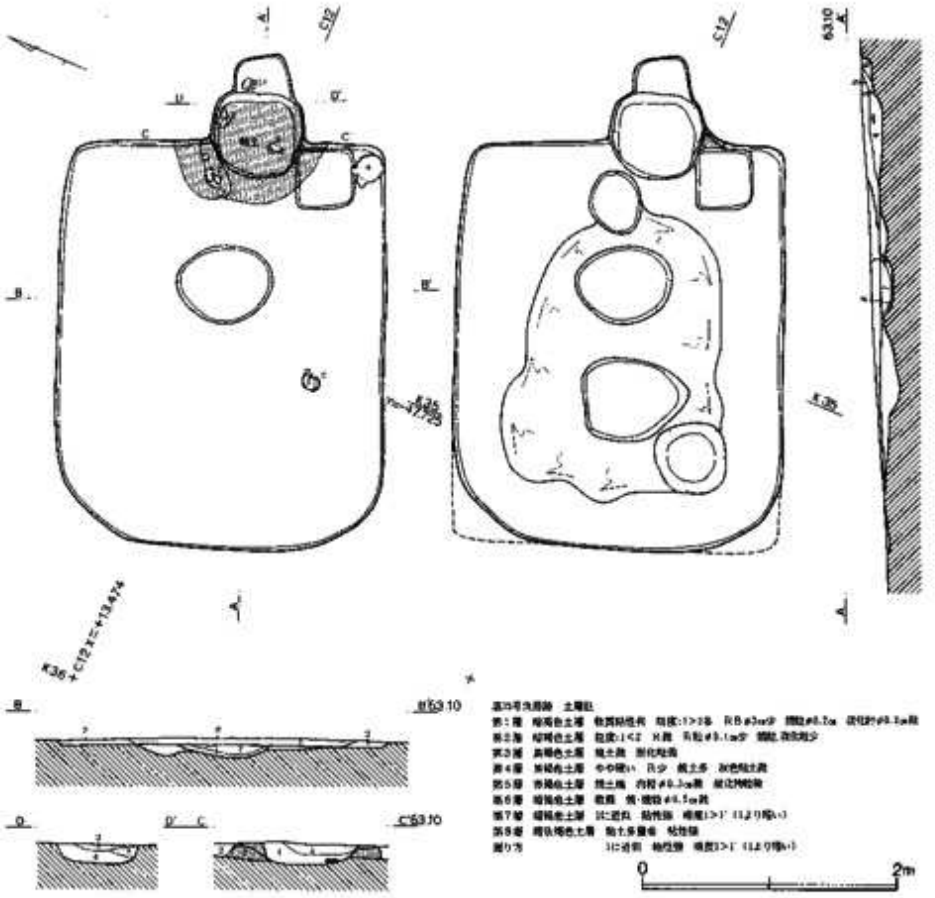


第215図　第34号住居跡出土遺物

竈は北壁西端部に位置し完全に崩壊している。燃焼部は略楕円形でほとんど焼けていない。焚き口部はわずかに窪み、緩やかに立ち上がる。袖は部分的に少量の粘土の残存が認められるが、構造等よく判らない。

第34号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.6 － 2.7	体部は外傾して立ち上がり屈曲してやや肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）。	1/10,須恵坏1,灰色,内外面一部炭素付着。
甕	2	20 － 1.8	脚部は僅かに外反して開き、端部はやや屈曲気味。	内外面横ナデ（未調整部分残る）。	1/20,甕1,赤褐色,
甕	3	20 － 2.6	中位で屈曲して小さく開きそのまま口唇部に移行する。外面下縁い稜をなす。	口縁部横ナデ、屈曲部指頭押圧（内面対応）。	1/20,甕1,淡褐色、暗褐色,



第216図　第35号住居跡平面図

第35号住居跡（第216図）

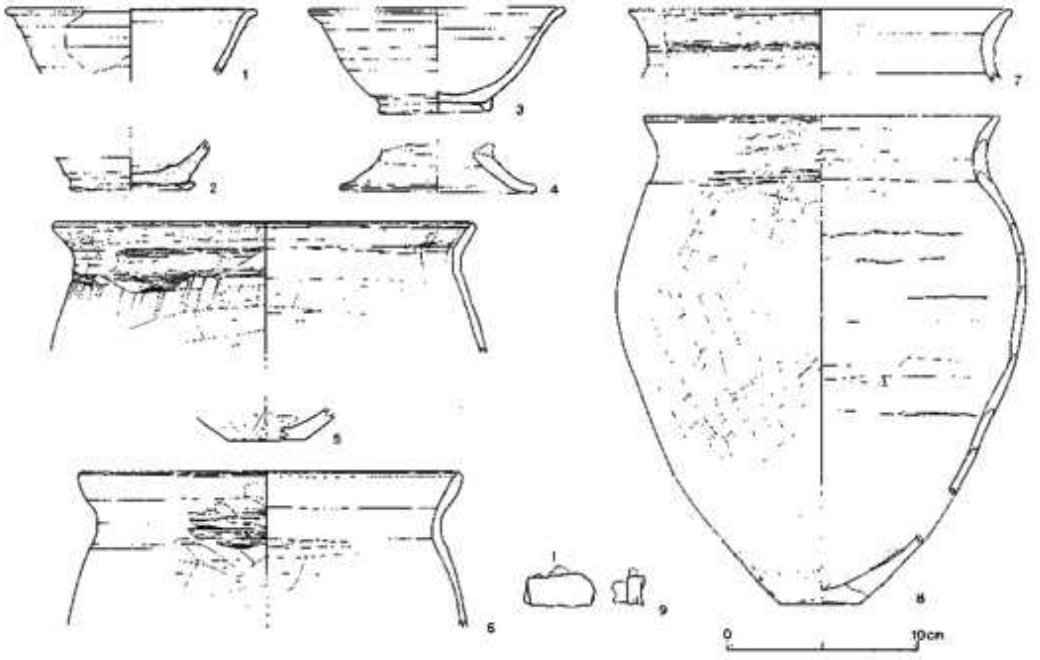
西壁北側に風倒木が存在し西壁はすでにとんでおり直下床面下迄消失。周辺には黒色土を充填する小ピットが多数存在するが伴うものはない。

埋土はほとんど残っていない。竈前面に焼土及び炭化物、粘土の分布がみられる。

平面形は略長方形と考えられる。床はほぼ平坦で中央～竈前面が堅く、四周は柔らかい。部分的に貼り床が施される。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は竈右側の方形の落ち込みと把えたが掘り方との境は不明瞭。床下土壙は３ケ所に認められたが、生活段階では全く検出していない。竈前面のものは開口していた可能性があるが、他は貼り床が認められるので閉じていたと考えられる。生活段階の出土遺物は南東隅の甕及び、床直出土の須恵坏である。

掘り方は、床下土壙との関連か中央部を掘り窪め、周辺部も若干下げる。東壁の両隅も掘り窪める。床下土壙は方形ないし不整方形のものが古く、竈前面のものは略円形で粘土が部分的に貼ってある。

竈は東壁やや右寄りに位置し、完全に崩壊して、粘土及び焼土が前面に分布している。燃焼部は左側に段をもつ構造で、壁面はよく焼けている。底面はほぼ平坦で凸出部は段をなす。先端の方形



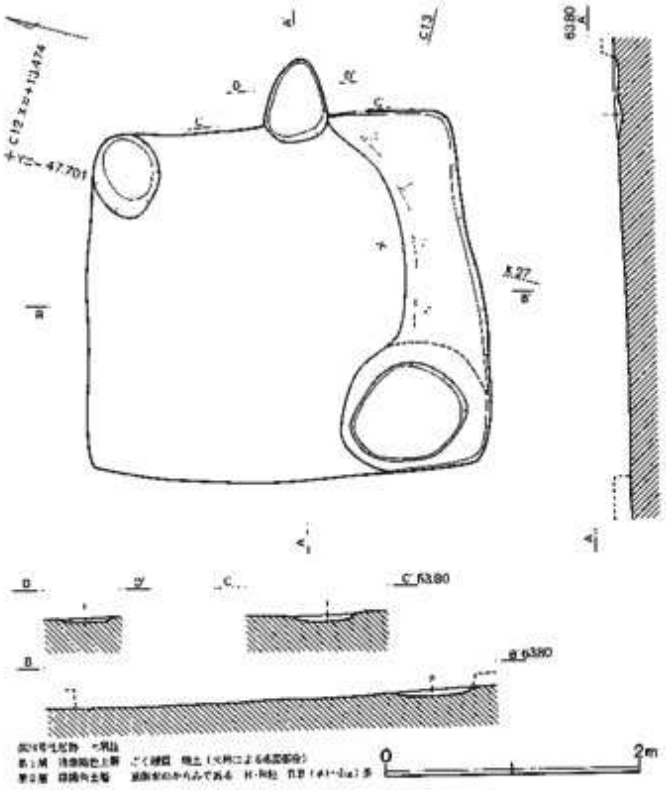
第217図　第35号住居跡出土遺物

部が煙出し部にかかわるか。袖部は粘土貼り付けで片岩を芯とするものと考えられる。焚き口部前方は貼り床状で堅い。出土遺物はいずれも浮いた状態である。

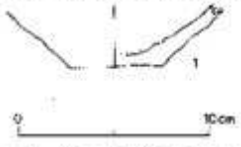
第35号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.2 － 3.5	体部はやや内湾して立ち上がり小さく屈曲してそのまま口唇部に移行する。器肉薄い。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。	1/5，須恵坏1，黒褐色，
須恵高台坏	2	－ 5.7 2.1	高台部は極低く外開きで幅一定しない。接地面ほぼ平坦で一部凹む。底部はやや凸出し体部は外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後工具ナデ？底面ナデで微かに糸きり痕残る。	1/3，須恵坏1，灰白色，№2
須恵高台付椀	3	13.5 5.3 5.5	高台部ほぼ直立し幅狭く接地面ほぼ平坦。底部は凸出し体部は下位に稜をもち内湾して立ち上がり、外反して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、口唇下磨滅。外面下半ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ。外面工具により段造出。底面糸きり痕残る。口縁部外反は指頭ナデによる。	90%，須恵坏1，灰色，№5
台付甕脚部	4	－ 10 2.5	脚部は外反して開き端部で屈曲して更に開く。先端やや肥厚する。胴部成形後造出か？	内外面回転横ナデ（右回転）？	3/4，甕1，暗褐色／赤褐色，加熱により色調の変化顕著。
甕	5	20 4 －	底部～胴部の同一個体とみられる破片が存在するが接合しない。底部は小形。胴部は長胴形で上位に最大径をもつか？頸部で緩い段をなしそのまま口縁部に移行する。中位で屈曲して開き口唇部は直立し尖り気味。外面稜をなす。内面外反して立ち上がる。	底面、胴部外面荒ケズリ、上部横（←）、内面荒ナデ。口縁部横ナデ、外面屈曲部～頸部工具ナデ後指頭押圧。頸部は指頭ナデ加わる。	1/5，甕2、白色粒子粒度小多量，赤褐色，№1，4

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	6	22.2 — 6.8	やや張りをもつ胴部から頸部でケズリによる段をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈折して小さく開き、口唇部直立し凸状足し外面下稜をなす。内面緩い段をなしかい反する。	胴部外部横・斜筋ケズリ（←←↓）、内面筋ナデ（←）頸部指頭押圧。口縁部横ナデ（未調整部分残る）屈曲部工具ナデ後指頭押圧（内面対応）、ナデ。	3/4,甕1，褐色／赤褐色，No. 6 ｲ 竈（古）出土。
甕	7	20 — 3.6	口縁部下半は内傾して立ち上がり、中位で屈折し小さく開く。口唇部丸く収まり外側凸状足す。内面外反して開く。	口縁部横ナデ、屈曲部棒状工具ナデ後指頭押圧。	1/5,甕1′，褐色,磨滅顕著。
甕	8	19.6 4.4 25.3	底部は接合しないが小形で平底。胴部は内面下部に接合痕をもち最大径を上位にもつ長胴形で、頸部で緩い段をなし全体に外反する口縁部に移行する。口唇部丸く収まる。内面外反して開く。	外面底部筋ケズリ、上胴部横筋（←←。）中位以下縦筋ケズリ（↓↑←）内面筋ナデ下半平滑。口縁部横ナデ、外面頸部～屈曲部工具ナデ後指頭押圧、胴部上端にかかる。	1/4,甕1′，赤色粒子粒度大多量,暗褐色、赤褐色,No.4。
刀子	9				25g



第218図　第36号住居跡平面図



第219図　第36号住居跡出土遺物

第36号住居跡（第218図）

確認段階で完全に床面下迄削られていた。耕作等の撹乱顕著。壁外施設はわからない。

埋土は残存しない。出土遺物はない。

平面形は略長方形で生活段階に伴う施設として、北隅に貯蔵穴を認めたが、出土遺物はなく確証はない。

掘り方は南壁下に存在し、わずかに窪む。南西隅は楕円形状を呈する。比較的焼けている。袖は全く存在しない。

第36号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	－ 4.9 2.9	平底でやや大形の底部から、胴部は外傾して立ち上がる。	加熱による剥離顕著で詳細不明。	1/3,素1′,赤褐色,床下出土。

第37号住居跡（第220図）

南北方向に重機による攪乱、耕作による影響が及ぶ。

壁外施設は不明。旧竈は明瞭であったが、新竈は確認段階ではよく判らなかった。

埋土はほとんど分層できない。

外側の住居跡（a）は内側（b）のものによって切られる（a→bの順）。

出土遺物は少量で大部分は第37b号住居跡に伴う。生活段階に伴う遺物はほとんどない。

掘り方は存在しない。

第37a号住居跡（旧住居跡）

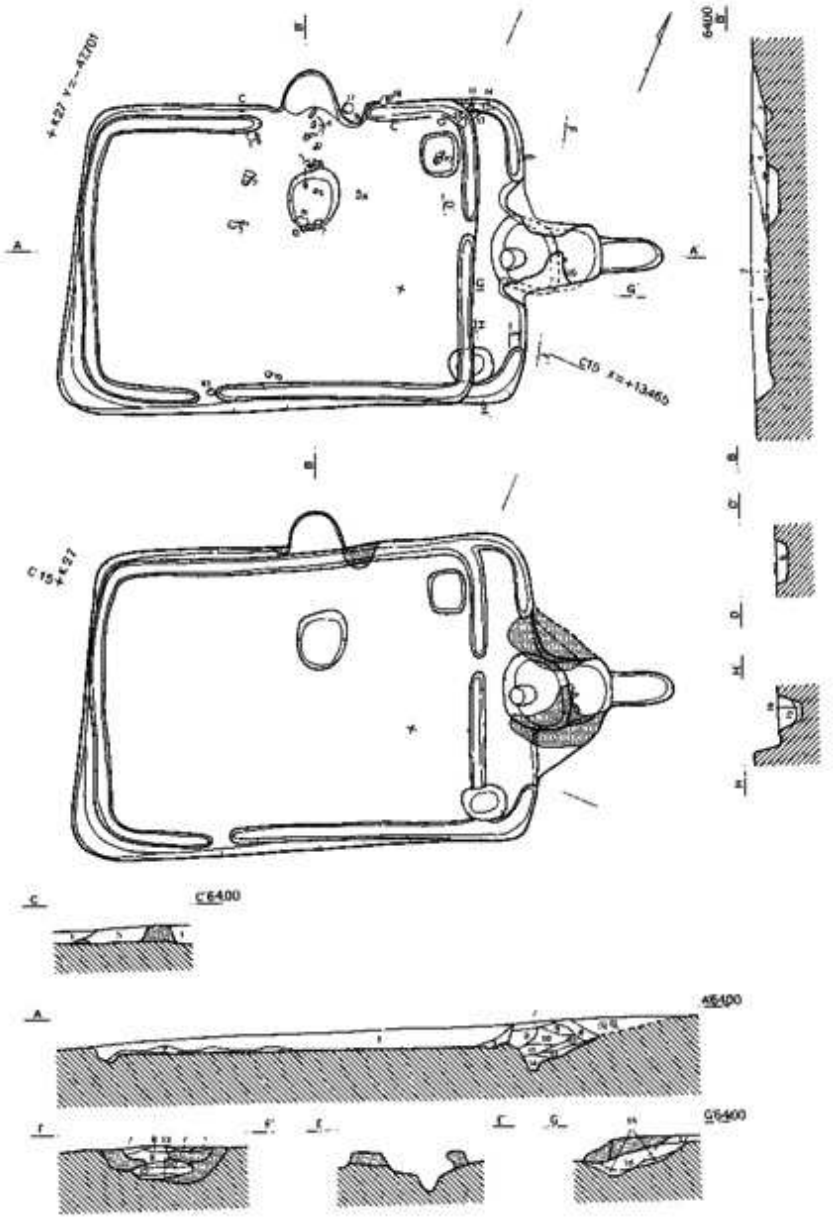
外側の長大な竈を伴う住居跡で東壁が斜行するが略長方形。床面は新住居跡とほぼ同一面であるとみられる。柱穴は検出されなかった。壁溝は竈両側に認められ他の部分は新住居跡と重なっている。貯蔵穴は南西隅（竈右側）にピット状のものが存在する。

竈は東壁中央に位置し煙出し部は確認されなかったが他はよく残っている。煙道部はやや短く燃焼部から緩く傾斜して立ち上がる。底面がよく焼けている。燃焼部は長方形で手前側がやや深く、ほぼ中央にピットが存在する。天井部～袖部にかけて粘土が貼り付けてあり、崩れた状態である。袖は粘土貼り付けで、補強材等は認められなかった。東壁を半円状に掘り込み粘土を貼り付けている。出土遺物はほとんどない。

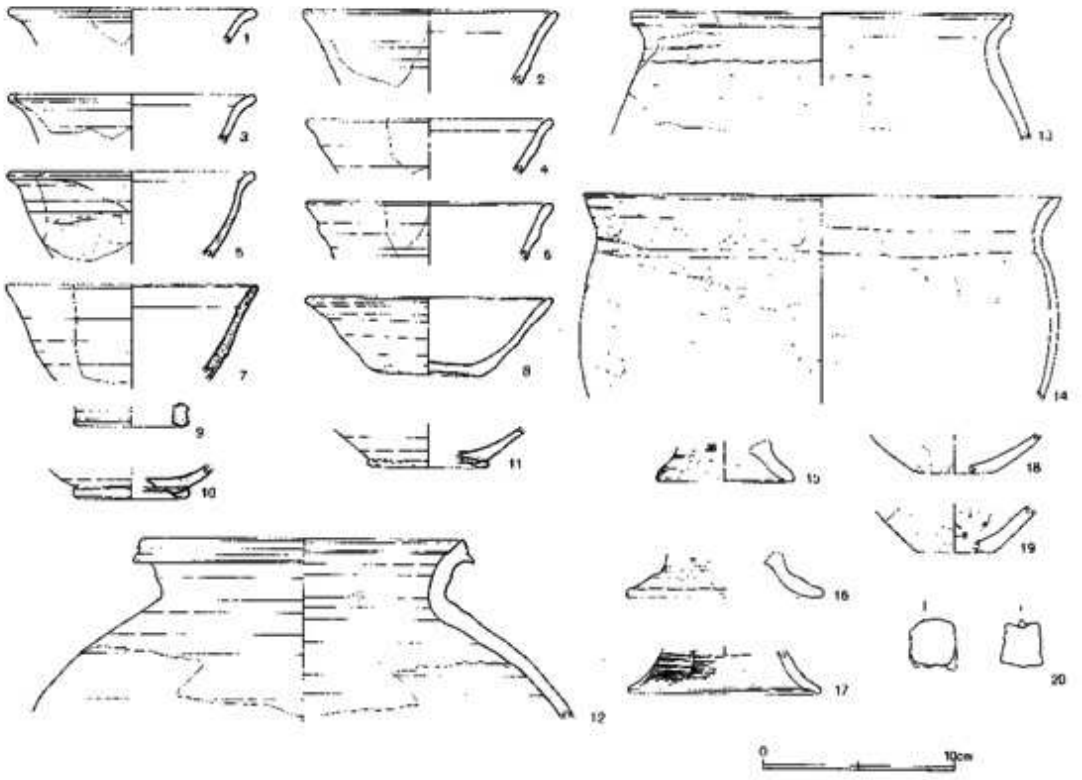
第37b号住居跡（新住居跡）

旧住居跡にすっぽり入るが南東隅がやや重ならない長方形。床面はほぼ平坦で全体に堅緻である。南壁下右側は上層からの攪乱が及び床面下迄及ぶ。柱穴は検出されなかったが、壁溝が南壁左側竈を除いて一周する。貯蔵穴は竈右側で方形比較的浅い。床下土坑は竈前面に存在し焼土が充填する。焚き口に伴うものか。

竈は北壁中央やや右よりに存在し確認時にはよく把握できなかった。燃焼部のみの残存である。壁溝を埋め戻してほぼ平坦な燃焼面を造出し、外方へ向かって緩やかに立ち上がる。袖は基部がわずかに残る。出土遺物は竈前面まで広がる。



第220図　第37ａ，ｂ号住居跡平面図



第221図　第37ａ，ｂ号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13 － 2	体部は外傾して開き、口唇部は肥厚し丸く収まる。器肉薄い。	内外面とも左回転横ナデか？	1/20,壁1,赤褐色,
須恵高台付椀	2	13.4 － 3.9	体部は外傾して立ち上がりそのまま口縁部に移行する。	内外面が回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面ナデ加わる。	1/5,須恵坏2,暗褐色,№4。内面炭素付着。
須恵高台坏	3	13 － 2.6	体部は大きく外傾して立ち上がり屈曲してそのまま肥厚する口縁部に移行する。口唇部下端接をなす。	内外面回転横ナデ（左回転）。	1/4,須恵坏2,暗褐色、赤褐色,竈（古）出土。
須恵坏	4	13 － 2.8	体部はやや内湾して立ち上がり僅かに外反してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）	1/20,須恵坏5,灰白色,竈（古）出土。
須恵高台付椀	5	13 － 4.5	体部は内湾して立ち上がり屈曲して肥厚する口縁部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。	1/5,須恵坏5、白色粒子粒度大多量,灰褐色,№1 5。
土師坏？	6	13 － 3	体部は外傾して立ち上がりそのまま口縁部に移行する。外面ロクロ痕目立つ。	内外面回転横ナデ。	1/20,須恵坏1、白色粒子粒度大多量,暗褐色,床下出土。
須恵高台付椀	7	13.2 － 5	体部は外傾して立ち上がり屈曲してそのまま口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ。内外面磨滅顕著で詳細不明。	1/10,須恵坏2,暗褐色、赤褐色,№4

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師質坏	8	13 5.3 4	ほぼ平底の底部から体部は外傾して大きく開き、そのまま口唇部に移行する。外面凹凸目立つ。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面ナデ加わる。外面口唇下外反は指頭ナデによる。体部下半指頭押圧、ナデ加わる。底面糸きり痕残る。	3/4.須恵坏2、角閃石微量。,赤褐色、№1。
須恵高台坏	9	— 5.5 1	高台部はほぼ直立し幅広く、接地面丸く収まる。	内外面回転横ナデ。	1/10.須恵坏2,赤褐色,竈（新）出土。
須恵高台坏	10	— 5.4 1.5	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面ほぼ平坦で中央凹む。底部はやや凸出し厚い。	内外面回転横ナデ（左回転）、高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ、中央部糸きり痕残る。	1/2.須恵坏2,赤褐色.
須恵高台坏	11	— 5.5 1.9	高台部は極低くほぼ直立し幅広く、接地面平坦で中央凹む。体部は内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ、高台部粘土貼付け後指頭ナデ。密着していない。	1/3.須恵坏3,暗褐色.竈出土。
須恵壺	12	17 — 9.1	胴部はやや肩がはり最大径を上位にもつ。頸部は短く外反して開く。口唇部直立し尖り、外面下下垂して尖る。胴部下半は接合しないが同一個体とみられる。	内外面回転横ナデ（右回転）、外面下半ナデ加わる。	1/3.須恵甕1.灰色.竈（新）№2＋3＋10＋12＋14＋18。
甕	13	20 7.6 —	張りをもつ胴部から微かに稜をなしそのまま内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲して小さく開き、口唇部直立し外面下稜をなす。内面外反して開く。	胴部外面横・斜筋ケズリ（←）、内面筋ナデ。口縁部横ナデ、屈曲部及び頸部工具ナデ後指頭押圧。	1/5.甕1',赤褐色.内外面剥離顕著。
甕	14	25 … 10.6	張りをもつ胴部から緩い段をなしやや内傾する口縁部に移行する。中位で外反して小さく開き、口唇部外面凸状気味。内面緩く外反して開く。	胴部外面上部横・斜筋ケズリ（←←↓）以下縦筋ケズリ（↓←？）、内面筋ナデ（←）頸部指頭押圧。口縁部横ナデ（工具ナデ？）後指頭押圧（内面対応）。	1/3.甕1,赤褐色,№4＋竈（新）出土。
台付甕	15	— 7 2	脚部は小形で厚く、やや外反して開く。外面先端緩い稜をなしやや尖り気味。	内外面回転横ナデ（右回転）か？	80%,甕1,赤褐色、黒褐色,内面スス付着。
台付甕	16	— 10 2.2 —	脚部は外反して大きく開く。先端部は丸く収まる。	内外面回転横ナデ（右回転）か？	1/4.甕1,黒色（赤褐色）黒色,竈（古）出土。
台付甕	17	9.7 2.3	脚部は屈曲して大きく開き、先端部直立気味。	内外面回転横ナデか（右回転）？	1/4.甕1,淡褐色.床下出土。
甕底部	18	— 4.2 1.9	平底で薄い底部から胴部は外傾して立ち上がる。	底面筋ケズリ、胴部外面縦筋ケズリ（↓）、内面剥離顕著。	1/5.甕1.褐色.
甕底部	19	- 4.6 2.1	小形で平底の底部から胴部は外傾して立ち上がる。	外面筋ケズリ、内面筋ナデ。	1/4.甕1,褐色、赤褐色,竈（古）出土。14と同一個体か？
鉄滓	20				30g

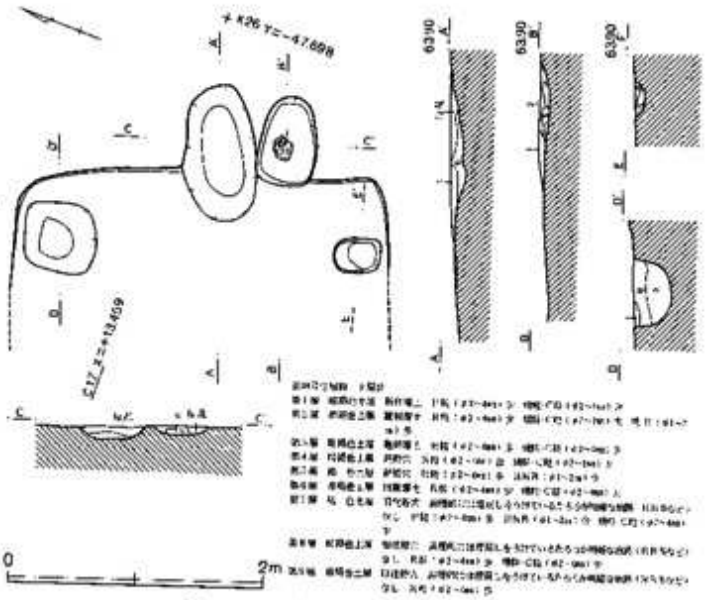
第38号住居跡（第222図）

確認段階ですでに西半部は破壊されており、床面は完全に削手されている。竈は重機によって撹乱を受けており、底面のみ残存する。

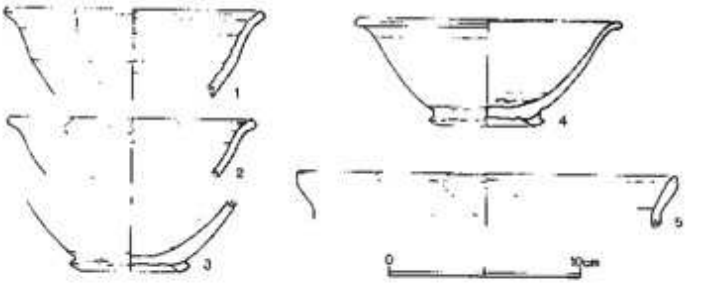
埋土は全く残っていない。竈の新旧は土層により判断されたものではなく、配置関係等から決定した。

平面形は方形乃至長方形か、生活段階に伴う遺物はない。柱穴、壁溝等は検出されなかった。貯蔵穴は北、南壁下に存在するが、新旧関係は竈との関係で北壁下が旧竈、南壁下が新竈に対応すると考えられる。掘り方は存在しないものとみられる。

竈は東壁中央右寄りに2ヶ所存在し燃焼部底面のみ残る。古竈は略長方形状で底面はよく焼けている。新竈は撹乱顕著で、平面形はほとんど復元である。中央やや左よりに支脚石が存在する。



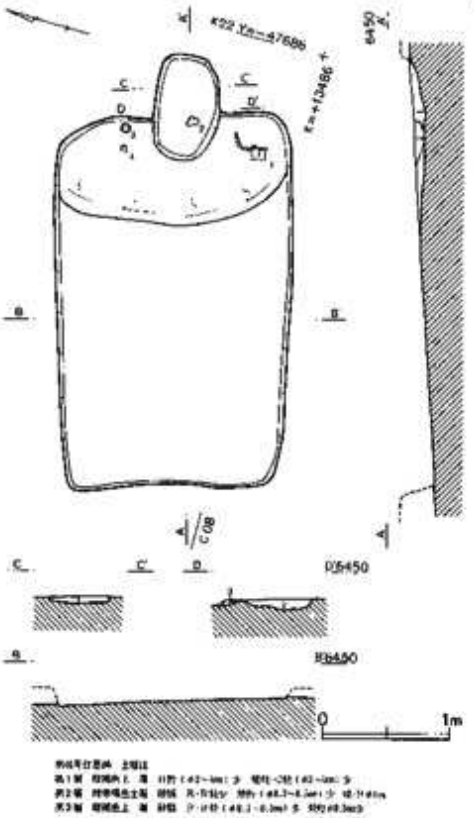
第222図　第38号住居跡平面図



第223図　第38号住居跡出土遺物

第38号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	1	13.6 4.6 －	体部は内湾して立ち上がり外反して肥厚する口縁部に移行する。直立気味で凸状張る。	内外面回転横ナデ（左回転？）。	1/10。須恵坏2。黒色。貯蔵穴No.1。
須恵高台坏	2	13.0 3.1	体部は内湾して立ち上がり口縁部短出して僅かに肥厚する。	内外面とも左回転横ナデ。	2/3。甕1。赤褐色。竈→No.1。
須恵高台坏	3	5.0 3.5 － －	高台部は低くほぼ直立し幅広接地面外ソギ状。底部はやや凸出し体部は内湾して立ち上がる。2は接合しないが同一個体？	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面若干ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後指頭ナデ、底面糸きり痕残る。	60%。甕1。赤褐色。No.1→竈出土。
須恵高台付椀	4	13.0 3.1 －	高台部は低くほぼ直立し幅広、接地面はほぼ平坦ではみ出した粘土が凸出する。底部はやや凸出し、体部は下端で稜をなし内湾して立ち上がる。口縁部肥厚し屈曲して開く。底部内面重ね焼き痕？	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、外面若干ナデ加わる。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け後内面指頭ナデ、中心部糸きり痕残り、外面二段ナデにより稜造出。	1/4。須恵坏2。赤褐色。No.1。竈出土。
甕	5	19.9 2.5 －	口縁部は中位で屈曲して小さく開く。口縁部は直立し尖り気味で外面沈線状に窪み段をなす。	横ナデ後外面屈曲部二段ナデ、強頸押圧。	1/10。甕1。赤褐色。竈出土。



第46号住居跡（第224図）

竈周辺部のみ遺存する。西半部はすでに床下まで露出し壁は残存しない。残存部は床面までほぼ達している。周辺部に遺構の存在は認められなかった。

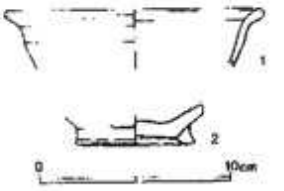
埋没土は竈以外存在しない。

平面形は復元で縦長の長方形。竈は崩壊ないしつぶされた状態である。袖ははっきりしない。燃焼部は焼けていない。竈右から甕が出土している。

掘り方は竈及び東壁前面のみで浅い掘り込み。

竈は東壁ほぼ中央に敷設される。燃焼部底のみ残存。

第224図　第46号住居跡平面図



第225図　第46号住居跡出土遺物

第46号住居跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.6 3.0 —	体部はやや内傾して立ち上がり大きく屈曲して肥厚する口縁部に至る。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑、口縁部した磨滅する。外面下半ナデ加わる。	1/5。須恵坏7。黒色。竈出土。
須恵高台坏	2	5.4 1.6 —	高台部は高くほぼ直立し幅広、接地面ほぼ平坦で中央沈線状に凹む、底部は凸出し内面剥離する。	内外面回転横ナデ（左回転）。高台部は凸出する底部に粘土貼付けご指頭ナデ、底面糸きり痕残る。	90%。須恵坏5。灰白色。No 3。

註　第5群の図示したもの以外の各器種と粘土との対応関係は以下のとおりである。

第30号住居跡　甕1（胴部31）　須恵坏1（口縁部1、胴部2、底部2）　須恵坏1（口縁部1、胴部2、底部2）　須恵坏2（口縁部1、底部1）　須恵坏5（口縁部1）　須恵坏6（胴部1）　土師坏1（底部1）

第31号住居跡　甕2（胴部1）

第32号住居跡　甕1（口縁部4、胴部9）　甕1'（胴部5）　甕2（口縁部2、胴部4）　須恵坏1（口縁部8、胴部1、底部2）　須恵坏2（口縁部8、胴部2）　須恵甕2（胴部3）　須恵壺1（底部1）　灰釉（3個体）

第33号住居跡　甕1（胴部9）

第34号住居跡　甕1（口縁部3、胴部17）　甕1'（胴部2）甕2（胴部1）須恵坏1（口縁部1）須恵甕1（口縁部1）灰釉（胴部1）

第35号住居跡　甕1（口縁部4、胴部62、底部1）　甕2（口縁部2、胴部12）　須恵坏1（口縁部3、胴部4、底部1）　須恵坏2（胴部2）　須恵甕1（胴部1）

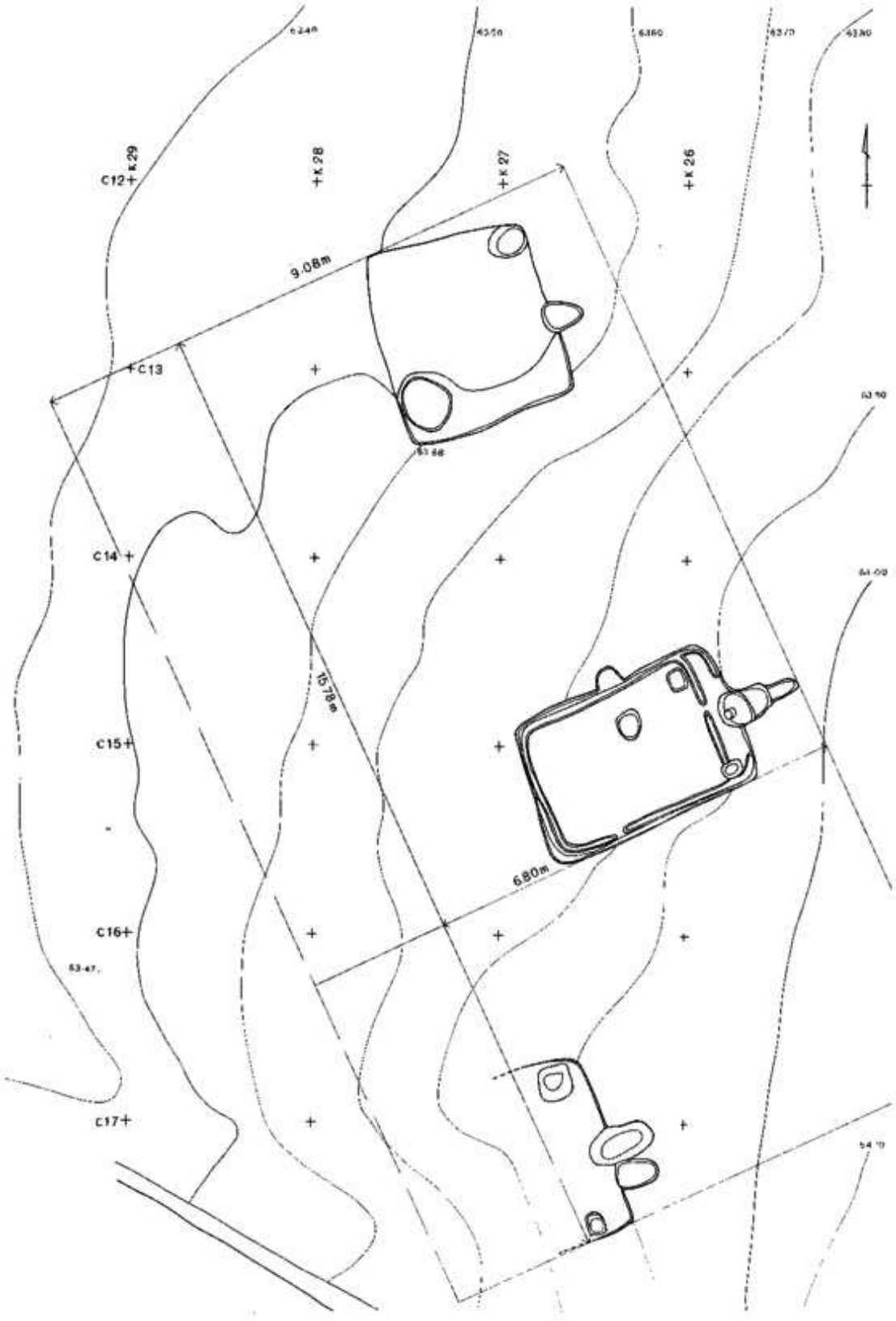
第36号住居跡　甕1（胴部3）　甕1'（胴部4、底部1）　須恵坏1（胴部1）

第37号住居跡　須恵坏1（口縁部3、胴部4）　須恵坏2（口縁部6、胴部2、底部2）

第38号住居跡　甕1（口縁部1、胴部23）　甕1'（胴部2）　須恵坏1（口縁部1、胴部2）

第46号住居跡　甕1（胴部24）　須恵坏1（胴部2）　須恵坏2（底部1）　須恵坏7（口縁部1）　須恵甕3（胴部2）

第47号住居跡　甕1（口縁部7、胴部95、底部4）　甕1'（胴部22）　甕2（口縁部1、胴部8）　須恵坏1（口縁部3、胴部1、底部2）　須恵坏2（胴部3）　須恵坏5（口縁部4、胴部3）　須恵坏6（口縁部1、底部1）　須恵坏7（口縁部1、胴部1）　須恵甕1（口縁部1、胴部3）　須恵壺3（口縁部1）　灰釉（口縁部1）



第226号　第５ｂ住居跡群配置図

第47号住居跡（第227図）

上面で遺物出土が多く良好な状態で確認された。南、西側に撹乱が及ぶ。

住居跡北側は幅2m前後で少量の焼土、炭化物の分布がみられ、同様な分布は南側にも幅30～50cmでみられた。

西側のやや離れた位置に第17号土壙が存在する。

埋土は比較的厚く遺存状態は良好である。

出土遺物は竈周辺部、東壁際から浮いた状態で出土している（竈左右に握大の礫）。床直上のものは少ない。

平面形は西壁は撹乱を受けるが湾曲し、南北壁が直線的な略方形乃至長方形。壁直下は比較的緩く湾曲し壁板、押え柱等の構造物の痕跡はなかった。壁溝、柱穴等は検出されなかった。

竈前方右側に楕円形の落ち込みが検出されたが貯蔵穴或いは床下土壙とみられる。高台坏が浮いた状態で出土している。

ピットが2ヶ所で検出され、北壁下のものは性格不明であるが焼土が多量に詰まっており鉄片が出土している。上層及び周辺に撹乱が及ぶ。

出土遺物は床直上のものは竈左側前方でつぶれた状態で出土した甕のみで他は若干浮いている。

掘り方は中央部を残して周辺部を掘り窪める方法と考えられるが、竈右側は不明瞭である。

貼り床が竈前方に貼られ中心部で1～2cmの厚さである。

住居跡外周辺部には焼土、炭化物、土器粒の分布がみられ、また木根状のピットがいくつか存在するが明確な遺構を把握することはできなかった。

竈は東壁ほぼ中央に敷設され、遺存状態は良好である。確認時右側がL状に検出され掘り方が予想され断面から判断すると袖基部は地山を掘り残していると考えられる。

袖下半は粘土が流出しておらず旧状をとどめている。袖石は左側のものは前方へ、右側のものは外側へ倒れかかった状態であった。

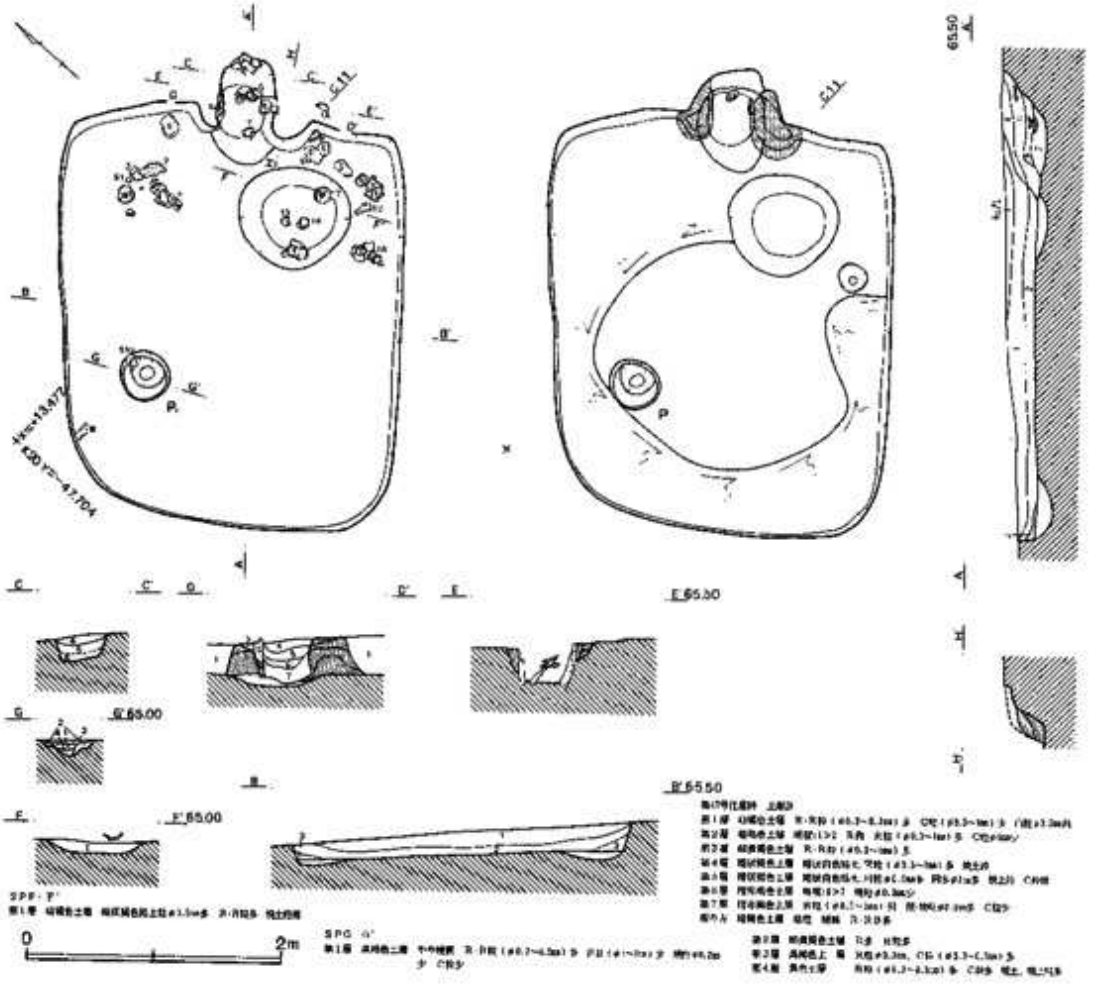
支脚石が中心より左側にずれてすえてあり、大きく右側前方へ倒れた状態で検出された。

燃焼部底は狭い範囲がよく焼けており硬化赤変していた。両袖の外側にはローム塊が存在したが性格は不明。

竈出土遺物は煙出部に甕、支脚上に台付甕、燃焼部上5cm程浮いた状態で高台坏、底部から緑釉壺口縁部片が出土している。

第47号住居跡出土遺物

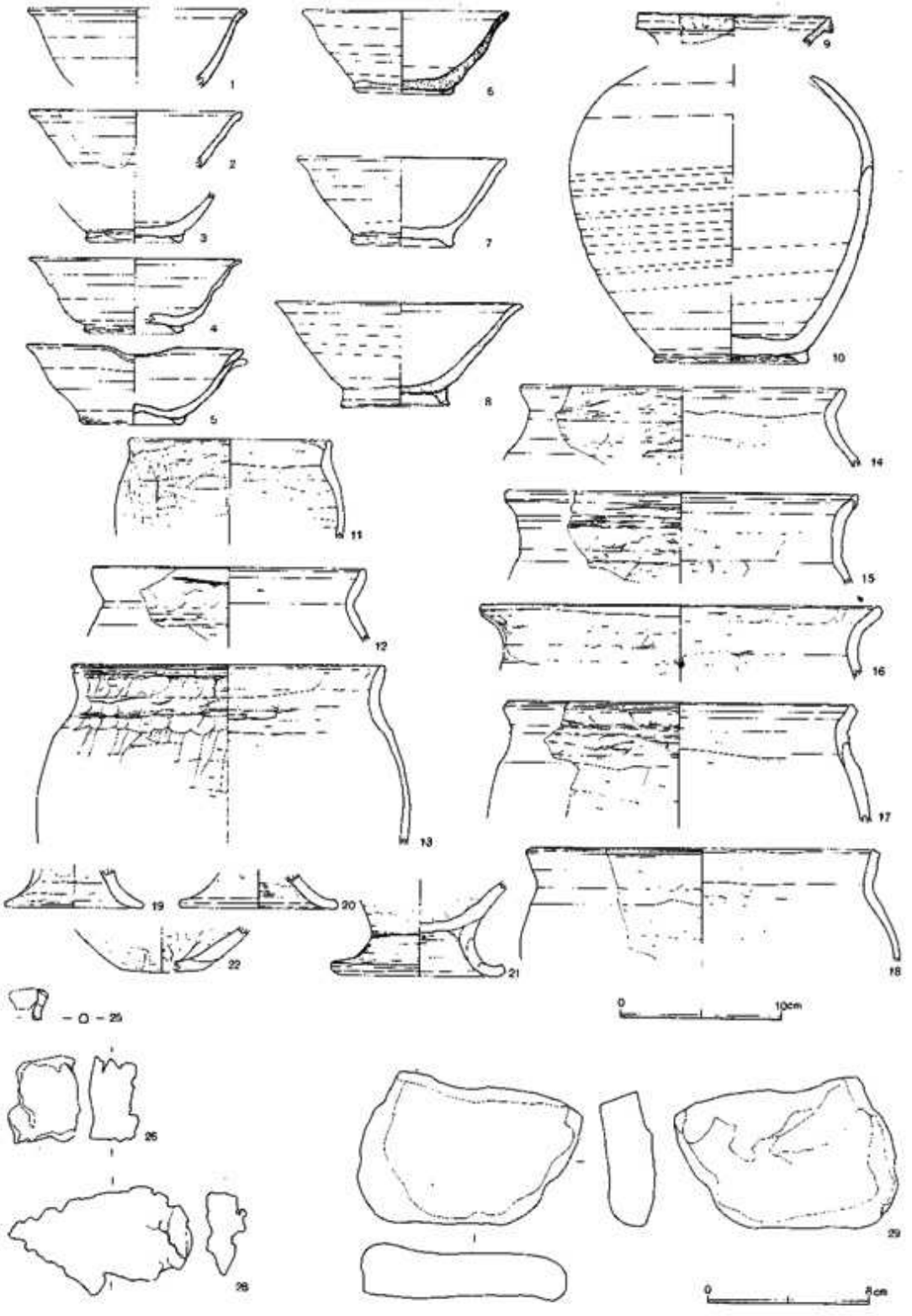
器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	1	13.6 4.9 －	体部は内湾して立ち上がり、屈曲して肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（左回転）、内面丁寧平滑。	1/10。須恵坏7。灰白色。
須恵高台付椀	2	13.2 3.6 －	体部は外傾して立ち上がり、そのまま肥厚する口唇部に移行する。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、口唇部下磨滅する。	1/5。須恵坏2。灰褐色。№17＋竈出土。
須恵高台付椀	3	5.5 2.8 －	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面平坦で圧痕残る。体部は下端で段をなしやや内湾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（左回転）。高台部は凸出する底部に僅かな粘土貼付け？後工具ナデか。底面糸きり痕残る。	90%。須恵坏5。灰褐色。№10。磨滅顕著。



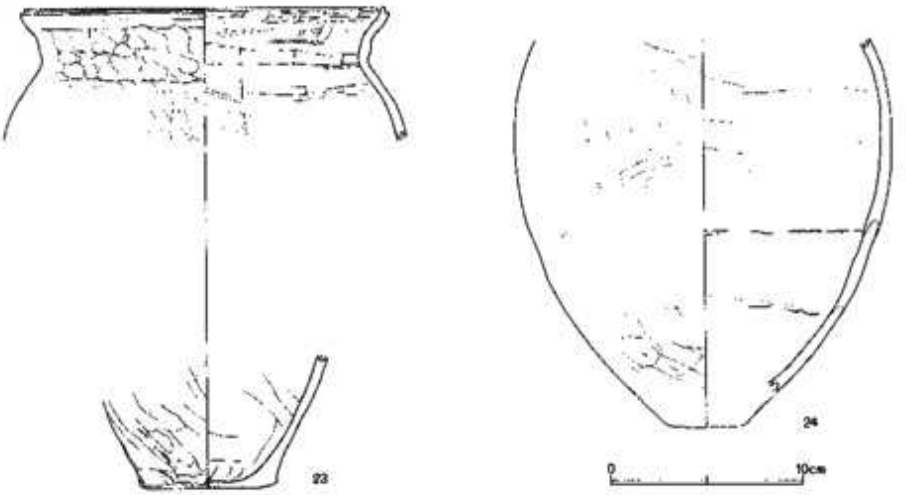
第227図　第47号住居跡平面図

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	4	13.2 5.4 4.6	高台部は低くほぼ直立し幅狭く接地面外ソギ状。密着していない。体部は下位に腰をもち内湾して立ち上がり外反して肥厚する口唇部に移行する。口唇部上面僅かな平坦面をなし沈線状に凹む。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半粗いナデ加わる。高台部粘土貼付けご内面指頭ナデ中央糸きり痕残り、外面未調整？	1/3。須恵坏1。灰色。No.16
須恵高台付椀	5	13.4 6.0 4.8	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面ほぼ平坦。体部は中位で腰をもち内湾して立ち上がり僅かに外反して口唇部に移行する。一ヶ所片口状をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半ナデ加わる。高台部粘土貼付け後内外面指頭ナデ中央糸きり痕撫で消す。	95%。須恵坏2、角閃石微量。灰褐色／赤褐色。No.17。磨滅顕著。
須恵高台坏	6	12.8 5.6 5.1	高台部は低くほぼ直立し幅広く、接地面ほぼ平坦で中央凹む。体部は下端で稜をなしやや内湾気味に立ち上がり、外反して肥厚する口唇部に至る。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、口唇下磨滅。外面中位未調整部分残る粗いナデ加わる。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、中央糸きり痕撫で消す。	1/2。須恵坏2、角閃石微量。赤褐色。No.6＋覆出土。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台坏	7	13.0 5.8 5.5	高台部は低く外開きで幅広く、接地面外ソギ状。密着していない。体部は外傾して立ち上がり僅かに外反し口唇部に至る。底部内面平坦。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半未調整部分残る粗いナデ。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、中央糸きり痕残る。	90%。須恵坏3、赤色粒子粒度大多量。赤褐色、褐色。№1。磨滅顕著。
須恵高台付椀	8	15.3 6.7 6.4	高台部は高くほぼ直立し幅広く接地面平坦で外面にはみ出す。体部は外傾して立ち上がり僅かに外反して口唇部に至る。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面下半未調整部分の残る粗いナデ。高台部粘土貼付け後指頭ナデ、中央糸きり痕跡で消すが微かに残る。	70%。須恵坏2、白色粒子多量。赤褐色／灰褐色、灰褐色。№13＋14。磨滅顕著。
灰釉長頸壺	9	12.0 1.9 —	頸部は外傾して開き、口唇部上下に凸出し先端尖る。	内外面回転横ナデ、内外面施釉（淡緑色）される。	1/20。猿投？極精緻。灰白色。鷹床出土。内面加熱？。
須恵長頸壺	10	9.5 17.7 —	高台部は低く外開きで幅広く接地面外平坦で圧痕残る。体部は倒卵形で上位に最大径をもつ。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑、外面中位工具ナデで沈線状、以下粗い指頭ナデ。高台部粘土貼付けご内面指頭ナデ、中央糸きり痕跡で消す、外面工具ナデ。	80%。須恵坏1、赤色粒子粒度大。灰褐色、赤褐色。№2～4。磨滅顕著。
台付甕	11	12.7 9.0 —	胴部は球形状で最大径を中位にもち、肩はあまり張らない。口縁部との境界は不明瞭で中位でほぼ直立する。口唇外面肥厚する。微かに輪積み痕残る。内面稜をなす。	胴部外面ケズリ後？指頭ナデ口縁部下半に及ぶ、内面篦ナデ。口縁部横ナデ。口唇部外面面取りか？	1/3。甕1、含有物全て微量。暗褐色、赤褐色。№12。
甕	12	17.0 4.4 —	胴部から微かに段をなし内傾する口縁部に移行し、中位で屈折して小さく開く。器肉厚い。口唇部は尖り気味。	胴部外面横篦ケズリ（←）、口縁上位に及ぶ。内面篦ナデ。口縁部横ナデ、外面頸部～中位工具ナデ後指頭押圧。	1/10。甕1。赤褐色。
甕	13	19.5 11.1 —	やや張りをもつ胴部から微かに段をなし内傾する口縁部に移行し中位で外反して小さく開く。口唇部直立し外面凸状呈し、直下稜をなす。内面緩く外反する。	胴部外面上部横篦ケズリ（←←）、内面篦ナデ（←）後頸部指頭押圧。口縁部横ナデ、外面屈曲部から上位工具ナデ後頸部指頭ナデ、屈曲部指頭押圧（内面対応）。内面工具ナデ加わる？	3/4。甕1。赤褐色。№5＋鷹出土。
甕	14	20.2 4.0 —	胴部から微かに段をなし内傾する口縁部に移行し、上位で屈曲して小さく開く。口唇部尖り気味で外面緩い稜をなす。内面緩い段をなし外反する。外面頸部輪積み痕残る。	胴部外面横篦ケズリ後ナデ。内面篦ナデ。口縁部横ナデ後頸部、屈曲部工具ナデで指頭押圧加わる。内面上位工具ナデ。	1/20。甕1。淡褐色、赤褐色。
甕	15	22.0 5.5 —	張りをもつ胴部？から段をなしほぼ直立する口縁部に移行し上位で外反して小さく開く。口唇部直立気味で外面下緩い稜をなし輪積み痕残る。内面頸部、上位緩い段をなす。	胴部外面横篦ケズリ（←）、内面篦ナデ、口縁部横ナデ、外面頸部、屈曲部、口唇部下工具（巾0.8cm）ナデ後指頭押圧、ナデ。	1/10。甕1。灰褐色。
甕	16	24.8 4.1 —	胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行し、中位で屈曲して小さく開く。口唇部直立し丸く収まる。外面緩い稜をなす。内面中位、頸部緩い稜をなし外反する。	胴部外面横篦ケズリ？内面篦ナデ後指頭押圧。口縁部横ナデ後頸部～屈曲部及び内面上位工具ナデ、後指頭押圧、ナデ。	1/5。甕1。淡褐色、赤褐色。鷹出土。
甕	17	21.5 7.3 —	やや張りをもつ胴部から段をなしわずかに内傾する口縁部に移行し外反して小さく開く。口唇部は直立して尖り外面稜をなす。内面緩い段をなし立ち上がる。外面中位輪積み痕残る。	胴部外面横・斜篦ケズリ（←）、内面篦ナデ。口縁部横ナデ（未調整部分残る）屈曲部棒状工具ナデ（巾0.5cmの沈線）後指頭押圧、ナデ。	1/10。甕1。赤褐色。
甕	18	21.5 7.0 —	やや張りをもつ胴部から微かに稜をなし内傾する口縁部に移行する。中位で屈曲し直立気味に立ち上がる。口唇部外ソギ状で沈線？巡る。内面外反して開く。	胴部外面横・斜め篦ケズリ（←←）、内面篦ナデ。口縁部横ナデ、屈曲部指頭押圧。	1/10。甕1。褐色。磨滅顕著。



第228図　第47号住居跡出土遺物(1)



第229図　第47号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
台付甕	19	8.3 2.3 —	脚部は外反して開き端部丸く収まる。	内外面回転横ナデ（右回転）か？	1/10。甕1。赤褐色。竈出土。
台付甕	20	9.5 2.1 —	脚部は外反して開き端部丸く収まりやや肥厚気味。	内外面回転横ナデ（右回転？）か？	1/10。甕1。褐色(赤褐色)、褐色。No16。内外油煙顕著。
台付甕	21	9.6 5.5 —	胴部は尻すぼみ？脚部は大形で外反して開き、裾部は水平状で端部丸く収まる。	胴部内面指頭押圧、ナデ。外面～脚部内面まで回転横ナデか（右回転）？部分的に工具ナデ加わる。	90%。甕1。暗褐色。No.7。磨滅顕著。
甕底部	22	5.0 2.7	小形で平底の底部から胴部は外傾して立ち上がる。	外面篦ケズリ、内面篦ナデ。外面剥離顕著で詳細不明。	1/4。甕1。黒褐色、褐色。竈出土。
甕	23	18.8 7.2 —	張りをもつ胴部から屈折して口縁部は立ち上がる。口唇部直立し尖り外ソギ状で一条の沈線巡る。内面頸部稜をなし外反して開く。胴部、口縁部の境界は不明瞭。大形で平底の底部は接合しないが同一個体とみられる。	胴部外面篦ケズリ？内面篦ナデ。口縁部横ナデ、内面上半工具ナデ加わる？外面頸部～屈曲部指頭ナデ、以上は指頭押圧。底面未調整、内外面指頭ナデ（外面未調整部分残る）？	1/5。甕2、砂粒やや多い。黒褐色。No11＋16＋17＋竈出土。
甕胴部	24	18.5 — —	胴部は長楕形で最大径は上位か？内面中位接合痕残る。	外面全体に粘土付着し詳細不明。胴部外面縦篦ケズリ（↓）？内面篦ナデ後指頭ナデ。	1/5。甕1。黒色／赤褐色。No16。
釘	25				No16、10g。
鉄滓	26				90g。
鉄滓	28				No.1、210g。
石皿？	29				S4、1.26kg。

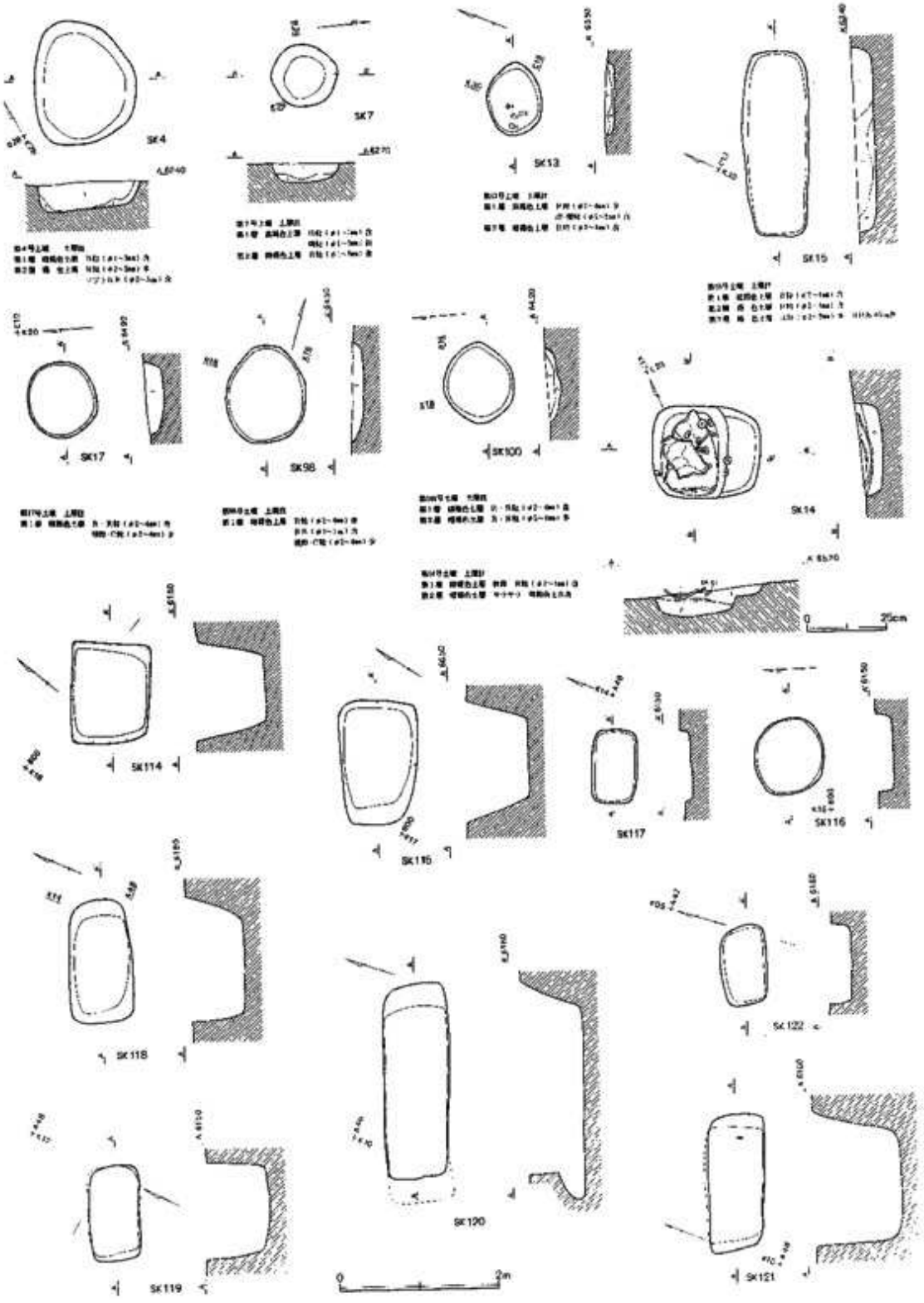
g その他の遺構と出土遺物

(1) 土壙

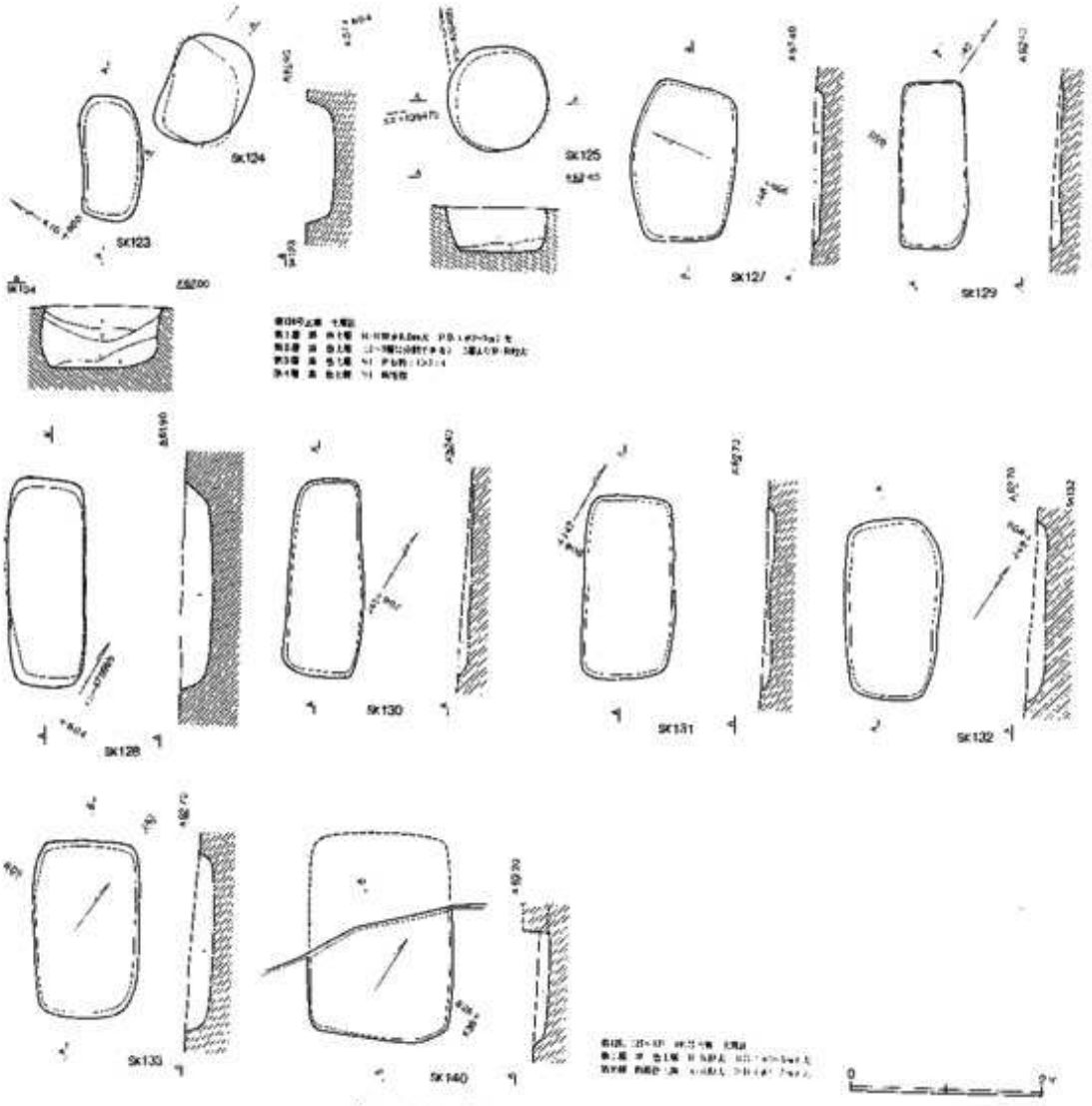
平安時代以降の土壙は39基検出された。内訳は平安時代の所産と推定されるもの6基、中世1基、中・近世5基、現代のもの10基、時期不明のもの22基となる。特に第14号土壙は、上面を削平されていたが、内耳鍋に埋納されたような状態で33枚の古銭が検出された。古銭は唐銭から明銭まで含まれるが、伴出した内耳鍋からみても16世紀段階の所産と考えて誤りなかろう。

第9表　平安時代以降土壙一覧表

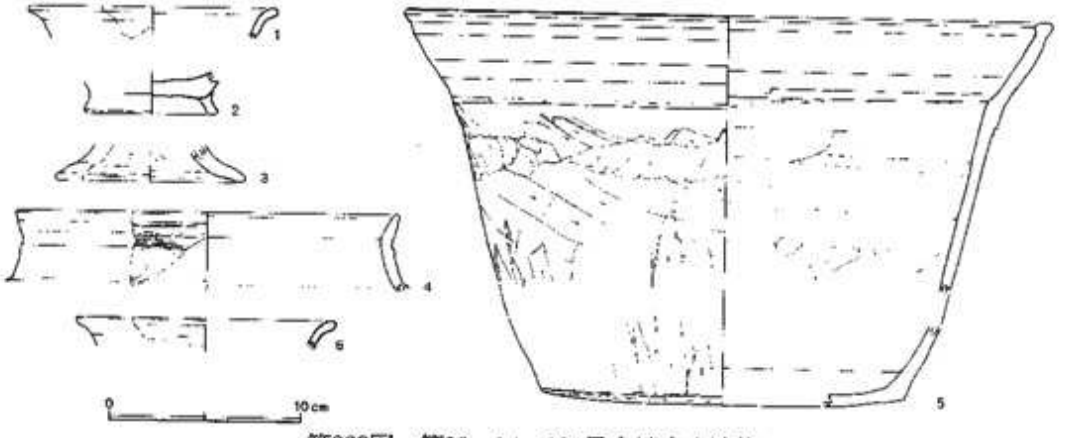
番号	平面形	規　　模	主軸方向	断面形態	備　　考
4	B	1.55×1.33×0.34	N-10.5° -E	II	中・近世
6	A	0.75×0.71×0.13	N-73.9° -W	II	平安？
7	A	0.83×0.78×0.24	N-5.5° -E	III	中・近世
8	A	0.76×0.66×0.09	N-67.2° -E	III	平安
9	C	1.47×0.92×0.26	N-69.4° -E	II	不明
11	C	1.40×0.92×0.31	N-64.2° -E	II	現代？ＳＪ21を切る。
13	B	0.93×0.69×0.12	N-73.4° -E	II	平安
14	B	0.70×0.58×0.2	N-65.0° -E	II	中世
15	C	2.32×0.83×0.26	N-64.2° -E	II	中・近世
17	B	0.95×0.88×0.22	N-81.2° -W	II	中・近世
95	B	0.94×0.59×0.14	N-52.4° -E	III	平安
98	B	1.23×0.98×0.16	N-7.7° -W	III	中・近世
99	B	1.04×0.8×0.23	N-9.95° -W	III	不明
100	B	1.01×0.89×0.18	N-86.3° -W	III	不明
101	B	1.11×0.77×0.08	N-80° -E	III	平安
109	D	0.64×0.52×0.2	N-82.7° -E	II	平安
113	C	1.28×0.85×0.19	N-28.9° -W	III	現代
114	C	1.26×0.98×0.86	N-53° -E	II	現代
115	C	1.55×0.98×0.77	N-54.5° -E	II	現代
116	B	0.95×0.87×0.2	N-87.8° -W	II	
117	C	0.93×0.57×0.14	N-72.8° -E	II	現代
118	C	1.54×0.78×0.71	N-65.4° -E	II	現代
119	C	1.19×0.64×0.82	N-62.6° -E	II	現代
120	C	2.42×0.82×0.73	N-72° -E	I	現代
121	C	1.76×0.74×1.1	N-70.4° -E	I	現代
122	C	1.01×0.59×0.28	N-69.1° -E	II	現代
123	C	1.3×0.64×0.29	N-51.6° -E	III	
124	C	1.19×0.85×0.65	N-74.9° -E	I	
125	A	1.09×1.06×0.46	N-82° -W	II	
127	C	1.68×1.1×0.09	N-70° -E	II	
128	C	2.18×0.82×0.34	N-28.4° -W	II	
129	C	1.75×0.73×0.11	N-33.1° -W	II	
130	C	2.06×0.79×0.1	N-28.4° -W	III	
131	C	1.91×0.97×0.1	N-29.7° -W	II	
132	C	1.89×1.02×0.18	N-34.6° -W	III	
133	C	1.84×1.12×0.25	N-36.4° -W	III	
135	A	2.5×1.26×0.22	N-14.2° -W	III	
136	B	2.5×1.31×0.27	N-12.4° -W	II	
140	C	1.16×1.54×0.12	N-35.5° -W	II	現代？



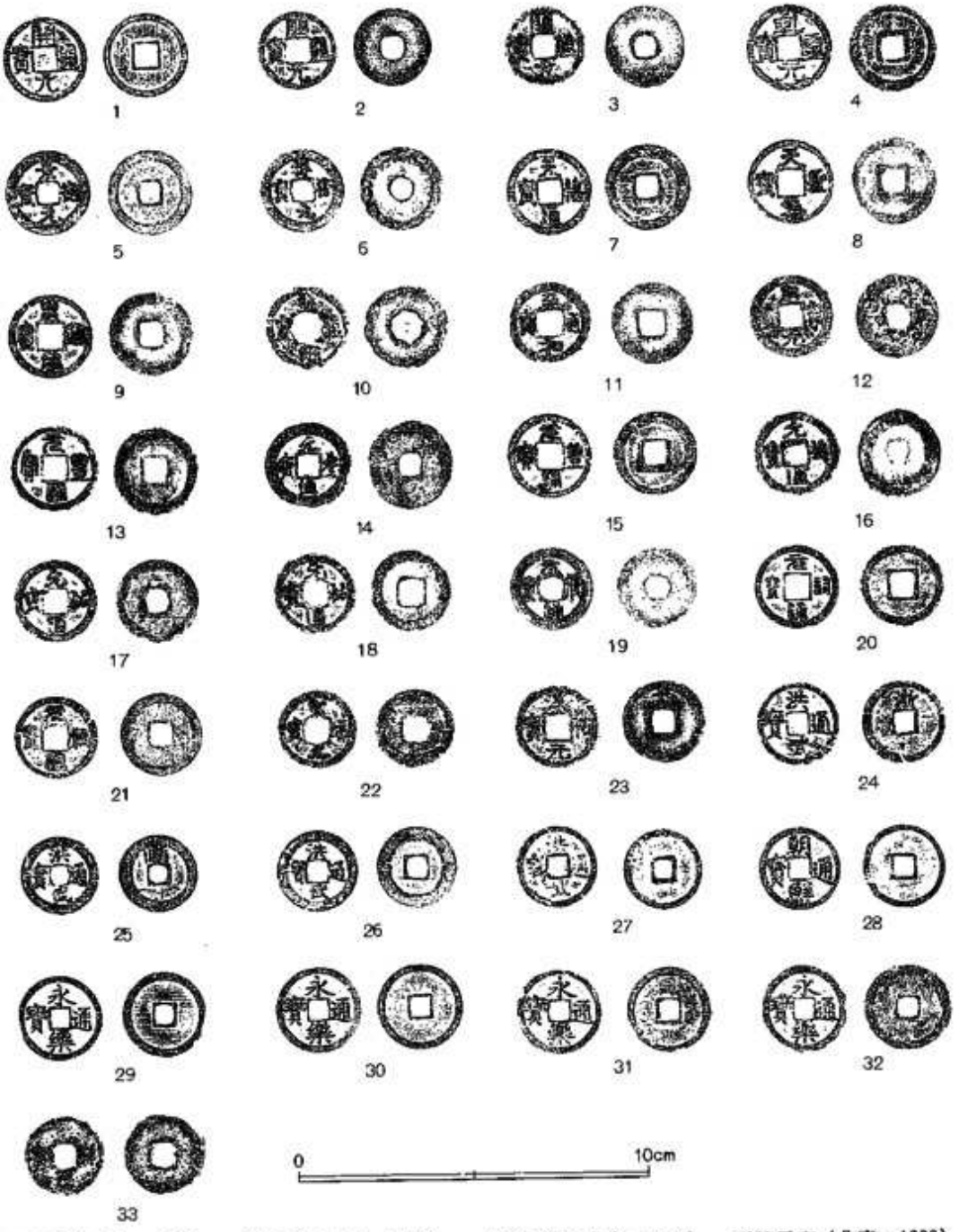
第230図　第４～120号土壙平面図



第231図　第122～140号土壙平面図



第232図　第13、14、121号土壙出土遺物



開通元宝（唐・ 621）　乾元重宝（唐・ 758）　景德元宝（北宋・1004）　祥符元宝（北宋・1008）

天禧通宝（北宋・1017）　天聖元宝（北宋・1023）　皇宋通宝（北宋・1039）　至和通宝（北宋・1054）

熙寧元宝（北宋・1068）　元豊通宝（北宋・1078）　元祐通宝（北宋・1086）　聖宋元宝（北宋・1101）

淳祐元宝（南宋・1241）　洪武通宝（明・1367）　朝鮮通宝（朝鮮・1423）　永楽通宝（明・1433）

第233図　第14号土壙出土遺物

(2) 溝跡

第1号溝（第234図）

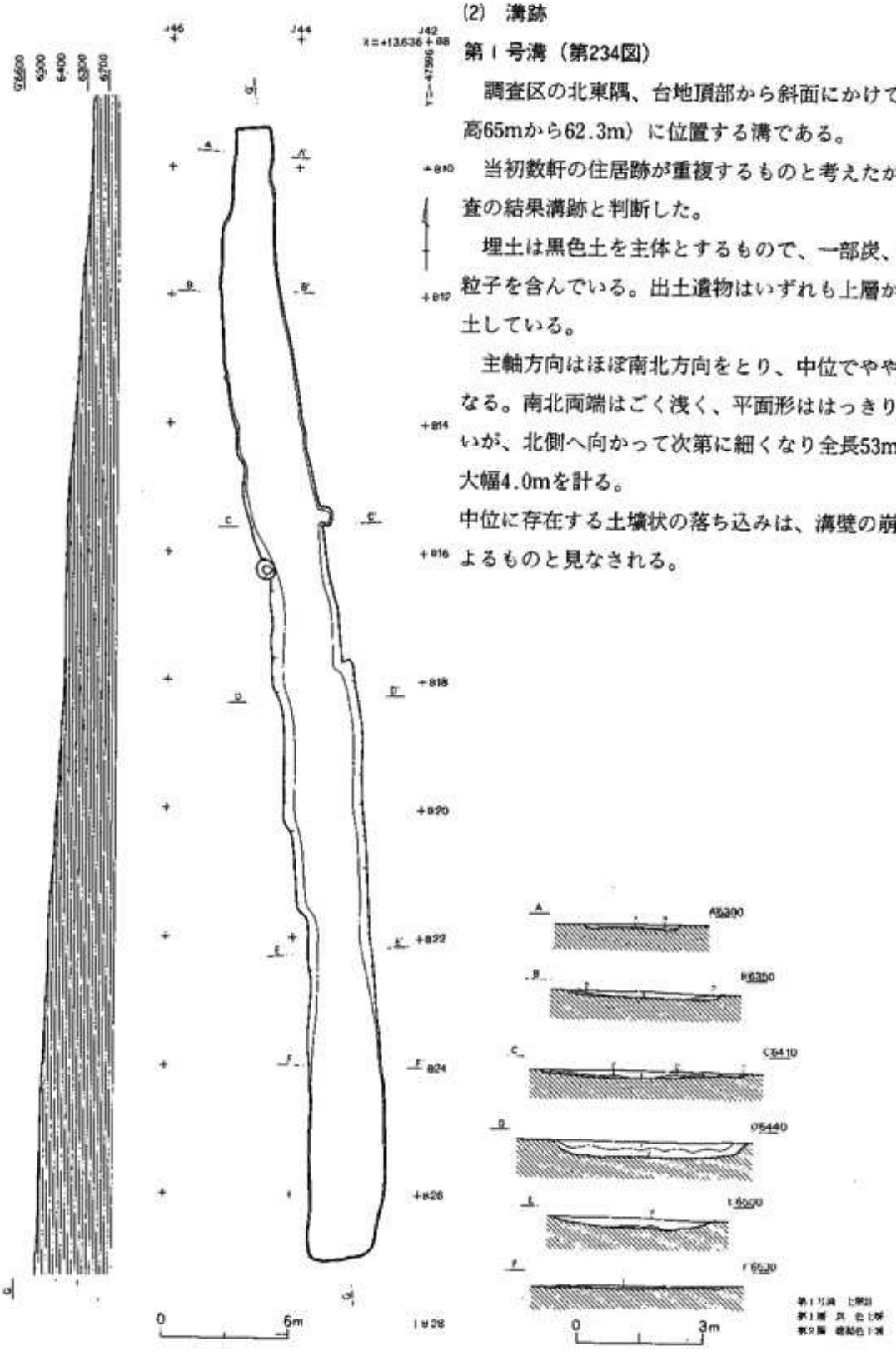
調査区の北東隅、台地頂部から斜面にかけて（標高65mから62.3m）に位置する溝である。

当初数軒の住居跡が重複するものと考えたが、精査の結果溝跡と判断した。

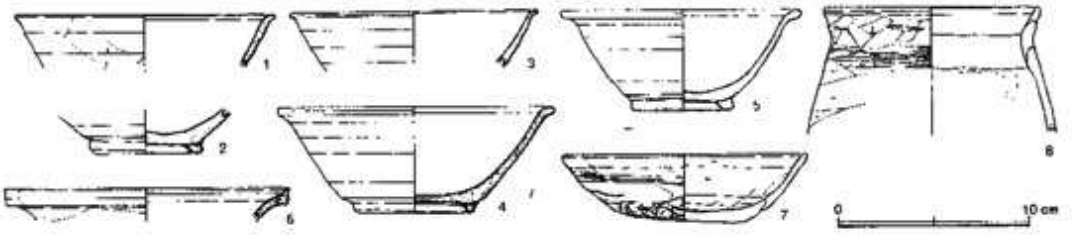
埋土は黒色土を主体とするもので、一部炭、焼土粒子を含んでいる。出土遺物はいずれも上層から出土している。

主軸方向はほぼ南北方向をとり、中位でやや深くなる。南北両端はごく浅く、平面形ははっきりしないが、北側へ向かって次第に細くなり全長53m、最大幅4.0mを計る。

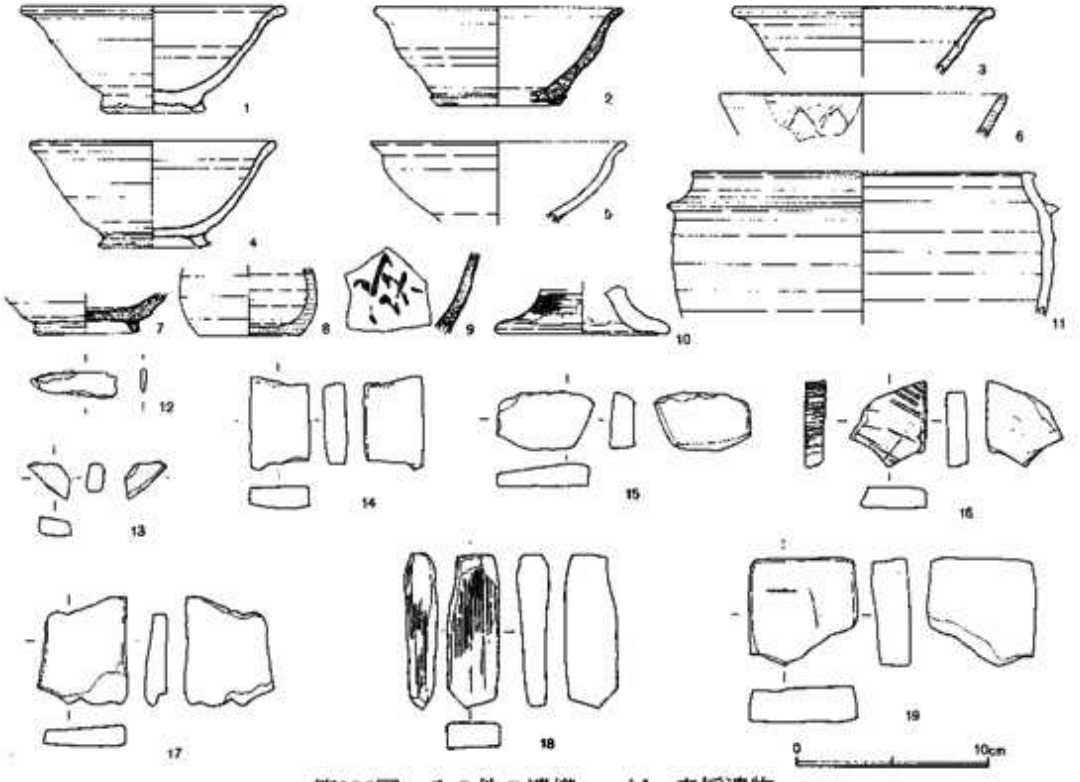
中位に存在する土壙状の落ち込みは、溝壁の崩壊によるものと見なされる。



第234図　第1号溝平面図



第235図　第１号溝出土遺物



第236図　その他の遺構、grid、表採遺物

第13、14、121号土壙出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.6 1.5 —	体部は外傾して立ち上がり、口縁部小さく屈曲して開く。	内外面回転横ナデ（左回転？）	1/10。須恵坏１。灰白色。内外面とも磨滅顕著。ＳＫ13。
須恵高台坏	2	6.6 1.7 —	高台部は高く外反し幅狭く、接地面やや丸く外ソギ状。底部はやや凸出気味。	高台部は凸出する底部に粘土貼付け後指頭ナデ（右回転）。中央糸きり痕ナデ消す。内面黒色処理か？	90%。須恵坏２。淡褐色／黒色。№１。ＳＫ13。
台付甕	3	9.5 1.8	脚部は外反して大きく開き先端丸く収まる。器肉厚い。	内外面回転横ナデ（右回転）か？先端部指頭ナデ加わる。	1/5。甕。赤褐色。№３。ＳＫ13。
甕	4	20.0 4.0 —	頸部で段をなし内傾する口縁部に移行し、中位で屈折して小さく開く。内面緩い段をなす。口唇部丸く収まり、外面輪積み痕残る。	外面下半部未調整部分の残る指頭ナデ、屈折部は工具ナデで、以上は未調整。内面横ナデ。	1/20。ＳＫ13。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
内耳形土器	5	34.0 18.9 20.3	底部はほぼ平底で、体部は外傾して立ち上がり上部で緩く屈曲し内面段をなし内湾気味に開く。口唇部ほぼ平坦で内面凸状をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。底面未調整か？体部外面屈曲部以下斜め筋ケズリ←←1。口縁部外面木口状工具によるナデか？	1/5。須恵壺1。雲母有り。混入物微然。灰褐色（一部赤褐色）。№1＋2。SK14。
須恵高台坏	6	13.0 1.7 —	体部器肉薄く、外傾して開き口唇部肥厚し屈曲する。	内外面回転横ナデ。	1/10。須恵坏2。黒色。SK121。

第1号溝跡出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵坏	1	13.6 2.8 —	体部は外傾して立ち上がり、口唇部小さく外反し先端部尖り気味。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。	1/10。須恵坏5。灰白色。
須恵高台坏	2	5.2 2.0 —	高台部は低くほぼ直立し幅狭く、接地面ほぼ平坦で一部外ソギ状中央やや凹む。よく密着していない。体部下端で緩い稜をなし、外傾して立ち上がる。	内外面回転横ナデ（右回転）、高台部粘土貼付けご内外面指頭ナデ底面糸きり痕残る。	80%。須恵坏3。灰褐色。内外面とも磨滅顕著。
須恵坏	3	13.0 3.0 —	体部は内湾して立ち上がり、口唇部小さく屈折して開き外面凸状をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、内面丁寧平滑。	1/5。須恵坏1。灰白色。
須恵高台付椀	4	14.4 6.3 5.6	高台部は低く巾狭で直立する。体部は下端で緩い稜をなし直線的に立ち上がり、口唇部緩く外反する。口唇部やや肥厚し丸く収まる。	内外面とも回転横ナデか？磨滅剥離顕著で詳細不明。	2/3。白多粗レキ大暗黄褐色。№1。
須恵高台付椀	5	12.3 5.3 5.2	高台部は低く直立し底面凹む。体部は内湾して立ち上がり、口唇部肥厚し屈曲して開く。	内外面とも左回転横ナデ、体部下端工具ナデで底面糸きり痕残る。磨滅顕著。	1/4。甕1。暗黄褐色。
須恵壺	6	14.9 1.8 —	口縁部は大きく外反して開き口唇部直立し先端部尖る。外面下端かに凸出する。	内外面回転横ナデ（左回転？）、詳細不明。	1/4。須恵壺3。灰褐色。内外面とも磨滅顕著。
小皿坏	7	12.9 7.2 3.5	底面ほぼ平坦で体部は内湾して立ち上がり口唇部丸く収まる。器肉全体に厚い。	底面一定方向の筋ケズリで粘土接合痕残る。外面体部上半から内面横ナデ、体部下半未調整で接合痕残る。	1/2。甕1。赤褐色。
甕	8	11.3 6.6 —	長胴気味の胴部からそのまま口縁部に移行し中位で外反して小さく開く。内面稜をなす。口唇部直立し外面下稜をなし平坦面を造りだす。先端部押圧により平坦。外面輪積み痕残る。	胴部外面上部横・斜筋ケズリ（←←1）、内面筋ナデ（←）頸部指頭押圧。口縁部横ナデ（外面未調整部分残る）中位指頭ナデないしケズリで下部は工具ナデか？口唇部外面あるいは工具ナデか？	1/5。甕1。黒褐色／淡褐色。加熱によるか一部剥離する。

その他の遺構、Gird、表採出土遺物

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	1	13.5 5.5 5.6	高台部は低く底面凹む。体部は内湾して大きく開く。口唇部屈曲し僅かに肥厚する。	内外面とも回転横ナデ。	1/3。甕1。暗褐色。
須恵高台付椀	2	12.9 6.1 5.1	高台部は極低く痕跡的。体部は内湾して立ち上がり中位やや強く湾曲する。口唇部丸く収まる。	内外面とも右回転横ナデで内面丁寧、外面下半未調整部分残る指頭ナデか？	1/3。甕1角微。褐色。第57号住居跡の混入か。

器種	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵高台付椀	3	13.5 3.5 —	体部は内湾して開き口唇部屈曲し僅かに肥厚する。	内外面とも右回転横ナデ、体部外面下半未調整部分残る。剥離顕著。内外面炭化物付着。	1/3。褐1赤白多。赤褐色、暗褐色。内面灯芯痕？
須恵高台坏	4	12.9 6.0 5.8	高台部は直立し底面凹む。体部は内湾して立ち上がり下端部屈をもち、口唇部肥厚し丸く収まる。	内外面とも左回転横ナデ、底面中心部糸きり痕残る。	1/4。褐1白粒多細粗。灰白色。B20K30。
高台付椀	5	13.4 4.3 —	体部は内湾して立ち上がり上部で緩い稜をなし、外反して開く。	磨滅顕著であるが内外面とも回転横ナデ？後指頭押圧。	1/3。白粒多レキ多。暗褐色。B19K21。
椀	6	15.2 2.4 —	体部は直線的に開き口唇部丸く収まる。	蓮華紋は輪郭を削り出す（左→右）。	1/10。胡精緻。青灰色。表採。
須恵高台坏	7	5.1 2.2 —	高台部は低くほぼ直立し幅狭く、接地面丸みを持ち一部外ソギ状。体部下端鋭い稜をなす。	内外面回転横ナデ（右回転）、高台部粘土貼付け後内面指頭ナデ中央糸きり痕残り、外面よく密着していない。	1/3。須恵坏1。灰色（褐色）灰色。SK86。
把手付鍋	8	5.4 3.5 —	底部は平坦で体部は大きく内湾して立ち上がる。	内外面とも極丁寧な右回転横ナデ。内外面の一部に釉が及ぶ。	1/3。精緻黒粒微。灰白色。B40J40。
高台付椀	9	— — —	体部は内湾して立ち上がる。	内外面とも右回転横ナデ。外面横位墨書「案」？	褐1。細粗。暗褐色。C20K30。
台付甕	10	9.0 2.6 —	脚部は大きく外反して開き、下半部は更に開く。先端部は下垂し僅かに凸状呈す。	内外面回転横ナデ（右回転、外面木口状工具？）か？下半部指頭押圧、ナデ加わる。	1/3。褐1。赤褐色。SK112。
羽釜	11	18.0 7.5 —	体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く内傾し口唇部外面凸状をなす。鍔は断面三角形状で端部尖る。	内外面とも比較的丁寧な右回転横ナデ。	1/10。褐1。白粒多細粗。黒褐色（暗黄褐表採色）黒色。
刀子	12				表採、0.5g
砥石	13				B34K18、2g
砥石	14				C20K40、22g
砥石	15				B49K18、25g
砥石	16				表採、20g
砥石	19				B44K19、95g
砥石	17				表採、35g
砥石	18				C04K36、45g

注　土壙その他の遺構の図示したもの以外の各器種と埋土との対応関係は以下のとおりである。
第6号土壙　褐1（脚台部1）　第8号土壙　褐1（口縁部2、胴部4）
第11号土壙　褐1（口縁部2、胴部1）　須恵坏5（口縁部1）　第13号土壙　褐1（口縁部1、胴部4、底部2）　須恵器褐6（胴部1）
第88号土壙　褐1（胴部4）　褐2（口縁部3、胴部4）　須恵壺1（胴部15）　須恵壺3（7）　第96号土壙　褐1（胴部1）
第98号土壙　褐2（2）第101号土壙　褐1（底部1）　第109号土壙　褐1（口縁部1）
第112号土壙　褐1（底部1）　第121号土壙　褐1（胴部）
第1号溝跡　褐1（口縁部4、胴部12）　褐1'（胴部1）　土師坏1（1個体）　須恵坏1（口縁部1、胴部5、底部1）　須恵坏5（底部1）　須恵坏6（底部1）　須恵坏7（口縁部1）　須恵褐1（胴部6）　須恵褐3（口縁部3）

Ⅳ 結　語

前章までで個々の遺構、遺物については詳述した。本章では白草遺跡に於ける弥生時代後期吉ヶ谷式期の遺構、遺物に関して若干の問題点について言及する。吉ヶ谷式土器の編年についてはすでに柿沼、石岡両氏によって詳しく論じられてきたが、最近の資料増加に伴い主に型式学的祖型の問題と調査例の増加が著しい新段階、特に五領式との関係如何が問題となっている。また縄文原体についての問題、伴出する石器については依然として分析がなされていない。以下ではこれら先学の業績をもとに概括的分類を行い、問題点を摘出することにする。

本遺跡出土の吉ヶ谷式土器の器種は主に甕形土器、鉢形土器、甑形土器、壺形土器、高坏形土器で構成され、それ以外に匙形土製品、ミニチュア土器等が加わる。細かい土器組成については各遺構の遺物出土量が少なく明確ではない。

まず編年基準となる甕形土器（図上復元を含めて完形に近いもの）の器形についてみると本遺跡出土のものは以下の6類に分けられる。

A　胴部が所謂寸胴で小形のもの。(第59号住居跡6)

B　胴部の張りが強く頸部から口縁部にかけて外反するもの。これはさらに細分され

1　やや大形で頸部の外反度が小さいもの（第6号住居跡1、第141号土壙2）

2　頸部の外反度が大きいもの（第15、59、78、83号住居跡）輪積み痕を残すものが少数ある。

3　頸部から口縁部の移行が外面ではかなり明確（口縁部の明確化）であるが内面はそのまま移行しているもの（第61号住居跡6、第82号住居跡4、第111号土壙2）

C　胴部の張りが強く頸部が直立気味でそのまま口縁部に移行するもの。口径が胴部最大径よりもかなり小さく、相対的に胴部の張りが強調される。これはさらに法量によって

1　やや大形のもの（第141号土壙1、第59号住居跡9）

2　小形のものに細分される。(第15号住居跡4、83号住居跡5)

D　胴部の張りが強く頸部は直立気味乃至直線的に傾斜し口縁部が僅かに外反するもので法量により

1　大形のもの（第6号住居跡2）

2　やや小形なもの（第111号土壙1、第17号竪穴状遺構7）に細別される。

以上が主体となるものであるがこれ以外に文様によって

E　櫛描文の施されるもの（小破片が多く工具及び波長、振幅による細別は難しい。）で

1　櫛描波状文が施されるもの（第61号住居跡3、第64住居跡4、第88住居跡3、第86号土壙1）

2　櫛描波状文と簾状文が施されるもので、これは不明瞭であるが上胴部に縄紋（R？）を伴う可能性がある。(第77号住居跡3)

F　球形状胴部で頸部に輪積み痕をもち無文のもの。(第59号住居跡5)

次に施文域についてみると、吉ヶ谷式土器のそれは一般的に口唇部、口唇部直下、口縁部から頸部、胴部に分けられる。施文手法について以下では概括的に述べる。

口唇部については縄紋施文されるもの、平行工具による刻みが施されるもの、無文の3種が存在

する。

外面口唇部直下については一般的には口唇下から縄紋施文されるが、幅狭い無文帯を残すもの（第6、59、78、83号住居跡、第141号土壙）も存在し2種がある。

頸部から口縁部については吉ヶ谷式甕形土器の主体的な縄紋施文域である。主体的なものは胴部最大径よりも上部に施文されるが、少数ながら胴部最大径前後まで施文されるものがある。

胴部は無文帯として存在し、大部分は縦ないし斜めハケ後ミガキが施される。ミガキの効果は一般的には光沢を持つものであるが、光沢を持たないナデ類似のものもある。極く少量であるがハケのみでミガキが施されないものがある。（第2号住居跡6）

下胴部のミガキの方向については胴部最大径付近を横方向以下縦方向に施すものと、最大径以下全て縦方向に施すもの、最大径以下縦方向底部付近横方向に施すものの3種が存在し、甕形土器以外の器種については以下のように細分される。

鉢形土器は

A　体部は内湾して立ち上がり底部突出し、内外面のミガキが顕著でなく外面下半部は指頭押圧されるもの。（第73号住居跡2）

B　体部は内湾気味に立ち上がり、それほど開かないもので、内外面のミガキが施されるもの。（第63号住居跡1、第55号竪穴状遺構3）

C　体部が大きく開き底部が比較的小形なもので内外面ともよく磨かれ

1　口唇部が直立するもの。（第84号住居跡1）

2　そのまま開くもの。（第84号住居跡2）

甑形土器は出土量が少ない。

A　やや大形の底部で器肉やや薄く体部の開きが大きく鉢形を呈するとみられるもの。（第5号竪穴状遺構1）

B　小形の底部で器肉極く厚く体部の開きが小さく縦長のもの。（第83号住居跡1、第75号住居跡1）

壺形土器は器形が全て判るものはないが、口縁部の形態と装飾帯によって

A　素口縁で痕跡的な輪積み痕が残り縄紋施文される

1　幅広いもの（第75号住居跡2）

2　幅狭いもの（第83号住居跡8）

B　複合口縁で縄紋施文される

1　折り返しないし貼付けにより口縁部を造出。（第82号住居跡1）

2　輪積み痕利用により幅広の複合口縁状にするもので輪積み痕が明瞭なもの（第88号住居跡2）と不明瞭なもの（第82号住居跡2）がある。いずれも押し付けるように縄文施文され手法的にはほぼ同一である。

C　輪積み痕利用の突帯状口縁で突帯が口唇部から始まるものと、口唇部直下から始まるものがあるが本遺跡例は後者である。口唇部の縄紋、刻みは確認されていない

1　突帯上に刻みを持つもの（第88号住居跡1）

2　無文のもの（第61号住居跡１）

頸部から上胴部の装飾帯は縄紋施文で最多で３帯まで確認されている。頸部施文帯の幅が以下よりも広いものと、ほぼ同じものがある。

高坏形土器も全形が窺えるものはない。坏部の形態によって

A　突帯状口縁。確認されている突帯の数は２段のものと３段のものがある。突帯の作出技法で

1　輪積み痕利用によるもので口縁部が大きく内湾し大形（第63号住居跡３、第83号住居跡２、第84号住居跡５）

2　粘土紐貼り付けによるもので大形のもの（表採４）

B　輪積み痕利用によるもので体部はほぼ直立気味に立ち上がる

1　大形のもの（第63号住居跡４、第17号竪穴状遺構２）

2　小形のもの（第59号住居跡３、第80号住居跡１、２）

C 1　棗口縁で口唇部は直立する（第７号住居跡１、第80号住居跡３、第84号住居跡３）

2　ミニチュア（第15号住居跡１）

D　坏口縁部に櫛描波状文が施文されるもの。（第63号住居跡２）

Ａ１についてはその他の装飾が口唇部と突帯最下段に認められ、前者では細かい粘土紐を貼り付けるものがある。後者では縦長の粘土を貼付するものと、２個一対の円形浮文とがある。破片が多く完形がほとんどないため不明瞭である。脚部は直線状ないし内湾気味に開くものが一般的であるが下端部破片が多く不明確である。第２号住居跡出土のものは湾曲度がきつく一般的ではない。

甕形土器の縄紋については確認できたものは全て０段多条で、基本の撚りは１が30.9%、ｒが69.1%である。０段の撚りはそのまま撚り合わせたものか、付加条巻にしたものか判断は困難であった。

無節の縄は少数存在しＬが10.6%、Ｒが1.4%である。確認できたものは何れも３条で太細の撚り合わせである。この場合付加条巻きが存在している。大部分は単節縄紋でＬＲ29.5%、ＲＬ58.0%である。

複節ＬＲＬの疑いがあるものが１点（0.5%）ある。第84号住居跡出土甕形土器片であるが節内部の繊維圧痕の様相は０段５条のＲＬである可能性も残している。末端処理が施されているものは比較的少ない。

縄紋施文帯を区画するような在り方を示すものはほとんどなく全てミガキが及んでいる。僅かに第83号住居跡６の完形に近い甕形土器が口唇部直下、施文域下端部に残すのみである。第111号土壙出土の甕形土器(1)は数段に及ぶ施文毎に圧痕を残している。付加条とみられるものもある。また付加条第１種の末端が刺突？された甕形土器片（第56号住居跡11）がある。

壺形土器の縄文は無節はなく、全て単節縄紋である。第75号住居跡出土の壺形土器は部分的に付加条を伴っている。

以上の分類相互の関係について概観すると、甕形土器は吉ヶ谷式土器の編年基準として、漸進的に胴部の張りを強めしたがって相対的に頸部の外反度が大きくなることが既に指摘されており、口縁部の明確化に向かって移行すると考えられる。又法量の小型化傾向も指摘されているところであ

る。このような一般的傾向にしたがって甕形土器をみていくと、まず主体的な存在であり各住居跡において安定的に出土する甕形土器Bは上述の展開に沿っており、B1→B2→B3と論理的に配列される。Aは伝統的な器形であるが既に小型化が著しく下胴部に古い手法を留めているが新しいものとみるべきであろう。Cは頸部の外反度が弱くほぼ直立気味で、胴部の張りが強い赤井戸式の器形に類似する。器形以外に施文域あるいは縄紋等で赤井戸式との関連は認められない。しかしながら同一個体ではないが本遺跡では付加条が認められることは東関東ないし北関東の影響を考慮しておくべきであろう。DはBとの関連に於いて捉えられる器形と考えれ駒堀遺跡、万願寺遺跡にも類似するものがある。法量分化と小形化傾向の関係は不明とせざるを得ないがBとの関連でC1→C2，D1→D2と捉えておく。

施文域について明確に器形との関連を捉えられるような例はない。一般的には胴部の張りが強いものに、最大径より上部に縄紋施文されるものがみられるという程度である。縄紋施文域の上方移行については吉ヶ谷式自体の展開とともに、櫛描文や付加条の存在から他地方の相当する施文域との関連を考慮しておくべきであろう。

下胴部調整手法でハケ後ミガキを施さないものが極少数存在する。柿沼編年によるとII段階のa，bを細分する指標として下胴部ハケ調整があげられている。第2号住居跡、第111号土壙出土の甕形土器に認められるが、いずれも器形および法量がb段階に属すると考えられ、ここでは残存形態として捉えておく。

甕形土器E1は破片であるが櫛描文の特徴は岩鼻式土器よりも樽式土器に類似する。E2は上胴部が縄紋施文かどうかが問題になるが磨滅によりはっきりしない。仮に縄文施文だとすると嵐山町行司免遺跡でやや類似する甕形土器が出土しており、類似例は群馬県西部を中心に出土例が増加している。本遺跡例は施文域が簾状文によって上下に分割される。Dは無文であるが樽式土器に類似している。

壺形土器Aは万願寺遺跡、焼谷遺跡に出土例がある。A1は万願寺例の方が器形、縄紋施文ともに新しい。B1は吉ヶ谷遺跡に類例があるが本遺跡例の方が後出的で複合口縁部下端の刻みも消失している。B2は先行する輪積み痕が明瞭なものが玉太岡遺跡にみられる。縄紋施文されないものは焼谷遺跡でもみられる。Cの装飾帯は高坏形土器にもみられるものであるが、本遺跡の壺形土器の場合粘土紐貼り付けによるものはみられない。花影遺跡、覆が関遺跡等段階にみられる複合口縁状の突帯装飾を基本とすると、口唇部直下から始まるC2は後出的である。駒堀遺跡では独立し装飾帯化した壺形土器が出土している。

高坏形土器Cは新しくなると量的に増加する傾向がある（明戸東遺跡）が本遺跡では量的に少ない。突帯をもつものは全体に低く新しい傾向が窺われる。A2は覆が関遺跡で既に出土しているが量的には各段階において少量で主体はA1が占める。必ずしもA1→A2とはならない。貼付文については口唇部に貼付される例は玉太岡遺跡で出土している。白草遺跡が後出的である。突帯最下段に貼付される縦長の貼付文は耳付土器との関連を想起させるが東関東のいわゆる瘤付き土器との関連も考慮しておくべきであろう。

甕形土器Bを中心として各住居跡における共伴関係を見ると、B1は第6号住居跡でD1と、第

141号土壙でＣ１と共伴している。Ｂ２は出土量が多く安定的である。第15号住居跡でＣ２、第59号住居跡でＡ、Ｃ１、Ｃ２、第63号住居跡でＣ１、第83号住居跡でＣ２と共伴している。Ｂ３は第111号土壙でＤ２と共伴している。したがって少量ではあるがＢ１、Ｄ１→Ｂ２（Ｃ１→Ｃ２）→Ｂ３、Ｄ２という配列が成立する。他の器種については第15、17、59、63、80、82、84号住居跡で出土しているが、甕形土器との関係は明瞭さを欠き土器群としての移行過程を捉えることは難しい。

白草遺跡出土の吉ヶ谷式土器の編年的位置を求めると、柿沼編年のⅡｂ段階にほぼ対比されると考えられるが、甕形土器によって段階区分をすると上述のように３段階ということになり、第６号住居跡、第141号土壙がより古く、第82号住居跡、第111号土壙がより新しく位置付けられることになる。

弥生時代後期吉ヶ谷式期の発掘調査例で集落の大部分が調査、報告されたものは現在のところそれほど多くはなく、駒堀遺跡、上組遺跡、明戸東遺跡等を数えるのみである。したがって白草遺跡例が加わることは該期の集落構造解明に大きく寄与するものである。

参考文献

相京建史・三宅敏気　1982　「樽式土器の分類－榛名山東南麓を中心として－」「第三回　三県弥生時代シンポジウム群馬県資料　弥生終末期の土器　４世紀の土器」

新井　端　1983　「姥ヶ沢遺跡」江南町教育委員会

市川　修　1980　「下恒関遺跡」埼玉県遺跡調査会

石岡　憲雄　1982　「吉ヶ谷式」・「岩鼻式土器」について　研究紀要第４号　埼玉県立歴史資料館

磯崎　一　1989　「新屋敷・明戸東・脇遺跡」埼玉県埋蔵分化財調査事業団

植木　弘　1980　「行司免遺跡」嵐山町遺跡調査会

大木紳一郎　1991　「赤井戸式土器の祖型について」研究紀要第８号　群馬県埋蔵文化財調査事業団

柿沼　幹夫　1981　「吉ヶ谷式土器について」土曜考古第５号

〃　1982　「川本町万願寺出土の遺物」埼玉考古第25号

〃　1987　「埼玉県北西部地方の櫛描文土器」埼玉考古第28号

柿沼幹夫ほか　1986　「前組羽根倉遺跡発掘調査報告」前組遺跡発掘調査団

樋口文蔵ほか　1974　「駒堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書第４集　埼玉県教育委員会

黒坂　禎二　1988　「上組」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

恋河内昭彦　1992　「児玉地方における弥生時代の概観」児玉郡市における埋蔵文化財の成果と概要

〃　1990　「塩谷下大塚遺跡」児玉町文化財調査報告書第11集

〃　1991　「真鍋寺後遺跡」児玉町文化調査報告書第11集

小島　純一　1983　「赤井戸式土器について」「人間・遺跡・遺物－わが考古学論集」

高崎　光司　1990　「玉太岡遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

利根川章彦　1991　「竹の花・下大塚・門阿弥遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団

村松　篤　1992　「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町教育委員会

〃　1992　「川島遺跡発掘調査報告書」川本町遺跡調査会発掘調査報告第１集